

審査意見への対応を記載した書類（6月）添付資料

目次

	ページ
資料 1 現代システム科学域 カリキュラムマップ	
知識情報システム学類	3
環境社会システム学類	5
教育福祉学類	9
心理学類	14
資料 2 現代システム科学域 シラバス	
知識情報システム学類	16
環境社会システム学類	116
教育福祉学類	291
心理学類	487

現代システム科学域 カリキュラムマップ 目次

知識情報システム学類

1. カリキュラムマップ	3
2. 未来デザインコースカリキュラムマップ	4

環境社会システム学類

1. カリキュラムマップ（自然環境学）	5
2. カリキュラムマップ（社会環境学）	6
3. カリキュラムマップ（環境哲学・政策学）	7
4. 未来デザインコースカリキュラムマップ（自然環境学を中心に履修する場合の例）	8

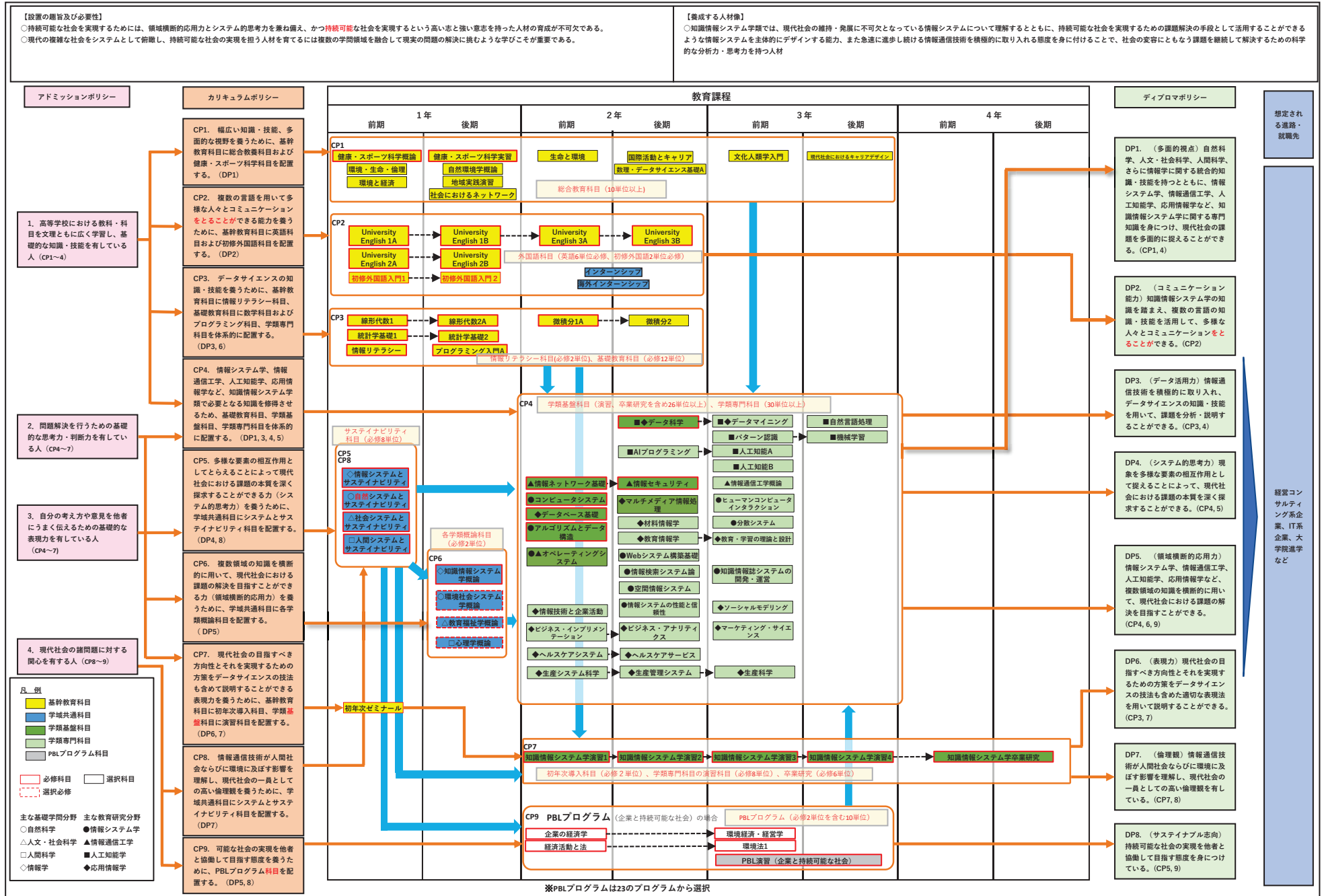
教育福祉学類

1. カリキュラムマップ（教育福祉総合志向：教育福祉学全体を学び、多面的視点から持続可能な社会の実現に寄与する）	9
2. カリキュラムマップ（教育福祉学の福祉志向モデル：教育福祉学を学びながら社会福祉士やSSWの資格取得を目指す）	10
3. カリキュラムマップ（教育福祉学の保育志向モデル：教育福祉学を学びながら保育士資格取得を目指す）	11
4. カリキュラムマップ（教育福祉教育志向：教育福祉学を学びながら教員免許の取得を目指す）	12
5. 未来デザインコースカリキュラムマップ	13

心理学類

1. カリキュラムマップ	14
2. 未来デザインコースカリキュラムマップ：認知科学と情報科学を融合してシステム開発に貢献できる人材	15

現代システム科学域 知識情報システム学類カリキュラムマップ



【設置の趣旨及び必要性】

- 持続可能な社会を実現するためには、領域横断的な応用力とシステムの思考力を兼ね備え、かつ**持続可能な社会**を実現するという高い志と強い意志を持った人材の育成が不可欠である。
- 現代の複雑な社会をシステムとして俯瞰し、持続可能な社会の実現を担う人材を育てるには複数の学問領域を融合して現実の問題の解決に挑むような学びが重要である。
- 持続可能な社会を担うための即戦力を育てるためには、大学での専門的な学びと社会での現実課題への挑戦的な学びを並行して行うことが重要である

【養成する人材像】

- 本学域では、現代社会のさまざまな問題に対して、領域横断的な応用力とシステムの思考力を発揮し、課題解決を図ることによって、持続可能な社会の実現に貢献できる人材
- 目指すべき未来の社会を創造すべく自分でその道筋をデザインし、領域横断的な応用力とシステムの思考力を用いて、現代社会の課題解決に取り組むことによって、持続可能な社会の実現を実行できる人材

アドミッションポリシー

1. 高等学校における教科・科目を文理ともに広く学習し、基礎的な知識・技能を有している人 (CP1~4)

2. 問題解決を行うための基礎的な思考力・判断力を有している人 (CP4~7)

3. 自分の考え方や意見を他者にうまく伝えるための基礎的な表現力を有している人 (CP4~7)

4. 現代社会の諸問題に対する関心を有する人 (CP8~10)

凡 例
 ■ 基礎教育科目
 ■ 学域共通科目
 ■ 学類基礎科目
 ■ 学類専門科目
 ■ PBLプログラム科目
 □ 必修科目 □ 選択科目
 □ 選択必修
 主な基礎学問分野 主な教育研究分野
 ○自然科学 ●情報システム学
 △人文・社会科学 ●情報通信工学
 □人間科学 ■人工知能学
 ◇情報学 ◆応用情報学

カリキュラムポリシー

CP1. 幅広い知識・技能、多面的な視野を養うために、基礎教育科目に総合教養科目および健康・スポーツ科学科目を配置する。(DP1)

CP2. 複数の言語を用いて多様な人々とコミュニケーションをとることができる能力を養うために、基礎教育科目に英語科目および初級外国語科目を配置する。(DP2)

CP3. データサイエンスの知識・技能を養うために、基礎教育科目に情報リテラシー科目、基礎教育科目に数学科目およびプログラミング科目、学類専門科目を体系的に配置する。(DP3, 6)

CP4. 情報システム学、情報通信工学、人工知能学、応用情報学など、知識情報システム学類で必要となる知識を修得させるため、基礎教育科目、学類基礎科目、学類専門科目を体系的に配置する。(DP1, 3, 4, 5)

CP5. 多様な要素の相互作用としてとらえることによって現代社会における課題の本質を深く探究することができる力(システムの思考力)を養うために、学域共通科目にシステムとサステイナビリティ科目を配置する。(DP4, 8)

CP6. 複数の領域の知識を横断的に用いて、現代社会における課題の解決を目指すことができる力(領域横断的な応用力)を養うために、学域共通科目に各学類概論科目を配置する。(DP5)

CP7. 現代社会の目指すべき方向性とそれを実現するための方策をデータサイエンスの技法も含めて説明することができる表現力を養うために、基礎教育科目に初年次導入科目、学類基礎科目に演習科目を配置する。(DP6, 7)

CP8. 現代社会の課題を自ら発見し、他者と協働して課題解決に取り組むことができる実行力を養うために、未来デザインPBLプログラム科目を配置する。(DP6)

CP9. 情報通信技術が人間社会ならびに環境に及ぼす影響を理解し、現代社会の一員としての高い倫理観を養うために、学域共通科目にシステムとサステイナビリティ科目を配置する。(DP7)

CP10. 可能な社会の実現を他者と協働して目指す態度を養うために、PBLプログラム科目を配置する。(DP5, 8)

教育課程

1 年		2 年		3 年		4 年	
前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
CP1 健康・スポーツ科学概論 健康・スポーツ科学実習 環境・生命・倫理 環境と経済 環境と社会	健康・スポーツ科学実習 自然環境学概論 地域実証演習 社会におけるネットワーク	生命と環境 国際活動とキャリア 教養・データサイエンス基礎A 総合教育科目 (10単位以上)	生命と環境 国際活動とキャリア 教養・データサイエンス基礎A 総合教育科目 (10単位以上)	文化人類学入門 現代社会におけるキャリアデザイン			
CP2 University English 1A University English 2A 初級外国語入門1	University English 1B University English 2B 初級外国語入門2	University English 3A 外国語科目 (英語6単位必修、初級外国語2単位必修) インターンシップ 海外インターンシップ	University English 3B				
CP3 線形代数1 統計学基礎1 情報リテラシー	線形代数2A 統計学基礎2 プログラミング入門A 情報リテラシー科目(必修2単位)、基礎教育科目 (必修12単位)	微積分1A 微積分2 情報リテラシー科目(必修2単位)、基礎教育科目 (必修12単位)	微積分2				
サステイナビリティ科目 (必修8単位)		学類基礎科目 (演習、卒業研究を含め26単位以上)、学類専門科目 (30単位以上)		学類基礎科目 (演習、卒業研究を含め26単位以上)、学類専門科目 (30単位以上)		学類基礎科目 (演習、卒業研究を含め26単位以上)、学類専門科目 (30単位以上)	
CP5 情報システムとサステイナビリティ 自然システムとサステイナビリティ 社会システムとサステイナビリティ 人間システムとサステイナビリティ		各学類概論科目 (必修2単位)		各学類概論科目 (必修2単位)		各学類概論科目 (必修2単位)	
CP6 知識情報システム学概論 環境社会システム学概論 教育福祉システム学概論 心脳科学概論		CP7 未来デザインプログラム 未来デザイン 未来デザインPBL演習 未来デザイン卒業研究		CP7 未来デザインプログラム 未来デザイン 未来デザインPBL演習 未来デザイン卒業研究		CP7 未来デザインプログラム 未来デザイン 未来デザインPBL演習 未来デザイン卒業研究	
CP10 PBLプログラム (環境学) の場合 環境・生命・倫理 自然環境学概論 技術と環境 環境政策学 PBL演習 (環境学)		CP10 PBLプログラム (環境学) の場合 環境・生命・倫理 自然環境学概論 技術と環境 環境政策学 PBL演習 (環境学)		CP10 PBLプログラム (環境学) の場合 環境・生命・倫理 自然環境学概論 技術と環境 環境政策学 PBL演習 (環境学)		CP10 PBLプログラム (環境学) の場合 環境・生命・倫理 自然環境学概論 技術と環境 環境政策学 PBL演習 (環境学)	

※PBLプログラムは23のプログラムから選択

ディプロマポリシー

DP1. (多面的視点) 自然科学、人文・社会科学、人間科学、さらに情報学に関する統合的な知識・技能を持つとともに、情報システム学、情報通信工学、人工知能学、応用情報学など、知識情報システム学に関する専門知識を身につけ、現代社会の課題を多面的に捉えることができる。(CP1, 4)

DP2. (コミュニケーション能力) 知識情報システム学の知識を踏まえ、複数の言語の知識・技能を活用して、多様な人々とコミュニケーションをとることができる。(CP2)

DP3. (データ活用能力) 情報通信技術を積極的に取り入れ、データサイエンスの知識・技能を用いて、課題を分析・説明することができる。(CP3, 4)

DP4. (システムの思考力) 現象を多様な要素の相互作用として捉えることによって、現代社会における課題の本質を深く探究することができる。(CP4, 5)

DP5. (領域横断的な応用力) 情報システム学、情報通信工学、人工知能学、応用情報学など、複数の領域の知識を横断的に用いて、現代社会における課題の解決を目指すことができる。(CP4, 6, 10)

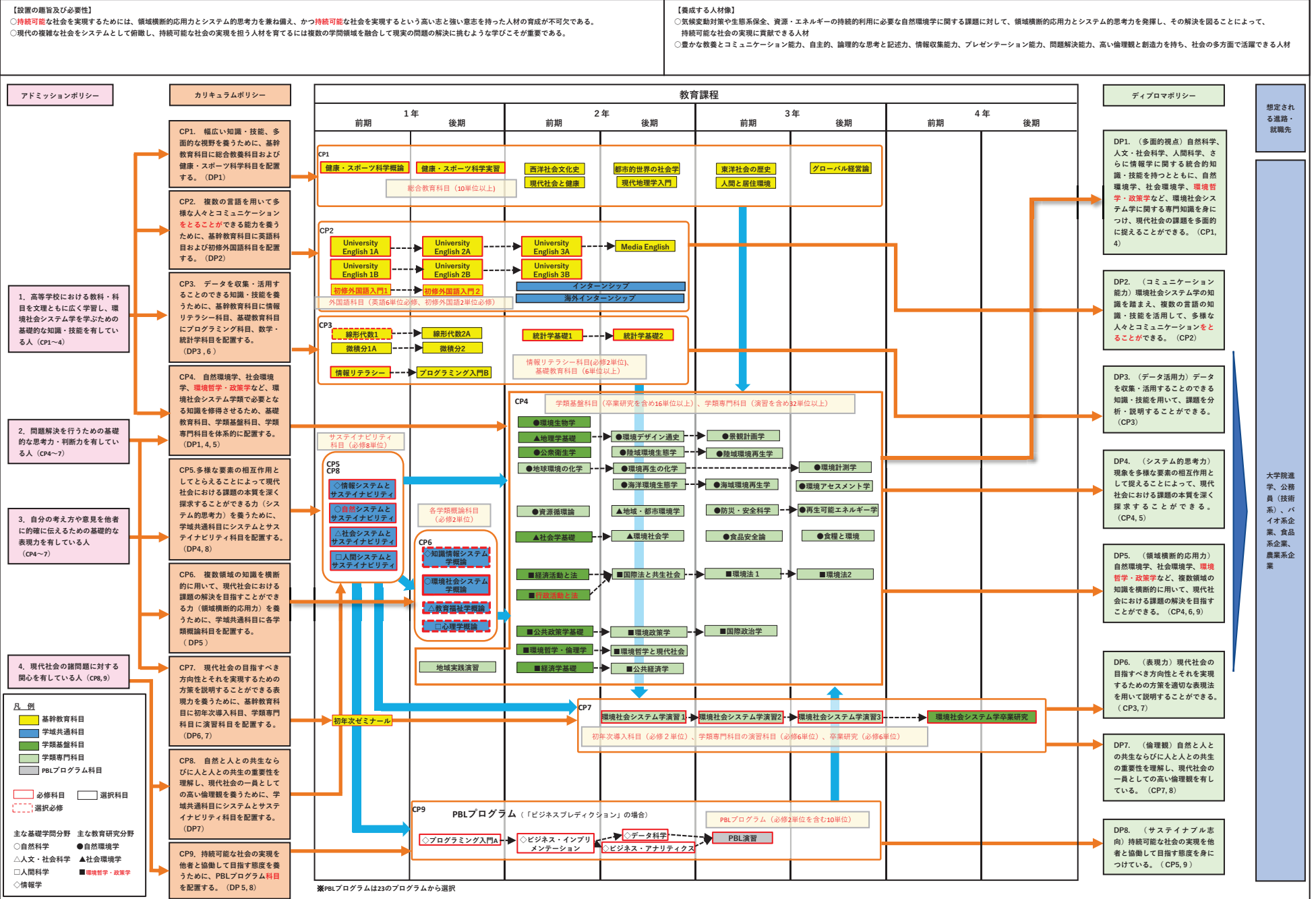
DP6 (実行力) 現代社会の課題を自ら発見し、他者と協働して課題解決に取り組むことができる。(CP3, 7, 8)

DP7. (倫理観) 情報通信技術が人間社会ならびに環境に及ぼす影響を理解し、現代社会の一員としての高い倫理観を有している。(CP7, 9)

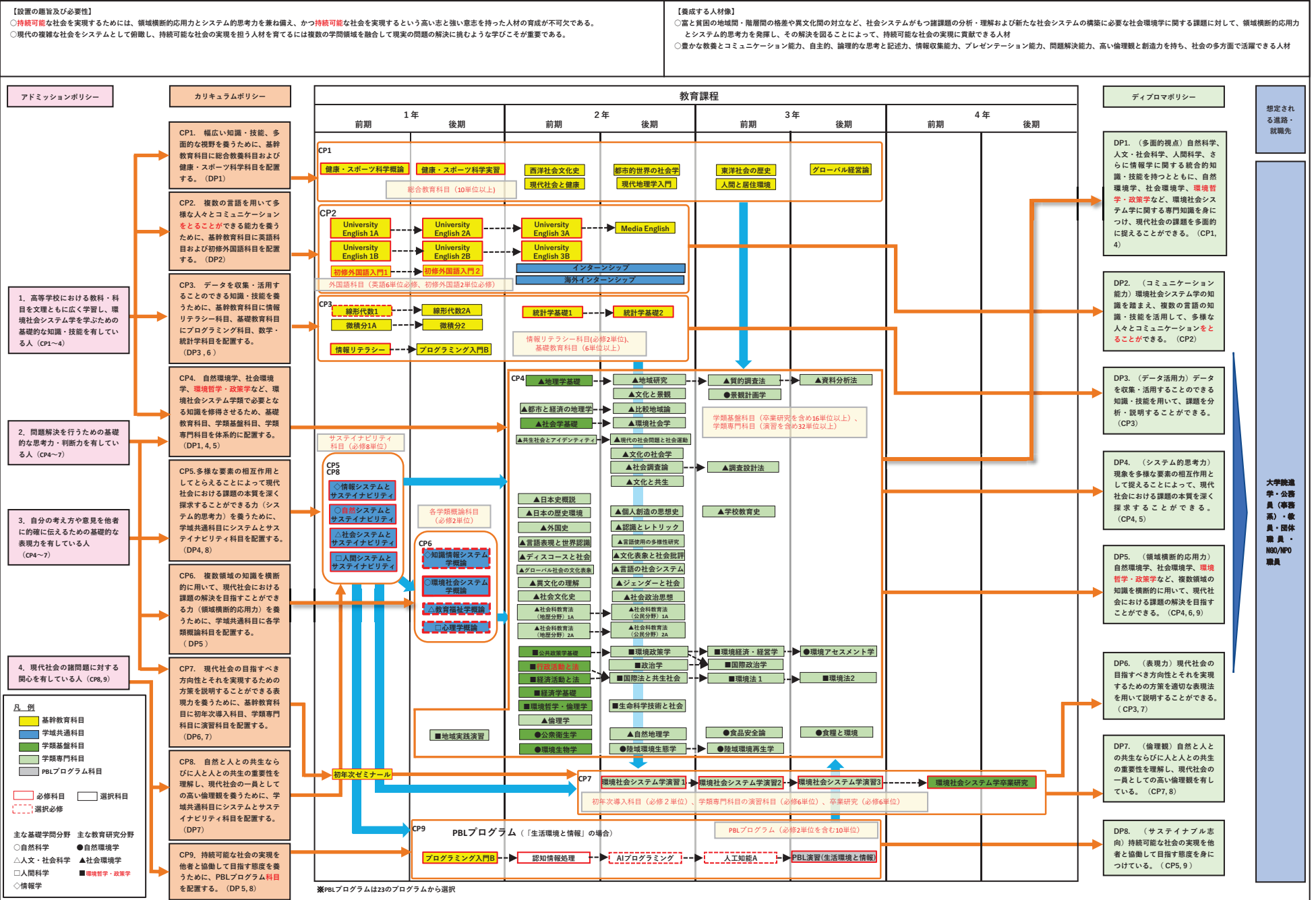
DP8. (サステイナブル志向) 持続可能な社会の実現を他者と協働して目指す態度を身につけている。(CP5, 10)

想定される
進路・
就職先エ ネ ル
ギ ー
イン
フ ラ
ス トラ
企 業
への
就職
：環境
への影響
を考慮し
たエネ
ルギ ー
分配
を行う
インフ
ラ設計
ができる
人材

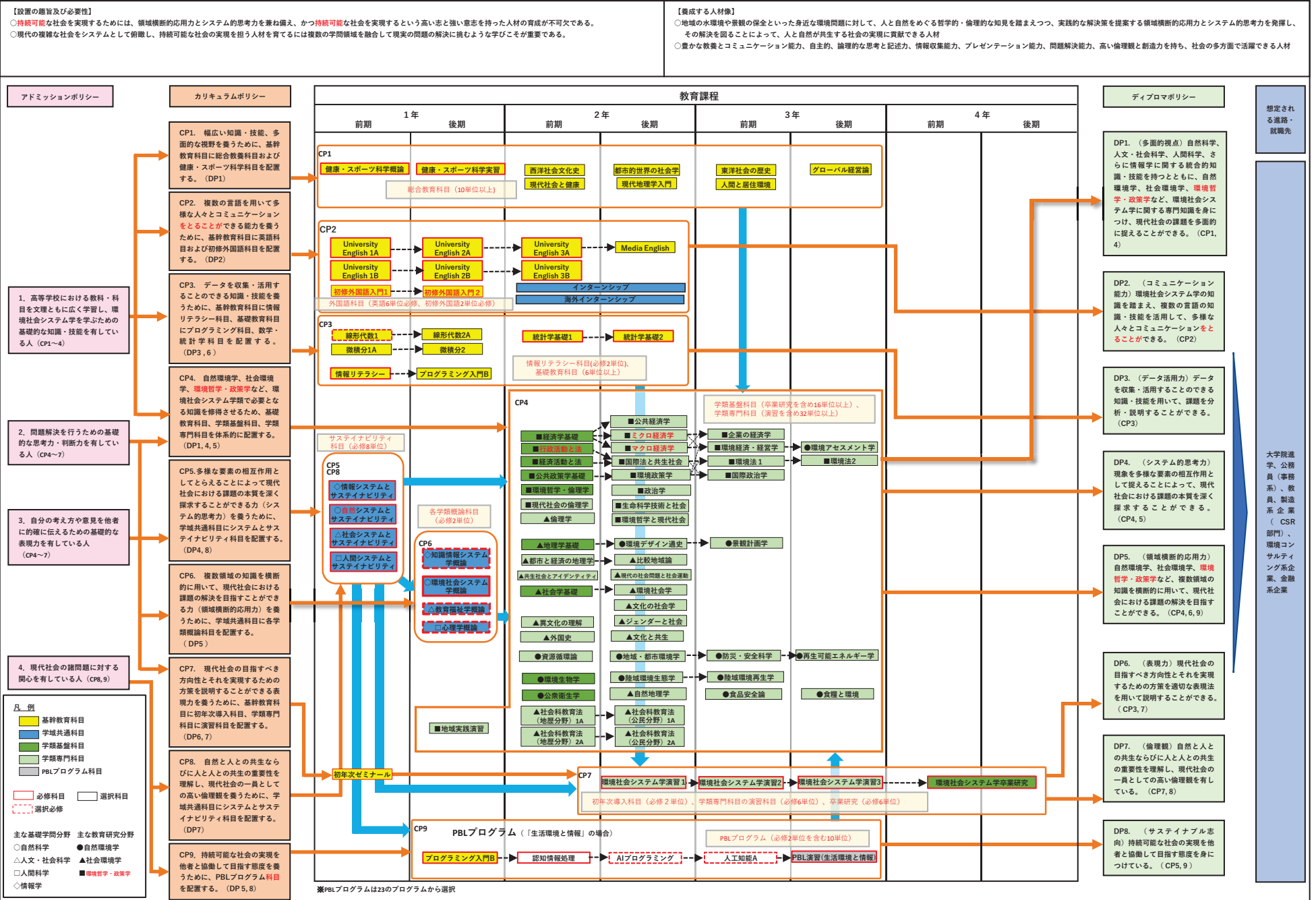
現代システム科学域 環境社会システム学類 カリキュラムマップ（自然環境学）

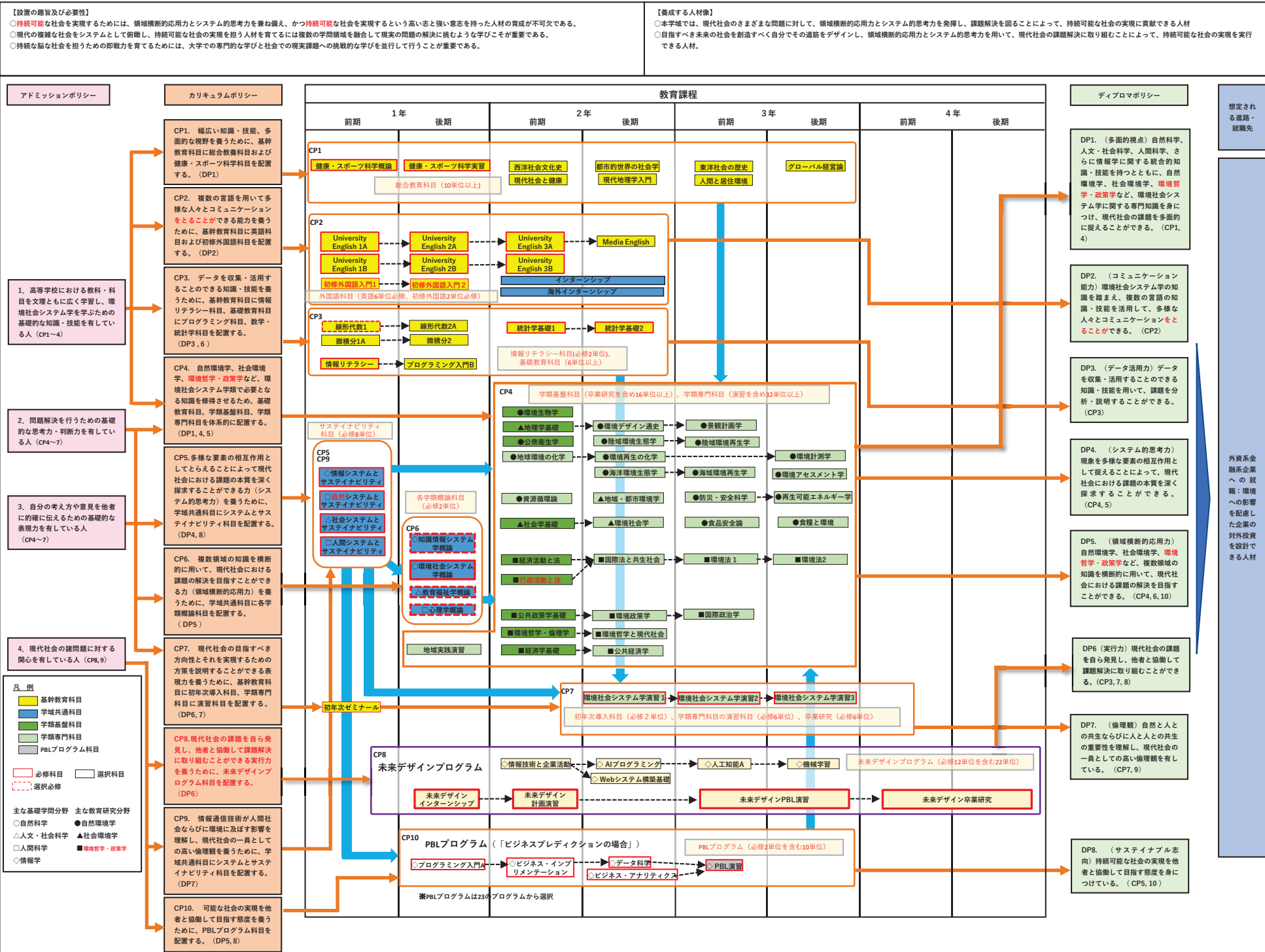


現代システム科学域 環境社会システム学類 カリキュラムマップ（社会環境学）

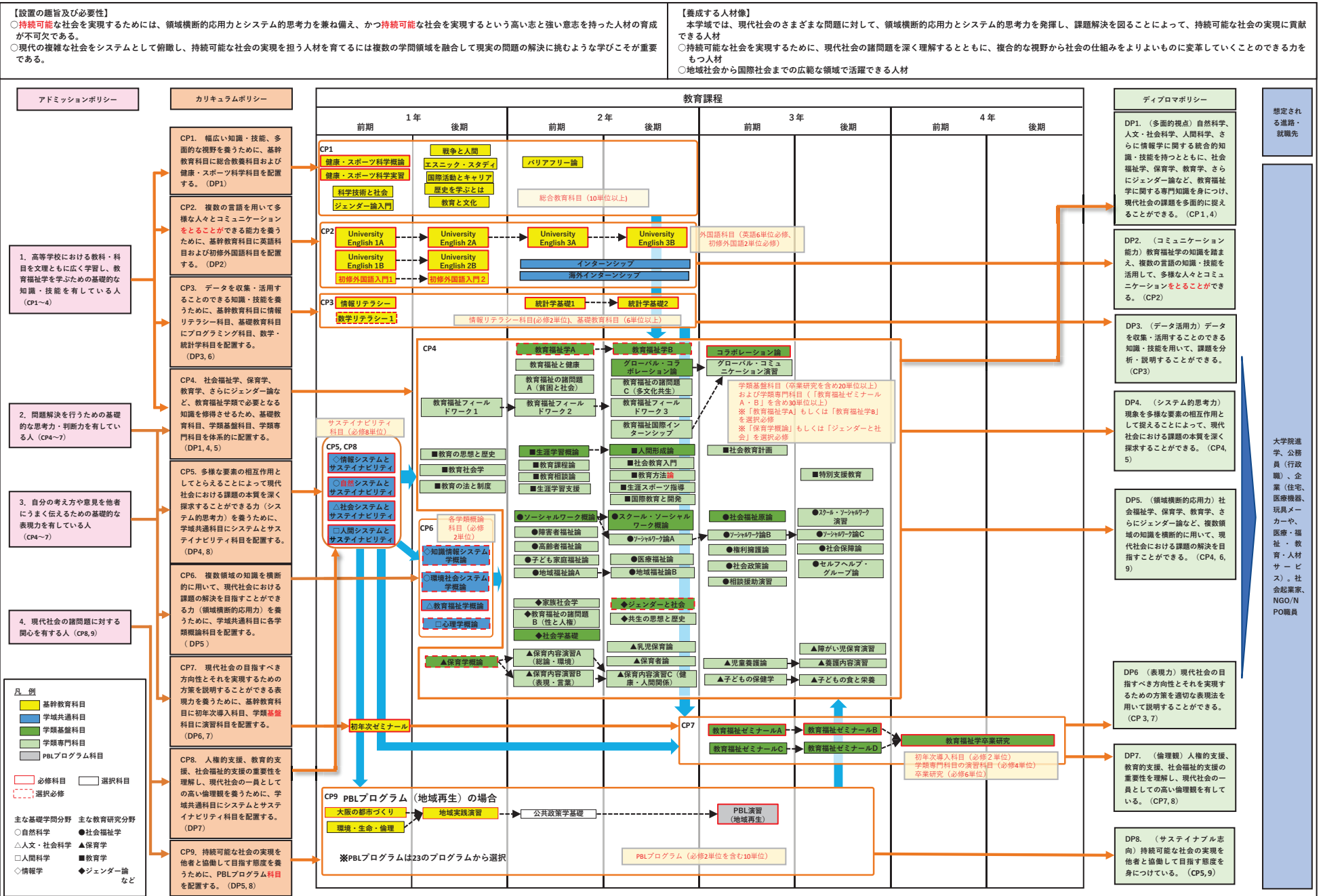


現代システム科学域 環境社会システム学類 カリキュラムマップ (環境哲学・政策学)



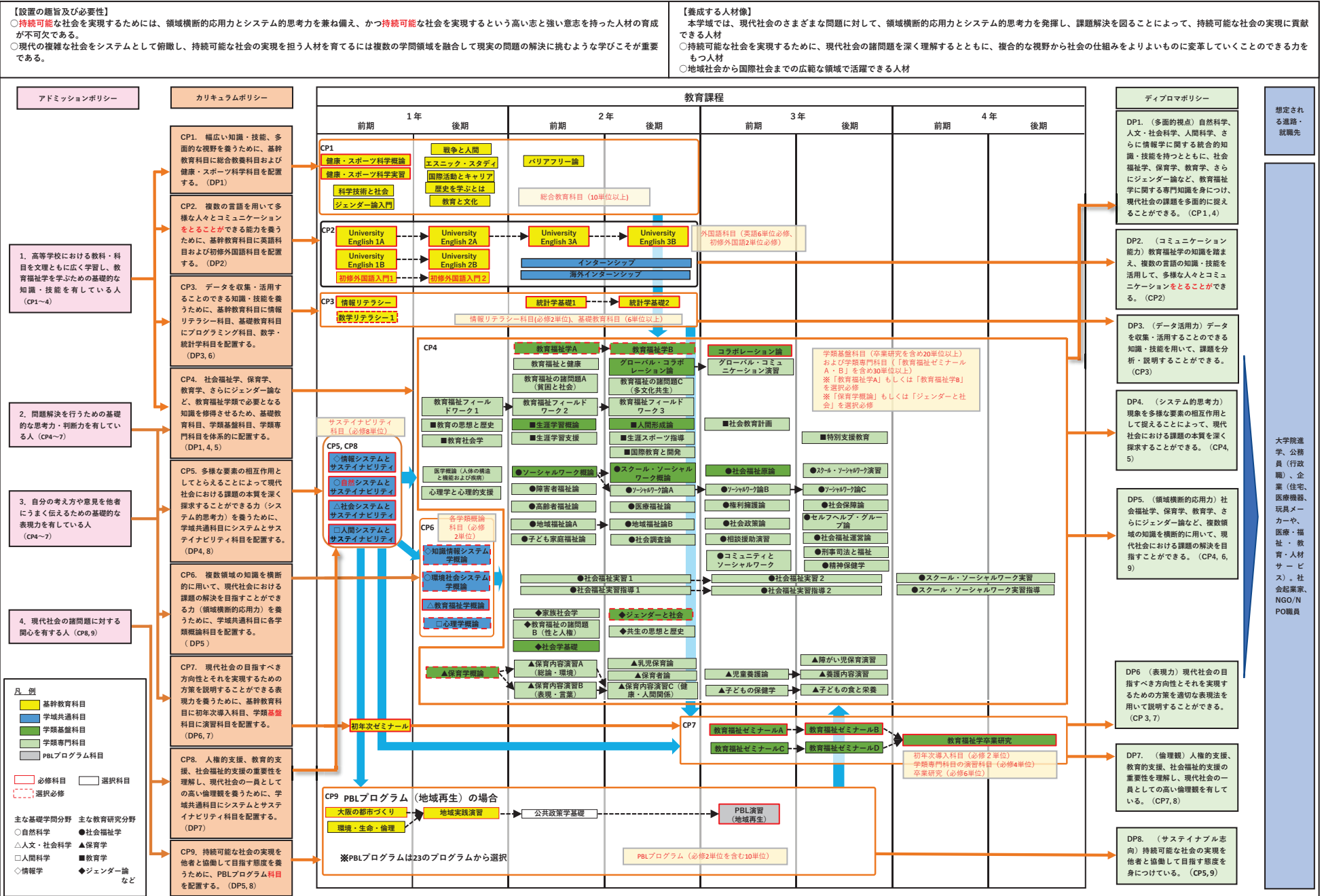


現代システム科学域 教育福祉学類 カリキュラムマップ（教育福祉総合志向：教育福祉学全体を学び、多面的視点から持続可能な社会の実現に寄与する）

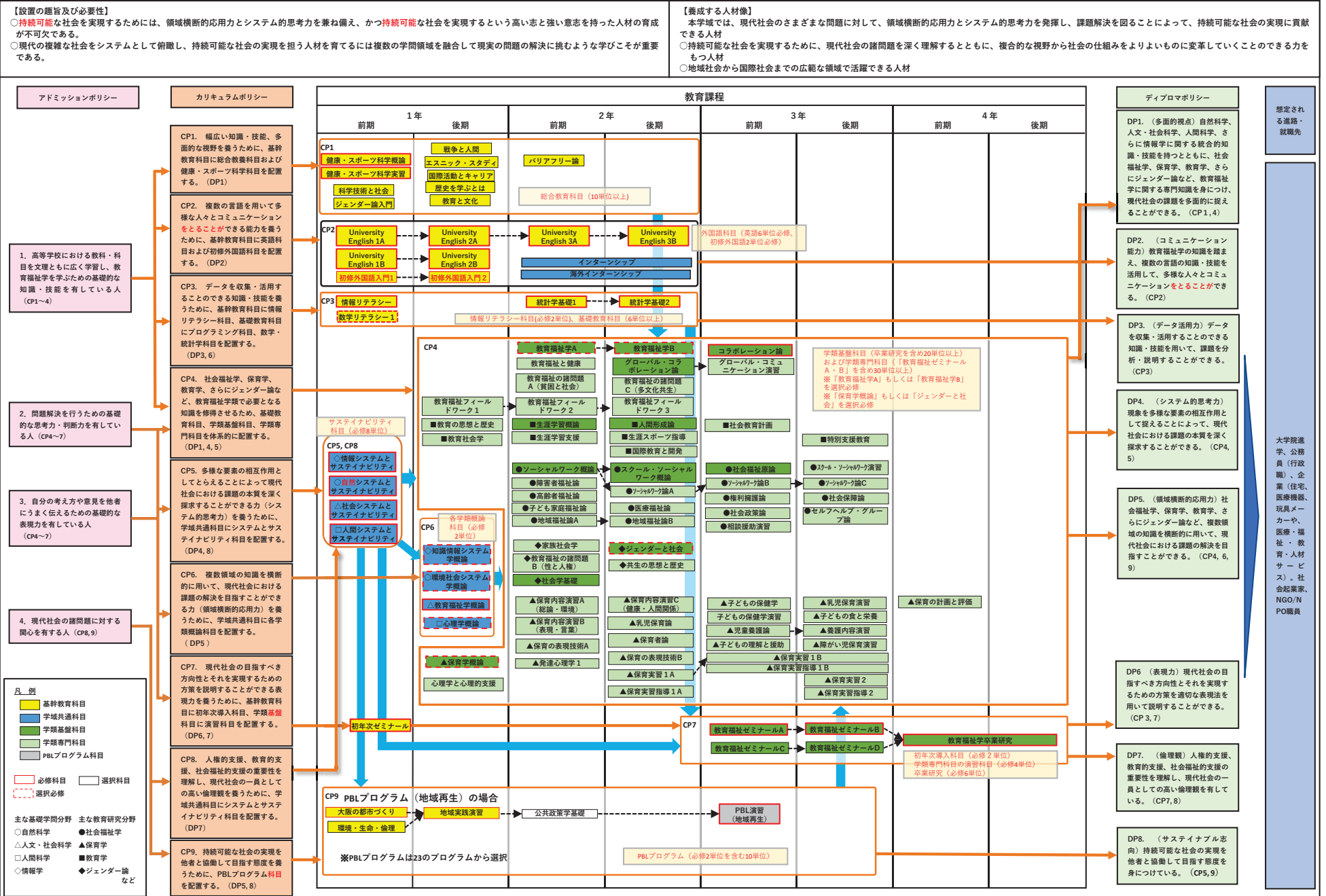


※科目区分同士の関係は水色、AP、CP、DPとの関係はオレンジ色の矢印で示す。

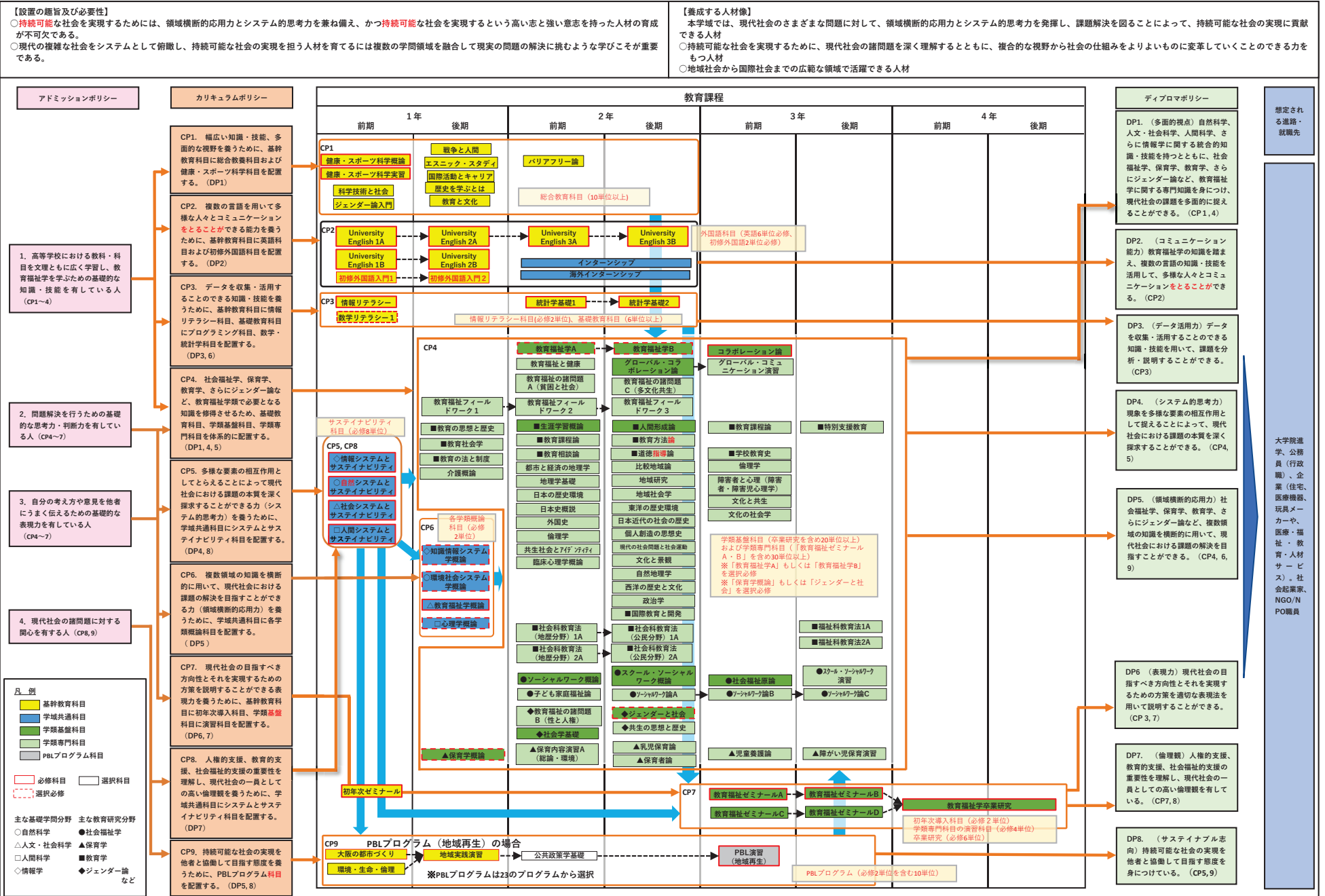
現代システム科学域 教育福祉学類 カリキュラムマップ（教育福祉の福祉志向モデル：教育福祉学を学びながら社会福祉士やSSWの資格取得を目指す）



現代システム科学域 教育福祉学類 カリキュラムマップ（教育福祉の保育志向モデル：教育福祉学を学びながら保育士資格取得を目指す）



現代システム科学域 教育福祉学類 カリキュラムマップ（教育福祉教育志向：教育福祉学を学びながら教員免許の取得を目指す）

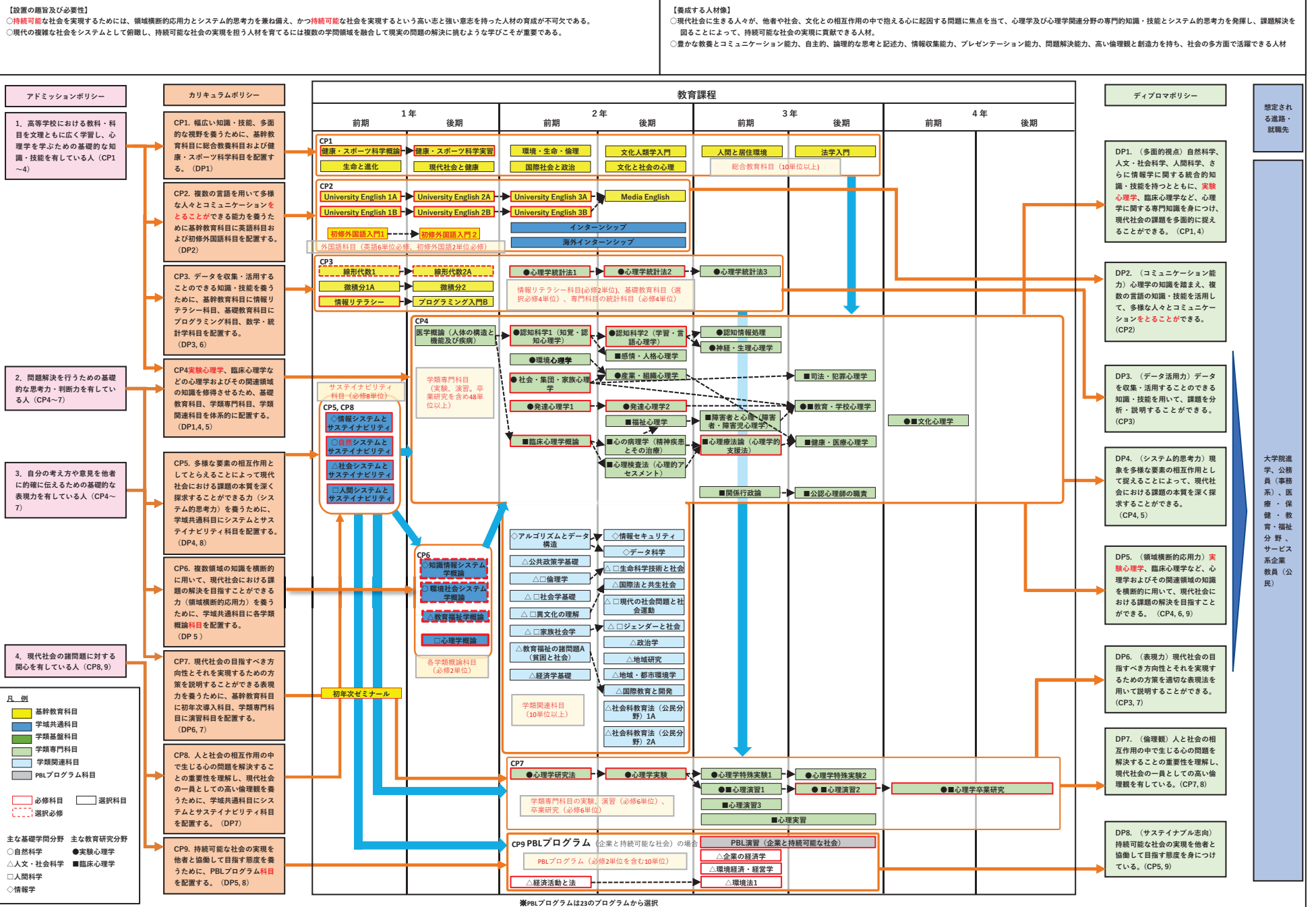


○本学では、現代社会のさまざまな問題に対して、領域横断の応用力とシステムの思考力を発揮し、課題解決を図ることによって、持続可能な社会の実現に貢献できる人材

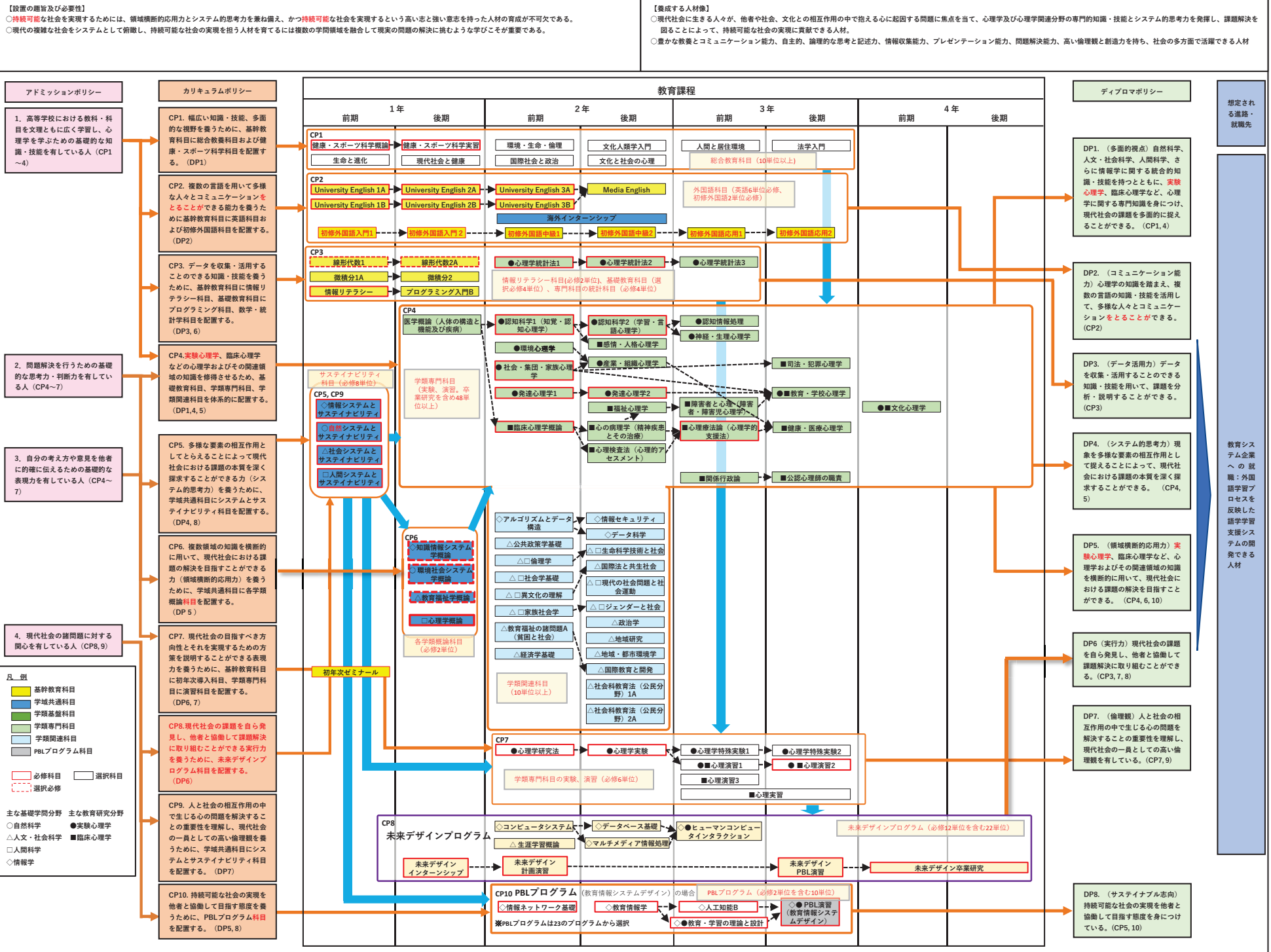
○自らがデザインした将来ビジョンを実現するにあたって障壁となる様々な問題に対して、領域横断の応用力とシステムの思考力を発揮し、課題解決を図ることによって、持続可能な社会の実現に貢献できる人材



現代システム科学域 心理学類 カリキュラムマップ



※科目区分同士の関係を水色、AP、CP、DPとの関係をオレンジ色の矢印で示す。



現代システム科学域 知識情報システム学類 シラバス(目次)

1	情報システムとサステナビリティ	P. 18
2	知識情報システム学概論	P. 20
3	海外インターンシップ	P. 22
4	コンピュータシステム	P. 24
5	情報ネットワーク基礎	P. 26
6	データベース基礎	P. 28
7	アルゴリズムとデータ構造	P. 30
8	情報セキュリティ	P. 32
9	データ科学	P. 34
10	マルチメディア情報処理	P. 36
11	オペレーティングシステム	P. 38
12	知識情報システム学演習 1	P. 40
13	知識情報システム学演習 2	P. 42
14	知識情報システム学演習 3	P. 44
15	知識情報システム学演習 4	P. 46
16	知識情報システム学卒業研究	P. 48
17	生産システム科学	P. 50
18	生産管理システム	P. 52
19	生産科学	P. 54
20	情報技術と企業活動	P. 56
21	データマイニング	P. 59
22	ビジネス・アナリティクス	P. 61
23	知識情報システムの開発・運営	P. 63
24	情報システムの性能と信頼性	P. 65
25	情報通信工学概論	P. 67
26	分散システム	P. 69
27	Webシステム構築基礎	P. 71
28	空間情報システム	P. 73
29	材料情報学	P. 75

30	人工知能A	P. 77
31	人工知能B	P. 79
32	ヒューマンコンピュータインタラクション	P. 81
33	教育情報学	P. 83
34	機械学習	P. 85
35	情報検索システム論	P. 87
36	AI プログラミング	P. 89
37	ヘルスケアシステム	P. 91
38	ヘルスケアサービス	P. 93
39	PBL演習（ビジネスプレディクション）	P. 96
40	PBL演習（生産システム科学）	P. 98
41	PBL演習（ヘルスケア科学）	P. 100
42	PBL演習（サービスデザイン）	P. 102
43	PBL演習（教育情報システムデザイン）	P. 104
44	PBL演習（情報ネットワークシステム）	P. 106
45	未来デザインインターンシップ	P. 108
46	未来デザイン計画演習	P. 110
47	未来デザインPBL演習	P. 112
48	未来デザイン卒業研究	P. 114

授業名称		担当教員氏名	
情報システムとサステナビリティ		菅野正嗣、宮本貴朗、瀬田和久、渡邊真治	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	1 前	必修	講義

授業概要
現代システムの中の情報システムの重要性について講義する。また、情報システムの歴史的変遷と、それがネットワークによって連携することによって、現代社会においてどのような役割を果たしているかについて解説する。さらに、情報倫理と情報セキュリティや、情報システムを活用した学習支援、経営における情報の役割について説明し、最後に、情報システムの観点から見たサステナビリティ（持続可能性）について考察する。
到達目標
本授業では、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 現代システムの中の情報システムの重要性について説明できること。 2. 情報システムと情報ネットワークの関連について説明できること。 3. 情報倫理とセキュリティについて説明できること。 4. 情報システムを活用した学習支援と持続可能社会について説明できること。 5. 経営における情報の役割について説明できること。 6. 情報システムの観点から見た持続可能性について説明できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション、現代システムの中の情報システム／第1回レポート（菅野）	授業で話された内容を復習する。
第2回	情報システムの成り立ち（菅野）	授業で話された内容を復習する。
第3回	情報システムをつなぐネットワーク（菅野）	授業で話された内容を復習する。
第4回	IoT とスマートシティ（菅野）	授業で話された内容を復習する。
第5回	デジタルトランスフォーメーション／第2回レポート（菅野）	授業で話された内容を復習する。
第6回	サイバー犯罪とサイバーテロ（宮本）	授業で話された内容を復習する。
第7回	個人情報保護とプライバシー（宮本）	授業で話された内容を復習する。
第8回	情報セキュリティ／第3回レポート（宮本）	授業で話された内容を復習する。
第9回	構造を有する情報の表現と探索（瀬田）	授業で話された内容を復習する。
第10回	ハイパー構造を活用した AI による学習支援（瀬田）	授業で話された内容を復習する。
第11回	誰一人取り残さないためのスキーマ構造の体制化を促す学習支援／第4回レポート（瀬田）	授業で話された内容を復習する。
第12回	日本の情報化の現状 2025 の崖（渡邊）	授業で話された内容を復習する。
第13回	経営における情報の役割（渡邊）	授業で話された内容を復習する。

第14回	経営情報／第5回レポート（渡邊）	授業で話された内容を復習する。
第15回	情報システムの観点から見た持続可能性／第6回レポート（菅野） 「情報システムとサステナビリティ」「自然システムとサステナビリティ」「社会システムとサステナビリティ」「人間システムとサステナビリティ」の担当者教員4名が登壇し、システム同士の関係性について対談形式で解説する。	授業内で指示する。

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 現代システムの中の情報システムの重要性について説明できること。 2. 情報システムと情報ネットワークの関連について説明できること。 3. 情報倫理とセキュリティについて説明できること。 4. 情報システムを活用した学習支援と持続可能社会について説明できること。 5. 経営における情報の役割について説明できること。 6. 情報システムの観点から見た持続可能性について説明できること。 の6点を達成することが求められる。 成績は、授業中に課す6回のレポートで評価する。
履修上の注意
関連科目： 自然システムとサステナビリティ、社会システムとサステナビリティ、人間システムとサステナビリティ
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
知識情報システム学概論		中島智晴、上杉徳照、柳本豪一	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	1 後	必修	講義

授業概要
情報とは何か、また知識情報システムとそこで行われる処理について、基本的な視点と考え方を学ぶ科目である。この授業では、情報システムの概説とその応用について、基本的な知識を得ることを目指す。
到達目標
本科目では、情報や情報システム、その表現や伝達、その記号化・形式化としてのデータモデル、計算の仕組み、人間と情報システムの関わり、情報技術と社会について、基本的な知識、情報システムの人工知能や自然言語処理、データサイエンスへの応用について問う問題に答えることができることを目標とする。具体的には、以下の能力を身につけることを目標とする。 ・情報および情報システムについて、半分以上の設問に正しく答えられること。 ・情報システムの応用（人工知能、自然言語処理、データサイエンスなど）に関する基本的な知識について、半分以上の設問に正しく答えられること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション：現代システム科学域の教育理念と、その中の知識情報システム学類の位置付けと役割、知識情報システム学類の3ポリシーについて（柳本）	配布資料
第2回	情報の学び方(上杉)	教科書第1章
第3回	情報システム(上杉)	教科書第2章
第4回	情報の表現（中島）	教科書第3章
第5回	情報の伝達と通信（中島）	教科書第4章
第6回	計算の方法（中島）	教科書第5章
第7回	計算の理論（中島）	教科書第6章
第8回	データの扱い（柳本）	教科書第7章
第9回	コンピュータの仕組み（柳本）	教科書第8章
第10回	人工知能(中島)	配布資料
第11回	データサイエンス(上杉)	配布資料
第12回	コンピュータを用いたデータ分析(上杉)	配布資料
第13回	機械学習(上杉)	配布資料
第14回	情報システムの応用事例(柳本)	配布資料
第15回	知識情報システム学の観点から見た持続可能性（サステイナビリティの定義、知識	配布資料

	情報システム学の方法論が持続可能社会の実現にどのように役立つのか、現代から未来へのつながりなど）について解説する。また、環境社会システム学概論、心理学概論、教育福祉学概論の代表教員との対話形式による総括を行う。(柳本)	
第16回	期末試験	授業内で指示する。

成績評価方法	
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 ・情報および情報システムについて、半分以上の設問に正しく答えられること。 ・情報システムの応用（人工知能、自然言語処理、データサイエンス）に関する基本的な知識について、半分以上の設問に正しく答えられること。 成績を評価する方法として、期末試験と課題またはレポートの提出を用いる。成績評価に占める割合は、期末試験（80%）、課題またはレポート(20%)である。	
履修上の注意	
関連科目：コンピュータアーキテクチャ、情報ネットワーク、アルゴリズムとデータ構造	
教科書	
山口和紀（編） 情報 [第2版] 東京大学出版会 毎回の授業でも資料を適宜配付する。	
参考文献	
授業中に適宜紹介する。	

授業名称		担当教員氏名	
海外インターンシップ		大塚耕司、佐賀亮介、柳本豪一、興津健二、 飛田国人、東優子、山野則子	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 通	選択	演習

授業概要
本プログラムでは、派遣前にワークショップを行い、派遣先の国の歴史や文化ならびに持続可能性に関わる問題点などについて理解させるとともに、派遣プログラム期間内に現地学生との協働によるワークショップやスタディーツアーを実施し、課題解決の方法論を実践的に学ばせる。さらに、派遣後に報告会を行い、プレゼンテーションのスキルを向上させる。これらの教育プログラムを通して、多様な歴史・文化を背景に持つ人々が互いに尊重し合い、共に生きてゆくことの重要性を深く理解する能力（多文化共生マインド）を身につけさせるとともに、国際的な観点から持続可能な社会の構築に関する具体的な課題を発見し解決に導く方法論（課題解決スキル）を身につけさせる。なお、海外インターンシップでは、現地学生と協働で持続可能な社会の構築に関する具体的な課題に取り組むことになるが、現地における歴史・文化・宗教などを背景にした習慣や作法、禁忌行為などについて、派遣前のワークショップなどを通して十分に理解させる。
到達目標
本授業では、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 派遣先の国の歴史・文化・宗教的背景について説明できること。 2. 派遣先の国の持続可能な社会の構築に関する具体的な課題を発見できること。 3. 派遣先の国の学生と協働で課題解決に取り組むことができること。 4. 現地で行った活動について他人にわかりやすく伝えられること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション、派遣国の決定	
第2回	事前学習：派遣国別のチームに分かれて、派遣先の国の歴史や文化ならびに持続可能性に関わる問題点などについて調査する。	派遣国選びに必要な情報をあらかじめ調べておく
第3回		
第4回		
第5回		
第6回		
第7回	現地学生との協働によるワークショップやスタディーツアーを実施し、課題解決の方法論を実践的に学ぶ。（10日間程度）	現地活動の内容を整理してレポートにまとめる。
第8回		
第9回		
第10回		
第11回		
第12回		
第13回		

第14回	報告会での発表準備	
第15回	報告会での発表	

成績評価方法	
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 派遣先の国の歴史・文化・宗教的背景について説明できること。 2. 派遣先の国の持続可能な社会の構築に関する具体的な課題を発見できること。 3. 派遣先の国の学生と協働で課題解決に取り組むことができること。 4. 現地で行った活動について他人にわかりやすく伝えられること。 の4点を達成することが求められる。 成績を評価する方法として、海外インターンシップ報告書および海外インターンシップ報告会での発表を用いる。成績評価に占める割合は、海外インターンシップ報告書（60%）、海外インターンシップ報告会での発表（40%）である。	
履修上の注意	
適宜指示します。	
教科書	
なし	
参考文献	
なし	

授業名称		担当教員氏名	
コンピュータシステム		太田正哉	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 前	必修	講義

授業概要
本授業は情報システムの基盤となるコンピュータ・ハードウェアの基礎を学ぶ科目である。コンピュータにおけるデータの表現方法、CPU の仕組みとマシン語、デジタル回路の基礎、コンパイラの基礎、メモリ、OS の役割について理解することを目指す。
到達目標
・ デジタル情報の表現方法について説明できる。 ・ CPU の仕組みやマシン語について説明できる。 ・ デジタル回路の基本事項について説明できる。 ・ コンピュータのメモリについて説明できる。 ・ コンパイラの基礎と OS の役割について説明できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	デジタル情報の表現（2 進数）	各回毎に指示する
第 2 回	デジタル情報の表現（有限桁の数値）	各回毎に指示する
第 3 回	デジタル情報の表現（音声・画像・動画）	各回毎に指示する
第 4 回	CPU とマシン語（CPU の仕組み）	各回毎に指示する
第 5 回	CPU とマシン語（マシン語コード）	各回毎に指示する
第 6 回	CPU とマシン語（CPU の性能）	各回毎に指示する
第 7 回	デジタル回路の基礎（基本論理素子）	各回毎に指示する
第 9 回	デジタル回路の基礎（デコーダ回路）	各回毎に指示する
第 9 回	デジタル回路の基礎（加算回路，他）	各回毎に指示する
第 10 回	コンパイラの基礎（コンパイラの仕組み）	各回毎に指示する
第 11 回	コンパイラの基礎（逆ポーランド記法とマシン語生成）	各回毎に指示する
第 12 回	メモリ（メモリの分類と特徴）	各回毎に指示する

第 13 回	メモリ（キャッシュ，メインメモリ，補助記憶装置）	各回毎に指示する
第 14 回	オペレーティングシステム（OS の役割，タスク管理）	各回毎に指示する
第 15 回	オペレーティングシステム（ジョブ管理，記憶管理）	各回毎に指示する
第 16 回	期末試験	

成績評価方法

小テスト，レポート，期末テスト等を通して達成度で評価する．C(合格)となるためには講義中の解説，例題，演習問題の解法等を理解した上で，関連する応用問題を解くことができる能力を身に付けている必要がある．小テスト，レポート，期末テストで 60%以上の得点を得ることで授業目標を 6 割以上習得できたとして合格とする．

履修上の注意

なし

教科書

授業中に資料配付

参考文献

授業中に資料配付

授業名称		担当教員氏名	
情報ネットワーク基礎		石橋勇人	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 前	必修	講義

授業概要
情報化社会を支える基盤技術である情報ネットワークの基礎について学ぶ科目である。本科目では、インターネットをはじめとする実際の情報ネットワークにおいて運用されている階層型プロトコルである TCP/IP を例に、物理層からアプリケーション層までの種々のプロトコル、データ表現、コネクション型通信、DNS などについて習得することを目的とする。また、LAN や無線ネットワークを実現するための技術についても解説する。
到達目標
インターネットに代表されるコンピュータネットワークの基本的な構造や動作原理、およびデータ形式などを理解し説明できることを目標とする。具体的には、以下の能力を身に付けることを目標とする。 1. コンピュータネットワークの基本的な構成（階層化）について説明できること。 2. アプリケーションの通信品質と交換原理（パケット交換、回線交換）について説明できること。 3. ネットワークの歴史と標準化について説明できること。 4. ネットワークアプリケーションとその特性について説明できること。 5. トランスポート層の役割について説明できること。 6. ネットワーク層の役割について説明できること。 7. データリンク層と物理層の役割について説明できること。 8. Ethernet などのブロードキャスト型のネットワークの仕組みについて説明できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	ネットワーク基礎知識	教科書第 1 章の内容を事前に読んでおく
第 2 回	通信方式・ネットワーク構成要素	前回の内容について復習し、教科書第 1 章の内容を事前に読んでおく
第 3 回	TCP/IP 基礎知識	前回の内容について復習し、教科書第 2 章の内容を事前に読んでおく
第 4 回	データリンク(1)(データリンクの基礎, Ethernet)	前回の内容について復習し、教科書第 3 章の内容を事前に読んでおく
第 5 回	データリンク(2)(無線 LAN, その他のデータリンク)	前回の内容について復習し、教科書第 3 章の内容を事前に読んでおく
第 6 回	IP プロトコル(1)(IP の基礎, 経路制御)	前回の内容について復習し、教科書第 4 章の内容を事前に読んでおく
第 7 回	IP プロトコル(2)(分割と再構築, IPv6, ヘッダ)	前回の内容について復習し、教科書第 4 章の内容を事前に読んでおく
第 8 回	IP に関連する技術	前回の内容について復習し、教科書第 5 章の内容を事前に読んでおく

		内容を事前に読んでおく
第 9 回	TCP と UDP(1)(トランスポート層の役割, UDP の機能)	前回の内容について復習し、教科書第 6 章の内容を事前に読んでおく
第 10 回	TCP と UDP(2)(TCP の機能)	前回の内容について復習し、教科書第 6 章の内容を事前に読んでおく
第 11 回	ルーティングプロトコル	前回の内容について復習し、教科書第 7 章の内容を事前に読んでおく
第 12 回	アプリケーションプロトコル(1)(遠隔ログイン, ファイル転送, 電子メール)	前回の内容について復習し、教科書第 8 章の内容を事前に読んでおく
第 13 回	アプリケーションプロトコル(2)(WWW, その他のアプリケーション)	前回の内容について復習し、教科書第 8 章の内容を事前に読んでおく
第 14 回	セキュリティ	前回の内容について復習し、教科書第 9 章の内容を事前に読んでおく
第 15 回	ネットワークに関する最新トピック	前回の内容について復習しておく
第 16 回	試験	教科書全体について復習し、基本的な用語を理解できていることを確認して試験に備える

成績評価方法

到達目標に記した 1～8 の達成度で成績評価を行う。合格となるためには、1～8 の各項目に関する基本的な設問の半分以上に正しく答えられることが必要である。成績を評価する手段として、演習と期末試験を用いる。成績評価に占める割合は、演習が 40%、期末試験が 60%とする。

履修上の注意

適宜指示する。

教科書

「マスタリング TCP/IP 入門編第 6 版」井上直也・村山公保・竹下隆史・荒井透・荻田幸雄著（オーム社）ISBN978-4-274-22447-8

参考文献

適宜指示する。

授業名称		担当教員氏名	
データベース基礎		小島篤博	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2前	必修	講義

授業概要
計算機上に効率的にデータを蓄積する技術であるデータベース、特に形式的基盤を持つリレーショナルデータベースについて、そのモデル化、操作言語、設計理論およびSQLについて基本的な知識と技能を習得する。また、サーチエンジン等で用いられる情報検索技術についても概観する。
到達目標
データベースおよび情報検索について、リレーショナルデータベースについて基本的な知識を習得するとともに、データベース操作言語であるSQLを用いて具体的な問題に対し適切な質問を作成することができることを目標とする。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション	授業の中で指示する。
第2回	ERモデル	授業の中で指示する。
第3回	リレーショナルデータモデル(リレーション)	授業の中で指示する。
第4回	リレーショナルデータモデル(正規形・主キー)	授業の中で指示する。
第5回	リレーショナル代数(集合演算)	授業の中で指示する。
第6回	リレーショナル代数(結合)	授業の中で指示する。
第7回	SQL実習	授業の中で指示する。
第8回	中間試験・第7回までの振り返り	授業の中で指示する。
第9回	RDBの設計理論(情報無損失分解)	授業の中で指示する。
第10回	RDBの設計理論(関数従属性)	授業の中で指示する。
第11回	RDBの設計理論(第2・3正規形)	授業の中で指示する。
第12回	RDBの設計理論(第4・5正規形)	授業の中で指示する。
第13回	RDBMSの質問処理とその最適化	授業の中で指示する。
第14回	トランザクション	授業の中で指示する。
第15回	サーチエンジンと情報検索	期末試験の準備
第16回	期末試験	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには以下が求められる。 ・リレーショナルデータベースについて基本的な知識を有し、主キー、正規化といった用語について説明できる。 ・データベース操作言語であるSQLを用いて、具体的な問題に対し適切な質問を作成することができる。 ・サーチエンジンと情報検索の基本的なしくみについて説明できる。 成績を評価する方法として、中間・期末試験と各回のワークシートを用いる。成績評価に占める割合は、中間・期末試験（各40%）、ワークシート(20%)である。
履修上の注意
適宜指示する。
教科書
増永良文,リレーショナルデータベース入門 [第3版] ーデータモデル・SQL・管理システム・NoSQLー, サイエンス社
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
アルゴリズムとデータ構造		柳本豪一	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 前	必修	講義

授業概要
プログラミングをする上で基礎となるデータ構造とアルゴリズムの基礎的な視点、方法論を学ぶための科目である。この授業では、計算量の観点から各アルゴリズムの特徴を学ぶことによって、基本的なデータ構造とアルゴリズムの理解を目指す。また、授業中に適宜課題に取り組むことで、プログラミングへの応用の面からも学ぶことを目指す。
到達目標
データ構造とアルゴリズムの基本的な特徴を計算量の面から評価してプログラミングに応用することができるようになる。新しいアルゴリズムやデータ構造について計算量から評価することができるようになる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	アルゴリズムとデータ構造の概要	オンライン資料による事前学習と課題
第 2 回	擬似コードと計算量	オンライン資料と教科書 1 章と 2 章による事前学習と課題
第 3 回	配列・スタック・キュー	教科書 3 章、4 章による事前学習と課題
第 4 回	リスト	教科書 5 章による事前学習と課題
第 5 回	ハッシュ	教科書 8 章による事前学習と課題
第 6 回	木構造	教科書 6 章、9 章による事前学習と課題
第 7 回	平衡木	教科書 10 章による事前学習と課題
第 8 回	ソーティングの基礎	教科書 12 章による事前学習と課題
第 9 回	クイックソート	教科書 14 章による事前学習と課題
第 10 回	マージソート	教科書 15 章による事前学習と課題
第 11 回	ヒープソート	教科書 16 章による事前学習と課題
第 12 回	比較によらないソート	教科書 17 章による事前学習と課題
第 13 回	動的計画法(枝刈り)	教科書 21 章による事前学習と課題
第 14 回	動的計画法(分割統治)	教科書 21 章による事前学習と課題
第 15 回	総復習	定期試験の準備
第 16 回	テスト	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 ・データ構造やアルゴリズムの計算量について、設問の6割以上に正しく回答できること ・擬似コードで書かれたプログラムの検討について、設問の6割以上に正しく回答できること の2点を達成することが求められる。 成績を評価する方法として、期末試験とレポートを用いる。成績評価に占める割合は、期末試験(80%)、レポート(20%)である。
履修上の注意
適宜指示する
教科書
近藤嘉雪:定本Cプログラマのためのアルゴリズムとデータ構造,SBCreative 毎回の授業でも資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
情報セキュリティ		宮本貴朗	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2後	必修	講義

授業概要
情報システムの専門性について総合的に理解し、情報セキュリティに関して高い技術者倫理を持つ高度な専門技術者として継続的な研鑽を続けることができる基礎的知識について解説する。特に、情報システムをエンドユーザとして利用するときだけではなく、企画・計画・運営する際に必要となる情報セキュリティに関する知識について説明する。
到達目標
本講義では、情報セキュリティに関する技術、法律、倫理などについて基本的な概念を理解し、身に付けることを目標としている。具体的には、以下の能力を身に付けることを目標とする。1.今あるセキュリティリスクを認識する。2.情報セキュリティの基本概念を理解する。3.情報セキュリティ対策の基本的な概念を理解する。4.セキュリティマネジメントについての基本的な概念を理解する。5.セキュリティ対策技術について理解する。6.情報倫理とセキュリティ関連法規について理解する。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	授業の進め方と情報セキュリティの概要	配布プリントの予習・復習をすること。
第2回	情報セキュリティの基礎	配布プリントの予習・復習をすること。
第3回	情報システムとセキュリティ	配布プリントの予習・復習をすること。
第4回	暗号の基礎	配布プリントの予習・復習をすること。
第5回	認証技術の基礎	配布プリントの予習・復習をすること。
第6回	セキュリティプロトコル	配布プリントの予習・復習をすること。
第7回	ホストのセキュリティ	配布プリントの予習・復習をすること。
第8回	ネットワークセキュリティ	配布プリントの予習・復習をすること。
第9回	Webセキュリティ	配布プリントの予習・復習をすること。
第10回	サイバー犯罪	配布プリントの予習・復習をすること。
第11回	SNS/スマートフォンのセキュリティ	配布プリントの予習・復習をすること。
第12回	セキュアコーディング	配布プリントの予習・復習をすること。
第13回	情報倫理と情報セキュリティ関連法規(IT基本法、不正アクセス禁止法、電子契約法、プロバイダ責任制限法、迷惑メール防止法、迷惑メール防止法)	配布プリントの予習・復習をすること。
第14回	情報倫理と情報セキュリティ関連法規(著作権法)	配布プリントの予習・復習をすること。

第15回	総まとめ（補足説明とディスカッション）	配布プリントの予習・復習をすること。
第16回	定期試験	

成績評価方法	
授業目標1～6の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、1.今あるセキュリティリスクが説明できる。2.情報セキュリティの基本概念が説明できる。3.情報セキュリティ対策の基本概念的な概念が説明できる。4.セキュリティマネジメントについての基本的な概念が説明できる。5.セキュリティ対策技術について説明できる。6.情報倫理とセキュリティ関連法規について説明できる。の6点を達成することが求められる。成績は、授業の中で与えられる小テスト等の提出物（40%）、最終試験（60%）に基づき総合的に評価する。	
履修上の注意	
適宜指示する。	
教科書	
資料を配付する。	
参考文献	
「情報セキュリティ読本五訂版」独立行政法人情報処理推進機構（IPA）（実教出版）ISBN9784407347753,「マスタリングTCP/IPセキュリティ編」斎藤孝道,（オーム社）ISBN9784274069215	

授業名称		担当教員氏名	
データ科学		佐賀亮介	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	必修	講義

授業概要
実データを解析するための統計・最適化理論、モデル化などを習得することができる
到達目標
統計学、線形代数の他、回帰分析・重回帰分析・主成分分析などの理論的学習、及びその算出法を最適化理論と共に学習させる

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション事例紹介	
第2回	統計・線形代数の復習	事前・事後：線形代数などの復習
第3回	最適化とは何か、目的関数、制約	事後：課題学習
第4回	線形計画法（標準形、シンプレックス法）	事前：前回の復習 事後：課題学習
第5回	線形計画法（罰金法、関連問題）	事前：前回の復習 事後：課題学習
第6回	双対問題	事前：前回の復習 事後：課題学習
第7回	動的計画法（概要、および基本解法）	事前：前回の復習 事後：課題学習
第8回	動的計画法（分割統治、メモ化、関連問題）及び4～8回のまとめ	事前：前回の復習 事後：中間考査に向けた学習
第9回	中間考査	事前：第2回～第8回までの復習
第10回	数理モデリング、統計的最適化	事前：統計・微積分の復習 事後：課題学習
第11回	最小二乗法・重回帰モデル	事前：前回の復習 事後：課題学習
第12回	主成分分析	事前：前回の復習 事後：課題学習
第13回	クラスタリング	事前：プログラミングの準備 事後：課題学習
第14回	階層化意思決定法	事前：線形代数の復習 事後：課題学習
第15回	モデリングの応用 及び10～15回まとめ	事前：線形代数の復習 事後：最終考査への学習
第16回	最終考査	

成績評価方法
中間考査（35％）及び最終考査（35％）、及びレポート（30％）により成績評価を行う。
履修上の注意
線形代数や微積分学を全く知らない場合には受講を断る可能性があります。
教科書
適宜指示します
参考文献
金谷健一、これなら分かる最適化数学、共立出版

授業名称		担当教員氏名	
マルチメディア情報処理		青木茂樹	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
近年、映像・音声・文字メディア等を含むマルチメディア情報が情報システムでよく用いられている。本講義では、情報システムにおけるマルチメディア情報の表現方法並びにマルチメディア情報処理における基礎的な技術を修得するとともに、ヒューマンインタフェースに関して具備すべき条件と実現技術、及びそれらを応用した具体的なシステムについて理解する。
到達目標
・マルチメディア情報の表現方法を理解し、具体的な例を用いて説明できる。 ・マルチメディア情報処理の基礎的な技術について理解し、いくつかの例に対して適用できる。 ・マルチメディア情報の応用システムについて、その基礎的な技術について理解し説明できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	マルチメディア情報の種類と特性	今回の講義で取り扱ったキーワードの調査
第2回	情報のデジタル表現	前回の講義時に指定したキーワードの調査 今回の講義で取り扱ったキーワードの調査
第3回	マルチメディア情報の表現基礎	前回の講義時に指定したキーワードの調査 今回の講義で取り扱ったキーワードの調査
第4回	マルチメディア情報の表現に関する実習	前回の講義時に指定したキーワードの調査 今回の講義で取り扱ったキーワードの調査
第5回	マルチメディア情報の入力技術	前回の講義時に指定したキーワードの調査 今回の講義で取り扱ったキーワードの調査
第6回	マルチメディア情報の変換圧縮基礎	前回の講義時に指定したキーワードの調査 今回の講義で取り扱ったキーワードの調査
第7回	マルチメディア情報の変換圧縮に関する実習	前回の講義時に指定したキーワードの調査 今回の講義で取り扱ったキーワードの調査
第8回	マルチメディア情報の処理技術1 (パターン検出)	前回の講義時に指定したキーワードの調査 今回の講義で取り扱ったキーワードの調査
第9回	マルチメディア情報の処理技術2 (パターン認識基礎)	前回の講義時に指定したキーワードの調査 今回の講義で取り扱ったキーワードの調査
第10回	マルチメディア情報の処理技術3 (パターン認識に関する実習)	前回の講義時に指定したキーワードの調査 今回の講義で取り扱ったキーワードの調査
第11回	マルチメディア情報の出力技術	前回の講義時に指定したキーワードの調査

		今回の講義で取り扱ったキーワードの調査
第 12 回	ヒューマンコンピュータインタラクション	前回の講義時に指定したキーワードの調査 今回の講義で取り扱ったキーワードの調査
第 13 回	マルチメディア情報応用システム基礎	前回の講義時に指定したキーワードの調査 今回の講義で取り扱ったキーワードの調査
第 14 回	マルチメディア情報応用システムに関する実習	前回の講義時に指定したキーワードの調査 今回の講義で取り扱ったキーワードの調査
第 15 回	メディアと情報の特性	前回の講義時に指定したキーワードの調査 今回の講義で取り扱ったキーワードの調査

成績評価方法

目標の達成度の評価を、レポート及び小テスト 70%、各回の授業で実施するコメントシートの採点結果の累計 30%で行う。単位を習得するためには、

- ・情報のデジタル表現に関する設問について正しく説明できること
- ・マルチメディア情報の表現に関する設問について正しく説明できること
- ・マルチメディア情報の変換圧縮に関する設問について正しく説明できること
- ・マルチメディア情報の処理技術に関する設問について正しく説明できること
- ・マルチメディア情報応用システムに関して正しく説明できること以上を達成することが求められる。

履修上の注意

関連科目：線形代数 1

教科書

使用しない。
各回の授業で資料を配付する。

参考文献

授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
オペレーティングシステム		宮本貴朗	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
オペレーティングシステムのための基本的概念と基本的アルゴリズムについて理解させる。オペレーティングシステムの歴史、基本構造、プロセス管理、メモリ管理、入出力管理、ファイルシステムなどについて講義する。
到達目標
本講義では、オペレーティングシステムに関する技術的事項について基本的な概念を理解し、身に付けることを目標としている。具体的には、以下の能力を身に付けることを目標とする。1.オペレーティングシステム概念、役割について理解する。2.オペレーティングシステムのユーザインタフェースについて理解する。3.オペレーティングシステムの構成について理解する。4.オペレーティングシステムの動作原理について理解する。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	ガイダンスとオペレーティングシステム序論	教科書第1章を読んでおくこと。
第2回	CPUの仮想化（プロセス）	教科書第2章を読んでおくこと。
第3回	CPUの仮想化（スケジューリング）	教科書第3章を読んでおくこと。
第4回	並行プロセス（排他制御基礎）	教科書第4章を読んでおくこと。
第5回	並行プロセス（セマフォ）	教科書第5章を読んでおくこと。
第6回	並行プロセス（モニタ）	教科書第6章を読んでおくこと。
第7回	主記憶管理（基礎）	教科書第7章を読んでおくこと。
第8回	主記憶管理（領域割り当て）	教科書第8章を読んでおくこと。
第9回	主記憶管理（ページング）	教科書第9章を読んでおくこと。
第10回	主記憶管理（セグメンテーション）	教科書第10章を読んでおくこと。
第11回	主記憶管理（仮想記憶）	教科書第11章を読んでおくこと。
第12回	主記憶管理（ページ置き換え方式）	教科書第12章を読んでおくこと。
第13回	ファイル（ファイル基礎）	教科書第13章を読んでおくこと。
第14回	ファイル（より進んだファイルシステム）	教科書第14章を読んでおくこと。
第15回	仮想化	教科書第15章を読んでおくこと。
第16回	定期試験	

成績評価方法
授業目標の1～4の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、1.オペレーティングシステムの概念、役割について説明できる。2.オペレーティングシステムのユーザインタフェースについて説明できる。3.オペレーティングシステムの構成について説明できる。4.オペレーティングシステムの動作原理について説明できる。の4点を達成することが求められる。成績は、小テスト・レポートなどの課題の評価（40%）、定期試験（60%）で評価します。
履修上の注意
適宜指示します。
教科書
「オペレーティングシステム【第2版】」松尾啓志著（森北出版）ISBN978-4-627-81012-9
参考文献
「オペレーティングシステム」大澤範高著（コロナ社）ISBN9784339027075「オペレーティングシステムの概念」AbrahamSilberschatz ほか著，土居範久ほか翻訳（共立出版）ISBN9784320122536「オペレーティングシステム」野口健一郎著（オーム社）ISBN9784274132506

授業名称		担当教員氏名	
知識情報システム学演習 1		小島篤博、柳本豪一、中島智晴、上杉徳照、佐賀亮介	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 前	必修	演習

授業概要
コンピュータを利用した問題解決能力を養成するため、課題演習を通して基本的なソフトウェア開発手法を習得させる。そのために必要なプログラミング言語の機能や文法、プログラム開発のためのソフトウェアの使い方を解説するとともに、毎回様々な例題を提示し実際のアルゴリズムをコードとして実装させる。なお、本講義は毎回オムニバス形式で実施し、プログラム作成の課題提出を課している。授業で使用するプログラミング言語はC#であり、基本的な文法を習得していることを前提とする。
到達目標
ソフトウェア開発の基本的技術として、以下を習得することを目標とする。 ・ 提示された問題を、プログラムによって解決するための手順、アルゴリズムを見出すことができる。 ・ 目的のアルゴリズムを実装するためのデータ構造およびプログラミング言語のコードを作成することができる。 ・ 作成したプログラムを実行し、動作検証し、問題点を修正（デバッグ）することができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	再帰的関数の作成（小島篤博）	指示された課題を作成・提出する。
第 2 回	配列データの受け渡し（小島篤博）	指示された課題を作成・提出する。
第 3 回	配列・コンストラクタ（佐賀亮介）	指示された課題を作成・提出する。
第 4 回	乱数の生成と応用（小島篤博）	指示された課題を作成・提出する。
第 5 回	モンテカルロ法（柳本豪一）	指示された課題を作成・提出する。
第 6 回	ファイル入出力（上杉徳照）	指示された課題を作成・提出する。
第 7 回	文字列の探索・置換（上杉徳照）	指示された課題を作成・提出する。
第 8 回	様々な文字列操作（上杉徳照）	指示された課題を作成・提出する。
第 9 回	探索アルゴリズム(ブルートフォース) （柳本豪一）	指示された課題を作成・提出する。
第 10 回	探索アルゴリズム（探索方法の設計） （柳本豪一）	指示された課題を作成・提出する。
第 11 回	探索アルゴリズム（分割統治とメモ化） （柳本豪一）	指示された課題を作成・提出する。
第 12 回	最急降下法（上杉徳照）	指示された課題を作成・提出する。
第 13 回	選択ソートアルゴリズム（小島篤博）	指示された課題を作成・提出する。

第 14 回	クイックソートアルゴリズム（小島篤博）	指示された課題を作成・提出する。
第 15 回	総合課題演習（小島篤博、柳本豪一、 中島智晴、上杉徳照、佐賀亮介）	指示された課題を作成・提出する。

成績評価方法	
授業における演習状況（2 割）、提出された演習課題（8 割）で評価します。	
履修上の注意	
「プログラミング入門 A」において C#の知識を修得しておくこと。	
教科書	
糸井康孝著『猫でもわかる C#プログラミング第 3 版』ソフトバンククリエイティブ	
参考文献	
林晴比古著『明快入門 C スーパービギナー編』ソフトバンククリエイティブ 近藤嘉雪『定本 C プログラマのためのアルゴリズムとデータ構造』ソフトバンククリエイティブ	

授業名称		担当教員氏名	
知識情報システム学演習 2		瀬田和久、真嶋由貴恵、渡邊真治、森田裕之、 岩村幸治、林佑樹、榎田聖子	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	必修	演習

授業概要
利用者のニーズを捉えた具体的な情報システムや Web サービスを提案し、その実現技術を兼ね備えるための基礎的スキルの習得を目標とする。第 1 回から第 5 回の演習では、Web サービス開発の基礎知識となる HTML および CSS を理解するとともに、利用者の視点に立った具体的なコンテンツを提供する基本的なウェブサイトの構築に取り組む。第 6 回目以降の演習では、現代社会を支える「AI 分野」、「医療分野」、「電子自治体分野」、「ビジネス分野」、「生産システム分野」を対象とした利用者のニーズを把握するとともに、各分野のニーズに応える具体的な情報システムや Web サービスを実現する基礎技術の修得を目指した演習に取り組む。
到達目標
・ HTML および CSS の基礎的な知識に基づく具体的なウェブサイトを構築できるようになる。 ・ 各分野における利用者ニーズを指向した情報システムや Web サービスを実現するための基礎技術を扱えるようになる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回～ 第 3 回	HTML 演習(1)：HTML の基本構造、各種タグ、スタイルシート適用方法の演習 (林 佑樹、榎田 聖子)	配布資料を復習する。
第 4 回～ 第 5 回	HTML 演習(2)：利用者の視点に立った具体的なコンテンツを提供するウェブサイトの構築 (林 佑樹、榎田 聖子)	配布資料を復習し、ウェブサイト作成課題に取り組む。
第 6 回	AI 分野でのニーズと情報システム(1)：対話システムとサービス連携 (瀬田 和久)	配布資料を復習する。
第 7 回	AI 分野でのニーズと情報システム(2)：対話システムの知識表現演習 (瀬田 和久)	配布資料を復習し、演習課題に取り組む。
第 8 回	医療分野でのニーズと情報システム(1)：医療サービスとシステム連携 (真嶋 由貴恵)	配布資料を復習する。
第 9 回	医療分野でのニーズと情報システム(2)：医療分野での具体的事例から必要なシステムを考察 (真嶋 由貴恵)	配布資料を復習し、演習課題に取り組む。

第 10 回	電子自治体分野でのニーズと情報システム (1)：電子自治体における情報システムの基本的な知識の理解 (渡邊 真治)	配布資料を復習する。
第 11 回	電子自治体分野でのニーズと情報システム (2)：ユーザビリティ・UX などを含む多面的なシステム評価手法の演習 (渡邊 真治)	配布資料を復習し、演習課題に取り組む。
第 12 回	ビジネス分野でのニーズと情報システム (1)：ウェブログデータとその活用 (森田 裕之)	配布資料を復習する。
第 13 回	ビジネス分野でのニーズと情報システム (2)：ウェブログデータを使った演習 (森田 裕之)	配布資料を復習し、演習課題に取り組む。
第 14 回	生産システム分野でのニーズと情報システム (1)：生産システム分野における数理最適化の役割と活用事例 (岩村 幸治)	配布資料を復習する。
第 15 回	生産システム分野でのニーズと情報システム (2)：数理計画ソルバーを用いた生産システム分野における数理最適化の演習 (岩村 幸治)	配布資料を復習し、演習課題に取り組む。
第 16 回	まとめ	配布資料を復習する。

成績評価方法
授業目標を満たしているかどうかを判断するために、以下の 2 項目の達成度で評価を行う。 1. ウェブサイト作成課題：25% 2. 演習課題（計 5 回）：各 15% 単位を取得するためには、上記項目を総計して 6 割以上の得点を達成すること。
履修上の注意
関連科目：知識情報システム学演習 1，知識情報システム学演習 3，知識情報システム学演習 4
教科書
エビスコム（著）：HTML5&CSS3 レッスンブック、ソシム 毎回の授業でも資料を配付する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
知識情報システム学演習 3		安倍広多、青木茂樹、岩村幸治、石橋勇人、上杉徳照、大西克己、太田正哉、楠木祥文、小島篤博、佐賀亮介、菅野正嗣、瀬田和久、中島智晴、永田好克、林佑樹、平林直樹、榊田聖子、真嶋由貴恵、宮本貴朗、村上晴美、森永英二、森田裕之、柳本豪一、吉田大介、渡邊真治	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 前	必修	演習

授業概要
人工知能、社会科学、ヘルスケア、情報ネットワーク、生産システムの知識情報システムの各分野における代表的な課題とその解決法について、グループワークなどを通じて、自主的に発見・修得することにより自発的探究心や創造性を養う。
到達目標
人工知能、社会科学、ヘルスケア、情報ネットワーク、生産システムの知識情報システムの各分野において、それぞれの分野ごとの基礎知識の修得から、課題解決法の提案に至るまでを様々な課題に取り組むことで身に付けさせる。また、レポートの作成や口頭発表などを通じて、実験結果とそれに対する考察を正確に伝達できるプレゼンテーション能力の向上を図る。 具体的には、以下の能力を身につけることを達成目標とする。
1. 各分野の基礎的な知識
2. 課題の発見と解決法の提案
3. レポート作成や口頭発表による成果発表

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	各指導教員より演習の進め方、スケジュールの説明を行う。	予習として、事前配布資料を読んでおき、演習の全体的なスケジュールについて理解しておくこと。
第2回 ～ 第5回	各分野の基礎的な知識を修得するための解説を行い、それらを身に付けるための課題演習を行う。	予め演習内容に関する資料を読んでおくこと。また、復習として、配付資料中の内容について復習するとともに、自ら関連する図書等を調べること。
第6回 ～ 第9回	各分野における解決すべき様々な諸問題について説明し、それらを解決する手段として提案されてきた様々な手法について、演習を通じて身に付ける。	各分野における諸問題を理解するための資料だけではなく、関連する図書や文献を読むことで、課題に対する認識を深めること。

第10回 ～ 第13回	各分野の応用的な課題に取り組み、課題解決方法の提案や、検証実験などを行う。	それまでの演習で説明した基礎的な内容を十分理解しておくこと。
第14回 ～ 第15回	各自が提案した解決法を、口頭発表やレポートなどにまとめる。	口頭発表に関するまとめや、最終レポートを期限までに提出すること。

成績評価方法	
各教員から指定された演習課題レポートにより総合的に評価する。授業目標（達成目標）の1～3の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 各分野の基礎的な知識に対して6割以上について説明できること。 2. 各分野における課題や解決法の6割以上について概説できること。 3. 課題の解決によって得られた成果の6割以上について解析と考察ができること、 の3点を達成することが求められる。成績は各教員からの課題またはレポートにより総合的に成績評価する（100点）。	
履修上の注意	
（関連科目）知識情報システム学演習 1、知識情報システム学演習 2、 知識情報システム学演習 4	
教科書	
授業中に資料を配布する。	
参考文献	
授業中に適宜紹介する。	

授業名称		担当教員氏名	
知識情報システム学演習 4		安倍広多、青木茂樹、岩村幸治、石橋勇人、上杉徳照、大西克己、太田正哉、楠木祥文、小島篤博、佐賀亮介、菅野正嗣、瀬田和久、中島智晴、永田好克、林佑樹、平林直樹、榊田聖子、真嶋由貴恵、宮本貴朗、村上晴美、森永英二、森田裕之、柳本豪一、吉田大介、渡邊真治	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 後	必修	演習

授業概要
知識情報システム関連分野における先端的な研究に接する中で、受講生自らが課題に対する問題点の把握、分析結果の討論、レポートの作成、プレゼンテーション等、研究を計画的に遂行するための総合力の基礎を身に付ける
到達目標
知識情報システム学の専門分野における研究テーマを受講生ごとに設定し、基本的な研究の方法論を習得する。テーマの設定、アプローチの方法、データ収集方法、分析あるいは解析方法、考察の方法を習得する。これらを習得することで卒業研究につながる技術や知識等を身につける。具体的には、以下の能力を身につけることを達成目標とする。
1. 研究テーマ発見や関連研究を自ら調査できること。
2. 課題を解決するための研究方法や調査方法を理解すること。
3. 研究の目的、背景、結果等についてプレゼンテーションできること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	各指導教員より演習の進め方、スケジュールの説明を行う。	それぞれの研究室で研究しているテーマについて、事前に十分調査し、さらに研究室面談等により詳しい内容を理解しておくこと。
第 2 回	それぞれが卒業研究で取り組むことを念頭に置き、今後 1 年半をかけて研究するテーマを、文献調査等を通じて探索する。	研究テーマの発見や関連研究についての文献を調査する。また、自ら研究計画を立案し、研究室でのディスカッション等で発表するための資料を準備する。
第 3 回		
第 4 回		
第 5 回		
第 6 回	各自が設定したテーマについて、研究背景を理解するための関連研究調査を行う。また取り組むテーマに対して、その解決のための調査や解決法の提案を行い、各回のゼミナールの場において報告し、教員や学生相互に議論を通じて理解を深める。また予備実験や予備調査などについても検討する。	研究を遂行するための基本的な知識、課題に関して十分な理解をしているか確認し、不十分であれば積極的に文献調査等を通じて関連研究の現状について把握する。
第 7 回		
第 8 回		
第 9 回		
第 10 回		
第 11 回		
第 12 回		

第13回	演習の成果を発表するためのポスターを作成し、ゼミ内での相互発表によるブラッシュアップを行う。	各自のポスターを作成するとともに、研究室内での相互評価に積極的に参加すること。
第14回		
第15回	ポスターによる成果発表を行う。	研究の背景や目的、成果を発表するためのポスターを作成する。また、発表によって得られたコメントを卒業研究にフィードバックできるように取りまとめる。

成績評価方法

各教員から指定された演習課題レポートにより総合的に評価する。授業目標（達成目標）の1～3の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、

1. 研究テーマと関連研究に対して6割以上について概説できること。
2. 課題の解決方法や調査方法の6割以上について概説できること。
3. 取り組んだ研究テーマの目的や背景、研究成果の6割以上について説明ができること。

の3点を達成することが求められる。

成績は研究テーマへの取り組み、ゼミでの報告・議論、ポスターによる成果発表を総合的に評価する（100点）。

履修上の注意

（関連科目）知識情報システム学演習1、知識情報システム学演習2、知識情報システム学演習3

教科書

授業中に資料を配布する。

参考文献

授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
知識情報システム学卒業研究		安倍広多、青木茂樹、岩村幸治、石橋勇人、上杉徳照、大西克己、太田正哉、楠木祥文、小島篤博、佐賀亮介、菅野正嗣、瀬田和久、中島智晴、永田好克、林佑樹、平林直樹、榊田聖子、真嶋由貴恵、宮本貴朗、村上晴美、森永英二、森田裕之、柳本豪一、吉田大介、渡邊真治	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
6	4 通	必修	実験・実習

授業概要
知識情報システム学に関する研究テーマを定め、知識科学、情報システム科学などの情報科学およびその応用分野に関する専門知識を活用することによって、研究の計画、実験、調査、開発、評価などを教員の指導のもとで遂行し、研究調査結果のまとめ方、考察の方法、口頭発表による効果的なプレゼンテーション方法などを習得することにより、持続的に発展可能な社会の形成に向けた現在の課題を発掘し、その問題を解決する能力を身につける。
到達目標
本科目では、知識情報システム学に関する諸課題に対し、知識科学、情報システム科学などの情報科学およびその応用分野に関する専門知識を活用することによってそれぞれの課題に取り組み、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 先行研究を整理したうえで、卒業研究のテーマを決定できること。 2. 卒業研究のテーマに必要な、実験、調査、分析等ができること。 3. 研究成果を卒業論文として取りまとめ、的確に報告・発表できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	オリエンテーション (卒業研究の進め方)	卒業研究の進め方を復習する。
第 2 回 ～ 第 30 回	・個人ごとの研究テーマへの取り組み ・調査や実験、開発、評価などを行い、討議やセミナーを重ねる。 ・研究結果を卒業論文としてまとめ、要旨も作成する。	研究に必要な文献やデータの収集、解析などを適切に行うこと。
第 31 回	卒業論文発表会 学類が主催する口頭発表会	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 先行研究を整理したうえで、卒業研究のテーマを決定できること。 2. 卒業研究のテーマに必要な、実験、調査、開発、評価等ができること。 3. 研究成果を卒業論文として取りまとめ、的確に報告・発表できること。の3点を達成することが求められる。 成績は、卒業論文の研究に取り組む姿勢（20%）、卒業論文および要旨（60%）、発表（20%）で評価する。
履修上の注意
関連科目：知識情報システム学類の全科目
教科書
卒業研究に関連する論文・資料など。
参考文献
指導教員より、個別に紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
生産システム科学		岩村幸治	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
グローバルな競争環境において、製品をライバル企業より早く・安く・高品質に生産するためには、効率の良い高度な生産システムが必要である。本講義では、生産システムの基本構成および基本原理を理解するとともに、その設計・管理・運用方法として、生産計画、資源所要量計画、ラインバランシング、生産スケジューリング、在庫管理の基礎を学ぶ。
到達目標
生産システムの基本的な概念および設計・管理・運用方法の基礎について身につけることを目標とする。具体的には、以下の能力を身につけることを達成目標とする。 (1) 線形計画法に基づく生産計画の知識を習得し、実践できる。 (2) 資源所要量計画の知識を習得し、実践できる。 (3) ラインバランシングの知識を習得し、実践できる。 (4) スケジューリングの知識を習得し、実践できる。 (5) 在庫管理の知識を習得し、実践できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	生産システムの概要	配布プリント
第2回	線形計画法に基づく生産計画	参考文献 3 章
第3回	産計画の演習	参考文献 3 章
第4回	資源所要量計画の概要	教科書 3.2
第5回	資源所要量計画の手順	教科書 3.2
第6回	資源所要量計画の演習	教科書 3.2
第7回	ライン生産方式	教科書 10 章
第8回	ラインバランシングの手順	教科書 10 章
第9回	ラインバランシングの演習	教科書 10 章
第10回	スケジューリングの概要、ジョンソン法	教科書 5.1～5.3
第11回	スケジューリングの実用解法：ディスパッチングルール	教科書 5.4
第12回	スケジューリングの演習	教科書 5.4
第13回	在庫管理 1：正規分布と安全在庫	教科書 4.3
第14回	在庫管理 2：発注方式	教科書 3.3
第15回	在庫管理の演習	教科書 3.3

第 16 回	定期試験	

成績評価方法
授業目標（達成目標）の（1）～（5）の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 （1）線形計画法を用いた生産計画について理解し、基礎的な問題が解けること。 （2）資源所要量計画について理解し、基礎的な問題が解けること。 （3）ラインバランシングについて理解し、基礎的な問題が解けること。 （4）スケジューリングについて理解し、基礎的な問題が解けること。 （5）在庫管理について理解し、基礎的な問題が解けること。 上記の 5 点を達成することが求められる。成績を評価する方法として、レポート課題（5 回）および期末試験を用いる。成績評価に占める割合はレポート課題（50%）期末試験（50%）である。合格（C 以上）となるためには、レポート課題ならびに期末試験、いずれにおいても 60 点以上取得することが必要である。
履修上の注意
適宜指示する。
教科書
圓川隆夫・伊藤謙治，生産マネジメントの手法，朝倉書店（1996）
参考文献
坂和正敏・他 2 名，わかりやすい数理計画法，森北出版（2010）

授業名称		担当教員氏名	
生産管理システム		平林直樹	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
知識情報処理の代表的な活用分野である工業製品の生産における「物の流れ」に関する設計・管理・運用法を体系的に学習させる科目である。生産管理システムの基本要素である全般的生産計画、生産プロセス計画、生産スケジューリング、生産実施、生産統制の概要が理解できるようにし、その具体的な手法を修得させる。コンピュータ支援生産システムのシステム管理およびサプライチェーン全体のネットワーク管理の動向を概観できるようにし、地球環境と調和した生産システムの在り方を考えるための糸口を与える。
到達目標
1. コンピュータ支援生産システムのシステム管理およびサプライチェーン全体のネットワーク管理の動向を理解し、説明できること。 2. 生産形態に応じた生産管理システムの特徴を理解し、説明できること。 3. 在庫管理の概要を理解し、基本的な手法を活用できること。 4. 全般的生産計画モデルと線形計画法の内容を理解し、基本的な手法を活用できること。 5. MRP システムとトヨタ生産方式の基本的な手法を活用できること。 6. 生産スケジューリング問題の各種の最適解法を活用できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	生産システムの発展に伴う生産管理方式の歴史的展開	配布テキストの p.1～p.4 および参考資料を復習すること。
第 2 回	生産形態に応じた生産管理システムの特徴	配布テキストの p.5～p.10 を事前に読んでおくこと。
第 3 回	在庫管理（定量発注方式）	配布テキストの定量発注方式の節（p.11～p.12）および参考資料を事前に読んでおくこと。
第 4 回	在庫管理（定期発注方式）	前回の内容について復習し、問 1 および問 2 を解いておくこと。配布テキストの定期発注方式の節（p.13）を事前に読んでおくこと。
第 5 回	MRP システム	前回の内容について復習し、問 3～問 5 を解いておくこと。配布テキストの p.14～p.17 および参考資料を事前に読んでおくこと。
第 6 回	トヨタ生産方式	前回の内容について復習し、問 6 を解いておくこと。配布テキストのトヨタ生産方式の節および参考資料を事前に読んでおくこと。
第 7 回	製品設計、品質管理	配布テキストの p.18～p.19 および参考資料を事前に読んでおくこと。

第 8 回	動作時間研究と標準時間の見積法	配布テキストの p.20～p.22 および参考資料を事前に読んでおくこと。
第 9 回	生産プロセス計画	配布テキストの p.23～p.24 および参考資料を事前に読んでおくこと。
第 10 回	生産計画における線形計画法（基本的な考え方と概要）	前回の内容について復習し、問 7 を解いておくこと。線形計画法の概要および解法に関する配布資料を事前に読んでおくこと。
第 11 回	生産計画における線形計画法（シンプレックス法）	線形計画法の解法に関する配布資料を事前に読んでおくこと。
第 12 回	全般的生産計画モデルと生産計画法	前回の内容について復習し、問 8 を解いておくこと。配布テキストの p.25～p.28 および参考資料を事前に読んでおくこと。
第 13 回	スケジューリングの定理	前回の内容について復習し、問 9 および問 10 を解いておくこと。配布テキストの p.29～p.31 を事前に読んでおくこと。
第 14 回	フローショップスケジューリングにおける最適解法	前回の内容について復習し、問 11 を解いておくこと。配布テキストの p.32～p.35 を事前に読んでおくこと。
第 15 回	ジョブショップスケジューリングにおける最適解法	配布テキストの p.36～p.41 を事前に読んでおくこと。
第 16 回	定期試験	

成績評価方法

上記到達目標の 1～6 の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、1～6 の全ての項目で基本的な手法を理解し、関連する問題（講義中に課した演習問題レベル）を解けることが必要である。成績評価は、期末試験の成績(70%)、レポートの評価(30%)で行う。

履修上の注意

関連科目：生産システム科学および生産科学

教科書

授業中にテキストおよび参考資料となるプリントを配布する。

参考文献

授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
生産科学		森永英二	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 前	選択	講義

授業概要
「ものづくり」関連科学の基礎について、設計の切り口から講義を行う。ものづくりの流れ、ものづくりを構成する種々の段階と作業項目の概略を理解させるとともに、設計過程の構成と作業項目、設計における最適化、設計情報の共有手段としての製図とその基盤となる図形科学の基礎について理解させる。
到達目標
この講義では、受講生が以下の能力を身につけることを目標とする。 (1) ものづくりの流れとその構成、および、各段階での作業項目の概略を理解して説明できること。 (2) 概念設計過程を理解して説明できること。 (3) 実体設計過程を理解して説明できること。 (4) 詳細設計過程を理解して説明できること。 (5) 図形科学や製図の基礎について理解し、問題が解けるとともに、図面を描けること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	ものづくりの流れと設計	配布資料の予習・復習をすること。
第2回	製品企画・要求定義	配布資料の予習・復習をすること。
第3回	概念設計	配布資料の予習・復習をすること。
第4回	実体設計、詳細設計	配布資料の予習・復習をすること。
第5回	数理最適化と設計1（線形計画法）	配布資料の予習・復習をすること。
第6回	数理最適化と設計2（整数計画法）	配布資料の予習・復習をすること。
第7回	設計情報の共有・標準化、図形科学の基礎1（投影面と投影図）	配布資料の予習・復習をすること。
第8回	図形科学の基礎2（直線）	配布資料の予習・復習をすること。
第9回	図形科学の基礎3（平面と直線の交点・2平面の交線）	配布資料の予習・復習をすること。
第10回	図形科学の基礎4（平面と直線・平面のなす角、平行）	配布資料の予習・復習をすること。
第11回	図形科学の基礎5（直交、回転）	配布資料の予習・復習をすること。
第12回	製図の基礎1（図面の構成、図形の表し方）	配布資料の予習・復習をすること。
第13回	製図の基礎2（寸法記入法）	配布資料の予習・復習をすること。
第14回	製図の基礎3（サイズ公差、表面性状の図示方法）	配布資料の予習・復習をすること。

第 15 回	製図の基礎 4 (製図演習)、計算機支援設計の基礎	配布資料の予習・復習をすること。
第 16 回	まとめ	配布資料の予習・復習をすること。

成績評価方法
到達目標の(1)～(5)の達成度で成績評価を行う。合格となるためには、(1)～(5)の全項目で基本的な事項を理解し、その 60%以上について、説明できるとともに問題を解けることが必要である。適宜レポート課題・演習課題を出題し、それで成績評価を行う。
履修上の注意
(関連科目) 生産システム科学, 生産管理システム (備考) 適宜レポート課題・演習課題を出す。
教科書
指定しない。毎回、プリントを配布する。
参考文献
・ G.Paul, W.Beitz, J.Feldhusen, K.H.Grote 原著, 金田徹, 青山英樹, 川面恵司, 首藤俊夫, 須賀雅夫, 北條恵司, 宮下朋之, 山際康之, 綿貫啓一共訳, 「エンジニアリングデザイン(第 3 版)-工学設計の体系的アプローチ-」, 森北出版 ・ G. ポール, W. バイツ著, 設計工学研究グループ訳, 「工学設計: 体系的アプローチ」, 培風館 ・ 日本機械学会編, 「機械工学便覧デザイン編 β 1 設計工学」, 丸善 ・ 坂和正敏, 矢野均, 西崎一郎, 「わかりやすい数理計画法」, 森北出版 ・ 稲葉武彦, 藤原順介, 「図説図学」, オーム社 ・ 大西清, 「JIS にもとづく標準製図法」, オーム社

授業名称		担当教員氏名	
情報技術と企業活動		渡邊真治	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
経営戦略・IT 戦略に関する基礎知識をもとに、ビジネスモデルや企業活動における特定のプロセスを改革・高度化・最適化する能力を養成する。この授業では、受講生のみなさんが、情報技術をキーワードに、自然科学、社会科学、人文学の視点から、持続的な企業活動を行うための基礎となる知識と思考法を身につけることを目的としている。
到達目標
具体的には以下の能力を身につけることを達成目標とする。 1. 経営戦略・IT 戦略に関する基礎知識について概説ができること。 2. 情報システムを評価する方法について概説できること。 3. それらの知識をもとに企業活動における基本的な問題・課題解決策を提案できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	企業情報システムの現状	ポータルサイトに登録しているファイルに目を通しておいください。また、関連リンクがある場合は概要を確認しておいてください。
第 2 回	情報システムの経済・経営効果(1) マクロ効果	ポータルサイトに登録しているファイルに目を通しておいください。また、関連リンクがある場合は概要を確認しておいてください。
第 3 回	情報システムの経済・経営効果(2) ミクロ効果 IT 技術は雇用を奪うのか	ポータルサイトに登録しているファイルに目を通しておいください。また、関連リンクがある場合は概要を確認しておいてください。
第 4 回	IT 企業と情報システム開発 ウォータフォールとアジャイル	ポータルサイトに登録しているファイルに目を通しておいください。また、関連リンクがある場合は概要を確認しておいてください。
第 5 回	IT 経営の分析ツール(1) 情報の理論、ネットワーク経済性、市場と組織	ポータルサイトに登録しているファイルに目を通しておいください。また、関連リンクがある場合は概要を確認しておいてください。

第 6 回	IT 経営の分析ツール(2) IT 戦略、PV と RVB、ダイナミックケイパビリティ、ビジネスモデル	ポータルサイトに登録しているファイルに目を通しておいってください。また、関連リンクがある場合は概要を確認しておいてください。
第 7 回	情報システム評価概論(1) 財務的手法 (ROI、NPV など)	ポータルサイトに登録しているファイルに目を通しておいってください。また、関連リンクがある場合は概要を確認しておいてください。
第 8 回	情報システム評価概論(2) 非財務的手法 (BSC、多目的システム評価、ユーザビリティ評価など)	ポータルサイトに登録しているファイルに目を通しておいってください。また、関連リンクがある場合は概要を確認しておいてください。
第 9 回	事例分析製造業自動運転 MaaS	ポータルサイトに登録しているファイルに目を通しておいってください。また、関連リンクがある場合は概要を確認しておいてください。
第 10 回	事例分析小売業コンビニエンスストア	ポータルサイトに登録しているファイルに目を通しておいってください。また、関連リンクがある場合は概要を確認しておいてください。
第 11 回	事例分析ネットビジネス GAFAs	ポータルサイトに登録しているファイルに目を通しておいってください。また、関連リンクがある場合は概要を確認しておいてください。
第 12 回	事例分析金融業 システム統合 FinTech	ポータルサイトに登録しているファイルに目を通しておいってください。また、関連リンクがある場合は概要を確認しておいてください。
第 13 回	事例分析ブロックチェーン技術の応用	ポータルサイトに登録しているファイルに目を通しておいってください。また、関連リンクがある場合は概要を確認しておいてください。
第 14 回	事例分析：DX(デジタル・トランスフォーメーション)	ポータルサイトに登録しているファイルに目を通しておいってください。また、関連リンクがある場合は概要を確認しておいてください。
第 15 回	イノベーションを生む環境とは MOT	ポータルサイトに登録しているファイルに目を通しておいってください。また、関連リンクがある場合は概要を確認しておいてください。
第 16 回	定期試験	

成績評価方法
授業目標（達成目標）の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 ・授業で取り上げた経営戦略・IT 戦略に関する基礎知識の半分以上について概説ができること。 ・それらの知識をもとに企業活動における基本的な問題・課題解決策を提案できること。 上記の2点を達成することが求められる。各評価方法が成績評価に占める割合は「マークシート試験 50 点、記述テスト 20 点、毎回の授業で提出する小レポート 30 点」である。
履修上の注意
皆さんが接するものにどのような情報技術が使われているか注意して観察してください。また、新聞やニュース等で取り上げられる最新の情報技術に関する話題にも興味を持ってください。授業支援システムに授業に関する資料を予めその週の授業日の3－4日前に登録する予定です。授業内で印刷物を配る予定ですが、予めそのファイルに目を通してください。また、授業に関する参考資料一覧ファイルを適宜修正アップする予定です。それらの資料も参考にしてください。
教科書
毎回、レジュメを配付する。
参考文献
『世界標準の経営理論』ダイヤモンド社入山章栄 2019 『経営情報学入門』放送大学教育振興会木嶋恭一岸眞理子 2019 『新しい経営学』ディスカヴァー・トゥエンティワン三谷宏治 2019 『情報経済の鉄則ネットワーク型経済を生き抜くための戦略ガイド』日経 BP カール・シャピロハル・ヴァリアン 2018 『インフォメーション・エコノミー:情報化する経済社会の全体像』NTT 出版篠崎彰彦 2014

授業名称		担当教員氏名	
データマイニング		森田裕之	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 前	選択	講義・演習

授業概要
以下の項目を講義する。 データの基本的な性質・基本統計量とその周辺・分類予測モデルの概要・教師付き学習モデルの概要・決定木モデルのアルゴリズムとメカニズム
到達目標
統計処理と機械学習のデータマイニング手法の内容やツールの活用方法を学び、それらを実際のデータ分析に適用する技能が習得できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション	
第2回	データと情報	該当分野の理解が不足している部分の事前・事後学習
第3回	データの属性とその特徴	該当分野の理解が不足している部分の事前・事後学習
第4回	基本統計量	該当分野の理解が不足している部分の事前・事後学習
第5回	基礎集計量などのデータの視覚化を含めた実習	該当分野の理解が不足している部分の事前・事後学習
第6回	実データの取り扱いとマイニングすべき目的設定	該当分野の理解が不足している部分の事前・事後学習
第7回	目的変数の設定に関する実習	該当分野の理解が不足している部分の事前・事後学習
第8回	教師付き学習モデルと分類予測問題のフレームワーク	該当分野の理解が不足している部分の事前・事後学習
第9回	分類予測問題の評価と実際	該当分野の理解が不足している部分の事前・事後学習
第10回	決定木モデルのアルゴリズム	該当分野の理解が不足している部分の事前・事後学習

第 11 回	決定木モデルの実習	該当分野の理解が不足している部分の事前・事後学習
第 12 回	実データにおける説明変数の工夫	該当分野の理解が不足している部分の事前・事後学習
第 13 回	説明変数作成に関する実習	該当分野の理解が不足している部分の事前・事後学習
第 14 回	総合実習	該当分野の理解が不足している部分の事前・事後学習
第 15 回	総合演習	該当分野の理解が不足している部分の事前・事後学習
第 16 回	定期試験	

成績評価方法

評価はレポートの内容（70～80%）と、講義内容に関する定期試験（20～30%）によって評価を行う。

合格のための最低基準は、指定した内容を反映しているレポートを適切に作成できること、および、講義した基本的な内容を理解し、定期試験に関する問いについて適切な解答ができること。

履修上の注意

利用する教室のキャパシティに制限があるため、受講希望者が 30 名を超える場合は、GPA や初回の講義出席状況などを考慮して、人数を選択します。

教科書

適宜指示する。

参考文献

“Introduction to Data Mining”, Pang-Ning Tan, Michael Steinbach, Vipin Kumar, Addison Wesley, 2005

授業名称		担当教員氏名	
ビジネス・アナリティクス		渡邊真治・森田裕之	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
ビジネスデータを扱い、分析を行いながら問題を解決していく上で、必要な経営学・経済学・マーケティングに関する基本的な内容について理解を深める。
到達目標
ビジネスデータを扱い、分析を行いながら問題を解決していく上で、必要な経営学・経済学・マーケティングに関する基本的な内容を理解し、重要な項目について自分の言葉で説明ができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション(渡邊・森田)	
第2回	経済学の基礎1(家計の行動：渡邊)	経済学の理解が不足している内容
第3回	経済学の基礎2(企業の行動：渡邊)	経済学の理解が不足している内容
第4回	経済学の基礎3(政府の行動・政策：渡邊)	経済学の理解が不足している内容
第5回	経済学の基礎4(経済成長とイノベーション：渡邊)	経済学の理解が不足している内容
第6回	経営学の基礎1(経営戦略：渡邊)	経営学の理解が不足している内容
第7回	経営学の基礎2(経営組織：渡邊)	経営学の理解が不足している内容
第8回	経営学の基礎3(財務会計：森田)	経営学の理解が不足している内容
第9回	経営学の基礎4(管理会計：森田)	経営学の理解が不足している内容
第10回	マーケティングの基礎1(マーケティングの概念：森田)	マーケティングの理解が不足している内容
第11回	マーケティングの基礎2(事業機会の選択：森田)	マーケティングの理解が不足している内容
第12回	マーケティングの基礎3(競争分析：森田)	マーケティングの理解が不足している内容
第13回	マーケティングの基礎4(消費者行動：森田)	マーケティングの理解が不足している内容
第14回	総合学習(渡邊・森田)	全体的に理解が不足している内容

第 15 回	総合演習(渡邊・森田)	全体的に理解が不足している内容
第 16 回	定期試験(渡邊・森田)	

成績評価方法
評価はレポートの内容（約 20%）と、講義内容に関する定期試験（約 80%）によって評価を行う。 合格のための最低基準は、指定した内容を反映しているレポートを適切に作成できること、および、講義した基本的な内容を理解し、定期試験に関する問いについて適切な解答ができること。
履修上の注意
適宜指示します
教科書
適宜指示します
参考文献
適宜指示します

授業名称		担当教員氏名	
知識情報システムの開発・運営		青木 茂樹	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 前	選択	講義

授業概要
情報システムを開発・運営する上で必要となる分析、設計、開発、運営などの各プロセスを、現代の情報システム開発・運営において適用されている代表的な方法論および技法に関する講義により修得・理解する。
到達目標
・ 情報システム開発・運営の概要を理解し、説明できる。 ・ 情報システム内で用いられる TCP/IP の基礎的事項を理解し、説明できる。 ・ ネットワークのルーティングについて理解し、説明できる。 ・ 情報セキュリティ設計・運用に関する基本原理について理解し、説明できる。 ・ 情報システムの運営の基本となる事項について理解し、説明できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	情報システム開発・運営の概要	今回の講義で取り扱ったキーワードの調査
第2回	想定する情報システム	前回の講義時に指示したキーワードの調査 今回の講義で取り扱ったキーワードの調査
第3回	既存情報システムの分析	前回の講義時に指示したキーワードの調査 今回の講義で取り扱ったキーワードの調査
第4回	既存情報システムの問題点の分析	前回の講義時に指示したキーワードの調査 今回の講義で取り扱ったキーワードの調査
第5回	仕様の策定	前回の講義時に指示したキーワードの調査 今回の講義で取り扱ったキーワードの調査
第6回	システム設計・開発の概要	前回の講義時に指示したキーワードの調査 今回の講義で取り扱ったキーワードの調査
第7回	ネットワーク設計の基礎 1 (物理構成と論理構成)	前回の講義時に指示したキーワードの調査 今回の講義で取り扱ったキーワードの調査
第8回	ネットワーク設計の基礎 2 (ルーティング)	前回の講義時に指示したキーワードの調査 今回の講義で取り扱ったキーワードの調査
第9回	情報セキュリティ設計の基礎	前回の講義時に指示したキーワードの調査 今回の講義で取り扱ったキーワードの調査
第10回	情報システム設計の基礎	前回の講義時に指示したキーワードの調査 今回の講義で取り扱ったキーワードの調査
第11回	ネットワークと情報システムの開発	前回の講義時に指示したキーワードの調査

		今回の講義で取り扱ったキーワードの調査
第12回	運用管理体制	前回の講義時に指示したキーワードの調査 今回の講義で取り扱ったキーワードの調査
第13回	ネットワークと情報システムの運用管理	前回の講義時に指示したキーワードの調査 今回の講義で取り扱ったキーワードの調査
第14回	情報セキュリティ管理	前回の講義時に指示したキーワードの調査 今回の講義で取り扱ったキーワードの調査
第15回	システムの運用保守	前回の講義時に指示したキーワードの調査 今回の講義で取り扱ったキーワードの調査

成績評価方法
目標の達成度の評価を、レポート及び小テスト 70%、各回の授業で実施するコメントシートの採点結果の累計 30%で行う。単位を習得するためには、 ・ TCP/IP の基礎的事項に関する設問について正しく説明できること ・ ネットワークのルーティングに関する設問について正しく説明できること ・ 情報セキュリティ設計・運用に関する設問について正しく説明できること ・ 情報システムの運営の基礎的な事項を正しく説明できること 以上を達成することが求められる。
履修上の注意
関連科目：情報リテラシー、情報ネットワーク基礎、情報セキュリティ、コンピュータシステム
教科書
使用しない。 各回の授業で資料を配付する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
情報システムの性能と信頼性		菅野正嗣	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
コンピュータシステムやネットワークの集合体である大規模な情報システムの構成と、その性能および信頼性を評価するための基本的な手法を学ぶ科目である。この授業では、情報システムの構成要素、システムの性能指標、待ち行列理論による解析的性能評価、シミュレーションによる性能評価、システムの信頼性評価に関する知識を身に付けることを目指す。
到達目標
情報システムの構成要素、システム性能指標、待ち行列理論による性能評価、シミュレーションによる性能評価、システムの信頼性について基本的な知識について問う問題に答えることができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	導入、本講義で対象とする情報システムとは何か	関連する科目の復習
第2回	情報システムを構成する要素のうち、主にプロセッサ	授業支援システムによる予習・復習
第3回	情報システムを構成するその他の要素であるハードウェア	授業支援システムによる予習・復習
第4回	プロセッサの性能向上手法、仮想記憶、キャッシュメモリ	授業支援システムによる予習・復習
第5回	情報システムの処理形態、分散処理、クライアントサーバ、ピアツーピア	授業支援システムによる予習・復習
第6回	情報システムの性能評価、解析とシミュレーション	授業支援システムによる予習・復習
第7回	待ち行列理論の基礎となる確率分布、ポアソン分布、指数分布	授業支援システムによる予習・復習
第8回	M/M/1 待ち行列の解析	授業支援システムによる予習・復習
第9回	さまざまな待ち行列システムの解析	授業支援システムによる予習・復習
第10回	M/G/1 待ち行列の解析	授業支援システムによる予習・復習
第11回	待ち行列ネットワークの性能評価	授業支援システムによる予習・復習
第12回	通信ネットワークの性能評価	授業支援システムによる予習・復習
第13回	シミュレーションによる性能評価	授業支援システムによる予習・復習

第 14 回	システムの信頼性	授業支援システムによる予習・復習
第 15 回	複雑なシステムの信頼性評価、システムの信頼性向上手法	授業支援システムによる予習・復習
第 16 回	定期試験	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 ・情報システムを構成する基本的な要素について、半分以上の設問に正しく答えられること。 ・情報システムの構成手法に関する基本的な知識について、半分以上の設問に正しく答えられること。 ・待ち行列理論を用いた性能評価に関する基本的な知識について、半分以上の設問に正しく答えられること。 ・シミュレーションによる性能評価に関する基本的な知識について、半分以上の設問に正しく答えられること。 ・システムの信頼性に関する基本的な知識について、半分以上の設問に正しく答えられること。 の 5 点を達成することが求められる。 成績を評価する方法として、期末試験と課題またはミニレポートの提出（15 回）を用いる。成績評価に占める割合は、期末試験（60%）、課題またはミニレポートの提出(40%)である。
履修上の注意
関連科目：知識情報システム学概論、統計学基礎 1、統計学基礎 2、コンピュータシステム、情報ネットワーク基礎
教科書
特に用いないが、毎回の授業で適宜資料を配付する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
情報通信工学概論		太田正哉	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	3	選択	講義

授業概要
本授業はインターネットや携帯電話等の基盤である情報通信工学の基礎を学ぶ科目である。基本的な信号処理やフーリエ変換について理解すること、通信システム、変復調等、デジタル通信システムの基礎について理解することを目指す。
到達目標
・ 基本的なデジタル信号処理の計算ができる。 ・ デジタル通信システムの基本事項について説明できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	デジタル信号処理概論(デジタル信号処理のための数学)	各回毎に指示する
第2回	デジタル信号処理概論(信号とシステムの数学的表現)	各回毎に指示する
第3回	デジタル信号処理概論(インパルス応答とたたみ込み)	各回毎に指示する
第4回	デジタル信号処理概論(z変換)	各回毎に指示する
第5回	デジタル信号処理概論(伝達関数)	各回毎に指示する
第6回	デジタル信号処理概論(離散フーリエ変換)	各回毎に指示する
第7回	デジタル信号処理概論(AD/DA, サンプリング定理)	各回毎に指示する
第8回	デジタル信号処理概論(デジタルフィルタ)	各回毎に指示する
第9回	デジタル信号処理概論(DSP, FPGA)	各回毎に指示する
第10回	デジタル通信システム概論(通信システムの基礎)	
第11回	デジタル通信システム概論(デジタル変復調)	各回毎に指示する
第12回	デジタル通信システム概論(多重化と多元接続)	各回毎に指示する

第 13 回	デジタル通信システム概論（符号理論の基礎）	各回毎に指示する
第 14 回	デジタル通信システム概論（移動通信システム）	各回毎に指示する
第 15 回	デジタル通信システム概論（さまざまな通信システム）	各回毎に指示する
第 16 回	期末試験	

成績評価方法
小テスト，レポート，期末テスト等を通して達成度で評価する．C(合格)となるためには講義中の解説，例題，演習問題の解法等を理解した上で，関連する応用問題を解くことができる能力を身に付けている必要がある．小テスト，中間試験，レポート，期末試験で 60%以上の得点を得ることで授業目標を 6 割以上習得できたとして合格とする．
履修上の注意
（関連科目）コンピュータシステム，情報ネットワーク基礎
教科書
講義時に指示する
参考文献
講義時に指示する

授業名称		担当教員氏名	
分散システム		安倍広多	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 前	選択	講義

授業概要
分散システム構築のために必要な基礎的知識を身につけるための授業である。トランスポート層プロトコル、DNS、ソケット、RPC、シリアライズ、プロセスとマルチスレッド、非同期入出力、サーバクライアントシステム、分散アルゴリズム、仮想化などのトピックについて、提示されるプログラムを動かしたり、自分でコーディングしたりしながら理解する。
到達目標
分散システムの基礎的な概念と関連技術を理解し、簡単なサーバクライアントシステムを実装できることを目標とする。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション	「情報ネットワーク基礎」の学習内容を復習しておくこと。
第2回	インターネット	前回までの内容を復習しておくこと。提示されたソースコードは自分のPCで動作を確認すること。
第3回	プロセス（概論）	前回までの内容を復習しておくこと。提示されたソースコードは自分のPCで動作を確認すること。
第4回	スレッド（概論）	前回までの内容を復習しておくこと。提示されたソースコードは自分のPCで動作を確認すること。
第5回	スレッド（排他制御，同期）	前回までの内容を復習しておくこと。提示されたソースコードは自分のPCで動作を確認すること。
第6回	プロセス間通信（概論）	前回までの内容を復習しておくこと。提示されたソースコードは自分のPCで動作を確認すること。
第7回	プロセス間通信（ソケット，RPC）	前回までの内容を復習しておくこと。提示されたソースコードは自分のPCで動作を確認すること。

第 8 回	プロセス間通信（非同期入出力）	前回までの内容を復習しておくこと。提示されたソースコードは自分の PC で動作を確認すること。
第 9 回	分散システムのアーキテクチャ（概論）	前回までの内容を復習しておくこと。提示されたソースコードは自分の PC で動作を確認すること。
第 10 回	分散システムのアーキテクチャ（応用）	前回までの内容を復習しておくこと。提示されたソースコードは自分の PC で動作を確認すること。
第 11 回	サーバクライアントシステム（概論）	前回までの内容を復習しておくこと。提示されたソースコードは自分の PC で動作を確認すること。
第 12 回	サーバクライアントシステム（応用）	前回までの内容を復習しておくこと。提示されたソースコードは自分の PC で動作を確認すること。
第 13 回	分散アルゴリズム（概論）	前回までの内容を復習しておくこと。提示されたソースコードは自分の PC で動作を確認すること。
第 14 回	分散アルゴリズム（応用）	前回までの内容を復習しておくこと。提示されたソースコードは自分の PC で動作を確認すること。
第 15 回	仮想化	前回までの内容を復習しておくこと。提示されたソースコードは自分の PC で動作を確認すること。

成績評価方法

単位を取得するためには、各回の講義に対してミニッツペーパーを提出し、また授業中に提示される課題を提出すること。成績に占める割合は、ミニッツペーパー30%、課題 70%とする。

履修上の注意

「情報ネットワーク基礎」を履修していること。

教科書

適宜指示する

参考文献

適宜指示する

授業名称		担当教員氏名	
Web システム構築基礎		大西克実、吉田大介	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	選択	演習

授業概要
Web システムとはインターネットを介してサービスを提供するシステムを指す。Web システムをデザインし構築するためには、インターネット、プログラミング言語、Web 技術等への理解が必要となる。本講義では Web システムをデザインし構築するためのさまざまな関連技術について解説し、演習を通してそれらの基礎的な概念や実装技術について理解し、空間情報等の実社会のデータを可視化する演習を通して事例も含めて理解する事を目標とする。
到達目標
本授業では、以下の能力について身につける事を目標とする。 ・ Web システムのデザイン構築に必要なインターネット構成技術について説明できること。 ・ Web システムのデザイン構築に必要な HTML 構成技術についての理解のもとに、それらを用いた初歩的なデザイン構築技能を身につけること ・ プログラミング全般に通じる基礎的な能力の上に、Web システムをデザインし構築するためのプログラミング能力を身につけること。 ・ 空間情報等の実社会のデータを可視化する演習を通して、高度な利用を容易にするための技術を理解すること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	Web システムを構成する技術 (大西克実・吉田大介)	全体を通して各構成技術の関連を理解すること
第 2 回	インターネットを構成する技術(基礎概念) (大西克実)	TCP/IP の基礎的な概念について理解すること
第 3 回	インターネットを構成する技術(プロトコル) (大西克実)	DNS や HTTP など Web システムのための技術について理解すること
第 4 回	Web システムの歴史と基礎 (大西克実)	Web システムの展開と基礎的な記述について理解すること
第 5 回	Web システムの応用 (大西克実)	近年の Web システムの状況と応用的な記述について理解すること
第 6 回	Web システム用言語の概要 (大西克実)	Web システム用言語の特徴や利用方法について理解すること
第 7 回	Web システム用言語の基礎 (大西克実)	Web システム用言語における基礎的記述について理解すること

第 8 回	Web システム用言語の展開 (大西克実)	Web システム用言語における制御構造・関数について理解すること
第 9 回	Web システム用言語による Web サービス基礎 (大西克実)	Web システム言語による静的な構築について理解すること
第 10 回	Web システム用言語による Web サービス応用(動的生成) (大西克実)	動的な生成を利用する Web システムについて理解すること
第 11 回	Web システム用言語による Web サービス応用(外部参照) (大西克実)	外部参照を利用する Web システムについて理解すること
第 12 回	データの可視化技術：Web マッピング(データ形式) (吉田大介)	XML や JSON などの Web サービスでデータを扱う形式について理解すること
第 13 回	データの可視化技術：Web マッピング (HTML5 基礎) (吉田大介)	HTML5 を構成する技術について基礎的な特徴を理解すること
第 14 回	データの可視化技術：Web マッピング(地図アプリの開発) (吉田大介)	HTML5 を構成する技術について理解を深めること
第 15 回	全体のまとめ (大西克実・吉田大介)	Web システムのデザイン構築に必要な技術について要点を振り返ること

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、到達目標に記載の点を達成することが求められる。 達成度を評価する方法として、課題への取り組みを中心に評価し、適宜小テストを実施する。 成績評価の割合は、課題(70%)、小テスト(30%)、とする。
履修上の注意
授業中に適宜指示する。
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
空間情報システム		永田 好克、吉田 大介	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2 単位	2 後	選択	講義

授業概要
現代社会に不可欠な基盤である空間情報のしくみを理解し、活用をめざした素養を培う科目である。 地球空間における座標値の決定についての基本的な考え方と歴史的な経緯を理解することは、さまざまな研究フィールドにおける位置の記録を正確に読み取る上で必須である。数多くの Web サービスやアプリケーションにおけるリアルタイムな位置情報活用を可能にした衛星測位システムについて、データを正しく活用するための基礎理解は、単に利用者としてだけでなく新しいシステムを考案する立場として重要である。授業では、空間情報システムの研究での様々な活用事例や、防災など市民社会に直接働きかける場面での活用事例などについても理解を深める。また、空間情報の取得を実習し、取得したデータの応用事例について考察ならびに考案することで、応用的に空間情報を活用できる素養を習得する。
到達目標
本授業では、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 現代の測地座標系について、歴史的経緯を含めて説明できること。 2. GNSS 測位の基礎的なしくみと留意点について、利用目的に則して説明できること。 3. 空間情報を記述するデータ形式について、代表的な形式の要点を説明できること。 4. 基盤的な空間情報の蓄積を促進する仕組みについて、取り組み事例を説明できること。 5. 空間情報と他のコンテンツや研究資料との連携について、具体的な起案に結びつけること。 6. 空間情報の流通におけるセキュリティ確保について、配慮できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	回転楕円体と測地座標系（永田）	初出の用語についての理解を深めること
第2回	測量の基準点（永田）	身近な基準点について探索してみること
第3回	地図投影法（永田）	投影法の違いによる描写形状の差異について身近な資料などで確認すること
第4回	GNSS 測位の基礎（永田）	GNSS のしくみに起因するデータ利用の可否について理解を深めておくこと
第5回	空間情報の取得(1)：取得のための機器（永田・吉田）	取得実習に備えて機器の操作方法について習熟しておくこと
第6回	空間情報の取得(2)：取得実習（永田・吉田）	期待通りのデータを取得できているかどうか確認しデータを保存しておくこと
第7回	空間情報のデータ記述と活用技術（永田）	空間情報の流通の基礎となるデータ形式について理解を深めること

第8回	空間情報の光と影（永田）	空間情報の流通がもたらす利点と欠点について理解を深めること
第9回	空間情報を活用した研究（永田）	さまざまな研究への活用について視野を広めること
第10回	空間情報の活用事例(1)：オープンデータの活用基礎（吉田）	オープンデータを活用した様々な取り組みについて調べておくこと
第11回	空間情報の活用事例(2)：ドローンの活用基礎（吉田）	無人機（ドローン）を活用した国内外の様々な取り組みについて調べておくこと
第12回	空間情報の活用事例(3)：住民参加型データの活用基礎（吉田）	授業で解説する事例以外の取り組みについて調べること
第13回	空間情報とコンテンツの融合(1)：提案と試作（永田・吉田）	空間情報を活用したコンテンツの提案と作成に取り組むこと
第14回	空間情報とコンテンツの融合(2)：評価と工夫（永田・吉田）	提案し作成したコンテンツの完成度を高めるための工夫について考察すること
第15回	全体のまとめ（永田・吉田）	空間情報にかかわる基礎知識や応用技術について要点をふりかえること

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、到達目標に記載の6点を達成することが求められる。 達成度を評価する方法として、適宜小テストを実施する。また課題への取り組みや議論への参加についても評価を行う。 成績評価の割合は、小テスト(60%)、課題(40%)とする。
履修上の注意
特になし
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
材料情報学		上杉徳昭	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
材料情報学とは何か、その基盤技術と課題を学ぶ科目である。この授業では、ニューラルネットワークを中心とした、各種の機械学習手法を学び、材料情報学における機械学習の具体例を交えて、機械学習の実際を学ぶと共に、材料情報学で用いる基本的な特微量として、金属材料を中心とした材料の物理的性質、化学的性質、機械的性質、製造プロセス、組織観察について、基本的な知識を得る。
到達目標
材料情報学についての基本的な知識を問う問題に答えることができると共に、コンピュータを使った機械学習のツールを自ら使用し、材料情報学の課題を解決できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	材料情報学への誘い	配布資料を予習し、課題を提出すること。
第2回	機械学習の概論	配布資料を予習し、課題を提出すること。
第3回	材料の特微量1 物理的性質	配布資料を予習し、課題を提出すること。
第4回	材料の特微量2 化学的性質	配布資料を予習し、課題を提出すること。
第5回	材料の特微量3 機械的性質	配布資料を予習し、課題を提出すること。
第6回	材料の特微量4 製造プロセス	配布資料を予習し、課題を提出すること。
第7回	回帰分析の概論	配布資料を予習し、課題を提出すること。
第8回	材料情報学における回帰分析の演習課題	配布資料を予習し、演習課題を提出すること。
第9回	ロジスティック回帰の概論	配布資料を予習し、課題を提出すること。
第10回	材料情報学におけるロジスティック回帰の演習課題	配布資料を予習し、演習課題を提出すること。
第11回	ニューラルネットワークの概論	配布資料を予習し、課題を提出すること。
第12回	材料情報学におけるニューラルネットワークの演習課題	配布資料を予習し、演習課題を提出すること。
第13回	材料の特微量5 組織観察	配布資料を予習し、課題を提出すること。
第14回	深層学習の概論	配布資料を予習し、課題を提出すること。
第15回	材料情報学における深層学習の演習課題	配布資料を予習し、演習課題を提出すること。
第16回	定期試験	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。合格（単位修得）のためには、 ・材料の物理的性質、化学的性質、機械的性質、製造プロセス、組織観察について、半分以上の設問に正しく答えられること。 ・機械学習に関する基本的な知識について、半分以上の設問に正しく答えられること。 ・機械学習のツールを使用し、材料情報学の演習課題の半分以上を解くことができること。 を達成することが求められる。 成績を評価する方法として、期末試験と課題または演習課題の提出（15 回）を用いる。成績評価に占める割合は、期末試験（40%）、課題または演習課題(60%)である。
履修上の注意
関連科目：データ科学、AI プログラミング、データマイニング、人工知能 A、機械学習
教科書
毎回の授業前に資料を配付する。
参考文献
翻訳マテリアルズインフォマティクス:探索と設計.TurabLookman,FrancisJ.Alexander,KrishnaRajan 原書編,石井一夫翻訳.エヌ・ティー・エス,2017.

授業名称		担当教員氏名	
人工知能 A		中島智晴	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 前	選択	講義

授業概要
人工知能の研究では人間の知識をどのようにして計算機に埋め込むことが重要なテーマの一つであるが、それを経験データや自分自身の経験から計算機が自ら学習する方法もある。本授業では、人工知能におけるボトムアップ型手法について講義し、知識をつけることを目的とする。座学による手法の理解とともにグループワークを通じて授業の理解を促進させる。
到達目標
人工知能におけるトップダウンアプローチとボトムダウンアプローチの違いが理解できる ニューラルネットワークの基礎とその応用が理解できる ファジィ理論とその応用が理解できる メタヒューリスティックスとその応用が理解できる

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション	
第2回	ニューラルネットワーク概要	次のキーワードを調べておく：機械学習，パーセプトロン
第3回	階層型ニューラルネットワーク	次のキーワードを調べておく：誤差逆伝搬学習
第4回	ニューラルネットワークによる回帰分析	次のキーワードを調べておく：教師信号
第5回	ニューラルネットワークによるパターン認識	次のキーワードを調べておく：学習用データと評価用データ
第6回	全結合型ニューラルネットワーク	次のキーワードを調べておく：ボルツマンマシン
第7回	ファジィ理論概要	次のキーワードを調べておく：メンバシップ関数
第8回	ファジィ制御	次のキーワードを調べておく：ファジィ推論
第9回	ファジィパターン認識	次のキーワードを調べておく：ファジィ分割
第10回	メタヒューリスティックス概要	次のキーワードを調べておく：目的関数の最適化
第11回	模擬焼きなまし法	次のキーワードを調べておく：ボルツマン選択
第12回	進化計算その1	次のキーワードを調べておく：遺伝的アルゴリズム

第 13 回	進化計算その 2	次のキーワードを調べておく：蛍アルゴリズム
第 14 回	グループワーク概要	授業中に提示されたテーマに沿ってグループで取り組むこと
第 15 回	グループワーク発表	授業中に提示されたテーマに沿ってグループで取り組むこと
第 16 回	期末テスト	

成績評価方法

到達目標の達成度で成績評価を行う。単位の取得は、授業内の小テスト(20%)とグループワーク(20%), テスト (60%) に基づく評価で判断される。

履修上の注意

適宜指示します。

教科書

特になし

参考文献

適宜指示します。

授業名称		担当教員氏名	
人工知能 B		瀬田和久	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 前	選択	講義

授業概要
人工知能の基本的な視点と考え方を学ぶ科目である。この授業では、論理指向型 AI（トップダウン型手法）について講義し、ill-defined な問題を対象とした問題解決スキームとしてのルールベースシステム、一般問題解決器や知識モデリングに関する基本的な知識、技能を得ることを目指す。
到達目標
ill-defined な問題を対象とした問題解決スキームとしてのルールベースシステム、一般問題解決器や知識モデリングについて問う問題について答えることができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	人工知能システムの開発例	配布プリントを予習・復習すること。
第 2 回	ルールベースシステムの基礎	配布プリントを予習・復習すること。
第 3 回	ルールベースシステムの仕組み	配布プリントを予習・復習すること。
第 4 回	一般問題解決器 GPS の概要	配布プリントを予習・復習すること。
第 5 回	一般問題解決器 GPS の詳細	配布プリントを予習・復習すること。
第 6 回	知識表現	配布プリントを予習・復習すること。
第 7 回	中間試験およびこれまでの振り返り	
第 8 回	オントロジーの基礎 (is-a, part-of)	配布プリントを予習・復習すること。
第 9 回	オントロジーの基礎 (ロール概念の概要)	配布プリントを予習・復習すること。
第 10 回	オントロジーの基礎 (ロール概念の詳細)	配布プリントを予習・復習すること。
第 11 回	オントロジーの基礎 (行為概念の基礎)	配布プリントを予習・復習すること。
第 12 回	オントロジーの基礎 (行為概念の詳細)	配布プリントを予習・復習すること。
第 13 回	オントロジーの基礎 (関係概念)	配布プリントを予習・復習すること。
第 14 回	スポーツオントロジーの構築	配布プリントを予習・復習すること。
第 15 回	インスタンスモデルの構築	配布プリントを予習・復習すること。
第 16 回	定期試験	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 ・人工知能の基本的な方法論について、半分以上の設問に正しく答えられること。 ・知識表現に関する基本的な知識について、半分以上の設問に正しく答えられること。 ・ill-defined な問題を対象とした問題解決スキームとしての一般問題解決器やルールベースシステムに関する基本的な知識について、半分以上の設問に正しく答えられること。 ・知識モデリングに関する基本的な知識について、半分以上の設問に正しく答えられること。また、知識モデリングに関する基本的課題の 60%以上に正しくこと得られること。 成績を評価する方法として、レポート課題，中間試験と期末試験を用いる。成績評価に占める割合は、レポート課題(20%)，中間試験(40%)，期末試験(40%)である。
履修上の注意
関連科目：人工知能 A
教科書
毎回の授業で資料を配付する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
ヒューマンコンピュータインタラクション		林佑樹	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 前	選択	講義

授業概要
ヒューマンコンピュータインタラクションについて人間工学、感性工学などの観点から学習し、さまざまな種類のインタフェースの特徴や具体例、ヒューマンインタフェースの設計と評価手法に関する知識を修得することを目指す。
到達目標
(1) ヒューマンコンピュータインタラクションについて、人間工学、感性工学、ユーザインタフェースなどの観点からその特徴を説明できる。 (2) 代表的なインタフェースに関する特徴や具体例を説明できる。 (3) ユーザインタフェースの評価方法を説明できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	ヒューマンコンピュータインタラクションとは何か	配布資料を復習する。 ショートレポート課題に取り組む。
第2回	人間工学と感性工学	配布資料を復習する。 ショートレポート課題に取り組む。
第3回	人間の基本特性	配布資料を復習する。 ショートレポート課題に取り組む。
第4回	情報処理システムとしての人間	配布資料を復習する。 ショートレポート課題に取り組む。
第5回	ヒューマンインタフェースデバイス	配布資料を復習する。 ショートレポート課題に取り組む。
第6回	代表的なインタフェースを用いた対話環境	配布資料を復習する。 ショートレポート課題に取り組む。
第7回	情報の可視化技術	配布資料を復習する。 ショートレポート課題に取り組む。
第8回	自然なコミュニケーションのためのインタフェース	配布資料を復習する。 ショートレポート課題に取り組む。
第9回	仮想現実と拡張現実	配布資料を復習する。 ショートレポート課題に取り組む。
第10回	マルチモーダルインタフェース	配布資料を復習する。 ショートレポート課題に取り組む。
第11回	対話型システムのデザイン	配布資料を復習する。
		ショートレポート課題に取り組む。

第12回	協調的インタラクションの支援手法	配布資料を復習する。 ショートレポート課題に取り組む。
第13回	ユーザインタフェースの評価手法（１）： 専門家による評価	配布資料を復習する。 ショートレポート課題に取り組む。
第14回	ユーザインタフェースの評価手法（２）： ユーザによる評価	配布資料を復習する。 ショートレポート課題に取り組む。
第15回	全体のまとめ	期末試験の準備
第16回	期末試験	

成績評価方法

到達目標を満たしているかどうかを判断するために、以下の２項目の達成度で評価を行う。

1. ショートレポート課題：50%

2. 期末試験：50%

単位を取得するためには、上記項目を総計して６割以上の得点を達成することが求められる。

履修上の注意

関連科目：知識情報システム学演習 2、[Web システム構築基礎](#)、[心理学概論](#)、[人間システムとサステイナビリティ](#)

教科書

毎回の授業で資料を配付する。

参考文献

岡田謙一他(著)「ヒューマンコンピュータインタラクション」(オーム社)

椎尾一郎(著)「ヒューマンコンピュータインタラクション入門」(サイエンス社)

黒須正明, 暦本純一(著)「コンピュータと人間の接点」(放送大学教育振興会)

D.A. ノーマン(著)、岡本明他(訳)「誰のためのデザイン? — 認知科学者のデザイン原論」(新曜社)

授業名称		担当教員氏名	
教育情報学		小島篤博	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
教育情報システムを設計、運用する上で必要となる基礎的な教育工学の知識を説明するとともに、これまで開発されてきた様々なシステムを例として、教育情報システムの特性や要件、e ラーニング、ユーザ・インタフェース、データ分析・評価等の手法を習得する。
到達目標
教育情報システムの構成、運用、評価等の方法論について、基本的な知識について問う問題に答えることができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	講義全体の概要、システムとは	授業の中で指示する。
第 2 回	学習理論とシステム設計	授業の中で指示する。
第 3 回	計算機の歴史	授業の中で指示する。
第 4 回	ユーザインタフェース	授業の中で指示する。
第 5 回	グラフィックス	授業の中で指示する。
第 6 回	学習管理システム(Moodle の概要)	授業の中で指示する。
第 7 回	学習管理システム(Moodle の構成と機能)	授業の中で指示する。
第 8 回	学習管理システム(Moodle の内部構造)	授業の中で指示する。
第 9 回	情報教育システム	授業の中で指示する。
第 10 回	仮想現実とその応用	授業の中で指示する。
第 11 回	スーパーコンピュータ	授業の中で指示する。
第 12 回	授業支援のための技術	授業の中で指示する。
第 13 回	教育情報システムの標準規格	授業の中で指示する。
第 14 回	科学教育の現状	授業の中で指示する。
第 15 回	全体のまとめ	期末試験の準備
第 16 回	期末試験	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには以下が求められる。 ・授業で取り上げたさまざまな情報システムに関する設問に正しく答えられること。 ・特に学習管理システム、教育情報システムの構成、運用の手法について代表的な方式を挙げ、説明できること。 成績を評価する方法として、期末試験と課題の提出を用いる。成績評価に占める割合は、期末試験(40%)、レポート等の課題(40%)、各回のワークシート(20%)である。
履修上の注意
適宜指示する。
教科書
毎回の授業で資料を配付する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
機械学習		柳本 豪一	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 後	選択	講義

授業概要
人工知能システムの要素技術である機械学習の代表的な手法を学ぶ科目である。この授業では、機械学習のモデルや学習手法を数理的に学ぶことによって、基本的な機械学習手法の適用可能範囲を理解する。また、授業中に適宜課題に取り組むことで、実際のデータに応用するための機械学習の適用手法を修得する。
到達目標
・機械学習を利用した基本的なデータ解析を行うことができるようになる ・新しい機械学習のアルゴリズムについて数理的に理解できるようになる

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	機械学習のための数学基礎(微積分)	オンライン資料による事前学習と課題
第2回	機械学習のための数学基礎(線形代数)	オンライン資料による事前学習と課題
第3回	機械学習のための数学基礎(確率論)	オンライン資料による事前学習と課題
第4回	機械学習のための数学基礎(情報理論)	オンライン資料による事前学習と課題
第5回	回帰	教科書 6.4 による事前学習と課題。
第6回	パーセプトロンの基礎	教科書 7.1 による事前学習と課題
第7回	ニューラルネットワーク(順伝搬)	教科書 7.1 による事前学習と課題とオンライン資料
第8回	ニューラルネットワーク(逆伝搬)	教科書 7.2 による事前学習と課題
第9回	サポートベクトルマシン(定式化)	教科書 8.1 による事前学習と課題
第10回	サポートベクトルマシン(線形分離不可能な場合への拡張)	教科書 8.2 による事前学習と課題
第11回	サポートベクトルマシン(カーネルトリック)	教科書 8.3 による事前学習と課題
第12回	サポートベクトルマシンの改良	教科書 8.4 と 8.5 による事前学習と課題
第13回	決定木	教科書 11.1 と 11.2 による事前学習と課題
第14回	アダブースト	教科書 11.4 による事前学習と課題
第15回	ランダムフォレスト	教科書 11.5 による事前学習と課題

第16回	テスト	
成績評価方法		
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 ・数理的なデータ解析に関する手法について、設問の 6 割以上に正しく回答できること ・機械学習のアルゴリズムの数理的な検討について、設問の 6 割以上に正しく回答できること の 2 点を達成することが求められる。 成績を評価する方法として、期末試験とレポートを用いる。成績評価に占める割合は、期末試験（80%）、レポート(20%)である。		
履修上の注意		
関連科目:線形代数 1,2A、統計学基礎 1,2、人工知能 A, B、パターン認識		
教科書		
平井有三: はじめてのパターン認識, 森北出版株式会社 毎回の授業でも資料を配布する。		
参考文献		
授業中に適宜紹介する。		

授業名称		担当教員氏名	
情報検索システム論		村上晴美	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
ComputerScience（計算機科学／情報工学）における「情報検索と検索エンジン」に関する基礎的な知識の修得を目標とする。検索エンジン及び検索モデルの実現に関する内容を中心に講義する。
到達目標
・ 情報検索と検索エンジンに関する基礎的な知識を説明できる。 ・ 情報検索に関する卒業研究を行うために必要な、基礎的な知識を習得する。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	情報検索とは、検索エンジンと情報検索	配布資料を参考にして、参考文献等を読む
第2回	検索エンジンのアーキテクチャ	配布資料を参考にして、参考文献等を読む
第3回	クロールとフィード	配布資料を参考にして、参考文献等を読む
第4回	テキスト処理	配布資料を参考にして、参考文献等を読む
第5回	インデックスとランキング	配布資料を参考にして、参考文献等を読む
第6回	クエリとインデックス	配布資料を参考にして、参考文献等を読む
第7回	検索モデル(1) (tf-idf、ブーリアンモデル)	配布資料を参考にして、参考文献等を読む
第8回	検索モデル(2) (ベクトル空間モデル、確率モデル)	配布資料を参考にして、参考文献等を読む
第9回	検索モデル(3) (言語モデル、機械学習と情報検索)	配布資料を参考にして、参考文献等を読む
第10回	検索エンジンの評価(1) (適合率と再現率)	配布資料を参考にして、参考文献等を読む
第11回	検索エンジンの評価(2) (平均精度、テストコレクション)	配布資料を参考にして、参考文献等を読む
第12回	分類	配布資料を参考にして、参考文献等を読む
第13回	クラスタリング	配布資料を参考にして、参考文献等を読む
第14回	ソーシャルサーチ	配布資料を参考にして、参考文献等を読む

第 15 回	応用例	配布資料を参考にして、参考文献等を読む
第 16 回	まとめ	配布資料を参考にして、参考文献等を読む

成績評価方法	
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、検索エンジンを中心とする情報検索に関する基礎的な知識を説明できることを達成の目標とする。具体的には、情報検索と検索エンジンの概要、検索エンジンのアーキテクチャ、インデックスとランキング、検索モデル、検索エンジンの評価等である。レポート（中間レポート 50 点と最終レポート 50 点）で評価し、60 点以上を合格とする。	
履修上の注意	
特になし	
教科書	
資料を配付する。	
参考文献	
Croftetal.:SearchEngines:InformationRetrievalinPractice,AddisonWesley	

授業名称		担当教員氏名	
AI プログラミング		楠木祥文	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
知識情報システム学演習 1 などで習得したプログラミング技能の向上と、AI に関連する講義で習得した数学的知識の深化を目的として、プログラミングを AI 開発に活用するための技術的知識の習得を目標とする。座学で学習した線形代数や確率統計のうち特に AI 開発と関連のある内容についてプログラミングの観点から見つめ直し、データ分析や最適化、機械学習におけるモデル学習などといった AI 開発に役立つスキルを学習する。コンピュータを用いて実際にプログラミングをしながら授業を進めていく。
到達目標
・ AI 技術と関連の深い数学知識をプログラミング的観点から理解できる ・ 単純な AI 技術であればライブラリを使わずに自分でプログラミングできる ・ ライブラリを使いながら複雑で規模が大きい AI 技術をプログラミングできる

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	イントロダクション	
第 2 回	線形代数プログラミング(線形モデルと内積)	事前学習：線形モデルと内積
第 3 回	線形代数プログラミング(固有値と固有ベクトル)	事前学習：固有値と固有ベクトル
第 4 回	線形代数プログラミング(回転行列)	事前学習：回転行列
第 5 回	確率統計プログラミング(乱数と正規分布)	事前学習：乱数と正規分布
第 6 回	確率統計プログラミング(条件付き確率とベイズの法則)	事前学習：条件付き確率とベイズの法則
第 7 回	確率統計プログラミング(統計的検定)	事前学習：統計的検定
第 8 回	データ解析プログラミング(主成分分析)	事前学習：主成分分析
第 9 回	データ解析プログラミング(線形回帰分析)	事前学習：線形回帰分析
第 10 回	データ解析プログラミング(線形判別分析)	事前学習：線形判別分析
第 11 回	最適化プログラミング(勾配法)	事前学習：勾配法
第 12 回	最適化プログラミング(模擬焼きなまし法)	事前学習：模擬焼きなまし法
第 13 回	知識獲得プログラミング	事前学習：決定木学習
第 14 回	エージェントプログラミング	事前学習：強化学習
第 15 回	マルチエージェントプログラミング	事前学習：マルチエージェント

成績評価方法
AI 技術に関連した数学的知識やプログラミング能力の獲得についての達成度で成績評価を行う。テーマ毎に提示される演習課題やレポート課題を通じて到達目標の達成度を測る。課題評価が成績評価の100%を占める。基礎的な AI 技術を説明できること、それをプログラミングによって実現できることが合格のための最低基準となる。
履修上の注意
関連科目：知識情報システム学演習 1
教科書
授業中に資料を配付する。
参考文献
なし

授業名称		担当教員氏名	
ヘルスケアシステム		真嶋由貴恵、榎田聖子	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
・ヘルスケアシステムに関する実務的な基礎知識や基礎技術力を習得するための基礎科目である。 ・医療情勢の変化を踏まえて、ヘルスケア分野における情報通信技術の活用方法や健康データの二次利用に関する今後の課題の考察に取り組む。 ・ヘルスケア分野で稼働する情報システムの企画立案、開発・運用保守を行う力を育成するために、授業では以下のことを行う。 ・授業はアクティブ・ラーニングを主体とし、講義だけでなく、知識の確認テスト、プレゼンテーションおよびディスカッション、自己学習（予習・復習・Homework）等によって構成する。 ・「医療と情報システム」に関する最新のトピックについて、毎回授業の最初に発表を行う。
到達目標
・我が国における情報化施策および医療情勢の経緯と現状について知り、効果的でかつ質の保証された高度なヘルスケア（保健・医療・福祉）サービスを提供するための情報通信技術の必要性および活用方法について理解する。 ・現在のヘルスケアに関する利用者のニーズや、抱えている課題（対象者のプライバシーならびに個人情報保護、健康データの一元化と二次利用方法等）に対して、情報化技術の発展を踏まえ、具体的な解決方法や今後の展望について創造できる能力を養う。 ・ヘルスケア分野で稼働する情報システムの企画立案、開発・運用保守を行うためにヘルスケアシステムに関する実務的な基礎知識や基礎技術力を習得する。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	授業ガイダンス, 医療情報担当者(医療情報技師とは), 日本の抱える課題(真嶋): 少子高齢社会における課題と取り組み	講義内容の復習をする。
第2回	高度情報通信ネットワーク社会形成に関する政策(真嶋): 日本の情報化と保健医療分野の情報化の変遷と課題	講義内容を復習し、保健医療分野の情報化に関する課題に取り組む。
第3回	ヘルスケア情報の特性とシステム(榎田): ヘルスケア情報の特性, ヘルスケア分野で利用される情報通信技術における発展の経緯, 活用方法	ヘルスケアを支えるシステムの課題についてグループワークを行う, 発表資料作成に取り組む。講義内容の復習をする。
第4回	テスト(1回目), 医療を支える情報システムの課題: グループ発表, ヘルスケア情報倫理(榎田): ヘルスケア情報倫理の基本的原則, 医療情報電子化の基本条件, ヘルスケア情報の二次利用	グループ発表に対するピア評価を行う。講義内容を復習する。
第5回	ヘルスケアシステムの設計条件と安全管理:(真嶋): 医療職の職務, 電子カルテ導入状況と課題	講義内容を復習する。
第6回	ヘルスケアシステムの構成と機能(現状・課題): グループワーク (真嶋)	発表資料作成に取り組む。

第7回	ヘルスケアシステムの構成と機能(解決策)：グループ発表（真嶋）	グループ発表に対するピア評価を行う。
第8回	ヘルスケアシステムの導入と運用(栴田)：ヘルスケアシステム導入戦略と運用上の課題	講義内容を復習する。
第9回	病院情報システムの評価と改善(栴田)：ヘルスケアシステムの評価方法と改善策	講義内容を復習する。
第10回	テスト(2回目)、ヘルスケア情報の標準化(栴田)：標準化とは、医療情報分野の代表的な標準規格、医療情報システムにおける標準マスター	講義内容を復習する。
第11回	「医療のAI化」の是非(真嶋)：ディベート準備(肯定派、否定派、審判)のグループワーク	ディベートの準備を行う。
第12回	「医療のAI化」の是非・活用(真嶋)：肯定派・否定派・審判に分かれてディベート	グループ発表に対するピア評価を行う。 中間レポートを作成し提出する。
第13回	ヘルスケアシステムの未来と課題(課題設定)(真嶋・栴田)：課題設定に向けたグループワーク	課題設定に必要な資料を収集する。
第14回	ヘルスケアシステムの未来と課題(解決策の検討、発表準備)(真嶋・栴田)：解決策の立案に向けたグループワーク	発表資料作成に取り組む。
第15回	ヘルスケアシステムの未来と課題(発表)(真嶋・栴田)：グループ発表	グループ発表に対するピア評価を行う。 最終レポートを作成し提出する。

成績評価方法

- ・確認テスト：40%
- ・今日のニュース・課題（授業ポートフォリオ，Homework）：30%
- ・授業・グループワークへの参加度・プレゼン（アクティブ度）：10%
- ・中間レポート 10%
- ・最終レポート 10%

履修上の注意

- ・関連科目：ヘルスケアサービス
- ・講義内容は、医療情報技師能力検定試験（医療情報システム編）を基準に構成している。

教科書

・新版医療情報第6版 医療情報システム編：日本医療情報学会医療情報技師育成部会編集 篠原出版新社，2020

参考文献

- ・新版医療情報第6版 医学・医療編：日本医療情報学会医療情報技師育成部会編集 篠原出版新社，2019
- ・新版医療情報第6版 情報処理技術編：日本医療情報学会医療情報技師育成部会編集 篠原出版新社，2019
- ・第4版医療情報サブノート：日本医療情報学会医療情報技師育成部会編集 篠原出版新社，2017
- ・医療情報技師能力検定試験過去問題・解答集：南江堂

授業名称		担当教員氏名	
ヘルスケアサービス		梶田聖子, 真嶋由貴恵	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
ヘルスケア専門職との円滑なコミュニケーションを図るための基礎的な科目である。ヘルスケア分野に関する一般的知識、保健医療福祉制度、ヘルスケアサービスで活用される重要な理論(行動変容モデル等)に関する基本的知識を習得し、未来のヘルスケアサービスの在り方を考え実践できる力を養うために以下のことを行う。 ・授業はアクティブ・ラーニングを主体とし、講義だけでなく、知識の確認テスト、プレゼンテーションおよびディスカッション、ディベート、自己学習（予習・復習・Homework）等によって構成する。 ・「医療」に関する最新のトピックについて、毎回授業の最初に発表し討議を行う。
到達目標
・ヘルスケア専門職との円滑なコミュニケーションができる(ヘルスケア分野と情報システム分野の橋渡しができる)ように、ヘルスケア（保健・医療・福祉）分野に関する一般的知識、保健医療福祉制度、ヘルスケアサービスで活用される重要な理論(行動変容モデル等)、ヘルスケアサービスに関する基本的知識を理解、説明できる。 ・ヘルスケアサービスの概要と諸外国との比較をとおして、日本および大阪府の課題を見出すことができる。 ・ヘルスケアの基本的知識として必要な基本的な人体の構造と臓器機能とその病態病理、および検査・診断・治療・処置・臨床看護・健康の保持増進について理解、説明できる。 ・今後のヘルスケアサービスの在り方について考え、ひとつでも実践することができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	授業ガイダンス, 社会における医療の役割と課題(真嶋): 世界の医療・健康の概念, 我が国の健康課題と健康推進政策, 医療の現状	講義内容を復習する。
第2回	医の倫理(梶田): 医の倫理の変遷, 患者が参画する医療	講義内容を復習する。
第3回	社会保障と保健医療制度(梶田): 地域包括ケア, 日本の社会保障・保健医療制度の特徴と種類, 課題	講義内容を復習する。
第4回	テスト(1回目), 医療管理(医療安全管理)(梶田): 医療機関の情報管理者, 医療の質評価に関する理論, 医療安全の取り組み	講義内容を復習する。
第5回	医療プロセスとICT, AIの活用(真嶋): 診断過程, 診療プロセス, EBMとガイドライン,	講義内容を復習する。

	医療プロセスにおける ICT・AI 活用例	
第 6 回	医療・生命倫理(安楽死・尊厳死など)(梶田)：ディベート(肯定派，否定派，審判)準備のグループワーク	ディベートの準備を行う。
第 7 回	医療・生命倫理(梶田)：ディベート	ディベートに対するピア評価を行う。 これまでの講義内容を復習する。
第 8 回	テスト(2 回目)，医学・薬学・看護学(臨床看護)(真嶋)：看護の役割，法制度，教育	講義内容を復習する。
第 9 回	医学・薬学・看護学(身体計測・バイタルサイン)(真嶋)：BMI，バイタルサインの計測方法とデータの利用	講義内容を復習する。
第 10 回	社会におけるヘルスケアサービス(梶田)：フォーマル・インフォーマルサービス事例	講義内容を復習する。
第 11 回	疾患予防・健康の増進(疾患の理解)(梶田)：生活習慣病対策，行動変容モデルと活用例	講義内容を復習する。
第 12 回	疾患予防・健康の増進(疾患予防)(梶田)：「大学生の生活習慣病予防対策」グループワーク	発表資料作成に取り組む。中間レポートを作成し提出する。
第 13 回	疾病予防・健康の増進(健康増進)(梶田)：グループ発表	グループ発表に対するピア評価を行う。 これまでの授業内容を復習する。
第 14 回	テスト(3 回目)，ヘルスケアサービスの課題(真嶋・梶田)：日本・大阪府の課題設定に向けたグループワーク	発表資料作成に取り組む。
第 15 回	未来のヘルスケアサービスのあり方(真嶋・梶田)：グループ発表	グループ発表に対するピア評価を行う。 最終レポートを作成し提出する。

成績評価方法

- ・確認テスト：40%
- ・授業・グループワーク・ディベートへの参加度（アクティブ度，Homework）：30%
- ・今日のニュース・授業ポートフォリオ等の課題：10%
- ・中間レポート課題：10%
- ・最終レポート課題：10%

履修上の注意

- ・講義内容は，医療情報技師能力検定試験（医学・医療編）を基準に構成している。
- ・関連科目：ヘルスケアシステム

教科書

- ・新版医療情報第 6 版 医学・医療編：日本医療情報学会医療情報技師育成部会編集 篠原出版新社，2019

参考文献

- ・標準保健師講座 公衆衛生看護技術：中村裕美子，真嶋由貴恵，他，医学書院，2018
- ・第4版医療情報サブノート：日本医療情報学会医療情報技師育成部会編集 篠原出版新社，2017
- ・新版医療情報第6版 医療情報システム編：日本医療情報学会医療情報技師育成部会編集 篠原出版新社，2020
- ・新版医療情報第6版 情報処理技術編：日本医療情報学会医療情報技師育成部会編集 篠原出版新社，2019

授業名称		担当教員氏名	
PBL演習（ビジネス・プレディクション）		森田 裕之、渡邊 真治	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3前	選択	演習

授業概要
PBLプログラム（ビジネス・プレディクション）の最終科目として位置づけられている。 実際のPOSデータを用いながら、現場で発生している問題を確認し、解決すべき方法について明らかにしながら、現実的なソリューションを提案する。具体的には、数人のグループで、POSデータの存在する店舗でのインターンを行いながら、問題の識別、および解決方法について考察し、データ分析を通じて、その問題の本質を見極めながら、ソリューションを提案するのに必要な分析を行う。 なお、PBLプログラム(ビジネスプレディクション)はSDG8「働きがいも経済成長も」、SDG9「産業と技術革新の基盤をつくろう」と対応している。
到達目標
PBLプログラム（ビジネス・プレディクション）は、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. POSデータから基礎分析を行い、疑問点を見つけ、経営課題を発見することができること。 2. 発見した経営課題に対して、POSデータのマイニングで発見すべきポイントを明確化し、実際にマイニングすることができること。 3. マイニングした結果から、有用な実際のソリューションを提案できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション:この演習とPBLプログラムの講義科目で学んだ内容との関わり、持続可能社会の実現への取り組みとの関連、この演習の到達目標と評価方法（ループバック）について解説する。更に受講者のチーム分けを行う。	授業で指定された指示に従って、事前・事後学修を行う。
第2回	データの基礎集計による疑問点の再考察	
第3回～第4回	疑問点の店舗における観察	
第5回	観察から得られた知見のデータによる確認	
第6回	解決すべき経営課題の決定とマイニングすべき内容の決定	
第7回～第8回	マイニング実習	
第9回	マイニングから得られた結果の考察	
第10回～第11回	マイニング結果の店舗における観察	

第12回～ 第13回	ソリューションの考察と補足分析	
第14回	ソリューションの実店舗での状況の確認	
第15回	成果発表とふり返り	

成績評価方法
成績は、演習への取り組みと成果発表をもとに、到達目標の達成度について、1回目の授業で学生に明示したルーブリックを基準として評価する。 成績は事業目標の以下の達成度によって評価される。 1. POSデータから基礎分析を行い、疑問点を見つけ、経営課題を発見することができること。 2. 発見した経営課題に対して、POSデータのマイニングで発見すべきポイントを明確化し、実際にマイニングすることができること。 3. マイニングした結果から、有用な実際のソリューションを提案できること。 成績は、発表（50%）とレポートの内容（50%）をもとに、到達目標の達成度について、1回目の授業で学生に明示したルーブリックを基準として評価する。
履修上の注意
この授業は、PBLプログラムの最終科目と位置付けられる科目であるため、履修にあたっては、「現代システム科学域 PBLプログラム履修課程」において履修を指定している科目を履修済み、あるいは並行して履修している必要がある。 エクセルおよび何らかの分析ツール（例えばRなど）については、利用知識があることを前提に授業が行われるので、受講までに十分な知識を身につけておくこと。
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
PBL 演習（生産システム科学）		岩村幸治、平林直樹、森永英二	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 後	選択	演習

授業概要
PBL プログラム（生産システム科学）の最終科目として位置づけられている。授業では、生産シミュレーションの役割・機能についての講義を行う。また 1 グループ数名で構成されるグループ分けを行い、生産シミュレータを用いることで、各グループで生産システムの設計・計画・運用の演習・実践を行う。さらに生産シミュレーションの内容および結果をプレゼンテーション資料にまとめるとともに、最終回に成果発表を行う。
到達目標
PBL プログラム（生産システム科学）は、生産システムの設計・計画・運用をグループで演習・実践することにより、生産システムの重要性を理解し、将来、生産システムの設計・計画・運用を実務として遂行できる能力を身につけることを目標とする。具体的には、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 現代社会の一員としての高い倫理観を持ち、他者と協働して課題に取り組むことができる。 2. PBL プログラムで学んだことを持続可能な社会の実現と関連付けて説明することができる。 3. PBL 演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 4. 生産シミュレーションの役割・機能について、論理的に説明できる。 5. 生産シミュレータを用いて生産システムの設計・計画・運用を実践できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション：この演習と PBL プログラムの講義科目で学んだ内容との関わり、持続可能な社会の実現への取り組みとの関連、この演習の到達目標と評価方法（ルーブリック）について解説する。更に受講者のチーム分けを行う。	これまでの PBL プログラム（生産システム科学）で学んだ内容を復習する。
第2回	生産シミュレーション演習：基本モデルの作成	配布プリントの例題 1
第3回	生産シミュレーション演習：故障と段取り，他	配布プリントの例題 2 から 4
第4回	生産シミュレーション演習：確率分布，他	配布プリントの例題 5 から 6
第5回	生産シミュレーション演習：パーツの組立，他	配布プリントの例題 7 から 9
第6回	生産シミュレーション演習：時系列グラフ，他	配布プリントの例題 10 から 12
第7回	生産シミュレーション演習：パーツファイル，他	配布プリントの例題 13 から 14
第8回	生産シミュレーション演習：不良品，箱詰め，他	配布プリントの例題 15 から 16
第9回	製品の選定および生産プロセスの調査	
第10回	生産システムの基本設計	
第11回	生産システムの詳細設計	
第12回	設計した生産システムにおける計画の作成	
第13回	設計した生産システムにおける計画の運用と評価	

第14回	成果発表用プレゼンテーション資料の作成	
第15回	成果発表会	

成績評価方法	
授業目標の1～5の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 現代社会の一員としての高い倫理観を持ち、他者と協働して課題に取り組むことができる。 2. PBL プログラムで学んだことを持続可能な社会の実現と関連付けて説明することができる。 3. PBL 演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 4. 生産シミュレーションの役割・機能について、論理的に説明できる。 5. 生産シミュレータを用いて生産システムの設計・計画・運用を実践できる。 の5点を達成することが求められる。成績は、第2回～8回の演習の達成度（40%）、生産システムの設計・計画・運用に取り組む姿勢（20%）、発表会でのプレゼンテーション（40%）をもとに、到達目標の達成度について、1回目の授業で学生に明示したルーブリックを基準として評価する。	
履修上の注意	
この授業は、PBL プログラムの最終科目と位置付けられる科目であるため、履修にあたっては、「現代システム科学域 PBL プログラム履修課程」において履修を指定している科目を履修済み、あるいは並行して履修している必要がある。 受講者の上限は24名までです。	
教科書	
授業中に資料を配布する。	
参考文献	
大阪府立大学マネジメント研究会，マネジメント講義ノート，白桃書房（2019）	

授業名称		担当教員氏名	
PBL 演習（ヘルスケア科学）		真嶋由貴恵、榎田聖子	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 前	選択	演習

授業概要
PBL プログラム（ヘルスケア分野）の最終科目として位置づけられている。授業では、ヘルスケア分野の課題解決に必要なシステム、サービスをデザインできる能力を養うために、数名のグループでの活動を通して、実際の課題に対する解決モデルを計画・作成、発表、（実施・評価）する。さらに演習の成果を報告書にまとめるとともに、最終回に成果発表（プレゼンテーション）を行う。なお、PBL プログラム(ヘルスケア科学)はSDG3「すべての人に健康と福祉を」と対応している。
到達目標
ヘルスケア分野の課題を解決するためにグループで企画・実践することにより、実際の課題に対する解決モデルを計画・作成、発表、（実施・評価）する。また、将来医療情報の専門職(医療情報技師)として実践力を身につけることを目標とする。具体的には、以下を身につけることを目標とする。 1. ヘルスケア分野の課題を解決する必要性について、持続可能性の点から説明できる。 2. フィールドワーク等の活動によってヘルスケア分野における課題解決方法を具体的に説明できる。 3. 協調性、責任感をもって、グループ活動を円滑に行えること。 4. 演習の成果をわかりやすくかつ正確に他人に伝えられること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション・講義(真嶋・榎田) この演習と PBL プログラムの講義科目で学んだ内容との関わり、持続可能なヘルスケアシステム、ヘルスケアサービス実現に向けた取り組みとの関連、この演習の到達目標と評価方法について説明する。	事前：これまでの PBL プログラム(ヘルスケア科学)で学んだ内容を復習する。 事後：ヘルスケア分野の課題を考える(個人)。
第2回	1 グループ数名程度で構成されるグループ分け(真嶋・榎田)	事後：課題の選定を行う(グループ)。
第3回	ヘルスケアにおける具体的な課題を設定する(各グループ)。(真嶋・榎田)	事後：活動の計画書を作成する。
第4回		
第5回	課題を解決するための活動計画を企画・立案する(各グループ)。(真嶋・榎田)	事後：活動計画書を作成する。
第6回		
第7回	協力機関との調整を行う(各グループ)(真嶋・榎田)	事前：協力機関について調べる。
第8回		
第9回	①課題解決に向け、ヘルスケアシステム構築のための調査・分析・開発を行う(各グループ)。	事前：活動に必要な資料等を準備する。
第10回		事後：調査・分析・開発に関して記録し資

第11回	②調査・分析・結果から解決モデルを作成する。 (各グループ)(真嶋・榊田)	料を整理する。
第12回		
第13回	成果報告書作成と発表スライド等の準備（各グループ）（真嶋・榊田）	成果発表の練習を行う。
第14回		
第15回	成果発表と質疑応答(真嶋・榊田)	成果報告書を作成する。

成績評価方法
授業目標の1～4の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. ヘルスケア科学の重要性について、持続可能性の観点から論理的に説明できる。 2. 企画段階での検討、様々な機関との連携協力、無理のない運営等の重要性を説明できること。 3. 協調性、寛容力、リーダーシップをもって、グループ活動を円滑に行えること。 4. ヘルスケア科学に関する活動の成果をわかりやすくかつ正確に他人に伝えられること。 の4点を達成することが求められる。成績は、活動への参加度（30%）、解決モデルの計画・作成（30%）、成果報告書（20%）、発表会でのプレゼンテーションと質疑応答（20%）をもとに、到達目標の達成度について、1回目の授業で学生に明示したルーブリックを基準として評価する。
履修上の注意
この授業は、PBL プログラムの最終科目と位置付けられる科目であるため、履修にあたっては、「現代システム科学域 PBL プログラム履修課程」において履修を指定している科目を履修済み、あるいは並行して履修している必要がある。 関連科目：ヘルスケアシステム、ヘルスケアサービス
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
PBL 演習（サービスデザイン）		佐賀亮介	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 前	選択	演習

授業概要
PBL プログラム（サービスデザイン）の最終科目として位置づけられている。SDGs における持続可能性を意識した、新たなサービスを設計するための考え方、またその方法論を学び、演習・実習を通して身につける。授業はグループワーク形式により行い、各グループがワークショップ形式の演習によりデザイン思考や創造性開発技法、ビジネスモデルの作り方を体験・学習する。その学習を生かして、SDGs に向けたサービスに関する問題討議や調査などを各グループで行い、ビジネスモデルとして作り上げる。 PBL プログラム（サービスデザイン）は、SDG 8「働きがいも経済成長も」と対応している。
到達目標
PBL プログラム（サービスデザイン）は、SDGs におけるサービスデザイン開発をグループで企画および計画のプロセスを通して、SDGs についての基本理念及び概念を理解し、そのサービスデザインを実践していくためのリーダーシップ力、及びチーム力を高める能力を身につけることを目標とする。 具体的には、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. SDGs の基本理念および活動について理解し、サービスの考えかたを理解する。 2. サービス設計のための方法論をし、デザイン思考、及び創造性開発技法を用いて学習し、それを活用することができる。 3. 全体最適の考え方を始め、Value Chain や SWOT 分析など経営分析の考え方も生かしながら企画としてまとめることができる。 4. PBL 演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション：この演習と PBL プログラムの講義科目で学んだ内容との関わり、持続可能社会の実現への取り組みとの関連、この演習の到達目標と評価方法（ルーブリック）について解説する。	事後：PBL プログラムに関する内容を復習
第2回	SDGs、サービスシステム、デザイン思考とは	事後：授業内容の復習
第3回	創造性開発技法（ブレインストーミング）	事後：ブレインストーミングの内容をまとめる
第4回	創造性開発技法（強制発想法など）	事後：学んだ手法を用いたアイデーション課題
第5回	Opportunity 及び Value Proposition (VP)	事後：既存企業のビジネス分析、及び VP の考案
第6回	Opportunity 発見ワークショップ（創造性開発技法（KJ 法）（概要、および実施））	事後：KJ 法の結果のまとめ
第7回	Opportunity 発見ワークショップ（創造性開発技法（KJ 法）（まとめ、プレゼン））	事後：VP の考案

第8回	SWOT 分析、Value Chain、Industry Map	事後：既存企業の分析
第9回	全体最適と局所最適（ビールゲーム）	事後：全体最適と局所最適のまとめ
第10回	Business Model、利益モデル	事後：既存企業の分析
第11回	各チームでのビジネスモデル企画開発 （課題の調査・選定、VP の決定）	事後：各回においての進捗のまとめ、及び、資料整理
第12回	ビジネスモデル企画開発 （ビジネスモデルの構築）	
第13回	ビジネスモデル企画開発 （関連ビジネスモデルの調査、及びブラッシュアップ、ディスカッション）	
第14回	プレゼンテーション資料作成	
第15回	各チームでの成果発表	最終レポートの作成

成績評価方法
成績は、演習への取り組みと成果発表をもとに、到達目標の達成度について、1 回目の授業で学生に明示したルーブリックを基準として評価する。
履修上の注意
この授業は、PBL プログラムの最終科目と位置付けられる科目であるため、履修にあたっては、「現代システム科学域 PBL プログラム履修課程」において履修を指定している科目を履修済み、あるいは並行して履修している必要がある。 関連科目：「コンピュータシステム」「情報ネットワーク基礎」「データベース基礎」「マーケティング・サイエンス」「ヒューマンコンピュータインタラクション」「人工知能 A」
教科書
適宜資料を配付する。
参考文献
適宜資料を配付する。

授業名称		担当教員氏名	
PBL 演習（教育情報システムデザイン）		瀬田和久、小島篤博、林佑樹	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 前	選択	演習

授業概要
PBL プログラム（教育情報システムデザイン）の最終科目として位置づけられている。授業では、教育支援を題材とした情報サービスプラットフォームのサービス設計、構築、管理および評価といった一連の活動を、より実践的な演習を通して習得させる。演習内容としては、サービス提供者としてのシステム構築および、コンテンツをデザインするとともに、構築したサービスについて評価を行う。1 グループ数名で構成されるグループ分けを行い、各グループで教育サービス提供プラットフォーム構築の企画・計画、システム構築、コンテンツ開発、評価実践を行う。さらに、最終回に成果発表（プレゼンテーション）を行う。
到達目標
PBLプログラム（教育情報システムデザイン）は、教育サービス提供プラットフォームの設計、構築、管理、および評価をグループで企画・実践することにより、それらの重要性を理解し、将来サービスの企画・運営および教育サービスの構築活動を実践することのできる能力を身につけることを目標とする。具体的には、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 現代社会の一員としての高い倫理観を持ち、他者と協働して課題に取り組むことができる。 2. PBL演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 3. 教育サービス提供プラットフォームの管理・運営の重要性について、持続可能性の観点から論理的に説明できること。 4. 教育サービス提供における企画段階での検討の重要性を説明できること。 5. ユーザ視点での評価をサービス改善に活かすこと。 6. 構築したサービスの設計意図と実践運用を通じた改善点をわかりやすくかつ正確に他人に伝えられること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション：この演習と PBL プログラムの講義科目で学んだ内容との関わり、演習の進め方について解説する。また、サーバ設定の基礎知識（バッチファイル）について学ぶ。	授業内で指示する。
第2回	サーバ設定の基礎知識：UNIX 基本コマンド	授業内で指示する。
第3回	サーバ設定の基礎知識：UNIX シェル	授業内で指示する。
第4回	サーバ設定の基礎知識	授業内で指示する。
第5回	教育サービス提供プラットフォーム Moodle の概要	授業内で指示する。
第6回	1 グループ数名で構成されるグループ分け	授業内で指示する。
第7回	Moodle のシステム構築・管理設定（グループ）	

第8回	サービス提供企画の立案（グループ）	授業内で指示する。
第9回		
第10回	開発（グループ・各自）	授業内で指示する。
第11回		
第12回		
第13回		
第14回	教育サービスの評価（グループ）	授業内で指示する。
第15回	成果発表の準備	授業内で指示する。
第16回	成果発表	授業内で指示する。

成績評価方法
到達目標の1～6の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、以下の4点を達成することが求められる。 1. 現代社会の一員としての高い倫理観を持ち、他者と協働して課題に取り組むことができる。 2. PBL演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 3. 教育サービス提供プラットフォームの管理・運営の重要性について、持続可能性の観点から論理的に説明できること。 4. 教育サービス提供における企画段階での検討の重要性を説明できること。 5. ユーザ視点での評価をサービス改善に活かすこと。 6. 構築したサービスの設計意図と実践運用を通じた改善点をわかりやすくかつ正確に他人に伝えられること。 成績は、サービス管理・提供活動に取り組む姿勢（30%）、教育サービスの品質（50%）、発表会でのプレゼンテーションと質疑応答（20%）をもとに、到達目標の達成度について、1回目の授業で学生に明示したルーブリックを基準として評価する。
履修上の注意
この授業は、PBL プログラムの最終科目と位置付けられる科目であるため、履修にあたっては、「現代システム科学域 PBL プログラム履修課程」において履修を指定している科目を履修済み、あるいは並行して履修している必要がある。 関連科目：情報ネットワーク基礎、教育情報学、教育・学習の理論と設計、人工知能 B
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
PBL演習（情報ネットワークシステム）		宮本貴朗、菅野正嗣、太田正哉、石橋勇人、安倍広多、永田好克、大西克実、吉田大介、青木茂樹	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3前	選択	演習

授業概要
PBLプログラム（情報ネットワークシステム）の最終科目として位置づけられている。授業では、情報ネットワークに関する要素技術や、それらを用いた課題解決の必要性和実例についての講義を行う。また、1グループ数名で構成されるグループ分けを行い、各グループで、課題の発見、解決のための要素技術の調査、システムの提案、設計、構築、および評価といった実践を行う。さらに、提案したシステムに関して報告書にまとめるとともに、最終回に成果発表（プレゼンテーション）を行う。
到達目標
PBLプログラム（情報ネットワークシステム）は、情報ネットワーク技術を活用してさまざまな課題を解決するためのシステムの提案や開発を通じて、将来、リーダーとして、実社会における課題解決のためのプロジェクトを運営できる能力を身につけることを目標としている。具体的には、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 現代社会の一員としての高い倫理観を持ち、他者と協働して課題に取り組むことができる。 2. PBLプログラムで学んだことを持続可能な社会の実現と関連付けて説明することができる。 3. PBL演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 4. 情報ネットワーク技術の重要性について、持続可能性の観点から論理的に説明することができる。 5. 企画段階での検討、無理のない運営等の重要性を説明することができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回 ～ 第2回	イントロダクション:この演習とPBLプログラムの講義科目で学んだ内容との関わり、持続可能社会の実現への取り組みとの関連、この演習の到達目標と評価方法（ルーブリック）について解説する。更に受講者のチーム分けを行う。 1グループ数名で構成されるグループ分けでの活動。	事前：これまでのPBLプログラム（情報ネットワークシステム）で学んだ内容を復習する。 事後：持続可能性に関するレポートを作成する。
第3回 第4回	各チームの基本テーマに係る具体的課題を設定する。	事前：具体的課題の例を調べる。
第5回 第6回	各チームで、取り組むべき具体的な課題解決活動の企画・計画を作成する。	事後：活動計画書を作成する
第7回 第8回	各チームで、課題解決のために利用可能な要素技術や周辺技術について調査を行う。	事前：要素技術に関して調査を行う。
第9回 第10回 第11回 第12回	各チームで、提案システムの開発を行う。	事前：提案システムの開発に必要となる環境や機器等を準備する。 事後：提案システムの開発や評価に関する記録を整理する。

第13回	各チームで成果発表の準備（スライドの作成など）を行う。	事後：成果発表に備えて練習をする。
第14回		
第15回	成果発表	事後：活動報告書を作成する。

成績評価方法
授業目標の1～5の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 現代社会の一員としての高い倫理観を持ち、他者と協働して課題に取り組むことができる。 2. PBLプログラムで学んだことを持続可能な社会の実現と関連付けて説明することができる。 3. PBL演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 4. 情報ネットワーク技術の重要性に関して、持続可能性の観点から論理的に説明することができる。 5. 企画段階での検討、無理のない運営等の重要性を説明することができる。 の5点を達成することが求められる。成績は、初回の授業で課すレポート（20%）、システムの提案、開発に取り組む姿勢（20%）、活動計画書（20%）、活動報告書（20%）、発表会でのプレゼンテーションと質疑応答（20%）をもとに、到達目標の達成度について、1回目の授業で学生に明示したルーブリックを基準として評価する。
履修上の注意
この授業は、PBLプログラムの最終科目と位置付けられる科目であるため、履修にあたっては、「現代システム科学域 PBLプログラム履修課程」において履修を指定している科目を履修済み、あるいは並行して履修している必要がある。 関連科目：プログラミング入門A、情報ネットワーク基礎、コンピュータシステム、Webシステム構築基礎、情報通信工学概論
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
未来デザインインターンシップ		大塚耕司、伊井直比呂、遠藤崇浩、岡本真彦、菅野正嗣、西尾純二、野津亮、牧岡省吾、工藤宏司、森岡次郎、柳本豪一	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	1後	必修	演習

授業概要
未来デザインコースは、目指すべき未来の社会を創造すべく自分でその道筋をデザインし、領域横断的応用力とシステムの思考力を用いて、現代社会の課題解決に取り組むことによって、持続可能な社会の実現を実行できる人材を養成することを目的としている。本授業では、学生がインターンシップ指導教員の助言を受けながら自治体、NPO、企業などのインターンシップ先を探し、事前学習を行った上でインターンシップに参加することで、学生自身に取り組むべき課題を発見させる。
到達目標
本授業では、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 自らが未来デザインコースにおいて取り組むべき課題について、持続可能な社会の実現との関係を含めて説明できること。 2. インターンシップで赴いたフィールドにおける取り組みから、取り組むべき課題に関する新たな知見を得て、その内容を説明することができること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション、未来デザインコースのカリキュラム説明、インターンシップ指導教員の割り当て	授業内で指示する。
第2回 ～ 第3回	未来デザインコースで取り組むべき課題に関するグループディスカッションを行う。	各自で資料収集をしながら取り組むべき課題について考える。
第4回 ～ 第5回	インターンシップ指導教員の指導を受けながらインターンシップ先の選定を行う。	インターンシップ先の資料収集を行う。
第6回 ～ 第12回	インターンシップに参加し、各自の課題に取り組む（延べ10日間程度）。	インターンシップ中の取り組みについてインターンシップノートに記録を取り、考察を行う。
第13回 ～ 第14回	インターンシップでの取り組みについてインターンシップ指導教員に報告し、考察を深める。報告会での発表内容を検討する。	報告会の発表準備
第15回	報告会での発表	授業内で指示する。

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 自らが未来デザインコースにおいて取り組むべき課題について、持続可能な社会の実現との関係を含めて説明できること。 2. インターンシップで赴いたフィールドにおける取り組みから、取り組むべき課題に関する新たな知見を得て、その内容を説明することができること。 の2点を達成することが求められる。 成績を評価する方法として、インターンシップノートおよびインターンシップ報告会での発表を用いる。成績評価に占める割合は、インターンシップノート（70%）、インターンシップ報告会での発表（30%）である。
履修上の注意
関連科目：未来デザイン計画演習、未来デザインPBL演習、未来デザイン卒業研究
教科書
なし
参考文献
適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
未来デザイン計画演習		大塚耕司、伊井直比呂、遠藤崇浩、岡本真彦、菅野正嗣、西尾純二、野津亮、牧岡省吾、工藤宏司、森岡次郎、柳本豪一	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2前	必修	演習

授業概要
未来デザインコースは、目指すべき未来の社会を創造すべく自分でその道筋をデザインし、領域横断的応用力とシステムの思考力を用いて、現代社会の課題解決に取り組むことによって、持続可能な社会の実現を実行できる人材を養成することを目的としている。本授業では、1年次末に未来デザイン計画書を提出し、未来デザインコースの履修を認められた学生が、メンター教員の助言を受けながら卒業までの履修計画を精緻化するとともに、卒業研究と卒業後の計画を立案する。
到達目標
本授業では、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 自らが未来デザインコースにおいて取り組む課題が持続可能な社会の実現にどのように貢献するのかを説明できること。 2. 未来デザイン計画書に基づいて卒業までの履修計画を立てることができること。 3. 卒業研究と卒業後の計画を立案すること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション	授業内で指示する。
第2回 ～ 第3回	各自の未来デザイン計画書に関する発表とグループディスカッションを行う。	未来デザイン計画書に関する発表準備
第4回 ～ 第7回	メンター教員の指導を受けながら卒業までの履修と卒業研究について計画を立てる。	自らが取り組む課題の解決に何が必要科について考え、資料収集を行う。
第8回 ～ 第9回	各自の卒業研究の計画に関する中間発表とグループディスカッションを行う。	各自の卒業研究の計画に関する発表準備。
第10回 ～ 第13回	グループディスカッションを踏まえて、卒業までの履修と卒業研究について計画を精緻化する。	最終報告会の発表準備
第14回 ～ 第15回	最終報告会での発表	授業内で指示する。

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 自らが未来デザインコースにおいて取り組む課題が持続可能な社会の実現にどのように貢献するのかを説明できること。 2. 未来デザイン計画書に基づいて卒業までの履修計画を立てることができること。 3. 卒業研究と卒業後の計画を立案すること。 の3点を達成することが求められる。 成績は、中間発表会における発表と質疑応答(50%)、最終発表会における発表と質疑応答(50%)をもとに、到達目標の達成度について、1回目の授業で学生に明示したルーブリックを基準として評価する。
履修上の注意
本科目は未来デザインコースの学生を対象とする。 関連科目：未来デザインインターンシップ、未来デザインPBL演習、未来デザイン卒業研究
教科書
なし
参考文献
適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
未来デザインPBL演習		大塚耕司、伊井直比呂、遠藤崇浩、岡本真彦、菅野正嗣、西尾純二、野津亮、牧岡省吾、工藤宏司、森岡次郎、柳本豪一	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3通	必修	演習

授業概要
未来デザインコースは、目指すべき未来の社会を創造すべく自分でその道筋をデザインし、領域横断的応用力とシステムの思考力を用いて、現代社会の課題解決に取り組むことによって、持続可能な社会の実現を実行できる人材を養成することを目的としている。本授業では、学生のセルフプロデュースにより、社会における課題解決を実践する。学生はメンター教員の指導の下、必要に応じて他の専任教員の助言も受けながら、持続可能な社会の実現のために自らが貢献できる課題を見出し、解決方法を構想する。地域の方々や起業家、NPO、自治体、各種企業、学生が開発したアプリケーションのユーザなど、学内外の関係者と協働する学びによって、未来社会の実現を実行できる人材の育成を目指す。
到達目標
未来デザインコースは、目指すべき未来の社会を創造すべく自分でその道筋をデザインし、領域横断的応用力とシステムの思考力を用いて、現代社会の課題解決に取り組むことによって、持続可能な社会の実現を実行できる人材を養成することを目的としている。本授業には、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 持続可能な社会の実現のために必要な課題を発見し、その解決方法を構想することができる。 2. 学内外の関係者と協働で課題解決に取り組むことができる。 3. 課題解決の成果を分かりやすくプレゼンテーションすることができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション：この演習の進め方、到達目標と評価方法（ルーブリック）について解説する。	授業内で指示する。
第2回 ～ 第4回	メンター教員の指導を受けながら、課題の選定と解決への取り組みの計画を立てる。	課題とその解決方法に関する情報収集を主体的に行い、検討する。
第5回 ～ 第8回	課題解決に取り組む（延べ10日間程度）。	課題解決の取り組みを記録に残し、中間発表の準備を進める。
第9回	中間発表会。必要に応じてオンラインで参加する。	中間発表で得た意見について考察を深める。
第10回 ～ 第13回	中間発表を踏まえ、課題解決に取り組む（延べ10日間程度）。	課題解決の取り組みを記録に残す。

第14回 ～ 第28回	メンター教員に課題解決の成果を報告し、最終発表会の準備を行う。	最終発表会の準備。
第29回	最終発表会	最終発表会で得た意見について考察を深める。
第30回	ふり回り	課題解決の成果についてレポートにまとめる。

成績評価方法
授業目標の1～3の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 持続可能な社会の実現のために必要な課題を発見し、その解決方法を構想することができる。 2. 学内外の関係者と協働で課題解決に取り組むことができる。 3. 課題解決の成果を分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 の3点を達成することが求められる。成績は、中間発表会における発表と質疑応答(30%)、最終発表会における発表と質疑応答(30%)、課題解決の成果に関するレポート(40%)をもとに、到達目標の達成度について、1回目の授業で学生に明示したルーブリックを基準として評価する。
履修上の注意
本科目は未来デザインコースの学生を対象とする。 関連科目：未来デザイン計画演習、未来デザインインターンシップ、未来デザイン卒業研究
教科書
なし。
参考文献
適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
未来デザイン卒業研究		安倍広多、石橋勇人、岩村幸治、太田正哉、菅野正嗣、瀬田和久、中島智晴、真嶋由貴恵、宮本貴朗、村上晴美、森田裕之、渡邊真治、青木茂樹、上杉徳照、大西克実、小島篤博、佐賀亮介、永田好克、林佑樹、平林直樹、榊田聖子、森永英二、柳本豪一、吉田大介、楠木祥文、青木賜鶴子、秋庭裕、生田英輔、伊藤康人、遠藤崇浩、大塚耕司、大山克己、興津健二、酒井隆史、下村泰彦、住友陽文、相田洋明、高木佐知子、竹中規訓、中山祐一郎、西尾純二、福田珠己、水野真彦、宮脇幸生、上柿崇英、工藤宏司、黒田桂菜、住田守道、千葉知世、西川弘展、花村周寛、天島華織、藤田渡、古川朋雄、星英之、宮畑一範、吉川丈、山本由美子、阿久井康平、山東功、伊井直比呂、伊藤嘉余子、児島亜紀子、隅田好美、田垣正晋、西田芳正、東優子、山野則子、吉田敦彦、吉武信二、乾順子、木曾陽子、嵯峨嘉子、内藤葉子、濱島（宮川）淑恵、松田博幸、三田優子、森岡次郎、吉田直哉、吉原雅昭、東根ちよ、岡本真彦、総田純次、野津亮、牧岡省吾、岩佐和典、片畑真由美、河野直子、川部哲也、河村悠太、高橋幸治、飛田国人、武藤拓之	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
6	4通	必修	実験・実習

授業概要
未来デザインコースは、目指すべき未来の社会を創造すべく自分でその道筋をデザインし、領域横断的応用力とシステムの思考力を用いて、現代社会の課題解決に取り組むことによって、持続可能な社会の実現を実行できる人材を養成することを目的としている。本授業では、未来デザインPBL演習の成果を踏まえ、未来デザインコースの集大成としての卒業研究に取り組む。卒業研究の指導教員は、学生がメンター教員と相談の上で提出した希望指導教員名を踏まえて、学域教育運営委員会の中に設置された未来デザイン支援WGが、現代システム科学域全専任教員の中から選出する。

到達目標
未来デザインコースは、目指すべき未来の社会を創造すべく自分でその道筋をデザインし、領域横断的応用力とシステムの思考力を用いて、現代社会の課題解決に取り組むことによって、持続可能な社会の実現を実行できる人材を養成することを目的としている。本授業には、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 自らが未来デザインコースにおいて取り組んだ課題について、先行研究や過去の類似の取り組みの中での位置づけと、持続可能な社会の実現における意義を明確に説明することができる。 2. 自らが未来デザインコースにおいて取り組んだ課題と得られた成果について、客観的な資料を根拠に明確に説明することができる。 3. 自らが未来デザインコースにおいて取り組んだ課題と得られた成果に基づいて、今後の展望を示すことができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション：卒業研究の進め方。	授業内で指示する。
第2回 ～ 第30回	メンター教員の指導を受けながら、未来デザインPBL演習の成果を踏まえて卒業研究に取り組む。必要に応じて追加のデータの収集を行う。	研究に必要な文献の収集、データの分析などを行う。
第31回	未来デザイン卒業研究発表会（学域全体で行う）	授業内で指示する。

成績評価方法
授業目標の1～3の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 自らが未来デザインコースにおいて取り組んだ課題について、先行研究や過去の類似の取り組みの中での位置づけと、持続可能な社会の実現における意義を明確に説明することができる。 2. 自らが未来デザインコースにおいて取り組んだ課題と得られた成果について、客観的な資料を根拠に明確に説明することができる。 3. 自らが未来デザインコースにおいて取り組んだ課題と得られた成果に基づいて、今後の展望を示すことができる。 の3点を達成することが求められる。成績は、卒業論文の研究に取り組む姿勢(20%)、卒業論文および要旨(60%)、発表(20%)で評価する。
履修上の注意
本科目は未来デザインコースの学生を対象とする。 関連科目：未来デザインインターンシップ、未来デザイン計画演習、未来デザインPBL演習
教科書
なし。
参考文献
適宜紹介する。

現代システム科学域 環境社会システム学類 シラバス(目次)

1	自然システムとサステイナビリティ	P. 119
2	社会システムとサステイナビリティ	P. 121
3	人間システムとサステイナビリティ	P. 123
4	環境社会システム学概論	P. 125
5	インターンシップ	P. 127
6	海外インターンシップ	P. 129
7	環境生物学	P. 131
8	公衆衛生学	P. 134
9	地理学基礎	P. 137
10	経済学基礎	P. 139
11	公共政策学基礎	P. 142
12	経済活動と法	P. 144
13	環境哲学・倫理学	P. 147
14	社会学基礎	P. 149
15	環境社会システム学卒業研究	P. 152
16	地域実践演習	P. 154
17	地球環境の化学	P. 156
18	地域・都市環境学	P. 158
19	環境デザイン通史	P. 160
20	海洋環境生態学	P. 162
21	海域環境再生学	P. 164
22	陸域環境生態学	P. 166
23	陸域環境再生学	P. 169
24	食品安全論	P. 171
25	食糧と環境	P. 174
26	景観計画学	P. 177
27	防災・安全科学	P. 179
28	環境計測学	P. 183
29	再生可能エネルギー学	P. 185
30	環境再生の化学	P. 187

31	環境アセスメント学	P. 189
32	ミクロ経済学	P. 191
33	マクロ経済学	P. 193
34	公共経済学	P. 195
35	環境経済・経営学	P. 197
36	企業の経済学	P. 199
37	環境法1	P. 201
38	環境政策学	P. 203
39	都市と経済の地理学	P. 205
40	地域研究	P. 207
41	環境社会学	P. 209
42	文化の社会学	P. 212
43	共生社会とアイデンティティ	P. 215
44	現代の社会問題と社会運動	P. 217
45	文化と景観	P. 219
46	現代社会の倫理学	P. 222
47	生命科学技術と社会	P. 224
48	環境哲学と現代社会	P. 226
49	日本の歴史環境	P. 228
50	個人創造の思想史	P. 230
51	社会文化史	P. 232
52	社会政治思想	P. 234
53	地域社会の言語環境	P. 236
54	言語使用の多様性研究	P. 238
55	ディスコースと社会	P. 240
56	言語表現と世界認識	P. 242
57	認識とレトリック	P. 244
58	文化表象と社会批評	P. 246
59	グローバル社会の文化表象	P. 248
60	社会調査論	P. 250
61	環境社会システム学演習1	P. 252
62	環境社会システム学演習2	P. 254

63	環境社会システム学演習3	P. 257
64	質的調査法	P. 260
65	資料分析法	P. 262
66	調査設計法	P. 264
67	PBL演習（環境学）	P. 266
68	PBL演習（地域再生）	P. 268
69	PBL演習（環境再生）	P. 270
70	PBL演習（企業と持続可能な社会）	P. 272
71	PBL演習（社会調査）	P. 274
72	PBL演習（都市社会）	P. 277
73	PBL演習（文化表象）	P. 279
74	PBL演習（共生の思想）	P. 281
75	未来デザインインターンシップ	P. 283
76	未来デザイン計画演習	P. 285
77	未来デザインPBL演習	P. 287
78	未来デザイン卒業研究	P. 289

授業名称		担当教員氏名	
自然システムとサステイナビリティ		大塚耕司、伊藤康人、竹中規訓	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	1 前	必修	講義

授業概要
現代システムの中の自然システムの重要性について講義する。また、地球そのものの成り立ち、現在の地球の構造から、大気や海洋の循環と大気や海洋への人間活動による影響について解説する。さらに、生態系のしくみと、生態系が人間にもたらすサービスについて説明し、最後に、自然システムの観点から見たサステイナビリティ（持続可能性）について考察する。
到達目標
本授業では、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 現代システムの中の自然システムの重要性について説明できること。 2. 地球の起源と歴史、現在の地球の構造について説明できること。 3. 大気の循環と大気に関わるさまざまな環境問題について説明できること。 4. 水の循環と海洋に関わるさまざまな環境問題について説明できること。 5. 生態系のしくみ、生態系サービスについて説明できること。 6. 自然システムの観点から見た持続可能性について説明できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション、現代システムの中の自然システム／第1回レポート（大塚）	授業で話された内容を復習する。
第2回	太陽系と地球の誕生（伊藤）	授業で話された内容を復習する。
第3回	地球の歴史と生物の進化（伊藤）	授業で話された内容を復習する。
第4回	現在の地球の構造（伊藤）	授業で話された内容を復習する。
第5回	大気の循環と大気汚染（竹中）	授業で話された内容を復習する。
第6回	酸性雨とエアロゾル(PM _{2.5})（竹中）	授業で話された内容を復習する。
第7回	地球温暖化と成層圏破壊（竹中）	授業で話された内容を復習する。
第8回	水の性質と循環（大塚）	授業で話された内容を復習する。
第9回	海洋の構造と物質循環（大塚）	授業で話された内容を復習する。
第10回	人間活動による海洋環境への影響（大塚）	授業で話された内容を復習する。
第11回	生態系（エコシステム）のしくみ（大塚）	授業で話された内容を復習する。
第12回	生態系が人間にもたらすサービス（大塚）	授業で話された内容を復習する。
第13回	資源開発と生態系破壊の歴史（大塚）	授業で話された内容を復習する。
第14回	第2回授業から第13回授業までの振り返りと授業内容のまとめ（大塚）	授業で話された内容を復習する。
第15回	自然システムの観点から見た持続可能性／第2回レ	授業内で指示する。

	ポート（大塚） 「情報システムとサステイナビリティ」「自然システムとサステイナビリティ」「社会システムとサステイナビリティ」「人間システムとサステイナビリティ」の担当者教員4名が登壇し、システム同士の関係性について対談形式で解説する。	
第16回	期末試験（大塚）	授業内で指示する。

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 現代システムの中の自然システムの重要性について説明できること。 2. 地球の起源と歴史、現在の地球の構造について説明できること。 3. 大気の循環と大気に関わるさまざまな環境問題について説明できること。 4. 水の循環と海洋に関わるさまざまな環境問題について説明できること。 5. 生態系のしくみ、生態系サービスについて説明できること。 6. 自然システムの観点から見た持続可能性について説明できること。 の6点を達成することが求められる。 成績は、授業中に課す2回のレポート（20%）、および期末試験（80%）で評価する。
履修上の注意
関連科目： 情報システムとサステイナビリティ、社会システムとサステイナビリティ、人間システムとサステイナビリティ
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
社会システムとサステナビリティ		上柿崇英、西尾純二、児島亜紀子、西田芳正、伊井直比呂	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	1 前	必修	講義

授業概要
現代システムの中の社会システムの重要性について講義する。また、現代社会を成り立たせる人間観とそれを支える価値、制度、慣習、思考様式などの意義、並びにそれらに基づく課題解決の新たな志向について説明する。最後に、社会システムの観点から見たサステナビリティ（持続可能性）について考察する。
到達目標
本授業では、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 現代システムの中の社会システムの重要性について説明できること。 2. 共生社会と哲学・思想の役割について説明できること。 3. 慣習と文化との関係、およびそれらと伝統との関係について説明できること 4. 近代福祉国家観とその歴史、および現代の課題について説明できること 5. 教育の未来創造の役割と現状について説明できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション、現代システムの中の社会システム／（伊井）	授業で話された内容を復習する。
第2回	サステナビリティ概念と社会（上柿）	授業で話された内容を復習する。
第3回	「社会システム」を考える（上柿）	授業で話された内容を復習する。
第4回	哲学・思想の方法論と共生社会（上柿） 第1回レポート	授業で話された内容を復習する。
第5回	慣習と社会の形成（西尾）	授業で話された内容を復習する。
第6回	言語・文学・芸術などの文化事象の伝統性と表象性（西尾）	授業で話された内容を復習する。
第7回	社会問題化する慣習（西尾） 第2回レポート	授業で話された内容を復習する。
第8回	福祉国家の思想と歴史（児島）	授業で話された内容を復習する。
第9回	人口縮小社会と福祉・社会制度（児島）	授業で話された内容を復習する。
第10回	災害など社会変動の被害を最も受けやすい人が受ける影響の最小化とそれらに対する強靱化（児島） 第3回レポート	授業で話された内容を復習する。
第11回	貧富の差の社会的本質（西田）	授業で話された内容を復習する。
第12回	教育を規定する社会・社会を作り変える教育（西田）	授業で話された内容を復習する。

第13回	地域社会の活力と諸課題（西田） 第4回レポート	授業で話された内容を復習する。
第14回	グローバルシステムの未来への選択（伊井）	授業で話された内容を復習する。
第15回	社会システムの中の持続可能性の発見（伊井） 第5回レポート 「情報システムとサステイナビリティ」「自然システムとサステイナビリティ」「社会システムとサステイナビリティ」「人間システムとサステイナビリティ」の担当者教員4名が登壇し、システム同士の関係性について対談形式で解説する。	授業で話された内容を復習する。

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 現代システムの中の社会システムの重要性について説明できること。 2. 共生社会と哲学・思想の役割について説明できること。 3. 慣習と文化との関係、およびそれらと伝統との関係について説明できること 4. 福祉国家観と縮小社会、あるいは社会的脆弱性について説明できること 5. 貧富の差の社会的本質と教育の未来創造の役割について説明できること 6. 講義を通して全体の関連が説明できること。 の6点を達成することが求められる。 成績は、授業中に課す5回のレポートで評価する。
履修上の注意
関連科目：自然システムとサステイナビリティ、情報システムとサステイナビリティ、人間システムとサステイナビリティ
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
人間システムとサステナビリティ		牧岡省吾、高橋幸治、東優子、工藤宏司	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	1 前	必修	講義

授業概要
現代システムの中の人間システムの重要性について講義する。人間（ヒト）という種が進化によって成立した過程、人間の心と進化との関係（進化心理学の観点）、利他行動、心の病や悩みや問題の人間にとっての意味と潜在している可能性、行為と社会的規範の関係、人間開発と人の可能性の関係について説明し、最後に、人間システムの観点から見たサステナビリティ（持続可能性）について考察する。
到達目標
本授業では、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 現代システムの中の人間システムの重要性について説明できること。 2. 人間（ヒト）という種の心のありかたと進化の関係について説明できること。 3. 心の病や悩みや問題の人間（ヒト）にとっての意味と潜在している可能性について説明できること 4. 行為が社会的規範とどのような関係にあるかについて説明できること 5. 人間開発と人の可能性の関係について説明できること 6. 人間システムの観点から見た持続可能性について説明できること

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション、現代システムの中の人間システム／第1回小レポート（牧岡）	授業で話された内容を復習する。
第2回	進化の仕組みとヒトの進化の歴史（牧岡）	授業で話された内容を復習する。
第3回	ヒトはなぜ社会をつくることができるのか（牧岡）	授業で話された内容を復習する。
第4回	ヒトの心と意見の分断（牧岡）／第2回小レポート（牧岡）	授業で話された内容を復習する。
第5回	ヒトの心の病のメカニズム（高橋）	授業で話された内容を復習する。
第6回	臨床の知（高橋）	授業で話された内容を復習する。
第7回	悩み・症状・問題の発展可能性（高橋）	授業で話された内容を復習する。
第8回	心理療法におけるセラピストの仕事（高橋）	授業で話された内容を復習する。
第9回	創造の病と文化の病（高橋）／第3回小レポート（高橋）	授業で話された内容を復習する。
第10回	「感情」はどのような意味で「社会的問題」になるのか（工藤）	授業で話された内容を復習する。
第11回	「感情規則」と「感情労働」（工藤）	授業で話された内容を復習する。
第12回	行為と社会的規範（工藤）／第4回小レポート（工藤）	授業で話された内容を復習する。

第13回	ジェンダーと社会（東）	授業で話された内容を復習する。
第14回	人間開発としてのジェンダーの位置づけ（東）／第5回小レポート（工藤）	授業で話された内容を復習する。
第15回	人間システムの観点から見た持続可能性／第6回小レポート（牧岡） 「情報システムとサステイナビリティ」「自然システムとサステイナビリティ」「社会システムとサステイナビリティ」「人間システムとサステイナビリティ」の担当者教員4名が登壇し、システム同士の関係性について対談形式で解説する。	授業内で指示する。

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 現代システムの中の人間システムの重要性について説明できること。 2. 人間（ヒト）という種の心のありかたと進化の関係について説明できること。 3. 心の病や悩みや問題の人間（ヒト）のにとっての意味と潜在している可能性について説明できること 4. 行為が社会的規範とどのような関係にあるかについて説明できること 5. 人間開発と人の可能性の関係について説明できること 6. 人間システムの観点から見た持続可能性について説明できること の6点を達成することが求められる。 成績は、授業中に課す6回の小レポートで評価する。
履修上の注意
関連科目：自然システムとサステイナビリティ、情報システムとサステイナビリティ、社会システムとサステイナビリティ
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
環境社会システム学概論		遠藤崇浩、黒田桂菜、水野真彦、酒井隆史	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	1 後	必修	講義

授業概要
本講義は現代システムのサブセットである自然－社会－人間－情報システムのうち、とりわけ自然－社会システム部分に焦点をあてる。講義ではまず公害問題、持続可能な開発目標といった自然－社会システム全体に係る重要概念を概説する。その際、企業関係者等のゲストスピーカーを招き企業活動・技術・環境保全の最新情報を伝える機会を設ける。次に自然環境が農林水産業といった第一次産業、工業等の第二次産業、広く都市を基盤とする第三次産業にどのように関わりあうかを解説する。そして最後に環境問題を自然と社会が織りなす相互作用環と捉えつつ、人間社会における様々な生業とサステナビリティ（持続可能性）の関係について考察する。
到達目標
本授業では、以下の能力を身につけることを目標とする。 1.公害問題、持続可能な開発目標といった環境問題に関する重要概念について説明できること 2.持続可能な開発目標の達成における政府と企業の役割について説明できること 3.自然環境が水産業に与える影響と、水産業が自然環境に与える影響について説明できること 4.自然環境が工場の立地、都市への集積に与える影響と、地域経済が地域の環境に与える影響について説明できること 5.自然環境が都市における人間生活に与える影響と都市機能が自然環境に与える影響、さらに人間の活動が労働を通して自然環境に与えてきた影響と近代における労働のありかたの問題点を説明できること 6.人間社会における様々な生業と持続可能性の関係について説明できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション：現代システム科学域の教育理念と、その中の環境社会システム学類の位置付けと役割、環境社会システム学類の3 ポリシーについて解説する。さらに、1 年次前期必修科目「情報システムとサステナビリティ」「自然システムとサステナビリティ」「社会システムとサステナビリティ」「人間システムとサステナビリティ」との関連性について解説する。（遠藤）	授業支援システムで事前配付するシラバス、資料等を確認しておく。
第2回	公害問題から持続可能な開発目標までの歴史（遠藤）	4 大公害、持続可能な発展、SDGs
第3回	持続可能な開発目標と政府の役割（遠藤）	政府規制、環境保全と税
第4回	持続可能な開発目標と企業活動（遠藤）	環境保全のための技術開発
第5回	水産業と海洋環境（黒田）	沿岸域の生態系サービス
第6回	水産業と環境負荷（黒田）	水産プロセスの環境負荷（例：二酸化炭素排出量）、水産物のグローバル化

第7回	水産業と魚食（黒田）	食文化と環境保全
第8回	水産業とコミュニティ（黒田）	水産資源の持続的な利用
第9回	近代大阪と工業化（水野）	近代都市の形成と環境
第10回	雇用と居住の地理（水野）	都市構造の変容とその影響
第11回	働くことと遊ぶことの人類学（酒井）	人類史における自然と人間活動の関係
第12回	働くことと遊ぶことの近代史（酒井）	近代における労働観念の形成
第13回	働くことと遊ぶことの意味（酒井）	気候変動のなかで働くことの意味
第14回	自然－社会システムの観点から見た持続可能性（遠藤）	授業で話された内容を復習する。
第15回	対談を通じた総括（環境社会システム学概論、心理学概論、知識情報システム学概論、教育福祉学概論の代表教員）（遠藤）	授業で話された内容を復習する。
第16回	期末試験（遠藤）	授業内で指示する。

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 公害問題、持続可能な開発目標といった環境問題に関する重要概念について説明できること 2. 持続可能な開発目標の達成における政府と企業の役割について説明できること 3. 自然環境が水産業に与える影響と、水産業が自然環境に与える影響について説明できること 4. 自然環境が工場の立地、都市への集積に与える影響と、地域経済が地域の環境に与える影響について説明できること 5. 自然環境が都市における人間生活に与える影響と都市機能が自然環境に与える影響、さらに人間の活動が労働を通して自然環境に与えてきた影響と近代における労働のありかたの問題点を説明できること 6. 人間社会における様々な生業と持続可能性の関係について説明できること。 以上の6点を達成することが求められる。 成績は毎回提出させるコメントペーパーと期末試験を用いる。成績評価に占める割合は、コメントペーパーが20%、期末試験が80%である。
履修上の注意
関連科目： 情報システムとサステイナビリティ、社会システムとサステイナビリティ、人間システムとサステイナビリティ、知識情報システム学概論、教育福祉学概論、心理学概論
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
インターンシップ		大塚耕司	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 通	選択	演習

授業概要
本授業は、10 日程度のインターンシップ先での実習と事前学習、報告会の全てに参加することで単位を認定する。単位として認定されるインターンシップは、原則として、本学キャリアサポートを通じて申し込んだものであるが、教員の紹介や個人で探してきたものについても、学域教育運営委員会において、大学のキャリアサポート部局で提供しているインターンシッププログラムと同等であると承認された場合には、単位認定の対象となることがあるので、事前に担当教員に申し出る必要がある。なお、インターンシップとして単位認定を受ける場合の手続きは、4 月初旬のオリエンテーションで詳しく説明する。
到達目標
本授業では、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 企業や自治体等における業務の実際を、体験を通して具体的に説明できること。 2. 企業や自治体等における業務が、持続可能社会の実現にどのように寄与するか説明できること。 3. 将来社会で活躍するために、大学で何を学ぶべきか説明できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション、単位認定の説明	
第2回	事前学習：キャリアサポート室が主催するビジネスマナー研修を受講し、インターンシップに参加する際の心構え、マナー講座、キャリアデザインなどについて学ぶ。	自治体および企業に関して事前に調査し研究すること。
第3回		
第4回		
第5回		
第6回		
第7回	企業、自治体等におけるインターンシップ実習（10日間程度）	その都度、業務体験を振り返り、インターンシップノートを中心に記録し、記録の整理および考察を行うこと。
第8回		
第9回		
第10回		
第11回		
第12回		
第13回		
第14回	報告会での発表準備	
第15回	報告会での発表	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 企業や自治体等における業務の実際を、体験を通して具体的に説明できること。 2. 企業や自治体等における業務が、持続可能社会の実現にどのように寄与するか説明できること。 3. 将来社会で活躍するために、大学で何を学ぶべきか説明できること。 の3点を達成することが求められる。 成績を評価する方法として、インターンシップノートおよびインターンシップ報告会での発表を用いる。 成績評価に占める割合は、インターンシップノート（70%）、インターンシップ報告会での発表（30%）である。
履修上の注意
適宜指示します。
教科書
なし
参考文献
なし

授業名称		担当教員氏名	
海外インターンシップ		大塚耕司、佐賀亮介、柳本豪一、興津健二、飛田国人、東優子、山野則子	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 通	選択	演習

授業概要
本プログラムでは、派遣前にワークショップを行い、派遣先の国の歴史や文化ならびに持続可能性に関わる問題点などについて理解させるとともに、派遣プログラム期間内に現地学生との協働によるワークショップやスタディーツアーを実施し、課題解決の方法論を実践的に学ばせる。さらに、派遣後に報告会を行い、プレゼンテーションのスキルを向上させる。これらの教育プログラムを通して、多様な歴史・文化を背景に持つ人々が互いに尊重し合い、共に生きてゆくことの重要性を深く理解する能力（多文化共生マインド）を身につけさせるとともに、国際的な観点から持続可能な社会の構築に関する具体的な課題を発見し解決に導く方法論（課題解決スキル）を身につけさせる。なお、海外インターンシップでは、現地学生と協働で持続可能な社会の構築に関する具体的な課題に取り組むことになるが、現地における歴史・文化・宗教などを背景にした習慣や作法、禁忌行為などについて、派遣前のワークショップなどを通して十分に理解させる。
到達目標
本授業では、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 派遣先の国の歴史・文化・宗教的背景について説明できること。 2. 派遣先の国の持続可能な社会の構築に関する具体的な課題を発見できること。 3. 派遣先の国の学生と協働で課題解決に取り組むことができること。 4. 現地で行った活動について他人にわかりやすく伝えられること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション、派遣国の決定	
第2回	事前学習：派遣国別のチームに分かれて、派遣先の国の歴史や文化ならびに持続可能性に関わる問題点などについて調査する。	派遣国選びに必要な情報をあらかじめ調べておく
第3回		
第4回		
第5回		
第6回		
第7回	現地学生との協働によるワークショップやスタディーツアーを実施し、課題解決の方法論を実践的に学ぶ。（10日間程度）	現地活動の内容を整理してレポートにまとめる。
第8回		
第9回		
第10回		
第11回		
第12回		
第13回		

第14回	報告会での発表準備	
第15回	報告会での発表	

成績評価方法	
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 派遣先の国の歴史・文化・宗教的背景について説明できること。 2. 派遣先の国の持続可能な社会の構築に関する具体的な課題を発見できること。 3. 派遣先の国の学生と協働で課題解決に取り組むことができること。 4. 現地で行った活動について他人にわかりやすく伝えられること。 の4点を達成することが求められる。 成績を評価する方法として、海外インターンシップ報告書および海外インターンシップ報告会での発表を用いる。成績評価に占める割合は、海外インターンシップ報告書（60%）、海外インターンシップ報告会での発表（40%）である。	
履修上の注意	
適宜指示します。	
教科書	
なし	
参考文献	
なし	

授業名称		担当教員氏名	
環境生物学		中山祐一郎	
配当年次	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
人間を含む生物と環境との歴史的つながりが理解できるように、生物の進化と絶滅の歴史を軸に、生物の系統、構造、代謝、生殖、遺伝、生物と環境との相互作用について講義する。また、各回のテーマと関連する話題（食品のリスク、廃棄物・汚水の処理、病気、寿命、毒物、iPS 細胞と再生医療、外来生物など）を通して、身の回りの問題を理解する上での生物学の知識や科学的な思考の重要性を理解させる。
到達目標
人間の生命や生活を支える生物多様性の意義や重要性を理解するために必要な生物学の基礎を習得することを目標とする。具体的には、以下の能力を身につけることを目標とする。
1. 生物の系統と進化について説明できること。
2. エネルギー代謝について説明できること。
3. 生殖について説明できること。
4. 遺伝について説明できること。
5. ヒトが生物の進化と絶滅に及ぼす影響について説明できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	生物学をなぜ・どのように学ぶのか：環境と生物、生物の多様性と進化	「確認シート」の内容を復習する。
第2回	生物をつくる物質	「確認シート」の内容を復習する。
第3回	生物の起源：有機化合物の化学進化、生命誕生の証拠	「確認シート」の内容を復習する。レポート課題：『はじめての進化論』を読み、進化の定義とメカニズムについて要約する。
第4回	代謝：エネルギー生産の基礎と起源、光合成の起源、細胞内共生による進化	「確認シート」の内容を復習する。
第5回	真正細菌と古細菌：構造、栄養と代謝の様式、生息環境、真核生物との共生	「確認シート」の内容を復習する。
第6回	真核生物の細胞：真核生物の誕生、真核細胞の構造	「確認シート」の内容を復習する。
第7回	DNA：DNA の複製・修復・転写・翻訳、原核生物の DNA、真核生物の DNA、生物の起源と DNA	「確認シート」の内容を復習する。
第8回	ウイルス	「確認シート」の内容を復習する。
第9回	有性生殖：真正細菌・古細菌の生殖、単細胞	「確認シート」の内容を復習する。レポート

	の真核生物の生殖、多細胞の真核生物の生殖、有性生殖の意義	課題：『生き物をめぐる4つの「なぜ」』を読み、「雄と雌」はなぜあるのかを要約するとともに、「雄と雌」以外のテーマ（鳥のさえずり、鳥の渡り、光る動物、親による子の世話、角と牙、人間の道徳性）をひとつ選び、意見等を述べる。
第10回	遺伝子：DNAと遺伝子、遺伝子発現の制御	「確認シート」の内容を復習する。
第11回	真核生物の系統：真核生物のスーパーグループ、植物とは？、動物の系統とボディープラン、多細胞生物の進化の歴史	「確認シート」の内容を復習する。
第12回	脊椎動物の進化：脊索動物、脊椎動物、顎口類、硬骨魚類、肉鰭類、四肢動物、羊膜類、哺乳類、真獣類	「確認シート」の内容を復習する。
第13回	陸上植物の進化：植物の系統、シャジクモ藻類、コケ植物、ヒカゲノカズラ植物、シダ植物、裸子植物、被子植物	「確認シート」の内容を復習する。
第14回	ヒトの進化：ヒトの出現、新生代の気候変動と動植物の共進化、農耕の起源と伝播	「確認シート」の内容を復習する。
第15回	ヒトと絶滅：背景絶滅と大量絶滅、持続可能性実現への生物学的課題	「確認シート」の内容を復習する。
第16回	定期試験	

成績評価方法

授業目標の1～5の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、

1. 生物の系統と進化について説明できること、
2. エネルギー代謝について説明できること、
3. 生殖について説明できること、
4. 遺伝について説明できること、
5. ヒトが生物の進化と絶滅に及ぼす影響について説明できること。

の5点を達成することが求められる。成績は、毎回の講義で課す確認シート（30%）、2回のレポート（20%）、期末試験（50%）で評価する。

履修上の注意

（関連科目）[情報システムとサステナビリティ](#)、[自然システムとサステナビリティ](#)、[社会システムとサステナビリティ](#)、[人間システムとサステナビリティ](#)、[環境社会システム学概論](#)、[海洋環境生態学](#)、[陸域環境生態学](#)、[海域環境再生学](#)、[陸域環境再生学](#)、[環境アセスメント学](#)

教科書
授業中に適宜資料を配布する。
参考文献
A.Singh-Cundy 他著「ケイン生物学第 5 版」(東京化学同人, 2014 年) 長谷川真理子著「生き物をめぐる 4 つの「なぜ」」(集英社, 2002 年) 河田雅圭著「はじめての進化論」(講談社、1990 年) pdf 版 : http://meme.biology.tohoku.ac.jp/INTROEVOL/

授業名称		担当教員氏名	
公衆衛生学		星 英之	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
公衆衛生学は、持続可能な社会を構築する上で不可欠な健康の維持・増進および疾病予防に貢献する学問である。ヒトの疾病予防および健康維持に関わる項目（疾病対策、環境、健康統計、疫学研究、メタボリックシンドローム、認知症、喫煙、労働衛生、感染症）について基礎的な考え方を学ぶ。 講義は、プリントを配布し、デジタルプロジェクト等の使用によるビジュアルな資料・事例を提示して行う。
到達目標
本授業では、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 公衆衛生学の歴史、概念について説明できること。 2. 地球温暖化などの地球環境問題、水俣病などの環境汚染及び上下水道などの環境整備について説明できること。 3. 健康に関する統計資料の読み方や疫学の基礎的な知識について説明できること。 4. 疾病予防、生活習慣病予防、健康増進、健康寿命延伸に対する公衆衛生学的なアプローチの手法、考え方について説明できること。 5. 講義で学んだ内容について、信頼できる資料を引用して、わかりやすく説明できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	公衆衛生学の概念：健康維持増進、疾病予防に関する基礎的な概念を代表的な事例（山極勝三郎の人工癌、高木兼寛の脚気予防、久山研究等）から理解する。	公衆衛生学の概念について講義資料をダウンロードし、事前に学習すること。
第2回	疾病対策の変遷：公衆衛生の歴史、法制度の変遷を学ぶことにより、疾病予防の基本を修得する。	疾病対策の変遷について講義資料をダウンロードし、事前に学習すること。
第3回	環境と健康Ⅰ：地球温暖化などの地球環境問題の機序、水俣病など環境汚染の発生原因を理解する。	地球温暖化について講義資料をダウンロードし、事前に学習すること。
第4回	環境と健康Ⅱ：米国元副大統領ゴア氏製作の映画「不都合な真実」を鑑賞し地球温暖化について詳細に学ぶ。	地球温暖化について事前に学習すること。
第5回	環境と健康Ⅲ：上下水道等、環境整備に関する基礎的な知識を学ぶ。	上下水道などの環境整備について講義資料をダウンロードし、事前に学習すること。

第 6 回	健康統計：健康，疾病，行動に関わる統計資料の読み方を学ぶ	健康統計について講義資料をダウンロードし、事前に学習すること。
第 7 回	疫学研究Ⅰ：疫学概念，疫学指標の意味，疫学方法論を学ぶ。	疫学概念・意味・方法について講義資料をダウンロードし、事前に学習すること。
第 8 回	疫学研究Ⅱ：疫学研究の誤差，スクリーニングの考え方について，栄養から疫学を考える。	疫学研究における誤差、スクリーニングについて講義資料をダウンロードし、事前に学習すること。
第 9 回	生活習慣病：生活習慣病の概念および予防対策について学ぶ。	生活習慣病の概念および予防対策について講義資料をダウンロードし、事前に学習すること。
第 10 回	疫学理論：疫学調査方法の概略について学ぶ。	疫学の理論について講義資料をダウンロードし、事前に学習すること。
第 11 回	メタボリックシンドロームと生活習慣：メタボリックシンドロームが起こる原因と生活習慣の関係について学ぶ。	メタボリックシンドロームと生活習慣について講義資料をダウンロードし、事前に学習すること。
第 12 回	認知症，喫煙：認知症と喫煙についてその概要を学ぶ。	認知症，喫煙：認知症と喫煙について講義資料をダウンロードし、事前に学習すること。
第 13 回	労働衛生：労働衛生の概念および代表的な職業病を理解する。	労働衛生について講義資料をダウンロードし、事前に学習すること。
第 14 回	感染症：感染症とその予防について概略を学ぶ。	感染症について講義資料をダウンロードし、事前に学習すること。
第 15 回	講義全体のまとめを行う。	今までの講義資料を見直して、疑問点、ポイントをチェックすること。
第 16 回	定期試験	

成績評価方法

平常点、レポート及び定期試験で総合的に評価する。

授業目標（達成目標）の 1～5 の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、

1. 公衆衛生学の歴史、概念に対して 6 割以上について概説できること。
2. 地球温暖化などの地球環境問題、水俣病などの環境汚染及び上下水道などの環境整備に対して 6 割以上について概説できること。
3. 健康に関する統計資料の読み方や疫学の基礎的な知識に対して 6 割以上について概説できること。
4. 疾病予防、生活習慣病予防、健康増進、健康寿命延伸に対する公衆衛生学的なアプローチの手法、考え方に対して 6 割以上について概説できること。
5. 講義で学んだ内容の 6 割以上に対して、信頼できる資料を引用して、わかりやすく説明できること。

以上の 5 点を達成することが求められる。

成績は、レポート（60 点）、定期試験（40 点）で総合的に判断する。

履修上の注意
関連科目：食品安全論
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
地理学基礎		福田 珠己	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
人間や社会が、周囲の空間をどのように認識し、価値づけ、表現していくのかを地理学的視野から考える。本年度は、地理学における中心的な概念の一つである「場所」(place)に焦点を当てる。地理学における「場所」概念の展開について、地理思想のなかで整理した後に、社会や人間と「場所」との関わりについて事例を通して、あるいは、自らの体験を振り返りながら、考察していく。
到達目標
社会における諸現象から問いをたて、地理学的な側面から考察する基礎的思考の習得を目標とする。具体的な達成目標は次のとおり。1. 地理学における「場所」概念を理解する。2. 社会における諸現象と関連づけて「場所」を論じることができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション：「場所」とは？	
第2回	地理的思考と「場所」	事前に指定された用語について調べる
第3回	「場所」概念と人文主義地理学	自分自身の「場所」経験（第1回目に小レポートとして提出）について再検討
第4回	「場所」とアイデンティティ（1）：「場所」に根ざすこと	事前に指定された用語について調べる
第5回	「場所」とアイデンティティ（2）：多様なスケールで考える	事前に指定された用語について調べる
第6回	「場所」とアイデンティティ（3）：他者の「場所」	事前に指定された用語について調べる
第7回	「場所」とアイデンティティ（4）：ジェンダーと「場所」	事前に指定された用語について調べる
第8回	「場所」とアイデンティティ（5）：セクシュアリティと「場所」	5回をふりかえって復習
第9回	「場所」と地図の力（1）：メディアとしての地図	身の回りにある地図について調べる
第10回	「場所」と地図の力（2）：地図と世界観	授業でとりあげた web page の復習
第11回	「場所」と地図の力（3）：地図と権力	3回をふりかえって復習

第 12 回	「場所」から現代社会／都市を考える（１）：場所の商品化（理論）	事前に指定された用語について調べる
第 13 回	「場所」から現代社会／都市を考える（２）：場所の商品化（事例から）	事前に指定された用語について調べる
第 14 回	「場所」から現代社会／都市を考える（３）：都市における抵抗	3 回をふりかえって復習
第 15 回	まとめ	
第 16 回	試験	
		まとまりのある一連の講義のあとで念入りに復習を行う。また、内容に即して紹介した参考文献を読むなどして、理解を深める。

成績評価方法

目標 1・2 の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、

- ・授業の内容を踏まえて「場所」概念について適切に解説することができる
- ・具体的な例と結びつけながら「場所」について適切な議論を展開することができる

上記 2 点を達成することが求められる。成績評価は、期末試験（60%）、平常レポート・グループディスカッションなど授業への取り組み（40%）をもとに行う。

履修上の注意

（関連科目）

（備考）社会の諸現象を地理学的に考察することを主眼に置いているため、授業計画に変更が生じることもあります。必要に応じて、初回授業時などに、改訂版シラバスを配布します。

教科書

指定しない。プリント配布。

参考文献

授業中に指示

授業名称		担当教員氏名	
経済学基礎		西川弘展	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
社会システムの科学としての経済学は、過去およそ250年にわたり、現実の経済社会の課題を指摘し、対応策の方向性を与え、またそれを基礎づけるべく体系化が繰り返され、発展を遂げてきた。歴史的発展の中で経済学は、その科学的純粋性を高めてきているが、その本質において現実問題への対応策を志向する学問である。この授業は、こうした性質を持つ経済学の成り立ちと理論構成、そして現実問題への適用事例を学ぶことを目的としている。そこでまず経済学の全体像について、(1) 経済学の成立と発展の経緯、(2) 市場システムの構造と機能（ミクロ経済学の内容）、(3) 一国経済の財市場と貨幣・金融市場の相互作用（マクロ経済学の内容）の初歩的事項を概略的に学習することを通じ、経済学という学問の魅力を感じ取り、また現代社会において経済学を学ぶ実践的な意義を確認する。次に、上記の(1)(2)(3)の概略的な学習に基づいて、社会システムの持続可能性と密接に関連したいくつかの問題事例に即しながら、それらへの対応策の経済学的アプローチについて考える。
到達目標
本授業では、以下に示す説明や思考が適切にできることを到達目標とする。 1. 人間と社会をめぐる思想的展開の中で、社会システムの維持・発展という課題を強く意識しながら経済学という学問が成立し、形成され、発展してきたことを、歴史的背景と歴史上の経済学者の経済学説や政策論とを対応づけながら適切に理解し、わかりやすく説明できること。 2. 経済学の基礎的内容（(1) 市場システムの構造と機能というミクロ経済学の内容、(2) 一国経済の財市場と貨幣・金融市場の相互作用というマクロ経済学の内容）を適切に理解し、基本的概念および簡単な数式や図を適切に組み合わせて用いながら、経済システムの仕組みを経済学的に説明できること。またこれら学習事項の現実の経済現象への適用可能性への視野を開くこと。 3. 諸個人の幸福の達成と社会システムの持続可能性の両立という観点に立ち、社会システムの持続可能性を脅かす諸問題の事例をいくつか取り上げて、学習で得た知識を適切に活用して、それら諸問題に対する対応策を経済学的にアプローチしながら適切に考えられること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	社会システムの科学としての経済学 ：経済システムの認識と再生産の構造	授業内容を復習し、紹介された関連資料に実際に当たり、知識を補充し、関心を深めること。
第2回	社会の秩序と経済（創設期の経済学） ：初期の古典派経済学	授業内容を復習し、紹介された関連資料に実際に当たり、知識を補充し、関心を深めること。
第3回	人間の幸福と経済（確立期の経済学） ：後期の古典派経済学	授業内容を復習し、紹介された関連資料に実際に当たり、知識を補充し、関心を深めること。
第4回	経済学の近代化（経済学の専門化） ：ミクロ経済学とマクロ経済学の登場	授業内容を復習し、紹介された関連資料に実際に当たり、知識を補充し、関心を深めること。

第5回	市場、効率、公正 1 ：経済主体と経済システムの構造	授業内容を復習し、紹介された関連資料に実際に当たり、知識を補充し、関心を深めること。
第6回	市場、効率、公正 2 ：市場システムの構造と機能	授業内容を復習し、紹介された関連資料に実際に当たり、知識を補充し、関心を深めること。
第7回	市場、効率、公正 3 ：市場システムの機能と社会的諸問題	授業内容を復習し、紹介された関連資料に実際に当たり、知識を補充し、関心を深めること。
第8回	財市場における国民所得の決定 ：GDP の概念と GDP の決定メカニズム	授業内容を復習し、紹介された関連資料に実際に当たり、知識を補充し、関心を深めること。
第9回	貨幣・金融市場における利子率の決定 ：貨幣の需要・供給と利子率	授業内容を復習し、紹介された関連資料に実際に当たり、知識を補充し、関心を深めること。
第10回	財市場と貨幣・金融市場の相互作用 ：一国経済システムの構造	授業内容を復習し、紹介された関連資料に実際に当たり、知識を補充し、関心を深めること。
第11回	経済政策 ：財政政策と金融政策	授業内容を復習し、紹介された関連資料に実際に当たり、知識を補充し、関心を深めること。
第12回	持続可能性と経済学 1 ：エネルギー問題とエネルギー政策	授業内容を復習し、紹介された関連資料に実際に当たり、知識を補充し、関心を深めること。
第13回	持続可能性と経済学 2 ：財政の持続可能性	授業内容を復習し、紹介された関連資料に実際に当たり、知識を補充し、関心を深めること。
第14回	持続可能性と経済学 3 ：金融システムの安定性	授業内容を復習し、紹介された関連資料に実際に当たり、知識を補充し、関心を深めること。
第15回	持続可能性と経済学 4 ：社会保障の持続可能性	授業内容を復習し、紹介された関連資料に実際に当たり、知識を補充し、関心を深めること。
第16回	定期試験	

成績評価方法

到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、

1. 人間と社会をめぐる思想的展開の中で、社会システムの維持・発展という課題を強く意識しながら経済学という学問が成立し、形成され、発展してきたことを、歴史的背景と歴史上の経済学者の経済学説や政策論とを対応づけながら適切に理解し、わかりやすく説明できること。
2. 経済学の基礎的内容（（1）市場システムの構造と機能というミクロ経済学の内容、（2）一国経済の財市場と貨幣・金融市場の相互作用というマクロ経済学の内容）を適切に理解し、基本的概念および簡単な数式や図を適切に組み合わせて用いながら、経済システムの仕組みを経済学的に説明できること。またこれら学習事項の現実の経済現象への適用可能性への視野を開くこと。
3. 諸個人の幸福の達成と社会システムの持続可能性の両立という観点に立ち、社会システムの持続可能性を脅かす諸問題の事例をいくつか取り上げて、学習で得た知識を適切に活用して、それら諸問題に対する対応策を経済学的にアプローチしながら適切に考えられること。

の2点を達成することが求められる。

授業中に複数回提出する小課題（40％）と期末試験（60％）により、上に示した到達目標への達成度を成績として評価する。

履修上の注意
関連科目：ミクロ経済学、マクロ経済学、公共経済学、環境経済・経営学、企業の経済学 注意事項：受講に際して次の2点に留意すること。(1) 経済学関連科目(上記関連科目)を学ぶ受講者にとっては、後の学習をスムーズに進めるための導入的内容が提供されるので、積極的な受講と主体的な事前・事後学習が求められる。(2) 上記関連科目のような経済学ないし経済学的アプローチを学ばない受講者にとっては、基礎的かつ完結性のある内容が提供され、各自が重点化する学習を側面から支える内容であるので、(1)の場合と同様に積極的な受講と主体的な事前・事後学習が求められる。
教科書
授業中に適宜資料を配布する。
参考文献
必要に応じて紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
公共政策学基礎		千葉知世	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
我々は日々の生活を送るうえで大小さまざまな問題群への対処を迫られている。そのうち、個人の力では解決できず、社会(特に政府)が解決すべきであると認識された問題を政策問題という。公共政策とはこの政策問題を解決するためのものである。本講義では社会科学の視点に立ち公共政策の基本的な視点と考え方を学ぶ。具体的には公共政策がどのように決定され、どのような手段を用いて実施されるのかについて、基本的な考え方を学び、政策過程についての理解を深める。また、具体的事例として様々な環境問題のケースを扱うことで、環境政策を学ぶための基礎知識を習得する。
到達目標
本授業では、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 公共政策が立案・実施・評価される一連のプロセスを理解し、説明できること。 2. 公共政策に関連する様々な主体とその役割について説明できること。 3. より良い公共政策を形成するための方法について、自分なりに考察できるようになること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	授業ガイダンス	
第2回	公共政策とは何か	公共政策学の性質
第3回	公共政策学の系譜	公共政策学の誕生から現在までの流れ
第4回	政策形成(問題の発見・分析とアジェンダ設定)	政策過程の初期段階
第5回	公共政策の主体その1(政府主体)	中央政府と地方自治体の役割
第6回	公共政策の主体その2(非政府主体)	非政府組織の役割、民間委託
第7回	公共政策の費用と効果	政策の費用対効果
第8回	公共政策に対する制約	不確実性と様々な制約
第9回	政策決定	政策の決定過程を説明するモデル
第10回	政策実施	政策実施の手段や行政活動
第11回	政策評価	政策評価の目的や方法
第12回	公共政策と価値	政策策定を支える諸価値の対立と対話
第13回	公共政策と市民参画	市民参画の意義や手法
第14回	政策と科学のインターフェイス	公共政策と科学の関係
第15回	持続可能な社会と公共政策	環境政策とガバナンス
第16回	定期試験	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 公共政策の性質およびそれが取り組む課題の構造について説明できること 2. 公共政策に関連する様々な主体とその役割について説明できること 3. 公共政策の手段およびその決定プロセスについて説明できること の3点を達成することが求められる。 成績は授業内小テスト（40%）と期末試験（60%）で決める。
履修上の注意
関連科目：情報システムとサステイナビリティ、自然システムとサステイナビリティ、社会システムとサステイナビリティ、人間システムとサステイナビリティ、環境社会システム学概論、企業の経済学、環境法 1、企業法、環境社会学、公共経済学、環境政策学
教科書
授業中に適宜紹介する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
経済活動と法		古川 朋雄	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
我々は、生存のための経済活動を営みつつもそれに起因する環境や人への悪影響を必然的に発生させており、それらに対して多様な法が機能している。 そこで本講義では、「環境法1」・「環境法2」を受講する上で必要となる法学の基礎知識として、特に企業という経済活動の当事者に対して、法がどのような規律付けを行っているかを学ぶ。現代における自然環境に関する問題の多くは経済活動から生じているが、ただ経済活動に規制を加えるだけでは、持続可能な社会を実現することはできない。環境問題への対処と経済社会の発展の両立を考えるためには、経済社会の構造や経済活動の主な主体である企業について理解しておくことは不可欠である。ここで学ぶ私法の基礎理解は、「行政活動と法」（公法の基礎）や「国際法と共生社会」（国際法の基礎）と共に、環境法を理解する上で重要なものである。 授業の序盤ではまず、法学の初学者に向けた入門的な説明を行い、民法上の所有権など現代の経済社会を支える基本概念の説明を行う。また、企業が公共事業に関与する場合などには、行政法などによる規制も別途関係することから、必要に応じて、私法との違いについても説明する。そのうえで、特に会社法や金融商品取引法を中心として、事業を行う際の取引環境を形成する上で基礎となる法規制に関する概括的な説明を行い、その基本構造や問題点、重要論点について解説する。授業は講義形式で行う。
到達目標
この授業では、事業を行う際の取引環境を形成する上で基礎となる会社法・金融商品取引法の基本構造や問題点、重要論点を理解することを目標とする。 具体的には、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 経済社会を支える私法上の基本概念を正確に理解し、説明できること。 2. 会社法や金融商品取引法の規定の概要や趣旨を正確に理解し、説明できること。 3. 事業形態やガバナンスに関する会社法上の論点を正確に把握し、規制の内容や関連する論点について説明できること。 4. 資金調達や不公正取引に関する金融商品取引法上の論点を正確に把握し、規制の内容や関連する論点について説明できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	授業のガイダンス・法学の意義と役割	法学における議論の視点や社会問題とのかかわり、研究に用いる資料や分析手法等
第2回	日本法の構造・経済社会を支える私法上の基本概念（1）－財産権と経済社会	日本法の体系や分類（特に公法と私法の違い）、所有権概念と経済社会との関係等
第3回	経済社会を支える私法上の基本概念（2）－契約の基本原則	私法上の契約に関する基本原則、行政契約等に関する行政法上の規律との違い
第4回	事業に関する法規制	事業に関する法体系、主要な法律に関する基

		礎説明、特定の事業に関する業法等による規制
第5回	事業形態の種類と選択	私法上の事業形態の種類、組合と会社における構成員の位置づけ
第6回	資金調達（１）－資金調達手段の種類	事業を行う際の資金調達手段の種類と法律の適用関係
第7回	資金調達（２）－会社法上の手続規制	会社法上の株式の発行に関する手続、生じうる問題への対処
第8回	資金調達（３）－金融商品市場における開示規制等	金融商品取引法上の情報開示規制、金融商品取引業者等に対する規制
第9回	株式会社のガバナンス（１）－株式会社の機関構成	会社法上の株式会社の機関構成、ソフトローによる規律付け（ソフトローに関する基礎説明を含む）
第10回	株式会社のガバナンス（２）－株主総会	会社法上の株主総会の位置づけや開催のための手続、株主に認められる権利など
第11回	株式会社のガバナンス（３）－取締役	会社法上の取締役の権限や義務、責任など
第12回	株式会社のガバナンス（４）－経営者に対する監視監督	株式会社における経営者の監視、コーポレート・ガバナンスやCSRをめぐる近年の議論状況
第13回	利害関係者の救済と法的責任（１）－会社に対する責任	企業不祥事をめぐる関係者の責任分担、会社法上の役員の対会社責任
第14回	利害関係者の救済と法的責任（２）－第三者に対する責任等	企業不祥事による外部の被害者に対する責任分担、会社法上の役員の対第三者責任、責任追及の手段
第15回	利害関係者の救済と法的責任（３）－金融商品市場における行為規制	金融商品取引法上の投資者保護や市場の公正性確保のための規制（不公正取引規制など）
第16回	試験	

成績評価方法

授業目標（達成目標）の１～４の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、

1. 私法上の財産権や契約に関する基本概念や原則を正確に理解し、説明できること。
2. 事業形態やガバナンス、資金調達に関する会社法や金融商品取引法の規定の概要や趣旨を正確に理解し、説明できること、
3. 事業形態やガバナンスに関する会社法上の論点を正確に把握し、関連する判例や学説について説明できること、
4. 資金調達に関する金融商品取引法上の論点を正確に把握し、関連する判例や学説について説明できること、

の４点の達成が求められる。

成績は、定期試験（100％）に基づいて評価する。

履修上の注意
関連科目：行政活動と法、国際法と共生社会、環境法 1、環境法 2、環境経済・経営学、環境政策学
教科書
授業は、教員が毎回配布するレジメを元に進める。 また、受講者は最新版の六法を持参すること。
参考文献
初回に紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
環境哲学・倫理学		上柿崇英	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
環境思想の成立史、思想的な展開過程を紹介しながら、環境哲学／倫理学における基本的な命題・論理構造について取り上げる。またその過程で“環境”とは何か、“倫理”とは何かについて本質的に問い、倫理の揺らぎや人間存在の倫理といった発展的観点についても紹介する。
到達目標
環境の時代を目指して、環境哲学／倫理学が成そうとしたこと、成せなかったことを理解し、「環境の世紀」を生きるための心構えを養うことを目標とする。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション	
第2回	環境、自然、エコ、持続可能性に関するターミノロジー	授業で話された内容を復習する。
第3回	環境主義の誕生とその問題意識	授業で話された内容を復習する。
第4回	自然保護主義の誕生とアメリカ的問題	授業で話された内容を復習する。
第5回	環境と国際社会（70年代～80年代）	授業で話された内容を復習する。
第6回	エコロジズム——イデオロギーとしてのエコロジー	授業で話された内容を復習する。
第7回	環境倫理学の萌芽	授業で話された内容を復習する。
第8回	環境倫理学の諸学説	授業で話された内容を復習する。
第9回	環境倫理学のまとめとディープ・エコロジーの導入	授業で話された内容を復習する。
第10回	ディープ・エコロジー	授業で話された内容を復習する。
第11回	ディープ・エコロジーのまとめ	授業で話された内容を復習する。
第12回	現代環境思想の衰退	授業で話された内容を復習する。
第13回	持続可能性概念とその問題性	授業で話された内容を復習する。

第 14 回	エコロジズムから新たな環境哲学の試みへ	授業で話された内容を復習する。
第 15 回	人間の“生”の現実と持続可能性	授業で話された内容を復習する。

成績評価方法
環境哲学／倫理学に関わる言説を自ら咀嚼した上で、自身の言葉によって表現できることが求められます。
履修上の注意
適宜指示します。
教科書
毎回の授業で資料を配付する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
社会学基礎		工藤宏司・藤田 渡・西田芳正	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
社会学および隣接領域の共有財となっている主要なテーマや概念について、順次概説する。 本講義では、社会学および隣接諸領域がこれまで培ってきた諸研究の成果に基づきながら、近・現代世界に特有の社会的事象を認識するために必要と考えられる社会理論の基本的諸類型と重要な諸概念を学ぶことを通じて、現代社会システムの動態や構造とそれが抱える諸問題に関する社会科学的な観察力の涵養を目指す。またこれを基盤としながら、さまざまなヒューマンサービスに求められる、人間と社会に対する共感的な理解と実践的かつ批判的な判断力の獲得を目標とする。
到達目標
1) 現代社会の諸事象・現象を探究する社会学固有の理論枠組や概念、主要な調査方法について説明することができる。 2) 社会学のみならず、広く社会科学において利用される主要な統計・指標・データの活用方法について説明することができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション：社会学の位置づけおよび小史（西田）	授業で扱う話題に関して、紹介する文献や資料の他、社会学関連の専門書、辞典・事典等も適宜活用して知識の整理と補足を自主的に行うこと。
第2回	個人と社会(1):社会的行為と社会的役割および社会関係（工藤）	授業で扱う話題に関して、紹介する文献や資料の他、社会学関連の専門書、辞典・事典等も適宜活用して知識の整理と補足を自主的に行うこと。
第3回	個人と社会(2):社会集団と組織:概念と類型（工藤）	授業で扱う話題に関して、紹介する文献や資料の他、社会学関連の専門書、辞典・事典等も適宜活用して知識の整理と補足を自主的に行うこと。
第4回	個人と社会(3):社会関係資本と生活世界（工藤）	授業で扱う話題に関して、紹介する文献や資料の他、社会学関連の専門書、辞典・事

		典等も適宜活用して知識の整理と補足を自主的に行うこと。
第5回	社会階層と不平等(1):社会階層研究の歴史と現在 (西田)	授業で扱う話題に関して、紹介する文献や資料の他、社会学関連の専門書、辞典・事典等も適宜活用して知識の整理と補足を自主的に行うこと。
第6回	社会階層と不平等(2):日本社会の階層・不平等問題 (西田)	授業で扱う話題に関して、紹介する文献や資料の他、社会学関連の専門書、辞典・事典等も適宜活用して知識の整理と補足を自主的に行うこと。
第7回	社会階層と不平等(3):教育と階層、文化資本 (西田)	授業で扱う話題に関して、紹介する文献や資料の他、社会学関連の専門書、辞典・事典等も適宜活用して知識の整理と補足を自主的に行うこと。
第8回	社会制度と社会システム(1):社会システムの基本概念 (藤田)	授業で扱う話題に関して、紹介する文献や資料の他、社会学関連の専門書、辞典・事典等も適宜活用して知識の整理と補足を自主的に行うこと。
第9回	社会制度と社会システム(2):政治システム、経済システム、法システム (藤田)	授業で扱う話題に関して、紹介する文献や資料の他、社会学関連の専門書、辞典・事典等も適宜活用して知識の整理と補足を自主的に行うこと。
第10回	社会制度と社会システム(3):家族制度と現代家族の変容 (工藤)	授業で扱う話題に関して、紹介する文献や資料の他、社会学関連の専門書、辞典・事典等も適宜活用して知識の整理と補足を自主的に行うこと。
第11回	社会制度と社会システム(4):メディアとコミュニケーション (工藤)	授業で扱う話題に関して、紹介する文献や資料の他、社会学関連の専門書、辞典・事典等も適宜活用して知識の整理と補足を自主的に行うこと。
第12回	現代の社会変動と社会問題(1):グローバル化と人口変動 (藤田)	授業で扱う話題に関して、紹介する文献や資料の他、社会学関連の専門書、辞典・事典等も適宜活用して知識の整理と補足を自主的に行うこと。
第13回	現代の社会変動と社会問題(2):新しい社会問題と社会的連帯・共生社会 (藤田)	授業で扱う話題に関して、紹介する文献や資料の他、社会学関連の専門書、辞典・事典等も適宜活用して知識の整理と補足を自主的に行うこと。

第 14 回	社会学の方法:理論研究と実証研究(社会調査) (藤田)	授業で扱う話題に関して、紹介する文献や資料の他、社会学関連の専門書、辞典・事典等も適宜活用して知識の整理と補足を自主的に行うこと。
第 15 回	まとめ:社会学の役割と課題 (西田)	授業で扱う話題に関して、紹介する文献や資料の他、社会学関連の専門書、辞典・事典等も適宜活用して知識の整理と補足を自主的に行うこと。
第 16 回	期末試験	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。 単位を取得するためには、1)現代社会の諸事象・現象を探究する社会学固有の理論枠組や概念、主要な調査方法について説明することができること、2)広く社会科学において利用される主要な統計・指標・データの活用方法について説明することができることの2点を達成することが求められる。 成績を評価する手段として、期末に実施する筆記試験に加えて、授業内で課すミニレポートやミニツツペーパー等も総合して評価する。成績評価に用いる割合は、期末試験が70%、その他が30%である。
履修上の注意
(関連科目) 教養科目を含む社会学系の諸科目
教科書
授業中に資料を配付する。
参考文献
指定しないが、有益と思われる文献については講義のなかで随時紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
環境社会システム学卒業研究		竹中規訓、伊藤康人、大塚耕司、興津健二、大山克己、中山祐一郎、星英之、黒田桂菜、藤井佑介、阿久井康平、花村周寛、生田英輔、遠藤崇浩、住田守道、古川朋雄、吉川丈、千葉知世、天島華織、西川弘展、酒井隆史、上柿崇英、山本由美子、住友陽文、高木佐知子、西尾純二、水野真彦、福田珠己、工藤宏司、宮畑一範、藤田渡、山東功	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
6	4 通	必修	実験・実習

授業概要
環境社会システム学類を構成する自然環境学、社会環境学、環境哲学・政策学それぞれの専門分野における研究テーマを設定し、卒業論文の作成を行う。その作成プロセスにて学術研究の計画、実験、調査、資料収集、解析などを教員の指導のもとで遂行し、研究調査結果のまとめ方、考察の方法、口頭発表による効果的なプレゼンテーション方法などを習得する。
到達目標
本科目では、環境社会システム学類を構成する自然環境学、社会環境学、環境哲学・政策学それぞれの専門分野における研究テーマを設定し、卒業論文の作成を行う過程で、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 先行研究を整理したうえで、卒業研究のテーマを決定できること。 2. 卒業研究のテーマに必要な、実験、調査、分析等ができること。 3. 研究成果を卒業論文として取りまとめ、的確に報告・発表できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回 ～	オリエンテーション (卒業研究の進め方)	卒業研究の進め方を復習する。
第2回 ～ 第30回	・個人ごとの研究テーマへの取り組み ・文献調査や実験、分析、計算、解析などを行い、討議やセミナーを重ねる。 ・研究結果を卒業論文としてまとめ、要旨も作成する。	研究に必要な文献やデータの収集、解析などを適切に行うこと。
第31回	卒業論文発表会 学類が主催する口頭発表会	授業内で指示する。

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 先行研究を整理したうえで、卒業研究のテーマを決定できること。 2. 卒業研究のテーマに必要な、実験、調査、分析等ができること。 3. 研究成果を卒業論文として取りまとめ、的確に報告・発表できること。 の3点を達成することが求められる。 成績は、卒業論文の研究に取り組む姿勢（20%）、卒業論文および要旨（60%）、発表（20%）で評価する。
履修上の注意
関連科目：環境社会システム学類の全科目
教科書
卒業研究に関連する論文・資料など。
参考文献
指導教員より、個別に紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
地域実践演習		千葉知世、大塚耕司、伊藤康人、岡本真彦	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	1 後	選択	演習

授業概要
本科目は、PBL プログラム（地域再生）の必修科目として位置づけられている。授業の第1回では、地域での実践活動に関する基礎知識に関する講義を行うとともに、担当教員が研究対象として活動している実際のフィールドを体験することを通して、地域課題を発見するという本授業及びPBL プログラム（地域再生）、PBL プログラム（教育保障）の目的を説明する。次に、1 グループ 4～5 名で構成されるグループ分けを行い、各グループでフィールドワークの企画を行うとともに、担当教員が指示した現地活動を行う際の注意事項を遵守しつつフィールドワークを体験する。さらに、活動の成果を報告書にまとめるとともに、最終回に成果発表（プレゼンテーション）を行う。
到達目標
本科目は、コミュニティーレベルでの活動の重要性を理解するとともに、フィールドワークの体験を通して地域の課題を発見し地域再生に積極的に取り組むことのできるマインドを身につけることを目標とする。具体的には、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 演習テーマに関する現状と課題について説明できること。 2. 企画段階での検討、様々な機関との連携協力、無理のない運営等の重要性を説明できること。 3. 協調性をもって、グループ活動を円滑に行えること。 4. 活動の成果をわかりやすくかつ正確に他人に伝えられること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション（地域活動の基礎知識、本授業及びPBL プログラム（地域再生）のねらい）、PBL プログラム（教育保障）のねらい、グループ分け（千葉）	
第2回	第1回フィールドワークの企画・計画・体験	各フィールドの特色について事前に調べる。
第3回		
第4回		
第5回		
第6回		
第7回		
第8回	グループ間の情報共有	
第9回	第2回フィールドワークの企画・計画・調整・体験	各フィールドの特色について事前に調べる。
第10回		
第11回		
第12回		
第13回		
第14回		
第15回	成果発表と質疑応答（千葉）	

成績評価方法
授業目標の1～4の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 演習テーマに関する現状と課題について説明できること。 2. 企画段階での検討、様々な機関との連携協力、無理のない運営等の重要性を説明できること。 3. 協調性をもって、グループ活動を円滑に行えること。 4. 活動の成果をわかりやすくかつ正確に他人に伝えられること。 の4点を達成することが求められる。 成績は、講義に関するレポート（20%）、グループ活動に取り組む姿勢（20%）、フィールドワーク報告書（40%）、発表会でのプレゼンテーションと質疑応答（20%）で評価する。
履修上の注意
関連科目：大阪の都市づくり、環境・生命・倫理、自然環境学概論、公共政策学基礎、PBL 演習（地域再生）、特別支援教育、教育社会学、教育・学校心理学、スクール・ソーシャルワーク概論、心理学と心理的支援、PBL 演習（教育保障）
教科書
授業の中で適宜資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
地球環境の化学		竹中 規訓	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
地球環境における物質循環を理解するために、まず大気の大気熱力学の後、大気組成、平均滞留時間の考え方を講義、反応速度論の基礎の講義後、微量気体の濃度と反応を講義する。21 世紀の環境問題と言われている大気エアロゾルの講義の後、電磁波の基礎から地球の温暖化問題と成層圏オゾン問題を根本から理解できるように化学および物理を中心として講義する。さらに、水圏の話にうつり、水溶液化学の基礎とその環境中での役割を説明する。基礎的な化学の知識を有していることを前提として講義を行う。
到達目標
地球の大気圏、河川・湖沼・海洋の水圏で起こっている現象を理解するための化学の基礎を学ぶことで、環境中で起こっている様々な現象を科学的に説明することができ、また、大気圏および水圏における物質循環プロセスの役割、酸化還元反応、河口付近で起こる現象について理解できることを目標とする。具体的には、以下の能力を身につけることを目標とする。
1. 熱力学、反応速度論に関する知識について正しく理解できること。
2. 物質循環や地球環境問題に関する知識について正しく理解できること。
3. 授業時間内に課す課題を自分で調べ、レポートを作成できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	授業の流れの説明。地球環境問題の基礎	SI 単位および大気、水中の物質濃度を表す単位について確認。”新しい物理化学”、第 1 章、第 2 章の予習。
第 2 回	物質の状態、相平衡、状態方程式	”新しい物理化学”、第 3 章の予習。
第 3 回	大気の大気熱力学 1：エンタルピーとエントロピー	”新しい物理化学”、第 4 章、大気熱力学第一法則と第二法則の予習。
第 4 回	大気の大気熱力学 2：自由エネルギーと平衡大気の大気熱力学	”新しい物理化学”、第 5 章、自由エネルギーと平衡の予習。
第 5 回	大気の大気熱力学 3：地球大気の特徴と平均滞留時間および反応速度論の基礎	”新しい物理化学”、第 5 章、自由エネルギーと平衡、および第 7 章、反応速度論の予習。
第 6 回	反応速度論	”新しい物理化学”、第 7 章、反応速度論を復習。
第 7 回	熱力学と反応速度論のまとめ	熱力学と反応速度論の全体の内容を復習。
第 8 回	対流圏の化学	平衡反応の予習。および地球環境学で学習した対流圏の化学の復習。
第 9 回	エアロゾル、酸性雨	地球環境学で学習したエアロゾル、酸性雨とヘンリーの法則について予習。
第 10 回	電磁波と地球の温暖化問題	電磁波について予習。地球環境学で学習した温暖化の復習。

第 11 回	成層圏の化学	電磁波、原子の構造の予習。地球環境学で学習したオゾン層の復習。
第 12 回	水の特異性と酸塩基反応	参考書"Aquatic Environmental Chemistry"の 3 章、The acidity of water または水溶液の pH およびその求め方について予習。また、"新しい物理化学"第 4 章のエンタルピーの求め方を復習。
第 13 回	酸化還元反応と淡水の化学	参考書の"Aquatic Environmental Chemistry"の 5 章、Oxidation and reduction または、酸化数および酸化還元反応について予習。
第 14 回	溶解・沈殿・コロイドおよび河口付近の化学	参考書"Aquatic Environmental Chemistry"の 6 章または、溶解度積、コロイド粒子、塩析について予習。
第 15 回	海洋循環と地球環境への影響	海洋循環について調べておくこと。
第 16 回	定期試験	

成績評価方法

到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、

1. 熱力学、反応速度論に関する知識について正しく理解できること。
2. 物質循環や地球環境問題に関する知識について正しく理解できること。
3. 授業時間内に課す課題を自分で調べ、レポートを作成できること。

の 3 点を達成することが求められる。いずれの達成目標もそれらに関する 6 割以上の設問に正しくこたえられる必要がある。

成績の評価は、中間試験(40%)、期末試験(40%)、レポート(20%)で 6 割以上を取得により合格とする。

履修上の注意

関連科目：[自然システムとサステナビリティ](#)

教科書

新しい物理化学地球環境を守る基礎知識、三島健司他著、化学同人(2004)。その他、適宜資料を配付する。

参考文献

- ・ Aquatic Environmental Chemistry, Alan G. Howard 著, Oxford University press(1998).
- ・ Biogeochemistry: An analysis of global change, William H. Schlesinger, Academic Press, 1997.
- ・ 物理化学の基礎, P. W. Atkins・M. J. Clugston 著, 千原秀昭・稲葉章訳, 東京化学同人(1984).
- ・ アトキンス物理化学第 8 判上・下, Peter Atkins and Julio de Paula 著, 千原秀昭, 中村亘男翻訳, 東京化学同人(2009).

授業名称		担当教員氏名	
地域・都市環境学		阿久井康平	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
人間生活にとって関連性の深い都市域や都市周辺地域を対象として、里地・里山での自然環境破壊の現状と、現在表出している様々な問題点や課題について理解を深める。さらに、都市計画の考え方の基礎となる理想都市計画について学習するとともに、大阪を題材とした都市構造・自然環境の変化や、歴史的まちなみの保全について学習する。さらに、ヒートアイランド現象と緑地との関係、私たちの生活を支える安全で安心なまちづくり、人にやさしいまちづくりの基本となるユニバーサル・デザインについて学習することによって、今後の都市域や周辺地域での持続的な発展に資する、課題発掘や問題解決のための基礎的能力を身につけることを目的とする。
到達目標
本科目では、以下の能力を身につけることを目標とする。 ・都市周辺地域における里山の現状について説明できること。 ・理想都市計画について概要を説明できること。 ・大阪における都市構造や緑の骨格軸について、歴史的視点を踏まえて説明できること。 ・歴史的まちなみ保全に関する法制度について概略を説明できること。 ・ヒートアイランド現象の緩和の観点から都市緑化の手法を説明できること。 ・安全・安心まちづくりと人にやさしいまちづくりについて説明できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	地域の環境、都市の環境（概要説明）	都市域や周辺地域で起こっている自然環境問題を復習する。
第2回	地域環境の現状（1） ：里山の現状	里山で起こっている現状を復習する。
第3回	地域環境の現状（2） ：里山の環境と人の生活	里山での暮らしについて復習する。
第4回	地域環境の評価方法 ：自然環境と景観の保全	自然地域での環境や景観評価方法について復習する。
第5回	都市環境づくりの歴史 ：理想都市計画の系譜	理想都市計画について復習する。
第6回	都市と農村との関係 ：田園都市とニュータウン計画	田園都市とは何かをについて復習する。
第7回	大阪の歴史と都市構造	大阪の都市構造とその変遷について復習する。
第8回	大阪の歴史と自然環境	大阪の自然環境とその変遷について復習する。

第 9 回	歴史的まちなみ保全の系譜	歴史的まちなみ保全の系譜について復習する。
第 10 回	歴史的まちなみ保全の実践事例	歴史的まちなみ保全の実践事例について復習する。
第 11 回	都市における自然環境共生 ～ヒートアイランドと風の道～	ヒートアイランド現象と風の道について復習する。
第 12 回	都市における自然環境共生の実践事例	都市における自然環境共生の実践事例について復習する。
第 13 回	安全・安心まちづくり ：防災・減災とまちづくり	安全・安心まちづくりについて復習する。
第 14 回	人にやさしいまちづくり ：ユニバーサル・デザイン	人にやさしいまちづくりについて復習する。
第 15 回	地域・都市環境のまとめ（総括）	本講義の主要な内容をまとめておく。 定期試験の準備
第 16 回	定期試験	

成績評価方法

到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、

- ・都市周辺地域における里山の現状について説明できること。
- ・理想都市計画について概要を説明できること。
- ・大阪における都市構造や緑の骨格軸について、歴史的視点を踏まえて説明できること。
- ・歴史的まちなみ保全に関する法制度について概略を説明できること。
- ・ヒートアイランド現象の緩和の観点から都市緑化の手法を説明できること。
- ・安全・安心まちづくりと人にやさしいまちづくりについて説明できること。

の6点を達成することが求められる。成績は、期末テストを80%、授業への積極的な参加度を20%として100点満点で評価する。

履修上の注意

関連科目：環境社会システム学概論、景観計画学、陸域環境再生学、環境システム学演習 1,2,3

教科書

授業中にプリントを配付，デジタルプロジェクタ等の使用によるビジュアルな資料・事例を提示する。

参考文献

授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
環境デザイン通史		花村周寛	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
人類が環境にどのようなまなざしを向け、また環境をどのように改変してきたのかについて、有史前から現代までの時間スケールの通史でレビューする。補助線として風景、移動、デザインという三つを基軸にして、世界史の概略を交えながら、それぞれの時代において人々が何を求め、どのような解決策を見出してきたのか、またそれが人々の認識と物理的な環境の改変にどのように結びついてのかについて解説する。それによって、環境デザインを考える上での基礎的な知識を身につけるとともに、長尺で思考するモノの見方をトレーニングする。
到達目標
本授業では、風景、移動、デザインという補助線から環境デザインを主たるテーマに文明史を通史でレビューすることで以下の能力を身につけることを達成目標とする。 1. 環境デザインを考える上での基礎的な知識 2. 各時代で共有される価値観への理解 3. 自然、政治、文化、技術、芸術への横断的思考 4. 長尺での思考

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	ガイダンス	
第2回	風景とまなざし・移動と観光・景観とデザイン	授業で話された内容について復習する。
第3回	移動する人類と風景・環境創造の起源ほか	授業で話された内容について復習する。
第4回	風土が規定する精神・庭のコスモロジーほか	授業で話された内容について復習する。
第5回	近代的認識の萌芽・風景の発見ほか	授業で話された内容について復習する。
第6回	風景の政治性・観光とアイデンティティほか	授業で話された内容について復習する。
第7回	メディアが開く知覚・イメージの複製ほか	授業で話された内容について復習する。
第8回	万博とデザイン・鉄道の発明と観光開発ほか	授業で話された内容について復習する。
第9回	産業革命とデザインの誕生・機能主義ほか	授業で話された内容について復習する。
第10回	都市問題と都市改造・モダニズム建築ほか	授業で話された内容について復習する。
第11回	場所から空間へ・建築家の都市デザインほか	授業で話された内容について復習する。
第12回	消費への欲望・デザインとマーケティングほか	授業で話された内容について復習する。
第13回	ポストモダン都市批判・共同性の復活ほか	授業で話された内容について復習する。
第14回	まなざしのデザインと風景異化論	授業で話された内容について復習する。
第15回	質疑応答	

成績評価方法
授業目標の1～4の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 環境デザインを考える上での基礎的知識 2. 各時代で共有される価値観への理解 3. 自然、政治、文化、技術、芸術への横断的思考 4. 長尺での思考 の4点を達成することが求められる。成績は授業内レポート（100%）で評価する。
履修上の注意
関連科目：情報システムとサステイナビリティ、自然システムとサステイナビリティ、社会システムとサステイナビリティ、人間システムとサステイナビリティ、環境社会システム学概論
教科書
授業中に適宜資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
海洋環境生態学		大塚耕司	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
本授業では、海洋環境と生態系の機能と構造を理解させるとともに、生物の動態と周辺環境とのかかわりについて学習させる。まず、海洋および沿岸域の基本構造について講義し、次に、海洋の流れ、潮汐と潮流、波、海水組成といった海洋の物理・化学過程とその時空間変動について講義する。また、外洋、沿岸域、深海底の生態系の特徴について講義し、さらに、生態系モデリングの基礎について講義する。
到達目標
海洋環境と生態系の基本的な機能と構造を理解するとともに、生物の動態と周辺環境との関わりについて学習することを目標とする。具体的には、以下の能力を身につけることを達成目標とする。
1. 海洋の物理学的・化学的基本構造と次空間変動について説明できること。
2. 外洋・沿岸域・深海底における生態系の機能と構造について説明できること。
3. 生態系のモデリングの基礎について説明できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクションおよび海洋の基本構造 －海の誕生、海洋底の構造、プレートテクトニクス	授業で話された内容について復習する。
第2回	沿岸域の基本構造と定義 －沿岸地形の特徴、国連海洋法条約に基づく海域の定義、海洋基本法と海洋基本計画	授業で話された内容について復習する。
第3回	海洋の流れ －表層海流と深層循環、地衡風と地衡流、海浜流と密度流	授業で話された内容について復習する。
第4回	潮汐と潮流 －潮汐と潮流のメカニズム、潮汐残渣流、潮汐発電、海流・潮流発電	授業で話された内容について復習する。
第5回	海洋の波 －海洋波の種類、微小振幅波理論の基礎、波の回折	授業で話された内容について復習する。
第6回	海水の組成とその変動 －海水の基本成分、ミネラルと人の健康、水質の時空間変動	授業で話された内容について復習する。
第7回	海洋の物質循環 －生態系の定義、海洋生態系の基本構造、キーストーン種、生物濃縮	授業で話された内容について復習する。
第8回	外洋の生態系 －外洋の生態系の特徴、水産資源の重要性と持続	授業で話された内容について復習する。

	的管理方法	
第 9 回	沿岸域の生態系 1（沿岸域生態系の特徴） －生物生産性と生物多様性、磯焼けとその対策	授業で話された内容について復習する。
第 10 回	沿岸域の生態系 2（閉鎖性海域の環境問題） －沿岸域の海洋汚染、閉鎖性海域における環境問題（過栄養化）とその対策	授業で話された内容について復習する。
第 11 回	深海底の生態系 －深海底の環境の特徴、化学合成生態系、深海底鉱物資源	授業で話された内容について復習する。
第 12 回	生態系モデリングの基礎 1（1 個体群の動態） －マルサス方程式とロジスティック方程式、最小二乗近似法、オイラー法	授業で話された内容について復習する。
第 13 回	生態系モデリングの基礎 2（2 個体群の競争） －ロトカーボルテラ競争系、餌－捕食者モデル	授業で話された内容について復習する。
第 14 回	生態系モデリングの基礎 3（光合成のモデル） －海藻の光合成モデル（温度関数、光制限関数、栄養塩制限関数）、光合成実験の具体的方法	授業で話された内容について復習する。
第 15 回	全体のまとめ	
第 16 回	期末試験	

成績評価方法
成績評価： 授業目標の 1～3 の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 海洋の物理学的・化学的基本構造と時空間変動について説明できること。 2. 外洋・沿岸域・深海底における生態系の機能と構造について説明できること。 3. 生態系のモデリングの基礎について説明できること。 の 3 点を達成することが求められる。 成績は、授業中に課すレポート（20%）、期末試験（80%）で評価する。
履修上の注意
関連科目：情報システムとサステナビリティ、自然システムとサステナビリティ、社会システムとサステナビリティ、人間システムとサステナビリティ、環境社会システム学概論、地球環境学、海域環境再生学
教科書
授業の中で適宜資料を配布する。
参考文献
「大阪湾－環境の変遷と創造－」、生態系工学会編、恒星社厚生閣、2009 年

授業名称		担当教員氏名	
海域環境再生学		黒田 桂菜	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	3 前	選択	講義

授業概要
本授業は、海域環境に関する基礎知識および海域環境再生の方法論を学ぶための科目である。具体的には、海域環境に関する歴史、海域環境の特性と生態系、海域環境悪化のプロセス、海域環境再生の目標設定、海域環境再生技術、海域環境再生計画等について講義する。
到達目標
海域環境を再生するためには、悪化に至った歴史背景、海域環境の特性を踏まえた再生技術、海域環境に関わるステークホルダー、そして望ましい環境を見据えた目標設定について考える必要がある。本授業では、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 海域環境の特性や生態系に関する基礎知識を理解し、それを説明できること。 2. 海域環境が抱える環境問題の歴史的な流れと内容を理解し、それを説明できること。 3. 海域環境が悪化するプロセスと、それに基づいた環境再生技術について説明できること。 4. 様々な海洋環境再生技術について、その特徴と限界、適用可能条件について説明できること。 5. 海域環境と人間活動・社会活動の共生について、自分の考えをまとめることができること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション	
第2回	海域環境問題の歴史	下記キーワードについて調べておく。 沿岸域、閉鎖性海域、瀬戸内法
第3回	沿岸域環境の特性・生態系	下記キーワードについて調べておく。 生物多様性、生態系サービス、水質指標
第4回	沿岸域・閉鎖性海域における環境問題	下記キーワードについて調べておく。 海洋汚染、過剰養化、貧酸素水塊
第5回	海域環境再生技術 1－負荷削減	下記キーワードについて調べておく。 高度処理、下水道の資源・エネルギー
第6回	海域環境再生技術 1 の見学準備	事前配付資料を読むとともに、下記キーワードについて調べておく。 バイオガス、MAP 法
第7回	海域環境再生技術 1 の見学－下水処理場見学	見学内容の振り返り、課題レポートの作成
第8回	海域環境再生技術 2－海水交換・上下混合促進	下記キーワードについて調べておく。 海水交換、潮汐残差流、躍層

第 9 回	海域環境再生技術 3－貧酸素水塊の解消	下記キーワードについて調べておく。 底質指標、浚渫、覆砂
第 10 回	海域環境再生技術 4－浅場の創出	下記キーワードについて調べておく。 干潟、直立護岸
第 11 回	海域環境再生技術 5－系外除去	下記キーワードについて調べておく。 漁業の多面的機能、CNP リサイクル
第 12 回	環境学習	配付資料のふり返し、課題レポートの作成
第 13 回	海域環境再生の取り組み事例	配付資料のふり返し
第 14 回	海域環境の尺度と評価・目標設定	下記キーワードについて調べておく。 再生行動計画、順応的管理
第 15 回	全体のまとめ	試験準備
第 16 回	期末試験	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 海域環境の特性や生態系に関する基礎知識を理解し、それを説明できること。 2. 海域環境が抱える環境問題の歴史的な流れと内容を理解し、それを説明できること。 3. 海域環境が悪化するプロセスと、それに基づいた環境再生技術について説明できること。 4. 様々な海洋環境再生技術について、その特徴と限界、適用可能条件について説明できること。 5. 海域環境と人間活動・社会活動の共生について、自分の考えをまとめることができること。 の 5 点を達成することが求められる。 成績は、授業中に課すレポート（20%）、期末試験（80%）で評価する。
履修上の注意
（関連科目）情報システムとサステナビリティ、自然システムとサステナビリティ、社会システムとサステナビリティ、人間システムとサステナビリティ、環境社会システム学概論、海洋環境生態学 （備考）
教科書
授業の中で適宜資料を配付する。
参考文献
「大阪湾－環境の変遷と創造」生態系工学研究会編、恒星社厚生閣、2009 「沿岸域総合管理入門」笹川平和財団海洋政策研究所編、東海大学出版部、2016

授業名称		担当教員氏名	
陸域環境生態学		中山 祐一郎	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
生物の生活と環境との関係が理解できるように、生態系の構造と機能、生物の環境形成作用、生物種の環境に対する適応、個体群動態と種間の相互作用、生物群集の構造と多種共存機構について講義し、生物多様性とその意義、絶滅の要因とプロセスを習得させる。
到達目標
人間の生存にとって不可欠な生態系サービスの理解、健全な生態系の維持と生物多様性の保全を実現するために必要な科学的知識の習得ならびに価値観の養成を目標にする。具体的には、以下の能力を身につけることを目標とする。
1. 個体群の成長について説明できること。 2. 生物間の相互作用について説明できること。 3. 適応進化について説明できること。 4. 生物多様性の定義と機能について説明できること。 5. 生物多様性の危機と絶滅のプロセスについて説明できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	生態学とは	「確認シート」の内容を復習する。
第2回	個体群の成長：指数関数モデル、密度効果、ロジスティックモデル、自然環境下での個体群成長、個体群の年齢構成と生命表	「確認シート」の内容を復習する。
第3回	生物間の相互作用①：捕食者と被食者の個体数変動、個体群の空間構造と個体数変動	「確認シート」の内容を復習する。
第4回	生物間の相互作用②：種間競争と個体数変動、ニッチシフトと共存、競争による共進化、生活場所の空間構造と共存、攪乱と共存、寄生と共生	「確認シート」の内容を復習する。
第5回	生活史の適応進化：大子少産と小子多産、種内競争と生活史	「確認シート」の内容を復習する。
第6回	植物の生活史特性①：植物の生活史戦略、一年生植物の繁殖スケジュール	「確認シート」の内容を復習する。
第7回	植物の生活史特性②：予測不能な環境変動とリスク分散戦略、予測可能な環境変動と表現型可塑性	「確認シート」の内容を復習する。

第 8 回	動物の行動と社会①：自然選択の基本原理解、儀式的闘争と進化的安定戦略	「確認シート」の内容を復習する。
第 9 回	動物の行動と社会②：派手な雄と性選択、社会性と血縁選択	「確認シート」の内容を復習する。
第 10 回	種の多様性①：種多様性の尺度、種数－面積関係、種形成と絶滅の平衡	「確認シート」の内容を復習する。
第 11 回	種の多様性②：地域スケールでの種多様性のパターン、攪乱と種多様性、種間相互作用と種多様性、生物群集の分布	「確認シート」の内容を復習する。レポート課題：「食べて知る種の多様性」
第 12 回	生態系の構造と機能：エネルギーの流れ、物質の循環、生態系機能と生態系サービス、生態系機能と種の多様性、生態系の多様性	「確認シート」の内容を復習する。
第 13 回	遺伝的多様性と機能①：遺伝的多様性の測定、遺伝的多様性の尺度	「確認シート」の内容を復習する。
第 14 回	遺伝的多様性と機能②：遺伝的多様性の変動、遺伝的多様性の機能	「確認シート」の内容を復習する。
第 15 回	生物多様性の喪失－保全と再生への道標－：生物多様性国家戦略と SDGs、絶滅の渦	「確認シート」の内容を復習する。
第 16 回	定期試験	

成績評価方法

授業目標の 1～5 の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、

1. 個体群の成長について説明できること、
2. 生物間の相互作用について説明できること、
3. 適応進化について説明できること、
4. 生物多様性の定義と機能について説明できること、
5. 生物多様性の危機と絶滅のプロセスについて説明できること、

の 5 点を達成することが求められる。成績は、毎回の講義で課す確認シート (30%)、レポート (10%)、期末試験 (60%) で評価する。

履修上の注意

(関連科目) 環境生物学、情報システムとサステナビリティ、自然システムとサステナビリティ、社会システムとサステナビリティ、人間システムとサステナビリティ、環境社会システム学概論、海洋環境生態学、海域環境再生学、陸域環境再生学、環境アセスメント学

教科書

授業中に適宜資料を配布する。

参考文献
日本生態学会編「生態学入門第2版」(東京化学同人, 2012年)
宮下直他著「生物多様性と生態学—遺伝子・種・生態系—」(朝倉書店, 2012年)
A. Singh-Cundy 他著「ケイン生物学第5版」(東京化学同人, 2014年)

授業名称		担当教員氏名	
陸域環境再生学		中山 祐一郎、星 英之	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 前	選択	講義

授業概要
自然再生の定義と必要性、理論、指針について講義するとともに、森林、河川・湖沼、高山、農耕地、都市などの様々な生態系の再生（復元・修復）について事例をあげながら解説する。また、自然再生や生態系回復事業に従事している専門家をゲストスピーカーとして招き、事業の実際を紹介する。
到達目標
人と自然環境とが共生し、持続可能な環境形成を実現化させるための環境再生について、とくに損なわれた自然を回復させることを目的とした自然再生事業を中心にすえ、自然再生に関わる基礎理論を習得させ、自然再生事業の実際と問題点を理解させることを目標とする。具体的には、以下の能力を身につけることを目標とする。
1. 自然再生事業の必要性を説明できること。
2. 自然の要素を説明できること。
3. 自然再生を進めるうえでの原則を説明できること。
4. 順応的管理と合意形成の指針を説明できること。
5. 自然再生事業の具体的事例をその問題点とともに説明できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	自然再生事業の必要性	「確認シート」の内容を復習する。
第2回	絶滅危惧種と侵略的外来種：レッドリストと生態系被害防止外来種リストの読み方	「確認シート」の内容を復習する。
第3回	自然再生事業指針1：自然再生事業の対象（自然の要素）	「確認シート」の内容を復習する。
第4回	自然再生事業指針2：基本認識の明確化	「確認シート」の内容を復習する。
第5回	自然再生事業指針3：自然再生を進めるうえでの原則	「確認シート」の内容を復習する。
第6回	自然再生事業指針4：順応的管理の指針	「確認シート」の内容を復習する。環境再生の事例を調べてレポートにまとめる。
第7回	自然再生事業指針5：合意形成と連携の指針・自然再生推進法	「確認シート」の内容を復習する。
第8回	森林の再生	「確認シート」の内容を復習する。
第9回	高山生態系の復元：生態系維持回復事業の実際	ゲストスピーカーの講義内容をまとめてレポートとして提出する。

第 10 回	高山生態系の復元：大学における基礎研究の役割	「確認シート」の内容を復習する。
第 11 回	河川・湖沼の再生	「確認シート」の内容を復習する。
第 12 回	農業生態系の修復	「確認シート」の内容を復習する。
第 13 回	里地里山の現状と再生	「確認シート」の内容を復習する。
第 14 回	獣害と管理	「確認シート」の内容を復習する。
第 15 回	健全な都市生活を営むための都市環境づくり	「確認シート」の内容を復習する。
第 16 回	定期試験	

成績評価方法

授業目標の 1～5 の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、

1. 自然再生事業の必要性を説明できること、
2. 自然の要素を説明できること、
3. 自然再生を進めるうえでの原則を説明できること、
4. 順応的管理と合意形成の指針を説明できること、
5. 自然再生事業の具体的事例をその問題点とともに説明できること、

の 5 点を達成することが求められる。成績は、毎回の講義で課す確認シート (30%)、レポート (10%)、期末試験 (60%) で評価する。

履修上の注意

(関連科目) 環境生物学、情報システムとサステイナビリティ、自然システムとサステイナビリティ、社会システムとサステイナビリティ、人間システムとサステイナビリティ、環境社会システム学概論、海洋環境生態学、陸域環境生態学、海域環境再生学、環境アセスメント学

教科書

授業中に適宜資料を配布する。

参考文献

日本生態学会編「自然再生ハンドブック」(地人書館, 2010 年)

種生物学会編「保全と復元の生態学－野生生物を救う科学的思考」(文一総合出版, 2002 年)

授業名称		担当教員氏名	
食品安全論		星 英之	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 前	選択	講義

授業概要
食品安全論では、食品の安心・安全を確保する仕組みについて学習させる。健康の維持・増進には、安全な食品の持続的な供給が不可欠であり、そのためには、食品の生産から消費までをカバーしたフードチェーン全体の安全性を確保する必要があることから、フードチェーンの各段階および全体における衛生管理の手法ならびにその理論について習得させる。またリスクコミュニケーションについても学び食品の安心・安全を確保の仕組みについて習得させる。
到達目標
本授業では、以下の能力を身につけることを目標とする。 1.自然毒、細菌、ウイルス、寄生虫、化学物質及び重金属による食中毒の主な原因食品と発生機序について理解し、説明できること。 2.食品の安心・安全を確保する仕組みについて理解し、説明できること。 3.食品の安心・安全について、信頼できる資料を参照し、一般の人たちにわかりやすく説明できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション：食品の安全とは？	授業支援システムにアップロードされた講義資料に予め目を通しておくこと。
第2回	リスク分析の枠組み	授業支援システムにアップロードされた講義資料に予め目を通しておくこと。
第3回	食品のリスク要因とその制御（1）：植物性自然毒、動物性自然毒	授業支援システムにアップロードされた講義資料に予め目を通しておくこと。
第4回	食品のリスク要因とその制御（2）：微生物学的要因Ⅰ（サルモネラ菌、腸炎ビブリオ）	授業支援システムにアップロードされた講義資料に予め目を通しておくこと。
第5回	食品のリスク要因とその制御（3）：微生物学的要因Ⅱ（病原性大腸菌、カンピロバクター、ウェルシュ菌）	授業支援システムにアップロードされた講義資料に予め目を通しておくこと。
第6回	食品のリスク要因とその制御（4）：微生物学的要因Ⅲ（黄色ブドウ球菌、ボツリヌス菌、セレウス菌）	授業支援システムにアップロードされた講義資料に予め目を通しておくこと。
第7回	食品のリスク要因とその制御（5）：ウイルス性食中毒（ノロウイルス、肝炎ウイルス）、寄生虫	授業支援システムにアップロードされた講義資料に予め目を通しておくこと。

第 8 回	化学物質による食中毒（カネミ油症事件、森永ヒ素ミルク事件を中心に）	授業支援システムにアップロードされた講義資料に予め目を通しておくこと。
第 9 回	食品中の重金属による健康被害（水俣病、イタイイタイ病を中心に）	授業支援システムにアップロードされた講義資料に予め目を通しておくこと。
第 10 回	食品の安全性試験とリスクアセスメント（一般毒性試験法、特殊毒性試験法など）	授業支援システムにアップロードされた講義資料に予め目を通しておくこと。
第 11 回	食品の製造・調理加工と安全性の確保（食肉・食肉加工品、生鮮魚介類・水産加工品、野菜・果実類、牛乳・乳製品、鶏卵、調理済み食品）	授業支援システムにアップロードされた講義資料に予め目を通しておくこと。
第 12 回	厨房・台所における安全性確保（洗浄、消毒、加熱、冷蔵・冷凍、冷却）	授業支援システムにアップロードされた講義資料に予め目を通しておくこと。
第 13 回	食の安全管理システム（HACCP、トレーサビリティ）	授業支援システムにアップロードされた講義資料に予め目を通しておくこと。
第 14 回	食のリスクコミュニケーション（消費者が求める食品の安全性情報、リスクコミュニケーションの考え方、食品安全情報の入手と利用）	授業支援システムにアップロードされた講義資料に予め目を通しておくこと。
第 15 回	まとめ	
第 16 回	定期試験	

成績評価方法

授業目標（達成目標）の 1～3 の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、

- 1.自然毒、細菌、ウイルス、寄生虫、化学物質及び重金属による食中毒の主な原因食品と発生機序について概説できること。
- 2.食品の安心・安全を確保する仕組みについて概説できること。
- 3.食品の安心・安全の確保について、信頼できる資料を参照し、一般の人たちにわかりやすく説明できること。

以上の 3 点を達成することが求められる。成績は以下の方法で評価する方法として、レポートと定期試験を用いる。成績評価に占める割合は、レポート（40%）、定期試験（60%）である。

履修上の注意

関連科目：公衆衛生学

教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
食糧と環境		大山克己	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 後	選択	講義

授業概要
従来、食糧の多くは、開放的な露地で生産されてきた。その結果、周辺環境に影響を与え続けてきた。他方、近年になり、周辺環境に与える影響の少ない、高度な制御技術を有する半閉鎖的、または、閉鎖的な植物工場での食糧生産が注目されつつある。今後、持続的に食糧を供給するためには、周辺環境に与える影響が少ない食糧生産システムの利用が望まれる。ここでは、露地と植物工場の得失を、食糧と環境という観点から比較する。
到達目標
食糧を生産するためのシステム（露地、植物工場など）の構成、利点・欠点、SDGs 上の意義、利用事例に関する基本的な知識について身につけることを目標とする。それとともに、食糧生産システムを理解する上で必要とされる園芸学、栽培学、環境工学の基礎を理解できることも目標とする。具体的には、以下の能力を身につけることを目標とする。 ・ 食糧生産システムの種類、それぞれの利点・欠点について説明できること ・ SDGs 上の食糧生産の意義について説明できること ・ 食糧を生産する上で重要な環境要因とその制御方法について説明できること

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	講義概要	講義で必要とされる様々な専門分野(園芸学、環境工学など)に関する情報を理解する
第 2 回	食糧生産システム I 従来のシステム	これまでの食糧生産において利用されてきている様々な食糧生産システムを整理し、理解する
第 3 回	食糧生産システム II 太陽光型植物工場	近年わが国においても大規模化している太陽光型植物工場の事例とともに、その成り立ちを理解する
第 4 回	食糧生産システム III 人工光型植物工場	近年国内外で注目を集めつつある人工光型植物工場の事例とともに、その成り立ちを理解する
第 5 回	食糧生産システムの利点・欠点	食糧生産システムの利点と欠点、とくに周辺環境に与える影響を整理し、理解する。また、SDGs 上の意義を考察する
第 6 回	食糧生産と環境 I 光環境	光環境が植物の成育に与える影響を理解し、後に述べる光環境制御のための知識を取得する

第 7 回	食糧生産と環境 II 温度環境	温度環境が植物の成育に与える影響を理解し、後に述べる温度環境制御のための知識を取得する
第 8 回	食糧生産と環境 III CO ₂ 環境	CO ₂ 環境が植物の成育に与える影響を理解し、後に述べる CO ₂ 環境制御のための知識を取得する
第 9 回	食糧生産と環境 IV その他	その他風や養分などが植物の成育に与える影響を理解し、後に述べるそれらの制御のための知識を取得する
第 10 回	食糧生産における環境制御 I 光環境制御	先に述べた植物におよぼす光環境の影響に関する知識にもとづいて、適切な植物の成育を得るための光環境制御法を理解する
第 11 回	食糧生産における環境制御 II 温度環境制御	先に述べた植物におよぼす温度環境の影響に関する知識にもとづいて、適切な植物の成育を得るための温度環境制御法を理解する
第 12 回	食糧生産における環境制御 III CO ₂ 環境制御	先に述べた植物におよぼす CO ₂ 環境の影響に関する知識にもとづいて、適切な植物の成育を得るための CO ₂ 環境制御法を理解する
第 13 回	食糧生産における環境制御 IV その他制御	先に述べた植物におよぼす風や養分の影響に関する知識にもとづいて、適切な植物の成育を得るためのそれらの制御法を理解する
第 14 回	最新の研究動向	最新の食糧生産に関する研究（スマート農業など）に関する事例を整理する
第 15 回	まとめ	講義内容をふりかえり、内容を体系立てて整理する
第 16 回	定期試験	

成績評価方法
到達目標に対する達成度にもとづいて、成績評価を実施する。 単位を取得するためには、 ・食糧生産システムの種類、それぞれの利点・欠点について説明できること ・SDGs 上の食糧生産の意義について説明できること ・食糧を生産する上で重要な環境要因とその制御方法について説明できること の3点を達成することが求められる。 成績の評価には、記述式の期末試験と各講義後に提出するコメントシート（講義中の小テスト、アンケート。15回）をそれぞれ利用する。成績評価に占める期末試験およびコメントシートの割合は、それぞれ60および40%とする。
履修上の注意
講義内容を要領よくまとめたノートをとることに努めてほしい。 国内における食糧生産の動向だけではなく、国外（オランダ、アメリカなど）のそれにも着目してほしい。
教科書
必要に応じて授業開始時に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜参考文献を紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
景観計画学		阿久井康平	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 前	選択	講義

授業概要
近年、都市域や周辺地域においては、良好な景観形成を計画的に推進することが求められている。本講義では、景観計画に関するデザイン手法や植栽デザインの考え方を習得するとともに、具体的デザイン手法の基本となる西洋庭園や日本庭園のデザイン手法について理解する。また、景観行政に関する諸制度や行政計画についての理解を深めるとともに、各地で実践されている市民参画型の景観まちづくり手法について習得することによって、課題発掘や問題解決能力と創造力の向上を目指す。
到達目標
本科目では、以下の能力を身につけることを目標とする。 ・ 景観デザインにおける基本的な計画プロセスとデザイン手法を説明できること。 ・ 植栽デザインの考え方および緑化材料の基本的事項を説明できること。 ・ 日本庭園や西洋庭園のデザイン手法を説明できること。 ・ 景観行政に関する諸制度や行政計画について、概略を説明できること。 ・ 市民参画型の景観まちづくり手法について説明できること。 ・ 都市空間や緑地空間における問題点や課題を抽出でき、その解決方法を提示できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	景観計画について（イントロダクション）	景観計画の概観を理解する。
第2回	景観計画の類型と景観について	景観計画の類型と景観について復習する。
第3回	景観デザイン手法1（計画・設計プロセス）	計画・設計プロセスについて復習する。
第4回	景観デザイン手法2（敷地分析）	敷地分析手法について復習する。
第5回	景観デザイン手法3（敷地計画）	敷地計画手法について復習する。
第6回	景観デザイン手法4（植栽計画）	植栽計画について復習する。
第7回	景観デザイン手法5（事例とまとめ）	景観デザイン手法全体について復習する。
第8回	景観デザインの基礎1 （西洋庭園にみる空間デザイン手法）	西洋庭園の空間デザイン手法について復習する。
第9回	景観デザインの基礎2 （日本庭園にみる空間デザイン手法）	日本庭園の空間デザイン手法について復習する。

第 10 回	景観まちづくりに関わる社会的動向	現在の社会的動向について復習する。
第 11 回	景観行政に関する諸制度や行政計画 1 ：景観計画	景観計画について復習する。
第 12 回	景観行政に関する諸制度や行政計画 2 ：緑の基本計画	緑の基本計画について復習する。
第 13 回	景観行政に関する諸制度や行政計画 3 ：景観計画・緑の基本計画の最新事例	景観行政に関する諸制度や行政計画について復習する。
第 14 回	市民参画型の景観まちづくり	市民参画型の景観まちづくりについて復習する。
第 15 回	今後の景観計画に向けて（総括）	本講義の主要な内容をまとめておく。 定期試験の準備
第 16 回	定期試験	

成績評価方法

到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、

- ・ 景観デザインにおける基本的な計画プロセスとデザイン手法を説明できること。
- ・ 植栽デザインの考え方および緑化材料の基本的事項を説明できること。
- ・ 日本庭園や西洋庭園のデザイン手法を説明できること。
- ・ 景観行政に関する諸制度や行政計画について、概略を説明できること。
- ・ 市民参画型の景観まちづくり手法について説明できること。
- ・ 都市空間や緑地空間における問題点や課題を抽出でき、その解決方法を提示できること。

の 6 点を達成することが求められる。成績は、期末テストを 80%、**授業への積極的な参加度**を 20%として 100 点満点で評価する。

履修上の注意

関連科目：**環境社会システム学概論**、地域・都市環境学、陸域環境再生学、環境システム学演習 1,2,3

教科書

授業中にプリントを配付，デジタルプロジェクト等の使用によるビジュアルな資料・事例を提示する。

参考文献

授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
防災・安全科学		生田 英輔	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 前	選択	講義

授業概要
住宅・建築物及び都市の居住空間における防災・安全の問題について講ずる。対象とする問題は、地震をはじめとする各種の非常災害および日常生活において発生する住宅内事故、犯罪である。はじめに災害・事故のメカニズムを明らかにした上で、その対策について解説する。特に近年発生した災害等は、その社会的背景も含め解説し、被害と要因を理解できるようにする。建物及び都市の計画・構造・設備等に関する知識を踏まえて本講義を受講することにより、生活者の視点での安全な空間の計画への理解が深まる。
到達目標
建築設計・都市計画及び居住者の生活の質を考える場合、快適性、利便性に加えて安全性は欠くことのできない重要な要素のひとつである。本講義では、地震などの自然災害のみならず火災などの日常災害を対象としてそのメカニズムと防災・安全対策について講じ、建築・都市の設計・計画において、各種災害に対応できる計画手法を会得する。 このような観点から、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 住宅・建築物及び都市の居住空間における防災・安全の問題について説明できること。 2. 社会と災害・事故のメカニズムとの関係性を説明できること。 3. 生活者の視点での安全な居住空間を計画できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	概論災害と居住環境・居住者：災害論、素因、誘因、脆弱性	事前学習は「災害と居住環境・居住者」の講義資料を学習し講義に臨むこと。加えて、関連する書籍、WEB サイト等を学習すること。国内外で突発的に災害や事故が発生した際は報道情報を参照すること。事後学習は講義資料を整理、確認した上で、近年の災害事例と関連づけて講義内容を理解すること。
第2回	地震災害1 地震のメカニズム：地震、津波、プレート、断層	事前学習は「地震のメカニズム」の講義資料を学習し講義に臨むこと。加えて、関連する書籍、WEB サイト等を学習すること。国内外で突発的に災害や事故が発生した際は報道情報を参照すること。事後学習は講義資料を整理、確認した上で、近年の災害事例と関連づけて講義内容を理解すること。
第3回	地震災害2 地震時の建物被害：建物被害、地震動、耐震、免震、制振	事前学習は「地震時の建物被害」の講義資料を学習し講義に臨むこと。加えて、関連する

		書籍、WEB サイト等を学習すること。国内外で突発的に災害や事故が発生した際は報道情報を参照すること。事後学習は講義資料を整理、確認した上で、近年の災害事例と関連づけて講義内容を理解すること。
第 4 回	地震災害 3 地震火災・津波：地震火災、津波、避難	事前学習は「地震火災・津波」の講義資料を学習し講義に臨むこと。加えて、関連する書籍、WEB サイト等を学習すること。国内外で突発的に災害や事故が発生した際は報道情報を参照すること。事後学習は講義資料を整理、確認した上で、近年の災害事例と関連づけて講義内容を理解すること。
第 5 回	地震災害 4 地震時の室内被害・人的被害：家具転倒、地震による死傷	事前学習は「地震時の室内被害・人的被害」の講義資料を学習し講義に臨むこと。加えて、関連する書籍、WEB サイト等を学習すること。国内外で突発的に災害や事故が発生した際は報道情報を参照すること。事後学習は講義資料を整理、確認した上で、近年の災害事例と関連づけて講義内容を理解すること。
第 6 回	火山災害・崩壊災害：火山活動の生活への影響、火山防災、斜面崩壊	事前学習は「火山災害・崩壊災害」の講義資料を学習し講義に臨むこと。加えて、関連する書籍、WEB サイト等を学習すること。国内外で突発的に災害や事故が発生した際は報道情報を参照すること。事後学習は講義資料を整理、確認した上で、近年の災害事例と関連づけて講義内容を理解すること。
第 7 回	台風・洪水災害 1 台風・水害のメカニズム：台風、高潮、洪水、氾濫	事前学習は「台風・水害のメカニズム」の講義資料を学習し講義に臨むこと。加えて、関連する書籍、WEB サイト等を学習すること。国内外で突発的に災害や事故が発生した際は報道情報を参照すること。事後学習は講義資料を整理、確認した上で、近年の災害事例と関連づけて講義内容を理解すること。
第 8 回	台風・洪水災害 2 都市水害の対策：気象情報、警報、避難措置、避難計画	事前学習は「都市水害の対策」の講義資料を学習し講義に臨むこと。加えて、関連する書籍、WEB サイト等を学習すること。国内外で突発的に災害や事故が発生した際は報道情報を参照すること。事後学習は講義資料を整理、確認した上で、近年の災害事例と関連づけて講義内容を理解すること。

第 9 回	雪氷災害降雪のメカニズムと雪氷による被害と対策：豪雪地帯、屋根雪処理、除排雪システム	事前学習は「雪氷災害」の講義資料を学習し講義に臨むこと。加えて、関連する書籍、WEB サイト等を学習すること。国内外で突発的に災害や事故が発生した際は報道情報を参照すること。事後学習は講義資料を整理、確認した上で、近年の災害事例と関連づけて講義内容を理解すること。
第 10 回	火災 1 火災の実態と出火・延焼のメカニズム：火災の原因、出火、延焼	事前学習は「火災の実態と出火・延焼のメカニズム」の講義資料を学習し講義に臨むこと。加えて、関連する書籍、WEB サイト等を学習すること。国内外で突発的に災害や事故が発生した際は報道情報を参照すること。事後学習は講義資料を整理、確認した上で、近年の災害事例と関連づけて講義内容を理解すること。
第 11 回	火災 2 防火計画：防火設備、避難計画	事前学習は「防火計画」の講義資料を学習し講義に臨むこと。加えて、関連する書籍、WEB サイト等を学習すること。国内外で突発的に災害や事故が発生した際は報道情報を参照すること。事後学習は講義資料を整理、確認した上で、近年の災害事例と関連づけて講義内容を理解すること。
第 12 回	日常災害・犯罪 1 日常生活のリスクと日常災害：リスク管理、危機管理、人口動態統計	事前学習は「日常生活のリスクと日常災害」の講義資料を学習し講義に臨むこと。加えて、関連する書籍、WEB サイト等を学習すること。国内外で突発的に災害や事故が発生した際は報道情報を参照すること。事後学習は講義資料を整理、確認した上で、近年の災害事例と関連づけて講義内容を理解すること。
第 13 回	日常災害・犯罪 2 建築災害と家庭内事故：設備事故、転倒、転落、溺死、ヒートショック	事前学習は「建築災害と家庭内事故」の講義資料を学習し講義に臨むこと。加えて、関連する書籍、WEB サイト等を学習すること。国内外で突発的に災害や事故が発生した際は報道情報を参照すること。事後学習は講義資料を整理、確認した上で、近年の災害事例と関連づけて講義内容を理解すること。
第 14 回	日常災害・犯罪 3 犯罪と防犯：防犯環境設計、街頭犯罪、防犯設備	事前学習は「犯罪と防犯」の講義資料を学習し講義に臨むこと。加えて、関連する書籍、WEB サイト等を学習すること。国内外で突発的に災害や事故が発生した際は報道情報を参照すること。事後学習は講義資料を整理、確

		認した上で、近年の災害事例と関連づけて講義内容を理解すること。
第 15 回	コミュニティ防災：レジリエンス、国土強靱化、地区防災計画、防災まちづくり	事前学習は「コミュニティ防災」の講義資料を学習し講義に臨むこと。加えて、関連する書籍、WEB サイト等を学習すること。国内外で突発的に災害や事故が発生した際は報道情報を参照すること。事後学習は講義資料を整理、確認した上で、近年の災害事例と関連づけて講義内容を理解すること。
第 16 回	定期試験	

成績評価方法

授業目標の達成度で成績評価を行う。

単位を取得するためには、

1. 住宅・建築物及び都市の居住空間における防災・安全の問題について説明できること。
2. 社会と災害・事故のメカニズムとの関係性を説明できること。
3. 生活者の視点での安全な居住空間を計画できること。

の3点を達成することが求められる。

成績は、定期試験（70％）及びレポート（30％）によって評価する。合格（単位修得）のための最低基準は 60％とする。

履修上の注意

最新の災害時事例を踏まえた多様な知識を提供するので、積極的に取り組んで欲しい。また、日頃から防災・安全問題について関心を持ち、関連する情報を収集する学習姿勢を望みたい。

教科書

毎回、レジュメを配付する。

参考文献

なし

授業名称		担当教員氏名	
環境計測学		竹中 規訓	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 後	選択	講義

授業概要
環境計測やサンプリング計画の基本的な考え方、繰返し測定の実験学、有意差検定などの環境分析の基本を講義する。さらに、機器分析における校正法、環境分析の主流となっている分光法、クロマトグラフィーや質量分析法、電気化学分析法の原理を講義し、様々な大気や水のサンプリング方法について実例をもとに紹介する。
到達目標
本科目では、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 環境測定データの解析に必要な統計手法を用いた解析ができること。 2. 環境を理解するためにもっとも必要な環境を測る方法である分光法、クロマトグラフィー、質量分析法、電気化学分析法の原理を説明することができること。 3. 様々な大気や水のサンプリング方法についての問題に答えることができること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	授業の流れの説明。物理量の単位と環境分析の基礎	SI 単位および大気、水中の物質濃度を表す単位について予習
第2回	環境データの統計処理方法の基礎 I 誤差、偏差、標準偏差、誤差の伝播	誤差、偏差、標準偏差の復習・予習 講義には関数電卓を持ってくること。
第3回	環境データの統計処理方法の基礎 II 有意差検定、外れ値	第2回の内容をしっかりと復習。 講義には関数電卓を持ってくること。
第4回	検量線、検出限界	検量線、検出限界について予習
第5回	測定値の誤差、不確かさ	測定値の誤差、不確かさについて、予習
第6回	吸光分析の基礎と紫外・可視吸光光度法	吸光光度法の基礎を予習
第7回	赤外分光法、吸光分析法の実例	FTIR、NDIR など赤外分光法の予習
第8回	発光分析－蛍光光度法、化学発光法	蛍光、りん光、化学発光について予習
第9回	クロマトグラフィーの基礎とガスクロマトグラフィー	クロマトグラフィーの基礎とガスクロマトグラフィーについて予習
第10回	高速液体クロマトグラフィー	液体クロマトグラフィーについて予習
第11回	クロマトグラフィーを用いた環境分析	第9回、10回の内容を復習
第12回	質量分析計	磁場と電流の関係、真空ポンプの原理、質量分析計の予習
第13回	電気化学式分析計－pH、導電率、溶存酸素計、イオン電極	電気化学の基礎を予習

第 14 回	大気試料のサンプリング	気体の状態方程式を復習
第 15 回	水試料のサンプリング	水採取法を調べたり、濃度などの単位を復習
第 16 回	定期試験	15回の復習をして臨むこと

成績評価方法

到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、

1. 環境測定データの解析に必要な統計手法を用いた解析ができること。
2. 環境を理解するためにもっとも必要な環境を測る方法である分光法、クロマトグラフィー、質量分析法、電気化学分析法の原理を説明することができること。
3. 様々な大気や水のサンプリング方法についての問題に答えることができること。

の3点を達成することが求められる。いずれの達成目標もそれらに関する6割以上の設問に正しくこたえられる必要がある。

成績の評価は、定期試験(80%)、レポート(20%)で6割以上を取得により合格とする。

履修上の注意

関連科目：[自然システムとサステイナビリティ](#)、[統計学基礎 1、2](#)

教科書

適宜、資料を配付する。

参考文献

- ・環境測定と分析機器、高田芳矩、小熊幸一、平野義博、坂田衛著、(社)日本環境測定分析協会、丸善。
- ・環境分析における不確かさとその求め方、高谷晴生、秦勝一郎著、(社)日本環境測定分析協会、丸善。
- ・データのとり方とまとめ方、James N. Miller, Jane C. Miller 著、宗森信、佐藤寿邦訳、共立出版；第2版。
- ・入門 統計学 - 検定から多変量解析・実験計画法まで -、栗原/伸一、オーム社(2011)。

授業名称		担当教員氏名	
再生可能エネルギー学		大塚耕司	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 後	選択	講義

授業概要
地球温暖化の問題解決に大きな役割を持つ再生可能エネルギーについて基礎から応用まで幅広く解説する。気候変動のしくみやエネルギーの基礎環、太陽光や風力、海洋エネルギーなどさまざまな再生可能エネルギーのしくみや特徴、さらにスマートグリッドなど再生可能エネルギーに関連する技術等について講義する。
到達目標
地球温暖化を軽減させるためには、化石燃料の消費を抑制し、温室効果ガスの排出を削減する必要がある。その手段として省エネルギーや再生可能エネルギー利用など、さまざまなエネルギー対策が行われている。本授業では、このような観点から、以下の能力を身につけることを目標とする。
1. 地球温暖化や気候変動のしくみについて説明できること。
2. エネルギーの基礎について説明できること。
3. さまざまな再生可能エネルギーのしくみや特徴について説明できること。
4. 再生可能エネルギーに関連する技術について説明できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	地球温暖化と気候変動のしくみ	授業で話された内容について復習する。
第2回	エネルギーの基礎	授業で話された内容について復習する。
第3回	発電の基礎	授業で話された内容について復習する。
第4回	最近のエネルギー事情	授業で話された内容について復習する。
第5回	太陽光発電1（発電原理と普及の現状）	授業で話された内容について復習する。
第6回	風力発電	授業で話された内容について復習する。
第7回	地熱・太陽熱発電	授業で話された内容について復習する。
第8回	水力発電	授業で話された内容について復習する。
第9回	バイオマス発電	授業で話された内容について復習する。
第10回	海洋温度差発電	授業で話された内容について復習する。
第11回	その他の海洋再生可能エネルギー	授業で話された内容について復習する。
第12回	再生可能エネルギーの周辺技術	授業で話された内容について復習する。
第13回	全体のまとめ	
第14回	再生可能エネルギー事情2（堺港発電所見学）	
第15回	太陽光発電2（メガソーラー発電所見学）	
第16回	期末試験	

成績評価方法
授業目標の1～4の達成度で成績評価を行う。 単位を取得するためには、 1. 地球温暖化や気候変動のしくみについて説明できること。 2. エネルギーの基礎について説明できること。 3. さまざまな再生可能エネルギーのしくみや特徴について説明できること。 4. 再生可能エネルギーに関連する技術について説明できること。 の4点を達成することが求められる。 成績は、授業中に課すレポート（20%）、期末試験（80%）で評価する。
履修上の注意
関連科目：情報システムとサステナビリティ、自然システムとサステナビリティ、社会システムとサステナビリティ、人間システムとサステナビリティ、環境社会システム学概論
教科書
授業の中で適宜資料を配布する。
参考文献
「再生可能エネルギーのキホン」本間琢也，牛山泉，梶川武信，ソフトバンククリエイティブ

授業名称		担当教員氏名	
環境再生の化学		興津健二	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
様々な環境問題に対して化学的に問題解決や改善に貢献できる環境再生技術について理解させる。特に環境汚染（水汚染、大気汚染、土壌汚染）や地球温暖化、エネルギーに関する問題を解決・改善するための最近の要素技術の具体例を織り交ぜて講義することにより、環境再生のための化学的思考方を習得させることを目指す。
到達目標
本科目では、化学的な手法を用いる環境再生法、関連する各種データの収集の仕方と収集したデータの解析の仕方に対して、基本的な知識について問う問題に答えることができることを目標とする。具体的には、以下の能力を身につけることを目標とする。 ・化学的な環境再生法や関連知識の 6 割以上について概説できること。 ・各種データの収集の仕方について 6 割以上について概説できること。 ・収集した各種データの 6 割以上について解析できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	イントロダクション、化学的な環境再生とは	環境汚染・エネルギー・資源問題の概要について調べておくこと。
第 2 回	原子と分子	原子と分子の概要について調べておくこと。
第 3 回	酸と塩基	酸と塩基の定義について調べておくこと。
第 4 回	グリーンケミストリー	グリーンケミストリー 12 原則について調べておくこと。
第 5 回	バイオマス化学原料の概略、糖質系・油脂系バイオマス	糖質系・油脂系バイオマスの特徴について調べておくこと。
第 6 回	木質系・廃棄系バイオマス、バイオマスの化学資源化の課題と技術動向	木質系・廃棄系バイオマスの特徴について調べておくこと。
第 7 回	プラスチックの特性、プラスチックのリサイクル	高分子の特性について調べておくこと。
第 8 回	吸着の基礎	物理吸着と化学吸着について調べておくこと。
第 9 回	吸着剤を利用する環境再生	吸着等温式について調べておくこと。
第 10 回	吸着剤の調製とキャラクタリゼーション	吸着剤をキャラクタリゼーションする方法について調べておくこと。
第 11 回	反応速度論と触媒化学の基礎	1 次反応速度式、2 次反応速度式、半減期について調べておくこと。

第 12 回	触媒を利用する環境再生、自動車用触媒	自動車用触媒の特徴について調べておくこと。
第 13 回	光触媒を利用する環境再生	光触媒の特徴について調べておくこと。
第 14 回	促進酸化法を利用する環境再生	促進酸化法の特徴について調べておくこと。
第 15 回	超音波キャビテーションを利用する環境再生	超音波キャビテーションの特徴について調べておくこと。
第 16 回	定期試験	

成績評価方法

到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、

- ・ 化学的な環境再生法や関連知識の 6 割以上について概説できること。
- ・ 各種データの収集の仕方について 6 割以上について概説できること。
- ・ 収集した各種データの 6 割以上について解析できること。

の 3 点を達成することが求められる。

中間試験(45%)、期末試験(45%)、授業中または復習時に行う演習問題(10%)により総合的に成績を評価する。

履修上の注意

関連科目：環境社会システム学概論、自然システムとサステナビリティ、地球環境の化学、環境計測学

教科書

毎回の授業でも資料を配付する。

参考文献

授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
環境アセスメント学		大塚耕司、竹中規訓、興津健二、遠藤崇浩、中山祐一郎、星英之、黒田桂菜	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 後	選択	講義

授業概要
持続可能な社会の構築における環境アセスメントの役割について解説するとともに、国内外のアセスメント制度およびアセスメントの手順について講義する。また、いくつかのアセスメントの事例を紹介し、具体的なアセスメントの実施状況について理解させる。さらに今後のアセスメント展開として、スモールアセスや SDGs との関連について解説する。
到達目標
地球規模での持続的な発展には、様々な開発行為が地域の環境に及ぼす影響を事前に調査、予測、評価することによる適切な対応や対策が求められる。このような観点から、以下の能力を身につけることを目標とする。
1. 環境アセスメントの重要性について持続可能性の観点から説明できること。
2. 国内外のアセスメント制度や手順について説明できること。
3. 環境アセスメントの技術や手法について説明できること。
4. 国内外における環境アセスメントの具体例について説明できること。
5. 環境アセスメントの今後の方向性について説明できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション、環境アセスメントとは（大塚）	環境アセスメントの目的について復習する。
第2回	環境アセスメント関連図書の構成（中山）	アセス図書について復習する。
第3回	国や地方公共団体の制度と諸外国の制度（中山）	環境アセスメントの制度について復習する。
第4回	技術指針。追跡調査・情報交流・審査会の仕組み（遠藤）	環境アセスメントの手続きについて復習する。
第5回	環境アセスメントの技術・手法 1（竹中） －大気・悪臭、水循環、水質・底質	環境アセスメントの手法について復習する。
第6回	環境アセスメントの技術・手法 2（星） －土壌環境、騒音・低周波音・振動、日照障害・風害・電波障害	環境アセスメントの手法について復習する。
第7回	環境アセスメントの技術・手法 3（興津） －廃棄物、温室効果ガス	環境アセスメントの手法について復習する。
第8回	環境アセスメントの技術・手法 4（中山） －陸上動植物、水生生物、生態系、景観・自然とのふれあい	環境アセスメントの手法について復習する。

第 9 回	環境アセスメントの実際 1 (中山) －国内事例 (愛知万博)	環境アセスメントの実例を調べる。
第 10 回	環境アセスメントの実際 2 (大塚) －海外事例 (ミティゲーション、HEP)	環境アセスメントの海外の事例から、国内における問題点を考察する。
第 11 回	環境アセスメントの実際 3 (ゲストスピーカー) －生活環境系のアセスメントの実際	生活環境系のアセスメントの現状と問題点を整理する。
第 12 回	環境アセスメントの実際 4 (ゲストスピーカー) －自然環境系のアセスメントの実際	自然環境系のアセスメントの現状と問題点を整理する。
第 13 回	スモールアセス (黒田)	自主簡易アセスについて復習する。
第 14 回	SDGs 達成のための環境アセスメントの役割 (大塚)	SDGs を環境アセスメントその関係について復習する。
第 15 回	まとめ (大塚)	環境アセスメントへの自分の関わりについて考察する。
第 16 回	期末試験	

成績評価方法

成績評価：

授業目標の 1～5 の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、

1. 環境アセスメントの重要性について持続可能性の観点から説明できること。
2. 国内外のアセスメント制度や手順について説明できること。
3. 環境アセスメントの技術や手法について説明できること。
4. 国内外における環境アセスメントの具体例について説明できること。
5. 環境アセスメントの今後の方向性について説明できること。

の 5 点を達成することが求められる。成績は、期末試験 (100%) で評価する。

履修上の注意

関連科目： [情報システムとサステイナビリティ](#)、[自然システムとサステイナビリティ](#)、[社会システムとサステイナビリティ](#)、[人間システムとサステイナビリティ](#)、[環境社会システム学概論](#)、[海洋環境生態学](#)、[陸域環境生態学](#)、[海域環境再生学](#)、[陸域環境再生学](#)

教科書

[授業中に適宜資料を配布する。](#)

参考文献

「環境アセスメント学入門」環境アセスメント学会編、恒星社厚生閣、2019

「環境アセスメント学の基礎」環境アセスメント学会編、恒星社厚生閣、2013

授業名称		担当教員氏名	
ミクロ経済学		吉川 丈	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
本講義は講義形式によるものである。本講義の目的は、市場システムの構造と機能を中心に学ぶことで、社会システムの持続可能性を考える上で必要となる基礎的なミクロ経済学の知識を習得することである。また、経済学は、様々な社会経済問題について、論理的思考を突き詰めて現象を説明・予測しようとする学問である。したがって、受講することで「論理的に自分の主張を伝える能力」を養えることが期待できる。効率的に主張を伝える能力は一般的なビジネスパーソンにとっても、これから就職の面接に臨む皆さんにとっても大変重要なものであろう。将来、みなさんがビジネスの世界で活躍するのに役立つ知識として経済学のツールを習得していただきたい。
到達目標
本科目では、以下の能力を身につけることを目標とする。 ・社会システムの持続可能性を考える上で必要となる基礎的なミクロ経済学の知識を習得すること。 ・新聞やニュースで企業の活動や戦略について知ったときに、経済学のツールを使うとどのように理解できるかを説明できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション、経済学の 10 大原理	
第2回	経済学の 10 大原理	次のキーワードについて事前に調べておく： 機会費用
第3回	市場における需要と供給の作用	次のキーワードについて事前に調べておく： 需要法則と供給法則
第4回	市場における需要と供給の作用(練習問題)	前回の復習をしておくこと
第5回	弾力性	次のキーワードについて事前に調べておく： 需要の価格弾力性
第6回	質問と復習	
第7回	需要、供給、および政府の政策	次のキーワードについて事前に調べておく： 従量税と従価税
第8回	需要、供給、および政府の政策(練習問題)	前回の復習をしておくこと
第9回	消費者、生産者、市場の効率性	次のキーワードについて事前に調べておく： 消費者余剰と生産者余剰ならびに社会厚生
第10回	消費者、生産者、市場の効率性(練習問題)	前回の復習をしておくこと
第11回	生産の費用	次のキーワードについて事前に調べておく： 平均費用と限界費用
第12回	生産の費用 (練習問題)	前回の復習をしておくこと

第13回	外部性	次のキーワードについて事前に調べておく： 外部性
第14回	公共財と共有資源	次のキーワードについて事前に調べておく： 公共財と共有資源
第15回	まとめ	
第16回	期末試験	

成績評価方法
以下の到達目標に対する達成度で成績評価を行う。 ・社会システムの持続可能性を考える上で必要となる基礎的なミクロ経済学の知識を習得すること。 ・新聞やニュースで企業の活動や戦略について知ったときに、経済学のツールを使うとどのように理解できるかを説明できること。 成績評価は、課題レポートと期末試験の合計点数で成績評価を行う。30%：授業課題レポート（第8回目もしくは9回目の講義内で、レポート課題を出題する。）70%：期末試験。
履修上の注意
本講義だけでなく大学の講義全般に言えることだが、「聞いているだけ」では全く面白くない。社会現象などに対して、「なぜ、そんな動きするの？」という疑問を持ち考えながら受講しないと楽しくない。講義の中でも現実例を挙げながら説明するが、ぜひ受講の際には一緒に考えてほしい。 この講義では、微分や積分などの数学の知識も若干必要である。しかし、これらが苦手な人もチャレンジすることに怖がる必要はない。ぜひ、一緒に学びましょう。 関連科目：経済学基礎、マクロ経済学、公共経済学、環境経済・経営学、企業の経済学
教科書
マンキュー経済学Ⅰ ミクロ編（第4版）、N・グレゴリー・マンキュー、（東洋経済新報社）
参考文献
適時指示する。

授業名称		担当教員氏名	
マクロ経済学		西川弘展	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
一国単位の経済活動について集計的な変数に注目して分析を行い、貨幣・金融面の諸条件を考慮しながら一国全体の産出量・雇用水準の決定を扱うのがマクロ経済学である。本授業では、いわゆる IS・LM モデルを中心にマクロ経済学の基礎を学ぶことを通じて、一国全体の産出量・雇用水準決定の問題と、それと関連する重要なトピックスを扱う。
到達目標
本授業では次の力を養うことを到達目標とする。 1. マクロ経済学の基礎概念を正確に説明することができる。 2. 簡単な数学を使って、マクロ経済学の基本的なモデルを定式化し、経済分析ができる。 3. 現実の経済現象や経済政策について、マクロ経済学の基礎概念や基本的なモデルを使って説明することができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	マクロ経済の概観（1）：GDP と国民経済計算	国民経済計算、三面等価、貯蓄・投資バランス
第2回	マクロ経済の概観（2）：マクロ経済と市場システム	マクロ経済と市場システム、経済諸主体とそれらの機能
第3回	4 5 度線モデルと乗数理論（1）：有効需要の原理と乗数	有効需要の原理、消費の理論、乗数
第4回	4 5 度線モデルと乗数理論（2）：乗数理論の拡張	政府の支出と租税・公債、外国貿易
第5回	資産市場（1）：資産の特性と貨幣の性質	資産の特性、貨幣、債券価格と利子率
第6回	資産市場（2）：中央銀行と貨幣の需給	中央銀行、銀行システム、貨幣の需要と供給
第7回	IS・LM モデル（1）：LM 曲線	貨幣の需給一致、債券の需給一致、LM 曲線
第8回	IS・LM モデル（2）：IS 曲線	投資の理論、総需要と総供給の一致、IS 曲線
第9回	IS・LM モデル（3）：IS・LM モデルによる経済分析	貨幣・債券市場と財市場の統合（貨幣／債券の需給一致と総需要と総供給の一致）、不均衡の調整
第10回	IS・LM モデル（4）：マクロ経済政策の分析	金融政策、財政政策
第11回	オープン・エコノミーのマクロ経済学（1）：国際通貨制度と為替レート	国際収支統計、国際通貨制度、為替レート
第12回	オープン・エコノミーのマクロ経済学（2）：IS・LM モデルのオープン・エコノミーへの	マンデル＝フレミング・モデル

	拡張	
第13回	失業とインフレーション	雇用・失業統計、u-v 曲線、インフレーションとデフレーション、フィリップス曲線
第14回	景気循環	景気循環の諸要因、景気循環の諸学説
第15回	経済成長	新古典派成長理論、技術進歩
第16回	期末試験	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、以下の3点を達成することが求められる。
1. マクロ経済学の基礎概念を正確に説明することができる。
2. 簡単な数学を使って、マクロ経済学の基本的なモデルを定式化し、経済分析ができる。
3. 現実の経済現象や経済政策について、マクロ経済学の基礎概念や基本的なモデルを使って説明することができる。
成績評価は、レポート課題（20%）と期末試験（80%）で行う。
履修上の注意
関連科目：経済学基礎、ミクロ経済学、公共経済学、環境経済・経営学、企業の経済学
教科書
吉川洋『マクロ経済学（第4版）』（現代経済学入門）岩波書店、2017年。
参考文献
必要に応じて紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
公共経済学		天畠華織	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
この授業は、経済社会における政府や公共部門の役割と市場の失敗について経済学的なアプローチで学ぶことを目的とする。経済学、特にミクロ経済学の理論を用いながら、市場経済において望ましい資源配分が達成されない状況について理解を深めるとともに、そのような状況において社会が直面するさまざまな課題を解決するために公共部門が行う政策について考える。さらに、経済学的な視点を通じて環境問題などの具体的な社会の諸問題について理解を深めていく。
到達目標
公共経済学の基礎を修得し、公共部門の活動・役割について理解を深める。具体的には、以下の点について達成できることを目指す。 1. 市場メカニズムの特徴とその限界について理解する。 2. 市場経済における公共部門の役割について経済学的な視点から議論することができる。 3. 市場の失敗の具体的な例を挙げながら、その原因と解決策について議論することができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション	公共経済学とは？
第2回	市場メカニズム	需要と供給、市場の効率性
第3回	余剰分析	余剰分析、価格規制による効果
第4回	パレート効率性と厚生経済学	厚生経済学の基本定理
第5回	市場の失敗	市場の失敗とは？
第6回	公共財（公共財の最適供給）	公共財の性質、公共財の最適供給
第7回	公共財（フリーライド問題）	リンダール均衡、フリーライド問題
第8回	自然独占（不完全競争）	不完全競争、独占企業の価格決定
第9回	自然独占（価格規制）	価格規制
第10回	外部性（外部性）	外部性の性質、外部性の内部化
第11回	外部性（課税）	課税と補助金
第12回	外部性（コースの定理）	交渉による解決
第13回	外部性（排出権取引）	排出権取引
第14回	環境政策	不確実性下における政策手段の選択
第15回	全体のまとめ	
第16回	定期試験	

成績評価方法
授業目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 市場メカニズムの特徴とその限界について理解する。 2. 市場経済における政府の役割について経済学的な視点から議論することができる。 3. 市場の失敗の具体的な例を挙げながら、その原因と解決策について議論することができる。 の3点を達成することが求められる。 成績は、課題（40%）と期末試験（60%）で評価する。
履修上の注意
関連科目：情報システムとサステイナビリティ、自然システムとサステイナビリティ、社会システムとサステイナビリティ、人間システムとサステイナビリティ、環境社会システム学概論、企業の経済学、環境法 1、経済活動と法、環境社会学、環境政策学
教科書
授業中に適宜紹介する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
環境経済・経営学		天畠華織	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 前	選択	講義

授業概要
本講義では市場経済における主要な活用主体である企業活動を軸に据えつつ、環境問題の基本構造と企業活動の関係について基本的な視点とその考え方について学ぶ。具体的には企業活動に伴う環境汚染、企業の社会的責任、環境に配慮した企業経営のあり方に関する基礎的な知識を学ぶ。
到達目標
本授業では、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 環境問題の基本構造と企業活動の関係について説明できること。 2. 企業の社会的責任について説明できること。 3. 環境に配慮した企業経営の具体的事例について説明できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	授業ガイダンス	
第 2 回	環境と経済	環境の価値
第 3 回	環境と市場経済の関わり（市場の失敗）	市場の失敗、産業型公害
第 4 回	環境と市場経済の関わり（企業と環境）	企業のグローバル化と地球環境問題
第 5 回	自然資本	弱い持続可能性と強い持続可能性
第 6 回	環境経営の概念と定義	企業の社会的責任
第 7 回	環境経営の手段と目的	環境配慮設計、グリーン調達
第 8 回	環境マネジメント・システム	ISO14001
第 9 回	環境経営の評価手法	環境会計
第 10 回	環境リスク管理	自然資源の持続的な利用
第 11 回	市場のグリーン化	環境ラベル、認証制度
第 12 回	環境調和型社会の構築	廃棄物処理
第 13 回	環境経営の格付評価	ESG 投資
第 14 回	企業と生態系をめぐる国際動向	生物多様性条約、名古屋議定書
第 15 回	生物多様性経営	国内企業の優良事例紹介
第 16 回	定期試験	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 環境問題の基本構造と企業活動の関係について説明できること 2. 企業の社会的責任について説明できること 3. 環境に配慮した企業経営の具体的事例について説明できること の3点を達成することが求められる。 成績は授業内レポート（50%）と期末試験（50%）で決める。
履修上の注意
関連科目：情報システムとサステイナビリティ、自然システムとサステイナビリティ、社会システムとサステイナビリティ、人間システムとサステイナビリティ、環境社会システム学概論、企業の経済学、環境法 1、経済活動と法、環境社会学、公共経済学、環境政策学
教科書
授業中に適宜紹介する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
企業の経済学		吉川 丈	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 前	選択	講義

授業概要
本講義は講義形式によるものである。本講義では、入門的なミクロ経済学で扱う生産者行動モデルだけでなく、寡占・独占とよばれる企業数が少なく、企業同士の戦略的關係が重要になる状況を考える。また、公共政策や環境問題のような社会現象だけでなく「なぜ、せっかく作った作物を捨てるの?」、「なぜ、赤字なのに生産をやめないの?」などといった身近な問題についても経済学のツール(道具)を使って考える。この講義の目的は、ビジネスの世界で活躍するのに役立つ知識として経済学のツールを習得してもらうことが目的である。経済学的な考え方を身につけると、「社会を見る目」がきつと変わるはずである。
到達目標
本科目では、以下の能力を身につけることを目標とする。 ・新聞やニュースで企業の活動や戦略について知ったときに、経済学のツールを使うとどのように理解できるかを説明できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション(産業組織論とは)、ミクロ経済学の復習(完全競争市場)	
第2回	ミクロ経済学の復習(平均費用と限界費用)	次のキーワードについて事前に調べておく：可変費用、固定費用
第3回	ミクロ経済学の復習(社会厚生)	次のキーワードについて事前に調べておく：社会厚生、市場支配力、外部性
第4回	企業の機能と構造	前回の復習をしておくこと
第5回	独占企業の行動とその経済的帰結(X非効率性)	次のキーワードについて事前に調べておく：X非効率
第6回	独占企業の行動とその経済的帰結(価格差別)	次のキーワードについて事前に調べておく：価格差別
第7回	独占企業の行動とその経済的帰結(まとめ&買い手独占)	前回の復習をしておくこと
第8回	質問と復習	前回の復習をしておくこと
第9回	競争の形態とその経済効果(クールノー競争とベルトラン競争)	次のキーワードについて事前に調べておく：数量競争と価格競争
第10回	競争の形態とその経済効果(シュタッケルベルグ競争)	次のキーワードについて事前に調べておく：シュタッケルベルグ・モデル
第11回	競争の形態とその経済効果(カルテル&まとめ)	前回の復習をしておくこと

第 12 回	参入の経済効果(自由参入)	次のキーワードについて事前に調べておく： 自由参入
第 13 回	参入の経済効果(過剰参入定理)	次のキーワードについて事前に調べておく： 過剰参入定理
第 14 回	質問と復習	
第 15 回	まとめ	
第 16 回	期末試験	

成績評価方法

以下の到達目標に対する達成度で成績評価を行う。

- ・新聞やニュースで企業の活動や戦略について知ったときに、経済学のツールを使うとどのように理解できるかを説明できること。

成績評価は、課題レポートと期末テストの合計点数で成績評価を行う。30%：授業課題レポート(第8回目もしくは9回目の講義内で、レポート課題を出題する。)70%：期末テスト。

履修上の注意

この講義では、ミクロ経済学の知識だけでなく数学の知識も若干必要である。しかし、これらが苦手な人もチャレンジすることに怖がる必要はない。ぜひ、一緒に学びましょう。

関連科目：経済学基礎、ミクロ経済学、マクロ経済学、公共経済学、環境経済・経営学、経済活動と法

教科書

授業中に適宜資料を配布する。

参考文献

- ・泉田成実、柳川隆（2008）プラクティカル産業組織論、有斐閣アルマ。
- ・浅羽茂『企業の経済学』（日経文庫）2004 年。
- ・川濱昇、柳川隆 編（2006）競争の戦略と政策、有斐閣ブックス。
- ・Church, J. and Ware, R. (2000) Industrial Organization: A Strategic Approach, McGraw-Hill Publishing Co. （主に 19 章 - 23 章）
- ・Viscusi, W.K., Harrington, J.E., Jr., and Vernon, J.M. (2005) Economics of Regulation and Antitrust, 4th ed., The MIT Press. （主に 3 章 - 9 章）

授業名称		担当教員氏名	
環境法 1		住田 守道	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 前	選択	講義

授業概要
我々は、生存のための経済活動を営みつつ、それを原因として環境や人への悪影響を必然的に発生させており、それらに対して多様な法が機能している。国内社会を見れば、私人間の関係のみならず私人と国や行政との関係を、国際社会では、国家間の関係を規律するルールが存在し、社会を秩序づけている。 本授業では、関連する法学基礎科目（「経済活動と法」「行政活動と法」「国際法と共生社会」）で学んだ内容を前提として、まず環境法分野の総論部分として、日本における公害・環境被害の歴史や環境法の発展過程及びその理念、その諸領域を扱い、環境権を私権と対比させながら学ぶ。その上で、我々の経済活動に起因する環境や人への被害に関する救済方法を民事法中心に学習する。本学類では、環境を自然に限定していないことから、これをやや広く捉え、私生活を取り巻く社会環境全体を念頭におき、それらの侵害についての救済に関する法のルールを学ぶ（企業の民事責任のみならず、国家の賠償責任も対象とする）。経済主体である企業や個人の活動の自由の限界に関する不法行為法の基礎理論を概説した後、個人の生命身体が直接害された典型例を皮切りに、私生活環境や住環境に関する事故、公害・環境訴訟に関して、個々の被害類型の特徴を押さえながら学習する。最後に、「環境法 2」への架橋として、本講義で扱った救済方法の特性と限界を示す。
到達目標
私法上の権利・法益侵害の救済手段である不法行為法の基本概念の理解、条文に示された基本ルール及び各事件類型の判例準則（各具体的被害類型での裁判所の対応）についての基本的な理解を示すことができることを目標とする。具体的には、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 専門用語を正確に説明できること 2. 法のルール適用の典型例と限界事例を明確に説明することができること 3. ルールそれ自体の正確な理解（内容、趣旨、適用のための要件・効果は何かなど）を正確に説明できること

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	ガイダンス（環境法 1・2 で学ぶこと）	環境法、環境訴訟、環境侵害に対する司法的救済と行政的救済
第2回	環境訴訟の歴史、環境法の世界	日本での公害・環境被害の歴史、環境法の発展史と理念・諸領域
第3回	私法上の権利と環境権	各種私権と環境権
第4回	権利保護・生成と不法行為法の役割及び一般不法行為論 1	制度趣旨、私法的救済方法、損害概念
第5回	一般不法行為論 2 一民事違法性、故意・過失	権利・法益侵害（違法/適法）、故意・過失国家賠償法との相違
第6回	一般不法行為論 3 一因果関係	因果関係、損害賠償の範囲

第7回	特別不法行為論 1 —使用者責任・国家賠償の責任	使用者責任・国家賠償法 1 条
第8回	特別不法行為論 2 —物に関して生ずる責任	土地工作物責任、営造物責任、物に関する特別法上の不法行為
第9回	特別不法行為 3 —共同不法行為、差止	共同不法行為論、差止
第10回	各論 1 —典型（人身事故）・人格権侵害（私生活環境）	生命・身体への侵害、各種人格的利益の侵害の特徴
第11回	各論 2 —所有権侵害、生活妨害（住環境）	所有権侵害、生活妨害（騒音・日照被害等）や眺望景観の侵害の特徴
第12回	各論 3 —4 大公害訴訟（公害・環境訴訟①）	4 大公害訴訟の内容と到達点
第13回	各論 4 —原発事故その 1（公害・環境訴訟②）	原子力損害賠償法と救済システム・被害実態
第14回	各論 5 —原発事故その 2（公害・環境訴訟③）	原発事故訴訟の動向と現状
第15回	各論 6 —海外での取組み（公害・環境訴訟④）および総括（「環境法 1」の課題）	特にフランス民事環境訴訟の導入 「環境法 1」の手法の限界
第16回	定期試験	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 環境法 1 でとり上げられる専門用語を正確に説明できること 2. 法のルール適用の典型例と限界事例を示すことができること 3. ルール自体の正確な理解（内容、趣旨、要件・効果は何かなど）を正確に説明できること の 3 点を達成することが求められる。 成績評価は、定期試験（65%）とレポート（35%）によるものとする。
履修上の注意
関連科目：経済活動と法、行政活動と法、国際法と共生社会、環境法 2、環境政策学
教科書
吉村良一『公害・環境訴訟講義』（法律文化社、2018 年）
参考文献
吉村良一『公害・環境私法の展開と今日的課題』（法律文化社、2002 年） 吉村良一『環境法の現代的課題』（有斐閣、2011 年）

授業名称		担当教員氏名	
環境政策学		遠藤崇浩	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
社会科学の視点に立ち環境政策の基本的な視点と考え方を学ぶ科目の一つである。この授業では、持続可能な社会の実現に必要な市場、政府、共同体の役割について基本的な考え方を学ぶ。具体的には資源配分における市場の役割、市場の失敗、政府介入の効果、共有資源問題、日本の公害行政、持続可能な開発目標に関する基本的知識を習得することを目指す。
到達目標
本授業では、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 現代社会における人間活動と環境問題の相互作用の特徴について説明できること。 2. 共有資源問題といった基礎的な理論枠組みを用いて現実社会の環境問題について説明できること。 3. 環境問題の解決に向けた複数の政策手段について、その長所と短所を説明できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	授業ガイダンス	
第2回	市場の機能とその限界	市場の働き、市場の失敗
第3回	外部性	外部経済、外部不経済
第4回	共有資源問題	共有資源、過剰利用
第5回	環境政策の構造	環境政策の目標と関係主体
第6回	環境政策の手段	直接規制、環境税、許可証取引
第7回	環境政策学に関するレポート作成技術	アカデミックライティング
第8回	日本の公害問題	4大公害
第9回	日本の公害行政	公害対策基本法、環境基本法
第10回	公害から地球環境問題へ	持続可能な発展、持続可能な開発目標
第11回	企業と環境	CSR
第12回	水問題	地表水汚染
第13回	土壌汚染	地下水汚染
第14回	生態系サービスと人間社会	生態系サービスの機能
第15回	生態系サービスの保全策	生態系サービスへの支払い
第16回	期末試験	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 現代社会における人間活動と環境問題の相互作用の特徴について説明できること 2. 共有資源問題といった基礎的な理論枠組みを用いて現実社会の環境問題について説明できること 3. 環境問題の解決に向けた複数の政策手段について、その長所と短所を説明できること の3点を達成することが求められる。 成績は毎回提出させるコメントペーパーと期末試験を用いる。成績評価に占める割合は、コメントペーパーが20%、期末試験が80%である。
履修上の注意
関連科目：環境社会システム学概論、公共政策学基礎、経済活動と法、公共経済学、企業の経済学、環境経済・経営学、環境法1、環境法2
教科書
授業中に適宜資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
都市と経済の地理学		水野 真彦	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
本科目は、産業立地と都市・地域経済について経済地理学の視点から理解するための講義である。理論と具体的事例を関連づけて説明し、都市や地域の経済発展について考える視点を習得させる。具体的には、産業立地論、製造業の地理的集積と分散、サービス業の立地とその変化、商業・オフィス立地の理論と実際、日本と世界の都市システムなどについての理解を深める。
到達目標
経済活動の成長や衰退の地域による違いはなぜ生じるのか、様々な産業が立地する理由は何か、なぜ特定の産業が地理的に集積（集まって立地）し別の産業では分散して立地するのか、といった問題について説明できるようになることを目標とする。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション	講義でとりあげたトピックについて、具体的にどのような事例があるのか調べ、関連する図書を探して読む。また、講義で言及した国や都市の場所がわからない時は地図で調べるなど、日頃から都市や地域について関心を持つようにする。
第2回	製造業の立地（A.ウェーバーの立地論のエッセンス）	
第3回	製造業の地方分散	
第4回	プロダクトサイクルモデル	
第5回	サービス業の立地	
第6回	地方都市へのコールセンター立地	
第7回	グローバル価値連鎖（GVC）と地域発展政策	
第8回	産業の空間的集積	
第9回	東大阪地域の町工場群	
第10回	その他の集積（京都のハイテク産業など）	
第11回	シリコンバレーの新産業集積	
第12回	商業・オフィスの立地論	
第13回	商業立地の実際	
第14回	先進国の都市システム	
第15回	まとめ	
第16回	試験	

成績評価方法
単位取得には、産業の立地や地域の経済的成長・衰退などについての地理学の議論を理解し、説明できることが必要である。期末試験により評価する。合格のためには試験において 60 点以上とることが必要である。講義時にコメントなどを書いてもらい、それを 5-10 点程度評価にプラスする。
履修上の注意
(関連科目) 地域研究 (備考) -
教科書
授業中にレジュメを配付する
参考文献
川端基夫『改訂版立地ウォーズ』新評論。山本健兒『新版経済地理学入門』原書房。経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房。鈴木洋太郎『国際産業立地論への招待』新評論。松原宏編『現代の立地論』古今書院。青山裕子ほか著『経済地理学キーコンセプト』古今書院。竹内淳彦・小田宏信『日本経済地理読本（第9版）』東洋経済新報社。山崎朗ほか著『地域政策』中央経済社。

授業名称		担当教員氏名	
地域研究		水野 真彦	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
グローバル化が進展する一方、ローカルな視点が社会の様々な側面で注目されている。本講義では、ローカルなるものの代表である地域の諸事象について、地理学・地誌学的な視点から考える能力を養う。特に日本および世界の都市について焦点をあてる。日本および世界の複数の都市をとりあげ比較することで、現代世界における都市の特徴と問題について地理学的に理解させる。
到達目標
日本と世界の都市構造のモデルとその変容、郊外化の進展と中心都市の「復活」の要因、日本の大都市と地方都市の特徴と課題、インナーシティ問題やジェントリフィケーションなど世界の様々な都市問題について、地理学の視点から理解し、説明することができるようになることを目標とする。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション（都市化する世界）	講義でとりあげたトピックについて、具体的にどういう事例があるのか調べ、関連する図書を探して読む。講義で言及した国や都市の場所がわからない時は地図で調べるなど、日頃から都市や地域について関心を持つようする。
第2回	都市構造のモデル	
第3回	都市の発展段階・ライフサイクル	
第4回	大阪の近代化と都市化	
第5回	大阪の発展段階・ライフサイクル	
第6回	郊外化の諸問題	
第7回	日本の地方都市とその諸問題	
第8回	中心市街地と郊外型ショッピングモール	
第9回	コンパクトシティ政策	
第10回	北米都市の構造	
第11回	米国の郊外化とインナーシティ問題	
第12回	ジェントリフィケーション	
第13回	世界都市・グローバルシティ	
第14回	発展途上国の都市	
第15回	全体のまとめ	
第16回	試験	

成績評価方法
単位取得には、講義でとりあげたトピックを中心に、現代の都市の諸問題を地理学の視点から理解し、説明できることが必要である。その達成度は、期末試験により評価する。合格のためには試験において100点満点中60点以上とることが必要である。授業中にコメント等を書いてもらい、それによって5-10点程度加点する場合もある。
履修上の注意
(関連科目)「都市と経済の地理学」 (備考) -
教科書
藤井正・神谷浩夫編『よくわかる都市地理学』ミネルヴァ書房
参考文献
藤塚吉浩・高柳長直編『図説 日本の都市問題』古今書院。藤井正・神谷浩夫編「新版 図説 大都市圏」古今書院。神谷浩夫著『ベーシック都市社会地理学』ナカニシヤ出版。日野正輝・香川貴志編『変わりゆく日本の大都市圏』ナカニシヤ出版。伊藤喜栄・藤塚吉浩編「図説 21世紀日本の地域問題」古今書院。中澤高志『住まいと仕事の地理学』旬報社。山口覚ほか著『図説 京阪神の地理』ミネルヴァ書房。

授業名称		担当教員氏名	
環境社会学		藤田 渡	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
環境と社会のかかわりのなかで、どのようにして、いわゆる「環境問題」が生起してくるのか、おもに、そこに暮らす人々の視点から検討する。ローカルなレベルでの人と環境とのかかわりが、近代化や開発の波のなかでどう変化してきたのか、私たちが生活者としてみずからの生活世界を主体的に構築してゆくためには何が必要か、ということを軸に、環境と社会のあらたな関係のあり方について考える。
到達目標
環境の変化が社会の動きとどのように関係しているのか、概要を理解することを目的とする。特に、生活者の視点から、私たちの暮らしと環境とのインタラクションについて気づき、それを実証的に把握する基礎的な力を身につける。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション環境社会学とは？授業の進め方や概要を説明する。環境と社会を分析するという環境社会学の基本的視座を示す。	
第2回	環境史と環境社会学の成り立ち（1）環境史の知見をたどりながら、有史以来、人間が環境をどう改変してきたのかを整理する。	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。授業中指示した課題に取り組む。
第3回	環境史と環境社会学の成り立ち（2）いわゆる「環境問題」がどのようにして発生したのか、環境社会学がどのように発展したのか、その経緯をたどる。	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。授業中指示した課題に取り組む。
第4回	生活環境と文化（1）生活環境主義とは生活環境主義の考え方と実践について理解を深める。	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。授業中指示した課題に取り組む。
第5回	生活環境と文化（2）生業と生態環境人々が生業を営み生活を送っている環境をどのように理解することができるかを検討する。	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。授業中指示した課題に取り組む。

第6回	生活環境と文化(3) 民俗知の世界生態環境との関わりのなかで育まれてきた民俗知にはどのようなものがあり、どういう特徴があるのかを考える。	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。授業中指示した課題に取り組む。
第7回	生活環境の変化と社会(1) 開発の功罪近代化の進展や開発によって、生活環境がどのように変貌したのかをたどり、その功罪を検討する。	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。授業中指示した課題に取り組む。
第8回	生活環境の変化と社会(2) 公害をめぐって工業化の副作用として発生した公害について、受益・受苦の観点から、その社会的構図を理解する。	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。授業中指示した課題に取り組む。
第9回	生活環境の変化と社会(3) 原子力を考える原発の潜在的な生活環境への脅威と、私たちの意識について、科学の権力性や構造災といった概念から考える。	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。授業中指示した課題に取り組む。
第10回	私たちの暮らしとシャドウ・エコロジー(1) 私たちの日常生活が、遠い地域の環境に影響を与えていることについて、木材を事例に考える。	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。授業中指示した課題に取り組む。
第11回	わたしたちの暮らしとシャドウ・エコロジー(2) 私たちの日常生活が、遠い地域の環境に影響を与えていることについて、パームを事例に考える。	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。授業中指示した課題に取り組む。
第12回	過疎化する日本の農村日本の農山村が過疎化するなかで、地域の生活環境がどのように変わりつつあるのか、外部の社会経済の動きとの関連で考える。	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。授業中指示した課題に取り組む。
第13回	オルタナティブな生き方(1) 途上国の農民たちこれまでのような、物質的利便性や経済的豊かさを追求する暮らしから距離を置く生活を模索する途上国の農民の例を、社会経済との関連で分析する。	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。授業中指示した課題に取り組む。
第14回	オルタナティブな生き方(2) LOHAS・産直・フェアトレード先進国における、環境に配慮した消費・生活スタイルを模索する運動から、私たちがとりうる行動の選択肢について考える。	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。授業中指示した課題に取り組む。

第 15 回	まとめ	
第 16 回	期末試験	授業時に指定する参考図書などを読んでおくこと。

成績評価方法
課題の提出など授業への参加度と、期末の試験またはレポートにより、総合的に判断する。授業目標に示した事柄につき、1) 提示した具体的事実の妥当性、2) 全体の論理性をもった議論を展開できることを合否の判定基準とする。
履修上の注意
適宜指示します。
教科書
特にない。
参考文献
適宜、指定する。

授業名称		担当教員氏名	
文化の社会学		秋庭 裕	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
「宗教」に着目し「文化」を考察する。21 世紀、刻々とグローバル化が進展する時代にあつて、社会や伝統の屋台骨をなす宗教文化を見つめ直すことは、極めて重要な知的探求なのである。人類社会における宗教文化の多様性とその社会的機能を理解するために、社会学の学説史を紐解き、人類が経験したことのない今日、地球規模で進行する大変貌を読み解くための有効な概念と理論を磨き上げ、いかに来るべき共生社会を展望することができるかを理論的に問う。
到達目標
「宗教」を研究することで、ヴェーバーとデュルケームは社会学を創りだした。それは、宗教こそ社会のエッセンスであるからである。まずはこの原点を把握・修得する。次に近代化の進展と共に世界は世俗化するが、そのなかで宗教はいったいどのような役割を果たしたのかを知悉する。さらに近代化・科学化・合理化した社会に生きる人間にとって宗教の意味を説明できるようにする。またさらに、宗教が提供する価値や理想が、グローバル化時代にあつて人類にどのような可能性を開くことができるのかも説明できるようにする。実際、現代社会は、宗教が分からなければ、世界は分からないのである。この視点から地球社会を鳥瞰できる知識と理論を修得する。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	文化としての宗教ここでいう宗教は、特定の教団や神や仏に対する信仰や崇拝ではない。文化のエッセンスとしての宗教の性格を考察する。宗教と科学と呪術の関係性について。	『宗教学の名著 30』を通読すること。
第 2 回	宗教としての文化宗教は、じつは「社会的」なるものの凝集体なのです。文化とは、社会のコンテンツなのですが、それはときに、じつに非合理的な「宗教」的なものであるのです。文化としての宗教／組織としての宗教。	予習と復習。課題は前回授業で提示。『脱常識の社会学』を通読すること。
第 3 回	宗教と社会デュルケームに学ぶ、『社会分業論』の視点デュルケームに学ぶ、『自殺論』の到達点	予習と復習。課題は前回授業で提示。『脱常識の社会学』、とくに第 2 章「神の社会学」を熟読すること。
第 4 回	宗教と社会デュルケームに学ぶ、『社会学的方法の基準』に学ぶ	予習と復習。課題は前回授業で提示。『社会学的方法の基準』を通読すること。
第 5 回	前回続きウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を紐解く「欲望という名の電車」は止まらない！	予習と復習。課題は前回授業で提示。『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を通読すること。

第 6 回	前回続き「神」が、バブルを好みたまうのか！ 世俗化社会の帰結／世俗化論を越えて。	予習と復習。課題は前回授業で提示。
第 7 回	20 世紀を「宗教」の視点から見るアメリカ合衆国の成立と宗教、その 1 「WASP とは」。	予習と復習。課題は前回授業で提示。 『アメリカの公共宗教』を通読すること。
第 8 回	20 世紀を「宗教」の視点から見るアメリカ合衆国の成立と宗教、その 2 「宗教と階層」。	予習と復習。課題は前回授業で提示。
第 9 回	20 世紀を「宗教」の視点から見るアメリカ合衆国の成立と宗教、その 3 「シカゴにおける共生、エスニック・アメリカ」。	予習と復習。課題は前回授業で提示。
第 10 回	宗教の社会的機能宗教と意味体系意味の危機 神義論アノミー。	予習と復習。課題は前回授業で提示。
第 11 回	宗教と集団共同体と宗教的帰属社会的統一性の表現としての宗教。	予習と復習。課題は前回授業で提示。
第 12 回	個人における宗教意味、帰属、アイデンティティ、民族、階級。	予習と復習。課題は前回授業で提示。
第 13 回	個人における宗教入信、コミットメント、脱会。	予習と復習。課題は前回授業で提示。
第 14 回	宗教集合体のダイナミクス宗教集団とその社会環境との関係宗教と国家宗教と政治。	予習と復習。課題は前回授業で提示。
第 15 回	現代世界における宗教、権力、秩序。ヨーロッパにおける宗教、権力、正当性グローバルな文脈における権力と秩序。	予習と復習。課題は前回授業で提示。 『グローバリゼーション・インパクト』を通読すること。
第 16 回	定期試験	

成績評価方法

成績評価は、授業での取り組み姿勢（受講中の発言や議論）と、試験による。試験では、前掲の授業目標に含まれる理論と方法の理解度合いによって評価する。授業で取り上げた各項について概説ができれば（ミニマム）、その習得した知識に基づいて、各人の問題意識との接点から発展的に社会学的思考ができること（マキシマム）。試験での評点を乗じ最終の評点とする。またなお授業中の積極的な発言と議論も、プラス評価として用いる。

履修上の注意

（関連科目）共生社会と宗教
（備考）

教科書
なし
参考文献
主要なものは、R.コリンズ『脱常識の社会学』岩波書店。デュルケーム『自殺論』中公文庫。ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫。櫻井義秀・三木英編著『よくわかる宗教社会学』ミネルヴァ書房。島蘭進『宗教学の名著 30』ちくま新書。渡邊直樹編『宗教と現代がわかる本 2010』平凡社。藤本龍児『アメリカの公共宗教』NTT 出版。檜尾直樹『スピリチュアリティ革命』春秋社。厚東洋輔『グローバリゼーション・インパクト』ミネルヴァ書房。秋庭裕・川端亮『霊能のリアリティへ』新曜社。秋庭裕『アメリカ創価学会〈SGI-USA〉の 55 年』新曜社、など。 他は講義の中で随時指示する。

授業名称		担当教員氏名	
共生社会とアイデンティティ		工藤宏司	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
「アイデンティティ」という概念を切り口に、社会と個人との相互作用により生じる種々の問題について考える。しばしば「アイデンティティ」の問題として捉えられる具体的なトピックを取り上げ、それぞれについて規範や制度と人との関係性の観点から理解を深めることで、社会学の学問的特徴について学び、共生社会の実現に向けて必要な事項について考える。
到達目標
(1) アイデンティティ論のバリエーションについてその拡がりの特徴を知ること、(2) それぞれの違いを認識し、具体的な事象について考えることができるようになること、(3) 自身の問題関心に照らして、社会学におけるアイデンティティ論についての論評ができること、の達成を目標とする。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション：授業の概要	
第2回	アイデンティティと共生社会	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第3回	自己紹介の方法論①～「自己 self」の多様性と社会	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第4回	自己紹介の方法論②～役割理論	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第5回	「性別」を「する」ということ～GID 者の実践とジェンダー	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第6回	「ひきこもり」者のジレンマ～スティグマとパッシング	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第7回	少年はなぜ本当のことを言えなかったのか①～逸脱のラベリング論	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第8回	少年はなぜ本当のことを言えなかったのか②～逸脱アイデンティティ形成仮説	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第9回	人の心は見えない？～動機の語彙論と相互行為論	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第10回	「スマイル0円」の了解可能性①～感情規則と感情作業	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。

第 11 回	「スマイル 0 円」の了解可能性②～感情労働と自己感情からの疎外	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第 12 回	「就活自己分析マニュアル」が示すこと①～近代的自己と統治の原理	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第 13 回	「就活自己分析マニュアル」が示すこと②～生権力と自己統治	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第 14 回	なぜ「いま」問うのか～ポスト・モダニティと自己の再帰的プロジェクト	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第 15 回	全体のまとめ	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、(1) 授業各回でとりあげられた社会学の議論について理解し、(2) それぞれが「アイデンティティ」を考察する際の意義や限界について考え、(3) 自身が「アイデンティティと自己」について考察する際の立場を理解し、その観点から議論を構成できるようになっていることを必要とする。評価は通常授業で配布するコメントペーパーの内容 (30%) と、期末レポート (70%) で行う。
履修上の注意
関連科目： 社会学基礎 、現代の社会問題と社会運動
教科書
授業時に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
現代の社会問題と社会運動		工藤宏司	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
「社会問題」とはいったいなんだろうか。またそこに人々の日常生活における思考や行為はどのようにかわるのか。この講義では具体的な「問題」を例にあげながら、「社会問題」「逸脱」について社会学的に考察する方法のバリエーションと、それぞれが開示する現象理解の可能性について学ぶ。また「社会問題現象」の現代的な構築過程にとって重要な役割を担う社会運動について、その広がりや変化について学ぶ。
到達目標
(1) 社会学における社会問題論・逸脱論のバリエーションを学び、(2) 具体的事例を通じて、それぞれの議論(方法論)の特徴を理解し、(3) われわれが社会問題や逸脱といった社会現象をどのように理解し、またどのように対応することが可能であるのかについて考えること、を目標とする。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション：授業の概要	
第2回	逸脱の社会学あるいは社会問題論と社会運動	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。授業中指示した課題に取り組む。
第3回	社会問題・逸脱研究の系譜①～基礎的社会観と社会問題研究	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。授業中指示した課題に取り組む。
第4回	社会問題・逸脱研究の系譜②～コンセンサスモデルの三形態	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。授業中指示した課題に取り組む。
第5回	社会問題・逸脱研究の系譜③～コンフリクト・モデル	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。授業中指示した課題に取り組む。
第6回	社会問題・逸脱研究の系譜④～逸脱のラベリング論	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。授業中指示した課題に取り組む。
第7回	社会問題・逸脱研究の系譜⑤～社会構築主義と社会運動	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。授業中指示した課題に取り組む。
第8回	「ひきこもり」社会問題化～分水嶺としての2000年	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。授業中指示した課題に取り組む。
第9回	「行為」から「相互行為」へ～「動機の語彙論」という視点	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。授業中指示した課題に取り組む。
第10回	「ひきこもり」当事者への眼差し①～「犯罪」「暴力」とつないだもの	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。授業中指示した課題に取り組む。

第 11 回	「ひきこもり」当事者への眼差し②～「原因志向」から「対処志向」へ	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。授業中指示した課題に取り組む。
第 12 回	「就労問題」としての「ひきこもり」～「若年者就労問題」との重なり・すれ違い	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。授業中指示した課題に取り組む。
第 13 回	「ニート」社会問題化と「ひきこもり」～規律訓練型支援への一元化	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。授業中指示した課題に取り組む。
第 14 回	「ひきこもり」医療化とジレンマ～リスクの推論と制度上の文脈	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。授業中指示した課題に取り組む。
第 15 回	全体のまとめ	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。授業中指示した課題に取り組む。

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、（１）授業各回でとりあげられた社会学の議論について理解し、（２）それぞれが「社会問題」「逸脱」現象を考察する際の意義や限界について考え、（３）自身が「社会問題」「逸脱」現象について考察する際の立場を理解し、その観点から議論を構成できるようになっていることを必要とする。評価は通常授業で配布するコメントペーパーの内容（30％）と、期末レポート（70％）で行う。
履修上の注意
関連科目： 社会学基礎 、共生社会とアイデンティティ
教科書
授業時に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
文化と景観		福田 珠己	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
「文化」とは何か／どのような考え方か。現代社会において「文化」はどのような位置をしめているのか。本科目では、文化地理学の議論を中心に、文化と社会について具体的な事例を踏まえながら、文化の政治性に焦点をあてて論じる。講義形式ではあるが、多様な意見に接することによって理解を深めるために課題毎にグループ・ディスカッションなども行う予定である。
到達目標
地理学および隣接諸分野において重要な位置を占めてきた「文化」「景観」という考え方について、文化の政治性に焦点をあて、社会における諸現象に即して理解することを目標とする。具体的な達成目標は次のとおり。1. 文化の政治性に関する人文地理学を中心とした基本的な考え方を理解する。2. 文化表象や所有権をめぐる闘争など社会の諸現象と関連づけて論じることができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション全体の説明、および、準備学習、学外での自習課題などについて提示する。	
第2回	イントロダクション（2）文化と政治性（グループディスカッション）	指定された項目について調べる
第3回	テーマ1：アイヌ民族の骨と土地をめぐる問題から（1）アイヌの遺骨をめぐる問題。なぜ、このようなことがおきたのか？	指定された新聞記事などを熟読
第4回	テーマ1：アイヌ民族の骨と土地をめぐる問題」から（2）文化と社会に留意して、当時の社会について考える	指定された用語について調べる
第5回	テーマ1：アイヌ民族の骨と土地をめぐる問題」から（3）展示されたアイヌ文化、アイヌの人びと	指定文献の熟読、要約
第6回	テーマ2：人間動物園？（1）異文化はどのように扱われてきたのか？他者はどのように扱われてきたのか？	指定された項目について調べる
第7回	テーマ2：人間動物園？（2）博覧会の時代	指定された項目について調べる

	について	
第 8 回	テーマ 2：人間動物園？（3）人類館事件を中心に	指定資料の熟読
第 9 回	テーマ 3：オーストラリア観光とエアーズロック	資料の予習
第 10 回	テーマ 3：オーストラリア観光とエアーズロック映画「裸足の 1500 マイル」から考える	
第 11 回	テーマ 3：オーストラリア観光とエアーズロック映画「裸足の 1500 マイル」から考える	ディスカッションのため映画の内容についてまとめておく
第 12 回	テーマ 3：オーストラリア観光とエアーズロック小括	テーマ 3 全体の復習
第 13 回	テーマ 4：極北の先住民と文化をめぐる諸問題（1）呼称をめぐる議論	指定文献の熟読
第 14 回	テーマ 4：極北の先住民と文化をめぐる諸問題（2）先住民、アート	指定文献の熟読
第 15 回	まとめ	
第 16 回	試験	
		この授業では、2～4 回ほどで 1 つのテーマについて取り上げる。いずれの場合も、講義を行うだけでなく、グループでのディスカッション・作業、テーマごとのまとめを課す。その準備のための学習が不可欠である。

成績評価方法

目標 1・2 の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、・文化の政治性に関する人文地理学を中心とした基本的な考え方を理解し、適切な用語を用いて説明することができる。・文化表象や所有権をめぐる闘争など社会の諸現象と関連づけて論じることができる。上記 2 点を達成することが求められる。成績評価は、期末試験(60%)、平常レポート・グループディスカッションなど授業への取り組み(40%)をもとに行う。

履修上の注意

（関連科目）地理学基礎

（備考）社会で実際に起こっている諸現象についての地理学的考察に主眼に置いているため、取り上げる事例に変更が生じることもあります。

教科書
指定しない。
参考文献
授業中に指示

授業名称		担当教員氏名	
現代社会の倫理学		山本由美子	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
本科目は、現代社会と倫理について応用倫理学の枠組みから思考する講義である。応用倫理学は倫理学の一分野であり、テクノロジーの進展を中心とする現代社会の倫理問題群に取り組む学問である。 本科目では、現代社会に生きるわたしたちが抱えたさまざまな倫理問題の所在を明らかにし、それらについて、とくにテクノロジーや資本主義との関係から思考する。現代社会の倫理問題群について、「何が考えられなければならないのか」という基本的な視点の持ち方を理解することをめざす。各テーマは個々に完結したものではなく、全回を通じて相互に関連し合っている。講義ではテーマに応じ適宜、動画や映像を用いる場合がある。
到達目標
1.現代社会において、わたしたちが直面する倫理問題群にはどんなものがあるか説明できる。 2.現代社会において、さまざまな倫理問題が生ずる背景や、なぜそれらが倫理問題であるのか説明できる。 3.講義で扱った倫理問題群の一つについて、具体的な問いをみずから立てられることを目標とする。（与えられた問いに答えることなく、自分自身で問いを見いだせることを目標とする）

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション＋倫理学という構え	講義の内容を復習する。
第2回	ロボットから人権を考える	講義の内容を復習する。
第3回	医学研究と人体実験	講義の内容を復習する。
第4回	パーソンという概念	講義の内容を復習する。
第5回	動物実験と動物の権利	講義の内容を復習する。
第6回	殺すことの不正について①殺人と死刑	講義の内容を復習する。
第7回	殺すことの不正について②戦争	講義の内容を復習する。
第8回	生体データと監視社会①個体識別情報	講義の内容を復習する。
第9回	生体データと監視社会②生体内部情報	講義の内容を復習する。
第10回	生殖テクノロジーと身体①配偶子採取	講義の内容を復習する。
第11回	生殖テクノロジーと身体②身体という道具	講義の内容を復習する。
第12回	資本主義と生権力①死にゆかせる権力	講義の内容を復習する。

第 13 回	資本主義と生権力②選別する権力	講義の内容を復習する。
第 14 回	人類は生存すべきか	講義の内容を復習する。
第 15 回	まとめ＋期末レポート対策	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。 1.現代社会でわたしたちが直面する倫理問題群にはどんなものがあるか、六つ以上説明できる。 2.現代社会で倫理問題が生ずる背景や、なぜそれが倫理問題であるのかについて、六つ以上説明できる。 3.講義で扱った倫理問題群の一つについて、具体的な問いをみずから立て考察を試みることができる。 具体的には、毎講義のリアクションペーパー（14回）と期末レポート（1回）によって評価する。評価の割合は、①期末レポート（60%）＋②リアクションペーパー（40%）とする。 単位取得には、①＋②において合計60点以上（100点満点のうち）の得点を要する。
履修上の注意
関連科目：「生命科学技術と社会」（後期科目） 高校で倫理を履修していなくともまったく問題ありません。 授業計画は受講生の関心や時事問題との関係で、多少の変更が生ずる場合があります。 期末レポートの準備のためには、自分の関心に引きつけて文献収集し、調べものをする必要があります。
教科書
毎回の授業で資料を配付する。
参考文献
馬淵浩二，2010『倫理空間への問い——応用倫理学から世界を見る』ナカニシヤ出版。 イブ・ヘロルド（佐藤やえ訳），2017『Beyond Human——超人類の時代へ』ディスカヴァー・トゥエンティワン。 浅見昇吾・盛永審一郎編，2013『教養としての応用倫理学』丸善出版。 金森修，2010『〈生政治〉の哲学』ミネルヴァ書房。 このほか、授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
生命科学技術と社会		山本由美子	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
本科目は、現代に用いられているさまざまな生命科学技術について概観し、それら技術の基礎的な知識を得るとともに、医療・倫理・社会の視点から思考する講義である。とくにバイオテクノロジーの進展に注目し、わたしたちの生命や身体、現代社会や未来世代にどのような影響をおよぼしているのかについて基本的な枠組みを理解することをめざす。 こんにち、生命科学技術が新聞やニュースで取り上げられるさい、技術の実際が省略されていたり、あるいは誇張されていたり、ときには誤って紹介されたりすることがある。「専門家」による情報を鵜呑みにするのではなく、基本的な知識をもって技術の展望と問題点を把握できることは、現代社会に生きるわたしたちにとって重要である。講義ではテーマに応じ、映画や動画を用いる。
到達目標
1. 現代社会で用いられている生命科学技術にはどんなものがあるか、六つ以上説明できる。 2. 上記 1.について、それぞれの生命科学技術がどんな目的のもとに開発されてきたか、またどんな社会問題や倫理問題が含まれているか、説明できる。 3. 講義で扱った生命科学技術の一つについて、具体的な問いをみずから立て、考察することができる。 (与えられた問いに答えることではなく、自分なりの問いを見いだせることを目標とする)

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション+生命の起源はどこに	講義の内容を復習する。
第2回	人工生殖(1)生殖補助技術	講義の内容を復習する。
第3回	人工生殖(2)代理出産	講義の内容を復習する。
第4回	生命への介入(1)出生前診断、受精卵診断	講義の内容を復習する。
第5回	生命への介入(2)遺伝子操作、クローン技術	講義の内容を復習する。
第6回	生命への介入(3)ゲノム編集	講義の内容を復習する。
第7回	細胞や組織をつくる：iPS細胞、再生医療	講義の内容を復習する。
第8回	臓器をつくる	講義の内容を復習する。
第9回	動物の解放	講義の内容を復習する。
第10回	人工食用肉をつくる	講義の内容を復習する。
第11回	エンハンスメント（人体機能増進）と欲望	講義の内容を復習する。
第12回	優生学の過去・現在	講義の内容を復習する。
第13回	バイオ兵器の過去・現在	講義の内容を復習する。
第14回	人工生命体・合成生物について	講義の内容を復習する。
第15回	まとめ+期末レポート対策	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。 1. 現代社会で用いられている生命科学技術にはどんなものがあるか、六つ以上説明できる。 2. 上記 1.について、それぞれの生命科学技術がどんな目的のもとに開発されてきたか、またどんな社会問題や倫理問題を含んでいるか、説明できる。 3. 講義で扱った生命科学技術の一つについて、具体的な問いをみずから立て、考察することができる。 具体的には、毎講義のリアクションペーパー（14 回）と期末レポート（1 回）によって評価する。 評価の割合は、①期末レポート（60%）＋②リアクションペーパー（40%）とする。 単位取得には、①＋②において合計 60 点以上（100 点満点のうち）の得点を要する。
履修上の注意
関連科目：「現代社会の倫理学」（前期科目） 上記の関連科目を履修していなくともまったく問題ありません。 授業計画は受講生の関心や時事問題との関係で、多少の変更が生ずる場合があります。 期末レポートの準備のためには、自分の関心に引きつけて文献収集し、調べものをする必要があります。
教科書
毎回の授業で資料を配付する。
参考文献
東京大学生命科学教科書編集委員会編，2015『現代生命科学』羊土社. 西沢いずみ，2018『生物と生命倫理の基本ノート』 林 真理，2002『操作される生命——科学的言説の政治学』NTT 出版. 浅見昇吾・盛永審一郎編，2013『教養としての応用倫理学』丸善出版. 馬淵浩二，2010『倫理空間への問い——応用倫理学から世界を見る』ナカニシヤ出版. このほか、授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
環境哲学と現代社会		上柿崇英	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
われわれホモ・サピエンスは、自然生態系の上層に人為的生態系を築き、六〇〇万年にわたってその人為的生態系を膨張させながら子孫へと受け渡してきた。農耕の成立、近代的社会様式の成立、そして「自己完結社会」の成立といった“特異点”を経るなかで、人間はその存在様式さえ変容させてきたと言える。本講義では、人間と他の生物の違いはどこにあるのか、文明とは何か、なぜ宗教が誕生したのか、環境問題の起源はどこにあるのかといった問いから、科学技術の未来、リアリティなき生、関係性の病理や“生きづらさ”など幅広く、自然—社会—人間の問題について考えていく。
到達目標
21 世紀の環境問題は人間と自然の関係ではなく、人間と社会の関係の中にある。受講生には、本講義を通じて“持続可能性”の概念を拡張し、現代科学技術と人間、人間関係や共同の困難、存在の揺らぎといった社会問題をも包括する環境哲学の射程について理解することを目標とする。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	導入（21 世紀の対抗軸と環境哲学の視座）	講義の内容を復習する。
第 2 回	エコシステムと人間存在①（“ヒト”と“人間”を考える）	講義の内容を復習する。
第 3 回	エコシステムと人間存在②（人類の歴史と環境問題）	講義の内容を復習する。
第 4 回	社会システムと人間存在①（文明と人間：前近代と近代）	講義の内容を復習する。
第 5 回	社会システムと人間存在②（近代における人間の理想：自由と個人の自律）	講義の内容を復習する。
第 6 回	社会システムと人間存在③（近代社会システムの成立：国民国家、市場経済、化石燃料）	講義の内容を復習する。
第 7 回	社会システムと人間存在④（科学的合理性の成立）	講義の内容を復習する。

第 8 回	エコシステムと社会システム①（エコロジー経済学の視座より）	講義の内容を復習する。
第 9 回	エコシステムと社会システム②（社会－生態システム論の視座より）	講義の内容を復習する。
第 10 回	“現代”とはいかなる時代か①——「戦後」社会と「21 世紀」の成立	講義の内容を復習する。
第 11 回	“現代”とはいかなる時代か②——現代科学技術の帰結としての「生の自己完結化」と「生の脱身体化」	講義の内容を復習する。
第 12 回	"生活世界"と持続可能性①——生活世界と"生"の三契機	講義の内容を復習する。
第 13 回	"生活世界"と持続可能性②——自己とは何か、他者とは何か	講義の内容を復習する。
第 14 回	"生活世界"と持続可能性③——人間存在における「共同」と「不介入の倫理」	講義の内容を復習する。
第 15 回	"生活世界"と持続可能性④——「有限の生」と「無限の生」	講義の内容を復習する。

成績評価方法
学期末に提出してもらうレポートで判定します。単位認定については、講義で取り上げた現代社会に関わる問題を自ら咀嚼した上で、自身の言葉によって表現できることが求められます。
履修上の注意
適宜指示します。
教科書
毎回の授業で資料を配付する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
日本の歴史環境		住友 陽文	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
日本史研究の現状を踏まえ、今を生きるために歴史とどのように向き合うかを考えるための素材を日本史に求め、問題をえぐりだして国家・社会・文化・思想などさまざまな領域の論点を包括的に捉える。とくに、日本史を知るうえで重要な「天皇」を中心に論じる。配布するプリントと資料にもとづいて講義形式で行なう。
到達目標
日本の歴史を素材にして、現代日本で惹起している国家的・社会的・思想的諸問題の歴史的環境とその淵源を探り、現在を生きるわたしたちが未来に向けてどのような時代を構築していくかを考えるための知識と理論を養えるようになる。実践的に社会を構築していくべき市民が持つ歴史認識がテーマである。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロ	講義を聴いたうえで疑問を持つようにしてもらいたい。そして質問を考えるようにしてほしい。そのために講義内容を自分なりに反復し、必要があれば本を何冊か読んで自習すること。
第2回	はじめに―問われる歴史―	
第3回	日本史のなかの天皇	
第4回	古代の天皇	
第5回	中世的世界の形成	
第6回	中世の天皇観	
第7回	日本的社会の形成と天皇	
第8回	日本近世の天皇観	
第9回	大政委任論	
第10回	王政復古	
第11回	内乱と国家形成	
第12回	明治憲法の制定	
第13回	大衆社会とデモクラシー	
第14回	総力戦体制と天皇	
第15回	戦後民主主義と象徴天皇―まとめにかえて―	
第16回	期末試験	

成績評価方法
○上記の授業目標にあるように、現代日本で惹起している国家的・社会的・思想的諸問題についての正確な知識を踏まえながら、その歴史的淵源について基本的な説明ができることが単位取得のための条件である。 ○試験により行う。講義の内容を踏まえていること、歴史的にモノを考えようとして、事実を踏まえて論理的に説明できていることなどを基準に評価する。 ○授業への取り組み方なども加味する。適宜、講義への意見・感想・質問などを聞くことにする。 ○試験にはノート・配布プリント・参考書等の持ち込みを許可するが、参考書の丸映しやネットで検索した「模範解答」の丸映しは採点しない。
履修上の注意
(関連科目) 個人創造の思想史 (備考)
教科書
特になし
参考文献
網野善彦『日本社会の歴史』上・中・下（岩波新書 1997 年）

授業名称		担当教員氏名	
個人創造の思想史		住友陽文	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
19～20 世紀における日本で見られた「個人」のあり方について展開された思想や考え方の展開を見つつ、それがどのような社会や国家を準備したのかを明らかにしていく。
到達目標
私たちは自立した人格を持つにもかかわらず、他人無しには生きていけない。それどころか、時には遠い過去に存在していたはずの他人の発言や考えに想いを馳せる。ここにおいて、私たちがいかにこの社会や遠い過去との関わりのなかで生きているかを知るのである。そのことは、とりもなおさず、自立したように見える人格が、無数の、そして時間を超えた他人との関わりのなかで創られていることを意味する。では、改めて問うてみよう。個人はいかにして創られてきたかと。個人とは何か。個人とはどのようなものであらねばならないか。そういうことをめぐる思想や言説の歴史を見ることを通して、いま一度「ここにいる」個人のあり方を問い直してみる。そのことを歴史的に考える習慣を身につけることを目標とする。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	イントロ	講義を聴いたうえで疑問を持つようにしてもらいたい。そして質問を考えるようにしてほしい。そのために講義内容を自分なりに反復し、必要があれば本を何冊か読んで自習すること。
第 2 回	はじめに	
第 3 回	日本史における個人	
第 4 回	身分制の解体と明治維新（導入と構造）	
第 5 回	身分制の解体と明治維新（原理と展開）	
第 6 回	明治憲法	
第 7 回	教育勅語	
第 8 回	教化国家	
第 9 回	社会の発見	
第 10 回	民主主義と個人・社会	
第 11 回	「日本人であること」と「日本人であろうとすること」	
第 12 回	総力戦体制	
第 13 回	敗戦と新憲法	
第 14 回	戦後民主主義と個人	
第 15 回	おわりに	

第 16 回	定期試験	

成績評価方法
試験によりおこなう。講義の内容を踏まえていること、歴史的にモノを考えようとして、事実を踏まえて論理的に説明できていることなどを基準に評価する。出席は考慮しないが、試験（またはレポート）では講義の内容を理解したうえでさらに論述してもらうので、知的関心をもって積極的に授業に参加することを望む。
履修上の注意
（関連科目）日本の歴史環境 （備考）
教科書
特になし
参考文献
住友陽文『皇国日本のデモクラシー』（有志舎 2011 年）その他については適宜講義中に紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
社会文化史		酒井 隆史	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
ひとつの社会は、多様な文化を通してその世界観、価値観、思想性などを表現している。したがって、ひとつの社会の生み出した文化を知ること、認識すること、分析することは、その社会の世界観、価値観、思想性を再構成することでもある。本講義では、文化の解釈を通して、ひとつの社会のあり方を深く考察する。そのさい、文化の分析方法、そして社会のなかの価値や思想を把握する方法を学ぶ。
到達目標
COVID-19 パンデミックで混乱するなか、警察官による黒人男性の殺害をきっかけに、全米のみならず世界中に、レイシズム（人種差別）反対の運動が拡大した。そんななか#Black Lives Matter と呼ばれる、若い世代のアフリカ系アメリカ人を中心とした運動組織が一躍注目を浴びた。オバマという大統領を黒人から輩出するほどアフリカ系アメリカ人の社会進出もすすんでいるようにみえるのに、なぜこのようなことが起きるのだろうか？アメリカ社会とレイシズムとはどのような関係にあるのだろうか？そもそもレイシズムとはなんだろうか？ここからいまの世界はどうみえてくるのだろうか？ここでは、黒人の音楽表現に焦点を合わせ、それめぐるさまざまな考察や背景をなす歴史、それらをめぐるさまざまな知的言説を検討するなかから、レイシズムやあるいは音楽表現というものの本質を掘り下げてみたい。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	ガイダンス	示唆した関連文献を読むこと。
第 2 回	#Black Lives Matter とその背景 (1) 「ポリス・ブルタリティ」とエスニック・マイノリティ	
第 3 回	#Black Lives Matter とその背景 (2) アメリカ合衆国とレイシズム概論	
第 4 回	Spirituals (1) 大西洋貿易と奴隷制	
第 5 回	Spirituals (2) スピリチュアルズの伝えるもの	
第 6 回	Blues (1) 奴隷からの解放と都市におけるあたらしい苦闘	
第 7 回	Blues (2) blue note——アフリカとヨーロッパの衝突	

第 8 回	Jazz (1) クレオールとジャズ	
第 9 回	Jazz (2) 黒いジレンマと創造性の爆発	
第 10 回	R&B 公民権運動の台頭とマルコム X	
第 11 回	Soul (1) 黒人解放運動の展開——ブラック・パワーへ	
第 12 回	Soul (2) +Jazz キング牧師の暗殺	
第 13 回	Soul (3) 解放運動の収束とソウル・ミュージックの絶頂	
第 14 回	HipHop (1) 荒廃する都市とヒップホップの誕生	
第 15 回	HipHop (2)「サグ」から#Black Lives Matterへ	
第 16 回	期末試験	

成績評価方法
基本的に、期末試験で評価する。また、授業中に小レポートを課すこともある。成績に考慮されるのは、授業に出席し、達成目標についてどれほど成果をあげているか、また、独自の学習と考察のあとがどれほどみえるかによって評価する。具体的には、試験で提出する課題に、授業をきちんとふまえていることが最低基準とある。
履修上の注意
(関連科目) 社会政治思想 (備考)
教科書
授業のなかで適宜指示する。
参考文献
授業のなかで適宜指示する。

授業名称		担当教員氏名	
社会政治思想		酒井 隆史	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
人類はその歴史を通して、社会とはなにかをさまざまなかたち——思想にかぎらず、神話や芸術といったかたちでも——で考察し、そのあり方を模索してきた。そして、ひとつの社会は、エリートと民衆、ネイティブとよその、男性と女性などのさまざまな葛藤を抱えてきて、それに対してさまざまに対処してきた。本講義では、こうした社会の抱える葛藤にどのように人類は対処してきたのか、そのさいどのような価値観や思想性がもたれていたのかを探る。そして、その過程で思想史や文化史の方法を学ぶ。
到達目標
本講義では、「国家とお金、仕事と男／女」というテーマで、人類が「経済」をどのようにを経験してきたのか、この論点を、支配や権力、ジェンダーの観点から考察してみたい。到達目標については、1) 労働にかかわる人類史の概論を学ぶ、2) 労働と支配、国家とがどう関係してきたのかを学ぶ、3) ジェンダーの視点から、社会的／政治的問題を分析する方法を学ぶ、以上を、基本的なものとして設定したい。すすめかたとしては、関連する古典的文献を講義ごとにとりあげて、紹介するというかたちをとりたい。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	ガイダンス	授業のなかで示唆された関連文献を読んでおく。
第 2 回	「国家とお金、仕事と男／女」概論	
第 3 回	未開社会における仕事 (1) マーシャル・サーリンズ『石器時代の経済学』	
第 4 回	未開社会における仕事 (2) ピエール・ウラストル『国家に抗する社会』	
第 5 回	農業、感染症、初期国家 J・C・スコット『反穀物の人類史』(1)	
第 6 回	野蛮人と暗黒時代 J・C・スコット『反穀物の人類史』(2)	
第 7 回	古代ギリシアと働くこと アリストテレス『政治学』	
第 8 回	近代人と労働 アダム・スミス『国富論』(1)	
第 9 回	市場と交換 アダム・スミス『国富論』(2)	
第 10 回	国家の論理 トマス・ホッブズ『リヴァイアサン』	

第 11 回	疎外と労働 カール・マルクス『資本論』	
第 12 回	女性と家事労働 マリア・ローザ・ダラ・コスタ『家事労働に賃金を』	
第 13 回	ケアとジェンダー ジョヴァンダ・フランカ・ダラ・コスタ『愛の労働』	
第 14 回	不要な仕事と官僚制 デヴィッド・グレーバー『ブルシット・ジョブ』	
第 15 回	まとめ	
第 16 回	期末試験	

成績評価方法
基本的に、期末試験で評価する。また、授業中に小レポートを課すこともある。評価の内容は、達成目標のポイントをどこまで達成しているかによる。具体的には、試験に課した複数の課題に、授業をふまえていることがわかることが最低の基準で、それに、独自の学習や考察のあとがみえることが追加点となる。
履修上の注意
(関連科目) 社会文化史 (備考)
教科書
授業のなかで適宜指示する
参考文献
授業のなかで適宜指示する

授業名称		担当教員氏名	
地域社会の言語環境		西尾 純二	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
ことばを取り巻く環境、あるいは私たちを取り巻くことばのあり様を、言語環境と呼ぶならば、そこには無数の問題が潜んでいる。日本語や様々な外国語が、それぞれの地域社会とかかわりつつ、どのように形成されたのか。また、どのように社会生活に活用されているのか。これらについて、言語学の基礎的な知識と豊富なデータを用いて考える。
到達目標
現代日本語は、どのような経緯で今の形をなしているか、社会環境とどのように関わっているか、という点について現実の多くの事象に触れ、歴史や社会とのつながりのなかに言語を位置づけ、国内外における言語の存在の意義を知る。また、言語の背景にある人々の社会生活のあり方や存在意義について考える能力を身につける。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション 1) ことばから地誌・歴史・社会を読み取る 2) 社会生活におけることばの意義を問う	講義の内容を復習する。
第2回	日本語の形成 (1) 日本語の東西対立と日本語の多様性	講義の内容を復習する。
第3回	日本語の形成 (2) 周圏分布と日本語の統一性	講義の内容を復習する。
第4回	日本語の形成 (3) 方言の変化	講義の内容を復習する。
第5回	海外の言語変種形成 (1) 言語と方言の間—ことばの連続性と不連続性—	講義の内容を復習する。
第6回	海外の言語変種形成 (2) 地域方言と社会方言の関係	講義の内容を復習する。
第7回	海外の言語変種形成 (3) 論文購読前半、米国の社会方言と地域方言	事前に配付された論文に目を通す。
第8回	海外の言語変種形成 (4) 論文購読後半、米国の社会方言と地域方言	講義の内容を復習する。
第9回	日本語への意識 (1) ことばの標準意識の歴史	講義の内容を復習する。
第10回	日本語への意識 (2) 標準語政策	講義の内容を復習する。
第11回	日本語への意識 (3) 標準語と方言意識	講義の内容を復習する。

第 12 回	世界の言語政策とその歴史 (1) フィリピン共和国	講義の内容を復習する。
第 13 回	世界の言語政策とその歴史 (2) アメリカ合衆国とハワイ州	講義の内容を復習する。
第 14 回	世界の言語政策とその歴史 (3) スペイン王国	講義の内容を復習する。
第 15 回	まとめ	

成績評価方法

授業目標の達成度を測るため、以下の点を評価の観点とする。

1. 言語事象を観察するための言語学的事実の分析力
2. 多くの言語事象に触れるための時間の確保
3. 歴史的・社会的な観点からの言語観の形成への理解
4. 現代社会における言語問題を、講義内容に関連付けて把握し論じる能力

これらを問う期末レポートと授業への参加姿勢から評価する。

内訳はレポート 70%、授業参加姿勢 30% レポート、授業参加への積極性などを総合的に評価する。

履修上の注意

(関連科目) 言語使用の多様性研究, 言語表現と世界認識, 言語の社会システム, ディスコースと社会, 日本の歴史環境, 地域研究

(備考) -

教科書

ハンドアウトを適宜配布する。

参考文献

上野智子ほか編(2005)『ケーススタディ 日本語のバラエティ』おうふう 真田信治・庄司博史編(2005)『辞典 日本の多言語社会』岩波書店 佐藤亮一監修(2002)『方言の地図帳』小学館 真田信治編(2006)『社会言語学の展望』くろしお出版

授業名称		担当教員氏名	
言語使用の多様性研究		西尾 純二	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
言語は、社会の中で「存在する」だけのものでなく、様々なコミュニケーションのレベルで「使用される」ものでもある。しかも、その使用の仕方は誰もが同じというわけではない。この講義では、言語使用やコミュニケーションの動機や構造、社会的性格についての諸理論を紹介したうえで、都市性や地域性、歴史的経緯などの違いによって言語使用が異なり、その様態がどのように成立するかを、実態を把握する方法論とともに講義する。
到達目標
コミュニケーション、言語行動の諸理論を踏まえたうえで、個々の言語使用の性格を見極め、言語使用の多様性を観察し、その様相を捉える方法論を身に着ける、また、自他の言語使用の違いについて、科学的な知見に基づいた考察と位置づけができる能力を養うことを目的とする。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション：	講義の内容を復習する。
第2回	コミュニケーションの諸理論（1） コミュニケーションの動機	講義の内容を復習する。
第3回	コミュニケーションの諸理論（2） コミュニケーションの構成要素	講義の内容を復習する。
第4回	コミュニケーションの諸理論（3） 会話のシステムーグライスの理論ー	講義の内容を復習する。
第5回	コミュニケーションの諸理論（4） 対人関係とコミュニケーションーポライトネス理論ー	講義の内容を復習する。
第6回	関西の対人関係と待遇表現の用法（1） ー待遇表現論の特徴ー	講義の内容を復習する。
第7回	関西の対人関係と待遇表現の用法（2） ーことばに焼きついた社会の対人関係ー	講義の内容を復習する。
第8回	言語行動と都市 都市化とコミュニケーション体力・能力	講義の内容を復習する。

第 9 回	言語行動と都市 都市内部の多様性と敬語 —東京の下町・山の手—	講義の内容を復習する。
第 10 回	言語行動と都市 愛知県岡崎市にみる地域 社会の都市化と言語行動の変遷	講義の内容を復習する。
第 11 回	言語行動と都市 都市部と非都市部の感 謝・謝罪行動—理論編— 感謝・謝罪とは 何か	講義の内容を復習する。
第 12 回	言語行動と都市 都市部と非都市部の感 謝・謝罪行動—応用編— 感謝の言語行動 の日本的システム	講義の内容を復習する。
第 13 回	日韓の不満表明行動(1) —言語行動の違 いを<多様性>としてとらえる—	講義の内容を復習する。
第 14 回	日韓の不満表明行動(2) —質的研究と量 的研究—	講義の内容を復習する。
第 15 回	全体のまとめ	

成績評価方法
授業の目的に沿って、以下のような点を主な評価の対象とする。 1. コミュニケーションの諸理論を踏まえ、研究課題を見つけることができる。 2. 先行研究の実験・調査方法を踏まえた、データ収集法について構想できる。 3. 1の課題解決のためには、どのようなデータが必要であるかを見極めることができる。 以上3点の力を問うレポートを期末に課す。1, 2, 3についてオリジナリティを持った見識を提出できることが、最低限求められる。ほか、授業への参加姿勢を評価する。全体の成績の内訳は、期末レポート 70%、授業への参加姿勢 30%。
履修上の注意
(関連科目) 地域社会の言語環境, 言語表現と世界認識, 言語の社会システム, ディスコースと社会, 文化交渉と社会批評, 都市文化論, 社会構想の文化史 (備考)
教科書
ハンドアウト
参考文献
上野智子ほか編(2005)『ケーススタディ 日本語のバラエティ』おうふう 野田尚史・高山善行・小林隆 (編)『日本語の配慮表現の多様性—歴史的変化と地理的・社会的変異—』くろしお出版三宅和子, 野田尚史, 生越直樹 (編)『「配慮」はどのように示されるのか』シリーズ社会言語科学 1 ひつじ書房

授業名称		担当教員氏名	
ディスコースと社会		高木 佐知子	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
我々の相互行為は社会における種々の要因とどのように関連しているのかということについて、異文化間コミュニケーションとディスコースアナリシス（談話分析）の視点から講義を行う。どのような価値観や前提の違いがコミュニケーションにどのような影響を及ぼすのか、相手に対する配慮はどのように示され、また理解されるのかという、社会における共生・相互理解の問題について考え、分析し、その際に得た気づきや関心について、理論的側面も含めて講義する。
到達目標
言語と社会の関係を言語コミュニケーションの視点から捉え、社会における共生や相互理解について考察する能力を養成することを目標とする。具体的には、以下の知見・能力を身につけることを達成目標とする。1. コミュニケーションと文化に関する概念や現象についての理解を深めること。2. 言語と社会的属性についての理解を深め、それに関する文献やデータについて考察できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション	
第2回	文化におけるディスコース（高コンテキストと低コンテキスト）	授業で前もって資料が配布された場合は、次回の授業までに精読し、関連のある概念や文献についても各自勉強を進めておくこと。授業のあと、その授業で扱ったプリントの内容を復習するとともに、関連のある本を探して読むように心がけること。
第3回	文化におけるディスコース（集団主義と個人主義）	
第4回	文化におけるディスコース（自己開示）	
第5回	ディスコースと価値観（謝罪行為）	
第6回	ディスコースと価値観（賞賛行為）	
第7回	ディスコースと価値観（相互行為の社会言語学）	
第8回	ディスコースと価値観（フレームとメタメッセージ）	
第9回	ディスコースのスタイルとコンテキスト（双方向コミュニケーション）	

第 10 回	ディスコースのスタイルとコンテキスト (会話スタイル)	
第 11 回	ディスコースのスタイルとコンテキスト (レジスター)	
第 12 回	ディスコースのスタイルとコンテキスト (収斂と拡散)	
第 13 回	共生のディスコース (言語の社会化)	
第 14 回	共生のディスコース (スピーチコミュニティ)	
第 15 回	まとめ	

成績評価方法
授業目標（達成目標）の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、言語コミュニケーションと文化・社会との関係について、授業で取り上げた概念や手法を用いて説明できることが求められる。成績を評価する手段として、授業内での発言等の授業への参加態度とレポートを用いる。成績評価に占める割合は、授業内での発言等の授業への参加態度が 50%、レポートが 50%とする。
履修上の注意
(関連科目) メディアコミュニケーション (備考) -
教科書
授業時に資料等を配布する。
参考文献
・田中春美、田中幸子著 『社会言語学への招待』（ミネルヴァ出版）1996 年 ・八代京子他 『異文化トレーニングーボーダーレス社会を生きる』（三修社）1998 年 ・Holmes, Janet. 2008. An Introduction to Sociolinguistics. (3rd edition) London: Longman ・Cutting, Joan. 2008. Pragmatics and Discourse. NY: Routledge. ・林宅男（編著）2008『談話分析のアプローチー理論と実践』研究社

授業名称		担当教員氏名	
言語表現と世界認識		宮畑 一範	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
ことばは人間の営みである。ということは、産出された言語表現を注意深く観察すると、人間の精神の働きが見えてくる。この授業では、そういう観点からことばを捉えるための基本概念のいくつかを身につけることを目指す。この基本概念を正確に理解できるように、身近な言語表現で類例を探したり、色々な課題、また、これらに基づくディスカッションも行う。この授業を通して、言語表現を手がかりに、その背後に潜む人間の精神の営みを、すなわち、人間が自分を取り巻く世界をどのように捉えているかを明らかにする基礎力を養う。
到達目標
以下の3点を身につけることを目標とする。 (1) 認知言語学の主要な概念を理解し、それを活用して身の回りの言語事象を分析できる。 (2) 言語事例に基づいて、その背後にひそむ人間の精神作用を明らかにできる。 (3) 論理的な議論のための設計ができ、それを適切に表現できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション	課題に十分に取り組めるよう、各回の授業のハンドアウトに目を通し、講義内容をきちんと理解できるように努める。また、課題のフィードバックやディスカッションを通じて、理解が十分でなかった部分を補充する。必要に応じて、別途紹介する参考書も活用して、自学自習ならびにさらなる興味・理解の拡充に役立てる。
第2回	ものの見方	
第3回	カテゴリー	
第4回	抽象化	
第5回	イメージ・スキーマ	
第6回	多義と意味ネットワーク	
第7回	意義展開の動機づけ（メタファー、シネクドキ）	
第8回	意義展開の動機づけ（メトニミー）	
第9回	ことばの経済性	
第10回	概念メタファー	
第11回	方向性のメタファー	
第12回	色彩語	
第13回	文法と認知（構文）	
第14回	文法と認知（品詞）	

第 15 回	総括	

成績評価方法
授業への参加度（日々の課題と発言）50%と期末レポート 50%の割合で、到達目標の達成度について評価する。単位を取得するためには、毎回の講義内容の基本的な理解を踏まえ、言語事例を注意深く観察して、その背後に働く人間の精神作用について、論理的な考察・記述が十分に行える必要がある。
履修上の注意
（関連科目）認識とレトリック
教科書
毎回事前に資料を配付する。
参考文献
授業中に適宜指示する。

授業名称		担当教員氏名	
認識とレトリック		宮畑 一範	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
レトリックは従来表現を彩る技法と位置づけられてきた。しかし、言語表現自体がわれわれの認識や思考の表れである以上、そこには人間の精神の営みが密接に関わる。この授業では、代表的な 30 のレトリックを中心に上げ、数多くの事例に基づいて、各レトリックと人間の認識や思考のパターンとの関係について講義する。
到達目標
以下の 3 点を身につけることを目標とする。 (1) 認知言語学の主要な概念を理解し、人間の認識と思考のパターンを説明できる。 (2) 各レトリックの特徴を理解し、人間の認識と思考との関係を考察できる。 (3) 論理的な議論のための設計ができ、それを適切に表現できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	イントロダクション	各回の授業のハンドアウトに目を通し、講義内容をきちんと理解できるように努める。また、課題のフィードバックやディスカッションを通じて、理解が十分でなかった部分を補充する。必要に応じて、別途紹介する参考書も活用して、自学自習ならびにさらなる興味・理解の拡充に役立てる。
第 2 回	メタファーとシミリー	
第 3 回	メトニミーとシネクドキ	
第 4 回	婉曲法	
第 5 回	三例法	
第 6 回	共感覚法	
第 7 回	迂言法、逆言法、曲言法、ためらい法	
第 8 回	列挙法、反復法、対比法、対句法	
第 9 回	連鎖法、接続語法	
第 10 回	追加法、倒置法、省略法、挿入法	
第 11 回	集約法、焦点化法、文末省略法	
第 12 回	オノマトペと音象徴法	
第 13 回	掛詞とくびき法	
第 14 回	ジョークとユーモア	
第 15 回	総括	

成績評価方法
授業への参加度（日々の課題と発言）50％と期末レポート 50％の割合で、到達目標の達成度について評価する。単位を取得するためには、毎回の講義内容の基本的な理解を踏まえ、言語事例を注意深く観察して、レトリックと人間の認識・思考の関係について、論理的な考察・記述が十分に行える必要がある。
履修上の注意
（関連科目）言語表現と世界認識
教科書
毎回事前に資料を配付する。
参考文献
授業中に適宜指示する。

授業名称		担当教員氏名	
文化表象と社会批評		相田 洋明	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
幕末から現代にいたる日本とアメリカの文化交渉の歴史を振り返りつつ、その時々における問題点を批判的に考察する。その後、現代日本社会における日米の文化交渉に関わる課題を見出し、その解決策を構想する。理解を確かめるために随時小テストを行う。
到達目標
この授業では、日本とアメリカの文化交渉の有り様と問題点に関して、歴史的な背景知識を十分持ったうえで、批判的に考察できる能力を身につけることを目標とする。具体的には、（１）幕末から現代に至る日本とアメリカの文化交渉に関する知識を習得する。（２）日本とアメリカの文化交渉における問題点を批判的に考察する力を身につける。（３）現代日本社会における日米の文化交渉に関わる課題を発見し、それへの解決策を構想する力量を培う。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第１回	イントロダクション	授業内で指示する
第２回	日米文化交渉史研究（１）幕末（ジョン・万次郎、ペリー来航、遣米使節団など）	
第３回	日米文化交渉史研究（２）明治（ラフカディオ・ハーン、「マダム・バタフライ」など）	
第４回	日米文化交渉史研究（３）明治（黄禍論など）	
第５回	日米文化交渉史研究（４）大正・昭和戦前（大正デモクラシーとアメリカ大衆文化など）	
第６回	日米文化交渉史研究（５）昭和戦前・戦中（戦争プロパガンダなど）	
第７回	日米文化交渉史研究（６）昭和戦後（占領期文化など）	

第 8 回	日米文化交渉史研究（7）昭和戦後（核を巡る想像力など）	
第 9 回	日米文化交渉史研究（8）昭和戦後（アメリカ文化の受容と反発）	
第 10 回	日米文化交渉史研究（9）平成（グローバリゼーションと日本）	
第 11 回	日米文化交渉史研究（10）平成・令和	
第 12 回	現代日本社会における日米の文化交渉に関わる課題（1）課題の発見	
第 13 回	現代日本社会における日米の文化交渉に関わる課題（2）課題の分析	
第 14 回	現代日本社会における日米の文化交渉に関わる課題（3）解決策の模索と提示	
第 15 回	まとめ	

成績評価方法
期末レポート（60％）および小テスト（40％）で評価する。合格となるためには、日米文化交渉に関する基本的な知識を習得（授業目標の（1）に関わる）し、かつ、日米文化交渉における問題点とその解決策を自分なりに構想できる能力を身につける（授業目標の（2）（3）に関わる）ことが必要である。
履修上の注意
適宜指示します。
教科書
毎回資料を配布する。
参考文献
『日米関係史』（五百旗頭真編 有斐閣ブックス） 『親米と反米』（吉見俊哉 岩波新書）ほか。

授業名称		担当教員氏名	
グローバル社会の文化表象		青木 賜鶴子	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
種々の社会共生のあり方の一つとして、多文化共生・歴史との共生について理解を深める科目である。 日本の文学の中でも特に人気が高かった古典文学作品を中心に、国内外の代表的な絵画・工芸作品、府立大学所蔵の貴重書等を紹介し、海外における受容の様相をたどりながら作品を味わい、グローバル社会における日本文学・文化の享受と伝承について考察する。19世紀末ヨーロッパにおけるジャポニズムとその意義についての考察を端緒とする。おもに講義形式により授業をすすめるが、グループワークや演習・発表形式を取り入れる場合がある。
到達目標
グローバル社会における日本文学・文化の享受と伝承について考察する中で、以下の目標の達成をめざす。 (1)ジャポニズムについて、具体例をあげて説明できる。 (2)授業で扱う作品の成立事情・作者・成立年代等について、講義に即して説明できる。 (3)授業で扱う作品の後代における受容や海外での受容とその意義について、講義に即して説明できる。 (4)授業で扱う文学作品の文学以外の受容について講義に即して説明できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	ガイダンス	次回授業範囲について予習し、声に出して読めるようにしておくこと。また、プリントの設問について考えておくこと。授業後は、授業で指示した事柄について把握に努め、小テスト・期末試験・レポート等の準備をすること。
第2回	ジャポニズムとは何か	
第3回	万国博覧会とジャポニズム	
第4回	ジャポニズムの造形原理	
第5回	「古典」と大阪府立大学所蔵の貴重書	
第6回	大阪府立大学所蔵「源氏物語絵詞」について	
第7回	大阪府立大学所蔵「源氏物語評釈」の版木と出版	
第8回	世界文学としての『源氏物語』—日本文学・文化の享受と伝承	
第9回	『源氏物語』成立の背景	
第10回	『源氏物語』の受容—「絵入源氏物語」と「国宝源氏物語絵巻」	

第 11 回	『伊勢物語』の受容—『伊勢物語』から『源氏物語』へ	
第 12 回	『伊勢物語』の受容—後代の文学・芸能・絵画・工芸作品	
第 13 回	『百人一首』の受容	
第 14 回	世界の中の日本文学・文化	
第 15 回	まとめ	
第 16 回	試験またはレポート締切日	

成績評価方法
到達目標の達成度について評価を行う。評価は、授業中の態度 25%、記述カード 25%、期末試験または期末レポート（50%）の合計点とする。授業中の態度及び記述カードは、授業中に発する問いかけに的確に答えているかどうかで判断する。単位の取得には、講義で取り上げた事柄について、到達目標(1)から(4)の半分以上を満たしていることが求められる。
履修上の注意
適宜指示します。
教科書
プリントを配布する。
参考文献
『ジャポニズム入門』 ジャポニズム学会編、思文閣出版、2000 『増補 日本美術を見る眼東と西の出会い(岩波現代文庫)』 高階秀爾著、岩波書店、2009 『ジャポニズム—幻想の日本』 馬淵明子著、ブリュッケ、2015 『パリ万国博覧会とジャポニズムの誕生』 寺本敬子著、思文閣出版、2017 『ジャポニズムと近代の日本』 東田雅博著、山川出版社、2017 その他、適宜授業中に指示する。

授業名称		担当教員氏名	
社会調査論		工藤宏司、藤田渡	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
社会調査とはどのようなものか、調査によって明らかにしたい目的ごとにどのような手法があるのか、社会調査を行う際にどのような点に留意する必要があるのか、など、社会調査の基本的な事項について理解を深める。加えて、いくつかの調査手法を組み合わせで行われた研究事例を参照し、社会調査の実践的イメージを把握する。
到達目標
社会調査のさまざまな手法についての基本的事項を理解する。その上で、具体的な課題に応じ、質的・量的を含む複数の調査手法を組み合わせ、論理的に整合性をもった調査のデザインを行う基礎的な知見を身につける。また、調査手法の性質に応じ、技術的・倫理的側面から、留意すべき点につき、理解する。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション：授業の概要	
第2回	社会調査の意義と歴史	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第3回	社会調査の方法論概観	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第4回	質的調査(1)：資料分析	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第5回	質的調査(2)：インタビュー	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第6回	質的調査(3)：参与観察・民族誌的調査	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第7回	量的調査(1)：国勢調査など公的な統計調査	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第8回	量的調査(2)：世論調査やマーケティング	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第9回	量的調査(3)：質問紙調査	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第10回	調査の際の倫理的配慮	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。

第 11 回	具体的な調査事例検討(1)日本の都市・農村でのモノグラフ	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第 12 回	具体的な調査事例検討(2)異文化環境でのモノグラフ	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第 13 回	具体的な調査事例検討(3)統計や行政資料の分析例	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第 14 回	具体的な調査事例検討(4)量的調査と質的調査の組み合わせの事例	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第 15 回	全体のまとめ	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第 16 回	定期試験	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、授業中に取り上げる社会調査の各手法の特徴・実施方法についての正しい理解、および、目的に応じ、適切な手法の選択・組み合わせができることが求められる。成績を評価する方法として、期末試験、もしくは、レポート課題を用いる。成績評価に占める割合は、期末試験・レポート（70%）、授業中に指示する課題（30%）である。
履修上の注意
関連科目：社会学基礎、質的調査法、資料分析法、調査設計法、PBL 演習（社会調査）
教科書
授業時に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
環境社会システム学演習 1		竹中規訓、伊藤康人、大塚耕司、興津健二、大山克己、中山祐一郎、星英之、黒田桂菜、藤井佑介、阿久井康平、花村周寛、生田英輔、遠藤崇浩、住田守道、古川朋雄、吉川丈、千葉知世、天畠華織、西川弘展、酒井隆史、上柿崇英、山本由美子、住友陽文、高木佐知子、西尾純二、水野真彦、福田珠己、工藤宏司、宮畑一範、藤田渡、山東功	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	必修	演習

授業概要
授業の流れは以下の通りである。まずオリエンテーションを行い、担当教員の研究課題紹介を行う。学生は興味関心のある教員の下で、設定したテーマに対して、その方法論、考察の方法、レジュメ・パワーポイント作成技術、プレゼンテーション技能などを習得し、最終的に活動全体をレポートにまとめる。
到達目標
受講生は担当教員の専門分野に応じて設定された研究テーマに取り組み、その過程で研究活動の基本を習得する。この講義の担当者は自然環境学、社会環境学、環境哲学・政策学の複数分野から構成され、それぞれチームを形成する。受講生はそれら担当教員が率いるチームに分かれ、そこで学術的課題の探し方、アプローチの方法、データ収集方法、分析あるいは解析方法、考察の方法を習得する。これらを習得することで卒業研究につながる基礎的な技術や知識を身につける。具体的には、以下の能力を身につけることを達成目標とする。 1. テーマの設定とアプローチの方法について説明できること。 2. データ収集法について説明できること。 3. 収集した各種データを適切に解析し、考察できること。 4. 学術文献・資料を読んで理解し、それについて明快な報告資料を作成できること。 5. 学術文献・資料を読んで、それを批判的に検討しつつ、レポート作成ができること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション（演習のねらいを説明し、1つあたり数名からなるチーム分けを行う）。	事後：演習のねらいを確認する。 事後：チームメンバーと連絡先を交換し連携体制の基礎作りを行う。
第2回	チームごとに基本テーマ（自然環境学、社会環境学、 環境哲学・政策学 に関わる具体的課題を設定する）。	事後：チームで定めた具体的な課題について新聞記事、先行研究を調べる。
第3回	チームごとに調査方法（実験、文献調査、野外調査等）を定める。	事後：図書館資料を活用し、様々な研究アプローチ手法を復習する。

第4回	チームごとに、（必要に応じて）課題に関わる外部連携協力機関との調整を行う。	事前：チーム外部の連携協力機関のリストアップを行う。
第5回 ～ 第8回	チームごとに課題に対する調査研究活動を進める。	事前：チームごとに課題に関する資料や実験器具を準備する。 事後：調査研究の内容を記録した資料を整理する。
第9回	チーム内でこれまでの調査研究の中間結果報告を行う。	事前：中間結果報告の資料作りを行う。 事後：最終報告に向けた課題を共有する。
第10回 ～ 第13回	中間結果報告の結果を考慮しつつ、さらに調査研究を進める。	事前：チームごとに課題に関する資料や実験器具を準備する。 事後：調査研究の内容を記録した資料を整理する。
第14回	チーム内部で調査研究の最終結果報告を行う。	事前：結果報告の資料作りを行う。 事後：次週の全体報告会に向けた課題を共有する。
第15回	全てのチームが参加する全体報告会を行う。	事前：結果報告の資料作りを行う。 事後：最終レポート執筆の準備を行う。
第16回	最終課題レポートの作成	事前：最終レポート作りを行う。

成績評価方法
全体報告会における口頭報告、各教員から指定された最終課題レポートにより総合的に評価する。 授業目標（達成目標）の1～5の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. テーマの設定とアプローチの方法について6割以上説明できること。 2. データ収集法について6割以上説明できること。 3. 収集した各種データの6割以上について適切に解析し、考察できること。 4. 学術文献・資料を読んで理解し、それについて明快な報告資料を作成できること。 5. 学術文献・資料を読んで、それを批判的に検討しつつ、レポート作成ができること。 の5点を達成することが求められる。成績は演習への取り組み姿勢（30%）、口頭報告（30%）、最終課題レポート（40%）で評価する。
履修上の注意
（関連科目）情報システムとサステイナビリティ、自然システムとサステイナビリティ、社会システムとサステイナビリティ、人間システムとサステイナビリティ、知識情報システム学概論、環境社会システム学概論、教育福祉学概論、心理学概論
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
環境社会システム学演習 2		竹中規訓、伊藤康人、大塚耕司、興津健二、大山克己、中山祐一郎、星英之、黒田桂菜、藤井佑介、阿久井康平、花村周寛、生田英輔、遠藤崇浩、住田守道、古川朋雄、吉川丈、千葉知世、天島華織、西川弘展、酒井隆史、上柿崇英、山本由美子、住友陽文、高木佐知子、西尾純二、水野真彦、福田珠己、工藤宏司、宮畑一範、藤田渡、山東功	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 前	必修	演習

授業概要
授業の流れは以下の通りである。まずオリエンテーションを行い、担当教員の研究課題紹介を行う。学生は興味関心のある教員を選択し、設定したテーマに対して、その方法論、考察の方法などを習得し、最終的に活動全体をレポートにまとめる。
到達目標
環境社会システム学演習 1 に引き続き、環境社会システム学類を構成する自然環境学、社会環境学、環境哲学・政策学それぞれの専門分野における問題設定、データ収集と分析、考察の方法を修得することを目標とする。受講生は各教員が設定するテーマを 2 つ選択し、そこで自ら演習テーマを提案し、そのテーマに対して、自らアプローチを模索し、課題解決を考察するプロジェクト型演習を実践する。これにより卒業研究に向けた基礎的な方法論を習得する。具体的には、以下の能力を身につけることを達成目標とする。 1. テーマの設定とアプローチの方法について説明できること。 2. データ収集法について説明できること。 3. 収集した各種データを適切に解析し、考察できること。 4. 学術文献・資料を読んで理解し、それについて明快な報告資料、レポートを作成できること。 5. 学術文献・資料を読んで、それを批判的に検討しつつ、相互討論できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	イントロダクション（ゼミ配属の決定）。	事前：ゼミ配属の希望を考えておく。 事後：ゼミ担当教員、他のゼミ配属メンバーと連絡先を交換する。

第2回 ～ 第15回	各ゼミに分かれて演習を行う。 各ゼミの具体的テーマは以下の通り。 伊藤ゼミ：変動帯の重力・地磁気異常解析 大山ゼミ：植物生産システムの生産性向上 大塚ゼミ：閉鎖性海域の環境修復 黒田ゼミ：海陸一体型物質循環型社会の構築 中山ゼミ：植物の保全・利用・管理 星ゼミ：ヒトと動物との軋轢軽減 興津ゼミ：水環境汚染物質の化学的処理法 竹中ゼミ：機器分析法による環境分析I 藤井ゼミ：機器分析法による環境分析II 阿久井ゼミ：持続可能な都市地域計画 遠藤ゼミ：水管理政策 住田ゼミ：日常生活環境における法律問題 古川ゼミ：取引環境の形成と法 吉川ゼミ：環境問題の経済学的メカニズム 千葉ゼミ：流域連携の政策とガバナンス 天畠ゼミ：計量経済学的手法による環境分析 生田ゼミ：住居・都市の災害リスク分析 花村ゼミ：環境デザイン 西川ゼミ：社会問題の経済学的メカニズム 酒井ゼミ：社会思想史 住友ゼミ：デモクラシーとナショナリズム 高木ゼミ：談話分析 西尾ゼミ：日本語の配慮表現と地域社会 水野ゼミ：産業集積とネットワーク 福田ゼミ：文化地理学 上柿ゼミ：環境哲学 工藤ゼミ：社会問題論・教育社会学 宮畑ゼミ：認知意味論 藤田ゼミ：持続的森林管理 山本ゼミ：生命倫理 山東ゼミ：日本思想史	事前：予習として、演習内容に関連する図書や文献を読んでおく。 事後：配付資料中の内容について復習するとともに関連図書や文献を読むことで、演習内容の理解をさらに深める。課題レポートを指定された期日までに作成する。
第16回	レポート作成。	事前：レポート作成に向けた準備を進める。

成績評価方法
各教員から指定された演習課題レポートにより総合的に評価する。授業目標（達成目標）の1～5の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. テーマの設定とアプローチの仕方に対して6割以上について概説できること 2. データ収集法の6割以上について概説できること 3. 収集した各種データの6割以上について解析と考察ができること 4. 学術文献・資料を読んで理解し、それに関する明快な報告資料、レポートを作成できること 5. 学術文献・資料を読んで、それを批判的に検討しつつ、相互討論できること の5点を達成することが求められる。成績は授業における報告（30%）、議論への参加（30%）、課題提出物（40%）により評価する。
履修上の注意
（関連科目）情報システムとサステイナビリティ、自然システムとサステイナビリティ、社会システムとサステイナビリティ、人間システムとサステイナビリティ、知識情報システム学概論、環境社会システム学概論、教育福祉学概論、心理学概論、環境社会システム学演習1
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
環境社会システム学演習 3		竹中規訓、伊藤康人、大塚耕司、興津健二、大山克己、中山祐一郎、星英之、黒田桂菜、藤井佑介、阿久井康平、花村周寛、生田英輔、遠藤崇浩、住田守道、古川朋雄、吉川丈、千葉知世、天畠華織、西川弘展、酒井隆史、上柿崇英、山本由美子、住友陽文、高木佐知子、西尾純二、水野真彦、福田珠己、工藤宏司、宮畑一範、藤田渡、山東功	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 後	必修	演習

授業概要
授業の流れは以下の通りである。まずオリエンテーションを行い、担当教員の研究課題紹介を行う。学生は興味関心のある教員の下で、設定したテーマに対して、その方法論、考察の方法などを習得し、最終的に活動全体をレポートにまとめる。
到達目標
環境社会システム学類を構成する自然環境学、社会環境学、環境哲学・政策学それぞれの専門分野における研究テーマを設定し、卒業論文の作成に向けた実践的な研究手法を習得する。受講生は担当教員が提示するテーマを一つ選び、テーマの設定、アプローチの方法、データ収集方法、分析あるいは解析方法、考察の方法を習得する。これらを習得することで卒業研究につながる技術や知識等を身につける。具体的には、以下の能力を身につけることを達成目標とする。 1. テーマの設定とアプローチの方法について説明できること。 2. データ収集法について説明できること。 3. 収集した各種データを適切に解析し、考察できること。 4. 学術文献・資料を読んで理解し、それについて明快な報告資料、レポートを作成できること。 5. 学術文献・資料を読んで、それを批判的に検討しつつ、相互討論できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	イントロダクション（ゼミ配属の決定）。	事前：ゼミ配属の希望を考えておく。 事後：ゼミ担当教員、他のゼミ配属メンバーと連絡先を交換する。
第 2 回 ～ 第 15 回	各ゼミに分かれて演習を行う。演習課題を実行する各教員による演習課題の概要は下記に示す通りで、この内容に沿った演習テーマを各自で提案し、各教員と議論の後、その演習テーマを実行する。	事前：予習として、演習内容に関連する図書や文献を読んでおく。 事後：配付資料中の内容について復習するとともに関連図書や文献を読むことで、演習内容の理解をさらに深める。課題レポートを指定された期日までに作成する。

	伊藤ゼミ：変動帯の重力・地磁気異常解析 大山ゼミ：植物生産システムの生産性向上 大塚ゼミ：閉鎖性海域の環境修復 黒田ゼミ：海陸一体型物質循環型社会の構築 中山ゼミ：植物の保全・利用・管理 星ゼミ：ヒトと動物との軋轢軽減 興津ゼミ：水環境汚染物質の化学的処理法 竹中ゼミ：機器分析法による環境分析I 藤井ゼミ：機器分析法による環境分析II 阿久井ゼミ：持続可能な都市地域計画 遠藤ゼミ：水管理政策 住田ゼミ：日常生活環境における法律問題 古川ゼミ：取引環境の形成と法 吉川ゼミ：環境問題の経済学的メカニズム 千葉ゼミ：流域連携の政策とガバナンス 天畠ゼミ：計量経済学的手法による環境分析 生田ゼミ：住居・都市の災害リスク分析 花村ゼミ：環境デザイン 西川ゼミ：社会問題の経済学的メカニズム 酒井ゼミ：社会思想史 住友ゼミ：デモクラシーとナショナリズム 高木ゼミ：談話分析 西尾ゼミ：日本語の配慮表現と地域社会 水野ゼミ：産業集積とネットワーク 福田ゼミ：文化地理学 上柿ゼミ：環境哲学 工藤ゼミ：社会問題論・教育社会学 宮畑ゼミ：認知意味論 藤田ゼミ：持続的森林管理 山本ゼミ：生命倫理 山東ゼミ：日本思想史	
第 16 回	レポート作成。	事前：レポート作成に向けた準備を進める。

成績評価方法
各教員から指定された演習課題レポートにより総合的に評価する。授業目標（達成目標）の1～5の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. テーマの設定とアプローチの仕方に対して6割以上について概説できること 2. データ収集法の6割以上について概説できること 3. 収集した各種データの6割以上について解析と考察ができること 4. 学術文献・資料を読んで理解し、それについて明快な報告資料、レポートを作成できること。 5. 学術文献・資料を読んで、それを批判的に検討しつつ、相互討論できること の5点を達成することが求められる。成績は授業における報告（30%）、議論への参加（30%）、課題提出物（40%）により評価する。
履修上の注意
（関連科目）情報システムとサステイナビリティ、自然システムとサステイナビリティ、社会システムとサステイナビリティ、人間システムとサステイナビリティ、知識情報システム学概論、環境社会システム学概論、教育福祉学概論、心理学概論、環境社会システム学演習1、環境社会システム学演習2
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
質的調査法		秋庭裕、宮脇幸生、工藤宏司、藤田渡	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 前	選択	講義

授業概要
社会調査のうち、因果関係や多面性、物事の関係性の変化などについて、深く掘り下げて明らかにする質的調査とデータ分析の方法を、具体的な事例を織り交ぜて講じる。特に、フィールドワークによる、参与観察、インタビュー、ライフヒストリーなどの方法に重点を置く。
到達目標
課題に応じて、自らリサーチ・クエスチョンを立て、質的調査のさまざまな方法を組み合わせた適切な調査の立案、実施、データ分析を行うことができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション：授業の概要	
第2回	フィールドワークとはなにか	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第3回	参与観察法(1)対象社会の文脈が見てくるまで	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第4回	参与観察法(2)現地で調査を組み立て、実施する	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第5回	インタビュー(1)インタビューの準備：下調べと質問項目の設定	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第6回	インタビュー(2)インタビューデータの分析法	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第7回	ワークショップ(1)目的に応じたワークショップの設計	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第8回	ワークショップ(2)ワークショップを記録し調査データとして分析する	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第9回	会話分析(1)会話のタイプと記録方法	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第10回	会話分析(2)会話データの分析	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。

第 11 回	質的調査の応用	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第 12 回	質的調査のモノグラフを読む(1)参与観察とインタビュー中心の事例	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第 13 回	質的調査のモノグラフを読む(2)ワークショップを活用した事例	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第 14 回	質的調査のモノグラフを読む(3)会話分析などミクロなインタラクションの分析事例	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第 15 回	全体のまとめ	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第 16 回	定期試験	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、ことが求められる。成績を評価する方法として、期末試験、もしくは、レポート課題を用いる。成績評価に占める割合は、期末試験・レポート（70%）、授業中に指示する課題（30%）である。
履修上の注意
関連科目：社会学基礎、社会調査論、資料分析法、調査設計法、PBL 演習（社会調査）
教科書
授業時に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
資料分析法		秋庭裕、宮脇幸生、工藤宏司、藤田渡	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 後	選択	講義

授業概要
公的統計など種々の統計調査やテキスト分析を用いた論文が読めるための基本的知識について学ぶ。単純集計、度数分布、代表値、散布度、クロス集計などの記述統計データの読み方や、グラフの読み方、また、それらの計算や作成のしかたについて、また、相関係数など基礎的な統計概念、因果関係と相関関係の区別、擬似相関の概念などについて学ぶ。また、テキストデータや映像データなど、質的データの収集と整理、その読み方と基本的なまとめ方について学ぶ。
到達目標
公式統計や調査報告、フィールドワーク論文を読みこなすための基礎的な知識を獲得することで、この研究内容の妥当性を評論し、そこからどのような事実を読み取り、また、批判すべき点や足りない部分を分析・考察したうえで、発展的な調査研究へつなげられるようになることを目標とする。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション：授業の概要	
第2回	公式統計を読むために（1） 公式統計の種類と特徴	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第3回	公式統計を読むために（2） 公式統計の収集と利用	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第4回	記述統計の読み方（1） 単純集計と度数分布表	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第5回	記述統計の読み方（2） 代表値、散布度、クロス集計表	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第6回	記述統計の読み方（3） 相関関係と因果関係	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第7回	記述統計の読み方（4） 因子分析	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第8回	モノグラフを読む（1） 公式統計、JGSS などを組み合わせた調査研究の収集	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第9回	モノグラフを読む（2） 公式統計、JGSS などを組み合わせた調査研究の講読	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第10回	二次資料分析を読むために（1） 資料の種類と特徴	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。

第 11 回	二次資料を読むために (2) 資料の検索・リスト化・収集	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第 12 回	モノグラフを読む (1) テキスト資料を分析した調査研究	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第 13 回	モノグラフを読む (2) 映像資料を分析した調査研究	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第 14 回	モノグラフを読む (3) 二次資料と量的調査の複合調査研究	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第 15 回	全体のまとめ	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第 16 回	定期試験	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、授業中に取り上げた社会調査の各手法の特徴・実施方法についての正しい理解、および、そうした方法を駆使した書かれた学術論文を読み、内容の妥当性について批判的に検証、正しく内容を理解できるようになることが求められる。成績を評価する方法として、期末試験、もしくは、レポート課題を用いる。成績評価に占める割合は、期末試験・レポート（70%）、授業中に指示する課題（30%）である。
履修上の注意
関連科目：社会学基礎、社会調査論、質的調査法、調査設計法、PBL 演習（社会調査）
教科書
授業時に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
調査設計法		秋庭裕、宮脇幸生、工藤宏司、藤田渡	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 前	選択	講義

授業概要
社会調査によって資料やデータを収集し、分析しうる形にまで整理していく具体的な方法を学ぶ。調査目的と調査方法、調査方法の決め方、調査企画と設計、仮説構成、対象者の選定の諸方法、サンプリング法（全数調査と標本調査、無作為抽出、標本数と誤差など）、質問文・調査票の作り方、調査の実施方法（調査票の配布・回収法、インタビューの仕方など）、調査データの整理（エディティング、コーディング、データクリーニング、フィールドノート作成、コードブック作成）などについて学ぶ。
到達目標
具体的な調査対象をさがし、基礎的な情報を収集し問いを立て、調査の作業仮説を構築し、それを検証するために必要な具体的な方法を選択、調査計画を設計するといった、社会調査の実施にともなう一連の過程において必要な事項について理解できるようになる。そのうえで、自分自身で社会調査の設計ができるようになることを目標とする。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション：授業の概要	
第2回	社会調査の目的と方法(1) 概説	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第3回	社会調査の目的と方法(2) 調査法のさまざま	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第4回	社会調査のすすめ方(1) 対象を選ぶ・情報を収集する	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第5回	社会調査のすすめ方(2) 先行研究との対話	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第6回	社会調査のすすめ方(3) 問いの設定と仮説構築	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第7回	量的調査の実践(1) 対象者選定とサンプリング	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第8回	量的調査の実践(2) 調査票をつくる・配布する・回収する	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第9回	量的調査の実践(3) 調査票をデータ化し、分析する	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第10回	質的調査の実践(1) 対象者選定と出会いまで	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第11回	質的調査の実践(2) フィールドノーツをつける	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。

第 12 回	質的調査の実践(3) ノーツの記述をまとめる・整理する	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第 13 回	調査計画の作成(1) テーマ設定と問いを立てる	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第 14 回	調査計画の作成(2) 調査法の選択とスケジューリング	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第 15 回	全体のまとめ	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。 授業中指示した課題に取り組む。
第 16 回	定期試験	

成績評価方法

到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、授業中に取り上げた社会調査の各手法の特徴・実施方法についての正しい理解を前提に、自分自身が実践する社会調査の計画が作成できていることが求められる。成績を評価する方法として、期末試験、もしくは、レポート課題を用いる。成績評価に占める割合は、期末試験・レポート（70%）、授業中に指示する課題（30%）である。

履修上の注意

関連科目：[社会学基礎](#)、社会調査論、質的調査法、資料分析法、[PBL 演習（社会調査）](#)

教科書

授業時に資料を配布する。

参考文献

授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
PBL演習（環境学）		大塚耕司、平井規央、上田昇平、遠藤崇浩	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3通	選択	演習

授業概要
PBLプログラム（環境学）の最終科目として位置づけられている。授業では、環境教育・環境活動の必要性と事例についての講義を行う。また1グループ数名で構成されるグループ分けを行い、各グループで環境活動の企画・計画、連携協力機関との調整等、実践を行う。さらに環境活動の成果を報告書にまとめるとともに、最終回に成果発表（プレゼンテーション）を行う。なお、PBLプログラム（環境学）は、SDG14「海の豊かさを守ろう」、SDG15「陸の豊かさを守ろう」と対応している。
到達目標
PBLプログラム（環境学）は、環境活動をグループで企画・実践することにより、コミュニティーレベルでの環境保全活動の重要性を理解し、将来リーダーとして環境活動を実践することのできる能力を身につけることを目標としている。 具体的には、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 現代社会の一員としての高い倫理観を持ち、他者と協働して課題に取り組むことができる。 2. PBLプログラムで学んだことを持続可能な社会の実現と関連付けて説明することができる。 3. PBL演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 4. 環境教育・環境学習の重要性について、持続可能性の観点から論理的に説明することができる。 5. 企画段階での検討、様々な機関との連携協力、無理のない運営等の重要性を説明することができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション：この演習とPBLプログラムの講義科目で学んだ内容との関わり、持続可能社会の実現への取り組みとの関連、この演習の到達目標と評価方法（ルーブリック）について解説する。	事前：これまでのPBLプログラム（環境学）で学んだ内容を復習する。 事後：持続可能性に関するレポートを作成する。
第2回	1グループ数名で構成されるグループ分け	
第3回	各チームの基本テーマ（海洋環境、陸域生態系など）に関わる具体的課題を設定する。	事前：具体的課題の例を調べる。
第4回		
第5回	各チームで、取り組むべき具体的な環境活動の企画・計画を作成する。	事後：環境活動計画書を作成する。
第6回		
第7回	各チームで、活動場所に関わる連携協力機関との調整を行う。	事前：活動場所に関わる連携協力機関について調べる。
第8回		
第9回	各チームで、環境活動を実践する。	事前：環境活動の実践に必要な資料や道具などを準備する。 事後：環境活動の内容を記録した資料を整理する。
第10回		
第11回		
第12回		
第13回	各チームで、成果発表の準備（スライドの作成	事後：成果発表に備えて練習をする。

第14回	など)を行う。	
第15回	成果発表	事後：環境活動報告書を作成する。

成績評価方法
授業目標の1～5の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 現代社会の一員としての高い倫理観を持ち、他者と協働して課題に取り組むことができる。 2. PBLプログラムで学んだことを持続可能な社会の実現と関連付けて説明することができる。 3. PBL演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 4. 環境教育・環境学習の重要性について、持続可能性の観点から論理的に説明することができる。 5. 企画段階での検討、様々な機関との連携協力、無理のない運営等の重要性を説明することができる。 の5点を達成することが求められる。成績は、初回の授業で課すレポート（20%）、環境活動に取り組む姿勢（20%）、環境活動計画書（20%）、環境活動報告書（20%）、発表会でのプレゼンテーションと質疑応答（20%）をもとに、到達目標の達成度について、1回目の授業で学生に明示したルーブリックを基準として評価する。
履修上の注意
この授業は、PBLプログラムの最終科目と位置付けられる科目であるため、履修にあたっては、「現代システム科学域 PBLプログラム履修課程」において履修を指定している科目を履修済み、あるいは並行して履修している必要がある。 環境活動の実践では、危険な場所での作業が伴う場合がある。実践フィールドにおけるリスクとその回避方法について十分な知識を身につけておく。 関連科目：環境・生命・倫理、環境政策学、自然環境学概論
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
PBL演習（地域再生）		千葉知世、大塚耕司、伊藤康人	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3通	選択	演習

授業概要
PBLプログラム（地域再生）最終科目として位置づけられている。授業では、コミュニティ教育・地域連携の必要性和事例についての講義を行う。また1グループ数名で構成されるグループ分けを行い、各グループで地域連携の企画・計画、連携協力機関との調整等、実践を行う。このとき、「地域実践演習」での経験とPBLプログラム（地域再生）履修科目等の知識や技能を活かし、発見した地域課題を基に企画・計画を検討することが重要となる。さらに地域活動の成果を報告書にまとめるとともに、最終回に成果発表（プレゼンテーション）を行う。なお、PBLプログラム（地域再生学）は、SDG11「住み続けられるまちづくりを」と対応している。
到達目標
PBLプログラム（地域再生）は、「地域実践演習」で発見した課題を基に地域活動をグループで企画・実践することにより、コミュニティーレベルでの連携の重要性を理解し、将来リーダーとして地域活動を実践することのできる能力を身につけることを目標としている。 具体的には、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 現代社会の一員としての高い倫理観を持ち、他者と協働して課題に取り組むことができる。 2. PBLプログラムで学んだことを持続可能な社会の実現と関連付けて説明することができる。 3. PBL演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 4. コミュニティ再生・地域連携の重要性について、持続可能性の点から論理的に説明することができる。 5. 企画段階での検討、様々な機関との連携協力、無理のない運営等の重要性を説明することができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション：この演習と地域実践演習で発見した地域課題及びPBLプログラム講義科目で学んだ内容との関わり、持続可能社会の実現への取り組みとの関連、この演習の到達目標と評価方法（ルーブリック）について解説する。	事前：これまでのPBLプログラム（地域再生学）で学んだ内容を復習する。 事後：持続可能性に関するレポートを作成する。
第2回	1グループ数名で構成されるグループ分け	
第3回	各チームの基本テーマ（社会共生、地域環境と災害への靱性、コミュニティ再生など）に関わる具体的課題を設定する。	事前：具体的課題の例を調べる。
第4回		
第5回	各チームで、取り組むべき具体的な連携活動の企画・計画を作成する。	事後：地域再生活動計画書を作成する。
第6回		
第7回	各チームで、活動場所に関わる連携協力機関との調整を行う。	事前：活動場所に関わる連携協力機関について調べる。
第8回		
第9回	各チームで、地域活動を実践する。	事前：地域活動の実践に必要な資料や道具などを準備する。 事後：地域活動の内容を記録した資料を整
第10回		
第11回		

第12回		理する。
第13回	各チームで、成果発表の準備（スライドの作成など）を行う。	事後：成果発表に備えて練習をする。
第14回		
第15回	成果発表	事後：地域再生活動報告書を作成する。

成績評価方法
授業目標の1～5の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 現代社会の一員としての高い倫理観を持ち、他者と協働して課題に取り組むことができる。 2. PBLプログラムで学んだことを持続可能な社会の実現と関連付けて説明することができる。 3. PBL演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 4. コミュニティ再生・地域連携の重要性について持続可能性の点から論理的に説明することができる。 5. 企画段階での検討、様々な機関との連携協力、無理のない運営等の重要性を説明することができる。 の5点を達成することが求められる。成績は、初回の授業で課すレポート（20%）、地域活動に取り組む姿勢（20%）、地域再生活動計画書（20%）、地域再生活動報告書（20%）、発表会でのプレゼンテーションと質疑応答（20%）をもとに、到達目標の達成度について、1回目の授業で学生に明示したルーブリックを基準として評価する。
履修上の注意
この授業は、PBLプログラムの最終科目と位置付けられる科目であるため、履修にあたっては、「現代システム科学域 PBLプログラム履修課程」において履修を指定している科目を履修済み、あるいは並行して履修している必要がある。 地域再生活動の実践では、危険な場所での作業が伴う場合がある。実践フィールドにおけるリスクとその回避方法について十分な知識を身につけておく。 関連科目：大阪の都市づくり、地域実践演習、環境・生命・倫理、環境政策学、自然環境学概論、公共政策学基礎
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
PBL演習（環境再生）		星英之、興津健二、竹中規訓、中山祐一郎、黒田桂菜	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3通	選択	演習

授業概要
PBLプログラム（環境再生）の最終科目として位置づけられている。授業では、環境再生に関わる技術、調査手法について講義を行う。また1グループ数名で構成されるグループ分けを行い、各グループで環境再生に関わる技術、調査手法を用いて環境再生活動の現場への見学、企画・計画、連携協力機関との調整等、実践を行う。さらに、環境再生活動の成果を報告書にまとめるとともに、最終回に成果発表（プレゼンテーション）を行う。なお、PBLプログラム(環境再生)は、SDG3「人々に保健と福祉を」、SDG6「安全な水とトイレを世界中に」と対応している。
到達目標
PBLプログラム（環境再生）は、環境再生活動をグループで企画・実践することにより、コミュニティーレベルでの環境再生活動の重要性を理解し、将来、リーダーとして環境再生を実践することのできる能力を身につけることを目標としている。 具体的には、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 現代社会の一員としての高い倫理観を持ち、他者と協働して課題に取り組むことができる。 2. PBLプログラムで学んだことを持続可能な社会の実現と関連付けて説明することができる。 3. PBL演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 4. 環境再生技術、調査手法の重要性について、持続可能性の観点から論理的に説明することができる。 5. 企画段階での検討、様々な機関との連携協力、計画的な運営等の重要性を説明することができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション：この演習とPBLプログラムの講義科目で学んだ内容との関わり、持続可能社会の実現への取り組みとの関連、この演習の到達目標と評価方法（ループリック）について解説する。更に受講者のチーム分けを行う。	事前：これまでのPBLプログラム（環境再生）で学んだ内容を復習する。 事後：持続可能性に関するレポートを作成する。
第2回	1グループ数名で構成されるグループ分け	
第3回	各チームの基本テーマ（水質改善、環境中への化学物質・廃棄物放出削減、海洋環境、陸域生態系など）に関わる具体的課題を設定する。	事前：具体的課題の例を調べる。
第4回		
第5回	各チームで、取り組むべき具体的な環境活動の企画・計画を作成する。	事後：環境活動計画書を作成する。
第6回		

第7回	各チームで、活動場所に関わる連携協力機関との調整を行う。	事前：活動場所に関わる連携協力機関について調べる。
第8回		
第9回	各チームで、環境再生活動を実践する。	事前：環境再生活動の実践に必要な資料や道具などを準備する。 事後：環境再生活動の内容を記録した資料を整理する。
第10回		
第11回		
第12回		
第13回	各チームで、成果発表の準備（スライドの作成など）を行う。	事後：成果発表に備えて練習をする。
第14回		
第15回	成果発表	事後：環境再生活動報告書を作成する。

成績評価方法
授業目標の1～5の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 現代社会の一員としての高い倫理観を持ち、他者と協働して課題に取り組むことができる。 2. PBLプログラムで学んだことを持続可能な社会の実現と関連付けて説明することができる。 3. PBL演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 4. 環境再生活動の重要性について、持続可能性の観点から論理的に説明することができる。 5. 企画段階での検討、様々な機関との連携協力、計画的な運営等の重要性を説明することができる。 の5点を達成することが求められる。成績は、初回の授業で課すレポート（10%）、環境再生活動に取り組む姿勢（20%）、環境再生活動計画書（25%）、環境再生活動報告書（25%）、発表会でのプレゼンテーションと質疑応答（20%）をもとに、到達目標の達成度について、1回目の授業で学生に明示したルーブリックを基準として評価する。
履修上の注意
この授業は、PBLプログラムの最終科目と位置付けられる科目であるため、履修にあたっては、「現代システム科学域 PBLプログラム履修課程」において履修を指定している科目を履修済み、あるいは並行して履修している必要がある。 環境再生活動の実践では、危険な場所での作業が伴う場合がある。実践フィールドにおけるリスクとその回避方法について十分な知識を身につけておく。 関連科目：大阪の都市づくり、自然環境学概論、海域環境再生学、陸域環境再生学
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
PBL演習（企業と持続可能な社会）		古川朋雄、吉川丈、天島華織、住田守道	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3通	選択	演習

授業概要
この演習は、PBLプログラム（企業と持続可能な社会）の最終科目として位置づけられている。そして、企業や社会が抱える持続可能な社会の形成に向けた課題発見と事例についての演習を行う。具体的には、参加学生が自主的に研究テーマを設定し、教員の指導のもとで考察の方法、口頭発表による効果的なプレゼンテーション方法などを習得する。さらに、最終回に成果発表（プレゼンテーション）を行う。この演習の最終目標は、持続可能な社会の形成に向けた課題の把握と、それを解決する能力を身につけることである。 なお、PBLプログラム（企業と持続可能な社会）はSDG8「働きがいも経済成長も」とSDG17「パートナーシップで目標を達成しよう」に対応している。
到達目標
PBLプログラム（企業と持続可能な社会）は、社会科学の観点から持続可能な社会の形成に向けた課題を発見し、その解決策をグループで企画・実践することを通じて、リーダーならびにビジネスパーソンとして活動する際に有益な能力を身につけることにある。具体的には、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 現代社会の一員としての高い倫理観を持ち、他者と協働して課題に取り組むことができる。 2. PBLプログラムで学んだことを持続可能な社会の実現と関連付けて説明することができる。 3. PBL演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 4. 社会科学の観点から、持続可能な社会を形成することの重要性について論理的な説明ができる。 5. 企画段階での検討、無理のない運営等の重要性を説明することができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション：この演習とPBLプログラムの講義科目で学んだ内容との関わり、持続可能な社会の実現への取り組みとの関連、この演習の到達目標と評価方法（ループリック）について解説する。	事前：これまでのPBLプログラム（企業と持続可能な社会）で学んだ内容を復習する。 事後：持続可能性と現代社会の問題関心に関するレポートを作成する。
第2回	1グループ数名で構成されるグループ分け	問題関心の報告とグループ分け
第3回	各チームの基本テーマ（ステークホルダーの利害調整、紛争解決、経済政策など）に関わる具体的課題を設定する。	事前：具体的課題の例を調べる。
第4回		
第5回	各チームで、取り組むべき具体的な活動や課題解決案の企画・計画を作成する。	事後：活動計画書を作成する。
第6回		
第7回	各チームで課題周辺の問題に関する状況把握を行う。	事前：問題の候補や状況について調べる。 事後：周辺問題やその要因の把握が不十分ならば、不十分となっている原因などを調べる。
第8回		
第9回	各チームで、先行研究の収集・分析・考察を行う。そして、得られた結果を用いて、企業や政策立案者に対して、どのような提言ができるのかをチームごとに議論する。	事前：把握された状況を踏まえ、改善策の検討やその方法の実践に必要なとされる社会科学の分析ツールの選択肢を準備する。 事後：事前に準備した選択肢の中から最も適
第10回		
第11回		
第12回		

		合性のあるものを合理的に選択し、グループ内での検討結果をまとめ上げる。
第13回	各チームで、成果発表の準備（スライドの作成など）を行う。	事後：成果発表に備えて練習をする。PBLプログラムの関連科目との関連性がどの点のどこにあるのか、選択した課題への有効性はどの程度かを考えながら、成果を洗練させる。
第14回		
第15回	成果発表	事後：活動報告書を作成する。

成績評価方法
授業目標の1～5の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 現代社会の一員としての高い倫理観を持ち、他者と協働して課題に取り組むことができる。 2. PBLプログラムで学んだことを持続可能な社会の実現と関連付けて説明することができる。 3. PBL演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 4. 環境教育・環境学習の重要性について、持続可能性の観点から論理的に説明することができる。 5. 企画段階での検討、様々な機関との連携協力、無理のない運営等の重要性を説明することができる。 の5点を達成することが求められる。成績は、演習に取り組む姿勢（50%）、口頭発表（50%）をもとに、到達目標の達成度について、1回目の授業で学生に明示したルーブリックを基準として評価する。
履修上の注意
この授業は、PBLプログラムの最終科目と位置付けられる科目であるため、履修にあたっては、「現代システム科学域 PBL プログラム履修課程」において履修を指定している科目を履修済み、あるいは並行して履修している必要がある。 関連科目：環境法1、環境法2、企業の経済学、環境政策学、公共経済学、環境経済・経営学、社会システムとサステイナビリティ、経済学基礎、公共政策学基礎、環境政策学
教科書
担当教員より、個別に紹介する。
参考文献
担当教員より、個別に紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
PBL演習（社会調査）		秋庭裕、宮脇幸生、工藤宏司、藤田渡	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 通	選択	演習

授業概要
PBLプログラム（社会調査）の最終科目として位置づけられている。調査の企画から報告書の作成までにまたがる社会調査の全過程について、体験を通じて学習する。調査の企画、仮説構成をし、自らの関心と問いに必要な調査法を選び、調査計画を設計する（1～15回）。そのうえで、調査を実践し、得られたデータの整理、分析をし、必要な追跡調査をしたうえで、調査報告を作成する（16～30回）。なお、PBLプログラム（社会調査）はSDG17「パートナーシップで目標を達成しよう」と対応している。
到達目標
PBLプログラム（社会調査）は、社会調査の具体的な手法を実際に調査することで体験し、それにより知識の具現化や修正、自身が自立的に調査を実行できる能力を身につける。その過程で、調査協力者となる人々との対話や議論を通じて地域社会の課題をくみ取り、それを研究プロセスに反映、課題設定と解決に資するために、社会調査に何が可能であるかを考え、自分なりの考えを持ち、持続可能な社会の構想に資する能力を身につけることを目標としている。具体的には、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 現代社会の一員としての高い倫理観を持ち、他者と協働して課題に取り組むことができる。 2. 社会調査を具体的に実施する手順や方法について説明することができる。 3. 自らの関心を具体的な調査実施におけるリサーチ・クエスチョンに置き換え、そのために用いるべき調査データや調査法がどのようなものであるかを説明することができる。 4. 自身の関心を明らかにするために調査を具体的に企画し、実施することができる。 5. 社会調査で得たデータを系統的に整理・理解し、そこから一定の社会的事実を読み解き、他者に説明することができる。 6. PBLプログラムで学んだことを持続可能な社会の実現と関連付けて説明することができる。 7. PBL演習の成果について分かりやすくプレゼンテーション、調査報告を執筆することができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション：この演習とPBLプログラムの講義科目で学んだ内容との関わり、持続可能社会の実現への取り組みとの関連、この演習の到達目標と評価方法（ループリック）について解説する。更に受講者のチーム分けを行う。	PBLプログラム（社会調査）にある他の講義科目での学んだ内容の復習、この演習で学ぶべきことを理解してくること。
第2回	調査対象の選定と情報収集	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。授業中指示した課題に取り組む。
第3回		
第4回		
第5回		
第6回		

第7回	調査方法論の整理・選択	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。授業中指示した課題に取り組む。
第8回		
第9回		
第10回		
第11回	調査計画の作成	第10回までの授業内容をふまえて、自身の調査計画を作成する。ゼミで出た意見をふまえ、それを練り直していく。
第12回		
第13回		
第14回		
第15回		
第16回	第一次 調査報告	ゼミで出た意見を踏まえ、追跡調査の準備と実施。
第17回		
第18回		
第19回		
第20回	追跡調査結果の報告・調査計画の追加・修正	ゼミで出た意見を踏まえ、追跡調査の準備と実施。
第21回		
第22回		
第23回	調査報告の書き方 レクチャー	授業中紹介した文献を読むなど復習を行う。授業中指示した課題に取り組む。
第24回		
第25回	調査レポート作成計画の報告・執筆	ゼミで出た意見を踏まえ、調査レポート作成計画、報告内容を適宜修正、バージョンアップを図る。
第26回		
第27回		
第28回	成果発表の準備1：発表内容の構成	ゼミで出た意見を踏まえ修正。
第29回	成果発表の準備2：仕上げと発表練習	ゼミで出た意見を踏まえ修正。
第30回	成果発表とふり返り	授業中指示した課題に取り組む。

成績評価方法
授業目標の1～7の達成度で成績評価を行う。成績は、演習への取り組みと成果発表をもとに、到達目標の達成度について、1回目の授業で学生に明示したルーブリックを基準として評価する。単位を取得するためには、社会調査の計画、実施、データの整理と分析、調査報告の執筆という各過程に参加し、他の受講生とも協力しながら、調査実施に具体的に貢献することが求められる。そのうえで、調査報告を執筆することが必須となる。成績を評価する方法としては、調査の各過程で実施される議論への参加の程度への評価、調査の成果をまとめたレポートを用いる。成績評価に占める割合は、調査過程への参加（30%）、調査レポート（70%）である。
履修上の注意
この授業は、PBLプログラムの最終科目と位置付けられる科目であるため、履修にあたっては、「現代システム科学域 PBLプログラム履修課程」において履修を指定している科目を履修済み、あるいは並行して履修している必要がある。
関連科目：社会学基礎、社会調査論、質的調査法、資料分析法、調査設計法

教科書
特になし。授業中にレジメを配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
PBL演習（都市社会）		水野真彦，福田珠己	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3前	選択	演習

授業概要
PBLプログラム（都市社会）の最終科目として位置づけられている。授業では、大阪をはじめとする都市空間と、そこに住み暮らす人々の社会について、地理的視点から考えることを目指す。そのために、都市に関する様々な統計データや資料の探索・収集および分析・考察を行うだけでなく、実際に都市の現場を歩き、観察や調査をすることが欠かせない。そのため、本授業では、授業時間内および土日を使ってのまちあるき（エクスカーション）を行う（具体的には大阪市や京都市などを予定している）。 なお、PBLプログラム（都市社会）はSDG11「住み続けられるまちづくりを」、SDG8「働きがいも経済成長も」と対応している。
到達目標
PBLプログラム（都市社会）は、都市空間と都市社会について、地理的視点から考え、説明できる能力を身につけることを目標とする。 具体的には、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 現代社会の一員としての高い倫理観を持ち、他者と協働して課題に取り組むことができる。 2. PBLプログラムで学んだことを持続可能な社会の実現と関連付けて説明することができる。 3. PBL演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 4. 都市空間および都市社会について、自ら資料、データを探し、それを整理・分析できる。 5. 都市に関する統計データをグラフや地図という形で分かりやすく表現し伝えることができる。 6. 都市を実際に歩き都市空間と都市社会の観察および調査を行い、その知見を整理し、説明できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション：この演習とPBLプログラムの講義科目で学んだ内容との関わり、持続可能社会の実現への取り組みとの関連、この演習の到達目標と評価方法（ルーブリック）について解説する。更に受講者のチーム分けを行う。	指定された課題に取り組む。自ら設定した課題について、各自で調査を行う。
第2回	学外エクスカーション：都市中心部（授業時間中）	
第3回	都市中心部のエクスカーションの報告	
第4回	学外エクスカーション：インナーシティ（授業時間中）	
第5回	インナーシティのエクスカーションの報告	
第6回	休日エクスカーションの調査・資料作成	
第7回	休日に行う学外エクスカーション	
第8回	休日エクスカーションの報告	
第9回	地域統計データの探索・分析	
第10回	地域統計データの分析・表現	

第11回	都市社会に関して、自ら課題を設定して調査（対象・課題の設定）	指定された課題に取り組む。自ら設定した課題について、各自で調査を行う。
第12回	都市社会に関して、自ら課題を設定して調査（文献・ウェブ調査）	
第13回	都市社会に関して、自ら課題を設定して調査（現地調査の報告）	
第14回	成果発表の準備：仕上げと発表練習	
第15回	成果発表とふり返り	

成績評価方法
授業目標の1～6の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 現代社会の一員としての高い倫理観を持ち、他者と協働して課題に取り組むことができること。 2. PBLプログラムで学んだことを持続可能な社会の実現と関連付けて説明することができること。 3. PBL演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができること。 4. 都市空間および都市社会について、自ら資料、データを探し、それを整理・分析できること。 5. 都市に関する統計データをグラフや地図という形で分かりやすく表現し伝えることができること。 6. 都市を実際に歩き都市空間と都市社会の観察および調査を行い、その知見を整理し、説明できること。 の6点を達成することが求められる。成績は、演習への取り組みと成果発表をもとに、到達目標の達成度について、1回目の授業で学生に明示したルーブリックを基準として評価する。
履修上の注意
この授業は、PBLプログラムの最終科目と位置付けられる科目であるため、履修にあたっては、「現代システム科学域 PBLプログラム履修課程」において履修を指定している科目を履修済み、あるいは並行して履修している必要がある。 関連科目：「文化と景観」「地理学基礎」「社会文化史」「社会政治思想」「都市と経済の地理学」「地域研究」「大阪の都市づくり」「共生の思想と歴史」「ジェンダーと社会」「地域社会学」「教育福祉の諸問題C（多文化共生）」「地域・都市環境学」「環境心理学」
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
PBL演習（文化表象）		青木賜鶴子、相田洋明、高木佐知子、西尾純二、宮畑一範	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3前	選択	演習

授業概要
PBLプログラム（文化表象）の最終科目として位置づけられている。授業では、日本語学、認知言語学、談話分析に関する言語学領域の演習と日本文学、アメリカ文学に関する文学領域の演習をグループに分かれて行う。演習では、文学・メディア・日常会話・インターネット上のテキストなどをデータとし、そこで表される種々のイメージや意味を分析し、自文化・異文化の様相や成立経緯について考察する。最終回に、その考察結果について発表を行う。なお、PBLプログラム（文化表象）はSDG10「人や国の不平等をなくそう」に対応している。
到達目標
PBLプログラム（文化表象）は、言語と文学の両方の領域で、種々のデータを分析し考察していくことにより、多様な文化現象を理解し、その理解を現代社会の諸問題に関連付けることによって、公正な社会の形成に貢献する能力を身につけることを目標とする。具体的には、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 演習活動において、他者と協働して課題に取り組むことができる。 2. 言語の機能や構造について理解し、文学テキストの読解と解釈ができる。 3. 言語現象や文学に関する資料・データを探し、それを学術的な手続きによって分析できる。 4. PBL演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 5. 国内外の各地、各時代における言語・文学をとおして、社会の成立事情や情勢、諸課題について深く洞察することができる。 6. PBLプログラムで学んだことを持続可能な社会の実現と関連付けて説明することができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション：この演習とPBLプログラム（文化表象）の講義科目で学んだ内容との関わり等について説明し、この演習の到達目標と評価方法について解説する。更に受講者のグルーピングを行う。	事前：これまでのPBLプログラム（文化表象）で学んだ内容を復習する。 事後：各チームで取り組む課題についての資料等をとおして認識を深める。
第2回 ～ 第6回	日本語学、認知言語学、談話分析に関する言語学領域について、問題と課題を設定し、演習をグループに分かれて行う。	各回事前・事後：グループ活動の推進に資する議論・作業・思慮を行う。
第7回 ～ 第11回	日本文学、アメリカ文学に関する文学領域について、問題と課題を設定し、演習をグループに分かれて行う。	各回事前・事後：グループ活動の推進に資する議論・作業・思慮を行う。

第12回 ～ 第14回	発表の準備（各グループ）第2回から第11回までの間に取り組んだ課題から発表課題を選択し、共同で成果を発表する準備に取り組む。	各回事前・事後：グループ活動の推進に資する議論・作業・思慮を行う。 事後：成果発表会に備えて練習をする。
第15回	全体発表と質疑応答、演習のまとめ	

成績評価方法
授業目標の1～6の達成度を軸にして成績評価を行う。 目標の達成度の評価は、各回の演習活動への取り組みとその成果、また成果のプレゼンテーションについて、1回目の授業で学生に明示したルーブリックを基準として評価する。
履修上の注意
この授業は、PBLプログラムの最終科目と位置付けられる科目であるため、履修にあたっては、「現代システム科学域PBLプログラム履修課程」において履修を指定している科目を履修済み、あるいは並行して履修している必要がある。 深く思考することや活発に議論することが、活動の成果に大きく影響する研究分野であるため、活動に取り組む姿勢が評価に大きな割合を占める。
教科書
授業中に資料を配付する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
PBL演習（共生の思想）		酒井隆史、上柿崇英、住友陽文、山本由美子	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3前	選択	演習

授業概要
PBLプログラム（共生の思想）の最終科目として位置づけられている。授業では、演習を進めるにあたっての「共生の思想」に関する共通認識を形成した後、文献やフィールドを用いた研究活動を実践する。最終回には、演習の成果について報告・共有を行う。なお、PBLプログラム（共生の思想）はSDG16「平和と公正をすべての人に」、SDG17「パートナーシップで目標を達成しよう」と対応している。
到達目標
PBLプログラム（共生の思想）は、「共生の思想」に関する基礎的観点について説明でき、文献やフィールドを用いた具体的な研究活動を計画・実践することができる能力を身につけることを目標としている。 具体的には、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 現代社会の一員としての高い倫理観を持ち、他者と協働して課題に取り組むことができる。 2. PBLプログラムで学んだことを持続可能な社会の実現と関連付けて説明することができる。 3. PBL演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 4. 「共生の思想」に関する基礎的観点について、他者に対して説明することができる。 5. 「共生の思想」の基礎知識に基づき、文献やフィールドを用いた具体的な研究活動を計画・実践することができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション:この演習とPBLプログラムの講義科目で学んだ内容との関わり、持続可能社会の実現への取り組みとの関連、この演習の到達目標と評価方法について解説する。	自ら設定した課題について、各自で分析を深める。
第2回	「共生の思想」の基礎的観点	
第3回	課題の設定（社会思想史・都市社会学、環境哲学、日本近現代史、生命倫理・医療社会学から選択）	
第4回	グループごとに事前学習を行う。	
第5回		
第6回 ～ 第12回	グループごとに、文献・フィールドを用いたディスカッションを行う。	

第13回	成果発表の準備1：発表内容の構成	
第14回	成果発表の準備2：仕上げと発表練習	
第15回	成果発表 と ふり返り	

成績評価方法
成績評価は、演習への取り組みと成果発表をもとに、到達目標の達成度について、1回目の授業で学生に明示したルーブリックを基準として評価する。
履修上の注意
この授業は、PBLプログラムの最終科目と位置付けられる科目であるため、履修にあたっては、「現代システム科学域 PBLプログラム履修課程」において履修を指定している科目を履修済み、あるいは並行して履修している必要がある。
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
未来デザインインターンシップ		大塚耕司、伊井直比呂、遠藤崇浩、岡本真彦、菅野正嗣、西尾純二、野津亮、牧岡省吾、工藤宏司、森岡次郎、柳本豪一	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	1後	必修	演習

授業概要
未来デザインコースは、目指すべき未来の社会を創造すべく自分でその道筋をデザインし、領域横断的応用力とシステムの思考力を用いて、現代社会の課題解決に取り組むことによって、持続可能な社会の実現を実行できる人材を養成することを目的としている。本授業では、学生がインターンシップ指導教員の助言を受けながら自治体、NPO、企業などのインターンシップ先を探し、事前学習を行った上でインターンシップに参加することで、学生自身に取り組むべき課題を発見させる。
到達目標
本授業では、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 自らが未来デザインコースにおいて取り組むべき課題について、持続可能な社会の実現との関係を含めて説明できること。 2. インターンシップで赴いたフィールドにおける取り組みから、取り組むべき課題に関する新たな知見を得て、その内容を説明することができること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション、未来デザインコースのカリキュラム説明、インターンシップ指導教員の割り当て	授業内で指示する。
第2回 ～ 第3回	未来デザインコースで取り組むべき課題に関するグループディスカッションを行う。	各自で資料収集をしながら取り組むべき課題について考える。
第4回 ～ 第5回	インターンシップ指導教員の指導を受けながらインターンシップ先の選定を行う。	インターンシップ先の資料収集を行う。
第6回 ～ 第12回	インターンシップに参加し、各自の課題に取り組む（延べ10日間程度）。	インターンシップ中の取り組みについてインターンシップノートに記録を取り、考察を行う。
第13回 ～ 第14回	インターンシップでの取り組みについてインターンシップ指導教員に報告し、考察を深める。報告会での発表内容を検討する。	報告会の発表準備
第15回	報告会での発表	授業内で指示する。

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 自らが未来デザインコースにおいて取り組むべき課題について、持続可能な社会の実現との関係を含めて説明できること。 2. インターンシップで赴いたフィールドにおける取り組みから、取り組むべき課題に関する新たな知見を得て、その内容を説明することができること。 の2点を達成することが求められる。 成績を評価する方法として、インターンシップノートおよびインターンシップ報告会での発表を用いる。成績評価に占める割合は、インターンシップノート（70%）、インターンシップ報告会での発表（30%）である。
履修上の注意
関連科目：未来デザイン計画演習、未来デザインPBL演習、未来デザイン卒業研究
教科書
なし
参考文献
適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
未来デザイン計画演習		大塚耕司、伊井直比呂、遠藤崇浩、岡本真彦、菅野正嗣、西尾純二、野津亮、牧岡省吾、工藤宏司、森岡次郎、柳本豪一	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2前	必修	演習

授業概要
未来デザインコースは、目指すべき未来の社会を創造すべく自分でその道筋をデザインし、領域横断的応用力とシステムの思考力を用いて、現代社会の課題解決に取り組むことによって、持続可能な社会の実現を実行できる人材を養成することを目的としている。本授業では、1年次末に未来デザイン計画書を提出し、未来デザインコースの履修を認められた学生が、メンター教員の助言を受けながら卒業までの履修計画を精緻化するとともに、卒業研究と卒業後の計画を立案する。
到達目標
本授業では、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 自らが未来デザインコースにおいて取り組む課題が持続可能な社会の実現にどのように貢献するのかを説明できること。 2. 未来デザイン計画書に基づいて卒業までの履修計画を立てることができること。 3. 卒業研究と卒業後の計画を立案すること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション	授業内で指示する。
第2回 ～ 第3回	各自の未来デザイン計画書に関する発表とグループディスカッションを行う。	未来デザイン計画書に関する発表準備
第4回 ～ 第7回	メンター教員の指導を受けながら卒業までの履修と卒業研究について計画を立てる。	自らが取り組む課題の解決に何が必要科について考え、資料収集を行う。
第8回 ～ 第9回	各自の卒業研究の計画に関する中間発表とグループディスカッションを行う。	各自の卒業研究の計画に関する発表準備。
第10回 ～ 第13回	グループディスカッションを踏まえて、卒業までの履修と卒業研究について計画を精緻化する。	最終報告会の発表準備
第14回 ～ 第15回	最終報告会での発表	授業内で指示する。

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 自らが未来デザインコースにおいて取り組む課題が持続可能な社会の実現にどのように貢献するのかを説明できること。 2. 未来デザイン計画書に基づいて卒業までの履修計画を立てることができること。 3. 卒業研究と卒業後の計画を立案すること。 の3点を達成することが求められる。 成績は、中間発表会における発表と質疑応答(50%)、最終発表会における発表と質疑応答(50%)をもとに、到達目標の達成度について、1回目の授業で学生に明示したルーブリックを基準として評価する。
履修上の注意
本科目は未来デザインコースの学生を対象とする。 関連科目：未来デザインインターンシップ、未来デザインPBL演習、未来デザイン卒業研究
教科書
なし
参考文献
適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
未来デザインPBL演習		大塚耕司、伊井直比呂、遠藤崇浩、岡本真彦、菅野正嗣、西尾純二、野津亮、牧岡省吾、工藤宏司、森岡次郎、柳本豪一	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3通	必修	演習

授業概要
未来デザインコースは、目指すべき未来の社会を創造すべく自分でその道筋をデザインし、領域横断的応用力とシステムの思考力を用いて、現代社会の課題解決に取り組むことによって、持続可能な社会の実現を実行できる人材を養成することを目的としている。本授業では、学生のセルフプロデュースにより、社会における課題解決を実践する。学生はメンター教員の指導の下、必要に応じて他の専任教員の助言も受けながら、持続可能な社会の実現のために自らが貢献できる課題を見出し、解決方法を構想する。地域の方々や起業家、NPO、自治体、各種企業、学生が開発したアプリケーションのユーザなど、学内外の関係者と協働する学びによって、未来社会の実現を実行できる人材の育成を目指す。
到達目標
未来デザインコースは、目指すべき未来の社会を創造すべく自分でその道筋をデザインし、領域横断的応用力とシステムの思考力を用いて、現代社会の課題解決に取り組むことによって、持続可能な社会の実現を実行できる人材を養成することを目的としている。本授業には、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 持続可能な社会の実現のために必要な課題を発見し、その解決方法を構想することができる。 2. 学内外の関係者と協働で課題解決に取り組むことができる。 3. 課題解決の成果を分かりやすくプレゼンテーションすることができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション：この演習の進め方、到達目標と評価方法（ルーブリック）について解説する。	授業内で指示する。
第2回 ～ 第4回	メンター教員の指導を受けながら、課題の選定と解決への取り組みの計画を立てる。	課題とその解決方法に関する情報収集を主体的に行い、検討する。
第5回 ～ 第8回	課題解決に取り組む（延べ10日間程度）。	課題解決の取り組みを記録に残し、中間発表の準備を進める。
第9回	中間発表会。必要に応じてオンラインで参加する。	中間発表で得た意見について考察を深める。
第10回 ～ 第13回	中間発表を踏まえ、課題解決に取り組む（延べ10日間程度）。	課題解決の取り組みを記録に残す。

第14回 ～ 第28回	メンター教員に課題解決の成果を報告し、最終発表会の準備を行う。	最終発表会の準備。
第29回	最終発表会	最終発表会で得た意見について考察を深める。
第30回	ふり回り	課題解決の成果についてレポートにまとめる。

成績評価方法
授業目標の1～3の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 持続可能な社会の実現のために必要な課題を発見し、その解決方法を構想することができる。 2. 学内外の関係者と協働で課題解決に取り組むことができる。 3. 課題解決の成果を分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 の3点を達成することが求められる。成績は、中間発表会における発表と質疑応答(30%)、最終発表会における発表と質疑応答(30%)、課題解決の成果に関するレポート(40%)をもとに、到達目標の達成度について、1回目の授業で学生に明示したルーブリックを基準として評価する。
履修上の注意
本科目は未来デザインコースの学生を対象とする。 関連科目：未来デザイン計画演習、未来デザインインターンシップ、未来デザイン卒業研究
教科書
なし。
参考文献
適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
未来デザイン卒業研究		安倍広多、石橋勇人、岩村幸治、太田正哉、菅野正嗣、瀬田和久、中島智晴、真嶋由貴恵、宮本貴朗、村上晴美、森田裕之、渡邊真治、青木茂樹、上杉徳照、大西克実、小島篤博、佐賀亮介、永田好克、林佑樹、平林直樹、榊田聖子、森永英二、柳本豪一、吉田大介、楠木祥文、青木賜鶴子、秋庭裕、生田英輔、伊藤康人、遠藤崇浩、大塚耕司、大山克己、興津健二、酒井隆史、下村泰彦、住友陽文、相田洋明、高木佐知子、竹中規訓、中山祐一郎、西尾純二、福田珠己、水野真彦、宮脇幸生、上柿崇英、工藤宏司、黒田桂菜、住田守道、千葉知世、西川弘展、花村周寛、天島華織、藤田渡、古川朋雄、星英之、宮畑一範、吉川丈、山本由美子、阿久井康平、山東功、伊井直比呂、伊藤嘉余子、児島亜紀子、隅田好美、田垣正晋、西田芳正、東優子、山野則子、吉田敦彦、吉武信二、乾順子、木曾陽子、嵯峨嘉子、内藤葉子、濱島（宮川）淑恵、松田博幸、三田優子、森岡次郎、吉田直哉、吉原雅昭、東根ちよ、岡本真彦、総田純次、野津亮、牧岡省吾、岩佐和典、片畑真由美、河野直子、川部哲也、河村悠太、高橋幸治、飛田国人、武藤拓之	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
6	4通	必修	実験・実習

授業概要
未来デザインコースは、目指すべき未来の社会を創造すべく自分でその道筋をデザインし、領域横断的応用力とシステムの思考力を用いて、現代社会の課題解決に取り組むことによって、持続可能な社会の実現を実行できる人材を養成することを目的としている。本授業では、未来デザインPBL演習の成果を踏まえ、未来デザインコースの集大成としての卒業研究に取り組む。卒業研究の指導教員は、学生がメンター教員と相談の上で提出した希望指導教員名を踏まえて、学域教育運営委員会の中に設置された未来デザイン支援WGが、現代システム科学域 専任教員の中から選出する。

到達目標
未来デザインコースは、目指すべき未来の社会を創造すべく自分でその道筋をデザインし、領域横断的応用力とシステムの思考力を用いて、現代社会の課題解決に取り組むことによって、持続可能な社会の実現を実行できる人材を養成することを目的としている。本授業には、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 自らが未来デザインコースにおいて取り組んだ課題について、先行研究や過去の類似の取り組みの中での位置づけと、持続可能な社会の実現における意義を明確に説明することができる。 2. 自らが未来デザインコースにおいて取り組んだ課題と得られた成果について、客観的な資料を根拠に明確に説明することができる。 3. 自らが未来デザインコースにおいて取り組んだ課題と得られた成果に基づいて、今後の展望を示すことができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション：卒業研究の進め方。	授業内で指示する。
第2回 ～ 第30回	メンター教員の指導を受けながら、未来デザインPBL演習の成果を踏まえて卒業研究に取り組む。必要に応じて追加のデータの収集を行う。	研究に必要な文献の収集、データの分析などを行う。
第31回	未来デザイン卒業研究発表会（学域全体で行う）	授業内で指示する。

成績評価方法
授業目標の1～3の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 自らが未来デザインコースにおいて取り組んだ課題について、先行研究や過去の類似の取り組みの中での位置づけと、持続可能な社会の実現における意義を明確に説明することができる。 2. 自らが未来デザインコースにおいて取り組んだ課題と得られた成果について、客観的な資料を根拠に明確に説明することができる。 3. 自らが未来デザインコースにおいて取り組んだ課題と得られた成果に基づいて、今後の展望を示すことができる。 の3点を達成することが求められる。成績は、卒業論文の研究に取り組む姿勢(20%)、卒業論文および要旨(60%)、発表(20%)で評価する。
履修上の注意
本科目は未来デザインコースの学生を対象とする。 関連科目：未来デザインインターンシップ、未来デザイン計画演習、未来デザインPBL演習
教科書
なし。
参考文献
適宜紹介する。

現代システム科学域 教育福祉学類 シラバス(目次)

1	社会システムとサステイナビリティ	P. 294
2	人間システムとサステイナビリティ	P. 296
3	教育福祉学概論	P. 298
4	海外インターンシップ	P. 301
5	教育福祉学A	P. 303
6	教育福祉学B	P. 305
7	人間形成論	P. 307
8	生涯学習概論	P. 309
9	社会福祉原論	P. 311
10	ソーシャルワーク概論	P. 314
11	スクール・ソーシャルワーク概論	P. 316
12	保育学概論	P. 318
13	社会学基礎	P. 320
14	コラボレーション論	P. 323
15	グローバル・コラボレーション論	P. 325
16	教育福祉ゼミナールA	P. 327
17	教育福祉ゼミナールB	P. 329
18	教育福祉ゼミナールC	P. 331
19	教育福祉ゼミナールD	P. 333
20	教育福祉学卒業研究	P. 335
21	社会調査論	P. 337
22	教育福祉の諸問題A（貧困と社会）	P. 339
23	教育福祉の諸問題B（性と人権）	P. 341
24	教育福祉の諸問題C（多文化共生）	P. 343
25	家族社会学	P. 345
26	教育社会学	P. 347
27	教育福祉と健康	P. 349
28	権利擁護論	P. 352
29	障害者福祉論	P. 354
30	社会福祉運営論	P. 356

31	地域福祉論A	P. 358
32	地域福祉論B	P. 360
33	医療福祉論	P. 362
34	高齢者福祉論	P. 364
35	セルフヘルプ・グループ論	P. 366
36	子ども家庭福祉論	P. 368
37	児童養護論	P. 371
38	乳児保育論	P. 374
39	共生の思想と歴史	P. 376
40	教育福祉フィールドワーク1	P. 378
41	教育福祉フィールドワーク2	P. 380
42	教育福祉フィールドワーク3	P. 382
43	精神保健学	P. 385
44	特別支援教育	P. 387
45	教育の思想と歴史	P. 390
46	教育の法と制度	P. 392
47	ソーシャルワーク論A	P. 394
48	ソーシャルワーク論B	P. 397
49	ソーシャルワーク論C	P. 399
50	コミュニティとソーシャルワーク	P. 401
51	相談援助演習	P. 403
52	社会福祉実習1	P. 406
53	社会福祉実習指導1	P. 408
54	社会福祉実習2	P. 410
55	社会福祉実習指導2	P. 413
56	保育者論	P. 417
57	保育内容演習A（総論・環境）	P. 419
58	保育内容演習B（表現・言葉）	P. 421
59	障がい児保育演習	P. 423
60	養護内容演習	P. 425
61	保育の計画と評価	P. 428

62	保育実習1A	P. 430
63	保育実習指導1A	P. 432
64	保育実習1B	P. 434
65	保育実習指導1B	P. 436
66	保育実習2	P. 438
67	保育実習指導2	P. 440
68	スクール・ソーシャルワーク実習	P. 442
69	スクール・ソーシャルワーク演習	P. 444
70	社会科教育法（地歴分野）1A	P. 447
71	社会科教育法（公民分野）1A	P. 449
72	社会科教育法（公民分野）2A	P. 451
73	地域社会学	P. 453
74	社会教育入門	P. 455
75	生涯学習支援	P. 457
76	生涯スポーツ指導	P. 459
77	グローバル・コミュニケーション演習	P. 462
78	教育福祉国際インターンシップ	P. 464
79	PBL演習（ESD-A）	P. 466
80	PBL演習（ESD-B）	P. 468
81	PBL演習（ジェンダー論）	P. 470
82	PBL演習（コラボレーション）	P. 472
83	PBL演習（地域および都市における排除・共生・参加）	P. 475
84	PBL演習（生涯学習と設計）	P. 477
85	未来デザインインターンシップ	P. 479
86	未来デザイン計画演習	P. 481
87	未来デザインPBL演習	P. 483
88	未来デザイン卒業研究	P. 485

授業名称		担当教員氏名	
社会システムとサステナビリティ		上柿崇英、西尾純二、児島亜紀子、西田芳正、伊井直比呂	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	1 前	必修	講義

授業概要
現代システムの中の社会システムの重要性について講義する。また、現代社会を成り立たせる人間観とそれを支える価値、制度、慣習、思考様式などの意義、並びにそれらに基づく課題解決の新たな志向について説明する。最後に、社会システムの観点から見たサステナビリティ（持続可能性）について考察する。
到達目標
本授業では、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 現代システムの中の社会システムの重要性について説明できること。 2. 共生社会と哲学・思想の役割について説明できること。 3. 慣習と文化との関係、およびそれらと伝統との関係について説明できること 4. 近代福祉国家観とその歴史、および現代の課題について説明できること 5. 教育の未来創造の役割と現状について説明できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション、現代システムの中の社会システム／（伊井）	授業で話された内容を復習する。
第2回	サステナビリティ概念と社会（上柿）	授業で話された内容を復習する。
第3回	「社会システム」を考える（上柿）	授業で話された内容を復習する。
第4回	哲学・思想の方法論と共生社会（上柿） 第1回レポート	授業で話された内容を復習する。
第5回	慣習と社会の形成（西尾）	授業で話された内容を復習する。
第6回	言語・文学・芸術などの文化事象の伝統性と表象性（西尾）	授業で話された内容を復習する。
第7回	社会問題化する慣習（西尾） 第2回レポート	授業で話された内容を復習する。
第8回	福祉国家の思想と歴史（児島）	授業で話された内容を復習する。
第9回	人口縮小社会と福祉・社会制度（児島）	授業で話された内容を復習する。
第10回	災害など社会変動の被害を最も受けやすい人が受ける影響の最小化とそれらに対する強靱化（児島） 第3回レポート	授業で話された内容を復習する。
第11回	貧富の差の社会的本質（西田）	授業で話された内容を復習する。
第12回	教育を規定する社会・社会を作り変える教育（西田）	授業で話された内容を復習する。

第13回	地域社会の活力と諸課題（西田） 第4回レポート	授業で話された内容を復習する。
第14回	グローバルシステムの未来への選択（伊井）	授業で話された内容を復習する。
第15回	社会システムの中の持続可能性の発見（伊井） 第5回レポート 「情報システムとサステイナビリティ」「自然システムとサステイナビリティ」「社会システムとサステイナビリティ」「人間システムとサステイナビリティ」の担当者教員4名が登壇し、システム同士の関係性について対談形式で解説する。	授業で話された内容を復習する。

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 現代システムの中の社会システムの重要性について説明できること。 2. 共生社会と哲学・思想の役割について説明できること。 3. 慣習と文化との関係、およびそれらと伝統との関係について説明できること 4. 福祉国家観と縮小社会、あるいは社会的脆弱性について説明できること 5. 貧富の差の社会的本質と教育の未来創造の役割について説明できること 6. 講義を通して全体の関連が説明できること。 の6点を達成することが求められる。 成績は、授業中に課す5回のレポートで評価する。
履修上の注意
関連科目：自然システムとサステイナビリティ、情報システムとサステイナビリティ、人間システムとサステイナビリティ
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
人間システムとサステナビリティ		牧岡省吾、高橋幸治、東優子、工藤宏司	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	1 前	必修	講義

授業概要
現代システムの中の人間システムの重要性について講義する。人間（ヒト）という種が進化によって成立した過程、人間の心と進化との関係（進化心理学の観点）、利他行動、心の病や悩みや問題の人間にとっての意味と潜在している可能性、行為と社会的規範の関係、人間開発と人の可能性の関係について説明し、最後に、人間システムの観点から見たサステナビリティ（持続可能性）について考察する。
到達目標
本授業では、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 現代システムの中の人間システムの重要性について説明できること。 2. 人間（ヒト）という種の心のありかたと進化の関係について説明できること。 3. 心の病や悩みや問題の人間（ヒト）にとっての意味と潜在している可能性について説明できること 4. 行為が社会的規範とどのような関係にあるかについて説明できること 5. 人間開発と人の可能性の関係について説明できること 6. 人間システムの観点から見た持続可能性について説明できること

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション、現代システムの中の人間システム／第1回小レポート（牧岡）	授業で話された内容を復習する。
第2回	進化の仕組みとヒトの進化の歴史（牧岡）	授業で話された内容を復習する。
第3回	ヒトはなぜ社会をつくることができるのか（牧岡）	授業で話された内容を復習する。
第4回	ヒトの心と意見の分断（牧岡）／第2回小レポート（牧岡）	授業で話された内容を復習する。
第5回	ヒトの心の病のメカニズム（高橋）	授業で話された内容を復習する。
第6回	臨床の知（高橋）	授業で話された内容を復習する。
第7回	悩み・症状・問題の発展可能性（高橋）	授業で話された内容を復習する。
第8回	心理療法におけるセラピストの仕事（高橋）	授業で話された内容を復習する。
第9回	創造の病と文化の病（高橋）／第3回小レポート（高橋）	授業で話された内容を復習する。
第10回	「感情」はどのような意味で「社会的問題」になるのか（工藤）	授業で話された内容を復習する。
第11回	「感情規則」と「感情労働」（工藤）	授業で話された内容を復習する。
第12回	行為と社会的規範（工藤）／第4回小レポート（工藤）	授業で話された内容を復習する。

第13回	ジェンダーと社会（東）	授業で話された内容を復習する。
第14回	人間開発としてのジェンダーの位置づけ（東）／第5回小レポート（工藤）	授業で話された内容を復習する。
第15回	人間システムの観点から見た持続可能性／第6回小レポート（牧岡） 「情報システムとサステイナビリティ」「自然システムとサステイナビリティ」「社会システムとサステイナビリティ」「人間システムとサステイナビリティ」の担当者教員4名が登壇し、システム同士の関係性について対談形式で解説する。	授業内で指示する。

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 現代システムの中の人間システムの重要性について説明できること。 2. 人間（ヒト）という種の心のありかたと進化の関係について説明できること。 3. 心の病や悩みや問題の人間（ヒト）のにとっての意味と潜在している可能性について説明できること 4. 行為が社会的規範とどのような関係にあるかについて説明できること 5. 人間開発と人の可能性の関係について説明できること 6. 人間システムの観点から見た持続可能性について説明できること の6点を達成することが求められる。 成績は、授業中に課す6回の小レポートで評価する。
履修上の注意
関連科目：自然システムとサステイナビリティ、情報システムとサステイナビリティ、社会システムとサステイナビリティ
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
教育福祉学概論		吉田敦彦、山野則子、吉武信二、内藤葉子、木曾陽子	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	1 後	必修	講義

授業概要
教育福祉学の基本的な視点、方法論を学ぶための科目である。この授業では、人間開発と成長・発展、人が社会から阻害される要因、福祉国家、インクルーシブ社会への理念と実践などについて、多様な観点を交えつつ基本的な知識を得ることを目指す。「人間開発」とは、人間の自由を尊重し、誰もが価値ある人生を全うできるように人びとの選択肢を拡大すること、「インクルーシブ社会」とは、誰一人取り残さず、また一人一人が生きがいをもって互いに助け合いながら共生できる社会のことである。また同時に、1 年次前期に配当される「情報システムとサステイナビリティ」「自然システムとサステイナビリティ」「社会システムとサステイナビリティ」「人間システムとサステイナビリティ」の内容と関連付けながら、教育福祉学が持続可能な社会の実現にどのように貢献するのかについて学ぶ。
到達目標
・人間開発と成長・発展、人が社会から阻害される要因と福祉国家、インクルーシブ社会への理念と実践などについて、基本的な知識を問う問題に答えることができる。 ・教育福祉学が持続可能な社会の実現にどのように貢献するのかについて説明することができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション:現代システム科学域の教育理念と、その中の教育福祉学類の位置付けと役割、教育福祉学類の 3 ポリシーについて解説する。さらに、1 年次前期必修科目「情報システムとサステイナビリティ」「自然システムとサステイナビリティ」「社会システムとサステイナビリティ」「人間システムとサステイナビリティ」との関連性について解説する。(吉田)	授業支援システムで事前配付するシラバス、資料等を確認しておく。
第2回	保育を通じた人間の成長・発達(木曾)	授業中に配布された資料、および指示された文献等を読む。
第3回	保育の社会的役割と福祉国家(木曾)	授業中に配布された資料、および指示された文献等を読む。
第4回	インクルーシブ保育・教育の理念と実践(木曾)	授業中に配布された資料、および指示された文献等を読む。
第5回	人間の成長・発達と教育の役割(吉田)	授業中に配布された資料、および指示された文

		献等を読む。
第6回	教育における社会的阻害要因と教育／福祉の視点（吉田）	授業中に配布された資料、および指示された文献等を読む。
第7回	教育の多様性とインクルーシブ社会の理論と実践（吉田）	授業中に配布された資料、および指示された文献等を読む。
第8回	人間開発とジェンダー（内藤）	授業中に配布された資料、および指示された文献等を読む。
第9回	福祉国家とジェンダー（内藤）	授業中に配布された資料、および指示された文献等を読む。
第10回	現代社会におけるジェンダーと性の多様性（内藤）	授業中に配布された資料、および指示された文献等を読む。
第11回	社会福祉と人間の成長発達（山野）	授業中に配布された資料、および指示された文献等を読む。
第12回	社会福祉と学校教育（山野）	授業中に配布された資料、および指示された文献等を読む。
第13回	健康福祉とインクルーシブ社会の理念と実践（吉武）	授業中に配布された資料、および指示された文献等を読む。
第14回	高齢化社会における人間開発と健康（吉武）	授業中に配布された資料、および指示された文献等を読む。
第15回	社会システム、人間システムの観点から見た持続可能性（サステナビリティの定義、教育福祉学の方法論が持続可能社会の実現にどのように役立つのか、現代から未来へのつながりなど）について解説する。また知識情報システム学概論、環境社会システム学概論、心理学概論の代表教員との対談形式による総括を行う。（吉田）	授業中に配布された資料、および指示された文献等を読む。

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 持続可能な社会を実現するための課題について、教育の観点から説明できること。 2. 持続可能な社会を実現するための課題について、保育の観点から説明できること。 3. 持続可能な社会を実現するための課題について、社会福祉の観点から説明できること。 4. 持続可能な社会を実現するための課題について、ジェンダーの観点から説明できること。 5. 教育福祉学が持続可能な社会の実現にどのように貢献するのかについて説明できること。 の5点を達成することが求められる。 成績を評価する方法として、毎回提出させるコメントペーパーと期末課題を用いる。成績評価に占める割合は、毎回提出させるコメントペーパー（50%）、期末課題（50%）である。

履修上の注意
関連科目：自然システムとサステイナビリティ、情報システムとサステイナビリティ、社会システムとサステイナビリティ、人間システムとサステイナビリティ
教科書
授業中に適宜、指示・配布する。
参考文献
・ 山野則子,吉田敦彦,山中京子,関川芳孝 編『教育福祉学への招待』せせらぎ出版、2012 年。 ・ 関川芳孝,山中京子,中谷 奈津子 編『教育福祉学の挑戦』せせらぎ出版、2017 年。

授業名称		担当教員氏名	
海外インターンシップ		大塚耕司、佐賀亮介、柳本豪一、興津健二、飛田国人、東優子、山野則子	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 通	選択	演習

授業概要
本プログラムでは、派遣前にワークショップを行い、派遣先の国の歴史や文化ならびに持続可能性に関わる問題点などについて理解させるとともに、派遣プログラム期間内に現地学生との協働によるワークショップやスタディーツアーを実施し、課題解決の方法論を実践的に学ばせる。さらに、派遣後に報告会を行い、プレゼンテーションのスキルを向上させる。これらの教育プログラムを通して、多様な歴史・文化を背景に持つ人々が互いに尊重し合い、共に生きてゆくことの重要性を深く理解する能力（多文化共生マインド）を身につけさせるとともに、国際的な観点から持続可能な社会の構築に関する具体的な課題を発見し解決に導く方法論（課題解決スキル）を身につけさせる。なお、海外インターンシップでは、現地学生と協働で持続可能な社会の構築に関する具体的な課題に取り組むことになるが、現地における歴史・文化・宗教などを背景にした習慣や作法、禁忌行為などについて、派遣前のワークショップなどを通して十分に理解させる。
到達目標
本授業では、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 派遣先の国の歴史・文化・宗教的背景について説明できること。 2. 派遣先の国の持続可能な社会の構築に関する具体的な課題を発見できること。 3. 派遣先の国の学生と協働で課題解決に取り組むことができること。 4. 現地で行った活動について他人にわかりやすく伝えられること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション、派遣国の決定	
第2回	事前学習：派遣国別のチームに分かれて、派遣先の国の歴史や文化ならびに持続可能性に関わる問題点などについて調査する。	派遣国選びに必要な情報をあらかじめ調べておく
第3回		
第4回		
第5回		
第6回		
第7回	現地学生との協働によるワークショップやスタディーツアーを実施し、課題解決の方法論を実践的に学ぶ。（10日間程度）	現地活動の内容を整理してレポートにまとめる。
第8回		
第9回		
第10回		
第11回		
第12回		
第13回		

第14回	報告会での発表準備	
第15回	報告会での発表	

成績評価方法	
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 派遣先の国の歴史・文化・宗教的背景について説明できること。 2. 派遣先の国の持続可能な社会の構築に関する具体的な課題を発見できること。 3. 派遣先の国の学生と協働で課題解決に取り組むことができること。 4. 現地で行った活動について他人にわかりやすく伝えられること。 の4点を達成することが求められる。 成績を評価する方法として、海外インターンシップ報告書および海外インターンシップ報告会での発表を用いる。成績評価に占める割合は、海外インターンシップ報告書（60%）、海外インターンシップ報告会での発表（40%）である。	
履修上の注意	
適宜指示します。	
教科書	
なし	
参考文献	
なし	

授業名称		担当教員氏名	
教育福祉学 A		児島亜紀子、吉田敦彦	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
教育福祉学を構成する社会福祉学と教育学について基礎的な知識を学ぶ科目である。この授業では、教育福祉学の理念、社会福祉の価値、福祉国家の展開過程、学校制度の諸問題や多様な学びのあり方など、教育福祉に関する基礎的な知識を身につけることを目標とする。なお、この授業では配布されたレジュメや資料等を見直し、疑問点や課題を抽出し、調べて整理するといった授業時間外学習を課すものとする。
到達目標
本科目では、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 社会福祉に関する日本の公共政策と実践活動を総合的に理解するための必要な基礎的知識と原理的知見を学び、その学んだ内容について問う問題に答えることができること。 2. 教育に関する諸事象を多角的総合的に理解するために必要な基礎的知識と原理的知見を学び、その内容を問う問題に答えることができること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	ガイダンス、教育福祉と社会福祉の概念、社会福祉と教育の共通課題（児島）	本学類教員が編んだ『教育福祉学への招待』を読んで、教育福祉の概念を整理する。
第2回	社会福祉の理念、社会福祉実践の価値と倫理（児島）	前回配布されたレジュメや資料等を見直し、課題は何かを抽出し、整理する。
第3回	福祉国家の展開過程：英国の救貧法（児島）	前回配布されたレジュメや資料等を見直し、課題は何かを抽出し、整理する。
第4回	福祉国家の展開過程：19世紀英国の状況と貧困調査（児島）	前回配布されたレジュメや資料等を見直し、課題は何かを抽出し、整理する。
第5回	福祉国家の展開過程：ベヴァリッジ報告、アメリカの慈善活動、ニューディール（児島）	前回配布されたレジュメや資料等を見直し、課題は何かを抽出し、整理する。
第6回	現代社会と社会福祉：新自由主義とサッチャー主義（児島）	前回配布されたレジュメや資料等を見直し、課題は何かを抽出し、整理する。
第7回	福祉多元主義（児島）	前回配布されたレジュメや資料等を見直し、課題は何かを抽出し、整理する。
第8回	日本の社会福祉の歩み（児島）	前回配布されたレジュメや資料等を見直し、課題は何かを抽出し、整理する。
第9回	教育福祉学の意義（吉田）	本学類教員が編んだ『教育福祉学への招待』を再度読み、教育福祉の意義を確認・整理する。
第10回	教育福祉学の対象と課題（吉田）	前回配布されたレジュメや資料等を見直し、

		課題は何かを抽出し、整理する。
第 11 回	教育の中の福祉的側面（吉田）	前回配布されたレジュメや資料等を見直し、課題は何かを抽出し、整理する。
第 12 回	近代以前の学びのかたち（吉田）	前回配布されたレジュメや資料等を見直し、課題は何かを抽出し、整理する。
第 13 回	近代公教育制度としての学校の特質（吉田）	前回配布されたレジュメや資料等を見直し、課題は何かを抽出し、整理する。
第 14 回	近代学校の直面する諸課題（吉田）	前回配布されたレジュメや資料等を見直し、課題は何かを抽出し、整理する。
第 15 回	地域社会と家庭における教育課題（吉田）	前回配布されたレジュメや資料等を見直し、課題は何かを抽出し、整理する。
第 16 回	定期試験	

成績評価方法

到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、

1. 社会福祉に関する日本の公共政策と実践活動を総合的に理解するための必要な基礎的知識と原理的知見を学び、その学んだ内容について問う問題に答えることができること。
2. 教育に関する諸事象を多角的総合的に理解するために必要な基礎的知識と原理的知見を学び、その内容を問う問題に答えることができること。

の2点を達成することが求められる。

期末試験において上記についての論述が6割以上の確に記述されていると担当教員に判断されないと単位取得ができない。成績を評価する方法として、期末試験のほか、事前学習が適切に行われているかを評価する小テスト(1回～8回の間に行う)、9回以降の講義で求められた課題の提出を用いる。成績評価に占める割合は、期末試験(70%)、事前学習(10%)、課題(20%)である。

履修上の注意

関連科目：教育福祉学 B

教科書

特に定めない

参考文献

『教育福祉学への招待』せせらぎ出版

『教育福祉学の挑戦』せせらぎ出版

このほか、授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
教育福祉学 B		森岡 次郎、児島 亜紀子	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
「教育福祉学 A」に引き続き、教育福祉学を構成する社会福祉学と教育学について基礎的な知識を学ぶ科目である。教育と福祉の相互補完的な関係、自己実現を支援するための臨床教育学的な知見、現代の教育改革の動向と教育福祉学的課題、持続可能な未来のための福祉と教育については森岡が、ひとり親、障がい者、児童、高齢者といった人びとの抱える生活上の問題と社会福祉の取り組み、日本の社会福祉の政策動向と教育福祉学的課題については児島が講義を担当し、教育福祉の現代的課題に関する知識を身につけることを目標とする。なお、この授業では配布されたレジュメや資料等を見直し、疑問点や課題を抽出し、調べて整理するといった授業時間外学習を課すものとする。
到達目標
本科目では、教育福祉学を構成する社会福祉学と教育学について基礎的な知識を学ぶことにより、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 教育福祉学という領域についての概要を理解できること。 2. 教育の原理と福祉の原理について、その理論的課題も含めて理解できること。 3. 人間の営みを、教育と福祉という複眼的視点から考察することができること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	教育福祉学という視点と教育原理（森岡）	講義で話された内容を復習する
第2回	教育思想史の変遷と福祉的課題（森岡）	講義で話された内容を復習する
第3回	人間を測定し、格付する思想（森岡）	講義で話された内容を復習する
第4回	能力主義と優生思想（森岡）	講義で話された内容を復習する
第5回	教育-福祉問題としての不登校（森岡）	講義で話された内容を復習する
第6回	現代の教育改革の動向と教育福祉学的課題（森岡）	講義で話された内容を復習する
第7回	持続可能な未来のための福祉と教育（森岡）	講義で話された内容を復習する
第8回	社会福祉の対象：生活問題、福祉ニーズ（森岡）	講義で話された内容を復習する
第9回	社会福祉の対象：貧困、社会的排除、差別とスティグマ（児島）	講義で話された内容を復習する
第10回	社会福祉とニーズ：社会福祉研究におけるニーズ論（児島）	講義で話された内容を復習する
第11回	ニーズ概念の多義性、ドイヨルとゴフの必要概念（児島）	講義で話された内容を復習する
第12回	さまざまな生活課題を抱える人びとと社会福祉の取り組み1 (ひとり親、障がい者、児童、高齢者、その	講義で話された内容を復習する

	他困難を抱える人びとへの支援について)(児島)	
第 13 回	さまざまな生活課題を抱える人びとと社会福祉の取り組み 2 (ひとり親、障がい者、児童、高齢者、その他困難を抱える人びとへの支援について)(児島)	講義で話された内容を復習する
第 14 回	日本の社会福祉の政策動向と教育福祉学的課題：教育政策と社会福祉政策 (児島)	講義で話された内容を復習する
第 15 回	社会福祉政策と住宅政策、労働政策、医療政策 (児島)	講義で話された内容を復習する
第 16 回	期末試験	

成績評価方法

到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、

1. 教育福祉学という領域についての概要を理解できること。
2. 教育の原理と福祉の原理について、その理論的課題も含めて理解できること。
3. 人間の営みを、教育と福祉という複眼的視点から考察することができること。

上記3点を達成しなければならない。成績評価は、論述形式の最終試験(50%)、授業への積極的参加・授業中の課題への取り組み(50%)による。

履修上の注意

(関連科目) 教育福祉学 A

(備考) 受講者は、授業計画および授業中に配付された資料などをもとに、授業内容に関する十分な予習・復習を行った上で講義にのぞむこと。

教科書

適宜指示します。

参考文献

『教育福祉学への招待』せせらぎ出版 『教育福祉学の挑戦』せせらぎ出版

授業名称		担当教員氏名	
人間形成論		吉田敦彦	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
教育福祉学における人間支援の基礎的な知見を提供する専門科目である。人間形成論では、他の誰かに対して行う狭い意味の教育ではなく、人と人の間でそれぞれの自己が形成されていくプロセスと諸相を探究する。人はそれぞれに気質・個性を持ちつつ、内面世界のなかで自己と向き合うだけでなく、他者と出会い、文化や社会と関わることによって形成される。そのダイナミズムを解明するとともに、そこに得られる知見を参照して、自己形成のプロセス（自分史・ライフストーリー）についての認識を深める機会としたい。
到達目標
本授業の目標は、人間形成における諸課題に関する知見を獲得し、その知見を参照枠として、自己の形成プロセスに関する多角的な考察を行えるようになることである。具体的には以下のことができるようになることを達成目標とする。 1. 人のもつ気質やパーソナリティについて類型的に見分けることができる。 2. 自我（ego）と自己（Self）の心理的な働きについて説明できる。 3. 自分が学んだ学校教育を相対化して、教育の根本的な意義を考えることができる。 4. 人間の発達・形成を、年齢段階に適したプロセスとして捉えることができる。 5. 人間形成において影響を及ぼす他者の存在と関与について考察できる。 6. 人間形成が営まれるインフォーマルな「文化」の意義を認識できる。 7. アイデンティティの自己形成について物語論的に記述できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション講義概要と評価方法	以下の参考文献による予習復習
第2回	気質と個性	文献（A）第1章
第3回	自我と自己個性と社会性	文献（B）第2章
第4回	オルタナティブ教育（シュタイナー教育）	文献（B）第4章
第5回	人間の発達と人類の歴史	文献（A）第9章
第6回	芸術としての教育	文献（E）
第7回	バイオグラフィー（自己形成史）	
第8回	自然と文化と人間（季節の祝祭）	文献（D）
第9回	アイデンティティ（自己物語）	文献（C）第2章
第10回	生と死といのち	文献（A）第2章
第11回	「他者」との出会い	文献（C）第2章
第12回	グーバーの応答的人間形成論	文献（C）第8章
第13回	持続可能な未来のための教育	文献（D）

第 14 回	オルタナティブな世界は可能か	文献（A）
第 15 回	自己形成史を作成するガイドライン	
第 16 回	レポート試験	

成績評価方法	
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 人のもつ気質やパーソナリティについて類型的に見分けることができる。 2. 自我（ego）と自己（Self）の心理的な働きについて説明できる。 3. 自分が学んだ学校教育を相対化して、教育の根本的な意義を考えることができる。 4. 人間の発達・形成を、年齢段階に適したプロセスとして捉えることができる。 5. 人間形成において影響を及ぼす他者の存在と関与について考察できる。 6. 人間形成が営まれるインフォーマルな「文化」の意義を認識できる。 7. アイデンティティの自己形成について物語論的に記述できる。 の7点を達成することが求められる。 1～7の到達度について、次のA) B) によって評価を行う。A) 授業回ごとに提出するフィードバック・ノート（50%）、B) 最終レポート（50%）。単位を取得するためには、A) 毎回の授業で得た知見と省察を記すフィードバック・ノートを3分の2以上提出すること。B) 上記の7つの目標にかかわる観点のうち少なくとも4つ以上を用いて作成した最終レポートの提出。	
履修上の注意	
（関連科目）教育福祉学A B （備考）1 年次配当の教育福祉学A Bを履修していない学生については、事前に少なくとも下記文献（A）第1章、（B）第2章、第4章を読了してから受講を判断すること。	
教科書	
適宜指示します。	
参考文献	
吉田敦彦著（A）『世界のホリスティック教育』、（B）『ホリスティック教育論』（ともに日本評論社）、（C）『ブーバー対話論とホリスティック教育』（勁草書房）、（D）吉田敦彦ほか編『持続可能な教育と文化』（せせらぎ出版）、（E）NPO法人京田辺シュタイナー学校著『親と先生がつくる学校』（せせらぎ出版）	

授業名称		担当教員氏名	
生涯学習概論		森岡次郎	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
生涯学習社会の構築を目指した取り組みは、今日、様々に行われている。この講義では生涯学習の理論と歴史的展開、生涯学習や社会教育に関する法律と制度、政策や組織、機関、施設について解説し生涯学習の全体像を理解する。また、これを踏まえて生涯学習や社会教育をおこなう施設や専門職員が果たす役割と課題について考察する。さらに、この講義では国外の生涯学習や社会教育に関する制度と取り組み、UNESCO などにおける国際会議での議論や提言などを取り上げ国際的な視点から生涯学習の課題と展望を考察する。また、日本国内も含めた地域的特色のある取り組みにも触れ、多様な生涯教育のあり方について理解を深める。とりわけ、今日、国際社会は「EFA 運動」を継承しつつ、2030 年に向けた「持続可能な社会における開発目標（SDGs）」の達成に向けて動き始めている。本講義では、国際社会における生涯学習活動の課題の他、貧困や格差の是正、子どもや若者を取り巻く今日の社会的課題等も確認しつつ、理解を深めていく。
到達目標
本講義では、広く国際社会における教育活動の動向を把握するとともに、子どもからおとなまであらゆる人々を対象にした多様な学習活動について、その今日的課題を問い直すことを目的とする。人間の一生の中で、学習活動は決して学校教育に限定されるものではない。教育という営みは、私たち人間の社会が築いてきた価値観や慣習等の社会、文化的要因を背景に育まれていくことを、具体的事例を踏まえ社会学的視点からも検討していく。具体的な目標は次のとおりである。 1. 講義で取り上げた事例について、半分以上を説明できること。 2. 講義で取り上げた資料の内容理解について、半分以上を説明できること。 3. 生涯学習社会の構築に向けた課題を本講義で紹介した事例を踏まえ、具体的に説明できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	オリエンテーション：本講義の概要	授業で配布した資料の内容理解等。
第 2 回	生涯学習とは？：その概念と歴史的経緯	授業で配布した資料の内容理解等。
第 3 回	生涯学習社会におけるおとなの学びとは？	授業で配布した資料の内容理解等。
第 4 回	高齢者の学習活動とその在り方について	授業で配布した資料の内容理解等。
第 5 回	地域社会における学習活動とその展開	授業で配布した資料の内容理解等。
第 6 回	社会教育施設について：公民館、博物館、美術館等	授業で配布した資料の内容理解等。
第 7 回	多文化共生社会と生涯学習について	授業で配布した資料の内容理解等。
第 8 回	生涯学習の国際的動向①Unesco の成立とその歴史的展開	授業で配布した資料の内容理解等。

第9回	生涯学習の国際的動向②EFA(Education for All)運動の展開	授業で配布した資料の内容理解等。
第10回	生涯学習の国際的動向③SDGSとは何か？	授業で配布した資料の内容理解等。
第11回	現代社会における学習活動：ESDと学習活動	授業で配布した資料の内容理解等。
第12回	現代社会における学習活動：地域づくりと生涯学習	授業で配布した資料の内容理解等。
第13回	現代社会における学習活動：メディアと生涯学習	授業で配布した資料の内容理解等。
第14回	「学び直し」を尊重する生涯学習社会の創造を目指して	授業で配布した資料の内容理解等。
第15回	まとめ	授業で配布した資料の内容理解等。

成績評価方法
授業態度、および、グループワーク（ディスカッション）等により評価する。単位を取得するためには、1.講義で取り上げた事例について、半分以上を説明できる。2.講義で取り上げた資料の内容理解について、半分以上を説明できる。3.生涯学習社会の構築に向けた課題を本講義で紹介した事例を踏まえ、具体的に説明できる。上記の3点を達成することが求められる。
履修上の注意
（関連科目） （備考）適宜、意見交換を行い、授業に反映させて進めていきたいと思います。積極的に授業に参加してください。
教科書
適宜、資料を配付します。
参考文献
適宜、資料を配付します。

授業名称		担当教員氏名	
社会福祉原論		児島亜紀子、吉原雅昭	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 前	選択	講義

授業概要
社会福祉と呼称される政策および援助実践(ソーシャルワーク)の対象やそれらを存立せしめる原理、および社会福祉の管理運営について学ぶ。この授業では、社会政策や社会福祉政策の基礎的な概念、政策の原理と援助(ソーシャルワーク)の原理との違い、ロールズやセンなどの規範理論、社会福祉サービスの組織と経営に関わる基礎理論、社会福祉サービスの経営と管理運営に関する基本概念など、社会福祉の原理と政策、管理運営に関する知識を身につけることを目標とする。なお、この授業では配布されたレジュメや資料等を見直し、疑問点や課題を抽出し、調べて整理する、あるいは資料に提示されている課題に取り組むといった授業時間外学習を課すものとする。
到達目標
①社会福祉と呼称される政策および援助実践(ソーシャルワーク)の対象やそれらを存立せしめる原理について学び、その学んだ内容について問う問題に答えることができる。
②社会福祉サービスの組織と経営に関わる基礎理論、社会福祉サービスの経営と管理運営に関する基本概念、社会政策、政策決定過程、財務過程、社会福祉制度、地方自治制度、地域社会、政府間関係等に関する基礎知識を学び、その内容を問う問題に答えることができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	福祉国家をめぐる近年の議論の動向、現代とはどのような時代か（児島）	テキストの序章を読んでおく。
第2回	社会福祉政策とは何か（児島）	テキストの「社会福祉政策」について述べている箇所（特に第1章、第4章）を読んでおく。
第3回	社会福祉の政策課題（児島）	テキストの「社会福祉政策」について述べている箇所（特に第1章、第4章）を読んでおく。
第4回	社会福祉の政策原理と援助原理（児島）	テキストの第6章を読んでおく。
第5回	社会福祉の倫理（児島）	テキストの第6章を読んでおく。
第6回	近時の社会福祉理論(ロールズとセンを中心に)（児島）	テキストの第6章を読んでおく。
第7回	社会福祉の主題（ニーズと資源、自己決定、スティグマ等）をめぐって（児島）	テキストの第7章を読んでおく。
第8回	ソーシャルワークと社会福祉政策（児島）	テキストの最終章を読んでおく。
第9回	社会福祉サービスに関わるさまざまな組織や団体における問題解決過程のモデル（吉原）	本学類教員が編んだ『教育福祉学への招待』を再度読み、教育福祉の意義を確認・整理する。

第 10 回	サービスまたは事業の起案（吉原）	前回配布されたレジュメに提示されている課題を行う。
第 11 回	業務のスケジュールリング、役割分担、進行管理（吉原）	前回配布されたレジュメに提示されている課題を行う。
第 12 回	制度の創設や改革の理解に必要な、政策決定過程というものの見方（吉原）	前回配布されたレジュメに提示されている課題を行う。
第 13 回	社会福祉予算の編成と執行過程に関する基礎知識（吉原）	前回配布されたレジュメに提示されている課題を行う。
第 14 回	ソーシャルワーカーの職務環境：わが国の地方自治制度の諸特性（吉原）	前回配布されたレジュメに提示されている課題を行う。
第 15 回	ソーシャルワーカーの職務環境：地方政治、政府間関係と地方分権改革（吉原）	前回配布されたレジュメに提示されている課題を行う。
第 16 回	定期試験	

成績評価方法

到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、定期試験において以下の要件を満たさないと単位取得ができない。

- ① 社会福祉と呼ばれる政策および援助活動の対象やそれらを存立せしめる原理とはどのようなものかについての論述が6割以上の確に記述されていると担当教員が判断すること。
- ② 社会福祉政策と援助活動の関係、専門職援助（ソーシャルワーク）に関する倫理などについての論述が6割以上の確に記述されていると担当教員が判断すること。
- ③ 市場と国家の役割、福祉国家の機能、国家による個人の自由な経済活動への介入の是非、配分の正義など、社会福祉を条件づける本質的要件についての論述が6割以上の確に記述されていると担当教員が判断すること。
- ④ 福祉サービスの組織と経営に関わる基礎理論、事業の業務過程で必要とされる技能や視角についての論述が6割以上の確に記述されていると担当教員が判断すること。
- ⑤ ソーシャルワーカーの職務に重要な影響を与える、社会政策、政策決定過程、財務過程、社会福祉制度、地方自治制度、地域社会、政府間関係等に関する基礎知識についての論述が6割以上の確に記述されていると担当教員が判断すること。

成績を評価する方法として、期末試験、事前学習が適切に行われているかを評価する小テスト(1 回～8 回の間に行う)、9 回以降の講義で求められた課題の提出を用いる。成績評価に占める割合は、期末試験（70%）、事前学習(10%)、課題(20%)である。

履修上の注意
関連科目：教育福祉学 A、教育福祉学 B、社会福祉運営論
教科書
児島亜紀子・伊藤文人・坂本毅啓編『現代社会と福祉』（東山書房、2015 年）を使用する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
ソーシャルワーク概論		東 優子	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
社会福祉援助技術の入門科目として位置づけられる本講義では、上記目標に掲げられたテーマについて、学生は地域でさまざまな相談援助活動に取り組むゲストスピーカーによるリレー・トークに耳を傾ける。また、学生が自分自身（の価値観）と向き合うことを目的として、レポート課題やグループ・ディスカッションに取り組むことが求められる。
到達目標
ソーシャルワークにおける相談援助活動の実際と、総合的かつ包括的な援助と多職種連携の意義と内容、専門職の概念と範囲、専門職倫理に対する理解を深めること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション：ソーシャルワークの対象としての人間と社会	授業で取り扱ったテーマについて、ノートを読み返して内容をしっかり理解するよう努め、授業中に紹介された内容をさらに自分で調べることで深化させる。
第2回	若者の生きづらさとコミュニティ・プラクティス	
第3回	高齢者福祉と介護の現状と課題	
第4回	薬物からの回復	
第5回	精神保健福祉のお仕事	
第6回	グループ・ディスカッション：当事者主権と専門職	
第7回	学校における排除と包摂	
第8回	児童福祉とファミリー・ソーシャルワーク	
第9回	専門職とは何か：倫理綱領を読み解く	
第10回	社会的排除と包摂（低所得者・ホームレス）	
第11回	障害のある人々の地域自立生活	
第12回	ソーシャルワークは専門職か	
第13回	教育福祉の可能性	
第14回	『だれか、ふつうを教えてください！』で伝えたかったこと	
第15回	まとめ	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、ソーシャルワークにおける相談援助活動の実際と、総合的かつ包括的な援助と多職種連携の意義と内容、専門職の概念と範囲、専門職倫理に対する理解を深め、これらについて論理的に論じられること。 成績を評価する方法として、感想文（7回）と期末レポートを用いる。成績評価に占める割合は、ゲストスピーカーによる講演の感想文（35%）、グループ・ディスカッション参加度＝ふりかえりシート提出（25%）、期末レポート課題（40%）である。
履修上の注意
（関連科目）教育福祉フィールドワーク2、教育福祉フィールドワーク3 （備考）授業計画は、ゲストスピーカーの都合により変更になることがある。
教科書
適宜、資料を配付する。
参考文献
適宜、授業中に紹介あるいは配布する。

授業名称		担当教員氏名	
スクール・ソーシャルワーク概論		山野則子	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
スクールソーシャルワークは、子ども家庭相談体制のなかにおける位置づけの意識しながら、その固有性、特性を理解する。1. 児童を取り巻く環境と学校、2. スクールソーシャルワークの意義、理念・価値、3. 海外のスクールソーシャルワーク、4. スクールソーシャルワークに関連する実践理論・実践モデルと支援方法 5. エビデンス・ベースド・プラクティスの意義について修得する。
到達目標
本講義では、学校現場の理解、児童問題の理解の上に、学校現場に福祉の視点を導入するスクールソーシャルワークに関する欧米や日本の歴史的な基礎知識の概説から始まり、スクールソーシャルワークの過程、理論、実践を学ぶ。現代的課題にスクールソーシャルワークが果たす役割を提案できることを目指す。具体的には、以下の能力を身につけることを達成目標とする。 1. 海外・日本ともにスクールソーシャルワークの設立の経緯と社会的な背景を説明できること。 2. ソーシャルワークのプロセスと方法に照らしてスクールソーシャルワークの特徴を説明できること。 3. スクールソーシャルワークの効果と課題を説明できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	スクールソーシャルワークとは	テキストにおいて当該章について事前に読んでくる。
第2回	スクールソーシャルワークの誕生と海外の状況	
第3回	日本におけるスクールソーシャルワークの歴史	
第4回	子どもをめぐる現状	
第5回	学校の特徴、価値観	
第6回	スクールソーシャルワークの意義、理念・価値	
第7回	子ども家庭相談体制におけるスクールソーシャルワーク	
第8回	経済的問題、非行問題とスクールソーシャルワーク	
第9回	不登校、特別支援教育（発達の問題）とスクールソーシャルワーク	

第 10 回	子育て支援、コミュニティワークとスクールソーシャルワーク	
第 11 回	スクールソーシャルワークにおけるメゾ実践 1 ～校内の連携や協働	
第 12 回	スクールソーシャルワークにおけるメゾ実践 2 ～各機関との連携や協働	
第 13 回	スクールソーシャルワークにおけるマクロ実践	
第 14 回	実証的研究	
第 15 回	まとめ	
第 16 回	テスト	

成績評価方法

授業目標（達成目標）の 1 ～ 3 の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、・授業で取り上げたスクールソーシャルワークに関するキーワードについて、半分以上を説明できる。・現代社会の問題を取り上げて、その問題とスクールソーシャルワークの関連を説明できる。・スクールソーシャルワークの発祥の地アメリカでの経緯とポイントを説明できる。以上、3 点を達成することが求められる。成績を評価する手段として、授業内での発言や授業中課題等の授業への参加態度と期末試験を用いる。成績評価に占める割合は、参加態度が 20%、期末試験が 80%とする。

履修上の注意

（関連科目）子ども家庭福祉論を履修していること。スクールソーシャルワーク教育課程希望者は、スクール・ソーシャルワーク演習、スクール・ソーシャルワーク実習指導、スクール・ソーシャルワーク実習の科目を今後履修すること。

（備考）授業への積極的参加を望む。以下が、子ども関係、特に学校関係で専門性を高める推奨履修パターンである。他学類の学生も実習以外は、以下可能である。特に SDGs 演習（コラボレーション）

（教師、心理、福祉など専門職による協働を学ぶ）を望む方は、他学類の受講生でも可能な限り、積み上げて受講することを求める。2 年で子ども家庭福祉論、スクール・ソーシャルワーク概論、教育福祉フィールドワーク 2 やインターンシップの学校現場での活動、社会福祉実習 1、3 年でスクール・ソーシャルワーク演習、社会福祉実習 2、4 年でスクール・ソーシャルワーク実習指導と実習。

教科書

山野則子ほか（2016）「よくわかるスクールソーシャルワーク」ミネルヴァ書房

参考文献

適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
保育学概論		吉田直哉	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	1 後	選択	講義

授業概要
保育学の基本的な理論と概念について学ぶ科目である。この授業では、保育という営みの社会的意義・機能、子どもの権利条約や児童福祉法、保育所保育指針等の関連法令の概要を解説した上で、保育の内容及び方法を支える基本的な概念、それをさらに支える日本及び西欧の保育思想史・学説史を概説することによって、保育をめぐる社会的・言説的状況の付置を明らかにする。
到達目標
本科目では、保育の制度・機能を支える社会的背景、歴史的背景、保育という営みを構成する内容、方法を支える基礎理論、関連法令の概要と趣旨、現在の保育が構造的に抱える課題と今後の展望についての基本的な知識・理解を獲得することを目標とする。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーションと導入的なトピック紹介	教科書第1章を読む。
第2回	保育の基本理念と関連法令	教科書第1章、第2章を読む。
第3回	保育所保育指針の基本概念	教科書第5章を読む。
第4回	保育所保育指針における文化適応の原則：生活を通した保育	教科書第5章を読む。
第5回	保育所保育指針における間接性の原則：環境を通した保育、遊びを中心とした保育	教科書第5章を読む。
第6回	日本の保育思想史：中世から近世まで	教科書第3章を読む。
第7回	日本の保育思想史：明治から大正まで	教科書第3章を読む。
第8回	日本の保育思想史：昭和から平成まで	教科書第3章を読む。
第9回	西欧の保育思想史：ロック、ルソー	教科書第4章を読む。
第10回	西欧の保育思想史：ペスタロッチ、フレーベル	教科書第4章を読む。
第11回	西欧の保育思想史：デューイ、モンテッソーリ	教科書第4章を読む。
第12回	保育の法制度的基礎	教科書第2章を読む。
第13回	保育の計画と評価：保育カリキュラムの基本類型	教科書第6章を読む。
第14回	保育の計画と評価：保育記録とプロセスの質の改善	教科書第6章を読む。

第 15 回	保育の現在的課題の整理と全体のまとめ	授業を振り返ってのリフレクションシートの記入

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、以下の 4 項目についての基本的な知識・理解が獲得されていることが必要である。 ①保育の制度・機能を支える社会的背景、歴史的背景 ②保育という営みを構成する内容、方法を支える基礎理論 ③関連法令の概要と趣旨 ④現在の保育が構造的に抱える課題と今後の展望 成績評価方法として、小テスト(1 回)とレポート (2 回) を用いる。成績評価に占める割合は、小テスト (50%)、レポート(50%)である。
履修上の注意
関連科目：保育者論、保育内容演習 A (総論・環境)
教科書
吉田直哉編著『再訂版：保育原理の新基準』三恵社、2018 年 『平成 29 年告示・幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領〈原本〉』チャイルド本社、2017 年。
参考文献
矢田貝公昭編者代表『改訂新版：保育用語辞典』2019 年。

授業名称		担当教員氏名	
社会学基礎		工藤宏司・藤田 渡・西田芳正	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
社会学および隣接領域の共有財となっている主要なテーマや概念について、順次概説する。 本講義では、社会学および隣接諸領域がこれまで培ってきた諸研究の成果に基づきながら、近・現代世界に特有の社会的事象を認識するために必要と考えられる社会理論の基本的諸類型と重要な諸概念を学ぶことを通じて、現代社会システムの動態や構造とそれが抱える諸問題に関する社会科学的な観察力の涵養を目指す。またこれを基盤としながら、さまざまなヒューマンサービスに求められる、人間と社会に対する共感的な理解と実践的かつ批判的な判断力の獲得を目標とする。
到達目標
1) 現代社会の諸事象・現象を探究する社会学固有の理論枠組や概念、主要な調査方法について説明することができる。 2) 社会学のみならず、広く社会科学において利用される主要な統計・指標・データの活用方法について説明することができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション：社会学の位置づけおよび小史（西田）	授業で扱う話題に関して、紹介する文献や資料の他、社会学関連の専門書、辞典・事典等も適宜活用して知識の整理と補足を自主的に行うこと。
第2回	個人と社会(1):社会的行為と社会的役割および社会関係（工藤）	授業で扱う話題に関して、紹介する文献や資料の他、社会学関連の専門書、辞典・事典等も適宜活用して知識の整理と補足を自主的に行うこと。
第3回	個人と社会(2):社会集団と組織：概念と類型（工藤）	授業で扱う話題に関して、紹介する文献や資料の他、社会学関連の専門書、辞典・事典等も適宜活用して知識の整理と補足を自主的に行うこと。
第4回	個人と社会(3):社会関係資本と生活世界（工藤）	授業で扱う話題に関して、紹介する文献や資料の他、社会学関連の専門書、辞典・事典等も適宜活用して知識の整理と補足を自主

		的に行うこと。
第5回	社会階層と不平等(1):社会階層研究の歴史と現在 (西田)	授業で扱う話題に関して、紹介する文献や資料の他、社会学関連の専門書、辞典・事典等も適宜活用して知識の整理と補足を自主的に行うこと。
第6回	社会階層と不平等(2):日本社会の階層・不平等問題 (西田)	授業で扱う話題に関して、紹介する文献や資料の他、社会学関連の専門書、辞典・事典等も適宜活用して知識の整理と補足を自主的に行うこと。
第7回	社会階層と不平等(3):教育と階層、文化資本 (西田)	授業で扱う話題に関して、紹介する文献や資料の他、社会学関連の専門書、辞典・事典等も適宜活用して知識の整理と補足を自主的に行うこと。
第8回	社会制度と社会システム(1):社会システムの基本概念 (藤田)	授業で扱う話題に関して、紹介する文献や資料の他、社会学関連の専門書、辞典・事典等も適宜活用して知識の整理と補足を自主的に行うこと。
第9回	社会制度と社会システム(2):政治システム、経済システム、法システム (藤田)	授業で扱う話題に関して、紹介する文献や資料の他、社会学関連の専門書、辞典・事典等も適宜活用して知識の整理と補足を自主的に行うこと。
第10回	社会制度と社会システム(3):家族制度と現代家族の変容 (工藤)	授業で扱う話題に関して、紹介する文献や資料の他、社会学関連の専門書、辞典・事典等も適宜活用して知識の整理と補足を自主的に行うこと。
第11回	社会制度と社会システム(4):メディアとコミュニケーション (工藤)	授業で扱う話題に関して、紹介する文献や資料の他、社会学関連の専門書、辞典・事典等も適宜活用して知識の整理と補足を自主的に行うこと。
第12回	現代の社会変動と社会問題(1):グローバル化と人口変動 (藤田)	授業で扱う話題に関して、紹介する文献や資料の他、社会学関連の専門書、辞典・事典等も適宜活用して知識の整理と補足を自主的に行うこと。
第13回	現代の社会変動と社会問題(2):新しい社会問題と社会的連帯・共生社会 (藤田)	授業で扱う話題に関して、紹介する文献や資料の他、社会学関連の専門書、辞典・事典等も適宜活用して知識の整理と補足を自主的に行うこと。
第14回	社会学の方法:理論研究と実証研究(社会調査) (藤田)	授業で扱う話題に関して、紹介する文献や資料の他、社会学関連の専門書、辞典・事典

		等も適宜活用して知識の整理と補足を自主的に行うこと。
第 15 回	まとめ:社会学の役割と課題（西田）	授業で扱う話題に関して、紹介する文献や資料の他、社会学関連の専門書、辞典・事典等も適宜活用して知識の整理と補足を自主的に行うこと。
第 16 回	期末試験	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。 単位を取得するためには、1)現代社会の諸事象・現象を探究する社会学固有の理論枠組や概念、主要な調査方法について説明することができること、2)広く社会科学において利用される主要な統計・指標・データの活用方法について説明することができることの2点を達成することが求められる。成績を評価する手段として、期末に実施する筆記試験に加えて、授業内で課すミニレポートやミニツッペーパー等も総合して評価する。成績評価に用いる割合は、期末試験が70%、その他が30%である。
履修上の注意
（関連科目）教養科目を含む社会学系の諸科目
教科書
授業中に資料を配付する。
参考文献
指定しないが、有益と思われる文献については講義のなかで随時紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
コラボレーション論		隅田好美（令和6年度まで） 山野則子（令和7年度から）	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 前	必修	講義と演習

授業概要
本講義では最初に連携・協働の概念について概説する。また、具体的な事例を通して各領域のニーズの捉え方と連携・協働について学ぶ。特に、動画を用いることで加齢やさまざまな疾患や障害を有する対象者の課題（身体的・心理的・社会的）の理解を深め、各専門職の支援の視点を知り、連携・協働について考えていく。さらに、他の学類の学生と事例検討をすることで、連携の意義と課題について学ぶ。
到達目標
多様な側面を持つ人の健康および福祉を回復、維持、向上あるいは育むためには、人が本来持つ強さを活性化する支援が重要であり、その支援には、多様な領域の専門性と同時に各領域をつなぎ、支援を全体として統合する各領域間の連携・協働が必修である。本講義では連携・協働の基礎的概念と実践を理解することを目的とする。
到達目標 ・ 連携・協働の基本的概念について説明することができる。 ・ 医療・介護一体化、地域連携について説明することができる。 ・ 加齢や多様な疾患の連携・協働について説明することができる。 ・ 自然災害における連携・協働について説明することができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	多職種連携の社会的背景と概念	配付資料を読んでおくこと。
第2回	連携・協働の形成プロセスと課題	配付資料を読んでおくこと。
第3回	医療・介護一体化と連携	配付資料を読んでおくこと。
第4回	葛藤マネジメント	配付資料を読んでおくこと。
第5回	葛藤マネジメント（グループ討議）	連携の理論と実践を総合的に理解できるように復習をすること。
第6回	児童福祉領域の連携	資料を整理し、連携の理論と実践を総合的に理解できるように復習をすること。
第7回	児童福祉領域における理論と実際	資料を整理し、連携の理論と実践を総合的に理解できるように復習をすること。
第8回	先天性障害児のライフステージの課題（福祉・医療の視点）と連携・協働	多職種連携の事例課題のための専門職としての課題を整理しておく。

第 9 回	介護予防における課題（福祉・医療の視点）と連携・協働	多職種連携の事例課題のための専門職としての課題を整理しておく。
第 10 回	認知症の人の支援（福祉・医療の視点）	多職種連携の事例課題のための専門職としての課題を整理しておく。
第 11 回	認知症の人の支援と多職種連携・地域連携	多職種連携の事例課題のための専門職としての課題を整理しておく。
第 12 回	多職種連携の事例検討（多職種の価値感）	事例検討にけるレポート課題を課す。
第 13 回	多職種連携の事例検討（多職種の連携）	事例検討にけるレポート課題を課す。
第 14 回	多職種連携の事例検討（多職種の合意形成）	事例検討にけるレポート課題を課す。
第 15 回	まとめ	連携の理論と実践を総合的に理解できるように復習をすること。

成績評価方法

到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、

1. 連携・協働の基本的概念について説明することができる。
2. 医療・介護一体化、地域連携について説明することができる。
3. 多様な疾患の連携・協働について説明することができる。
4. 自然災害における連携・協働について説明することができる。

の 4 点を達成することが求められる。

授業中の課題 20%、筆記試験 30%、レポート 50%で評価する。授業中の課題は授業終了時に提出する（ABCD で評価）。

履修上の注意

他の科目で学んだ制度、理論も踏まえて、総合的に病いをもつ人のニーズや支援について捉えること。

教科書

資料を適宜配布する。

参考文献

その他は適宜紹介する

授業名称		担当教員氏名	
グローバル・コラボレーション論		伊井直比呂・吉田敦彦・東優子・山野則子	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
共生社会の実現のためには、周縁化されている人びとや、社会的に排除されるリスクや脆弱性が高い人びとを「誰一人取り残さず」、その人たちとともに持続可能な社会を形成していくことが不可欠である。とくに急激なグローバル化が進む状況にあつては、地域や国を超えたグローバルな協働・連携が必要であり、ESD（持続可能な開発のための教育）やグローバル・シティズンシップ教育（GCED）と人権教育、あるいは国際ソーシャルワークなどへの関心も高まっている。本講義では、これら国内外の動向を踏まえつつ、人種・民族の多様性やジェンダー平等の他、複層化するアイデンティティをめぐる今日的課題を理解し、人権基盤型アプローチによる問題解消の方策を習得する。（オムニバス方式／全15回）。
到達目標
本授業の到達目標は、以下の3点である。 （1） 急激なグローバル化による現代社会の諸問題を的確に理解し、論述することができる。 （2） グローバル・シティズンシップの多義性について理解し、論述することができる。 （3） SDGsの意義と背景を的確に理解し、論述することができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション： グローバル化（globalization）とは何か （吉田敦彦）	授業内で指示する
第2回	グローバル化と社会変容（1）日本国内 （吉田敦彦）	事前の配布資料を読んでおくこと
第3回	グローバル化と社会変容（2）国際社会 （吉田敦彦）	
第4回	アイデンティティの複層化とインターセクショナル ティ（1）人種・民族・エスニシティ （東優子）	
第5回	アイデンティティの複層化とインターセクショナル ティ（2）社会階級と多文化共生の課題 （東優子）	
第6回	アイデンティティの複層化とインターセクショナル ティ（3）ジェンダー／セクシュアリティ （東優子）	各回について、リアクション・ペーパー を提出すること
第7回	グローバルな協働・連携（1）： 日本国内での外国籍児童生徒の教育と社会参加 （伊井直比呂）	
第8回	グローバルな協働・連携（2）： フィリピンでの貧困課題と国内課題の異同と連携 （伊井直比呂）	
第9回	グローバルな協働・連携（3）： ニュージーランドの多文化性と民族間連帯 （吉田敦彦）	
第10回	グローバルな協働・連携（4）： スウェーデンの移民政策と日本の縮小社会の課題－ 社会保障の観点から－（山野則子）	

第11回	グローバルな協働・連携（５）： ベトナムとの社会課題解決型連帯の試み （東優子）	
第12回	グローバルな協働・連携（６）： 国内における諸問題との関連性を抽出する。 （山野則子）	
第13回	グローバル・シティズンシップ教育（GCED）と人権教育 （伊井直比呂）	授業内で指示する
第14回	持続可能な開発と人間開発から協働・連携の価値を考える。（山野則子）	授業内で指示する
第15回	国際ソーシャルワーク （山野則子）	期末レポート課題

成績評価方法
授業目標の達成度について成績評価が行われる。リアクションペーパーを60%、学期末レポートを40%として評価し、60点以上を合格点とする。
履修上の注意
講義科目だが、グループ・ディスカッションなど、積極的な参加が求められる。
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
授業中に資料を配布する。

授業名称		担当教員氏名	
教育福祉ゼミナールA		伊井直比呂、吉田敦彦、隅田好美、児島亜紀子、山野則子、西田芳正、吉武信二、東優子、田垣正晋、伊藤嘉余子、松田博幸、三田優子、吉原雅昭、嵯峨嘉子、内藤葉子、森岡次郎、木曾陽子、吉田直哉、濱島淑恵、乾順子、東根ちよ	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	3 前	必修	演習

授業概要
教育福祉学類の全教員が担当。学生が自分の問題関心や将来の希望から所属する演習を選択する。文献講読、学生による研究発表と共同討議、フィールドワークやサーベイ調査など、それぞれの演習により具体的な内容は多様であり、次年度の卒業論文作成に向けての準備という性格もある。どのような内容、形態であっても、学生自身の学習と発表、討議への積極的な参加が重視される。
到達目標
教育福祉に関する問題関心を学術的に深めることを目的とし、研究の基礎となる文献の検索、読解、討議の方法などについて習得することを到達目標とする。具体的には、以下を達成目標とする。 1. 教育福祉に関する問題を発見し特定することができる。 2. 問題を分析するための基礎的文献を収集、読解、整理することができる。 3. 演習成果についての議論、発表、質疑応答ができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	演習の内容、進め方の紹介	
第2回	各ゼミにおいて、教育福祉に関する問題発見について、各学生の発表を中心に進める。	卒業論文に関連する文献、新聞およびニュース等の報道に日頃から接するように心がける。文献や資料を事前に読了し、発表資料を作成する。各テーマの学習を進めて行くために必要な資料収集、フィールドワーク、報告準備やデータの分析などは、授業時間外に求められることがある。
第3回		
第4回		
第5回		
第6回		
第7回	各ゼミにおいて、問題を分析するための基礎的文献の収集、読解、整理について、各学生の発表を中心に進める。	
第8回		
第9回		
第10回		
第11回		
第12回		
第13回	各ゼミにおいて、演習成果についての議論、発表、質疑応答を行う。	演習成果についての議論、発表、質疑応答に関する準備を行う。
第14回		
第15回		

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 教育福祉に関する問題を発見し特定することができる。 2. 問題を分析するための基礎的文献を収集、読解、整理することができる。 3. 演習成果についての議論、発表、質疑応答ができる。 の3点を達成することが求められる。 成績は、授業での発表、質疑討論、授業外での学習活動の内容で評価する。
履修上の注意
適宜指示します。
教科書
教科書指導教員が適宜指示する。配付資料指導教員が適宜指示する。
参考文献
指導教員が適宜指示する。

授業名称		担当教員氏名	
教育福祉ゼミナール B		伊井直比呂、吉田敦彦、隅田好美、児島亜紀子、山野則子、西田芳正、吉武信二、東優子、田垣正晋、伊藤嘉余子、松田博幸、三田優子、吉原雅昭、嵯峨嘉子、内藤葉子、森岡次郎、木曾陽子、吉田直哉、濱島淑恵、乾順子、東根ちよ	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	3 後	必修	演習

授業概要
教育福祉学類の全教員が担当。教育福祉ゼミナール A に引き続き、卒業論文作成の準備となる学習を進める。文献講読、学生による研究発表と共同討議、フィールドワークやサーベイ調査など、それぞれの演習により具体的な内容は多様である。どのような内容、形態であっても、学生自身の学習と発表、討議への積極的な参加が重視される。
到達目標
教育福祉に関する問題関心を学術的に深めることを目的とし、研究の基礎となる文献の検索、読解、討議の方法などについて習得することを到達目標とする。具体的には、以下を達成目標とする。 1. 教育福祉に関する問題を発見し特定することができる。 2. 問題を分析するための基礎的文献を収集、読解、整理することができる。 3. 演習成果についての議論、発表、質疑応答ができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	演習の内容、進め方の紹介	
第 2 回	各ゼミにおいて、教育福祉に関する問題発見について、各学生の発表を中心に進める。	卒業論文に関連する文献、新聞およびニュース等の報道に日頃から接するように心がける。文献や資料を事前に読了し、発表資料を作成する。各テーマの学習を進めて行くために必要な資料収集、フィールドワーク、報告準備やデータの分析などは、授業時間外に求められることがある。
第 3 回		
第 4 回		
第 5 回		
第 6 回		
第 7 回	各ゼミにおいて、問題を分析するための基礎的文献の収集、読解、整理について、各学生の発表を中心に進める。	
第 8 回		
第 9 回		
第 10 回		
第 11 回		
第 12 回		
第 13 回	各ゼミにおいて、演習成果についての議論、発表、質疑応答を行う。	演習成果についての議論、発表、質疑応答に関する準備を行う。
第 14 回		
第 15 回		

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 教育福祉に関する問題を発見し特定することができる。 2. 問題を分析するための基礎的文献を収集、読解、整理することができる。 3. 演習成果についての議論、発表、質疑応答ができる。 の3点を達成することが求められる。 成績は、授業での発表、質疑討論、授業外での学習活動の内容で評価する。
履修上の注意
適宜指示します。
教科書
教科書指導教員が適宜指示する。配付資料指導教員が適宜指示する。
参考文献
指導教員が適宜指示する。

授業名称		担当教員氏名	
教育福祉ゼミナールC		伊井直比呂、吉田敦彦、隅田好美、児島亜紀子、山野則子、西田芳正、吉武信二、東優子、田垣正晋、伊藤嘉余子、松田博幸、三田優子、吉原雅昭、嵯峨嘉子、内藤葉子、森岡次郎、木曾陽子、吉田直哉、濱島淑恵、乾順子、東根ちよ	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	3 前	選択	演習

授業概要
教育福祉学類の全教員が担当。学生が自分の問題関心や将来の希望から所属する演習を選択する。文献講読、学生による研究発表と共同討議、フィールドワークやサーベイ調査など、それぞれの演習により具体的な内容は多様であり、次年度の卒業論文作成に向けての準備という性格もある。どのような内容、形態であっても、学生自身の学習と発表、討議への積極的な参加が重視される。
到達目標
教育福祉に関する問題関心を学術的に深めることを目的とし、研究の基礎となる文献の検索、読解、討議の方法などについて習得することを到達目標とする。具体的には、以下を達成目標とする。 1. 教育福祉に関する問題を発見し特定することができる。 2. 問題を分析するための基礎的文献を収集、読解、整理することができる。 3. 演習成果についての議論、発表、質疑応答ができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	演習の内容、進め方の紹介	授業内で指示する。
第 2 回	各ゼミにおいて、教育福祉に関する問題発見について、各学生の発表を中心に進める。	卒業論文に関連する文献、新聞およびニュース等の報道に日頃から接するように心がける。文献や資料を事前に読了し、発表資料を作成する。各テーマの学習を進めて行くために必要な資料収集、フィールドワーク、報告準備やデータの分析などは、授業時間外に求められることがある。
第 3 回		
第 4 回		
第 5 回		
第 6 回		
第 7 回	各ゼミにおいて、問題を分析するための基礎的文献の収集、読解、整理について、各学生の発表を中心に進める。	
第 8 回		
第 9 回		
第 10 回		
第 11 回		
第 12 回		
第 13 回	各ゼミにおいて、演習成果についての議論、発表、質疑応答を行う。	演習成果についての議論、発表、質疑応答に関する準備を行う。
第 14 回		
第 15 回		

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 教育福祉に関する問題を発見し特定することができる。 2. 問題を分析するための基礎的文献を収集、読解、整理することができる。 3. 演習成果についての議論、発表、質疑応答ができる。 の3点を達成することが求められる。 成績は、授業での発表、質疑討論、授業外での学習活動の内容で評価する。
履修上の注意
・教育福祉ゼミナールA/Bは必修科目である。前・後期セットで履修すること。 ・A/B（必修）とC/D（選択）を組み合わせることにより、3年次に2名のゼミまで履修可能となる。 ・「教育福祉学演習 1、2」は、「教育福祉ゼミナール A～D」を履修した教員の中から選択する
教科書
教科書指導教員が適宜指示する。配付資料指導教員が適宜指示する。
参考文献
指導教員が適宜指示する。

授業名称		担当教員氏名	
教育福祉ゼミナール D		伊井直比呂、吉田敦彦、隅田好美、児島亜紀子、山野則子、西田芳正、吉武信二、東優子、田垣正晋、伊藤嘉余子、松田博幸、三田優子、吉原雅昭、嵯峨嘉子、内藤葉子、森岡次郎、木曾陽子、吉田直哉、濱島淑恵、乾順子、東根ちよ	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	3 後	選択	演習

授業概要
教育福祉学類の全教員が担当。教育福祉ゼミナール C に引き続き、卒業論文作成の準備となる学習を進める。文献講読、学生による研究発表と共同討議、フィールドワークやサーベイ調査など、それぞれの演習により具体的な内容は多様である。どのような内容、形態であっても、学生自身の学習と発表、討議への積極的な参加が重視される。
到達目標
教育福祉に関する問題関心を学術的に深めることを目的とし、研究の基礎となる文献の検索、読解、討議の方法などについて習得することを到達目標とする。具体的には、以下を達成目標とする。 1. 教育福祉に関する問題を発見し特定することができる。 2. 問題を分析するための基礎的文献を収集、読解、整理することができる。 3. 演習成果についての議論、発表、質疑応答ができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	演習の内容、進め方の紹介	授業内で指示する。
第 2 回	各ゼミにおいて、教育福祉に関する問題発見について、各学生の発表を中心に進める。	卒業論文に関連する文献、新聞およびニュース等の報道に日頃から接するように心がける。文献や資料を事前に読了し、発表資料を作成する。各テーマの学習を進めて行くために必要な資料収集、フィールドワーク、報告準備やデータの分析などは、授業時間外に求められることがある。
第 3 回		
第 4 回		
第 5 回		
第 6 回		
第 7 回	各ゼミにおいて、問題を分析するための基礎的文献の収集、読解、整理について、各学生の発表を中心に進める。	
第 8 回		
第 9 回		
第 10 回		
第 11 回		
第 12 回		
第 13 回	各ゼミにおいて、演習成果についての議論、発表、質疑応答を行う。	演習成果についての議論、発表、質疑応答に関する準備を行う。
第 14 回		
第 15 回		

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 教育福祉に関する問題を発見し特定することができる。 2. 問題を分析するための基礎的文献を収集、読解、整理することができる。 3. 演習成果についての議論、発表、質疑応答ができる。 の3点を達成することが求められる。 成績は、授業での発表、質疑討論、授業外での学習活動の内容で評価する。
履修上の注意
・教育福祉ゼミナールA/Bは必修科目である。前・後期セットで履修すること。 ・A/B（必修）とC/D（選択）を組み合わせることにより、3年次に2名のゼミまで履修可能となる。 ・「教育福祉学演習 1、2」は、「教育福祉ゼミナール A～D」を履修した教員の中から選択する。
教科書
教科書指導教員が適宜指示する。配付資料指導教員が適宜指示する。
参考文献
指導教員が適宜指示する。

授業名称		担当教員氏名	
教育福祉学卒業研究		伊井直比呂、吉田敦彦、隅田好美、児島亜紀子、山野則子、西田芳正、吉武信二、東優子、田垣正晋、伊藤嘉余子、松田博幸、三田優子、吉原雅昭、嵯峨嘉子、内藤葉子、森岡次郎、木曾陽子、吉田直哉、濱島淑恵、乾順子、東根ちよ	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
6	4 通	必修	演習

授業概要
教育福祉学類での学習の成果の集大成としての卒業論文を作成する。教育福祉ゼミナールA、Bで身につけた視点や知識をさらに深め、卒業論文としてまとめるために文献講読、発表とディスカッション、調査活動等を行う。最後に卒論発表会において口頭発表を行う。
到達目標
自身の問題関心にに基づき、教育福祉学類で学んできた成果を卒業研究として集大成することを目的とし、卒業論文を完成させることを到達目標とする。具体的には、以下を達成目標とする。 1. 先行研究を整理したうえで、卒業論文のテーマを決定する。 2. 卒業論文のテーマに必要な文献研究、調査等を行い、卒業論文を完成させる。 3. 卒業論文での研究成果を的確に報告、発表する。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回 ～ 第30回	卒業論文の作成に向け文献研究や調査の成果を報告し教員から指導を受ける。 最後に卒業論文発表会を行う。	卒業論文のテーマに関連する文献の読解、調査等によるデータ収集と分析を行い、最終的に卒業論文を執筆する。

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 先行研究を整理したうえで、卒業論文のテーマを決定する。 2. 卒業論文のテーマに必要な調査、分析等を行い、卒業論文を完成させる。 3. 卒業論文の研究成果を的確に報告、発表する。 成績は、卒業論文の内容（70%）および授業での発表、質疑討論、授業外での学習活動の内容（30%）で評価する。卒業論文については、卒業研究のテーマ設定の明確さ、研究方法の妥当性、考察及び結論の意義、学術論文としてのスタイルや文章の適切さを総合的に評価する。

履修上の注意
適宜指示します。
教科書
適宜指示します。
参考文献
適宜指示します。

授業名称		担当教員氏名	
社会調査論		田垣正晋・乾順子	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
社会調査の概要と歴史、調査目的と調査方法の種類、社会福祉分野における調査の特徴、国勢調査等の公的統計、統計法、社会調査の倫理、マスメディアと調査、量的調査の方法論と統計的な分析手法、ITの活用、質的調査の方法論と各手法、ソーシャルワークの評価、ニーズ調査。
到達目標
社会調査の意義と、データ収集から分析までの諸過程、および調査の諸類型に関する基礎的事項を習得させることを通して、社会現象や諸事例を科学的に把握し、解決方法の発見や仮説の構築・検証を行なうための基礎的態度と知識を身につけさせる。到達目標は以下のとおり。
1. 統計法の概要、社会調査の倫理、主たる公的統計の種類とその利用法について説明できる。
2. 量的調査と質的調査の手法の概要、利点と課題などを説明できる。
3. 統計的手法による量的データ、質的調査の手法による質的データの各々の基礎的な分析ができる。
4. 調査結果を用いて仮説の生成と検証、PDCA、ソーシャルワークの評価を行うことができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	社会調査の概要と歴史、調査目的と調査方法の種類、社会福祉分野における調査の特徴	指定された文献の読解
第2回	国勢調査等の公的統計、統計法、社会調査の倫理、マスメディアと調査	指定された文献の読解
第3回	量的調査：量的調査の方法論、記述統計量の算出)	各回において出された、文献読解と分析課題への取り組み
第4回	量的調査：サンプリング（母集団と標本）	各回において出された、文献読解と分析課題への取り組み
第5回	量的調査：質問紙調査と調査票作成	各回において出された、文献読解と分析課題への取り組み
第6回	量的調査：記述統計量の算出	各回において出された分析課題への取り組み
第7回	量的調査：推測統計に基づいた各種検定（ χ^2 検定）の理論と実施	各回において出された分析課題への取り組み
第8回	量的調査：推測統計に基づいた各種検定（t検定,分散分析）の理論と実施	各回において出された分析課題への取り組み
第9回	量的調査のまとめ、ITの活用	各回において出された、文献読解と分析課題への取り組み
第10回	質的調査：質的調査の理論	授業中に課せられた文献の読解

第 11 回	質的調査：インタビュー調査の理論と手法、自由記述の分析	分析課題への取り組み
第 12 回	質的調査：観察調査、フィールドワークの理論と手法	分析課題への取り組み
第 13 回	質的調査：分析方法の理論（KJ 法、グラウンディッドセオリー法等によるコーディングとカテゴリー関連図の生成）、質的調査のまとめ	分析課題への取り組み、質的調査の復習
第 14 回	ソーシャルワークの評価、ニーズ調査	指定された文献の読解
第 15 回	授業全体のまとめ	難解な授業内容の復習
第 16 回	定期試験	定期試験の準備と復習

成績評価方法

到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、

1. 統計法の概要、社会調査の倫理、主たる公的統計の種類とその利用法について説明できる。
 2. 量的調査と質的調査の手法の概要、利点と課題などを説明できる。
 3. 統計的手法による量的データ、質的調査の手法による質的データの各々の基礎的な分析ができる。
 4. 調査結果を用いて仮説の生成と検証、PDCA、ソーシャルワークの評価を行うことができる。
- の 4 点を達成することが求められる。

授業での積極的参加の態度や小テスト（レポート）50%。定期試験 50%に依拠して、総合的に判断した上で評価する。合格（C）であるためには、授業での積極性・小テスト（レポート）・定期試験の総合結果として、上記達成目標の 1 から 4 の達成が求められる。

履修上の注意

関連科目：統計学 [基礎 1](#)、[2](#) および数学関係の科目。

備考：授業内容の順序は変更になることがある。授業の一部に、グループワークおよび情報教室での PC 演習を含む。

教科書

指定せず、配布資料を用いる。開講年度中に適切な書籍が刊行された場合、それを教科書に利用することがある。

参考文献

授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
教育福祉の諸問題 A（貧困と社会）		嵯峨嘉子	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
日本の公的扶助制度である生活保護制度について、歴史的展開、基本的な枠組み（目的、基本原理および保護の原則、生活保護基準の算定方法）および役割について理解を深める。現代社会に存在する貧困の諸問題について、その存在形態、特徴、出現のメカニズムについて理解を深め、貧困および社会的排除に対応すべき貧困政策のあり方について学ぶ。日本の貧困対策とともに、諸外国の貧困政策についても基礎的知識を学び、国際比較の視点を身につけることを目的とする。
到達目標
本講義の達成目標は、以下のとおりである。 1. 社会保障制度の最後の切りどころである公的扶助制度の意義と役割、公的扶助制度の歴史的変遷、日本の生活保護制度の基本的な仕組み（目的、基本原理および保護の原則、保護の種類と内容、生活扶助基準額の算定方式、給付の仕組みと手続き、等）を理解し、日本の生活保護制度および貧困政策の課題について説明できること。 2. 現代社会に存在する貧困の諸問題について、その存在形態、特徴、出現のメカニズムについて理解を深め、貧困および社会的排除に対応すべき貧困政策のあり方を説明できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	貧困の概念、公的扶助制度の概念と範囲	授業内に指示する。
第2回	貧困の測定、貧困と社会福祉	
第3回	公的扶助制度の歴史的展開	
第4回	生活保護法の目的、基本原理、保護の原則	
第5回	保護の種類と内容、保護基準、算定方式	
第6回	被保護者の権利および義務、不服申し立て	
第7回	保護の機関、組織、実施体制、財源、保護施設	
第8回	生活保護制度における専門職と多職種連携	
第9回	貧困および生活保護利用者の生活実態	
第10回	自立支援プログラムの意義と実際	
第11回	海外の公的扶助制度の概要	
第12回	生活困窮者自立支援制度の概要	
第13回	貧困対策と社会福祉	
第14回	低所得者対策の動向	
第15回	ホームレス対策と居住福祉の課題	
第16回	期末試験	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 公的扶助制度の意義と役割、公的扶助制度の歴史的変遷、日本の生活保護制度の基本的な仕組みを理解し、日本の生活保護制度および貧困政策の課題について説明できること。 2. 貧困の諸問題について、その存在形態、特徴、出現のメカニズムについて理解を深め、貧困および社会的排除に対応すべき貧困政策のあり方を説明できる。 の2点を達成することが求められる。 コメントペーパー、小レポート等の提出物による評価（30%）、期末試験（70%）により総合的に評価します。達成目標について理解できていること（60点以上）を合格の基準とする。
履修上の注意
本講義は、社会福祉士受験資格の取得に必要な資格科目です。 3年次で福祉事務所コースでの実習を希望している方は、必ず受講してください。
教科書
毎回、レジュメを配付する。
参考文献
阿部彩『子どもの貧困』（岩波新書）、岩田正美『社会的排除—参加の欠如・不確かな帰属（有斐閣Insight）』、湯浅誠『反貧困－「すべり台」社会からの脱出』（岩波新書）、岩田正美『現代の貧困』（ちくま新書）、など。岩永理恵他『生活保護と貧困対策』有斐閣など。

授業名称		担当教員氏名	
教育福祉の諸問題B（性と人権）		東 優子	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
性に関する諸問題をめぐる議論においては様々な価値観が対立し、合意形成が困難になることが多い。本講義では、性（セクシュアリティ）をめぐる今日的话题を取り上げ、問題の背景に対する理解を深め、同時に自己の価値観と向き合う機会を提供することを通じて、様々な言説に対するリテラシーを向上させる。
到達目標
性に関する諸問題をめぐる議論においては、様々な価値観が対立し、合意形成が非常に困難となる。本講義では、性(セクシュアリティ)をめぐる今日的话题を取り上げ、以下の能力を身につけることを達成目標とする。
1. 問題の背景を理解すること。 2. 合意形成を困難にする要因について概説できるようになること。 3. 自己の価値観と向き合う機会を提供することを通じて、様々な言説に対するリテラシーを向上させること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	性に関する3つの概念	授業内でおこなう小グループディスカッションに十分な参加ができるよう、事前にテーマ（問題）について調べ、授業中に紹介された内容を、さらに自分で調べることで深化させる。
第2回	AIDS30年の教訓(1)：現況と課題	
第3回	AIDS30年の教訓(2)：Most Affected Population と個別施策層	
第4回	「性の健康と権利」概念(1)：歴史的変遷	
第5回	「性の健康と権利」概念(2)：異なる価値観の対立	
第6回	WAS「性の権利宣言」を読み解く	
第7回	性的自由、身体の自律・完全性・安全	
第8回	ジェンダーの平等	
第9回	プライバシーと関係性	
第10回	家族・結婚・生殖	
第11回	性に関する教育(1)：禁欲教育と包括的セクシュアリティ教育	
第12回	性に関する教育(2)：日本における性教育の現況	
第13回	性の健康に関するケアと支援	

第 14 回	性的権利をめぐる議論の動向	
第 15 回	まとめ	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 授業で取り上げる問題の背景を理解していることを示せること。 2. 合意形成を困難にする要因を解説できるようになること 3. 自己の価値観と向き合い、様々な言説に対するリテラシーを向上させること。 の3点を達成することが求められる。 成績を評価する方法として、グループ・ディスカッションへの参加度、期末レポートを用いる。成績評価に占める割合は、グループ・ディスカッションへの参加度 40%、期末レポート 60%である。
履修上の注意
適宜指示します。
教科書
適宜、資料を配付します。
参考文献
適宜、資料を配付します。

授業名称		担当教員氏名	
教育福祉の諸問題 C (多文化共生)		伊井直比呂、森岡次郎、山東功、吉田敦彦	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
1. 吉田:「教育の多様化」と「多様化の教育」／「異文化の他者との出会いと対話:M.ブーバーの思想と人生」他 2. 山東:日本社会と南米移民／南米(ブラジル)日系移民社会の日本語教育／多文化共生と言語(日本語)問題 3. 森岡:能力主義・自己責任論と多文化共生 4. 伊井:多文化・共生概念を把握する(基礎)／多文化共生国家ベルギーにおけるポリアーキー
到達目標
本科目では、多文化共生概念の理解と、現実には生じている多文化共生を阻害している事象への実践的方途を見出すことができることを目標とする。 1. 多文化共生概念について自分自身の言葉を用いて説明できる。 2. 現実には多文化共生が阻害されている場面等を自ら発見する力をもつ。 3. 現実には多文化共生を行っている社会の価値や諸制度の意味を把握して自らの実践に用いることができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	4名の先生による講義タイトルの紹介(伊井)	資料を読みまとめる
第2回	多文化・共生概念を把握するー身近な自文化ー(伊井)	
第3回	多文化・共生概念を再構成する(伊井)	
第4回	ベルギーにおけるポリアーキーについて(伊井)	
第5回	「能力主義・自己責任論と多文化共生」1 グローバル資本主義と文化の多様性(森岡)	
第6回	「能力主義・自己責任論と多文化共生」2 競争原理の功罪(森岡)	
第7回	「能力主義・自己責任論と多文化共生」3 社会契約論を考える(森岡)	
第8回	多文化共生の実践事例(伊井・ゲストスピーカー)	
第9回	日本社会と南米移民(山東)	
第10回	ブラジル日系移民社会の日本語教育(山東)	
第11回	多文化共生と言語(日本語)問題(山東)	
第12回	「教育の多様化」と「多様化の教育」(吉田)	
第13回	「グローバル化と多文化共生:一元化と多元化のあいだで」(吉田)	

第 14 回	「異文化の他者との出会いと対話：M.ブーバーの思想と人生」（吉田）	
第 15 回	全体のまとめ（伊井）	課題提出への準備
第 16 回	レポート提出	

成績評価方法

到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、

1. 多文化共生概念について自分自身の言葉を用いて説明できる。
2. 現実に多文化共生が阻害されている場面等を自ら発見する力をもつ。
3. 現実に多文化共生を行っている社会の価値や諸制度の意味を把握して自らの実践に用いることができる。

の3点を達成することが求められる。

成績を評価する方法は、最終のレポート試験と途中に課す考察レポート。成績評価に占める割合は、期末レポート（70%）、講義への参加度（報告など）（30%）である。

履修上の注意

頻繁にディスカッションがある

教科書

資料を適宜配布する。

参考文献

授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
家族社会学		乾 順子	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
現代日本の家族の諸課題、諸課題の解決のための地域社会との連携と家族支援を学ぶための科目である。少子高齢化している現代日本の人口と家族・世帯に関わる基礎的データ、日本の家族の歴史、婚姻・子育て・介護と家族生活の運営における諸課題、関連する諸政策、地域社会との連携（専門職による支援の必要性和連携の現状・諸課題を含む）等について、基本的な知識を修得させ、諸外国の政策や現状との比較を参考にしつつ、課題解決を目指す力を身につけさせる。
到達目標
1. 日本の現代家族に関する基礎的データを説明できること。 2. 家族が抱える主要な課題を理解すること。 3. 家族に関わる政策と地域社会における連携・支援の現状を説明できること。 4. 諸外国の家族に関わる政策と現状について、基礎的な知識を説明できること。 5. 家族が抱える課題の解決策を構想する力を獲得すること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション、家族が抱える課題の例示	
第2回	基礎データと基礎概念の理解（人口・世帯等）	指定テキストの事前学習 事後に政府統計データへのアクセスレポート①作成
第3回	前近代から近代への家族の変化	指定テキストの事前学習
第4回	第二次世界大戦後の家族政策と社会保障制度	指定テキストの事前学習
第5回	子育てと家族（現状と家族が抱える課題）	指定テキストの事前学習
第6回	子育てと家族（支援体制と地域の連携）	指定テキストの事前学習 事後に地域を選んでレポート②作成
第7回	子育てと家族（専門職と支援の意義）	指定テキストの事前学習
第8回	子育てと家族（諸外国の子育て支援）	指定テキストの事前学習 事後に国を選んでレポート③作成
第9回	ワーク・ライフ・バランスと家族（労働市場・政策・家事育児の現状と課題）	指定テキストの事前学習
第10回	婚姻と家族（単独世帯・ステップファミリー）	指定テキストの事前学習
第11回	高齢者と家族（現状と家族が抱える課題）	指定テキストの事前学習
第12回	高齢者と家族（支援体制と地域の連携）	指定テキストの事前学習
第13回	支援を必要とする家族と地域（ひとり親・要保護児童家庭など）	指定テキストの事前学習
第14回	支援を必要とする家族と地域（高齢者・貧困世帯など）	指定テキストの事前学習 事後に支援課題を選んでレポート④作成

第 15 回	まとめ	
第 16 回	試験	

成績評価方法
授業目標の 1 ～ 5 の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 日本の現代家族に関する基礎的データを説明できること。 2. 家族が抱える主要な課題を理解すること。 3. 家族に関わる政策と地域社会における連携・支援の現状を説明できること。 4. 諸外国の家族に関わる政策と現状について、基礎的な知識を説明できること。 5. 家族が抱える課題の解決策を構想する力を獲得すること。 の 5 点を達成することが求められる。成績は、レポート①～④（40%）、授業での積極的姿勢（20%）、期末試験（40%）で評価する。
履修上の注意
関連科目：ジェンダーと社会
教科書
テキストを指定する。授業中に追加で資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
教育社会学		西田芳正	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	1 後	選択	講義

授業概要
人間形成にとって重要な役割を果たしてきた家族、仲間集団、地域社会について、過去との比較を通して今日的な特徴、問題について理解し、続いて今日の学校教育が抱えるさまざまな問題を把握することを目指す。また、今日深刻な社会問題として注目を集めている不平等問題を重要な切り口とし、特に貧困・生活不安定層の子ども・若者の現状と背景、支援策についても検討する。
到達目標
教育を社会との関連で捉え、同時に教育に関する常識的な見方を批判的に捉え直す姿勢を身につける。特に教師を志望する学生には、変化する社会（家族、地域）のなかでの学校教育の位置と役割を認識し、教師として果たすべき責務と方策を考え実践する力量を形成する。具体的には、以下の能力を身につけることを達成目標とする。 1. 教育が果たす機能と学校教育の性格について説明ができること。 2. 社会の変化が人間の成長に対して及ぼす影響と諸問題について説明ができること。 3. 貧困・排除問題と学校教育が担うべき課題について説明ができること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション；自己紹介、自身の問題関心の紹介と、講義概要を説明する。	関連する文献をその都度紹介する
第2回	1. 社会化と学校；社会化について概説し社会化の専門機関としての学校について検討。	
第3回	2-1. 伝統的村落社会の人間形成(1)；伝統的村落社会における人間形成の仕組みを概説。	
第4回	2-2. 伝統的村落社会の人間形成(2)；子ども期・若者期を中心に紹介する。	
第5回	3-1. 家族の変容と人間形成（1）；家族における人間形成の特徴を検討。	
第6回	3-2. 家族の変容と人間形成（2）；今日の家族が直面する問題状況を整理、検討する。	
第7回	4. 遊びと仲間集団；遊びと仲間集団の意義を検討した後、遊び空間復活の取り組みを紹介。	
第8回	5. 学校・学級の組織と文化；学校組織、教師文化と生徒文化、教師生徒関係について検討。	

第9回	6-1. 不平等と教育（1）選抜・配分、再生産の装置としての学校	
第10回	6-2. 不平等と教育（2）再生産の理論	
第11回	6-3. 不平等と教育（3）日本における貧困と教育	
第12回	6-4. 不平等と教育（4）マイノリティと教育	
第13回	6-5. 不平等と教育（5）学校における排除と「排除に抗する学校」	
第14回	7. 教育問題の社会学；非行・いじめ・不登校と教育問題の構築過程	
第15回	10. 地域と学校、全体のまとめ	
第16回	期末試験	

成績評価方法

到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、

1. 教育が果たす機能と学校教育の性格について説明ができること。
2. 社会の変化が人間の成長に対して及ぼす影響と諸問題について説明ができること。
3. 貧困・排除問題と学校教育が担うべき課題について説明ができること。

の3点を達成することが求められる。

成績は、期末試験（70%）、各授業で提出する小レポート（30%）で評価する。

履修上の注意

適宜指示します。

教科書

授業中に資料を配布する。

参考文献

西田芳正『排除する社会・排除に抗する学校』大阪大学出版会、2012年

志水宏吉監修・若槻健・西田芳正編集『教育社会学への招待』大阪大学出版会、2010年

授業名称		担当教員氏名	
教育福祉と健康		吉武信二	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
第1週はガイダンス。ここでこの授業の意義や展開計画について説明します。第2週以降、身体の代謝の仕組みとウエイトコントロール、効果的なダイエット(食事のタイミング)、ダイエット効果を上げる意外な食品、むくみと冷え性予防、身体に危険なスポーツ方法、アルコールと健康などをテーマとして、主に身体内での代謝メカニズムの学習を中心に展開して行きます。例えば、食事量を減らさずに体脂肪を減らす食べ方は？やっちはいけないダイエットとは？むくみと冷え性に効果的な体操は？早朝のスポーツはどうして危険？アルコールに酔うのはなぜ？など、日常の身近なところからアプローチし、受講生の素朴な質問にできるだけ答えながら進めて行きます。そしてこれらの基礎知識を踏まえて、各人が今後具体的にどんな生活習慣を身につけていくべきかを検討します。これまでの自分や支援される人の生活について反省や検証を行うだけでなく、これからの健康生活の実践や支援に際し、より効果的な方法を検討するのに役立つ内容を提供したいと思います。特に専門的な支援者にならない人でも、身近にいる家族や友人、将来的には自分の子どもや高齢者の世話をを行う機会がある場合、この授業で得たことが活かせると思われます。
到達目標
テーマは「心身の健康に必要な食生活と運動生活」の追究。教育福祉の立場から、効果的な健康支援を実践するためには、健康を維持増進するための基本的な原理原則を理解しておくことが必要です。例えば、病気にかかりにくい心身の状態をできるだけキープするには、日常生活の中で心がけるいくつかのポイントがあります。この授業では、健康やダイエットに関する誤った情報が氾濫している現状を踏まえ、科学的な根拠に基づいた正しい理論を理解し、人々の健康生活を考える上で有益となる知識の習得をめざします。また、個人個人に合った正しい方法（健康法や生活習慣）を検討し、実践して行くための計画にもアプローチします。さらに、身体活動が健康生活に対してどのような影響を及ぼすのかについても言及し、効果的なスポーツへの取り組み方について理解を深め、将来専門的知識を備えた健康支援者となるための能力向上を目標とします。 (達成目標) 1.健康支援・実践に必要となる基礎的・専門的知識を修得する。 2.修得した知識を効果的に活用・実践できる能力を養成する。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	授業全般ガイダンス,教育福祉と健康の概念,代謝面からのアプローチ,食事と運動,嗜好品(コーヒー・アルコール・たばこなど)の影響	健康の概念,代謝,健康支援
第2回	やっちはいけないダイエット,摂食障害(拒食症・過食症など)とリバウンドの原因,下剤ダイエットの恐怖	摂食障害,自律神経の働き,ダイエットによるリバウンド

第3回	身体のエネルギー代謝の仕組み,目的別ウエイトコントロール,体脂肪燃焼と蓄積のメカニズム	5大栄養素の体内における変化と吸収,糖と脂肪のエネルギー代謝
第4回	ダイエットに効果的な生活リズムの追究(食事・運動・休養・睡眠のタイミング)	基礎代謝・運動代謝・エネルギー代謝
第5回	体脂肪燃焼に貢献する食品と摂取のタイミング,低体温の防止,褐色脂肪細胞の働き	体温の維持とその役割,体脂肪燃焼効果
第6回	むくみをとって引き締まった身体の獲得,冷え性の予防	体液(血液・リンパ液)の循環による身体への働き
第7回	運動不足と高脂肪食生活による身体への影響,循環障害,エコノミークラス症候群	血液循環障害,濃縮型血液,生活習慣病
第8回	骨の健康について,骨粗鬆症の原因と予防,低下する若年者の骨密度	骨密度,骨粗鬆症,骨の発達の仕組み
第9回	早朝運動の危険,朝起こりやすい身体の傷害,ぎっくり腰,突然死	体内時計と身体活動
第10回	アルコールと健康,酔いのメカニズムと身体への影響,なぜ子どもの飲酒や一気飲みはいけないか?	身体のアアルコール分解能力,アルコールがもたらす脳への影響
第11回	喫煙と健康,主流煙と副流煙,予想以上に有害な実態	たばこに含まれる有害成分,身体に及ぼす影響
第12回	妊婦の運動と健康,母子ともに健康な生活を維持するための諸条件,夫にできることは?	出産前後における心身の変化,運動と安静のタイミング,妊娠中毒症
第13回	基本的な病気の予防法,インフルエンザの予防と対策	細菌感染と免疫細胞
第14回	まとめI・ディスカッション(学生からの質問に対する回答、討議)	各自質問を準備・検討
第15回	まとめII・Q&A(生活の中にある疑問について検討)	各自質問を準備・検討
第16回	レポート提出	
		講義内容の理解を深めるため、各回の授業計画に関連する事項について、予習・復習をしておいて下さい。また、インターネットやテレビ番組など、一般のメディアで提供されている健康情報についても興味を持ってチェックし、その安全性や妥当性について考える習慣をつけることも授業時間外学習に含まれます。さらに、レポート作成のためにも、講義の内容が実際に自分の生活の中でどのように活用できるかを、その都度検討して下さい。

成績評価方法
授業目標（達成目標）の達成度で成績評価を行います。中でも授業で学習した知識を正しく理解しているか、修得した知識をどのように活用するか、あるいは実際に行った実践から正しい考察ができているかに着目し、その計画の妥当性や実践報告の内容を重視します。 成績は授業への参加度・取り組み姿勢（50%）と期末レポート（50%）から総合的に評価します。C（合格）となるための目安としては、最低限の正確な知識の修得とレポート提出（大きな誤りのない計画・実践力の修得）が必要となります。
履修上の注意
（関連科目）生涯スポーツ指導 （備考）第1回目の授業において、全体の授業計画および受講に際して必要な情報を提示します。
教科書
授業中に資料を提示する。
参考文献
吉武信二著「成功する自己採点式ダイエット-健康科学の立場からリバウンドしないセーフティダイエットを実践する-」（大学教育出版）

授業名称		担当教員氏名	
権利擁護論		濱島淑恵	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 前	選択	講義

授業概要
福祉サービスの利用者に対し、当事者の権利主張を代弁・擁護する支援が必要とされている。本講義では、社会福祉における権利擁護の理念（考え方）を学び、成年後見制度、日常生活自立支援事業等の権利擁護のための制度、支援の方法を学び、利用者本位の権利擁護のあり方についての理解を深めることを目的とする。
到達目標
1. 成年後見の制度について理解し、そのメカニズムや利用手続きを、利用者および家族に説明できるようになる。 2. 福祉対象者の権利擁護のあり方について、他の専門職と連携する上で、関係者に対し権利擁護の立場から必要な支援の方法を説明できるようになる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション	
第2回	社会福祉における権利擁護の概念	テキストを読み、キーワードを調べる。
第3回	社会福祉における権利擁護と民法	テキストを読み、キーワードを調べる。
第4回	社会福祉における権利擁護と社会福祉法－社会福祉法と各種法制度	テキストを読み、キーワードを調べる。
第5回	社会福祉における権利擁護と社会福祉法－法的諸問題	テキストを読み、キーワードを調べる。
第6回	社会福祉における権利擁護と社会福祉法－関連組織・団体・専門職	社会福祉における権利擁護と社会福祉法に関わるレポートをまとめる。
第7回	成年後見制度の概要	テキストを読み、キーワードを調べる。
第8回	成年後見制度の申請手続き	成年後見制度の申請手続き上の課題についてレポートにまとめる。
第9回	成年後見人の業務	テキストを読み、キーワードを調べる。
第10回	成年後見に関わる担い手	テキストを読み、キーワードを調べる。
第11回	成年後見制度をめぐる動向と課題	テキストを読み、キーワードを調べる。
第12回	日常生活自立支援事業の仕組み	意思決定支援についてレポートをまとめる
第13回	日常生活自立支援事業の現状と課題	日常生活自立支援事業の課題と地域連携のあり方をまとめる

第 14 回	権利擁護に関わる事例研究	提示された事例を読んで理解しておく
第 15 回	権利擁護に関わる事例研究	グループワークを踏まえ、望ましい支援方法をレポートにまとめる

成績評価方法	
到達目標の達成度にもとづき成績評価を行う。単位取得のためには、 1. 成年後見制度および日常生活自立支援事業について理解し、そのメカニズムや利用手続きを、利用者および家族に説明できるようになる。 2. 福祉対象者の権利擁護のあり方について、他の専門職と連携する上で、関係者に対し権利擁護の立場から必要な支援の方法を説明できるようになる。 の2点を達成することが求められる。 成績を評価する手段としては、授業態度、質問に対する回答、レポート内容、授業時間中の討議（発表および討議）を総合評価し、決定する。レポートの評価は、全体の4割。授業時間中の討議（発表および討議）3割。授業への積極的な貢献（授業態度の評価を含む）が3割とする	
履修上の注意	
適宜指示します。	
教科書	
資料を配布する	
参考文献	
権利擁護と成年後見制度(新・社会福祉士養成講座)中央法規出版	

授業名称		担当教員氏名	
障害者福祉論		田垣正晋	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
・障害概念と特性、実態調査からみる障害者の社会環境 ・障害者福祉の歴史 ・障害者福祉に関連する法律（障害者基本法、障害者総合支援法、身体障害者福祉法、知的障害者福祉法、精神保健福祉法、障害者雇用促進法、発達障害者支援法、障害者差別解消法、障害者虐待防止法） ・障害者とその家族 ・障害者施策に関する行政計画・家族支援、行政、専門職、当事者など多様な団体の役割とネットワーク
到達目標
障害の概念、特性を踏まえ、障害者とその家族をとまぐ社会環境を理解する。また、障害者福祉及び障害者観の現在までの展開、諸制度や関連法規の仕組みについて理解させる。到達目標は以下のとおり。 1. 障害概念と特性、障害者の日常生活及び社会環境、障害者福祉の歴史について説明できる。 2. 障害者福祉に関連する法律（障害者基本法、障害者総合支援法、障害者雇用促進法、障害者差別解消法、障害者虐待防止法等）の意義と課題を説明できる。 3. 障害者とその家族、障害者施策に関する行政計画、行政、専門職、当事者など多様な団体の役割とネットワークの現状と課題を具体的に説明できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	障害概念と特性	指定された文献の読解
第2回	障害者の日常生活及び社会環境	
第3回	障害者福祉の歴史	
第4回	障害者基本法、	
第5回	身体障害者福祉法と知的障害者福祉法	
第6回	精神保健福祉法と発達障害者支援法	
第7回	障害者総合支援法の基礎	
第8回	障害者総合支援法の展開	
第9回	障害者虐待防止法等	
第10回	障害者雇用促進法と関連法規	
第11回	障害者差別解消法の基礎	
第12回	障害者差別解消法の展開	
第13回	障害者基本計画と障害福祉計画	
第14回	家族支援、行政、専門職、当事者など多様な団体の役割とネットワーク	
第15回	まとめ	
第16回	定期試験	試験の準備と復習

成績評価方法
到達目標の達成度にもとづき成績評価を行う。単位取得のためには、 1. 障害概念と特性、障害者の日常生活及び社会環境、障害者福祉の歴史について説明できる。 2. 障害者福祉に関連する法律（障害者基本法、障害者総合支援法、障害者雇用促進法、障害者差別解消法、障害者虐待防止法等）の意義と課題を説明できる。 3. 障害者とその家族、障害者施策に関する行政計画、行政、専門職、当事者など多様な団体の役割とネットワークの現状と課題を具体的に説明できる。 の3点を達成することが求められる。 定期試験や授業中の課題、授業に対する積極的な参加の度合いを総合的に判断した上で評価する。
履修上の注意
関連科目：障害者関連の科目 備考：授業内容の順序は変更になることがある。
教科書
ない。配布資料がある。開講年度中に適切な書籍が刊行された場合、それを教科書に利用することがある。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
社会福祉運営論		吉原雅昭	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 後	選択	講義

授業概要
社会福祉士国家試験科目「福祉サービスの組織と経営」にあたる、本学の社会福祉の専門科目である。大部分のソーシャルワーカーは組織に所属して働いており、時間軸や業務過程全体を意識して組織的に仕事をすることが求められる。また、日々の業務を遂行しつつ、データに基づいて担当しているサービスを改善したり、新たに開発したり、新たな制度や政策案を構想することが、求められる。本科目は、以上のように組織的に仕事を進める能力を身につけることを目指す。
到達目標
1. 現場で起きている問題をデータに基づいて分析し、複数の解決策または事業案を起案し、それらを比較検討して選択できるようになる。 2. 決定した事業案を実施するためのスケジュールリングと予算案づくりができるようになる。 3. 実施したサービスや事業を事後評価し、それらの結果を改善活動に役立てたり、新たな制度や政策案を企画できるようになる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	福祉サービスに関わるさまざまな組織や団体における問題解決過程のモデル	配布資料に記されている課題に取り組む
第2回	福祉現場における問題の分析（演習）	
第3回	問題の定義と目標体系づくり（演習）	
第4回	サービスまたは事業の起案	
第5回	複数の事業案を比較検討して選ぶ（演習）	
第6回	業務のスケジュールリング、役割分担、進行管理	
第7回	社会福祉事業の事後評価（演習）	
第8回	社会問題の複雑性の理解に有効な、社会政策 (Social Policies) というものの見方	
第9回	制度の創設や改革の理解に必要な、政策決定過程というものの見方	
第10回	社会福祉予算の編成と執行過程に関する基礎知識	
第11回	ソーシャルワーカーの職務環境 1 我が国の社会福祉制度の諸特性（演習）	

第 12 回	ソーシャルワーカーの職務環境 2 我が国の地方自治制度の諸特性	
第 13 回	ソーシャルワーカーの職務環境 3 戦後の社会変動－都市化と産業化を中心に	
第 14 回	ソーシャルワーカーの職務環境 4 地方政治、政府間関係と地方分権改革	
第 15 回	本講のまとめ、試験対策、受講者による講義評価	14 回目までの配布資料を通読する
第 16 回	期末試験	

成績評価方法

到達目標の達成度で、成績評価を行う。単位を取得するための条件は、以下の 2 点である。

1. 問題の分析、事業案の起案と決定、実施準備と事後評価に関する基本的な知識について、6 割以上の設問に正しく答えられること。
2. 社会政策、政策決定過程、財務過程、政府間関係、市民参加に関する基本的な知識について、6 割以上の設問に正しく答えられること。

成績評価の方法は、期末試験と、授業中におこなう演習課題の提出を合算して行う。

履修上の注意

適宜指示します

教科書

配布資料を用いて講義します。

参考文献

配付資料に記します。

授業名称		担当教員氏名	
地域福祉論 A		東根ちよ	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
本授業では、地域福祉の歴史、理論、主体の観点から、地域福祉に関する基礎的な知識と視点を会得します。 少子高齢社会の急速な進展、家族を取り巻く状況や企業による雇用保障に変化がみえるなか、現代日本にとって地域福祉はきわめて重要な考え方となっています。地域福祉は日々の生活に密着した福祉であり、より良い地域での生活や地域社会の実現をめざします。受講生には自らと密接にかかわるものとして授業内容をとらえ、地域福祉を取り巻く状況について理論的に理解を深めてもらいたいと思います。
到達目標
本授業では、地域福祉に関する基礎的な知識と視点を会得することをめざします。具体的には、つぎの3点の能力について身につけることを目標とします。 1. 社会情勢と結びつけて地域福祉が求められる背景について説明できる。 2. 地域福祉を取り巻く多様な考え方について概説できる。 3. 地域福祉を構成する基本的な要件を指摘することができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション、地域福祉への関心	事前学習として、各回のテーマについて調べておくとともに、適宜配布する資料に目を通しておいってください。事後学習として、各回の内容に対する各自の理解をまとめておいってください。 また、昨今は地域福祉に関連する報道があふれています。それらに敏感であるように日々心がけてください。なおかつ、授業理解の進行とともに報道のなかから「本当に問題なのはなにか」という視点を養うようにしてください。
第2回	地域福祉の現代的な位置づけ	
第3回	地域福祉の発展過程(1) 戦前地域福祉の源流	
第4回	地域福祉の発展過程(2) 社会福祉から地域福祉へ	
第5回	地域福祉の発展過程(3) 現代社会の変化と地域福祉	
第6回	地域福祉理論の系譜(1) 実践的研究と体系化	
第7回	地域福祉理論の系譜(2) 社会福祉との相対化	
第8回	ケアの現代的課題	
第9回	コミュニティケアの展開	
第10回	新たな地域福祉へ	

第 11 回	地域福祉の全体枠組み	
第 12 回	地域福祉と住民参加	
第 13 回	地域福祉の主体と福祉教育 (1) 福祉の学び支援	
第 14 回	地域福祉の主体と福祉教育 (2) 地域福祉の推進	
第 15 回	まとめ	
第 16 回	期末試験	

成績評価方法
到達目標の達成度にもとづき成績評価を行う。単位取得のためには、 1. 社会情勢と結びつけて地域福祉が求められる背景について説明できる。 2. 地域福祉を取り巻く多様な考え方について概説できる。 3. 地域福祉を構成する基本的な要件を指摘することができる。 の 3 点を達成することが求められる。 授業内のコメントシート (30%)、期末試験 (70%) により評価を行う。
履修上の注意
(関連科目) 地域福祉論 B (備考) 基本的に地域福祉論 B と両方履修すること。
教科書
特になし。資料を適宜配布します。
参考文献
上野谷加代子・松端克文・永田祐編『新版よくわかる地域福祉』ミネルヴァ書房、2019 年

授業名称		担当教員氏名	
地域福祉論 B		東根ちよ	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
本授業では、地域福祉の基礎的な理解をふまえて、地域福祉の実践主体、活動、援助方法について会得します。 地域福祉は日々の生活に密着した福祉であり、より良い地域での生活や地域社会の実現をめざします。とくに近年では地方分権化の潮流のもと、ますます地域福祉の形成と発展が求められています。そのようななか、住民、社会福祉協議会、行政、サービス提供機関、NPO 等、さまざまな実践主体が地域で発生する複雑な生活問題に対してアプローチしています。また、その活動の内容は、個人をサポートするものから地域に共通の問題に取り組むものまで、広がりを見せています。地域における模索のなかから生み出される現代の地域福祉の状況について、理解を深めていきます。
到達目標
本授業では、現代社会で展開される地域福祉の実践について会得することをめざします。具体的には、つぎの3点の能力について身につけることを目標とします。 1. 地域福祉の実践主体について説明できる。 2. 地域福祉の援助方法について概説できる。 3. 地域福祉の現代的課題と今後の展望について論じることができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション、地域福祉の枠組み	事前学習として、各回のテーマについて調べておくとともに、適宜配布する資料に目を通しておいってください。事後学習として、各回の内容に対する各自の理解をまとめておいってください。また、身近で展開される地域福祉の取り組みに敏感であるように日々心がけてください。なおかつ、授業理解の進行とともに、見聞きする取り組みと授業内容を結びつけて理解できるように努めてください。
第2回	地域福祉の実践主体ーコミュニティとアソシエーション	
第3回	民生委員・児童委員、保護司	
第4回	地域福祉と社会福祉協議会	
第5回	社会福祉協議会の現状と可能性	
第6回	福祉公社・協同組合	
第7回	ボランティア・NPO	
第8回	地域福祉の実践方法（1）地域アセスメント	
第9回	地域福祉の実践方法（2）計画づくり	

第 10 回	地域福祉の実践事例（1）住民自治組織の取り組み	
第 11 回	地域福祉の実践事例（2）小地域福祉活動とまちづくり	
第 12 回	今後の展望（1）災害支援と地域福祉	
第 13 回	今後の展望（2）社会的企業の展開	
第 14 回	今後の展望（3）地域トータルケアシステム	
第 15 回	まとめ	
第 16 回	期末試験	

成績評価方法
到達目標の達成度にもとづき成績評価を行う。単位取得のためには、 1. 地域福祉の実践主体について説明できる。 2. 地域福祉の援助方法について概説できる。 3. 地域福祉の現代的課題と今後の展望について論じることができる。 の3点を達成することが求められる。 授業内のコメントシート（30%）、期末試験（70%）により評価を行う。
履修上の注意
（関連科目）地域福祉論 A （備考）基本的に地域福祉論 A を履修してから受講すること。
教科書
特になし。資料を適宜配布します。
参考文献
上野谷加代子・斉藤弥生『地域福祉の現状と課題』放送大学教育振興会，2018 年 上野谷加代子・松端克文・永田祐編『新版よくわかる地域福祉』ミネルヴァ書房，2019 年

授業名称		担当教員氏名	
医療福祉論		隅田好美（令和6年度まで） 山野則子（令和7年度から）	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
医療福祉は、すべてのライフステージの疾患が対象となる。また、病いは身体的な問題だけではなく、当事者や家族に心理的苦痛や社会的苦痛をもたらす。病いをもつ人の支援には、医療職と福祉職、教育職などの多職種連携が不可欠となる。本講義では、まず病いをもつ人の支援に必要な制度・政策について概説し、その後、医療ソーシャルワーカーの支援について、具体的な事例を通して学ぶ。特に、動画を用いることでさまざまな疾患や障害を有する人の課題（身体的・心理的・社会的）の理解を深め、専門職としての支援について考える。
到達目標
保健医療福祉領域の援助を展開していくために必要な制度や保健医療サービスを理解し、医療ソーシャルワーカーとしての理論と知識、技術を理解することを目標とする。また、さまざまな疾患をもつ人々に即した心理社会的支援・生活支援について理解する。
到達目標
・医療ソーシャルワーカーの役割を説明することができる。 ・さまざまな医療的ニーズをもつクライアントの心理社会的課題の理解と援助の実践について説明できる。 ・相談援助活動において必要となる医療保険制度（診療報酬に関する内容を含む）や保健医療サービスについて説明できる。 ・保健医療サービスにおける専門職の役割と多職種協働の実践について説明できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	保健医療と福祉の概要	資料を熟読し、講義の内容を整理すること
第2回	医療サービスの概要	資料を熟読し、講義の内容を整理すること
第3回	医療機関・医療保険・診療報酬の概要	資料を熟読し、講義の内容を整理すること
第4回	保健医療サービスにおける専門職と連携	第V章を読んでおくこと。資料を熟読し、講義の内容を整理すること
第5回	脳卒中患者の支援（急性期・回復期病棟の連携）	第IX章を読んでおくこと。資料を熟読し、講義の内容を整理すること
第6回	医療ソーシャルワーカーの役割（経済的支援）	資料を熟読し、講義の内容を整理すること。 資料を熟読し、講義の内容を整理すること
第7回	医療ソーシャルワーカーの役割（退院支援・社会復帰支援）	第X章-11、第XI章-5を読んでおくこと。資料を熟読し、講義の内容を整理すること
第8回	患者の権利と医療的処置の自己決定（患者の主体性の尊重）	資料を熟読し、講義の内容を整理すること。

第9回	患者の主体性の尊重（認知症患者のパーソンセンタードケア）	第Ⅷ章を読んでおくこと。資料を熟読し、講義の内容を整理すること
第10回	がん患者への支援（病院内連携・ライフステージの課題）	第Ⅺ章を読んでおくこと。理論、制度と実践例を総合的に理解できるように復習をすること。
第11回	がん患者への支援（心理・社会的支援）	第Ⅺ章を読んでおくこと。理論、制度と実践例を総合的に理解できるように復習をすること。
第12回	最後の向かえ方の自己決定の支援と課題	第Ⅺ章、第Ⅵ章－7を読んでおくこと。理論、制度と実践例を総合的に理解できるように復習をすること。
第13回	難病患者への支援(療養生活・医療処置)	第Ⅹ章を読んでおくこと。理論、制度と実践例を総合的に理解できるように復習をすること。
第14回	医療処置が必要な人の療養生活の構築	第Ⅹ章を読んでおくこと。理論、制度と実践例を総合的に理解できるように復習をすること。
第15回	まとめ	理論、制度と実践例を総合的に理解できるように復習をすること。

成績評価方法

到達目標の達成度にもとづき成績評価を行う。単位取得のためには、

1. 医療ソーシャルワーカーの役割を説明することができる。
2. さまざまな医療的ニーズをもつクライアントの心理社会的課題の理解と援助の実践について説明できる。
3. 相談援助活動において必要となる医療保険制度（診療報酬に関する内容を含む）や保健医療サービスについて説明できる。
4. 保健医療サービスにおける専門職の役割と多職種協働の実践について説明できる。

の4点を達成することが求められる。

授業中の課題 40%、筆記試験 30%、レポート 30%で評価する。授業中の課題は授業終了時に提出する（ABCDで評価）。

履修上の注意

他の科目で学んだ制度、理論も踏まえて、総合的に病いをもつ人のニーズや支援について捉えること。

教科書

やわらかアカデミズム（わかる）シリーズよくわかる地域包括ケア、隅田好美、藤井博志、黒田研二編集、ミネルバ書房、2018

参考文献

厚生労働白書（資料編）最新版
その他は適宜紹介する

授業名称		担当教員氏名	
高齢者福祉論		濱島淑恵	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
高校福祉教員免許取得に必要な教科科目「高齢者福祉、児童福祉及び障害者福祉」の内容と、社会福祉士国家試験受験資格を得るために必要な科目「高齢者福祉」に対応し、それぞれの専門職に必要とされる、高齢者福祉に関する知識を講義する。
到達目標
具体的には、以下の能力を身につけることを達成目標とする。 1. 超高齢社会の特徴、高齢者の身体・精神の特徴、生活実態を説明できること。 2. 高齢者の医療、介護、福祉制度のしくみについて、サービスを必要とする人や家族に説明できること。 3. 介護保険制度のサービス実施過程を理解し、要介護高齢者にケアプラン案を作成できること。 4. 家族支援と高齢者ケアの要点について、説明できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	わが国の高齢化の実態：超高齢社会とその要因	該当する教科書の箇所を読んでおく。また、高齢者福祉の新聞を読んで関心を高めておく。
第2回	高齢者の生活実態：世帯構成・所得・住居等 高齢者を取り巻く社会環境：就労と社会参加等	
第3回	高齢者・家族の抱える諸問題：介護・高齢者虐待等	
第4回	高齢者の精神・身体的特徴	
第5回	高齢者医療および福祉制度の歴史的背景	
第6回	現在の介護、福祉制度	
第7回	現在の高齢者医療制度	
第8回	介護保険事業計画とサービス実施過程の実際	
第9回	介護保険における居宅サービスと地域密着型サービス	
第10回	介護保険における施設サービスと地域援助事業	
第11回	ケアマネジメントとケアプランの実際	

第 12 回	高齢者ケア(認知症ケアとターミナルケア(終末期ケア)) について	
第 13 回	家族支援と専門職の役割	
第 14 回	事例問題	
第 15 回	本講のまとめ	これまでの配布資料を復習しておく。
第 16 回	定期試験	

成績評価方法

到達目標の達成度にもとづき成績評価を行う。単位取得のためには、

1. 超高齢社会の特徴、高齢者の身体・精神的特徴、生活実態を説明できること。
2. 高齢者の医療、介護、福祉制度のしくみについて、サービスを必要とする人や家族に説明できること。
3. 介護保険制度のサービス実施過程を理解し、要介護高齢者にケアプラン案を作成できること。
4. 家族支援と高齢者ケアの要点について、説明できること。

の4点を達成することが求められる。

試験で評価する。単位を取得するには6割以上、達成できねばならない。

履修上の注意

適宜指示する。

教科書

『高齢者に対する支援と介護保険制度第4版』 ミネルヴァ書房、2018 年

参考文献

参考資料等講義の中で紹介する

授業名称		担当教員氏名	
セルフヘルプ・グループ論		松田博幸	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	3 後	選択	講義

授業概要
セルフヘルプ・グループ（自助グループ）は、生活上の課題をかかえた当事者が中心となって展開するグループであり、エンパワメント、リカバリー、ストレングス視点といった用語の広まりとともに、近年、社会福祉の実践活動において注目されている活動である。本講義においては、セルフヘルプ・グループをめぐる理論に加えて、さまざまな領域におけるセルフヘルプ・グループの活動の実際を事例として学ぶことに重点を置く。そして、そこから社会福祉の援助方法においてセルフヘルプ・グループがどのような意味をもつのか、専門職者としてどのような実践を展開すればよいのかを学ぶ。
到達目標
授業の目的セルフヘルプ・グループ論では、セルフヘルプ・グループ（自助グループ）が人の生活にとってどのような意味を持つのかを理解し、ソーシャルワークの援助関係においてどのようにして関係を築けばよいのかを学ぶ。授業の到達目標は 1. セルフヘルプ・グループ研究における基本的概念と基礎的理論を理解する。 2. セルフヘルプ・グループと援助専門職者との関係を理解する。 3. セルフヘルプ・グループの活動の実際と課題を理解する。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーションセルフヘルプ・グループ（SHG）について学ぶことの意義	毎回の授業を通して考えたこと、感じたことをまとめて、次の時間に提出する。
第2回	SHGをめぐる理論	
第3回	社会福祉援助とSHG	
第4回	さまざまな領域におけるSHG	
第5回	活動の実際と事例（1）（死別体験とSHG）	
第6回	活動の実際と事例（2）（断酒会）	
第7回	活動の実際と事例（3）（AA・NA）	
第8回	活動の実際と事例（4）（発達障害とSHG）	
第9回	活動の実際と事例（5）（吃音とSHG）	
第10回	要点の整理とまとめ（疑問に答える）	
第11回	活動の実際と事例（6）（疾病とSHG）	
第12回	活動の実際と事例（7）（精神障害とSHG）	
第13回	海外のSHG	
第14回	活動の実際と事例（8）（家族とSHG）	
第15回	要点の整理とまとめ（ポジショナリティとSHG）	
第16回	レポート提出	

成績評価方法
授業の到達目標の達成度で成績評価をおこなう。単位を取得するためには、 1. セルフヘルプ・グループ研究における基本的概念と基礎的理論を理解する。 2. セルフヘルプ・グループと援助専門職者との関係を理解する。 3. セルフヘルプ・グループの活動の実際と課題を理解する。 の3点を達成することが求められる。 成績の評価は、提出物の状況と内容、および、レポートによっておこなう。授業内容を基にして作成するレポートを課す。
履修上の注意
(関連科目) ソーシャルワーク論B
教科書
特に指定しない。必要な資料は講義の時に配布する。
参考文献
1.大阪セルフヘルプ支援センター編『セルフヘルプグループ』朝日新聞厚生文化事業団 1998 2.岡知史『セルフヘルプグループ－わかちあい・ひとりだち・ときはなち－』星和書店 1999 3.久保紘章・石川到覚編『セルフヘルプグループの理論と展開』中央法規 1998 4.A. H. カッツ著 久保紘章監訳『セルフヘルプ・グループ』岩崎学術出版社 1997 5.久保紘章『自立のための援助論－セルフヘルプ・グループに学ぶ－』川島書店 1988

授業名称		担当教員氏名	
子ども家庭福祉論		山野則子	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
子ども観の変遷と歴史を知り、子どもの権利条約について学ぶ。子どもの発達についても学び、現代の子育てをめぐる社会情勢を知り、課題について把握する。その上で、子ども家庭福祉制度の歴史や現在の支援策や制度、支援の実際について修得する。
到達目標
子どもを巡る問題は、児童虐待、いじめ、少年犯罪、日々絶えることなく起きている。現代的児童問題を考えていく上で、必要な知識を学習し、実際に起きている事柄を分析できる力をつけていくことを基本に講義する。具体的には、 ①児童・家庭の生活実態とこれを取り巻く社会情勢、福祉需要（子育て、一人親家庭、児童虐待及び家庭内暴力（D.V）の実態を含む。）について理解する。 ②子ども家庭福祉制度の歴史的発展過程を理解する。 ③子どもの権利について理解する。 ④子ども家庭福祉の実施体制について、また関連法について理解する。 ⑤子どもの発達について理解する。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	子ども家庭福祉の概念と枠組み／子どもを取り巻く環境	テキストにおいて当該章について事前に読んでくる。
第2回	子どもの成長と環境	
第3回	子ども家庭福祉のあゆみ	
第4回	子どもの人権・児童福祉の理念	
第5回	子ども家庭福祉の関連する法の経緯（①子育て支援と②相談体制の整備）	
第6回	①子育て支援の実際とその制度	
第7回	②相談体制の整備：児童相談所の役割と実際	
第8回	子ども家庭における課題の実際とその制度（児童虐待）	
第9回	子ども家庭における課題の実際とその制度（貧困）	
第10回	子ども家庭における課題の実際とその制度（非行）	

第 11 回	子ども家庭における課題の実際とその制度 (母子保健と障害)	
第 12 回	子ども家庭における課題の実際とその制度 (ひとり親家庭)	
第 13 回	子ども家庭福祉制度における専門職とその援助方法	
第 14 回	子ども・家庭福祉制度における制度連携、多職種連携、ネットワーキング	
第 15 回	まとめ	
第 16 回	テスト	

成績評価方法

授業の到達目標の達成度で成績評価をおこなう。単位を取得するためには、

- ①児童・家庭の生活実態とこれを取り巻く社会情勢、福祉需要（子育て、一人親家庭、児童虐待及び家庭内暴力（D.V）の実態を含む。）について理解する。
- ②子ども家庭福祉制度の歴史的発展過程を理解する。
- ③子どもの権利について理解する。
- ④子ども家庭福祉の実施体制について、また関連法について理解する。
- ⑤子どもの発達について理解する。

の 5 点を達成することが求められる。

平素の学習態度、試験、授業中の課題によって総合的に評価する。・授業で取り上げたキーワードについて、半分以上を説明できる。・子どもの社会的課題を取り上げて、その問題を説明できる。・援助方法と課題に応じて様々な制度や資源を説明できる。上記の 3 点を達成することが求められる。成績を評価する手段として、授業中課題、授業内の発言等の授業への参加態度と期末試験を用いる。参加態度が 20%、期末試験が 80%とする。

履修上の注意

（関連科目）社会福祉実習子ども家庭コースの学生は必ず受講すること。

（備考）授業への積極的参加を望む。児童相談所実習希望者は、履修すること。以下が、子ども関係、特に学校関係で専門性を高める推奨履修パターンである。他学類の学生も実習以外は、以下可能である。特に **PBL 演習（コラボレーション）**（教師、心理、福祉など専門職による協働を学ぶ）を望む方は、他学類の受講生でも可能な限り、積み上げて受講することを求める。2 年で子ども家庭福祉論、スクール・ソーシャルワーク概論、教育福祉フィールドワーク 2 やインターンシップの学校現場での活動、社会福祉実習 1、3 年でスクール・ソーシャルワーク演習、社会福祉実習 2（子ども家庭関係）、4 年でスクール・ソーシャルワーク実習指導と実習。

教科書
山野則子・武田信子（2015）「子ども家庭福祉の世界」有斐閣
参考文献
社会福祉小六法国民福祉の動向　ほか

授業名称		担当教員氏名	
児童養護論		伊藤嘉余子	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	3 前	選択	講義

授業概要
児童養護論では、以下の柱で授業を展開します。（1）児童養護の全体像の理解 （2）児童養護の歴史の変遷 （3）児童養護サービスの担い手（施設/里親） （4）児童養護実践を支える理論や理念 上記4つの内容は独立しているものではなく、重複したり反復して授業に登場したりします。
到達目標
児童養護論では、以下の3点を達成目標とする。 1）子どもにとっての「養育」「養育者」「親」「家族」「家庭」のもつ意味や価値について理解する。 2）日本における児童養護の現状について理解するとともに、必要な改善策や今後の課題について考察する。 3）日本において社会的養護を担っている施設等が果たしている役割や意義について理解するとともに、必要な改善策や今後の課題について理解する。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	授業ガイダンスとオリエンテーション授業の内容、進め方、成績評価の方法などについて説明する。（目標）児童養護論であつかう内容の全体像を把握する	事前にシラバスや教科書を読んでおく。
第2回	児童養護とは何か（目標）日本における児童養護の体系、全体像について理解するとともに、考え方の基礎となる理念や原則などについて学習する。	事前に教科書「児童養護の体系」を読んでおく。
第3回	子どもをとりまく養護問題（目標）子どもの貧困や子ども虐待など、要養護問題が発生する背景にあるものは何かについて学習し、その改善策について考察する。	事前に教科書と配布資料「要保護児童」「養護問題」を読んでおく。
第4回	児童虐待について考える（目標）日本における児童虐待の現状と課題について、統計資料や援助の実際（事例）を通して理解する。	事前に配布資料「子ども虐待の現状と課題」を読んでおく。
第5回	乳児院（目標）乳児院における養護の実際と今後の課題について学習する。	事前に教科書「乳児院」を読んでおく。
第6回	里親制度（目標）里親制度の全体像について	事前に教科書「里親制度」「養子縁組」を読ん

	理解するとともに、里親家庭における児童養護の実際について学習する。	でおく。
第7回	児童養護施設（目標）児童養護施設における養護の実際と今後の課題について学習する。	事前に教科書「児童養護施設」を読んでおく。
第8回	ホスピタリズム論争と施設養護（目標）ホスピタリズムとアタッチメントについて学ぶとともに、ホスピタリズム論争が現在の乳児院や児童養護施設実践に与えた影響について理解する。	事前に教科書「ホスピタリズム論」「家庭的養護」「小規模化と地域化」を読んでおく。
第9回	施設内虐待について考える（目標）施設内虐待の現状・実態と、施設内虐待が起こる背景・原因について理解し、有効な防止策について考える。	事前に教科書「施設内虐待」配布資料「職員のストレスとバーンアウト」を読んでおく。
第10回	障害児施設（目標）障害児施設における養護の実際と今後の課題について理解する。	事前に教科書「障害児施設」を読んでおく。
第11回	児童心理治療施設（目標）児童心理治療施設（情緒障害児短期治療施設）における養護の実際と今後の課題について理解する。	事前に教科書「情緒障害児短期治療施設」を読んでおく。
第12回	児童自立支援施設（目標）児童自立支援施設における養護の実際と今後の課題について理解する。	事前に教科書「児童自立支援施設」を読んでおく。
第13回	母子生活支援施設（目標）母子生活支援施設における養護の実際と今後の課題について理解する。	事前に教科書「母子生活支援施設」「DV防止のための支援」を読んでおく。
第14回	自立援助ホーム（目標）社会的養護経験者にとっての自立援助ホームの意義と、ここでの支援内容、今後の課題について理解する。	事前に「自立援助ホーム」「自立支援」を読んでおく。
第15回	施設退所時ケアとアフターケア（目標）退所（家庭復帰や自立）のアセスメントの現状と課題、退所後の支援のあり方（アフターケア）の現状と課題について理解する	事前に「自立支援とアフターケア」を読んでおく。
第16回	期末試験	
		1) 養護問題である子ども虐待や差別などに関するニュースや報道にアンテナをはっておいて下さい。2) 施設や里親に関する本（専門書でなくても、漫画や事例、体験手記など）を読んでおいて下さい。

成績評価方法
授業目標（達成目標）1）～3）の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、1）子どもにとっての「養育」「養育者」「親」「家族」「家庭」のもつ意味や価値について理解する。2）日本における児童養護の現状について理解する。3）日本において社会的養護を担っている施設等が果たしている役割や意義について理解する。上記3点について理解することが最低基準（C 評価のライン）として求められる。さらに、これらの現状理解に加えて、今後必要となる改善策等について考究・提案することができることが達成度として理想的である。成績を評価する方法として、期末試験と授業内レポートを用いる。成績評価に占める割合は、期末定期試験（60%）、授業内レポート（40%）である。
履修上の注意
（関連科目）養護内容演習 （備考）保育士資格必修
教科書
伊藤嘉余子・福田公教「社会的養護」ミネルヴァ書房
参考文献
授業のなかで随時紹介していきます。

授業名称		担当教員氏名	
乳児保育論		木曾陽子	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
保育の中でも、3歳未満児に対する保育に関する知識を学ぶための科目である。この授業では、乳児保育の意義・目的と歴史的変遷及び役割等について理解することを目指す。また、乳児院等も含めた多様な保育の場における乳児保育の現状と課題、3歳未満児の発育・発達を踏まえた保育の内容と運営体制、職員間・保護者・関係機関との連携・協働について理解することを目指す。
到達目標
本科目では、乳児保育の意義・目的を理解し、現在の乳児保育の現状と課題、3歳未満児の発育・発達を踏まえた保育のあり方について理解することを目指す。具体的な目標は、以下のとおりである。 1) 乳児保育に関する現在の課題を挙げ、根拠に基づき自分の意見が述べられる。 2) 3歳未満児の発育・発達を説明できる。 3) 3歳未満児の発育・発達に合わせた保育のあり方を考えられる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	・オリエンテーション ・乳児保育の意義・目的と役割①：乳児保育の意義・目的と歴史的変遷	乳児保育に関連するニュースや新聞記事を探す
第2回	・乳児保育の意義・目的と役割②：乳児保育の役割と機能、乳児保育における養護及び教育	乳児保育に関連するニュースや新聞記事を探す
第3回	・乳児保育の現状と課題①：乳児保育及び子育て家庭に対する支援をめぐる社会的状況と課題	ディベートに関する資料を集める
第4回	・乳児保育の現状と課題②：保育所における乳児保育、家庭的保育等における乳児保育	ディベートに関する資料を集める
第5回	・乳児保育の現状と課題③：保育所以外の児童福祉施設における乳児保育	ディベートに関する資料を集める
第6回	・乳児保育の現状と課題④：ディベート	ディベートの振り返りを行う
第7回	・3歳未満児の発育・発達を踏まえた保育①：前言語期の言語・コミュニケーション	授業で学んだ内容を発達年表に整理する
第8回	・3歳未満児の発育・発達を踏まえた保育②：伝達手段の発達	授業で学んだ内容を発達年表に整理する
第9回	・3歳未満児の発育・発達を踏まえた保育③：遊びの発達	授業で学んだ内容を発達年表に整理する
第10回	・3歳未満児の発育・発達を踏まえた保育④：運動と認知の発達	授業で学んだ内容を発達年表に整理する

第 11 回	・3 歳未満児の発育・発達を踏まえた保育⑤：運動と認知の発達に合わせた環境	3 歳未満児の保育の計画を立てる
第 12 回	・3 歳未満児の発育・発達を踏まえた保育⑥：乳児保育における計画・記録・評価とその意義	3 歳未満児の保育の計画を立てる
第 13 回	・乳児保育における連携・協働①：職員間、自治体や地域の関係機関等との連携・協働	最終レポートに関する資料を収集する
第 14 回	・乳児保育における連携・協働②：保護者との連携・協働	最終レポートに関する資料を収集する
第 15 回	・これまでの学びの振り返りとまとめ	最終レポートを執筆する
第 16 回	・最終レポートの提出	

成績評価方法

授業の到達目標の達成度で成績評価をおこなう。単位を取得するためには、

- 1) 乳児保育に関する現在の課題を挙げ、根拠に基づき自分の意見が述べられる。
- 2) 3 歳未満児の発育・発達を説明できる。
- 3) 3 歳未満児の発育・発達に合わせた保育のあり方を考えられる。の 3 点を達成することが求められる。

具体的な評価は

課題 1) ディベート (20%)：乳児保育の課題についてデータに基づき意見を述べる (目標 1 に対応)

課題 2) 発達年表 (20%)：3 歳未満児の発達を一覧表にまとめる (目標 2 に対応)

課題 3) 保育計画 (20%)：3 歳未満児の保育の計画を作成する (目標 3 に対応)

課題 4) 最終レポート (40%)：乳児保育に関するテーマのレポートを執筆する (目標 1-3 に対応)

履修上の注意

(関連科目) 乳児保育演習

(備考)

教科書

適宜、資料を配布する。

参考文献

適宜、指示する。

授業名称		担当教員氏名	
共生の思想と歴史		内藤葉子	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
現代世界の大きな特徴の一つは、諸価値の多元化と分裂である。わたしたちは、自分たちが善い・正しいと思っていることは、他の人・他の国・他の集団にとってもそうだと考えがちである。けれども実際には他の人や他の集団も、その人たちにとって善い・正しいとされる価値をもつ。自分たちと異なる価値をもつ相手とどう向き合うのか、どう共生していくのかという問いは、思想的にきわめて重要かつアクチュアルな問いである。本講義では、政治・法・制度・歴史・社会状況などにふみこみながら、諸価値間の衝突と調停の様相に迫る。それにより、現代世界が共生の問題をめぐってどのような課題に直面し、またそれに対してどのような政治的・制度的・思想的取り組みが為されているかについて学ぶ。さらに人間存在の複数性・脆弱性・偶然性をめぐる思想に触れながら、わたしたちの生や社会がもっと多様で豊かで開かれたものになりうるような在り方についても考察する。なお授業の進度と内容については、適宜調整・変更する。
到達目標
到達目標は以下のとおりである。 (1) 現代世界が共生の問題をめぐってどのような課題に直面しているかを説明できる。 (2) それに対してどのような政治的・制度的・思想的取り組みが展開されているかを説明できる。 (3) 共生の問題をめぐり、現代世界およびわたしたち自身の在り方について批判的に考察できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	ガイダンス	配布されたレジュメやノートを読み直して復習しておくこと。時事的なニュースやテーマにも関心をもつこと。また、興味をもったテーマについては、関連文献を積極的に講読することを推奨する。
第2回	ナショナリズムとシティズンシップ	
第3回	ヨーロッパの挑戦と危機（1）——欧州統合とその課題	
第4回	ヨーロッパの挑戦と危機（2）——難民問題	
第5回	ヨーロッパの挑戦と危機（3）——移民問題	
第6回	ヨーロッパの挑戦と危機（4）——ポピュリズム	
第7回	ヴェール論争（1）——フランス	
第8回	ヴェール論争（2）——ドイツ	
第9回	ヴェール論争（3）——リベラリズム再考	
第10回	人種の優劣をめぐる思考	
第11回	誰が生死を決定するのか——ナチス・ドイツ	
第12回	アイヒマン裁判と「悪の陳腐さ」	

第 13 回	ケアの倫理（１）——リベラリズム批判	
第 14 回	ケアの倫理（２）——依存と尊厳	
第 15 回	学力確認試験およびまとめ	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 （１）現代世界が共生の問題をめぐってどのような課題に直面しているかを説明できる （２）それに対してどのような政治的・制度的・思想的取り組みが展開されているかを説明できる （３）共生の問題をめぐり、現代世界およびわたしたち自身の在り方について批判的に考察できる の３点を達成することが求められる。成績は、授業中の小レポート（20％）および学力確認試験（80％）により総合的に評価する。
履修上の注意
適宜指示します。
教科書
特に指定しない。レジュメを配布する。
参考文献
授業中に指示する。

授業名称		担当教員氏名	
教育福祉フィールドワーク 1		東優子、吉原雅昭、神原知香	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	1 後	選択	演習

授業概要
教員 3 人によりクラス定員 20 人以下の 3 クラス並行で開講する。以下の項目について講義を受けたのち小集団に分かれて事例学習をおこなう：「問題」の把握方法、アセスメントと支援の焦点化、支援において活用しうる社会資源、支援の展開過程の理解。事例学習では、社会的排除、虐待（児童・高齢者）、家庭内暴力（DV）、低所得者、ホームレス等を扱う。
到達目標
本演習科目では、様々な「生きづらさ」を抱える人々の暮らしを教育福祉の視角で理解し、実際に支援を組み立ててゆく過程における基本技能を、小集団討議を活用した事例学習によって身につけることを達成目標とする。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	オリエンテーション事例説明・社会資源調べの方法自己紹介・初年次ゼミナールのふりかえり	
第 2 回	事例 1 ①：事例に関する説明と集団討議	
第 3 回	事例 1 ②：事例を支援するための社会資源調べ	社会資源に関する事前調べ
第 4 回	事例 1 ③：プレゼンテーション（事例の問題分析と支援案）	配布資料作成
第 5 回	事例 1 ④：事例の展開の予想	
第 6 回	事例 2 ①：事例に関する説明と集団討議	
第 7 回	事例 2 ②：事例を支援するための社会資源調べ	社会資源に関する事前調べ
第 8 回	事例 2 ③：プレゼンテーション（事例の問題分析と支援案）	配布資料作成
第 9 回	事例 2 ④：事例の展開の予想	
第 10 回	事例 3 ①：事例に関する説明と集団討議	
第 11 回	事例 3 ②：事例を支援するための社会資源調べ	社会資源に関する事前調べ

第 12 回	事例 3 ③：プレゼンテーション（事例の問題分析と支援案）	配布資料作成
第 13 回	事例 3 ④：事例の展開の予想	
第 14 回	レポート課題に関するフリー・ライティング & コンサルテーション	
第 15 回	レポート講評各クラスの Best Proposal 発表	
		検討する 3 つの事例について調べ、グループ発表の準備をすること。

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 ・グループワークに参画すること ・事例発表を行うこと ・上記の事例発表において、授業目標に掲げた基本的能力を習得していることを示すこと 成績を評価する方法として、事例発表とレポート課題の提出を用いる。成績評価に占める割合は、事例発表（20%×3 回＝60%）、レポート課題（40%）
履修上の注意
（関連科目）ソーシャルワーク概論、教育福祉フィールドワーク 2、教育福祉フィールドワーク 3（備考）本授業は、社会福祉士国家試験指定科目である。
教科書
特に指定しない。
参考文献
授業内で指定する

授業名称		担当教員氏名	
教育福祉フィールドワーク 2		松田博幸、嵯峨嘉子、神原知香	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 前	選択	演習

授業概要
(全 30 時間。教員 3 人によりクラス定員 20 人以下の 3 クラス並行開講)小集団に分かれ、「教育福祉フィールドワーク 1」で習得した基本技能を用いて、様々な社会集団や組織、コミュニティにおけるニーズを把握するための情報収集をおこなう。分析・検討した結果に基づく、問題解決のための計画の作成(通称「ことおこしプロジェクト」の開始)をおこなう。・フィールド体験本演習では、夏休みに 5 日間以上のフィールド体験を行うことを必修とする。その事前準備および事前レポートはこの「教育福祉フィールドワーク 2」の成績の対象とする。ただし、フィールド体験の実施および事後レポート(後期に開講する「教育福祉フィールドワーク 3」の第 1 回授業日に提出)は「教育福祉フィールドワーク 3」の成績の対象とする。
到達目標
授業の目的教育福祉的視点による相談援助に係る知識と技術について、実践的に習得するとともに、専門的援助技術として概念化し、理論化し、体系立てていくことができる能力を涵養する。授業の到達目標は 1. 問題の発見と予備的情報収集のスキルを身につける。 2. 状況に応じた調査技法を使いこなすことができるようになる。 3. 計画づくりのスキルを身につける。 4. プレゼンテーションのスキルを身につける。 5. 社会福祉や教育の現場において生じている問題や課題を的確に認識することができる。(「フィールド体験」)

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	オリエンテーショングループ／クラス分け問題の発見と予備的情報収集 1	第 1 回～第 16 回 「ことおこしプロジェクト」を進めるうえで必要な作業のうち、授業時間内に実施することができない作業については、授業時間外において、各グループ別あるいは個人別におこなう。 「フィールド体験」は夏季休暇中に実施するが、そのための準備作業(情報収集、フィールド体験先との交渉等)は個人別に授業時間外におこなう。
第 2 回	問題の発見と予備的情報収集 2	
第 3 回	問題の発見と予備的情報収集 3	
第 4 回	問題の発見と予備的情報収集 4	
第 5 回	第 1 ステップのプレゼンテーション	
第 6 回	調査の実施 1	
第 7 回	調査の実施 2	
第 8 回	調査の実施 3	
第 9 回	調査の実施 4	
第 10 回	計画の作成 1	
第 11 回	計画の作成 2	
第 12 回	プレゼンテーション 1	

第 13 回	プレゼンテーション 2	
第 14 回	プレゼンテーション 3	
第 15 回	要点の整理とまとめ	
第 16 回	レポート提出	

成績評価方法
授業の到達目標の達成度で成績評価をおこなう。単位を取得するためには、 1. 問題の発見と予備的情報収集のスキルを身につける。 2. 状況に応じた調査技法を使いこなすことができるようになる。 3. 計画づくりのスキルを身につける。 4. プレゼンテーションのスキルを身につける。 5. 社会福祉や教育の現場において生じている問題や課題を的確に認識することができる。（「フィールド体験」） 上記の 5 点を達成することが求められる。成績を評価する方法として以下のものを用いる。・授業参加度 45%（3%×15 回）・「ことおこしプロジェクト」への参加およびプレゼンテーション 25%・期末レポート 20%・「フィールド体験」事前レポート 10%。
履修上の注意
（関連科目）ソーシャルワーク概論、教育フィールドワーク 1、教育フィールドワーク 3、コミュニティとソーシャルワーク、相談援助演習
教科書
教科書は定めない。授業時間に毎回レジュメを配布する。
参考文献
参考書は適宜指示する。

授業名称		担当教員氏名	
教育福祉フィールドワーク 3		松田博幸、森岡次郎、神原知香	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	選択	演習

授業概要
（全 30 時間。教員 3 人によりクラス定員 20 人以下の 3 クラス並行開講）小集団に分かれ、「教育福祉フィールドワーク 2」で作成した計画の実行と成果に関する評価（通称「ことおこしプロジェクト」の実施と終結）をおこなう。また、成果についてのプレゼンテーションをおこない、計画から介入効果のアセスメントまでの報告書を作成する。
到達目標
授業の目的教育福祉的視点による相談援助に係る知識と技術について、実践的に習得するとともに、専門的援助技術として概念化・理論化し、体系立てていくことができる能力、および総合的かつ包括的支援と多職種連携・協働の実践力を身につけさせる。 授業の到達目標 1. 新しいシステムを創り出すために組織において活動を展開するスキルを身につける。 2. 効果測定／モニタリングのスキルを身につける。 3. プレゼンテーションのスキルを身につける。 4. 報告書作成のスキルを身につける。 5. 社会福祉や教育の現場において生じている問題や課題を的確に認識することができる。（「フィールド体験」）

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	オリエンテーション／計画の具体化	第 1 回～第 16 回 「ことおこしプロジェクト」を進めるうえで必要な作業のうち、授業時間内に実施することができない作業については、授業時間外において、各グループ別あるいは個人別におこなう。
第 2 回	「フィールド体験」振り返り	
第 3 回	アクションの展開／モニタリング 1（追加の情報収集）	
第 4 回	アクションの展開／モニタリング 2（新しいシステムを構想する）	
第 5 回	アクションの展開／モニタリング 3（新しいシステム構築のためのアクションを展開する）	
第 6 回	アクションの展開／モニタリング 4（新しいシステムの効果の把握）	
第 7 回	アクションの展開／モニタリング 5（効果に関する情報の分析）	
第 8 回	中間プレゼンテーション	

第 9 回	プレゼンテーション準備／報告書作り 1 (これまでの活動に関する情報の整理)	
第 10 回	プレゼンテーション準備／報告書作り 2 (プレゼンテーションや報告書作成のための内容の検討)	
第 11 回	プレゼンテーション準備／報告書作り 3 (プレゼンテーション準備や報告書作成のための具体的作業の実施)	
第 12 回	最終プレゼンテーション 1 (第 1 グループの報告・質疑応答)	
第 13 回	最終プレゼンテーション 2 (第 2 グループの報告・質疑応答)	
第 14 回	最終プレゼンテーション 3 (第 3 グループの報告・質疑応答)	
第 15 回	プロジェクト全体の振り返り：要点の整理とまとめ	
第 16 回	レポート提出	

成績評価方法

授業の到達目標の達成度で成績評価をおこなう。単位を取得するためには、

1. 新しいシステムを創り出すために組織において活動を展開するスキルを身につける。
2. 効果測定／モニタリングのスキルを身につける。
3. プレゼンテーションのスキルを身につける。
4. 報告書作成のスキルを身につける。
5. 社会福祉や教育の現場において生じている問題や課題を的確に認識することができる。
(「フィールド体験」)

上記の 5 点を達成することが求められる。成績を評価する方法として以下のものを用いる。・授業参加度 45% (3%×15 回)・「ことおこしプロジェクト」に関する提出物の内容およびプレゼンテーション 20%・期末レポート 25%・フィールド体験事後レポート 10%。

履修上の注意

(関連科目) ソーシャルワーク概論、教育フィールドワーク 1、教育フィールドワーク 2、コミュニティとソーシャルワーク、相談援助演習

教科書

教科書は定めない。授業時間に毎回レジュメを配布する。

参考文献

参考書は適宜指示する。

授業名称		担当教員氏名	
精神保健学		三田優子	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 前	選択	講義

授業概要
精神保健の基本的な視点と考え方を学ぶ科目である。この授業では、精神保健の基礎知識、ライフサイクルにおける精神保健、精神保健における個別課題への取り組みと実際、地域精神保健活動の実際、諸外国における精神保健を学ぶことによって基本的な知識を得ることを目指す。また、授業中に映像を視聴したり当事者ゲストによる講義を行うことで、実際の当事者体験を通して学ぶことを目指す。
到達目標
ライフサイクルごとの精神保健の課題や個別課題への取り組みについて、基本的な知識について問う問題に答えることができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	精神保健の概要	精神保健に関するクイズの復習
第 2 回	精神保健の意義と課題	関連する資料を収集する
第 3 回	乳幼児期までの精神保健、学童期の精神保健	テーマを 1 つ選んでミニレポートにまとめる
第 4 回	思春期・青年期の精神保健	関連する e ラーニング教材を用いて予習する
第 5 回	成人期・老年期の精神保健	関連する資料を収集する
第 6 回	職場における精神保健	関連する資料を収集する
第 7 回	アディクション関連対策の実際	関連する資料を収集し、ゲストへの質問を準備
第 8 回	精神障害当事者による体験発表（アディクションを抱えて生きるということ）	感想をミニレポートにまとめる
第 9 回	ひきこもり関連対策の実際	関連する資料を収集する
第 10 回	学校における精神保健	関連する資料を収集する
第 11 回	自殺をめぐる現状と課題	自殺対策白書、警察庁報告書を読む
第 12 回	精神障害当事者による体験発表（入院経験と地域での生活について）	感想をミニレポートにまとめる
第 13 回	地域における精神保健、ターミナルケアと精神保健	関連する資料を収集する
第 14 回	地域精神保健施策の概要、諸外国における精神保健の実際	関連する資料を収集する
第 15 回	全体のまとめ	定期試験の準備
第 16 回	定期試験	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 ・精神保健についての基本的知識について、半分以上の設問に正しく答えられること。 ・ライフサイクルにおける精神保健の基本的な知識について、半分以上の設問に正しく答えられること。 ・精神保健における個別課題への取り組みに関する基本的な知識について、半分以上の設問に正しく答えられること。 ・精神保健活動の実際に関する基本的な知識について、半分以上の設問に正しく答えられること。 ・地域精神保健と諸外国における精神保健に関する基本的な知識について、半分以上の設問に正しく答えられること。 の5点を達成することが求められる。 成績を評価する方法として、期末試験とミニレポートの提出（3回）を用いる。成績評価に占める割合は、期末試験（70%）、ミニレポート3回(30%)である。
履修上の注意
適宜指示します。
教科書
特に指定しない。 毎回の授業で資料を配付する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
特別支援教育		木曾陽子	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	3 後	選択	講義

授業概要
障がいのある幼児児童生徒に対する特別支援教育に関する基本的な視点と考え方を学ぶ科目である。この授業では、特殊教育から特別支援教育への歴史的変遷をたどり、特別支援教育の意義と対象の広がり、現在の特別支援教育の仕組みについての理解を目指す。また、障がいのある幼児児童生徒に対する理解と援助の方法、ユニバーサルデザインによる教育のあり方について理解を目指す。
到達目標
本科目では、特別支援教育の理念や現在の特別支援教育の仕組みを理解し、障害特性の理解を深め、具体的な教育方法を考えられるようになることを目指す。具体的には以下の3点を達成目標とする。 1. 特別支援教育の理念と仕組みを説明したうえで、現在の課題を説明できる。 2. 障害の特性を理解し、特性に応じた配慮や支援の方法を説明できる。 3. ユニバーサルデザインによる教育のあり方を考えられる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	・オリエンテーション ・特別支援教育の理念と意義	・特別支援教育に関する自身の関心を整理する
第2回	・特別支援教育の歴史的変遷 ・特別支援教育の仕組み	・ゲストスピーカーの著書を読み、質問を考える
第3回	・ゲストスピーカー「特別支援教育の実際と課題」	・ゲストスピーカーの講義の振り返りレポートを作成する
第4回	・ゲストスピーカーの講義の振り返り ・プレゼンの準備	・各自の関心のあるテーマに合わせたプレゼンの準備を行う
第5回	・特別支援教育の対象①知的障害	・各自の関心のあるテーマに合わせたプレゼンの準備を行う ・プレゼンの振りかえりレポートを作成する
第6回	・特別支援教育の対象②身体障害	・各自の関心のあるテーマに合わせたプレゼンの準備を行う ・プレゼンの振りかえりレポートを作成する
第7回	・特別支援教育の対象③学習障害	・各自の関心のあるテーマに合わせたプレゼンの準備を行う・プレゼンの振りかえりレポートを作成する

第 8 回	・特別支援教育の対象④注意欠如多動症	・各自の関心のあるテーマに合わせたプレゼンの準備を行う ・プレゼンの振りかえりレポートを作成する
第 9 回	・特別支援教育の対象⑤自閉スペクトラム症	・各自の関心のあるテーマに合わせたプレゼンの準備を行う ・プレゼンの振りかえりレポートを作成する
第 10 回	・特別支援教育の実際①特別支援学校	・各自の関心のあるテーマに合わせたプレゼンの準備を行う ・プレゼンの振りかえりレポートを作成する
第 11 回	・特別支援教育の実際②特別支援学級、通級指導教室	・各自の関心のあるテーマに合わせたプレゼンの準備を行う ・プレゼンの振りかえりレポートを作成する
第 12 回	・特別支援教育の実際③通常学級	・各自の関心のあるテーマに合わせたプレゼンの準備を行う ・プレゼンの振りかえりレポートを作成する
第 13 回	・特別支援教育の方法	・最終レポート作成に向けた資料収集を行う
第 14 回	・家庭や関係機関との連携	・最終レポートの執筆作業を行う
第 15 回	・これまでの振り返りとまとめ	・最終レポートの執筆作業を行う ・授業の振り返りをポートフォリオに入力する
第 16 回	・最終レポートの提出	

成績評価方法

到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、

1. 特別支援教育の理念と仕組みを説明したうえで、現在の課題を説明できる。
2. 障害の特性を理解し、特性に応じた配慮や支援の方法を説明できる。
3. ユニバーサルデザインによる教育のあり方を考えられる。

の3点を達成することが求められる。

具体的な評価は

課題1) 小レポート (40%) : ゲストスピーカーの講演や課題2のプレゼンを受けての理解確認レポートを提出 (目標1と2に対応)

課題2) プレゼン (30%) : 特別支援教育の対象と支援の方法に関してユニバーサルデザインを意識したプレゼンを実施 (目標2と3に対応)

課題3) 最終レポート (30%) : 特別支援教育の理念と仕組みを説明したうえで、現在の課題について本授業での学びをふまえた最終レポートを提出 (目標1に対応)

履修上の注意

適宜指示します。

教科書
適宜、資料を配布する
参考文献
適宜、指示する

授業名称		担当教員氏名	
教育の思想と歴史		森岡次郎	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	1 後	選択	講義

授業概要
教育の歴史および現代的課題について、文献や視聴覚教材などを用いて考察し、講義を行う。また、受講者には主体的・積極的な授業への参加を求め、発表やグループワークなどを行う場合もある。教育福祉学類の専門科目であると同時に、教育職員免許法施行規則に定める「教育の基礎的理論に関する科目」（「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」）に関する授業である。
到達目標
教育や人間に関する幅広い事象について、哲学的・歴史的に考察することができるようになる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	教育の思想や歴史を学ぶ意味は何か	各回とも、授業中に紹介する参考文献、配付資料等を次回授業までに読んでおくこと。
第2回	近代教育思想について（1）子ども・学校・教師・社会という関係	
第3回	近代教育思想について（2）近代公教育と教育思想	
第4回	近代教育思想とポストモダン教育学 - コメニウス・ペスタロッチ・ヘルバルトの教育思想と現代の教育	
第5回	子ども観の成立 - ルソーの思想と現代	
第6回	日本における子ども観の歴史	
第7回	学校とは何か - 近代教育制度の成立と展開	
第8回	学校とは何か - 日本における近代教育制度の受容と展開の歴史	
第9回	学校とは何か - 戦前の教育と戦後教育改革を思想史的に検討する	
第10回	学校における教師の役割（1）グループワーク「教師の役割とは？」	
第11回	学校における教師の役割（2）知識の伝達とコミュニケーションについて - 「学習の思想」	

第 12 回	「いのちの教育」について - 教育の基礎概念としての「いのち」	
第 13 回	学校・家庭・子ども・教師の関係の現在 - 教育を成り立たせる関係の現代	
第 14 回	現代課題としてのメディアリテラシーと人間形成 - 現代的課題を歴史的に理解する	
第 15 回	教育とアイデンティティ - 教育の現代的課題に教育哲学は応答できるか	

成績評価方法	
単位を取得するためには、・教育の思想と歴史に関する基礎的な知識を身につけること。・現代の教育課題を歴史的に位置づけ、哲学的に考察することができること。・自らの教育観について、歴史的・哲学的に考察することができること。上記 3 点を達成することが求められる。授業への参加状況、小レポートの提出状況（60%）と、期末レポート課題（40%）により評価を行う。授業で示された論点を踏まえ、哲学的・歴史的観点から、自らの考えを、自らの言葉で文章化できているかどうかを評価する。	
履修上の注意	
（関連科目） （備考）授業中に配付された資料、および紹介された文献などを読み、講義中の論点について、受講者各自が考えを深めた上で次の授業に出席する。授業の感想などを小レポート課題として課す。授業後には、自分の意見をしっかりと文章にまとめ、適宜提出すること。	
教科書	
特定のテキストは使用しない。プリント等を適宜配布する。	
参考文献	
授業中に指示する。	

授業名称		担当教員氏名	
教育の法と制度		伊井直比呂	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	1 後	選択	講義

授業概要
憲法・法律・施行規則・施行令などの関係の理解と、憲法を基点とする教育諸法規やそれに基づく行政の体系を修得する。次に、これらを前提に、いじめ、不登校などの具体的な問題事例について法や下級審判決および最高裁判例をもとに教員として公的に対応できる力を養う。さらに、子どもの権利条約や SDGs における「教育」に関する国際動向を踏まえ、最新の国際解釈などの理論を紹介して、教育の国際的取り組みに対応できる知見を養う講義を行う。
到達目標
1. 憲法ははじめ教育関係法令の内容および行政施策の基礎について理解していること。 2. 教育と人権との関係が正しく答えられること。 3. 学校での諸問題について、教員としての法的な対応について理解できていること。 4. 問題の所在と対応する法令等が結びつけられて考察できること。 5. 国際的な動向を踏まえて、教育に求められる価値や考え方が理解できていること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	講義の全体構造と目標	資料を読みまとめる
第 2 回	憲法が求める教育－26 条、14 条、13 条－	
第 3 回	最高裁判例に見る学習権の意義	
第 4 回	教育基本法（旧法・新法）と学校教育法の概説	
第 5 回	憲法・教育関係法と学校教育法施行規則のほか、施行令、政令、省令などの関係	
第 6 回	「人権としての教育」の意味を考える	
第 7 回	いじめ問題と諸法制・行政施策①	
第 8 回	いじめ問題と諸法制・行政施策② (Discussion)	
第 9 回	不登校と諸法制・行政施策	
第 10 回	体罰と諸法制・行政施策	
第 11 回	合理的配慮と諸法制・国際条約	
第 12 回	ディスカッションによる法的思考訓練	
第 13 回	子どもの権利条約と教育	
第 14 回	SDGs および持続可能性と教育の国際動向	
第 15 回	全体のまとめ	課題提出への準備
第 16 回	定期試験	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 憲法はじめ教育関係法令の内容および行政施策の基礎について理解していること。 2. 教育と人権との関係が正しく答えられること。 3. 学校での諸問題について、教員としての法的な対応について理解できていること。 4. 問題の所在と対応する法令等が結びつけられて考察できること。 5. 国際的な動向を踏まえて、教育に求められる価値や考え方が理解できていること。 以上5点を達成することが求められる。 成績を評価する方法として、最終のレポート試験と途中に課す考察レポート。成績評価に占める割合は、期末レポート（60%）、考察レポート(20%)、講義への参加度（報告など）(20%)である。
履修上の注意
頻繁にディスカッションがある
教科書
資料を適宜配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
ソーシャルワーク論A		伊藤嘉余子	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
(全 15 回)・相談支援の基盤となる理念・相談支援の原理・原則・専門的・非専門的支援者の役割と機能・ミクロ・ソーシャルワークのプロセス・諸理論とその相談場面への応用
到達目標
社会福祉の支援方法(ソーシャルワーク)のうち、個人や家族というミクロレベルの対象への直接的な相談支援(ミクロ・ソーシャルワーク)の方法について、理念とそこから導き出される原理・原則、支援者が果たす役割を学ばせる。また、相談支援のプロセスと、理論の具体的な応用について理解を深める。具体的には、以下の能力を身につけることを達成目標とする。 1) 自己理解の必要性を認識し、個人的及び専門職としての自己覚知を深める 2) ミクロ SW における援助関係構築のプロセスと構造について理解する。 3) 受容・共感を軸とするコミュニケーションスキルを習得する。 4) エンパワメント・アプローチとストレングスモデルを理解する。 5) ミクロ SW のプロセスを理解し、アセスメントに必要なスキルを習得する。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	オリエンテーション、授業概要、方法、評価などに関する説明(目標) ソーシャルワークの展開過程と本講義内容との関連性について理解する	事前にシラバスと教科書の「はじめに」を読んでおく
第 2 回	専門職：ソーシャルワーカーとしての自己覚知(目標) エゴグラムによる自己理解を通して、自分のストレングスを見つけるとともに、援助者としての自己イメージとのギャップを把握する	事前に配布資料「なぜ自己理解が必要か」を読んでおく
第 3 回	成育歴からの自己理解と他者理解(目標) ジェノグラムの作成を通して、家族システム理論による自己理解・家族理解のプロセスを学ぶ	事前に配布資料「エコシステム理論」を読んでおく
第 4 回	当事者理解の視点とアセスメント演習(目標) 自身の性格・価値観の形成プロセスの理解を通して、他者の価値観の尊重や関わり方で必要となる工夫について考える	事前に配布資料「まちで建設する社会福祉施設の優先順位」を読んでおく

第5回	ナラティブ・モデルとライフストーリーワーク(1)(目標)社会構成主義とナラティブ・モデルについて理解を深める	事前に配布資料「ナラティブ・モデル」を読んでおく
第6回	ナラティブ・モデルとライフストーリーワーク(2)(目標)事例や演習を通して「ドミナント・ストーリー」から「オルタナティブ・ストーリー」への再著述について学ぶ	事前に配布資料「ライフストーリーワーク」を読んでおく
第7回	バイステックの7原則と援助関係構築「受容」「共感」を中心に(目標)援助関係構築の原則について「受容」「共感」の難しさと大切さを中心に理解する	事前に配布資料「若い女性と水夫」を読んでおく
第8回	認知療法・認知再構成技法とエンパワメントとの関連性(目標)認知再構成技法について理解し、ボキャブラリーと発想の豊かさ・創造力の重要性について体験的に学ぶ	事前に配布資料「認知再構成技法」を読んでおく
第9回	エコロジカル・システム・アプローチ(目標)家族支援におけるシステム理論の活用について事例を通して学ぶ	事前に配布資料「家族システム理論」を読んでおく
第10回	コミュニケーション技法(目標)「言語コミュニケーション」と「非言語コミュニケーション」の特性について理解し、自分のコミュニケーションの傾向について自己理解を深める	事前に配布資料「言語と非言語」を読んでおく
第11回	面接の技法「話の聴き方」(日頃の自己の会話の振り返り)(目標)面接ロールプレイを通じて、望ましい話の聞き方や相談面接の在り方について考察する	事前に配布資料「話の聞き方」を読んでおく
第12回	相談面接の演習「当事者の声を聴く」相談面接のありかた(目標)声にならないクライアントの心の声を聞き取るために必要な援助者の姿勢やスキル、感性について考える	事前に配布資料「ブタとハチ」を読んでおく
第13回	SOAP記録とプランニング演習(1)(目標)SOAP書式を使ったアセスメント・プランニングについて経験的に学習する	事前に配布資料「SOAP記録とは」と、事例「Aさんの相談」を読んでおく
第14回	SOAP記録とプランニング演習(2)(目標)SOAP書式を使ったアセスメント・プランニングのメリットと限界について理解する	事前に、Aさんの事例への援助計画をSOAP書式を用いて完成させておく
第15回	前期のまとめ(目標)半年間の講義を振り返り、自分なりの「ソーシャルワークの理解度」について考える	事前に、半期間の授業資料に目を通しておく

		○ほぼ毎週、授業時に「演習」を行います。 ○ときどき、宿題を出します。必ず行ってから授業に臨んで下さい

成績評価方法	
授業目標（達成目標）の1～5の達成度で成績評価を行う。単位を習得するためには、1）自己理解の必要性を認識し、個人的及び専門職としての自己覚知を深める2）マイクロSWにおける援助関係構築のプロセスと構造について理解する。3）受容・共感を軸とするコミュニケーションスキルを習得する4）エンパワメント・アプローチとストレングスモデルを理解する。5）マイクロSWのプロセスを理解し、アセスメントに必要なスキルを習得する。上記5点を達成することが求められる。 成績を評価する方法として、授業内の小レポートと最終レポート課題を用いる。成績評価に占める割合は、小レポート（40%）、最終レポート（40%）、授業内の演習（ロールプレイやグループ討議等）への貢献度（20%）とする。	
履修上の注意	
適宜指示します。	
教科書	
伊藤嘉余子「相談援助」青踏社	
参考文献	
授業のなかで随時紹介します。	

授業名称		担当教員氏名	
ソーシャルワーク論B		松田博幸	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	3 前	選択	講義

授業概要
ソーシャルワーク論Bでは、人が社会において生活を営む上で集団（グループ）がどのような意味を持つのかを理解し、他の援助技術との関係をふまえて、グループワークを展開するための価値・知識・技法を学ぶ。グループワークの対象、メンバー間の力動（交互作用）をめぐる理論、価値、モデル、歴史を学んだ上で、グループワークの過程を展開するための知識と技術を学ぶ。グループワークに必要な知識として、社会心理学等の周辺領域における理論についても学び、より豊かな専門職的実践活動が展開できるようにする。さらに、グループワークに必要な技法として、コミュニケーションスキルを含む、より実践的な技法を取り上げ、実際にプログラムを開発することを通して、専門職者として必要な技法の習得を目指す。
到達目標
授業の目的ソーシャルワーク論Bでは、人が社会において生活を営む上で集団（グループ）がどのような意味を持つのかを理解し、他の援助技術との関係をふまえて、グループワークを展開するための価値・知識・技法を学ぶ。授業の到達目標は 1. グループの特性について理解する。 2. グループワークのモデルについて理解する。 3. グループワークの歴史について理解する。 4. グループワークの過程について理解する。 5. グループワークのプログラムを開発し、実施するためのスキルを身につける。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーションソーシャルワークにおけるグループワークの位置	事後学習授業で学んだポイントを整理し、社会におけるグループワークへの関心を深めること。
第2回	グループの性質	
第3回	グループワークの実際（1）：S S T	
第4回	グループワークの実際（2）：サイコドラマ	
第5回	グループワークの実際（3）：社会的諸目標モデル	
第6回	グループワークの実際（4）：相互作用モデル	
第7回	グループワークの実際（5）：回復とグループワーク	
第8回	グループワークと社会	
第9回	グループワークの歴史	
第10回	グループワークの過程（1）：準備期	
第11回	グループワークの過程（2）：開始期	

第 12 回	グループワークの過程（３）：作業期／終結・移行期	
第 13 回	グループワークの方法（１）：アイスブレイキング	
第 14 回	グループワークの方法（２）：オープンダイアログ	
第 15 回	要点の整理とまとめ	
第 16 回	定期試験	

成績評価方法

授業の到達目標の達成度で成績評価をおこなう。単位を取得するためには、

1. グループの特性について理解する。
2. グループワークのモデルについて理解する。
3. グループワークの歴史について理解する。
4. グループワークの過程について理解する。
5. グループワークのプログラムを開発し、実施するためのスキルを身につける。

上記の 5 点を達成することが求められる。提出物の提出状況と内容、および、試験によって評価する。

履修上の注意

（関連科目）セルフヘルプ・グループ論
（備考）

教科書

特に指定しない。必要な資料は講義の時に配布する。

参考文献

黒木保博ほか著『グループワークの専門技術』中央法規 2001 年

授業名称		担当教員氏名	
ソーシャルワーク論C		東 優子	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	3 後	選択	講義

授業概要
ソーシャルワーク理論・実践モデルの変遷を概観することを通じて、総合的かつ包括的ソーシャルワーク実践の必須概念を習得させることを目的に、ソーシャルワークの対象、専門職の概念と範囲、専門職倫理、ソーシャルワークの理論と実践モデルの歴史的変遷、ソーシャルワーク実践における新しい潮流などを網羅する。
到達目標
本授業では、社会福祉士国家試験指定科目「相談援助の基盤と専門職」（新カリキュラム）に対応すべく、以下についての理解を深めることを目的とする。 1. 社会福祉士の役割（総合的かつ包括的な援助及び地域福祉の基盤整備と開発含む）と意義を理解する。 2. 精神保健福祉士の役割と意義を理解する。 3. 相談援助の概念と範囲について理解する。 4. 相談援助の理念について理解する。 5. 相談援助における権利擁護の意義と範囲について理解する。 6. 相談援助に係る専門職の概念と範囲及び専門職倫理について理解する。 7. 総合的かつ包括的な援助と多職種連携の意義と内容について理解する。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	ソーシャルワークの対象として人と社会(1)：はじめに	授業ノートを読み返して内容をしっかり理解するよう努め、授業中に紹介された内容を、さらに自分で調べることで深化させる。
第2回	ソーシャルワークの対象として人と社会(2)：社会福祉と人間福祉	
第3回	ソーシャルワークの対象として人と社会(3)：Controversial な話題	
第4回	ソーシャルワーカーの役割と意義	
第5回	相談援助に係る専門職	
第6回	専門職と職業倫理（1）：倫理綱領を読み解く	
第7回	専門職と職業倫理（2）：倫理的ジレンマ	
第8回	近代社会の成立とソーシャルワークの萌芽	
第9回	専門職者の登場と批判	

第 10 回	診断主義と機能主義	
第 11 回	理論モデルの多様化	
第 12 回	ソーシャルワークの再編と統合化	
第 13 回	生活モデルとエコロジカル・ソーシャルワーク	
第 14 回	新しい潮流	
第 15 回	まとめ	
第 16 回	期末試験	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 社会福祉士の役割（総合的かつ包括的な援助及び地域福祉の基盤整備と開発含む）と意義を理解する。 2. 精神保健福祉士の役割と意義を理解する。 3. 相談援助の概念と範囲について理解する。 4. 相談援助の理念について理解する。 5. 相談援助における権利擁護の意義と範囲について理解する。 6. 相談援助に係る専門職の概念と範囲及び専門職倫理について理解する。 7. 総合的かつ包括的な援助と多職種連携の意義と内容について理解する。 の 7 点を達成することが求められる。 成績を評価する方法として、小テスト（10 回）と期末試験を用いる。成績評価に占める割合は、小テスト 25%、期末試験（75%）。
履修上の注意
（関連科目）ソーシャルワーク概論 （備考）なし
教科書
適宜、資料を配付します。
参考文献
適宜、資料を配付します。

授業名称		担当教員氏名	
コミュニティとソーシャルワーク		東根ちよ、塩田祥子、鈴木大介	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	3 前	選択	演習

授業概要
地域を基盤とする支援、地域福祉の基盤整備と開発に関する事例を活用した実技指導（地域住民に対するアウトリーチとニーズ把握、地域福祉の計画、ネットワーキング、社会資源の活用・調整・開発、サービスの評価）を通じて、地域におけるソーシャルワークの展開方法について学びます。20 人以下のクラスに分かれて演習を行います。
到達目標
本授業では、地域で展開するソーシャルワークの方法論や援助技術について、少人数の演習形式で学び、習得することをめざします。具体的には、つぎの3点について身につけることを目標とします。 1. 地域を基盤としたソーシャルワークについて説明できる。 2. 地域の生活課題の把握ができるようになる。 3. 地域を基盤とした個別支援や地域支援の進め方を説明できる。 相談援助の知識と技術に関わる他の科目との関連性も視野に入れながら、社会福祉士に求められる相談援助の知識と技術について実践的に習得するとともに、専門的援助技術として概念化、理論化し体系立てていくことができる能力を涵養します。本演習では、特に地域とのかかわりについて学びます。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	演習の進め方について	事前学習として、授業中に指定するテーマについて調べておくとともに、授業中に指定する課題を実施し期日までに完成させてください。なお、課題がグループ作業となる場合には、対話しながら進めることを意識してください。事後学習として、各回の内容に対する各自の気づきをまとめておいてください。
第2回	地域援助技術（コミュニティワーク）の考え方	
第3回	地域援助技術の歴史	
第4回	地域のニーズについて（個人のニーズと地域共通のニーズ）	
第5回	地域でのニーズ把握	
第6回	アウトリーチの展開	
第7回	住民組織との関係づくり	
第8回	住民座談会の方法	
第9回	地域での計画づくりの進め方	
第10回	計画をつくるための技法	
第11回	社会資源の構想と開発	
第12回	福祉機関とのネットワーキングの推進	

第 13 回	各種団体とのかかわりづくり	
第 14 回	サービス評価について	
第 15 回	ふりかえりとまとめ	

成績評価方法	
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 地域を基盤としたソーシャルワークについて説明できる。 2. 地域の生活課題の把握ができるようになる。 3. 地域を基盤とした個別支援や地域支援の進め方を説明できる。 の3点を達成することが求められる。 授業への参加状況、レポート等により総合的に評価します。到達目標の3点を基準に評価を行います。それぞれの項目の説明や把握が最低限できていることが単位取得の基準となります。	
履修上の注意	
(関連科目) 地域福祉論A、地域福祉論B (備考) 特になし。	
教科書	
特になし。必要があれば教員が適宜指示します。	
参考文献	
特になし。必要があれば教員が適宜指示します。	

授業名称		担当教員氏名	
相談援助演習		伊藤嘉余子、中本勝也、神原知香	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	3 前	選択	演習

授業概要
本授業は、個人・家族・小集団・地域社会等を対象とする多様な社会福祉援助のための具体的な方法や技術を体験的に学習することを目的としている。そのため、本授業では、ワーク、ロールプレイ、グループディスカッション、グループ作業など、体験・参加型の授業方法を多用し、これらの諸方法／技法の修得を目指す。授業方法の性質上、積極的な参加態度が求められる。本授業では、援助技術のうちでも、個人や家族などを対象とする対人的援助技術に焦点づけて、授業を展開する。具体的な授業内容を以下に示す。1 対人関係における非言語的コミュニケーション 2 対人関係における言語的コミュニケーション 3 援助的コミュニケーションの基本技法 4 援助的コミュニケーションの展開技法
到達目標
以下の4点を本授業の達成目標とする。 1) ミクロレベルソーシャルワークにおける多様な技法を理解する。 2) ミクロレベルソーシャルワークにおける基本技法および展開技法の一部を体験的方法で習得する。 3) メゾレベルソーシャルワークにおける多様な技法を理解する。 4) メゾレベルソーシャルワークにおける多様な技法を体験的方法で習得する。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	授業オリエンテーション自己紹介と他者紹介（目標）援助者として、自己紹介で伝えるべき情報、初対面で和ます会話などについて体験的に理解する。	事前にシラバスを読んでおく。自己紹介の準備をしておく
第2回	言語と非言語コミュニケーションの特性理解（目標）言語・非言語コミュニケーションの特性について理解し、その活用方法について学ぶ	事前に配布資料「言語と非言語コミュニケーション」を読んでおく。
第3回	言語的コミュニケーション（1）受容と共感（目標）相談面接における「クライアントの受容」「共感的傾聴」に必要な姿勢やスキルについて学習する	事前に配布資料「マイクロカウンセリング」を読んでおく。
第4回	言語的コミュニケーション（2）他者理解とアセスメント（目標）相談援助における他者理解と情報収集、集めた情報からの見立て（アセスメント）についてプロセスと重要点を理解する	事前に事例「Aさんからの相談」を読んでおく。
第5回	言語的コミュニケーション（1）他者受容と自己主張（目標）相談援助におけるクライエ	事前に事例「16歳で妊娠したAさんへの援助」を読んでおく。

	ントの受容と指導とのバランス、援助に自発的でないクライアントへの援助の在り方について学ぶ	
第6回	言語的コミュニケーション（2）ソーシャルワーク面接とマイクロカウンセリング技法（目標）ソーシャルワーク面接で用いるマイクロカウンセリング技法（繰り返し、要約、代弁、積極的関わり技法など）について体験的に理解する。	事前に配布資料「マイクロカウンセリング技法の体系」を読んでおく。
第7回	言語的コミュニケーション（3）情報の整理とグループワーク（目標）他機関連携とケース会議場面のロールプレイを通じて、情報収集と整理、ネットワーク会議の運営法について学ぶ	事前に配布資料「おもしろ村」を読んでおく。
第8回	言語的コミュニケーション（4）リーダーシップについて考える（目標）グループでの話し合いにおけるリーダーシップの在り方について考える	事前に配布資料「リーダーの資質」を読んでおく。
第9回	言語的コミュニケーション（5）コンセンサス実習（目標）多数決を使わずに合意形成を図る話し合いの在り方について体験的に学ぶ	事前に配布資料「コンセンサス実習」を読んでおく。
第10回	事例設定によるアセスメント（1）（目標）各機関がばらばらに持っているケースの情報を集約し、ニーズと援助目標を明らかにしていくプロセスを学ぶ	事前に資料「T 母子家庭への支援」を読んでおく。
第11回	事例設定によるアセスメント（2）（目標）母子家庭への短期（1 か月）援助計画を立てられるようになる	事前に、このケースが活用できる社会資源について調べてまとめてくる。
第12回	事例設定によるアセスメント（3）（目標）母子家庭への中長期（6 か月）援助計画を立てられるようになる	事前に、母子家庭の自立支援に関する社会資源について調べてまとめてくる。
第13回	事例設定によるプランニング（1）（目標）親子分離を必要とする児童虐待ケースの援助計画を立てる	事前に児童養護施設や一時保護所等について調べてまとめてくる。
第14回	事例設定によるプランニング（2）（目標）非行やDV がある子育て家庭への援助計画を立てる	事前に非行児童への支援に関する法制度やDV 支援に関する社会資源について調べてくる。
第15回	ソーシャルワークの援助過程とは全体の振り返り（目標）半年間の学びを振り返り、自分なりのソーシャルワークの理解度を確認する	これまでの授業で行った演習等の資料にすべて目を通し、可能であれば持参する。
第16回		事前に配付したレジュメや資料は授業時間外に読み、授業の準備をすること。フィールド

		体験の体験先の開拓や連絡調整は、各自授業時間外に行うこと。授業では、フィールド体験に関する悩みや課題に関する質問時間を設ける。また、必要に応じて、各自オフィスアワーなどに担当教員に相談すること。

成績評価方法	
授業目標（達成目標）の1～5の達成度で成績評価を行う。単位を習得するためには、1）ミクロレベルソーシャルワークにおける多様な技法を理解する。2）ミクロレベルソーシャルワークにおける基本技法および展開技法の一部を体験的方法で習得する。3）メゾレベルソーシャルワークにおける多様な技法を理解する。4）メゾレベルソーシャルワークにおける多様な技法を体験的方法で習得する。上記4点を達成することが求められる。 成績を評価する方法として、授業内の小レポートと最終レポート課題を用いる。成績評価に占める割合は、小レポート（40%）、最終レポート（40%）、授業内の演習（ロールプレイやグループ討議等）への貢献度（20%）とする。	
履修上の注意	
（関連科目）ソーシャルワーク概論、教育福祉フィールドワーク1・2・3、ソーシャルワーク論A・B （備考）	
教科書	
特に定めない。授業時間に毎回レジュメと関連資料を配布する。	
参考文献	
適宜指示する。	

授業名称		担当教員氏名	
社会福祉実習 1		東優子、西田芳正、吉原雅昭、三田優子	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 通	選択	実験・実習

授業概要
全 60 時間以上。社会福祉士国家試験受験資格の取得を目指す学生を対象にした法定実習を実施する。社会福祉現場における実習を通して、社会福祉士としてソーシャルワークを展開するのに必要な基本的な力を身につけさせる。
到達目標
ソーシャルワーク実習を通して、ソーシャルワークに係る基本的な価値観やソーシャルワークの現場における課題を理解させる。社会福祉士として求められる基本的な考え方や価値観を身につけさせるとともに、施設・機関の利用者がどのような状況において生活しているのか、そして、社会福祉士がどのようにそれらの人たちに関わっているのかを体験的に学ばせる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	実習の意義、心構え、実習方法等について学ぶ。	
第 2 回		
第 3 回	60 時間以上の、配属された施設、機関での実習を行なう。社会福祉士として求められる基本的な考え方や価値観を身につけ、施設・機関の利用者がどのような状況において生活しているのか、そして、社会福祉士がどのようにそれらの人たちに関わっているのかを体験的に学ぶ。	実習した内容を振り返り、課題を抽出して考察を深める。自分で掲げた実習課題が達成できているか、吟味する。
第 4 回		
第 5 回		
第 6 回		
第 7 回		
第 8 回		
第 9 回		
第 10 回		
第 11 回		
第 12 回		
第 13 回		
第 14 回		
第 15 回	配属された施設、機関での実習を振り返り、社会福祉士として必要な素養について考察する。	
第 16 回		

成績評価方法
実習現場からの意見、実習ノートの記録状況などから、各コース担当者が総合的に判断する。合格となるためには以下の3点を達成することが求められる。・相談援助に係る知識と技術について具体的かつ实际的に理解し実践的な技術等を体得している。・社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を身につけている。・関連分野の専門職との連携のあり方及びその具体的内容を実践的に理解している。
履修上の注意
(備考) 実習日は、コース別指導日および演習の授業日と重ならないように注意すること。
教科書
教科書：指導教員が適宜指示する。 配布資料：実習オリエンテーションで配布された「実習の手引き」の他、指導教員が適宜指示する。
参考文献
指導教員が適宜指示する。

授業名称		担当教員氏名	
社会福祉実習指導 1		東優子、西田芳正、吉原雅昭、三田優子、神原知香、仲野浩司郎、宮城明子	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
1	2 通	選択	演習

授業概要
全 15 時間。実習の配属先に応じて実習前指導・実習期間中の巡回指導・実習後指導を行う。演習型の授業を通して、社会福祉士としてソーシャルワークを展開するのに必要な基本的な力を身につけさせる。 社会福祉士として求められる基本的な考え方や価値観を身につけ、施設・機関の利用者がどのような状況において生活しているのか、そして、社会福祉士がどのようにそれらの人たちに関わっているのかを体験的に学ばせる。
到達目標
ソーシャルワーク実習に臨むにあたって必要な基本的な価値観を理解させる。また、自らがソーシャルワーク実習をおこなう施設・機関の利用者の状況や現場の課題を理解するために必要な知識を修得させる。実習後は、実習を通して修得したことを振り返ることを通して、ソーシャルワークに対する理解をさらに深めると同時に、社会福祉実習 2 におけるそれぞれの学習課題を明確化させる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	実習の意義、心構え、実習方法等について学ぶ。	
第 2 回		
第 3 回	実習先で展開されている実践やそれに関する制度についての知識、実習先の理解、実習計画の策定を行う。	実習先の施設や機関、関連する社会資源に関する情報を収集し、実習のための目標と課題を整理する。
第 4 回		
第 5 回		
第 6 回		
第 7 回		
第 8 回		
第 9 回		
第 10 回		
第 11 回		
第 12 回		
第 13 回		
第 14 回		
第 15 回	実習の振り返り、実習成果のプレゼンテーション、実習のまとめの冊子づくりを行う。	実習で学んだことを整理し、授業中に報告するための準備を行う。
第 16 回		

成績評価方法
到達目標の達成度にもとづき成績評価を行う。単位取得のためには、 (1) 相談援助実習の意義について理解する。 (2) 相談援助実習に係る個別指導並びに集団指導を通して、相談援助に係る知識と技術について具体的かつ实际的に理解し実践的な技術等を体得する。 (3) 社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を習得する。 (4) 具体的な体験や援助活動を専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる能力を涵養する。 の4点を達成することが求められる。 評価は、事前事後指導での取り組み姿勢などから、各コース担当者が総合的に判断する。
履修上の注意
適宜指示する。
教科書
教科書：指導教員が適宜指示する。 配布資料：実習オリエンテーションで配布された「実習の手引き」の他、指導教員が適宜指示する。
参考文献
指導教員が適宜指示する。

授業名称		担当教員氏名	
社会福祉実習 2		松田博幸、伊藤嘉余子、児島亜紀子、嵯峨嘉子、田垣正晋、東根ちよ、山野則子、濱島淑恵	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
4	3 通	選択	実習

授業概要
全 180 時間以上。実習先別に分けた 7 コースを各 1 人の教員が担当する。社会福祉士国家試験受験資格の取得を目指す学生を対象にした法定実習を、おもに集中型で実施する(実習配属先によっては分散型で実施する)。社会福祉現場における実習を通して、社会福祉士としてソーシャルワークを展開するのに必要な実践力を身につけさせる。
到達目標
社会福祉実習指導 1 および社会福祉実習 1 で修得したことを基礎として、さらにソーシャルワークに係る知識と技術について具体的かつ实际的に理解し実践的な技術等を体得させる。社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を身につけさせるとともに、関連分野の専門職との連携のあり方及びその具体的内容を実践的に理解させる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回～ 第 23 回	180 時間以上の、配属された施設、機関での実習を行なう。 1 機関・施設の概要の理解 2 実践に関わる社会資源や制度の理解 3 職業倫理と組織の一員としての役割と責任 4 機関・施設で展開されているプログラムの理解 (1) 基本的理解 5 機関・施設で展開されているプログラムの理解 (2) 実践的理解 6 利用者や関係者とのコミュニケーション (1) 基本的理解	実習した内容を振り返り、課題を抽出して考察を深める。自分で掲げた実習課題が達成できているか、吟味する。

	7 利用者や関係者とのコミュニケーション (2) 実践的理解 8 利用者や関係者との援助関係の形成(1) 信頼関係の形成 9 利用者や関係者との援助関係の形成(2) ニーズの把握 10 利用者や関係者との援助関係の形成 (3) 援助計画の作成 11 利用者や関係者との援助関係の形成 (4) 援助計画の実施 12 利用者や関係者との援助関係の形成 (5) 評価 13 多職種間連携およびチームアプローチ 14 集団を用いたソーシャルワーク(ファシリテーション) 15 地域における実践と社会資源の理解 16 他機関との連携の実際(1) ネットワーキング基本的理解 17 他機関との連携の実際(2) ネットワーキング実践的理解 18 地域における機関・施設の役割の理解 (アウトリーチ) 19 社会資源の活用・関係調整(コーディネーション、ネゴシエーション) 20 地域社会における社会資源の開発(ソーシャルアクション) 21 権利擁護活動 22 機関・施設の管理運営 23 実習成果のプレゼンテーション	

成績評価方法

実習現場からの意見、実習ノートの記録状況などから、各コース担当者が総合的に判断する。合格となるためには以下の3点を達成することが求められる。・相談援助に係る知識と技術について具体的かつ実際に理解し実践的な技術等を体得している。・社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を身につけている。・関連分野の専門職との連携のあり方及びその具体的内容を実践的に理解している。

履修上の注意
(備考) 実習日は、コース別指導日および演習の授業日と重ならないように注意すること。
教科書
教科書：指導教員が適宜指示する。 配布資料：実習オリエンテーションで配布された「実習の手引き」の他、指導教員が適宜指示する。
参考文献
指導教員が適宜指示する。

授業名称		担当教員氏名	
社会福祉実習指導 2		松田博幸、伊藤嘉余子、児島亜紀子、嵯峨嘉子、田垣正晋、東根ちよ、山野則子、濱島淑恵	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	3 通	選択	演習

授業概要
全 75 時間。実習の配属先に応じて各コース別指導(実習前指導・実習期間中の巡回指導・実習後指導)を行う。全体の授業においては、オリエンテーション、プレゼンテーション、振り返りを行う。演習型の授業を通して、社会福祉士としてソーシャルワークを展開するのに必要な実践力を身につけさせる。
到達目標
社会福祉実習指導 1 および社会福祉実習 1 で修得したことを基礎として、ソーシャルワーク実習の意義についてさらに理解を深めさせる。ソーシャルワーク実習に係る個別指導と集団指導を通じて、ソーシャルワークに係る知識と技術について具体的かつ実際に理解し実践的な技術等を体得させる。また、社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を習得させ、具体的な体験や援助活動を専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる能力を身につけさせる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回～ 第 30 回	実習前の事前学習として、実習先で展開されている実践やそれに関する制度についての知識、実習先の理解、実習計画の策定を行なう。事後学習として、実習の振り返り、実習成果のプレゼンテーション、実習のまとめの冊子づくりを行なう。 1 オリエンテーション（実習および実習指導の意義） 2 実習分野、地域に関する基本的理解（1） 分野、利用者に関する理解 3 実習分野、地域に関する基本的理解（2） 地域に関する理解	事前学習において、実習先の施設や機関、関連する社会資源に関する情報を収集し、実習のための目標と課題を整理する。事後学習において、実習で学んだことを整理し、授業中に報告するための準備をおこなう。

	4 社会福祉の現場の現状と課題（他職種の業務の理解を含む）（1）子ども家庭・女性福祉機関・施設 5 社会福祉の現場の現状と課題（他職種の業務の理解を含む）（2）高齢者福祉施設 6 社会福祉の現場の現状と課題（他職種の業務の理解を含む）（3）福祉事務所 7 社会福祉の現場の現状と課題（他職種の業務の理解を含む）（4）社会福祉協議会 8 社会福祉の現場の現状と課題（他職種の業務の理解を含む）（5）障害者福祉施設 9 社会福祉の現場の現状と課題（他職種の業務の理解を含む）（6）医療機関 10 実習先訪問（見学） 11 担当教員・実習生・実習指導者による実習計画の作成 12 社会福祉現場において必要な知識・技術 13 実習記録について 14 ソーシャルワークの価値・倫理（守秘義務を含む） 15 実習巡回 16 実習体験や実習記録をふまえた課題の整理（1）個別ケースより（第1グループ報告・ディスカッション） 17 実習体験や実習記録をふまえた課題の整理（2）個別ケースより（第2グループ報告・ディスカッション） 18 実習体験や実習記録をふまえた課題の整理（3）実践的関わり（第1グループ報告・ディスカッション）	

	19 実習体験や実習記録をふまえた課題の整理（４）実践的関わり（第２グループ報告・ディスカッション） 20 実習体験や実習記録をふまえた課題の整理（５）社会資源の活用（第１グループ報告・ディスカッション） 21 実習体験や実習記録をふまえた課題の整理（６）社会資源の活用（第２グループ報告・ディスカッション） 22 実習体験や実習記録をふまえた課題の整理（７）組織的課題（第１グループ報告・ディスカッション） 23 実習体験や実習記録をふまえた課題の整理（８）組織的課題（第２グループ報告・ディスカッション） 24 実習報告会（１）子ども家庭・女性福祉 25 実習報告会（２）高齢者福祉・障害者福祉・医療福祉 26 実習報告会（３）福祉事務所・社会福祉協議会 27 実習報告書の作成（１）内容の決定 28 実習報告書の作成（２）情報の整理 29 担当教員・実習生・実習指導者による実習の評価 30 実習の評価および全体総括会	

成績評価方法
到達目標の達成度にもとづき成績評価を行う。単位取得のためには、 (1) 相談援助実習の意義について理解する。 (2) 相談援助実習に係る個別指導並びに集団指導を通して、相談援助に係る知識と技術について具体的かつ实际的に理解し実践的な技術等を体得する。 (3) 社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を習得する。 (4) 具体的な体験や援助活動を専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる能力を涵養する。 の4点を達成することが求められる。 評価は、事前事後指導での取り組み姿勢などから、各コース担当者が総合的に判断する。
履修上の注意
適宜指示する。
教科書
教科書：指導教員が適宜指示する。 配布資料：実習オリエンテーションで配布された「実習の手引き」の他、指導教員が適宜指示する。
参考文献
指導教員が適宜指示する。

授業名称		担当教員氏名	
保育者論		吉田直哉	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
保育者養成学の基本的な視点、概念を学ぶための科目である。この授業では、保育者養成、キャリアアップの過程を理解し、現代社会における保育者の社会的機能を把握するため、保育者の資格制度とその歴史の変遷、職業倫理、社会的期待（ニーズ）、保育者の職務の具体的内容、保育者の専門性の経時的熟達過程について、基本的な理解を得ることを目指し、テキストの読解を踏まえて、討議を通し学ぶ。
到達目標
保育者を取り巻く社会的情勢・歴史的背景、保育者の資格制度と専門性の向上を担保するための教育・研修体系、保育者の専門性の発達過程、専門職としての倫理・規範、専門職としての保育者の職務内容の遂行過程（子どもの保育と保育者への子育て支援）について、保育所保育指針、全国保育士会倫理綱領を踏まえて、理解し、自分なりの言葉で説明できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーションと導入的なトピック紹介	保育学概論の既習内容の確認
第2回	保育者論を学ぶことの意義	教科書第1章を読む。
第3回	保育者の専門性と実践・省察過程	教科書第2章を読む。
第4回	園内研修による現職者の学び	教科書第3章を読む。
第5回	子ども・家庭支援の必要性とその技能	教科書第4章を読む。
第6回	保育者の職業的倫理	教科書第5章を読む。
第7回	保育者のキャリアアップとライフコース	教科書第6章を読む。
第8回	保育者の処遇	教科書第7章を読む。
第9回	保育者の研修制度の現状	教科書第8章を読む。
第10回	日本の保育者養成史	教科書第9章を読む。
第11回	保育者養成の現状	教科書第10章を読む。
第12回	教職課程と保育者養成の関連	教科書第11章を読む。
第13回	養成課程における実習科目の意義	教科書第12章を読む。
第14回	海外の保育者養成	教科書第13章を読む。
第15回	保育者を巡る現在の課題の整理とまとめ	授業を振り返ってのリフレクションシートの記入

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、以下の 4 項目についての基本的な知識・理解が獲得されていることが必要である。 ①保育者を取り巻く社会的情勢・歴史的背景 ②保育者の資格制度と専門性の向上を担保するための教育・研修体系 ③保育者の専門性の発達過程、専門職としての倫理・規範 ④専門職としての保育者の職務内容の遂行過程（子どもの保育と保育者への子育て支援） 成績評価方法として、授業内でのプレゼンテーション(2 回)とレポート（2 回）を用いる。成績評価に占める割合は、プレゼンテーション（60%）、レポート(40%)である。
履修上の注意
関連科目：保育学概論、保育内容演習 A（総論・環境）
教科書
日本保育学会編『保育学講座 4：保育者を生きる』東京大学出版会、2016 年。 『平成 29 年告示・幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領〈原本〉』チャイルド本社、2017 年。
参考文献
矢田貝公昭編者代表『改訂新版：保育用語辞典』2019 年。

授業名称		担当教員氏名	
保育内容演習 A（総論・環境）		吉田直哉	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 前	選択	演習

授業概要
保育カリキュラム編成に必須の保育内容に関する理解を獲得するべく、保育所保育指針における保育内容に関する記述の基本的理解を、その理論的背景の把握と共に実現するための科目である。この授業では、保育所保育指針における保育内容、特にねらいと内容の相互作用的関連、それらを支える子どもの生活形態と遊び経験に関する理論、それらを踏まえたエマージェントなカリキュラム編成を可能とするための幼児教育方法学、児童心理学の基本的な概念、それらを統括する「環境を通した保育」という理念とそれを支える理論に対する理解を得ることを目指し、テキストの読解を踏まえて、討議を通し学ぶ。
到達目標
保育所保育指針における保育内容、特にねらいと内容の相互作用的関連、それらを支える子どもの生活形態と遊び経験に関する理論、それらを踏まえたエマージェントなカリキュラム編成を可能とするための幼児教育方法学、児童心理学の基本的な概念、それらを統括する「環境を通した保育」という理念とそれを支える理論に対する基本的な理解を得ることを、本科目の目標とする。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	オリエンテーションと導入的なトピック紹介	保育学概論の既習内容の確認
第 2 回	子どもの発達	教科書第 1 章を読む。
第 3 回	子ども理解	教科書第 2 章を読む。
第 4 回	特別な配慮を要する子どもの支援	教科書第 3 章を読む。
第 5 回	遊びを中心とした保育	教科書第 4 章を読む。
第 6 回	保育の中の生活・生活の中の保育	教科書第 5 章を読む。
第 7 回	保育と表現	教科書第 6 章を読む。
第 8 回	養護と教育 5 領域の関連	教科書第 7 章を読む。
第 9 回	子どもを取り巻く文化	教科書第 8 章を読む。
第 10 回	環境を通しての保育	教科書第 9 章を読む。
第 11 回	保育における援助	教科書第 10 章を読む。
第 12 回	保育形態の諸類型	教科書第 11 章を読む。
第 13 回	保育における計画	教科書第 12 章を読む。
第 14 回	計画から保育実践への展開	教科書第 13 章を読む。
第 15 回	実践の省察と評価	教科書第 14 章を読む

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、以下の 4 項目についての基本的な知識・理解が獲得されていることが必要である。 ①保育所保育指針における保育内容、特にねらいと内容の相互作用的関連 ②保育所保育を支える子どもの生活形態と遊び経験に関する理論 ③エマージェントなカリキュラム編成を可能とするための幼児教育方法学、児童心理学の基本的な概念 ④保育所保育を統括する「環境を通した保育」という理念とそれを支える理論 成績評価方法として、授業内でのプレゼンテーション(2 回)とレポート (2 回) を用いる。成績評価に占める割合は、プレゼンテーション (60%)、レポート(40%)である。
履修上の注意
関連科目：保育学概論、保育者論、保育の計画と評価
教科書
日本保育学会編『保育学講座 3：保育のいとなみ』東京大学出版会、2016 年。 『平成 29 年告示・幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領〈原本〉』チャイルド本社、2017 年。
参考文献
矢田貝公昭編者代表『改訂新版：保育用語辞典』2019 年。

授業名称		担当教員氏名	
保育内容演習 B(表現・言葉)		木曾陽子、田中知子	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 前	選択	演習

授業概要
保育の中でも、具体的な保育内容の「表現」と「言葉」にかかわる知識を学ぶための科目である。この授業では、「表現」と「言葉」の視点及び領域を踏まえて、子どもが生活や遊びにおいて体験していることを捉え、保育にあたって保育士が留意、配慮すべき事項を理解することを目指す。また、子どもの発達過程に即して具体的な保育場面を想定しながら、環境の構成、教材や遊具等の活用と工夫、保育の過程の実際について理解することを目指す。
到達目標
本科目では、「表現」と「言葉」の視点及び領域を踏まえて、子どもの体験を理解し、保育士の留意事項や具体的な保育場面での環境構成や教具等の工夫、保育の過程について理解することを目指す。具体的な到達目標は以下の3点である。 1) 子どもの体験を「表現」「言葉」の観点からとらえ、記述できる。 2) 領域「表現」「言葉」を踏まえて、保育士が留意・配慮すべき事項を説明できる。 3) 具体的な保育場面の中で環境の構成、教材や遊具等の活用と工夫、保育の過程について説明できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	・ 保育内容とは ・ 保育における養護と教育	保育所保育指針の該当箇所を読み込む
第2回	・ 領域「表現」と「言葉」とは ・ 乳児保育における視点との関係	保育所保育指針の該当箇所を読み込む
第3回	・ 保育場面における子どもの体験の観察	観察記録の作成
第4回	・ 表現①：身体的表現	配布事例を読み、考察を記入
第5回	・ 表現②：造形的表現	配布事例を読み、考察を記入
第6回	・ 表現③：音楽的表現	配布事例を読み、考察を記入
第7回	・ 表現④：言語表現	配布事例を読み、考察を記入
第8回	・ 言葉①：ことばをはぐくむ保育	配布事例を読み、考察を記入
第9回	・ 言葉②：コミュニケーションを支える保育者の姿勢	配布事例を読み、考察を記入
第10回	・ 言葉③：ことばやコミュニケーションの援助	配布事例を読み、考察を記入
第11回	・ 事例を通して「表現」「言葉」を考える	報告プレゼンの作成
第12回	・ 保育実践	実践記録の作成と報告プレゼンの作成
第13回	・ 保育実践報告①表現	報告を受けて最終レポートの作成

第 14 回	・ 保育実践報告②言葉	報告を受けて最終レポートの作成
第 15 回	・ 保育実践報告③ ・ これまでの授業のまとめと振り返り	報告を受けて最終レポートの作成
第 16 回	・ 最終レポートの提出	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1) 子どもの体験を「表現」「言葉」の観点からとらえ、記述できる。 2) 領域「表現」「言葉」を踏まえて、保育士が留意・配慮すべき事項を説明できる。 3) 具体的な保育場面の中で環境の構成、教材や遊具等の活用と工夫、保育の過程について説明できる。 の 3 点を達成することが求められる。 具体的な評価は、以下の通りである。 課題 1) 保育実践発表 (10%) : 手遊びや絵本の実践発表を行う (目標 2 と 3 に対応) 課題 2) 観察記録や事例の考察レポート (40%) : 実際の保育場面の観察や事例から子どもの体験を「表現」「言葉」の観点からとらえて考察する (目標 1 に対応) 課題 3) 実践報告 (25%) : 各自で「表現」や「言葉」に関する視点を設定し、保育現場で観察・実践したことからの考察をプレゼン形式で報告する (目標 1-3 に対応) 課題 4) 最終レポート (25%) : 領域「表現」「言葉」を踏まえて、保育士が留意・配慮すべき事項や環境の構成、教材や遊具等の活用と工夫、保育の過程について考察する (目標 2 と 3 に対応)
履修上の注意
(関連科目) 保育内容演習 A (総論・環境)、保育内容演習 C (健康・人間関係)、保育の表現技術 A、保育の表現技術 B (備考)
教科書
適宜、資料を配布する
参考文献
適宜、指示する

授業名称		担当教員氏名	
障がい児保育演習		木曾陽子	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	3 後	選択	演習

授業概要
保育の中でも、障がいのある子どもに対する保育のあり方について学ぶための科目である。この科目では、障がい児保育の理念や歴史の変遷、個々の特性や心身の発達等に応じた援助や配慮、計画の作成、障がい児その他の特別な配慮を要する子どもの家庭への支援や関係機関との連携・協働についての理解を目指す。
到達目標
本科目では障がい児保育の理念や歴史の変遷、個々の特性や心身の発達等に応じた援助や配慮、計画の作成、障がい児その他の特別な配慮を要する子どもの家庭への支援や関係機関との連携・協働についての理解を目指す。具体的には以下の3点を到達目標とする。 1) 障がい児保育の歴史を理解し、障がい児保育の意義が説明できる。 2) 障がいのある子どもを含む保育において、その子どもの特性や発達等を理解し、それに応じた援助や配慮を具体的に考えられる。 3) 障がいのある子どもの保護者の心情を理解し、家庭への適切な支援が考えられる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	・ 障がい児保育を支える理念 ・ 障がい児保育の歴史と現状	障害のある子どもとの関わり経験を整理する
第2回	・ 障がいのある子どものための保育環境	障がいのある子どものための保育環境の工夫について、実習経験等から整理する
第3回	・ 障がいのある子どもの感覚運動面と造形活動の支援	障がいのある子どもの感覚運動面や造形活動におけるつまずきを整理する
第4回	・ 障がいのある子どもへの言語・コミュニケーション支援	障がいのある子どもの言語・コミュニケーションにおけるつまずきを整理する
第5回	・ 障がいのある子どもへの行動問題と遊びの支援	障がいのある子どもの行動問題や遊びにおけるつまずきを整理する
第6回	・ 知的障がいのある子どもの特性理解と支援	知的障がいの特性を調べる
第7回	・ 身体障がいのある子どもの特性理解と支援	身体障がいの特性を調べる
第8回	・ 発達障がいのある子ども（ADHD）の特性理解と支援	発達障がい（ADHD）の特性を調べる
第9回	・ 発達障がいのある子ども（ASD）の特性理解と支援	発達障がい（ASD）の特性を調べる
第10回	・ 障がいのある子どもの保護者の心情理解	障がいのある子どもの保護者の手記を読む

第 11 回	・ 障がいのある子どもの保護者の支援	障がいのある子ども向けのイベントの準備をする
第 12 回	・ 障がいのある子ども向けのイベントの実施	障がいのある子ども向けのイベントの振り返りを行う
第 13 回	・ 自治体や関係機関との連携 ・ 個別支援計画・指導計画の意義と実際	連携の課題について整理する
第 14 回	・ 個別支援計画・指導計画の作成（演習）	グループごとに指導計画・支援計画の作成を行う
第 15 回	・ 個別支援計画・指導計画の発表 ・ 授業全体の振り返りとまとめ	グループごとに指導計画・支援計画の発表準備を行う
第 16 回	・ 最終レポートの提出	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1) 障がい児保育の歴史を理解し、障がい児保育の意義が説明できる。 2) 障がいのある子どもを含む保育において、その子どもの特性や発達等を理解し、それに応じた援助や配慮を具体的に考えられる。 3) 障がいのある子どもの保護者の心情を理解し、家庭への適切な支援が考えられる。具体的な評価は、以下の通りである。 課題 1) レポート (20%) : 障害児保育の歴史と現在の課題についてのレポートを執筆する (目標 1 に対応) 課題 2) 事例検討シート (20%) : 様々な事例への具体的な援助を検討する (目標 2 と 3 に対応) 課題 3) 個別の指導計画 (10%) : 模擬事例の個別の指導計画を作成する (目標 2 に対応) 課題 4) イベントの企画・実施・振り返り (50%) : 障がいのある子どもとその保護者向けのイベントを企画・実施し、その振り返りレポートを作成する (目標 1-3 に対応)
履修上の注意
適宜指示します。
教科書
適宜、資料を配布する
参考文献
木曾陽子 (2016) 『発達障害の可能性のある子どもの保護者支援—保育士による気づきからの支援』 晃洋書房

授業名称		担当教員氏名	
養護内容演習		伊藤嘉余子	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
1	3 後	選択	演習

授業概要
1) 毎週、学生によるプレゼン&グループ討議という流れで授業展開します（具体的には初回授業時に説明します）。(1) 学生による発表（15 分）(2) 質疑応答（15 分）(3) 教員コメント（15 分）(4) 討論テーマ発表&グループ討論（15 分）(5) グループごとの発表&発表者によるまとめ（15 分）(6) 教員によるまとめ（15 分）2) 学生自身による問題意識をベースに、発表内容を決定します。3) 発表内容は、社会的養護をめぐる最新動向や現状、課題などに関するテーマでお願いします。
到達目標
本授業では以下の 3 点を達成目標とする。 1) 児童養護の内容について具体的に理解を深める。 2) 児童養護の現場が直面する課題について理解し、その解決策について考察する。 3) 課題・テーマの設定→資料・情報収集→発表資料作成・準備→当日の発表→質疑応答への対応、といったプレゼンテーションのスキルについて習得する。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	オリエンテーション：授業方法や内容等に関するガイダンス次週以降の発表スケジュールを決定する。(目標) 養護内容演習の目標や位置づけについて理解する	事前にシラバスを読んでおく。自分の取り組みたい課題を決めておく
第 2 回	施設養護における家族関係調整の支援・援助について (目標) 施設と児相の連携なども含めて、親子分離後の家庭支援や家族再統合について考える	事前に配布資料「家族再統合」を読んでおく
第 3 回	施設養護における被虐待児への支援・援助について (目標) 親子分離後の施設養護における被虐待児童への心のケア/他職種連携などについて考える	事前に配布資料「被虐待児のための援助プログラム」を読んでおく
第 4 回	施設職員のストレスとバーンアウトについて (目標) なぜ施設職員の離職率が高いのか、ストレスと燃え尽き症候群について、職員の研修/人材育成なども含めて考える	事前に配布資料「ストレスとバーンアウト」を読んでおく
第 5 回	施設退所後のアフターケアについて (目標) 施設退所後のアフターケアについて、出身施	事前に配布資料「アフターケアと当事者団体の役割」を読んでおく

	設の役割&施設以外の支援機関の役割も含めて考える	
第6回	児童養護施設等の小規模化・地域化について（目標）施設における養育形態の少人数化や地域分散化について、児童養護施設以外の施設における小規模ケアも含めて考える	事前に配布資料「小規模化・地域化」を読んでおく
第7回	施設内虐待について（目標）施設内虐待はなぜ起こるのか、その原因と有効な防止策などについて考える	事前に配布資料「恩寵園の子どもたち」を読んでおく
第8回	施設入所者の苦情解決制度と第三者評価について（目標）施設入所者の権利擁護と苦情解決システムの現状と課題について考える	事前に配布資料「苦情解決と第三者委員」「施設における第三者評価調査」を読んでおく
		1) 自分の発表テーマについて、事前にしっかり準備をしてきてください。2) 最終レポートは、自分が発表したテーマ以外の内容を選択してもらいます。ほかの人の発表内容もしっかり復讐してください。3) 最新の話題提供ができるよう、新聞やニュースはよくチェックしておくようにして下さい。

成績評価方法

授業目標（達成目標）1）～3）の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、

- 1) 児童養護の内容について具体的に理解を深める。
- 2) 児童養護の現場が直面する課題について理解する。
- 3) 課題・テーマの設定→資料・情報収集→発表資料作成・準備→当日の発表→質疑応答への対応、といったプレゼンテーションのスキルを習得をする。

上記3点について理解することが最低基準（C評価のライン）として求められる。さらに、これらに加えて、今後必要となる改善策等について考究・提案することができることが達成度として理想的である。成績を評価する方法として、自分で選んだテーマに関するプレゼンテーション、他の人が発表する際の質疑応答やグループ討議等における参加貢献度、最終レポートを用いる。成績評価に占める割合は、担当した発表内容（50%）、質疑応答など参加貢献度（20%）、最終レポート課題（30%）である。

履修上の注意

（関連科目）児童養護論

（備考）保育士資格必修1単位なので、授業は全部で8回です。初回にオリエンテーション実施後、合計8回授業を行います。

教科書

伊藤嘉余子・小池由佳編著「社会的養護内容」ミネルヴァ書房

参考文献

授業のなかで随時紹介していきます

授業名称		担当教員氏名	
保育の計画と評価		木曾陽子	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	4 前	選択	講義

授業概要
保育の中でも、保育の質の向上に向けた計画と評価の全体と具体を学ぶための科目である。この授業では、保育の内容の充実と質の向上に資する保育の計画及び評価、全体的な計画と指導計画の作成の意義と方法、子どもの理解に基づく保育の過程の全体構造について理解することを目指す。
到達目標
本科目では、保育の内容の充実と質の向上に資する保育の計画及び評価、全体的な計画と指導計画の作成の意義と方法、子どもの理解に基づく保育の過程の全体構造について理解することを目指す。具体的には、以下の3点を到達目標とする。 1) 保育内容の充実と質の向上に資する保育の計画と評価について説明できる。 2) 全体的な計画と指導計画の意義と作成方法を説明できる。 3) 現代の保育の課題を理解し、計画、実践、省察・評価、改善の過程をふまえて、その改善策を提案できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	・ 保育の現状と課題	・ これまでの保育関連科目での学びを整理する
第2回	・ カリキュラムの基礎理論 ・ 計画と評価の意義	・ 配布資料を読む
第3回	・ 保育の過程の循環による保育の質の向上	・ 保育所保育指針の関連箇所を読む
第4回	・ 保育所保育指針における計画と評価	・ 保育所保育指針の関連箇所を読む
第5回	・ 全体的な計画と指導計画の関係性	・ 配布資料を読む
第6回	・ 全体的な計画の作成	・ 配布資料を読む
第7回	・ 指導計画の作成 ・ 作成上の留意事項	・ 配布資料を読む
第8回	・ 保育の評価の方法と実際	・ 実習時の部分実習を評価する
第9回	・ 指導計画の作成	・ 指導計画を作成する
第10回	・ 指導計画の発表	・ 発表の振り返りを記入する
第11回	・ 計画の実践（子育て支援企画）	・ 実践の振り返りを記入する
第12回	・ 実践の記録と評価	・ 企画後レポートを作成する

第 13 回	・ 保育所全体の評価と保育の質向上に向けた改善の取組	・ 企画後レポートを作成する
第 14 回	・ 保育所児童保育要録	・ 最終レポートを作成する
第 15 回	・ より質の高い保育のための解決策の検討	・ 最終レポートを作成する
第 16 回	・ 最終レポートの提出	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1) 保育内容の充実と質の向上に資する保育の計画と評価について説明できる。 2) 全体的な計画と指導計画の意義と作成方法を説明できる。 3) 現代の保育の課題を理解し、計画、実践、省察・評価、改善の過程をふまえて、その改善策を提案できる。 の3点を達成することが求められる。具体的には、以下の通りである。 課題1) 子育て支援企画（20%）：保育イベント企画の計画、実践を行う（目標2、3に対応） 課題2) 企画後レポート（20%）：実施した企画の評価と改善案をレポートにまとめる（目標3に対応） 課題3) 指導計画の作成（20%）：模擬事例の全日指導計画を作成する（目標1、2に対応） 課題4) 最終レポート（40%）：「保育内容の充実と質の向上に資する保育の計画と評価」について授業内での学びを活かしたレポートを作成する（目標1に対応）
履修上の注意
適宜指示します。
教科書
適宜、資料を配布する
参考文献
適宜、指示する

授業名称		担当教員氏名	
保育実習 1 A		吉田直哉	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 後	選択	実習

授業概要
保育実習 1 A では、保育所の役割や機能、保育士の業務内容や職業倫理について具体的に理解することを目指す。同時に、観察や子どもとの関わりを通して子どもへの理解を深め、既習科目の内容を踏まえた子どもの保育及び保護者への支援、保育の計画・観察・記録及び自己評価等について総合的に理解することを目指す。基本的には、2 年次の春休みに保育所等にて 10 日間（8 0 時間）以上の実習を行う。
到達目標
以下の 3 点を到達目標とする。 1. 保育所等の役割や機能、保育士の業務内容や職業倫理について説明できる。 2. 観察や子どもとの関わりを通して子どもへの理解を深め、既習科目の内容を踏まえた子どもの保育及び保護者への支援について説明できる 3. 保育の計画・観察・記録及び自己評価等について総合的に説明できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	自身の実習先の情報を調べ、実習目標を設定する。	
第 2 回		
第 3 回	保育所等で 2, 3 月の春休み期間中に 10 日間の実習を行う。実習中の活動を実習日誌に記録し、日々の実習を振り返りながら実施する。可能な施設では部分実習等も行う。それぞれの実習中に 1 回教員の巡回指導を受け、実習における学びを深める。	毎日実習日誌に一日の保育の流れと保育士や実習生の動き、環境構成について記入する。また、一日の考察を行い、次の目標や自己の課題を記入する。
第 4 回		
第 5 回		
第 6 回		
第 7 回		
第 8 回		
第 9 回		
第 10 回		
第 11 回		
第 12 回		
第 13 回		
第 14 回		
第 15 回	実習報告書を作成する。	
第 16 回		

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 保育所等の役割や機能、保育士の業務内容や職業倫理について説明できる。 2. 観察や子どもとの関わりを通して子どもへの理解を深め、既習科目の内容を踏まえた子どもの保育及び保護者への支援について説明できる 3. 保育の計画・観察・記録及び自己評価等について総合的に説明できる。 の3点を達成することが求められる。 具体的には、以下の通りである。 課題1) 実習日誌(70%)：実習先の情報等の整理、日々の実習の記録を作成する(目標1-3に対応) 課題2) 実習事後の報告会(30%)：実習報告書をもとにプレゼンを行う(目標1-3に対応) なお、実習先の評価はそのまま成績評価に反映させないが、上記の評価の参考にする。
履修上の注意
(関連科目) 保育実習指導1 A、保育実習1 B、保育実習指導1 B、保育実習2、保育実習指導2、その他保育資格関連科目全般 (備考)
教科書
適宜、配布する
参考文献
適宜、指示する

授業名称		担当教員氏名	
保育実習指導 1 A		吉田直哉、川崎真望子	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
1	2 後	選択	演習

授業概要
保育実習指導 1 A では、保育所等の役割や機能、保育士の業務内容や職業倫理について具体的に理解することを目指す。同時に、観察や子どもとの関わりを通して子どもへの理解を深め、既習科目の内容を踏まえた子どもの保育及び保護者への支援、保育の計画・観察・記録及び自己評価等について総合的に理解することを目指す。保育実習 1 A は基本的に春休みに行うため、その前後に保育実習指導 1 を行う。
到達目標
以下の 3 点を到達目標とする。 1. 保育実習の意義・目的と内容を理解し、自らの実習の課題を説明できる。 2. 実習施設における子どもの人権と最善の利益の考慮、プライバシーの保護と守秘義務等について説明できる。 3. 実習の事後指導を通して、実習の総括と自己評価を行い、今後の学習課題や目標を明確に説明できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	保育所実習の意義	保育学概論の内容を振り返る
第 2 回	保育所の役割の理解と実習の学習内容	関連法令のチェック、子どもの発達過程の復習、自らの実習園の保育理念の把握
第 3 回	実習段階ごとの注意事項	実習ハンドブックの該当箇所を読む
第 4 回	保育記録の記載方法	実習ハンドブックの該当箇所を読む
第 5 回	実習指導案の作成方法	実習ハンドブックの該当箇所を読む
第 6 回	実習指導案に基づく模擬保育	指導案の下書きを作成する
第 7 回	保育実習の事前準備・事後対応	必要書類の作成
第 8 回	事後指導・実習経験の発表と討議	実習振り返りシートの記入

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 保育実習の意義・目的と内容を理解し、自らの実習の課題を説明できる。 2. 実習施設における子どもの人権と最善の利益の考慮、プライバシーの保護と守秘義務等について説明できる。 3. 実習の事後指導を通して、実習の総括と自己評価を行い、今後の学習課題や目標を明確に説明できる。 の3点を達成することが求められる。 具体的には、以下の通りである。 課題1) 実習先の事前調査と実習目標の設定 (20%) : 実習先についてのプレゼンと実習目標の提出を行う (目標1に対応) 課題2) 実習事前課題 (50%) : 実習事前に複数のテーマについてレポートの作成やプレゼンを行う (目標1、2に対応) 課題3) 実習事後の報告 (30%) : 実習報告書をもとにプレゼンを行う (目標3に対応) なお、実習先の評価も上記の課題の評価の際に参考にする。
履修上の注意
(関連科目) 保育実習1A、保育実習1B、保育実習指導1B、保育実習2、保育実習指導2、その他保育資格関連科目全般 (備考)
教科書
適宜、配布する
参考文献
適宜、指示する

授業名称		担当教員氏名	
保育実習 1 B		木曾陽子	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	3 通	選択	実習

授業概要
保育実習 1 B では、保育所以外の児童福祉施設等の役割や機能、保育士の業務内容や職業倫理について具体的に理解することを目指す。同時に、観察や子どもとの関わりを通して子どもへの理解を深め、既習科目の内容を踏まえた子どもの保育及び保護者への支援、保育の計画・観察・記録及び自己評価等について総合的に理解することを目指す。基本的には、夏休みに児童福祉施設実習にて 10 日間（80 時間）以上の実習を行う。
到達目標
以下の 3 点を到達目標とする。 1. 児童福祉施設等の役割や機能、保育士の業務内容や職業倫理について説明できる。 2. 観察や子どもとの関わりを通して子どもへの理解を深め、既習科目の内容を踏まえた子どもの保育及び保護者への支援について説明できる 3. 保育の計画・観察・記録及び自己評価等について総合的に説明できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	自身の実習先の情報を調べ、実習目標を設定する。 保育所以外の児童福祉施設で 8, 9 月の夏休み期間中に 10 日間の実習を行う。実習中の活動を実習日誌に記録し、日々の実習を振り返りながら実施する。可能な施設では部分実習等も行う。それぞれの実習中に 1 回教員の巡回指導を受け、実習における学びを深める。	毎日実習日誌に一日の保育の流れと保育士や実習生の動き、環境構成について記入する。また、一日の考察を行い、次の目標や自己の課題を記入する。
第 2 回		
第 3 回		
第 4 回		
第 5 回		
第 6 回		
第 7 回		
第 8 回		
第 9 回		
第 10 回		
第 11 回		
第 12 回		
第 13 回		
第 14 回		
第 15 回		
第 16 回		

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 児童福祉施設等の役割や機能、保育士の業務内容や職業倫理について説明できる。 2. 観察や子どもとの関わりを通して子どもへの理解を深め、既習科目の内容を踏まえた子どもの保育及び保護者への支援について説明できる 3. 保育の計画・観察・記録及び自己評価等について総合的に説明できる。 の3点を達成することが求められる。 具体的には、以下の通りである。 課題1) 実習日誌(70%)：実習先の情報等の整理、日々の実習の記録を作成する(目標1-3に対応) 課題2) 実習事後の報告会(30%)：実習報告書をもとにプレゼンを行う(目標1-3に対応) なお、実習先の評価はそのまま成績評価に反映させないが、上記の評価の参考にする。
履修上の注意
(関連科目) 保育実習1A、保育実習指導1A、保育実習指導1B、保育実習2、保育実習指導2、その他保育資格関連科目全般 (備考)
教科書
適宜、配布する
参考文献
適宜、指示する

授業名称		担当教員氏名	
保育実習指導 1 B		木曾陽子、大江まゆ子	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
1	3 通	選択	演習

授業概要
保育実習指導 1 B では、児童福祉施設等の役割や機能、保育士の業務内容や職業倫理について具体的に理解することを目指す。同時に、観察や子どもとの関わりを通して子どもへの理解を深め、既習科目の内容を踏まえた子どもの保育及び保護者への支援、保育の計画・観察・記録及び自己評価等について総合的に理解することを目指す。保育実習 1 B は基本的に夏休みに行うため、その前後に保育実習指導 1 B を行う。
到達目標
以下の 3 点を到達目標とする。 1. 保育実習の意義・目的と内容を理解し、自らの実習の課題を説明できる。 2. 実習施設における子どもの人権と最善の利益の考慮、プライバシーの保護と守秘義務等について説明できる。 3. 実習の事後指導を通して、実習の総括と自己評価を行い、今後の学習課題や目標を明確に説明できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	保育所以外の児童福祉施設実習についてのオリエンテーション	昨年度の「私たちの実習」を読んでおく
第 2 回	児童福祉施設等での実習とは	実習先の概要を調べる実習目標を考える
第 3 回	実習施設の概要と実習内容	障害の特徴と支援方法を調べる
第 4 回	実習目標の修正と実習に向けた課題の整理	障害の特徴と支援方法を調べる実習個人票を記入する
第 5 回	障害のある子どもの理解と支援方法	実習先への事前訪問を行う
第 6 回	子どもたちへの実際のかかわり	実習までの手続きを確認する
第 7 回	実習事後の報告会	実習事後報告書を作成する
第 8 回	報告書の提出	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 保育実習の意義・目的と内容を理解し、自らの実習の課題を説明できる。 2. 実習施設における子どもの人権と最善の利益の考慮、プライバシーの保護と守秘義務等について説明できる。 3. 実習の事後指導を通して、実習の総括と自己評価を行い、今後の学習課題や目標を明確に説明できる。 の3点を達成することが求められる。 具体的には、以下の通りである。 課題1) 実習先の事前調査と実習目標の設定 (20%) : 実習先についてのプレゼンと実習目標の提出を行う (目標1に対応) 課題2) 実習事前課題 (50%) : 実習事前に複数のテーマについてレポートの作成やプレゼンを行う (目標1、2に対応) 課題3) 実習事後の報告 (30%) : 実習報告書をもとにプレゼンを行う (目標3に対応) なお、実習先の評価も上記の課題の評価の際に参考にする。
履修上の注意
(関連科目) 保育実習1 A、保育実習指導1 A、保育実習1 B、保育実習2、保育実習指導2、その他保育資格関連科目全般 (備考)
教科書
適宜、配布する
参考文献
適宜、指示する

授業名称		担当教員氏名	
保育実習 2		吉田直哉	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	3 後	選択	実習

授業概要
保育実習 2 では、保育実習 1A・保育実習 1B を踏まえて、保育所の役割や機能、保育士の業務内容や職業倫理についてより実践的に学び、保育実践技術を理解・体得することを目指す。同時に、参与観察や子どもとの積極的な関わりを通して子どもの発達と生活のプロセスへの理解を深め、既習科目の内容を実践的に体系化し、子どもの保育及び保護者への支援、保育の計画・観察・記録及び自己評価等について総合的・体系的に理解することを目指す。基本的には、3 年次春休みに保育所実習を 10 日間（80 時間）以上実施する。
到達目標
以下の 3 点を到達目標とする。 1. 保育所の役割や機能、保育士の業務内容や職業倫理について実践的に理解し、説明できる。 2. 観察や子どもとの関わりを通して子どもへの理解を深め、既習科目の内容を踏まえた子どもの保育及び保護者への支援の方略について理解し、実践できる 3. 保育の計画・観察・記録及び自己評価等について総合的に理解し、実践できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	自身の実習先の情報を調べ、実習の自己目標・自己課題を設定する。	毎日実習日誌に一日の保育の流れと保育士や実習生の動き、環境構成について記入する。また、一日の考察を行い、次の目標や自己の課題を記入する。
第 2 回		
第 3 回	保育所で 2, 3 月の春休み期間中に 10 日間の実習を実施する。実習中の活動を実習記録に記載し、日々の実習を反省しながら実施する。可能な施設では責任実習等も行う。それぞれの実習中に 1 回教員の巡回指導を受け、実習における学びを多角的に深める。	
第 4 回		
第 5 回		
第 6 回		
第 7 回		
第 8 回		
第 9 回		
第 10 回		
第 11 回		
第 12 回		
第 13 回		
第 14 回		
第 15 回	実習報告書を作成する。	
第 16 回		

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 保育所の役割や機能、保育士の業務内容や職業倫理について実践的に理解し、説明できる。 2. 観察や子どもとの関わりを通して子どもへの理解を深め、既習科目の内容を踏まえた子どもの保育及び保護者への支援の方略について理解し、実践できる 3. 保育の計画・観察・記録及び自己評価等について総合的に理解し、実践できる。 の3点を達成することが求められる。 具体的には、以下の通りである。 課題1) 実習記録(70%)：実習先の情報等の整理、日々の実習の記録を作成する(目標1-3に対応) 課題2) 実習事後の報告会(30%)：実習報告書をもとにプレゼンを行う(目標1-3に対応) なお、実習先の評価はそのまま成績評価に反映させないが、上記の評価の参考にする。
履修上の注意
(関連科目) 保育実習指導1A、保育実習1A、保育実習指導1B、保育実習1B、保育実習指導2、その他保育士資格関連科目全般 (備考)
教科書
適宜、配布する
参考文献
適宜、指示する

授業名称		担当教員氏名	
保育実習指導 2		吉田直哉、川崎真望子	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
1	3 後	選択	演習

授業概要
保育実習指導 2 では、保育実習指導 1 A・1B、保育実習 1A・1 B を踏まえて、保育所の役割や機能、保育士の業務内容や職業倫理についてより実践的に学び、保育実践技術を理解・体得することを目指す。同時に、参与観察や子どもとの積極的な関わりを通して子どもの発達と生活のプロセスへの理解を深め、既習科目の内容を実践的に体系化し、子どもの保育及び保護者への支援、保育の計画・観察・記録及び自己評価等について総合的・体系的に理解することを目指す。基本的には、3 年次春休みに保育所実習を 10 日間（80 時間）以上実施するための予備的学習、準備、事後指導を行う。
到達目標
以下の 3 点を到達目標とする。 1. 保育実習の意義・目的と内容を理解し、自らの実習の課題を説明できる。 2. 実習施設における子どもの人権と最善の利益の考慮、プライバシーの保護と守秘義務等について説明できる。 3. 実習の事後指導を通して、実習の総括と自己評価を行い、今後の学習課題や目標を明確に説明できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	保育実習 2 の意義・学習内容	保育実習 1A・1 B の内容を振り返る、自らの実習園の保育理念の把握
第 2 回	保育所の役割の理解と実習の学習内容	子どもの発達過程の復習、発達過程に合わせた遊び・おもちゃについての事前学習
第 3 回	実習段階ごとの注意事項、特に責任実習について	実習ハンドブックの該当箇所を読む
第 4 回	保育記録の記載方法、特にエピソード記録	実習ハンドブックの該当箇所を読む
第 5 回	実習指導案の作成方法	実習ハンドブックの該当箇所を読む
第 6 回	実習指導案に基づく模擬保育	指導案の下書きを作成する
第 7 回	保育実習の事前準備・事後対応	必要書類の作成
第 8 回	事後指導・実習経験の発表と討議	実習振り返りシートの記入

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 保育実習の意義・目的と内容を理解し、自らの実習の課題を説明できる。 2. 実習施設における子どもの人権と最善の利益の考慮、プライバシーの保護と守秘義務等について説明できる。 3. 実習の事後指導を通して、実習の総括と自己評価を行い、今後の学習課題や目標を明確に説明できる。 の3点を達成することが求められる。 具体的には、以下の通りである。 課題1) 実習先の事前調査と実習目標の設定 (20%) : 実習先についてのプレゼンと実習目標の提出を行う (目標1に対応) 課題2) 実習事前課題 (50%) : 実習事前に複数のテーマについてレポートの作成やプレゼンを行う (目標1、2に対応) 課題3) 実習事後の報告会 (30%) : 実習報告書をもとにプレゼンを行う (目標3に対応) なお、実習先の評価も上記の課題の評価の際に参考にする。
履修上の注意
(関連科目) 保育実習指導 1 A、保育実習 1A、保育実習指導 1 B、保育実習 1B、保育実習 2、その他保育士資格関連科目全般 (備考)
教科書
適宜、配布する
参考文献
適宜、指示する

授業名称		担当教員氏名	
スクール・ソーシャルワーク実習		山野則子、荷出 翠	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	4 通	選択	実習

授業概要
実際に学校現場等での実習を行う。学んできた学校現場、福祉の理論や実践技術を理解し、実際に学校現場に何が起きているのか、ワーカーは何ができるか、自身で検討したり、シュミレーションしたりしながら学びを深める。問題意識を持って実習に臨むことが求められる。
到達目標
本科目では、先進的なスクールソーシャルワークを配置している自治体においてその仕組みや構造を含めて学校におけるソーシャルワーク実践について理解すること、実践家の具体的な動きを通じて専門的対処能力を身につけることを目的とする。具体的には、以下の能力を身につけることを達成目標とする。 1. 実習先の自治体や学校におけるソーシャルワーク実践について説明できること。 2. 実際に学校にかかわる資源について知ること。 3. 自らの問題意識に照らして実習で学んだ実践と結びつけて説明できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション	実習先の自治体の学校や子どもに関することを統計的に調べておく。
第2回 ～4回	学校における子どもの教師の取り組みに関する観察	スクールソーシャルワーカーの動きだけではなく、学校含む教育組織について事前に資料を読んでもおく。
第5回 ～12回	スクールソーシャルワーカーの実践を知る	スクールソーシャルワークの動きを文献から学んでもおく。
第13回 ～15回	学校に係る機関との連携を知り、連携におけるスクールソーシャルワーカーの役割を知る	学校と機関の連携について文献から調べる。

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 実習先の自治体や学校におけるソーシャルワーク実践について説明できること。 2. 実際に学校にかかわる資源について知ること。 3. 自らの問題意識に照らして実習で学んだ実践と結びつけて説明できること。 の3点を達成することが求められる。 具体的には、 ・実習先において実習指導者の指示に従い行動できること ・実習したソーシャルワーカーの動きやソーシャルワーク実践について適切なレポートが作成できること。 ・実際に行われた支援に関して、適切な事後レポートが作成でき、自身の課題設定と関連付けて論じられること。 上記の3点を達成することが求められる。成績を評価は実習報告と最終レポートでおこなう。成績評価に占める割合は実習指導者の意見と実習報告（合わせて70%）最終レポート（30%）である。
履修上の注意
（関連科目）スクール・ソーシャルワーク論、スクール・ソーシャルワーク演習、スクール・ソーシャルワーク実習指導を履修していること。
教科書
適宜指示します。
参考文献
適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
スクール・ソーシャルワーク演習		山野則子	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	3 前	選択	演習

授業概要
(全 30 時間)・地域・学校・保育現場の把握とアセスメント・個別事例のアセスメント・援助技法の体験的習得・記録用紙の作成とデータの整理・分析・保護者への支援・特別な対応を要する家庭への支援
到達目標
本科目は、保育・子育て領域および学校領域におけるソーシャルワークの重要性と、ソーシャルワークの視点を導入することの責任の重大さを理解させ、実際に保育・子育て支援、学校における支援をどのように進めていけばいいのかについて、ミクロ、メゾ、マクロを視野に入れたソーシャルワーカーとしての援助方法を習得させる。具体的には、以下の能力を身につけることを達成目標とする。 1. ミクロ実践として事例をアセスメント、プランニング、モニタリングをロールプレイにおいて実際できること。 2. メゾ実践として、ケース会議をロールプレイにおいて運営できること。 3. マクロ実践として、ニーズに対してどのようにアプローチを行うか検討し、新しい方法を打ち出せること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	ソーシャルワークプロセスと SSW、保育 SW ジェノグラム、エコマップ、家族分析	
第2回	ジェノグラム、エコマップ、家族分析2、シートの活用、記録	
第3回	保育所、学校、地域アセスメント	課題：アセスメントレポート
第4回	ミクロ実践（ネグレクト事例、アセスメント・家族RP）	課題：事例アセスメント 課題：事例プランニング
第5回	ミクロ実践（ネグレクト事例、プランニング・家族RP）	課題：事例プランニング
第6回	メゾ実践（ネグレクト事例、プランニング・ケース会議RP）VTR	
第7回	メゾ実践（ネグレクト事例、プランニング・ケース会議RP）	課題：テキスト課題
第8回	メゾ実践事例を考える、VTR いじめ事例 GW	課題：SW 実践を進めるために
第9回	メゾ実践テキストからディスカッション	

第 10 回	マクロ・メゾ実践ロールプレイ：いじめ事例 WS 事例アセスメント	
第 11 回	マクロ・メゾ実践ロールプレイ：保護者会の 計画	
第 12 回	メゾ実践親と親をつなぐ；懇談会、子育て支 援保護者会ロールプレイ	
第 13 回	マクロ実践コミュニティを視野にアセスメン ト：子育て調査からプラン	
第 14 回	マクロ実践コミュニティを視野にプランニン グ模造紙に書く、発表	課題：レポート課題提示
第 15 回	マクロ実践、テキストからディスカッション	
		シラバスに沿って関連するところを事前にし っかり読んで課題をこなし、授業において考 えや意見が言えるように準備しておくこと。

成績評価方法

到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、

1. ミクロ実践として事例をアセスメント、プランニング、モニタリングをロールプレイにおいて実
際できること。
2. メゾ実践として、ケース会議をロールプレイにおいて運営できること。
3. マクロ実践として、ニーズに対してどのようにアプローチを行うか検討し、新しい方法を打ち出
せること。

の 3 点を達成することが求められる。

単位を取得するためには、・授業中行う検討に積極的に参加し、発言できること・授業中行うロール
プレイに積極的に参加し、家族や支援者の理解を深めること。・事後レポートが作成でき、自身の課題設
定と関連付けて論じられること。上記の 3 点を達成することが求められる。成績を評価は実習報告と
最終レポートでおこなう。成績評価に占める割合は授業中占めすレポート（70%）、授業中の参加度
（30%）である。

履修上の注意

（関連科目）保育関連科目、スクールソーシャルワーク関連科目

（備考）以下が、子ども関係、特に学校関係で専門性を高める推奨履修パターンである。他学類の学生
も実習以外は、以下可能である。特に SDGs 演習（コラボレーション）（教師、心理、福祉など専門職
による協働を学ぶ）を望む方は、他学類の受講生でも可能な限り、積み上げて受講することを求める。
2 年で子ども家庭福祉論、スクール・ソーシャルワーク概論、教育福祉フィールドワーク 2 やインター
ンシップの学校現場での活動、社会福祉実習 1、3 年でスクール・ソーシャルワーク演習、社会福祉実
習 2。

教科書

随時指示する。

参考文献

山野則子ほか（2016）「よくわかるスクールソーシャルワーク」 ミネルヴァ書房

授業名称		担当教員氏名	
社会科教育法（地歴分野） 1 A		伊井直比呂	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 前	選択	演習

授業概要
目標：地理・歴史分野の内容を持続可能性とテーマとして授業デザインする力を修得する。とりわけ日本における「縮小社会」に対応する観点から「人口減少（少子高齢）」「環境」ならびに歴史における「未来への選択」を意識した授業力を獲得する。
到達目標
まず、新しい学習指導要領から持続可能性と社会科教育（地理歴史分野）との関係を考える。これに基づき、国内における持続可能性の問題として存在する「縮小社会」「環境」における都市、機能、産業構造の変容を把握する。次に歴史的観点から、歴史的な事象における未来への選択の観点から近現代を捉え直す。 そしてこれらに相応しい資料の教材化について検討し、主体的な学習を促す授業プランを作成する。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	持続可能性と社会科教育（公民分野）。	資料を事前に読む
第2回	世界と日本の持続可能性の相違と課題。	実際の教科書と資料を読みまとめる
第3回	問題解決の当事者（主体者）としての学び	実際の教科書と資料を読みまとめる
第4回	主体的な学習と社会科の探究学習について	実際の教科書と資料を読みまとめる
第5回	人口減少問題と持続可能性（Discussion 含む）	討論成果をまとめる
第6回	環境や都市と持続可能性（Discussion 含む）	討論成果をまとめる
第7回	生活と文化の歴史と持続可能性	討論成果をまとめる
第8回	持続可能性の諸問題とその歴史的理解（現代）	事前に資料を収集しまとめる
第9回	持続可能性の諸問題とその歴史的理解（近代）	事前に資料を収集しまとめる
第10回	問題解決的な価値判断とその方法	新聞記事資料の収集と問題の所在をまとめる
第11回	模擬授業準備 指導案（教材観）の書き方含む	授業づくりと資料のまとめ
第12回	模擬授業準備 指導案（展開）の書き方含む	授業づくりと資料のまとめ
第13回	模擬授業準備 資料準備とICTの用い方	授業づくりと資料のまとめ
第14回	模擬授業準備 参加型学習のまとめ方	授業づくりと資料のまとめ
第15回	模擬授業の披露と相互批評・討議	全体のまとめとレポート準備
第16回	レポート提出	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、各回の持続可能性の問題についての学びを記録していることが求められる。次に、問題と問題との連関関係を説明することができ、異なる科目分野との総合的な知見を獲得していることを必要とする。成績を評価する方法として、最終の模擬授業での上記目標の達成度をもって評価する。成績評価に占める割合は、模擬授業（70%）、講義への参加度（報告など）（30%）である。
履修上の注意
頻繁にディスカッションがある
教科書
資料を適宜配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
社会科教育法（公民分野） 1 A		伊井直比呂	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	選択	演習

授業概要
新しい学習指導要領から持続可能性と社会科教育（公民分野）との関係を考える。これに基づき、国内における持続可能性の問題として存在する「縮小社会」としての諸問題から、「社会保障と財政」「環境」「地方行政」などにおける既存の諸制度の限界の変容を把握する。そしてこれらに相応しい資料の教材化について検討し、主体的な学習を促す授業プランを作成する。
到達目標
公民分野の内容を持続可能性とテーマとして授業デザインする力を修得する。とりわけ日本における「縮小社会」に対応する観点から「人口減少（少子高齢）」「社会保障と財政」「環境」などにおける授業力を養う。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	持続可能性と社会科教育（公民分野）。	資料配布と事前読み込み
第 2 回	世界と日本の持続可能性の相違と課題。	実際の教科書・資料を読みまとめる
第 3 回	持続可能性と Critical Thinking の意味。	実際の教科書・資料を読みまとめる
第 4 回	持続可能性の問題と探究的学習(最適解)。	実際の教科書・資料を読みまとめる
第 5 回	人口減少問題と社会保障・財政の問題	実際の教科書・資料を読みまとめる
第 6 回	少子高齢社会と社会福祉の問題	実際の教科書・資料を読みまとめる
第 7 回	地方都市が抱える複合的問題と財政	討論成果をまとめる
第 8 回	環境問題と世界の人口拡大問題	事前に資料を収集しまとめる
第 9 回	持続可能性の阻害問題に対するアプローチ	経験の質と考察手順をまとめる
第 10 回	ディスカッションによる統合的まとめ	新聞記事資料の収集と問題の所在をまとめる
第 11 回	模擬授業準備 1 回目 教材観と授業構成	授業づくりと資料のまとめ
第 12 回	模擬授業準備 2 回目 展開について	授業づくりと資料のまとめ
第 13 回	模擬授業準備 3 回目 ICT の利用について	授業づくりと資料のまとめ
第 14 回	模擬授業準備 4 回目 評価と議論のまとめ方	授業づくりと資料のまとめ
第 15 回	模擬授業の披露と相互批評・討議	全体のまとめとレポート準備
第 16 回	レポート提出	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、各回の持続可能性の問題についての学びを記録していることが求められる。次に、問題と問題との連関関係を説明することができ、異なる科目分野との総合的な知見を獲得していることを必要とする。成績を評価する方法として、最終の模擬授業での上記目標の達成度をもって評価する。成績評価に占める割合は、模擬授業（70%）、講義への参加度（報告など）（30%）である。
履修上の注意
頻繁にディスカッションがある
教科書
資料を適宜配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
社会科教育法（公民分野）2A		伊井直比呂	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	選択	演習

授業概要
公民だけでなく、地理・歴史分野との関連性を持たせて授業を行う内容構成の仕方、ならびに授業者自身が、社会的事象の意味や意義、および特色や相互の関連を現代の（私たちの）社会生活と関連付けて多面的・多角的に考察し、課題解決のために主体的にかかわる意欲や態度を振り返りながら授業を構成する力を培う。このために、討論とグループワークのほか資料購読を行う。
到達目標
社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を養う授業デザイン力を修得する。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	社会科（公民分野）の教育について	
第2回	現代を構成する基本的価値等について考える。	実際の教科書と資料を読みまとめる
第3回	個人の尊厳などの意義を歴史的視点で捉える。	実際の教科書と資料を読みまとめる
第4回	人権・平和概念等の生成を歴史視点で捉える。	実際の教科書と資料を読みまとめる
第5回	経済的背景と人権との関係及び進化について	実際の教科書と資料を読みまとめる
第6回	経済循環と社会生活を地理と関係づける。	実際の教科書と資料を読みまとめる
第7回	中間まとめのグループワーク	討論成果をまとめる
第8回	資料の使い方と提示の仕方	事前に資料を収集しまとめる
第9回	経験を振り返ることと考察することの意義	経験の質と考察手順をまとめる
第10回	問題解決的な価値判断とその方法	新聞記事資料の収集と問題の所在をまとめる
第11回	模擬授業準備1回目 教材観と授業構成	授業づくりと資料のまとめ
第12回	模擬授業準備2回目 展開について	授業づくりと資料のまとめ
第13回	模擬授業準備3回目 ICTの利用について	授業づくりと資料のまとめ
第14回	模擬授業準備4回目 評価と議論のまとめ方	授業づくりと資料のまとめ
第15回	模擬授業の披露と相互批評・討議	全体のまとめとレポート準備
第16回	レポート提出	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、各回の持続可能性の問題についての学びを記録していることが求められる。次に、問題と問題との連関関係を説明することができ、異なる科目分野との総合的な知見を獲得していることを必要とする。成績を評価する方法として、最終の模擬授業での上記目標の達成度をもって評価する。成績評価に占める割合は、模擬授業（70%）、講義への参加度（報告など）（30%）である。
履修上の注意
頻繁にディスカッションがある
教科書
資料を適宜配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
地域社会学		西田芳正	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
近代化、産業化とともに急速に拡大した都市的世界はさまざまな問題現象を引き起こし、問うべき対象として現れた。本講義では、都市および都市での生活を捉える比較の視点として伝統的な村落社会の特徴を整理した後、都市社会の基本的な性格、そこで生起しているさまざまな問題、現象とそれに関する社会学的な調査研究を紹介、検討する。次のような内容について講義していく。村落社会とは何か。都市とは何か。都市住民のネットワークと集団参加。都市の社会的構成と変容。地域移動と郊外社会論。都市社会と不平等。エスニシティと都市。都市の文化。
到達目標
自分たちが生活している地域社会について、その特徴と問題性について社会学の視点から捉える力を身に付けることを目的とする。また、社会学的な調査手法のうち特に参与観察、生活史法など地域社会学・都市社会学において彫琢されてきたものを紹介し、地域とそこで生活している人々の世界にアプローチする構えと知識を学生に持たせることを目標とする。具体的には、以下の能力を身に付けることを達成目標とする。
1. 村落社会・都市社会の特徴について説明ができること。
2. 都市を対象とする社会学的研究の起源と研究手法について説明ができること。
3. 現代都市の成り立ちと地域特性について説明ができること。
4. 現代の都市で生起している諸問題について説明ができること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション;地域生活、地域社会についての関心を喚起し、講義の概要を説明する。	指示した文献、資料を読む
第2回	1. 伝統的村落社会とその変容 1-1 自然村と家連合	
第3回	1-2 互助と協働;家を単位とする互助と協働	
第4回	1-3 村落社会の変容	
第5回	2. 都市社会学の源流としてのシカゴ学派 (1) シカゴ学派登場の背景と調査研究の特徴	
第6回	2. 都市社会学の源流としてのシカゴ学派 (2) 都市下層研究	
第7回	3. 都市とは何か	
第8回	4. 地域移動と都市拡大	

第9回	5. 郊外社会	
第10回	6. 都市と貧困	
第11回	7. 世界都市化と分極化	
第12回	8. 都市住民のネットワーク	
第13回	9. コミュニティの可能性	
第14回	10. 都市と外国人	
第15回	11. 都市と文化	

成績評価方法

到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、

1. 村落社会・都市社会の特徴について説明ができること。
2. 都市を対象とする社会学的研究の起源と研究手法について説明ができること。
3. 現代都市の成り立ちと地域特性について説明ができること。
4. 現代の都市で生起している諸問題について説明ができること。

の4点を達成することが求められる。

成績は、期末レポート（70%）、各授業で提出する小レポート（30%）で評価する。

履修上の注意

適宜指示します。

教科書

授業中に資料を配布する。

参考文献

よくわかる都市社会学 中筋直哉・五十嵐泰正編著 ミネルヴァ書房 2012年 2,800円。

授業名称		担当教員氏名	
社会教育入門		西田芳正	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
学校外でなされる教育・人間形成について、戦前期、戦後期に分けて特徴を整理する。なかでも、公民館が果たしてきた役割とそこでの学習活動の特徴の解説に力点を置く。その後、社会教育における学習者の特徴、施設および職員の意義を整理し、さらに識字運動、若者対象の教育支援活動についても取り上げる。
到達目標
社会教育を広く学校外で展開される多様な教育活動と捉え、その意義と内容の理解を深めることを目的とする。受講学生が、学校外にも教育の場が多様に存在し、人間の生涯に渡って重要な役割を果たしていることに気づき関心を抱くことが目標である。具体的には、以下の能力を身につけることを達成目標とする。 1. 日本における社会教育の歴史と現在について説明できること。 2. 社会教育の多様な取り組み、施設と職員の存在意義について説明できること。 3. 社会教育の現場から学び、その特徴、意義、課題について報告できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	1. 学校外教育（社会教育）の意義	指示した文献、資料を読む。
第2回	2-1. 戦前期の社会教育（1）－若者組から青年団へ	
第3回	2-2. 戦前期の社会教育（2）－国家による統制・教化	
第4回	3-1. 戦後の社会教育（1）－戦後の再出発と社会教育法	
第5回	3-2. 戦後の社会教育（2）－青年団・婦人会の活動	
第6回	3-3. 戦後の社会教育（3）－生涯学習の展開	
第7回	4. 公民館における学習活動	
第8回	5-1. 社会教育の基礎（1）学習者論	
第9回	5-2. 社会教育の基礎（2）施設論（博物館）	
第10回	5-3. 社会教育の基礎（3）施設論（図書館）	
第11回	5-4. 社会教育の基礎（4）職員論	
第12回	6. 識字教育（1）識字状況と教育の課題	
第13回	7. 識字教育（2）識字運動の方法論	
第14回	8. ユースワークの歴史と現在	
第15回	10. 現代社会の多様な学習活動の展開	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 日本における社会教育の歴史と現在について説明できること。 2. 社会教育の多様な取り組み、施設と職員の存在意義について説明できること。 3. 社会教育の現場から学び、その特徴、意義、課題について報告できること。 の3点を達成することが求められる。 成績は、期末レポート（40%）、学校外の学習機会に関するプレゼンテーション（40%）、各授業で提出する小レポート（20%）で評価する。
履修上の注意
（関連科目）教育社会学 （備考）
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
岩槻知也編著 2016『社会的困難を生きる若者と学習支援』明石書店など。適宜講義中に指示する

授業名称		担当教員氏名	
生涯学習支援		吉田敦彦、西田芳正、森岡次郎、伊井直比呂、吉武信二	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
5名の教員によるオムニバス形式。生涯学習支援に関する事例紹介と現状の問題点を様々な側面から取り上げ、今後の望ましい方向性について講義し、その具体的な計画と立案を検討する。 各講義では、生涯学習における学習者の多様な特性に応じた学習支援に関する知識を得るとともに、効果的な支援を実現するための技能を修得させる。
到達目標
地域社会で学ぶことの意義について、多様な観点から、具体的な実践場面の考察を通じて学習するとともに、生涯学習支援者としての実践力を身につけるために、学習講座の企画実施に関するプロセスやワークショップ的手法などについて学ぶ。 具体的には自らの興味関心に即して、生涯学習のフィールドの実態を知り、効果的な参画を立案することができる能力を身に付けることを目標とする。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション授業の進め方など (森岡次郎)	テーマに関連する領域の実践例について調査し、自分がどのように関われば、効果的な支援が実現するかを検討する。
第2回	生涯学習の理念と実践生涯学習とは何か (森岡次郎)	テーマに関連する領域の実践例について調査し、自分がどのように関われば、効果的な支援が実現するかを検討する。
第3回	身の回りの生涯学習について 具体的な生涯学習支援の実践を意識する (森岡次郎)	テーマに関連する領域の実践例について調査し、自分がどのように関われば、効果的な支援が実現するかを検討する。
第4回	留学生に必要な学習支援 (伊井直比呂)	学習言語や論文作成に必要な表現の支援について自己の支援力を深める場に臨場して考える。
第5回	留学生の家族に必要な学習支援 (伊井直比呂)	留学生家族の生活と言語習得支援のあり方について、困難な事情を抱える方と直接的な対話を通して支援方法を考える。
第6回	国際協力の視点から見た生涯学習支援 (伊井直比呂)	渡日生の学校教育における学習支援の実践における方法と可能性および課題を知ることによって自らの支援方法を考える
第7回	就学以前の教育条件の格差是正の取り組み (西田芳正)	テーマに関連する領域の実践例について調査し、自分がどのように関われば、効果的な支援が実現するかを検討する。

第 8 回	「子どもの貧困」対策と学習支援 (西田芳正)	テーマに関連する領域の実践例について調査し、自分がどのように関われば、効果的な支援が実現するかを検討する。
第 9 回	学校教育機会を奪われた人々への学習支援 (西田芳正)	テーマに関連する領域の実践例について調査し、自分がどのように関われば、効果的な支援が実現するかを検討する。
第 10 回	学校教育内における健康教育の実態と問題点 (吉武信二)	テーマに関連する領域の実践例について調査し、自分がどのように関われば、効果的な支援が実現するかを検討する。
第 11 回	学校教育外に求められる健康教育とスポーツ活動のあり方 (吉武信二)	テーマに関連する領域の実践例について調査し、自分がどのように関われば、効果的な支援が実現するかを検討する。
第 12 回	健康福祉を充実するための施策と生涯学習支援 (吉武信二)	テーマに関連する領域の実践例について調査し、自分がどのように関われば、効果的な支援が実現するかを検討する。
第 13 回	「学校外の多様で適切な学習活動」(教育機会確保法)の事例検討 (吉田敦彦)	テーマに関連する領域の実践例について調査し、自分がどのように関われば、効果的な支援が実現するかを検討する。
第 14 回	オルタナティブ教育から見た生涯学習支援 (吉田敦彦)	テーマに関連する領域の実践例について調査し、自分がどのように関われば、効果的な支援が実現するかを検討する。
第 15 回	授業のまとめ：生涯学習実践の意義と可能性 (吉田敦彦)	授業の全体を振り返り、生涯学習実践の意義と可能性について考察する
第 16 回	レポート提出	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、自らの興味関心に即して、生涯学習のフィールドの実態を知り、効果的な参画を立案することができる能力習得を達成することが求められる。成績評価については、授業への参加状況(50%)とともに、上記の授業目標の到達度をはかる期末レポート(50%)により評価する。
履修上の注意
(関連科目) PBL 演習(生涯学習と設計) (備考)
教科書
授業中に指示する。
参考文献
授業中に指示する。

授業名称		担当教員氏名	
生涯スポーツ指導		吉武信二	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
第1週にガイダンスでこの授業の意義や展開計画について説明します。第2週目以降は、スポーツ指導に必要な条件,スポーツによる身体的効果,心身の発育発達に応じた身体教育とスポーツ指導,事故予防と救急処置などをテーマに、受講生の素朴な質問にできるだけ答えながら展開していきます。これまでのスポーツ経験の反省や検証を行うだけでなく、これからのスポーツ実践や指導に際し、より効果的な方法を検討するのに役立つ内容を提供したいと思います。特に専門的なスポーツ指導者にならない人でも、将来親となり自分の子どもの育児場面に向き合う場合や、地域の世話役などで子どもや高齢者の世話を行う機会がある場合、この授業で得たことが活かせると思われます。
到達目標
テーマは「生涯にわたる適切な身体教育・スポーツ指導」の追究。スポーツは身体を良好な状態にするだけでなく、心も豊かにする効果が期待できるすばらしいものですが、その指導が不適切であった場合は、けがや病気、運動嫌い、スポーツに対する偏見、オーバートレーニングなど、心身に望ましくない影響を及ぼすことがあります。よって、これを防止し、スポーツを実施する人々の多様な目的を効果的に達成させるために、最低限必要とされる指導上の知識や方法の習得を目標とします。 (達成目標) 1. 人々に対する発育発達段階毎の支援・指導・実践に必要な基礎的・専門的知識を修得する。 2. 修得した知識を効果的に活用・実践できる能力を修得する。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	授業全般ガイダンス,生涯スポーツ指導および身体教育の意義とその機会	生涯スポーツと身体教育の必要性
第2回	スポーツ指導に必要な条件,スポーツによる身体的効果(身体組成,ダイエット,体力向上,トレーニング,ストレス解消効果)	スポーツ指導の基本,スポーツが身体に及ぼす影響
第3回	心身の発育発達に応じた身体教育とスポーツ指導	スキヤモンの発育曲線,成長過程の身体の変化
第4回	小学生までの身体教育とスポーツ指導,神経系発達とスキルの指導	神経系の発達,子どものスポーツ指導
第5回	中学生の身体教育とスポーツ指導,循環器系の発達(持久力トレーニングとLT向上効果)	第二次性徴期の身体教育,早期専門化,バーンアウト予防
第6回	高校生の身体教育とスポーツ指導,筋骨格系全般の充実,専門的トレーニングの入門	筋肥大の重要性
第7回	大学生・成人期の身体教育とスポーツ指導,筋力パワー系の発達	筋肥大と運動能力,トレーニングの原則と原理

第 8 回	中年期の身体教育とスポーツ指導,健康・ダイエット・疾病予防(基礎代謝向上と有酸素運動)	基礎代謝・運動代謝・エネルギー代謝
第 9 回	高齢者の身体教育とスポーツ指導,健康的な生活習慣の維持管理	ADL と QOL
第 10 回	事故予防と救急処置Ⅰ(緊急時の対応)	救急救命法,心肺蘇生法
第 11 回	事故予防と救急処置Ⅱ(外傷,RICE 処置など)	応急手当,RICE 処置
第 12 回	スポーツ指導の実際Ⅰ(指導計画例と留意点)	安全・効果的・楽しい内容の指導計画作成、運動環境整備、運動量確保
第 13 回	スポーツ指導の実際Ⅱ(言語教示と指導上のテクニック)	指導方法と言語教示,ルールの設定と工夫
第 14 回	まとめⅠ・ディスカッション(学生からの質問に対する回答、討議)	各自質問を準備・検討
第 15 回	まとめⅡ・Q & A(生活の中にある疑問について検討)	各自疑問点を準備・検討
第 16 回	レポート提出	
		講義内容の理解を深めるため、各回の授業計画に関連する事項について、予習・復習をしておいて下さい。また、インターネットやテレビ番組など、一般のメディアで提供されているスポーツの指導や実践情報についても興味を持ってチェックし、その安全性や妥当性について考える習慣をつけることも授業時間外学習に含まれます。さらに、レポート作成のためにも、講義の内容が実際に自分の生活の中でどのように活用できるかを、その都度検討して下さい。

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 人々に対する発育発達段階毎の支援・指導・実践に必要な基礎的・専門的知識を修得する。 2. 修得した知識を効果的に活用・実践できる能力を修得する。 の2点を達成することが求められる。 中でも授業で学習した知識を正しく理解しているか、修得した知識をどのように活用するか、あるいは実際に行った実践から正しい考察ができているかに着目し、その計画の妥当性や実践報告の内容を重視する。成績は授業への参加度・取り組み姿勢(50%)と期末レポート(50%)から総合的に評価します。C(合格)となるための目安としては、最低限の正確な知識の修得とレポート提出(大きな誤りのない計画・実践力の修得)が必要となります。

履修上の注意
(関連科目) 教育福祉と健康 (備考) 第1回目の授業において、全体の授業計画および受講に際して必要な情報を提示します。
教科書
適宜、資料を配付します。
参考文献
吉武信二著「成功する自己採点式ダイエット-健康科学の立場からリバウンドしないセーフティダイエットを実践する-」(大学教育出版)

授業名称		担当教員氏名	
グローバル・コミュニケーション演習		吉原雅昭	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 前	選択	演習

授業概要
貧困、児童虐待、DV、障害児者の地域生活支援、認知症高齢者ケア等、現代の教育や福祉の諸課題は、日本だけで生じているわけではない。日本の政策、制度、実践等を国際的な文脈の中で相対化して理解する必要性は高まっている。近年、情報化の進展により海外の情報をリアルタイムに得られる可能性は高まっている。また、海外の方々との双方向コミュニケーションの可能性も高まっている。以上をふまえると、教育や福祉の現場で働く者にとって「英語を使って仕事をする」能力を高めることは、よりよい実践の開発に役立つ可能性が高い。本演習は英文読解を基本としつつ、ヒアリング、スピーチ、ディスカッション、プレゼンテーション、ライティングも少しづつ行い、「英語を使って他の社会や他の文化を持つ人々とつながり、コミュニケーションする。英語も使いながら、様々な福祉や教育の現場で仕事をする」ための基本スキルを開発することを目指す。
到達目標
本授業の到達目標は、以下の3点である。 1. 教育や福祉に関する英語の資料を、自らの必要に即して見つけ出し、それらを理解し、日本語で説明することができる。 2. 日本の教育や福祉について、自らの関心や経験にそって英語話者と対話し、情報交換や協議を行うことができる。 3. 自らの関心に基づいて、日本の教育や福祉に関する情報を含む英語プレゼンテーションを行うことができる。また、そのような内容の英語小論文を書くことができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	演習計画づくり、受講者のリクエスト。教員が選んだ英語資料の和訳の分担について検討を開始 (教材は毎年 http://www.communitycare.co.uk/ から教員が選ぶ予定)	授業内で指示する
第2回	スヌーピーを原典で読む。アメリカの学校教育文化。英語資料の和訳の分担を決定	第1回に配布した教材を予習する。どの教材を和訳するか検討する
第3回	教員が選んだ教材の和訳。受講者の報告、第1回 社会福祉：高齢者の社会的包摂	教員が選んだ英語資料を読解する。報告者は和訳資料を作成し、報告する。
第4回	教員が選んだ教材の和訳。受講者の報告、第2回 教育：貧困と教育機会の関係	教員が選んだ英語資料を読解する。報告者は和訳資料を作成し、報告する。
第5回	教員が選んだ教材の和訳。受講者の報告、第3回 社会福祉／教育：障害者と社会的包摂	教員が選んだ英語資料を読解する。報告者は和訳資料を作成し、報告する。
第6回	教員が選んだ英語動画の視聴。当該教材に関する	受講者は、様々な方法を用いて各々が関心

	学び。受講者が、各々関心を持つ課題に関する英語資料を見つけ出す演習の開始	を持つ課題に関する英語資料を探索する。教員は、随時、助言する。
第7回	英語でショートスピーチの演習。 受講者が学ぶ英語資料選びについて検討を深める	英語によるショートスピーチ（資料配布なし）の準備をする。ショートスピーチの課題等は第6回に説明する。
第8回	英語でディスカッションを行う演習。 受講者が和訳する英語資料を確定し、報告順を決定	教員が指示したテーマについて、英語で議論する準備を行う。議論するテーマ等については、第7回に説明する。
第9回	各受講者が選んだ英語資料の和訳。受講者の報告、第1回	各受講者が選んだ英語資料を、読解する。報告者は、和訳資料を作成して報告する。
第10回	各受講者が選んだ英語資料の和訳。受講者の報告、第2回	各受講者が選んだ英語資料を、読解する。報告者は、和訳資料を作成して報告する。
第11回	各受講者が選んだ英語資料の和訳。受講者の報告、第3回	各受講者が選んだ英語資料を、読解する。報告者は、和訳資料を作成して報告する。
第12回	各受講者が選んだ英語資料の和訳。受講者の報告、第4回	各受講者が選んだ英語資料を、読解する。報告者は、和訳資料を作成して報告する。
第13回	英語レジュメを使って短時間の口頭報告を行う演習	英語レジュメを使った口頭報告を準備。準備方法等は第12回に説明する。
第14回	英語小論文の提出。全員の作品を学ぶ。添削も行う	英語小論文の作成。執筆方法は第13回に説明する。
第15回	英語小論文の完成。演習の振り返り	助言を活かして、英語小論文を再提出

成績評価方法	
本演習では毎回、受講者に演習課題が示される。成績評価は、各受講者の各授業における課題への取り組みをすべて評価し、それらを総合して行う。60点以上を合格点とする。	
履修上の注意	
関連科目：グローバル・コラボレーション論、教育福祉国際インターンシップ	
教科書	
とくに定めない。授業中に担当教員が教材を配布する。 本演習で参照するWEBサイトの例 http://www.communitycare.co.uk/	
参考文献	
浅井満智子(2020)『伝わる 短い英語』東洋経済新報社 他の参考文献は、演習中に適宜示す。	

授業名称		担当教員氏名	
教育福祉国際インターンシップ		関川芳孝、伊井直比呂、吉田敦彦、東優子、山野則子、吉田直哉	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 後	選択	演習

授業概要
教育福祉国際インターンシップは、教育福祉の学修過程における自らの探究や研究内容に基づいて、各自でそれに相応しい国内施設や国際機関、あるいは研修場所を探して自らのテーマに従って一定期間取り組みます。これにより、実践的研究（あるいは研究的実践）を積みながら現実と理論の符合点や相互の修正点を把握して、現実の現代社会における課題を理解します。また、教員が主催する海外スタディーツアー研修（約2週間）などに参加する場合は、事前学習、海外・国内研修先での研修や授業参加、帰国後の報告書作成、報告会などで各自の学修を深めます（対象となる海外スタディーツアー研修は別途通知します／過去の訪問先は、フィリピン（伊井）、アメリカハワイ州・イリノイ州（東・山野）、ニュージーランド（吉田）、ベトナム（東）、リトアニア+エストニア、ドイツ（伊井）などです）。
到達目標
本授業の到達目標は、以下の3点である。 (1) 自らの問題意識や研究内容について研修計画作成並びに実施後の研修成果を点検することができる。 (2) 現代社会の諸問題に臨場することで理論的学修内容との符合点と修正点を論理的に説明することができる。 (3) 以上の成果をSDGsの意義に即して論述することができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	ガイダンスと研修計画の作り方	授業内で指示する
第2回	個別指導／海外研修スタディーツアーはグループ別指導／さくらサイエンスプランは集合指導	確かな成果を得られるように事前・事後学習について担当教員と相談して進める
第3回	①計画書作成 ②各自の研修／スタディーツアー等による研修 ③途中の報告と振り返り ④研修成果の点検 ⑤報告書作成	
第4回		
第5回		
第6回		
第7回		
第8回		
第9回		
第10回		
第11回		
第12回		
第13回		
第14回		
第15回	報告発表会	授業内で指示する

成績評価方法
成績の評価は次の観点と割合で行う。研究計画書の内容と研修およびその報告の符合点（60％）。さらに成果の点検に基づく報告書全体の内容および発表（40％）で評価する。
履修上の注意
関連科目：グローバル・コラボレーション論、グローバル・コミュニケーション演習
教科書
適宜指示する。
参考文献
授業中に資料を配布する。

授業名称		担当教員氏名	
PBL 演習 (ESD-A)		伊井直比呂	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 前	選択	演習

授業概要
政治経済／公共的事象から見た国内の「縮小社会」と国際的な「人口拡大社会」の問題の本質を理解し、異なる持続可能性の両側面からの考察フィールドを獲得する。予定される考察フィールドは、国内的に「人口増加社会と減少社会」「人間開発と社会保障」「環境」の3領域とし、国際的には「人間開発と教育」「環境と国際的視点」「災害と脆弱性」とする。また、異なる国の課題及び異なる専門分野にもとづく問題解決思考群を共有し、国際的に実施可能かつ目的的に最適解（目標）となる学習カリキュラムを開発する。 なお、PBL プログラム(ESD-A)はSDG4「質の高い教育をみんなに」に対応している。
到達目標
PBLプログラム (ESD-A) は、持続可能性の観点から国内外の諸事象の問題を捉え直し、海外（フィリピン）の学生（大学院生含む）と持続可能社会の構築のための授業カリキュラム開発する能力を養うことを目標とする。 1.現代社会の一員としての高い倫理観を持ち、他者と協働して課題に取り組むことができる。 2.PBL プログラムで学んだことを持続可能な社会の実現と関連付けて説明することができる。 3.PBL 演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 4.国際教育カリキュラムを作成するにあたり海外大学生と協働することができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション：この演習と PBL プログラムの講義科目で学んだ内容との関わり、持続可能社会の実現への取り組みとの関連、この演習の到達目標と評価方法（ルーブリック）について解説する。	事前：これまでのPBLプログラム（ジェンダー論）で学んだ内容の復習
第2回	ワークショップ1：問題の発見 国際・人口拡大社会における問題について討論	資料を読み討論内容を準備する
第3回	ワークショップ2：問題の発見 国内・人口縮小社会における問題について討論	資料を読み討論内容を準備する
第4回	人間開発と教育について討論	資料を読み討論内容を準備する
第5回	人間開発と環境および災害について討論	資料を読み討論内容を準備する
第6回	第5回までの成果をグループでまとめる。	資料を読みまとめる
第7回	英語プレゼンとして発表と質疑（Skype）	英語でまとめる。
第8回	フィリピンからの発表と質疑（Skype）	フィリピンからの資料を読みまとめる
第9回	フィリピン学生とのグループマッチングと	フィリピンからの資料を読みまとめる

	授業トピックの選択	
第10回	フィリピン学生との授業づくり 単元決定	フィリピン学生との定期的な連絡
第11回	フィリピン学生との授業づくり 両国の3時間分の授業範囲と内容を検討	フィリピン学生との定期的な連絡
第12回	フィリピン学生との授業づくり 両国の授業構成並びに展開案を交換	フィリピン学生との定期的な連絡
第13回	授業構成発表会の準備：発表内容の構成	フィリピン学生との定期的な連絡
第14回	授業構成発表会：相互発表	既存の学習概念との比較
第15回	振り返りと全体のまとめ	課題提出への準備

成績評価方法
授業目標の1～4の達成度を軸にして成績評価を行う。 目標の達成度の評価は、各回の演習活動への取り組みとその成果、また成果のプレゼンテーションについて、1回目の授業で学生に明示したルーブリックを基準として評価する。
履修上の注意
この授業は、PBL プログラムの最終科目と位置付けられる科目であるため、履修にあたっては、「現代システム科学域 PBL プログラム履修課程」において履修を指定している科目を履修済み、あるいは並行して履修している必要がある。 頻繁にディスカッションがある。また社会科教育法、教育福祉の諸問題 C（多文化共生）を履修していることが望ましい。フィリピンとの協働はフィリピン教育大学の学生と行う。フィリピンとの時差の関係から場合によっては土曜日に講義を行うことがある。
教科書
資料を適宜配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
PBL 演習 (ESD-B)		伊井直比呂	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 前	選択	演習

授業概要
地理的/歴史的事象から見た「人口拡大社会」と「人口縮小社会」の諸側面の動態を問題の本質を理解し、異なる持続可能性の両側面からの考察フィールドを獲得する。予定される考察フィールドは、「人間開発と社会保障」、「環境」、「人間開発と教育」、「環境」、「災害と脆弱性」5領域とする。また、異なる国（フィリピン）の同様のフィールドにおける課題を共有し、異なるアプローチにもとづく問題解決思考群を交換して国際的に実施可能かつ目的的に最適解（目標）となる学習カリキュラムを開発する。なお、PBL プログラム(ESD-B)は SDG4「質の高い教育をみんなに」に対応している。
到達目標
PBLプログラム (ESD-B) は、持続可能性の観点から国内外の諸事象の問題を捉え直し、海外（フィリピン）の学生（大学院生含む）と持続可能社会の構築のための授業カリキュラム開発する能力を養うことを目標とする。 1.現代社会の一員としての高い倫理観を持ち、他者と協働して課題に取り組むことができる。 2.PBL プログラムで学んだことを持続可能な社会の実現と関連付けて説明することができる。 3.PBL 演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 4.国際教育カリキュラムを作成するにあたり海外大学生と協働することができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション：この演習と PBL プログラムの講義科目で学んだ内容との関わり、持続可能社会の実現への取り組みとの関連、この演習の到達目標と評価方法（ルーブリック）について解説する。	資料を読みまとめる
第2回	ワークショップ1：問題の発見 国際・人口拡大社会における地理的問題について討論と発見	資料を読み討論内容を準備する
第3回	ワークショップ2：問題の発見 国内・人口縮小社会における地理的問題についてその原因や課題（脆弱性）の発見	資料を読み討論内容を準備する
第4回	人間開発と教育について討論	資料を読み討論内容を準備する
第5回	人間開発と環境および暮らしと災害について討論	資料を読み討論内容を準備する
第6回	第5回までの成果をグループでまとめる。	資料を読みまとめる
第7回	英語プレゼンとして発表と質疑（Zoom）	英語でまとめる。
第8回	フィリピンからの発表と質疑（Zoom）	フィリピンからの資料を読みまとめる
第9回	フィリピン学生とのグループマッチングと	フィリピンからの資料を読みまとめる

	授業トピックの選択	
第10回	フィリピン学生との授業づくり 単元決定	フィリピン学生との定期的な連絡
第11回	フィリピン学生との授業づくり 両国の3時間分の授業範囲と内容を検討	フィリピン学生との定期的な連絡
第12回	フィリピン学生との授業づくり 両国の授業構成並びに展開案を交換	フィリピン学生との定期的な連絡
第13回	授業構成発表会の準備：発表内容の構成	フィリピン学生との定期的な連絡
第14回	授業構成発表会：相互発表	既存の学習概念との比較
第15回	振り返りと全体のまとめ	課題提出への準備

成績評価方法
授業目標の1～4の達成度を軸にして成績評価を行う。 目標の達成度の評価は、各回の演習活動への取り組みとその成果、また成果のプレゼンテーションについて、1回目の授業で学生に明示したルーブリックを基準として評価する。
履修上の注意
この授業は、PBL プログラムの最終科目と位置付けられる科目であるため、履修にあたっては、「現代システム科学域 PBL プログラム履修課程」において履修を指定している科目を履修済み、あるいは並行して履修している必要がある。 頻繁にディスカッションがある。また社会科教育法、教育福祉の諸問題 C（多文化共生）を履修していることが望ましい。フィリピンとの協働はフィリピン教育大学の学生と行う。フィリピンとの時差の関係から場合によっては土曜日に講義を行うことがある。
教科書
資料を適宜配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
PBL演習（ジェンダー論）		児島亜紀子、東優子、内藤葉子、熊安貴美江	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3前	選択	演習

授業概要
PBLプログラム（ジェンダー論）の最終科目として位置づけられている。授業では、ジェンダー論の必要性和事例についての講義を行う。また数名で構成されるグループを作り、各グループでジェンダーに関連する問題関心の共有とテーマ設定、企画立案、役割分担、課題への取り組みを行う。さらに成果を報告書にまとめるとともに、最終回ではその成果発表（プレゼンテーション）を行う。なお、PBLプログラム（ジェンダー論）は、SDG5「ジェンダー平等を実現しよう」、SDG10「人や国の不平等をなくそう」と対応している。
到達目標
PBLプログラム（ジェンダー論）は、ジェンダーに関わる問題を批判的に発見し、学術的にその問いを深め、仲間と協働しながらその解決にむけて検討・実践することのできる能力を身につけることを目標としている。 具体的には、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 現代社会の一員としての高い倫理観を持ち、他者と協働して課題に取り組むことができる。 2. PBLプログラムで学んだことを持続可能な社会の実現と関連付けて説明することができる。 3. PBL演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 4. ジェンダー論の重要性について、持続可能性の観点から論理的に説明することができる。 5. グループ内での問題関心の共有、企画立案、役割分担、課題遂行を協調的かつ円滑に行える。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション：この演習とPBLプログラムの講義科目で学んだ内容との関わり、持続可能社会の実現への取り組みとの関連、この演習の到達目標と評価方法（ルーブリック）について解説する。	事前：これまでのPBLプログラム（ジェンダー論）で学んだ内容の復習
第2回	1グループ数名で構成されるグループ分け	事前：関心のあるテーマの検討
第3回	ワークショップ1：問題の発見 －グループごとの具体的なテーマの検討と設定	事前：具体的課題の例を調べる
第4回	ワークショップ2：課題の設定 －グループごとの計画作成、役割分担の確定	事後：活動計画書を作成する
第5回	テーマへの取り組み1 －資料の検討・グループ内での報告準備	事前：テーマに関連する資料収集と報告準備 事後：報告の内容の再検討
第6回	テーマへの取り組み2 －報告と意見交換	
第7回	テーマへの取り組み3 －報告と意見交換、中間発表準備	事前：中間発表案の準備
第8回	中間発表と質疑応答	
第9回	問題解決に向けたアプローチ1	事前：テーマに関連する資料の追加収集と報

	－問題点の整理と再検討	告準備
第10回	問題解決に向けたアプローチ2 －提案内容の検討	事後：提案内容の再検討
第11回	成果発表の準備1：発表内容の構成	事前：スライド・報告原稿の作成
第12回	成果発表の準備2：仕上げと発表練習	事後：成果発表に備えた練習
第13回～ 第14回	成果発表と質疑応答	事後：発表と質疑応答をふまえたレポートの作成
第15回	成果発表と質疑応答3、全体のふり返り	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 現代社会の一員としての高い倫理観を持ち、他者と協働して課題に取り組むことができる 2. PBLプログラムで学んだことを持続可能な社会の実現と関連付けて説明することができる 3. PBL演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる 4. ジェンダー論の重要性について、持続可能性の観点から論理的に説明することができる 5. グループ内での問題関心の共有、企画立案、役割分担、課題遂行を協調的かつ円滑に行える の5点を達成することが求められる。成績は、グループ活動に取り組む姿勢（40%）、プレゼンテーションと質疑応答（30%）、レポート（30%）をもとに、到達目標の達成度について、1回目の授業で学生に明示したルーブリックを基準として評価する。
履修上の注意
この授業は、PBLプログラムの最終科目と位置付けられる科目であるため、履修にあたっては、「現代システム科学域 PBLプログラム履修課程」において履修を指定している科目を履修済み、あるいは並行して履修している必要がある。 PBLジェンダー論コースに挙げられた科目を受講し、所定の単位を取得した学生が参加できる。 テーマに関連する文献、新聞およびニュース等の報道に日頃から接するように心がける。 各テーマの学習を進めて行くために必要な資料収集、フィールドワーク、報告準備やデータの分析などは、授業時間外に求められることがある。 なお、本演習は女性学研究センター所属の教員が原則として担当する。
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
PBL 演習（コラボレーション）		山野則子・木曾陽子・隅田好美	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	3 通	選択	演習

授業概要
PBL プログラム（コラボレーション）の最終科目として位置づけられている。多様な側面を持つ人の全体性を回復、維持、向上あるいは育むためには、人が本来持つ強さを活性化する支援が重要であり、その支援には、多様な領域の専門性と同時に各領域をつなぎ、支援を全体として統合する各領域間の連携・協働が必須である。本科目は、多様な学問や専門性を身につけた学生が最終的に違った専門性との統合を試みる、学際性の最終段階としての位置づけで、複数の専門職間連携教育（Inter-professional Education＝IPE）である。授業では、連携・協働の概念および連携・協働の必要性と事例についての演習を行う。連携・協働の実践力を養成するため、多様な対人支援領域（社会福祉、教育、保育、心理、保健など）を専門とする学生から成るグループワークやフィールドワークにより体験的に他領域の支援理念や支援方法の理解を促進し、多職種や多機関の連携・協働のための具体的方法を習得する。同じ場面を共有した上で異なる専門性を持つメンバーによるディスカッションにおいて、それぞれの視点の違いを明確化、葛藤の体験、その上で葛藤のマネジメント、これらの協働の実践を行う。さらに対人支援活動における協働活動の成果を報告書にまとめるとともに、最終回に成果発表（プレゼンテーション）を行う。なお、PBL プログラム（コラボレーション）は、SDG17「パートナーシップで目標を達成しよう」に対応している。
到達目標
PBLプログラム（コラボレーション）は、協働をグループで実践することにより、対人支援活動における協働の重要性を理解し、多職種の協働による「誰1人取り残さない」視点を獲得し、将来キーマンとなって協働活動を実践することのできる能力を身につけることを目標としている。 具体的には、以下の能力を身につけることを目標とする。 1.対人支援活動を行うものとして高い倫理観を持ち、課題に取り組むことができる。 2.自身の専門領域とは違う専門領域について支援理念や方法などを理解し説明できる。 3.専門性の違いから生じる葛藤やそのマネジメントについて理解し説明できる。 4.PBLプログラムで学んだことを持続可能な社会の実現と関連付けて説明することができる。 5.PBL演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 6.対人支援活動における協働の重要性について、持続可能性の観点から論理的に説明することができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション：この演習と PBL プログラムの講義科目で学んだ内容との関わり、持続可能社会の実現への取り組みとの関連、この演習の到達目標と評価方法（ループリック）について解説する。多様な専門性をもつ学生によるグループ構成で	

	グループ分けを行う。	
第2回	連携・協働概念の検討、連携・協働のプロセス	事後：資料を復習する
第3回	グループ発表の準備：「対人援助職の目的」と「自身の専門領域の目的」「その共通点と相違点」	事前：自身の専門領域の特徴、根拠、具体例など
第4回～第5回	グループ発表：他の専門領域の支援の視点を 知る、気づきや意見を述べる。	事前：PPT 作成
第6回	ワーク：連携・協働形成プロセス（1）： 連携・協働のメリット、デメリット、連携・協働に必要な要素とはなにか。	事前：連携のメリット、デメリットの具体例を新聞等で調べておく
第7回	ワーク：連携・協働形成プロセス（2）：葛藤をどうマネージするか。	事後：現場を知ることや事例検討をすること自体が目標ではなく、同じ体験をしてどう感じ方が違うのか、それはなぜか、などの視点の違うメンバーで議論することが目標。自身の目標などフィールド計画を立てる。
第8回～第12回	専門職協働を体験・実践する（3チームに分かれて）	事前：体験現場の業務内容を事前に調べる 事後：体験を整理する、メンバーで議論
第13回	各グループごとでの振り返り：体験を共有する（1）	事前：報告できるよう準備する
第14回	各グループごとでの振り返り：体験を共有する（2）	事後：成果発表に備えて練習をする。
第15回	成果発表会、連携・協働の意義の再検討	事後：コラボレーション報告書を作成する。

成績評価方法

授業目標の1～6の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、

- 1.対人支援活動を行うものとして高い倫理観を持ち、課題に取り組むことができる。
- 2.自身の専門領域とは違う専門領域について支援理念や方法などを理解し説明できる。
- 3.専門性の違いから生じる葛藤やそのマネジメントについて理解し説明できる。
- 4.PBLプログラムで学んだことを持続可能な社会の実現と関連付けて説明することができる。
- 5.PBL演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる。
- 6.対人支援活動における協働の重要性について、持続可能性の観点から論理的に説明することができる。

の6点を達成することが求められる。成績は、授業の初めの方で行うプレゼン（20%）、活動に取り組む姿勢（20%）、活動計画書（20%）、活動報告書（20%）、最終の成果発表会でのプレゼンテーションと質疑応答（20%）をもとに、到達目標の達成度について、1回目の授業で学生に明示したループ

リックを基準として評価する。

履修上の注意

この授業は、PBL プログラムの最終科目と位置付けられる科目であるため、履修にあたっては、「現代システム科学域 PBL プログラム履修課程」において履修を指定している科目を履修済み、あるいは並行して履修している必要がある。

（関連科目）履修の条件として、対人援助の専門職に興味があること。可能なら、社会福祉実習 1、教職実習、保育実習 1,2,3 の実習科目をすでに履修したあるいは履修中であること。また、フィールド体験で学校でのフィールド体験に取り組みたい人は、スクールソーシャルワーク演習を履修していることが望ましい。（さらに学校に出向いた活動をしている／したことがある、とより望ましい。）

（備考） -

教科書

特に指定しない。授業時に毎回資料、レジュメを配布する。

参考文献

適宜指示する

授業名称		担当教員氏名	
PBL演習（地域および都市における排除・共生・参加）		吉原雅昭、東根ちよ、西田芳正、嵯峨嘉子	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3通	選択	演習

授業概要
PBLプログラム（地域および都市における排除、共生、参加）の最終科目として位置づけられている。授業では地域社会、地域福祉、都市における排除、共生、参加に関する要点を講義で再確認し、グループワークの準備をする。次に、1グループ数名で構成されるグループ分けを行う。各グループはフィールドワークを行う自治体（市区町村）か、より狭域の地域社会を決め、「排除、共生、参加」に関する課題を具体的に決める。データを集め、考察し、実行可能な課題解決や改善の提案を作成する。以上を報告書にまとめるとともに、最終回にプレゼンテーションを行う。
到達目標
PBLプログラム（地域および都市における排除、共生、参加）は、地域および都市における排除、共生、参加の問題について具体的にデータを集め、多角的に考察し、実行可能な解決案や改善案を具体的に企画できる能力を身につけることを目標としている。具体的には、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 現代社会の一員としての高い倫理観を持ち、他者と協働して課題に取り組むことができる。 2. 受講者が関心を持つ自治体や地域社会における排除、共生、参加の問題について、具体的にデータを集めて多角的に考察できる能力を獲得する。 3. 考察した問題や課題について、実行可能な解決案や改善案を具体的に企画できる能力を獲得する。 4. 以上を、他の受講者と協働し小集団活動として展開する力を獲得する。 5. PBL演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション:この演習とPBLプログラムの講義科目で学んだ内容との関わり、持続可能社会の実現への取り組みとの関連、この演習の到達目標と評価方法（ルーブリック）について解説する。地域社会や都市を科学的に分析する知見の要点を再確認する	講義内容を復習し、各位のテーマ決定への考察を深める
第2回	地域福祉に関する知見の要点を再確認する	講義内容を復習し、各位のテーマ決定への考察を深める
第3回	地域社会および都市における排除、共生、参加に関する知見の要点を再確認する	講義内容を復習し、各位のテーマを決める
第4回	グループの編成、各グループのテーマ決定	次週のプレゼンテーションに向けて準備する
第5回	各グループの活動計画プレゼンテーション	質疑応答や教員からの助言を整理し、グループ活動に役立てる
第6回	グループワーク 1 問題点の整理	ワークの成果を整理し、次回の課題を定める
第7回	グループワーク 2 問題点を構成する要因群整理	ワークの成果を整理し、次回の課題を定める
第8回	グループワーク 3 解決のための優先事項	ワークの成果を整理し、次回の課題を定める
第9回	グループワーク 4 持続可能性の観点からの整理	次週のプレゼンテーションに向けて準備する

第10回	各グループの中間報告と質疑応答	質疑応答や教員からの助言を整理し、グループ活動に役立てる
第11回	グループワーク5 提案内容の整理	ワークの成果を整理し、次回の課題を定める
第12回	グループワーク6 提案内容の焦点化	ワークの成果を整理し、次回の課題を定める
第13回	グループワーク7 主たる提案と従属的提案整理	次週のプレゼンテーションに向けて準備する
第14回	最終プレゼンテーション、質疑応答	質疑応答等で学んだことを、まとめておく
第15回	演習のまとめ	演習全体を通した学びを、振り返っておく

成績評価方法
授業目標の1～5の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 現代社会の一員としての高い倫理観を持ち、他者と協働して課題に取り組むことができる。 2. 受講者が関心を持つ自治体や地域社会における排除、共生、参加の問題について、具体的にデータを集めて多元的に考察できる能力を獲得する。 3. 考察した問題や課題について、実行可能な解決案や改善案を具体的に企画できる能力を獲得する。 4. 以上を、他の受講者と協働し小集団活動として展開する力を獲得する。 5. PBL演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 の5点を達成することが求められる。成績は、活動計画プレゼンテーション（25%）、中間報告（25%）、最終プレゼンテーション（25%）、期末レポート（25%）をもとに、到達目標の達成度について、1回目の授業で学生に明示したルーブリックを基準として評価する。
履修上の注意
この授業は、PBLプログラムの最終科目と位置付けられる科目であるため、履修にあたっては、「現代システム科学域 PBLプログラム履修課程」において履修を指定している科目を履修済み、あるいは並行して履修している必要がある。 関連科目：地域福祉論A、地域福祉論B、地域社会学、社会福祉原論、社会福祉運営論、教育福祉の諸問題A（貧困と社会）、環境哲学と現代社会、地理学基礎、地域研究
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
PBL 演習（生涯学習と設計）		吉田敦彦、森岡次郎、吉武信二、伊井直比呂	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 通	選択	演習

授業概要
PBL プログラム（生涯学習と設計）の最終科目として位置づけられている。授業では、生涯学習活動の意義と必要性、生涯学習におけるカリキュラムと制度設計の実例についての講義を行う。また 1 グループ数名で構成されるグループ分けを行い、各グループで生涯学習の企画・計画、連携協力機関との調整等、実践を行う。さらに活動の成果を報告書にまとめるとともに、最終回に成果発表（プレゼンテーション）を行う。なお、PBL プログラム（生涯学習と設計）は、SDG4「質の高い教育をみんなに」と対応している。
到達目標
生涯学習をグループで企画・実践することにより、人生を通じた学習活動の重要性を理解し、将来、地域のリーダーとして生涯学習のコーディネート、ファシリテーションを実践することのできる能力を身につけることを目標とする。具体的には、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 生涯学習の重要性について、持続可能性の観点から論理的に説明できること。 2. 企画段階での検討、様々な機関との連携協力、無理のない運営等の重要性を説明できること。 3. 協調性、寛容力、リーダーシップをもって、グループ活動を円滑に行えること。 4. 生涯学習活動の成果をわかりやすくかつ正確に他人に伝えられること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション：この演習とPBLプログラムの講義科目で学んだ内容との関わり、持続可能社会の実現への取り組みとの関連、この演習の到達目標と評価方法（ルーブリック）について解説する。	事前：これまでのPBLプログラム（生涯学習と設計）で学んだ内容を復習する。 事後：持続可能性に関するレポートを作成する。
第2回	1グループ5名程度で構成されるグループ分け。	
第3回	各チームの基本テーマ（公民館など学校以外の学び場について、大人を対象とした生涯学習に関する実践など）に関わる具体的課題を設定する。	事前：具体的課題の例を調べる。
第4回		
第5回	各チームで、取り組むべき具体的な活動の企画・計画を作成する。	事後：生涯学習活動計画書を作成する。
第6回		
第7回	各チームで、活動場所に関わる連携協力機関との調整を行う。	事前：活動場所に関わる連携協力機関について調べる。
第8回		

第9回	各チームで、生涯学習活動を実践する。	事前：生涯学習活動の実践に必要な資料や道具などを準備する。 事後：生涯学習活動の内容を記録した資料を整理する。
第10回		
第11回		
第12回		
第13回	各チームで、成果発表の準備（スライドの作成など）を行う。	事後：成果発表に備えて練習をする。
第14回		
第15回	成果発表	事後：生涯学習活動報告書を作成する。

成績評価方法
授業目標の1～5の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 現代社会の一員としての高い倫理観を持ち、他者と協働して課題に取り組むことができる。 2. PBLプログラムで学んだことを持続可能な社会の実現と関連付けて説明することができる。 3. PBL演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 4. 生涯学習の重要性について、持続可能性の観点から論理的に説明することができる。 5. 企画段階での検討、様々な機関との連携協力、無理のない運営等の重要性を説明することができる。 の5点を達成することが求められる。成績は、初回の授業で課すレポート（20%）、生涯学習活動に取り組む姿勢（20%）、生涯学習活動計画書（20%）、生涯学習活動報告書（20%）、発表会でのプレゼンテーションと質疑応答（20%）をもとに、到達目標の達成度について、1回目の授業で学生に明示したルーブリックを基準として評価する。
履修上の注意
この授業は、PBLプログラムの最終科目と位置付けられる科目であるため、履修にあたっては、「現代システム科学域 PBLプログラム履修課程」において履修を指定している科目を履修済み、あるいは並行して履修している必要がある。 生涯学習活動の実践では、大学外での作業が伴う場合がある。とりわけ社会的弱者（高齢者、障害者、幼児など）と関係する活動を行う場合には、実践フィールドにおけるリスクとその回避方法について十分な知識を身につけておく。 関連科目：社会教育入門、保育学概論、生涯学習概論、生涯スポーツ指導、教育福祉の諸問題C（多文化共生）、社会教育計画
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
未来デザインインターンシップ		大塚耕司、伊井直比呂、遠藤崇浩、岡本真彦、菅野正嗣、西尾純二、野津亮、牧岡省吾、工藤宏司、森岡次郎、柳本豪一	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	1後	必修	演習

授業概要
未来デザインコースは、目指すべき未来の社会を創造すべく自分でその道筋をデザインし、領域横断的応用力とシステムの思考力を用いて、現代社会の課題解決に取り組むことによって、持続可能な社会の実現を実行できる人材を養成することを目的としている。本授業では、学生がインターンシップ指導教員の助言を受けながら自治体、NPO、企業などのインターンシップ先を探し、事前学習を行った上でインターンシップに参加することで、学生自身に取り組むべき課題を発見させる。
到達目標
本授業では、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 自らが未来デザインコースにおいて取り組むべき課題について、持続可能な社会の実現との関係を含めて説明できること。 2. インターンシップで赴いたフィールドにおける取り組みから、取り組むべき課題に関する新たな知見を得て、その内容を説明することができること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション、未来デザインコースのカリキュラム説明、インターンシップ指導教員の割り当て	授業内で指示する。
第2回 ～ 第3回	未来デザインコースで取り組むべき課題に関するグループディスカッションを行う。	各自で資料収集をしながら取り組むべき課題について考える。
第4回 ～ 第5回	インターンシップ指導教員の指導を受けながらインターンシップ先の選定を行う。	インターンシップ先の資料収集を行う。
第6回 ～ 第12回	インターンシップに参加し、各自の課題に取り組む（延べ10日間程度）。	インターンシップ中の取り組みについてインターンシップノートに記録を取り、考察を行う。
第13回 ～ 第14回	インターンシップでの取り組みについてインターンシップ指導教員に報告し、考察を深める。報告会での発表内容を検討する。	報告会の発表準備
第15回	報告会での発表	授業内で指示する。

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 自らが未来デザインコースにおいて取り組むべき課題について、持続可能な社会の実現との関係を含めて説明できること。 2. インターンシップで赴いたフィールドにおける取り組みから、取り組むべき課題に関する新たな知見を得て、その内容を説明することができること。 の2点を達成することが求められる。 成績を評価する方法として、インターンシップノートおよびインターンシップ報告会での発表を用いる。成績評価に占める割合は、インターンシップノート（70%）、インターンシップ報告会での発表（30%）である。
履修上の注意
関連科目：未来デザイン計画演習、未来デザインPBL演習、未来デザイン卒業研究
教科書
なし
参考文献
適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
未来デザイン計画演習		大塚耕司、伊井直比呂、遠藤崇浩、岡本真彦、菅野正嗣、西尾純二、野津亮、牧岡省吾、工藤宏司、森岡次郎、柳本豪一	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2前	必修	演習

授業概要
未来デザインコースは、目指すべき未来の社会を創造すべく自分でその道筋をデザインし、領域横断的応用力とシステムの思考力を用いて、現代社会の課題解決に取り組むことによって、持続可能な社会の実現を実行できる人材を養成することを目的としている。本授業では、1年次末に未来デザイン計画書を提出し、未来デザインコースの履修を認められた学生が、メンター教員の助言を受けながら卒業までの履修計画を精緻化するとともに、卒業研究と卒業後の計画を立案する。
到達目標
本授業では、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 自らが未来デザインコースにおいて取り組む課題が持続可能な社会の実現にどのように貢献するのかを説明できること。 2. 未来デザイン計画書に基づいて卒業までの履修計画を立てることができること。 3. 卒業研究と卒業後の計画を立案すること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション	授業内で指示する。
第2回 ～ 第3回	各自の未来デザイン計画書に関する発表とグループディスカッションを行う。	未来デザイン計画書に関する発表準備
第4回 ～ 第7回	メンター教員の指導を受けながら卒業までの履修と卒業研究について計画を立てる。	自らが取り組む課題の解決に何が必要科について考え、資料収集を行う。
第8回 ～ 第9回	各自の卒業研究の計画に関する中間発表とグループディスカッションを行う。	各自の卒業研究の計画に関する発表準備。
第10回 ～ 第13回	グループディスカッションを踏まえて、卒業までの履修と卒業研究について計画を精緻化する。	最終報告会の発表準備
第14回 ～ 第15回	最終報告会での発表	授業内で指示する。

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 自らが未来デザインコースにおいて取り組む課題が持続可能な社会の実現にどのように貢献するのかを説明できること。 2. 未来デザイン計画書に基づいて卒業までの履修計画を立てることができること。 3. 卒業研究と卒業後の計画を立案すること。 の3点を達成することが求められる。 成績は、中間発表会における発表と質疑応答(50%)、最終発表会における発表と質疑応答(50%)をもとに、到達目標の達成度について、1回目の授業で学生に明示したルーブリックを基準として評価する。
履修上の注意
本科目は未来デザインコースの学生を対象とする。 関連科目：未来デザインインターンシップ、未来デザインPBL演習、未来デザイン卒業研究
教科書
なし
参考文献
適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
未来デザインPBL演習		大塚耕司、伊井直比呂、遠藤崇浩、岡本真彦、菅野正嗣、西尾純二、野津亮、牧岡省吾、工藤宏司、森岡次郎、柳本豪一	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3通	必修	演習

授業概要
未来デザインコースは、目指すべき未来の社会を創造すべく自分でその道筋をデザインし、領域横断的応用力とシステムの思考力を用いて、現代社会の課題解決に取り組むことによって、持続可能な社会の実現を実行できる人材を養成することを目的としている。本授業では、学生のセルフプロデュースにより、社会における課題解決を実践する。学生はメンター教員の指導の下、必要に応じて他の専任教員の助言も受けながら、持続可能な社会の実現のために自らが貢献できる課題を見出し、解決方法を構想する。地域の方々や起業家、NPO、自治体、各種企業、学生が開発したアプリケーションのユーザなど、学内外の関係者と協働する学びによって、未来社会の実現を実行できる人材の育成を目指す。
到達目標
未来デザインコースは、目指すべき未来の社会を創造すべく自分でその道筋をデザインし、領域横断的応用力とシステムの思考力を用いて、現代社会の課題解決に取り組むことによって、持続可能な社会の実現を実行できる人材を養成することを目的としている。本授業には、以下の能力を身につけることを目標とする。
1. 持続可能な社会の実現のために必要な課題を発見し、その解決方法を構想することができる。 2. 学内外の関係者と協働で課題解決に取り組むことができる。 3. 課題解決の成果を分かりやすくプレゼンテーションすることができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション：この演習の進め方、到達目標と評価方法（ルーブリック）について解説する。	授業内で指示する。
第2回 ～ 第4回	メンター教員の指導を受けながら、課題の選定と解決への取り組みの計画を立てる。	課題とその解決方法に関する情報収集を主体的に行い、検討する。
第5回 ～ 第8回	課題解決に取り組む（延べ10日間程度）。	課題解決の取り組みを記録に残し、中間発表の準備を進める。
第9回	中間発表会。必要に応じてオンラインで参加する。	中間発表で得た意見について考察を深める。
第10回 ～ 第13回	中間発表を踏まえ、課題解決に取り組む（延べ10日間程度）。	課題解決の取り組みを記録に残す。

第14回 ～ 第28回	メンター教員に課題解決の成果を報告し、最終発表会の準備を行う。	最終発表会の準備。
第29回	最終発表会	最終発表会で得た意見について考察を深める。
第30回	ふり回り	課題解決の成果についてレポートにまとめる。

成績評価方法
授業目標の1～3の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 持続可能な社会の実現のために必要な課題を発見し、その解決方法を構想することができる。 2. 学内外の関係者と協働で課題解決に取り組むことができる。 3. 課題解決の成果を分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 の3点を達成することが求められる。成績は、中間発表会における発表と質疑応答(30%)、最終発表会における発表と質疑応答(30%)、課題解決の成果に関するレポート(40%)をもとに、到達目標の達成度について、1回目の授業で学生に明示したルーブリックを基準として評価する。
履修上の注意
本科目は未来デザインコースの学生を対象とする。 関連科目：未来デザイン計画演習、未来デザインインターンシップ、未来デザイン卒業研究
教科書
なし。
参考文献
適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
未来デザイン卒業研究		安倍広多、石橋勇人、岩村幸治、太田正哉、菅野正嗣、瀬田和久、中島智晴、真嶋由貴恵、宮本貴朗、村上晴美、森田裕之、渡邊真治、青木茂樹、上杉徳照、大西克実、小島篤博、佐賀亮介、永田好克、林佑樹、平林直樹、榊田聖子、森永英二、柳本豪一、吉田大介、楠木祥文、青木賜鶴子、秋庭裕、生田英輔、伊藤康人、遠藤崇浩、大塚耕司、大山克己、興津健二、酒井隆史、下村泰彦、住友陽文、相田洋明、高木佐知子、竹中規訓、中山祐一郎、西尾純二、福田珠己、水野真彦、宮脇幸生、上柿崇英、工藤宏司、黒田桂菜、住田守道、千葉知世、西川弘展、花村周寛、天島華織、藤田渡、古川朋雄、星英之、宮畑一範、吉川丈、山本由美子、阿久井康平、山東功、伊井直比呂、伊藤嘉余子、児島亜紀子、隅田好美、田垣正晋、西田芳正、東優子、山野則子、吉田敦彦、吉武信二、乾順子、木曾陽子、嵯峨嘉子、内藤葉子、濱島（宮川）淑恵、松田博幸、三田優子、森岡次郎、吉田直哉、吉原雅昭、東根ちよ、岡本真彦、総田純次、野津亮、牧岡省吾、岩佐和典、片畑真由美、河野直子、川部哲也、河村悠太、高橋幸治、飛田国人、武藤拓之	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
6	4通	必修	実験・実習

授業概要
未来デザインコースは、目指すべき未来の社会を創造すべく自分でその道筋をデザインし、領域横断的応用力とシステムの思考力を用いて、現代社会の課題解決に取り組むことによって、持続可能な社会の実現を実行できる人材を養成することを目的としている。本授業では、未来デザインPBL演習の成果を踏まえ、未来デザインコースの集大成としての卒業研究に取り組む。卒業研究の指導教員は、学生がメンター教員と相談の上で提出した希望指導教員名を踏まえて、学域教育運営委員会の中に設置された未来デザイン支援WGが、現代システム科学域 専任教員の中から選出する。

到達目標
未来デザインコースは、目指すべき未来の社会を創造すべく自分でその道筋をデザインし、領域横断的応用力とシステマ的思考力を用いて、現代社会の課題解決に取り組むことによって、持続可能な社会の実現を実行できる人材を養成することを目的としている。本授業には、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 自らが未来デザインコースにおいて取り組んだ課題について、先行研究や過去の類似の取り組みの中での位置づけと、持続可能な社会の実現における意義を明確に説明することができる。 2. 自らが未来デザインコースにおいて取り組んだ課題と得られた成果について、客観的な資料を根拠に明確に説明することができる。 3. 自らが未来デザインコースにおいて取り組んだ課題と得られた成果に基づいて、今後の展望を示すことができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション：卒業研究の進め方。	授業内で指示する。
第2回 ～ 第30回	メンター教員の指導を受けながら、未来デザインPBL演習の成果を踏まえて卒業研究に取り組む。必要に応じて追加のデータの収集を行う。	研究に必要な文献の収集、データの分析などを行う。
第31回	未来デザイン卒業研究発表会（学域全体で行う）	授業内で指示する。

成績評価方法
授業目標の1～3の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 自らが未来デザインコースにおいて取り組んだ課題について、先行研究や過去の類似の取り組みの中での位置づけと、持続可能な社会の実現における意義を明確に説明することができる。 2. 自らが未来デザインコースにおいて取り組んだ課題と得られた成果について、客観的な資料を根拠に明確に説明することができる。 3. 自らが未来デザインコースにおいて取り組んだ課題と得られた成果に基づいて、今後の展望を示すことができる。 の3点を達成することが求められる。成績は、卒業論文の研究に取り組む姿勢(20%)、卒業論文および要旨(60%)、発表(20%)で評価する。
履修上の注意
本科目は未来デザインコースの学生を対象とする。 関連科目：未来デザインインターンシップ、未来デザイン計画演習、未来デザインPBL演習
教科書
なし。
参考文献
適宜紹介する。

現代システム科学域 心理学類 シラバス(目次)

1	人間システムとサステイナビリティ	P. 489
2	心理学概論	P. 491
3	海外インターンシップ	P. 494
4	認知科学1 (知覚・認知心理学)	P. 496
5	認知科学2 (学習・言語心理学)	P. 499
6	認知情報処理	P. 501
7	産業・組織心理学	P. 504
8	社会・集団・家族心理学	P. 506
9	環境心理学	P. 508
10	発達心理学1	P. 510
11	発達心理学2	P. 512
12	臨床心理学概論	P. 514
13	心の病理学 (精神疾患とその治療)	P. 516
14	心理療法論 (心理学的支援法)	P. 518
15	心理検査法 (心理的アセスメント)	P. 520
16	感情・人格心理学	P. 522
17	神経・生理心理学	P. 524
18	健康・医療心理学	P. 526
19	教育・学校心理学	P. 528
20	心理学統計法1	P. 530
21	心理学統計法2	P. 532
22	心理学統計法3	P. 535
23	心理学研究法	P. 537
24	心理学実験	P. 539
25	心理学特殊実験1	P. 541
26	心理学特殊実験2	P. 543
27	心理演習1	P. 545
28	心理演習2	P. 547
29	心理演習3	P. 549
30	公認心理師の職責	P. 551

31	関係行政論	P. 553
32	心理実習	P. 555
33	心理学卒業研究	P. 557
34	PBL演習（生活環境と情報）	P. 559
35	PBL演習（生きることと遊び）	P. 561
36	PBL演習（教育保障）	P. 563
37	未来デザインインターンシップ	P. 565
38	未来デザイン計画演習	P. 567
39	未来デザインPBL演習	P. 569
40	未来デザイン卒業研究	P. 571
41	地域実践演習	P. 573

授業名称		担当教員氏名	
人間システムとサステナビリティ		牧岡省吾、高橋幸治、東優子、工藤宏司	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	1 前	必修	講義

授業概要
現代システムの中の人間システムの重要性について講義する。人間（ヒト）という種が進化によって成立した過程、人間の心と進化との関係（進化心理学の観点）、利他行動、心の病や悩みや問題の人間にとっての意味と潜在している可能性、行為と社会的規範の関係、人間開発と人の可能性の関係について説明し、最後に、人間システムの観点から見たサステナビリティ（持続可能性）について考察する。
到達目標
本授業では、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 現代システムの中の人間システムの重要性について説明できること。 2. 人間（ヒト）という種の心のありかたと進化の関係について説明できること。 3. 心の病や悩みや問題の人間（ヒト）にとっての意味と潜在している可能性について説明できること 4. 行為が社会的規範とどのような関係にあるかについて説明できること 5. 人間開発と人の可能性の関係について説明できること 6. 人間システムの観点から見た持続可能性について説明できること

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション、現代システムの中の人間システム／第1回小レポート（牧岡）	授業で話された内容を復習する。
第2回	進化の仕組みとヒトの進化の歴史（牧岡）	授業で話された内容を復習する。
第3回	ヒトはなぜ社会をつくることができるのか（牧岡）	授業で話された内容を復習する。
第4回	ヒトの心と意見の分断（牧岡）／第2回小レポート（牧岡）	授業で話された内容を復習する。
第5回	ヒトの心の病のメカニズム（高橋）	授業で話された内容を復習する。
第6回	臨床の知（高橋）	授業で話された内容を復習する。
第7回	悩み・症状・問題の発展可能性（高橋）	授業で話された内容を復習する。
第8回	心理療法におけるセラピストの仕事（高橋）	授業で話された内容を復習する。
第9回	創造の病と文化の病（高橋）／第3回小レポート（高橋）	授業で話された内容を復習する。
第10回	「感情」はどのような意味で「社会的問題」になるのか（工藤）	授業で話された内容を復習する。
第11回	「感情規則」と「感情労働」（工藤）	授業で話された内容を復習する。
第12回	行為と社会的規範（工藤）／第4回小レポート（工藤）	授業で話された内容を復習する。

第13回	ジェンダーと社会（東）	授業で話された内容を復習する。
第14回	人間開発としてのジェンダーの位置づけ（東）／第5回小レポート（工藤）	授業で話された内容を復習する。
第15回	人間システムの観点から見た持続可能性／第6回小レポート（牧岡） 「情報システムとサステナビリティ」「自然システムとサステナビリティ」「社会システムとサステナビリティ」「人間システムとサステナビリティ」の担当者教員4名が登壇し、システム同士の関係性について対談形式で解説する。	授業内で指示する。

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 現代システムの中の人間システムの重要性について説明できること。 2. 人間（ヒト）という種の心のありかたと進化の関係について説明できること。 3. 心の病や悩みや問題の人間（ヒト）のにとっての意味と潜在している可能性について説明できること 4. 行為が社会的規範とどのような関係にあるかについて説明できること 5. 人間開発と人の可能性の関係について説明できること 6. 人間システムの観点から見た持続可能性について説明できること の6点を達成することが求められる。 成績は、授業中に課す6回の小レポートで評価する。
履修上の注意
関連科目：自然システムとサステナビリティ、情報システムとサステナビリティ、社会システムとサステナビリティ
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
心理学概論		牧岡省吾	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	1 後	必修	講義

授業概要
心理学の基本的な視点、方法論を学ぶための科目である。この授業では、心の発達、学習・記憶、感覚・知覚、思考・言語について、代表的な研究の事例を学ぶことによって基本的な知識を得ることを目指す。また同時に、1 年次前期に配当される「情報システムとサステイナビリティ」「自然システムとサステイナビリティ」「社会システムとサステイナビリティ」「人間システムとサステイナビリティ」の内容と関連付けながら、心理学が持続可能な社会の実現にどのように貢献するのかについて学ぶ。 また、授業中に適宜実験を行うことで、心理学の方法論を体験を通して学ぶことを目指す。なお、この授業では meaQs(meanings well up from the Question sharing!) による授業時間外学習を課す。 ※本科目は、公認心理師の受験資格を得るために必要な科目である。
到達目標
・心の発達、学習・記憶、感覚・知覚、思考・言語、心理学の方法論について、基本的な知識を問う問題に答えることができる。 ・心理学が持続可能な社会の実現にどのように貢献するのかについて説明することができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション:現代システム科学域の教育理念と、その中の心理学類の位置付けと役割、心理学類の3ポリシーについて解説する。 さらに、1 年次前期必修科目「情報システムとサステイナビリティ」「自然システムとサステイナビリティ」「社会システムとサステイナビリティ」「人間システムとサステイナビリティ」との関連性について解説する。	授業支援システムで事前配付するシラバス、資料等を確認しておく。
第2回	心と環境の相互作用を解明するための方法論 (心理学はどのような方法で心について研究するのか)	教科書第1章を読む。 meaQs による学習を行う。
第3回	行動の基本様式 (単純な行動と複雑な行動の違いについて)	教科書第2章 (p.39 まで) を読む。 meaQs による学習を行う。
第4回	発達研究の方法論 (乳児の心をどのように研究するか)	教科書第2章 (p.47 まで) を読む。 meaQs による学習を行う。
第5回	発達、遺伝と環境の相互作用 (遺伝と環境は心の発達にどのように影響す	教科書第3章を読む。 meaQs による学習を行う。

	るのか)	
第6回	記憶研究の方法論、条件付け (動物の心をどのように研究するか)	教科書第4章 (p.81 まで) を読む。 meaQs による学習を行う。
第7回	短期記憶と長期記憶 (記憶を測定する方法について解説する。授業 内で簡単な実験を行う。)	教科書第4章 (p.93 まで) を読む。 meaQs による学習を行う。
第8回	記憶の神経学的基礎 (記憶はどのように脳に保存されるのか)	教科書第4章 (p.100 まで) を読む。 meaQs による学習を行う。
第9回	感覚・知覚研究の方法論、心理物理学の測定 (感覚を測定する方法について解説する。授業 内で簡単な実験を行う。)	教科書第5章 (p.110 まで) を読む。 meaQs による学習を行う。
第10回	視覚の神経学的基礎、低次視覚 (見ることの仕組みをどのように研究するか)	教科書第5章 (p.132 まで) を読む。 meaQs による学習を行う。
第11回	高次視覚、視覚に関する脳損傷 (見ることは脳のどこで行われているのか)	教科書第5章 (p.151 まで) を読む。 meaQs による学習を行う。
第12回	聴覚、体性感覚 (聴覚、触覚の仕組みについて)	教科書第5章 (p.166 まで) を読む。 meaQs による学習を行う。
第13回	思考・言語研究の方法論、思考の発達 (考えることの仕組みをどのように研究する か)	教科書第6章 (p.176 まで) を読む。 meaQs による学習を行う。
第14回	推論・言語 (言語の仕組みをどのように研究するか)	教科書第6章 (p.210 まで) を読む。 meaQs による学習を行う。
第15回	人間システムの観点から見た持続可能性 (サ ステイナビリティの定義、心理学の方法論が 持続可能社会の実現にどのように役立つの か、現代から未来へのつながりなど) につい て解説する。また知識情報システム学概論、 環境社会システム学概論、教育福祉学概論の 代表教員との対談形式による総括を行う。	授業支援システムで事前配付する資料を確認 しておく。
第16回	期末試験	

成績評価方法

到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、

- ・心理学の基本的な方法論について、半分以上の設問に正しく答えられること。
- ・心理発達に関する基本的な概念について、半分以上の設問に正しく答えられること。
- ・記憶・学習に関する基本的な概念について、半分以上の設問に正しく答えられること。
- ・感覚・知覚に関する基本的な概念について、半分以上の設問に正しく答えられること。
- ・言語に関する基本的な概念について、半分以上の設問に正しく答えられること。
- ・心理学が持続可能な社会の実現にどのように貢献するのかについて説明できること。

の6点を達成することが求められる。 成績を評価する方法として、期末試験とミニツツペーパーの提出（15回）を用いる。成績評価に占める割合は、期末試験（65%）、meaQsへの参加(15%)、ミニツツペーパー(20%)である。
履修上の注意
関連科目：人間システムとサステイナビリティ、認知科学1（知覚・認知心理学）、認知科学2（学習・言語心理学）
教科書
鹿取廣人・杉本敏夫・鳥居修晃（編） 心理学〔第5版補訂版〕 東京大学出版会 毎回の授業でも資料を配付する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
海外インターンシップ		大塚耕司、佐賀亮介、柳本豪一、興津健二、飛田国人、東優子、山野則子	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 通	選択	演習

授業概要
本プログラムでは、派遣前にワークショップを行い、派遣先の国の歴史や文化ならびに持続可能性に関わる問題点などについて理解させるとともに、派遣プログラム期間内に現地学生との協働によるワークショップやスタディーツアーを実施し、課題解決の方法論を実践的に学ばせる。さらに、派遣後に報告会を行い、プレゼンテーションのスキルを向上させる。これらの教育プログラムを通して、多様な歴史・文化を背景に持つ人々が互いに尊重し合い、共に生きてゆくことの重要性を深く理解する能力（多文化共生マインド）を身につけさせるとともに、国際的な観点から持続可能な社会の構築に関する具体的な課題を発見し解決に導く方法論（課題解決スキル）を身につけさせる。なお、海外インターンシップでは、現地学生と協働で持続可能な社会の構築に関する具体的な課題に取り組むことになるが、現地における歴史・文化・宗教などを背景にした習慣や作法、禁忌行為などについて、派遣前のワークショップなどを通して十分に理解させる。
到達目標
本授業では、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 派遣先の国の歴史・文化・宗教的背景について説明できること。 2. 派遣先の国の持続可能な社会の構築に関する具体的な課題を発見できること。 3. 派遣先の国の学生と協働で課題解決に取り組むことができること。 4. 現地で行った活動について他人にわかりやすく伝えられること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション、派遣国の決定	
第2回	事前学習：派遣国別のチームに分かれて、派遣先の国の歴史や文化ならびに持続可能性に関わる問題点などについて調査する。	派遣国選びに必要な情報をあらかじめ調べておく
第3回		
第4回		
第5回		
第6回		
第7回	現地学生との協働によるワークショップやスタディーツアーを実施し、課題解決の方法論を実践的に学ぶ。（10日間程度）	現地活動の内容を整理してレポートにまとめる。
第8回		
第9回		
第10回		
第11回		
第12回		
第13回		

第14回	報告会での発表準備	
第15回	報告会での発表	

成績評価方法	
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 派遣先の国の歴史・文化・宗教的背景について説明できること。 2. 派遣先の国の持続可能な社会の構築に関する具体的な課題を発見できること。 3. 派遣先の国の学生と協働で課題解決に取り組むことができること。 4. 現地で行った活動について他人にわかりやすく伝えられること。 の4点を達成することが求められる。 成績を評価する方法として、海外インターンシップ報告書および海外インターンシップ報告会での発表を用いる。成績評価に占める割合は、海外インターンシップ報告書（60%）、海外インターンシップ報告会での発表（40%）である。	
履修上の注意	
適宜指示します。	
教科書	
なし	
参考文献	
なし	

授業名称		担当教員氏名	
認知科学 1 (知覚・認知心理学)		武藤拓之	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 前	必修	講義

授業概要
心的過程のメカニズムを理解するための基本的方法論とそこから得られた知見について学ぶ科目である。刺激に対する反応から脳内の情報処理過程を探る知覚心理学・認知心理学の方法論を中心に、脳内の神経系の構造と機能について探る神経科学、視覚や聴覚を実現するために必要な情報処理がどのようなものであるのかを探る計算理論の方法論を総合して、視覚と聴覚のメカニズムについて解説する。なお、この授業では meaQs(meanings well up from the Question sharing!) による授業時間外学習を課す。 ※本科目は、公認心理師の受験資格を得るために必要な科目である。
到達目標
形の認知、色の知覚、立体視・運動視、高次視覚と注意、聴覚のメカニズムについて、基本的な概念を説明できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	イントロダクション・認知心理学、認知科学とは・チューリングテスト（機能主義による心の理解とは）・機能主義の長所と短所	meaQs による学習を行う。
第 2 回	形の認知(1): 見ることができる機械をつくるには・光の物理的性質・視覚への入力・ビデオカメラは「見ている」のか?・数値ボタンから形を認識する	meaQs による学習を行う。
第 3 回	形の認知(2): ヒトの視覚系の仕組み・網膜の仕組み・神経細胞の活動の測定・一次視覚野の仕組み・高次視覚野の仕組み	meaQs による学習を行う。
第 4 回	形の認知(3): 形を認知するためのメカニズム・形を認知するためのメカニズム・鋳型モデルと特徴モデル・不変性・深層学習	meaQs による学習を行う。
第 5 回	色の知覚(1): 色知覚のメカニズム・色の物理的定義・錐体細胞の仕組み・照明光と反射光	meaQs による学習を行う。
第 6 回	色の知覚(2): 色の恒常性・三色説と反対色説・色の恒常性・色覚「異常」と色のバリアフリーデザイン	meaQs による学習を行う。
第 7 回	色の知覚(3): 色の恒常性・色は表面反射率である・言語化できないもの・色知覚の進化	meaQs による学習を行う。

第8回	立体視(1)：計算理論とは・両眼視差・不良設定問題・Marrの3水準・立体視の計算理論	meaQsによる学習を行う。
第9回	立体視(2)：様々な立体視・単眼での立体視の手がかり・運動視差・オプティカルフロー	meaQsによる学習を行う。
第10回	運動視・仮現運動・運動残効・運動視のメカニズム	meaQsによる学習を行う。
第11回	高次視覚・顔の認知・バイオロジカルモーション・ミラーシステム・アフォーダンス	meaQsによる学習を行う。
第12回	視覚的注意：複数の次元の情報を結合する・注意とは何か・変化盲・注意の役割：特徴統合理論	meaQsによる学習を行う。
第13回	意識：意識は解明可能か・知覚を最終的に理解するには：機能主義の到達点と限界・クオリア・意識は原因ではなく結果なのか？	meaQsによる学習を行う。
第14回	聴覚・周波数分析・音の高さとは何か・視覚と聴覚の違い	meaQsによる学習を行う。
第15回	ヒト以外の動物が知覚する世界・様々な動物の視覚・エコロケーション・人間中心主義を超えて	meaQsによる学習を行う。
第16回	期末試験	

成績評価方法
授業目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 ・授業で取り上げた形の認知のメカニズムについて、基本的な概念を半分以上説明できること。 ・授業で取り上げた色の知覚のメカニズムについて、基本的な概念を半分以上説明できること。 ・授業で取り上げた立体視・運動視のメカニズムについて、基本的な概念を半分以上説明できること。 ・授業で取り上げた高次視覚と注意のメカニズムについて、基本的な概念を半分以上説明できること。 ・授業で取り上げた聴覚のメカニズムについて、基本的な概念を半分以上説明できること。 上記の5点を達成することが求められる。成績を評価する方法として、期末試験、meaQs 問題作成、ミニツツペーパーの提出（15回）を用いる。成績評価に占める割合は、期末試験（50%）、meaQs 問題作成(30%)、ミニツツペーパー(20%)である。
履修上の注意
関連科目：認知科学 2（学習・言語心理学）、認知情報処理、神経・生理心理学、発達心理学 1、発達心理学 2
教科書

授業はプロジェクタによってスライドを提示しながら行う。スライドと同内容のプリントを毎回配付する。

参考文献

森敏昭・中條和光（編）『認知心理学キーワード』有斐閣
ドナルド・D・ホフマン『視覚の文法』紀伊國屋書店
クリストフ・コッホ『意識の探究（上）（下）』岩波書店

授業名称		担当教員氏名	
認知科学 2 (学習・言語心理学)		野津亮	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 後	必修	講義

授業概要
この授業では、認知過程の中でも高次認知過程と呼ばれる、記憶、知識構築、読解、問題解決と推論、メタ認知などの認知プロセスについて概説した上で、それらの認知過程を再現したり、利用したりする情報技術について解説します。近年、ディープラーニングなどに代表されるニューラルネットワークをベースとした AI の発展が目覚ましいのですが、それらと人間との本質的な違いについて学習・情報といった観点から理解することは、これからの社会・人間にとって必要な知識となるはずです。このような高次認知過程に関する心理学・情報学的研究を紹介していきます。 ※本科目は、公認心理師の受験資格を得るために必要な科目である。
到達目標
この授業では、ヒトの高次認知機能について説明できることを目標としています。具体的には、1. 高次認知の基本的概念を説明できる。2. 高次認知機能のメカニズムを説明できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	イントロ	復習問題の作成と解答
第 2 回	短期記憶	短期記憶について調べておく 復習問題の作成と解答
第 3 回	ワーキングメモリ	ワーキングメモリについて調べておく 復習問題の作成と解答
第 4 回	長期記憶	長期記憶について調べておく 復習問題の作成と解答
第 5 回	日常認知	記憶のエラーについて調べておく 復習問題の作成と解答
第 6 回	カテゴリー化	カテゴリー化について調べておく 復習問題の作成と解答
第 7 回	クラスタリング	クラスタリングについて調べておく 復習問題の作成と解答
第 8 回	知識の表象と構造	意味ネットワークについて調べておく 復習問題の作成と解答
第 9 回	言語理解	形態素解析について調べておく 復習問題の作成と解答

第 10 回	言語理解	潜在意味分析について調べておく 復習問題の作成と解答
第 11 回	問題解決と推論	探索木について調べておく 復習問題の作成と解答
第 12 回	ニューラルネットワーク	ニューラルネットワークについて調べておく 復習問題の作成と解答
第 13 回	強化学習	強化学習について調べておく 復習問題の作成と解答
第 14 回	深層強化学習	深層強化学習について調べておく 復習問題の作成と解答
第 15 回	まとめ	これまでの講義を復習しておく 復習問題の作成と解答
第 16 回	期末試験	
		受講生間で復習問題を共有し、それらの問題を自分で解いて、授業内容を深めるための授業支援システムを運用しますので、それを活用して、授業時間外学習に励んでください。授業内容と自習問題の両方の範囲から、試験問題を作成しますので、自習問題はこまめに取り組むようにして下さい。

成績評価方法	
授業目標（達成目標）の 1・2 の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、・ 基本的な認知科学概念を 60%以上説明できる。・ 認知科学概念を用いて、高次認知機能のメカニズムを 50%以上説明できる。上記の 2 点を達成することが求められる。成績を評価する方法として、期末試験とミニレポートを用いる。成績評価に占める割合は期末試験（90%）、ミニレポート（10%）である。	
履修上の注意	
（関連科目）心理学概論、認知科学 1、認知情報処理 （備考）	
教科書	
適宜プリントを配付する。	
参考文献	
適宜プリントを配付する。（1）『認知心理学』箱田祐司・都築誉史・川畑秀明・萩原滋著 有斐閣 （2）『心理学』 鹿取廣人・杉本敏夫・鳥居修晃編 東京大学出版 （3）『よくわかる認知科学』 乾敏郎・吉川佐紀子・川口潤編 ミネルヴァ書房	

授業名称		担当教員氏名	
認知情報処理		野津亮	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	3 前	選択	講義

授業概要
人間の認知について数理モデル，認知心理学などに関する項目を講義する．また，授業中に指示する課題を通して自身の認識と一般化されたモデルとの関連や違いについて気づかせ，自分なりの考え方やモデルを表現，提案させるようにする．授業は大きく心理実験によるアプローチと数学的モデルによるアプローチの紹介からなり，この二つの視点を適宜切り替えていく．
到達目標
人間の認知について認知心理学，情報学の立場から検討し，コンピュータに実装するための手法について講述する．特徴抽出をするためのプログラムや学習プロセスのモデルについて解説することにより，認知情報処理研究の基礎を理解させる。 <授業計画の概要>以下の項目を講義する．具体的には以下の能力を身につけることを達成目標とする． 1．認知と情報に関する研究や実験，モデルの説明ができること 2．「情報量や情報処理の量」の観点からモデルを説明できること 3．いくつかのモデルの関連性を数学的に説明できること

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	ガイダンス (目標) 探索と活用のジレンマについて説明できるようになる	意思決定とは何か調べておく 復習問題の作成と解答
第2回	数学的準備1 行列演算，行列式(大学院入試問題を解く) (目標) 簡単な行列演算，行列式が計算できる	線形代数の復習をしておく 復習問題の作成と解答
第3回	数学的準備2 固有値とその性質(大学院入試問題を解く) (目標) 簡単な固有値演算ができる	線形代数の復習をしておく 復習問題の作成と解答
第4回	認知モデルサントペテルブルクのパラドックス，フェヒナーの法則 (目標) フェヒナーの法則などに関連する心理実験をいくつか説明できる	フェヒナーの法則について調べておく 復習問題の作成と解答
第5回	行動意志決定論1 選好逆転現象 (目標) 人間の認知とその矛盾について例を挙げて説明できる	選好逆転現象について調べておく 復習問題の作成と解答

第 6 回	行動意志決定論 2 プロスペクト理論における価値関数 (目標) 価値関数の持つ特徴とその性質を理解し, 説明できる	プロスペクト理論について調べておく 復習問題の作成と解答
第 7 回	行動意志決定論 3 プロスペクト理論における確率加重関数 (目標) 確率加重関数の特徴とその性質を理解し, 説明できる	プロスペクト理論について調べておく 復習問題の作成と解答
第 8 回	行動意志決定論 4 リスク心理, リスクホメオスタシス (目標) 人間のリスクテイキング行動をモデルを用いて説明できる	リスクホメオスタシスについて調べておく 復習問題の作成と解答
第 9 回	認知システムと情報量 1 認知的不協和理論, 認知的均衡理論 (目標) バランス状態と非バランス状態について理解し, 説明できる	認知的不協和理論について調べておく 復習問題の作成と解答
第 10 回	認知システムと情報量 2 情報量の制限と学習エージェント, 最小均衡化状態の導出 (目標) 最小均衡化状態を数値計算によって導くことができる	認知的均衡理論について調べておく 復習問題の作成と解答
第 11 回	認知システムと情報量 3 数量化 4 類と認知地図 (目標) 数量化 4 類について理解し, 説明, 計算できる	数量化 4 類について調べておく 復習問題の作成と解答
第 12 回	認知システムと情報量 4 主成分分析と低次元化 (目標) 主成分分析について理解し, 説明, 計算できる	主成分分析について調べておく 復習問題の作成と解答
第 13 回	認知システムと情報量 5 ニューラルネットワーク (目標) 自己組織化マップやニューラルネットワークの特徴について理解し, 説明できる	自己組織化マップについて調べておく 復習問題の作成と解答
第 14 回	ディープラーニング関連技術ディープラーニング (目標) ディープラーニングの特徴を理解し, CNN や RNN, LSTM など説明できる	ディープラーニングについて調べておく 復習問題の作成と解答
第 15 回	まとめ様々な研究分野と認知のモデル (目標) 人間の認知に関して, いくつかの研究アプローチを紹介できる	これまでの講義を復習しておく 復習問題の作成と解答

		受講生間で復習問題を共有し、それらの問題を自分で解いて、授業内容を深めるための授業支援システムを運用しますので、それを活用して、授業時間外学習に励んでください。 授業内容と自習問題の両方の範囲から、試験問題を作成しますので、自習問題はこまめに取り組むようにして下さい。

成績評価方法	
授業目標の達成度によって成績評価を行う。単位を取得するためには Web 上のシステムに用意する小テスト、毎回の授業で小課題の提出、最終レポートの提出による理解度の評価が 6 割を超えなければならない。成績評価に占める割合はそれぞれ 1 割、6 割、3 割だが、課題の難易度によって最大で 1 割程度変動させることがある。	
履修上の注意	
(関連科目) 認知科学 1, 認知科学 2 (備考) 講義に関する資料や情報は、講義支援システムに掲載する予定です。授業を欠席する／した場合は、原則として欠席届を提出してください。	
教科書	
プリント配布	
参考文献	
授業中に指示する	

授業名称		担当教員氏名	
産業・組織心理学		河村悠太	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
職場における心理に関する支援と、組織における人の行動について産業・組織心理学の立場から概説することを通して、組織における人の行動特性を背景として職場での心理的な問題とその支援について理解させる。職場における心理に関する支援、組織における人の行動について解説する。 授業は教科書と、適宜配布する資料を用いて行う。 ※本科目は、公認心理師の受験資格を得るために必要な科目である。
到達目標
職場における心理に関する支援と、組織における人の行動について産業・組織心理学の立場から概説することを通して、組織における人の行動特性を背景として職場での心理的な問題とその支援について理解させる。具体的には、以下の能力を身につけることを達成目標とする。1.基本的な職場における心理に関する支援について説明できること。2.組織における人の基本的な行動特性を説明できること。3.職場における心理に関する支援と組織における人の行動特性との関係について基本的な考え方を説明できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	産業・組織心理学とは何か	
第2回	産業・組織分野の制度・法律・職種	関連法規について調べてくる
第3回	産業・組織分野での活動の倫理	
第4回	作業改善・安全衛生	労働現場の現状の事例について調べてくる
第5回	職業性ストレスとメンタルヘルス	メンタルヘルスの現状の事例について調べてくる
第6回	人事・ヒューマンリソースマネジメント	人事制度の現状の事例について調べてくる
第7回	キャリア形成	キャリアの現状の事例について調べてくる
第8回	消費者行動	
第9回	産業・組織分野における心理学的アセスメント	導入されているアセスメントの現状について調べてくる
第10回	産業・組織分野における心理学的援助	
第11回	職場における心理に関する支援のまとめ	
第12回	職場集団のダイナミクスとコミュニケーション	組織での問題事例の現状について調べてくる

第 13 回	リーダーシップ理論	リーダーシップの考え方について調べてくる
第 14 回	組織成員の心理と行動	
第 15 回	組織における人の行動のまとめ	
第 16 回	期末試験	

成績評価方法
授業目標 1～3 の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、・授業で取り上げた職場における心理に関する支援について、半分以上の設問に正しく答えられること。・授業で取り上げた組織における人の行動特性について、半分以上の設問に正しく答えられること。・授業で取り上げた職場における心理に関する支援と組織における人の行動特性との関係について、半分以上の設問に正しく答えられること。上記の 3 点を達成することが求められる。成績を評価する方法として、授業への参加と期末試験を用いる。成績評価に占める割合は、授業への参加度（発言等）（10%）、期末試験（90%）である。
履修上の注意
（関連科目）社会・集団・家族心理学 （備考）講義に関する資料や情報は、講義支援システムに掲載する予定。
教科書
『産業・組織心理学エッセンシャルズ改訂三版』田中堅一郎編、ナカニシヤ出版 ISBN978-4-7795-0563-8。各回、資料を配布。
参考文献
・田尾雅夫著『組織の心理学』有斐閣 ISBN4-641-08631・奥林康司著『入門人的資源管理』中央経済社 ISBN4-502-36770-2・小口孝司ほか（編）『仕事のスキルー自分を活かし,職場を変える』北大路書房 ISBN978-4-7628-2677-1

授業名称		担当教員氏名	
社会・集団・家族心理学		河村悠太	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 前	必修	講義

授業概要
対人関係並びに集団における人の意識及び行動についての心の過程、人の態度及び行動、家族、集団及び文化が個人に及ぼす影響について、社会心理学の立場から下記のトピックスに関して概説する。授業は教科書と、適宜配布する資料を用いて行う。第1回：社会的認知、第2回：社会的自己、第3回：対人関係・対人行動、第4回：コミュニケーション、第5回：集団・組織、第6回：対人認知、対人関係と集団における認知と行動のまとめ、第7回：態度の機能と構造、第8回：説得による態度と行動の変化、第9回：態度と行動のまとめ、第10回：家族の機能、第11回：家族内の関係、第12回：家族の影響のまとめ、第13回：集団・組織の影響、第14回：文化の影響、第15回：集団や文化の影響のまとめ ※本科目は、公認心理師の受験資格を得るために必要な科目である。
到達目標
対人関係並びに集団における人の意識及び行動についての心の過程、人の態度及び行動、家族や集団及び文化が個人に及ぼす影響、について社会心理学の立場から概説することを通して、周りの人間・家族・集団との関係における人の意識と行動について理解させる。具体的には、以下の能力を身につけることを達成目標とする。1.対人関係や集団における意識や行動について基本的な説明ができること。2.人の態度及び行動について基本的な説明ができること。3.家族や集団及び文化が個人に及ぼす影響について基本的な説明ができること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	社会的認知	『グラフィック社会心理学第2版』p.18-65
第2回	社会的自己	『グラフィック社会心理学第2版』p.113-134
第3回	対人関係・対人行動	『グラフィック社会心理学第2版』p.179-226
第4回	コミュニケーション	
第5回	集団・組織	『グラフィック社会心理学第2版』p.227-252
第6回	対人認知、対人関係と集団における認知と行動のまとめ	
第7回	態度の機能と構造	『グラフィック社会心理学第2版』p.67-88
第8回	説得による態度と行動の変化	『グラフィック社会心理学第2版』p.67-88
第9回	態度と行動のまとめ	
第10回	家族の機能	
第11回	家族内の関係	

第 12 回	家族の影響のまとめ	
第 13 回	集団・組織の影響	『グラフィック社会心理学第 2 版』 p.227-252
第 14 回	文化の影響	『グラフィック社会心理学第 2 版』 p.273-294
第 15 回	集団や文化の影響のまとめ	
第 16 回	期末試験	

成績評価方法
授業目標 1～3 の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、・授業で取り上げた対人関係や集団における意識や行動について、半分以上の設問に正しく答えられること。・授業で取り上げた対人関係や集団における意識や行動について、半分以上の設問に正しく答えられること。・授業で取り上げた家族や集団及び文化が個人に及ぼす影響について、半分以上の設問に正しく答えられること。上記の 3 点を達成することが求められる。成績を評価する方法として、授業への参加と期末試験を用いる。成績評価に占める割合は、授業への参加度（発言等）（10%）、期末試験（90%）である。
履修上の注意
（関連科目）産業・組織心理学 （備考）講義に関する資料や情報は、講義支援システムに掲載する予定。
教科書
池上知子、遠藤由実 『グラフィック社会心理学 第 2 版』サイエンス社 ISBN78-4-7-7819-1191-5
参考文献
・日本社会心理学会(編) 2009 『社会心理学事典』 丸善・吉森護ほか 1995 『社会心理学用語辞典（改訂新版）』 北大路書房・村田光二ほか 2007 『社会心理学研究法』 福村出版

授業名称		担当教員氏名	
環境心理学		飛田 国人	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 前	選択	講義

授業概要
本科目では身の回りにある環境の中をとりあげ、その環境を構成する社会的・物理的要因と人の心理・行動との関係について論じる。環境心理学は社会に実在する問題を解決するために発展した一面を持っており、人にとって、社会にとって望ましい環境とはどのようなものなのか、その実現には何が必要なのかを論じる。授業は Power Point を用いた講義形式を予定している。
到達目標
本科目では、環境心理学の観点から人間の心理・行動と環境との相互作用を理解し、人と環境のやりとりから生じる問題を改善・軽減するための視点を修得することを目的とする。具体的には以下の能力を身につけることを到達目標とする。 1. 犯罪環境とヒトの心理・行動との関係が説明できること。 2. 居住環境とヒトの心理・行動との関係が説明できること。 3. 自然環境とヒトの心理・行動との関係が説明できること。 4. 生態学的心理学と生態学的視覚論について説明ができること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	環境心理学の成り立ち	小俣謙二(1998)犯罪発生要因に関する環境心理学的研究
第 2 回	犯罪原因論と防犯	雨宮護(2007)英米における「防犯まちづくり」の理論の系譜と近年の動向
第 3 回	認知地図と都市のイメージ	谷直樹(1980)ルートマップ型からサーヴェイマップ型へのイメージマップの変容について
第 4 回	環境推論	高田敏文(1999)レンズモデルによる監査判断研究の再構築
第 5 回	目撃証言	PENROD S. D.(2008)目撃証言のエラー：問題の深刻さ、原因、そして対策を探る
第 6 回	空間行動	中島喜代子(1988)年齢段階別にみた子どもの住空間認識の発達 第 1 報：住評価・住要求からみた子どもの住空間認識
第 7 回	居住環境となわばり	中島浩二(1999)移動体ロボットに対するヒトの個体距離
第 8 回	高層居住と就寝形態	切原舞子(2011)夫婦の就寝形態の特徴と寝

		室・私的領域の計画課題について
第 9 回	愛着	加藤悠介(2013)インタビュー調査にもとづく近隣環境における高齢者の愛着場面に関する研究
第 10 回	環境評価	柴崎全弘(2011)恐怖関連刺激の視覚探索:へビはクモより注意を引く
第 11 回	労働環境	大橋昭一(2006)ホーソン効果の実態をめぐる諸論調森知晴(2012)何を与えれば人はより働くのか_フィールド実験による検証
第 12 回	生態学的心理学	細江達郎(1994)生態学的心理学 (Ecological Psychology) の方法の試行
第 13 回	生態学的視覚論	川村久美子(2001)アフォーダンス理論がもたらす革命
第 14 回	環境配慮行動	広瀬幸雄(1994)環境配慮的行動の規定因について
第 15 回	まとめと展望	これまでの内容を復習しておく
第 16 回	テスト	

成績評価方法
到達目標の 1～4 の達成度で評価を行う。単位を取得するためには 1. 講義で取り上げた犯罪環境の事項について、半分以上を説明できる。 2. 講義で取り上げた居住環境の事項について、半分以上を説明できる。 3. 環境評価に影響する要因を 1 つ挙げて説明できる。 4. 生態学的心理学と生態学的視覚論の違いについて説明できる。 上記の 4 点を達成することが求められる。成績を評価する手段として、テストと小レポートを用いる。成績評価に占める割合はテスト 80%、小レポート 20%とする。
履修上の注意
(関連科目) 心理学概論、人間システムとサステナビリティ、人と居住環境 (備考) 準備学習の欄に指定してある文献を講義の前後に読むこと。
教科書
毎回、資料を配付する。
参考文献
佐古順彦ほか(編)『環境心理学 (朝倉心理学講座 12)』朝倉書店 ISBN-13:978-4254526721

授業名称		担当教員氏名	
発達心理学 1		岡本真彦	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 前	必修	講義

授業概要
本授業では、人間の行動とこころの発達、遺伝的形質と環境との相互作用によって発現するプロセスを説明することを通して、知的機能と情緒的特性の発達がどのように関わりあっているのかについて理解させる。具体的には、ヒトの生物学的特徴、胎児期の発達変化、乳児期の知的発達と社会性の発達、幼児期の知的発達と社会性の獲得、児童期の知的発達と対人技能の獲得、青年期の知的発達と自己への気づきなどについて概説する。 ※本科目は、公認心理師の受験資格を得るために必要な科目である。
到達目標
この授業では、ヒトの生涯にみられる行動とこころの発達変化のプロセスと、発達変化をもたらす環境の役割について説明できることを目標としています。具体的には、 1. 発達心理学の基本的概念を説明できる。 2. 発達のダイナミズムを説明できる。 の2つが本授業での目標です。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	発達心理学の歴史と方法	meaQs を用いた復習問題の作成と解答
第2回	発達の社会文化的環境	meaQs を用いた復習問題の作成と解答
第3回	発達の生物学的基礎	meaQs を用いた復習問題の作成と解答
第4回	胎児の発達と環境	meaQs を用いた復習問題の作成と解答
第5回	胎児・新生児の感覚能力	meaQs を用いた復習問題の作成と解答
第6回	乳児の社会的能力	meaQs を用いた復習問題の作成と解答
第7回	幼児期の運動・言語発達	meaQs を用いた復習問題の作成と解答
第8回	幼児期の認知発達	meaQs を用いた復習問題の作成と解答
第9回	幼児期の社会性の発達と環境としての仲間集団	meaQs を用いた復習問題の作成と解答
第10回	児童期の思考・概念・ことばの発達	meaQs を用いた復習問題の作成と解答
第11回	自己意識の変化と対人関係の展開	meaQs を用いた復習問題の作成と解答
第12回	青年期の身体発達と認知発達	meaQs を用いた復習問題の作成と解答
第13回	自己の形成と対人関係の拡大	meaQs を用いた復習問題の作成と解答
第14回	発達の障がい1: ASD	meaQs を用いた復習問題の作成と解答
第15回	発達の障がい2: SLD・ADHD	meaQs を用いた復習問題の作成と解答
第16回	期末試験	

成績評価方法
授業目標（達成目標）の1～2の達成度で成績評価を行う。 単位を取得するためには、 ・ 基本的な発達心理学概念を60%以上説明できる ・ 発達のダイナミズムを50%以上説明できる の2点を達成することが求められる。 成績を評価する方法として、期末試験とミニレポートを用いる。成績評価に占める割合は期末試験（90%）、ミニレポート（10%）である。
履修上の注意
（関連科目）発達心理学2、心理学概論、人間システムとサステナビリティ （備考）心理学1・2を履修していることを前提として、授業が組み立てられていますので、これらを履修せずに受講する場合には参考文献(2)を自習してから授業を受けることをお勧めします。
教科書
毎回、プリントを配付します。
参考文献
(1)『発達心理学Ⅰ』 無藤隆・子安増生編 東京大学出版会 (2)『心理学』 鹿取廣人・杉本敏夫・鳥居修晃編 東京大学出版会

授業名称		担当教員氏名	
発達心理学 2		河野直子、畑野快	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 後	必修	講義

授業概要
1-8 回では、生涯発達における青年期の位置づけを確認し、その発達的特徴を概観する。具体的には、青年期の身体、認知・感情、自己意識の変化、親・友人・異性との関係性の変化、社会性の変化とそれに関わる発達について概観する。 9-16 回では、生涯発達における高齢期の位置づけを確認し、中年期以降の個人の行動や心理状態の特徴を概観する。高齢者心理学の代表的な理論を紹介し、また発達心理学の研究法や高齢者心理学に特徴的なものの見方考え方についても説明する。
到達目標
＜前半：中間テスト1に該当＞ 講義を通して、青年期以降の個人の身体的・心理的・社会的発達について知識を深め、青年心理学の代表的な理論、研究法、これまでの研究から得られた知見について理解できるようになる。 具体的には、 ①思春期の身体発育、抽象的思考の発達に伴う自己意識の変化について心理学的な説明ができるようになる。 ②青年期における社会性の発達とその変化についてアイデンティティの観点から説明できるようになる。 ＜後半：中間テスト2に該当＞ 講義を通して、中年期以降の個人の行動や心理状態の特性に関する理論や知見を概説できるようになり、高齢者心理学の代表的な研究法の知識と、高齢者心理学に特徴的なものの見方考え方を身につける。 具体的には、 ①対人関係、社会的役割、情動・感情・パーソナリティ、認知情報処理といったヒトの心的機能の加齢変化について、高齢者心理学の諸理論を踏まえて、説明できるようになる。 ②心理・社会・生物学的な連関のなかで高齢者の行動や心理状態を捉える視点に立って、高齢社会における現代的な問題について議論することができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション：15 回全体の説明と授業時間外学習について 生涯発達における青年期（畑野快）	配布資料の通読と授業支援システムを活用した授業時間外学習
第2回	思春期の身体的変化、認知発達と心理的影響（畑野快）	配布資料の通読と授業支援システムを活用した授業時間外学習
第3回	自己意識の発達と変化（畑野快）	配布資料の通読と授業支援システムを活用した授業時間外学習

第4回	親子・友人・異性関係の変化（畑野快）	配布資料の通読と授業支援システムを活用した授業時間外学習
第5回	社会性・地域での発達（畑野快）	配布資料の通読と授業支援システムを活用した授業時間外学習
第6回	青年期の心理的問題（畑野快）	配布資料の通読と授業支援システムを活用した授業時間外学習
第7回	キャリア発達とアイデンティティ（畑野快）	配布資料の通読と授業支援システムを活用した授業時間外学習
第8回	まとめと中間テスト1（畑野快）	
第9回	高齢者心理学イントロダクション：老いと（いう）発達、老年学（河野直子）	配布資料の通読と授業支援システムを活用した授業時間外学習
第10回	サクセスフルエイジングと中年期の過ごし方、第四期とフレイル（河野直子）	配布資料の通読と授業支援システムを活用した授業時間外学習
第11回	情動・感情・パーソナリティの発達、高齢者に特有の心理状態（河野直子）	配布資料の通読と授業支援システムを活用した授業時間外学習
第12回	社会性の発達、死と死別（河野直子）	配布資料の通読と授業支援システムを活用した授業時間外学習
第13回	認知加齢（1）：認知加齢と適応、知能の発達、記憶の生涯発達（河野直子）	配布資料の通読と授業支援システムを活用した授業時間外学習
第14回	認知加齢（2）：認知加齢の個人差、認知機能に影響を与える疾患、終末期低下（河野直子）	配布資料の通読と授業支援システムを活用した授業時間外学習
第15回	現代的な問題：生きがいと余暇活動、モビリティ（河野直子）	配布資料の通読と授業支援システムを活用した授業時間外学習
第16回	まとめと中間テスト2（河野直子）	

成績評価方法
授業目標(達成目標)に対する達成度(60%以上)で成績評価を行います。成績評価には、2回の中間テストの結果(50%+50%)を用います。
履修上の注意
(関連科目) 発達心理学1、心理実習 (備考)
教科書
特に指定しません。適宜、プリントを配布します。
参考文献
講義内で適宜、指定します。

授業名称		担当教員氏名	
臨床心理学概論		川原稔久（令和5年度まで）、川部哲也（令和6年度から）	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 前	必修	講義

授業概要
臨床心理学全般についての概説を行う。とりわけ、臨床心理学の考え方を紹介するために、臨床心理学の歴史と方法を中心に講義を行う。第1週－第3週：臨床心理学の歩みとパラダイム第4週－第5週：臨床心理学の主観第6週－第8週：臨床心理学の方法論と諸学派第9週－第11週：治療論的な見立てと主体 第12週－第14週：心理臨床の実際第15週：臨床心理学の研究法 ※本科目は、公認心理師の受験資格を得るために必要な科目である。
到達目標
臨床心理学は苦悩する心を心理学的に援助する実践の学である。心を対象にしつつ、それにアプローチするのも心であるという二重性を特徴とするので、心理学的な見方を知ることが目標とする。具体的には以下の3点を達成目標とする。1. 主観現象を扱う際に伴う二重性という視座を身につけること2. 「科学の知」とは異なる「臨床の知」という見方を身につけること3. 心理学的な主体におけるイメージの視点を身につけること

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	臨床心理学の定義、レポート課題とレポート用文献の提示（目標）心理学全体の中での臨床心理学の位置付けと臨床心理学の特質を理解する。	テキスト第1章「臨床心理学が目指すもの」を繰り返し読んでおく。
第2回	臨床心理学の遠祖（目標）古代から近代まで、心の問題が扱われてきた関連領域を概観できる。	テキスト第2章「臨床心理学の遠祖」を繰り返し読んでおく。
第3回	臨床心理学の歴史的なパラダイム（目標）現代における臨床心理学の基本的な視座を身につける。	テキスト第3章「臨床心理学の歴史的なパラダイム」を繰り返し読んでおく。
第4回	臨床の知と科学の知（目標）多義性・固有性・身体性を特質とする臨床の知の見方ができる。	テキスト第4章「臨床の知と科学の知」を繰り返し読んでおく。
第5回	心理臨床の主観（目標）心理臨床事例から心理的問題を主観の二重性から見るができる。	テキスト第5章「心理臨床の主観」を繰り返し読んでおく。
第6回	心の構造と機能（目標）心理学的機能とその構造から心理症状と人格とイメージの関係を概観できる。	テキスト第6章「心の構造と機能」を繰り返し読んでおく。レポート1・2を提出する。

第 7 回	臨床心理学の学派と目的論的な方法（目標）現代的な学派を概観し、その特徴である目的論的な見方ができる。	テキスト第 7 章「深層心理学」を繰り返し読んでおく。
第 8 回	来談者中心療法（目標）ロジャーズ派の目的論的な見方ができる。	テキスト第 8 章「人間性心理学」を繰り返し読んでおく。
第 9 回	心理学的な問題と見立て（目標）心理学的な問題の分類を概観し、問題の見立て方の多様性を知る。	テキスト第 9 章「見立ての枠組み」を繰り返し読んでおく。
第 10 回	主体の水準（目標）心理臨床事例から心理学的な問題を主体のあり方から見立てられる。	テキスト第 10 章「主体の水準」を繰り返し読んでおく。
第 11 回	症状と主体（目標）症状の水準と主体の水準との関係を見立てられる。	テキスト第 11 章「症状と主体」を繰り返し読んでおく。
第 12 回	心理臨床の構造と動き（目標）心理臨床の実践活動における構造と動きを概観できる。	テキスト第 12 章「心理臨床の構造と動き」を繰り返し読んでおく。
第 13 回	臨床心理査定（目標）心理査定の方法と心理検査の考え方を身につける。	テキスト第 13 章「臨床心理査定」を繰り返し読んでおく。
第 14 回	心理療法（目標）心理療法事例からイメージを用いた主体形成を見ることができる。	テキスト第 14 章「心理療法」を繰り返し読んでおく。レポート 3・4 を提出する。
第 15 回	研究法（目標）臨床心理学における事例研究法の意義を他の研究法と比較できる。	テキスト第 15 章「臨床心理学の研究手法」を繰り返し読んでおく。
		テキスト相当の資料の学修を進めること。

成績評価方法
授業目標 1～3 の達成度で成績を評価する。評価方法は 4 種のレポートによる。単位取得の基準はレポートに以下の考察があること。1. 少なくとも主観の二重性が論じられていること (C)、加えてその循環性が論じられていること (B) 2. 少なくとも「臨床の知」の特徴が論じられていること (C)、加えて科学の知との対比が論じられていること (B) 3. 少なくともイメージの機能を論じていること (C)、加えて主体形成との関連を論じていること (B) 評価における割合はレポート 1 (25%)・2 (25%)・3 (25%)・4 (25%) とする。
履修上の注意
(関連科目) 心理検査法 (心理的アセスメント)、心理療法論 (心理学的支援法) (備考) 講義の内容によっては、WEB 上で問題を作成し回答してみるという授業支援システムを利用するので、学生は積極的に作問および回答に取り組むこと。
教科書
講義中にテキストに相当する資料をポータルで配布する。
参考文献
河合俊雄『心理臨床の理論』岩波書店エレンベルガー『無意識の発見』上下弘文堂河合隼雄監修『臨床心理学』1～5 創元社

授業名称		担当教員氏名	
心の病理学（精神疾患とその治療）		総田純次	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
精神医学の最新かつ標準的な知見を学習するとともに、臨床心理学に直接役立つ精神病理学的な見方や精神力動的な見方、心理療法的アプローチにも触れることを目的としている。授業の形態は、講義担当者による講義を基礎とし、各種精神疾患の視聴覚資料を題材としたグループ討議や、精神疾患の種類別にグループで参考文献に基づいて発表することで理解を深める。 ※本科目は、公認心理師の受験資格を得るために必要な科目である。
到達目標
1. 精神疾患の基本的な概念を理解する。 2. 主な精神疾患（認知症、せん妄、統合失調症、うつ病、双極性障害、境界例、神経症、外傷性障害、発達障害）について現在の精神医学の基本的な知見（障害の概念の歴史、症候論・病像、病因論的研究、治療法）を学習する。 3. 精神病理学的見方や心理療法的アプローチに触れる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	総論 1. 精神疾患の概念 2. 精神疾患の分類 3. 精神医学の潮流について	
第2回	いわゆる器質性精神障害（認知症とせん妄）（視聴覚資料あり）	カプランの教科書の第21章、室伏君士『認知症高齢者へのメンタルケア』を予習。
第3回	統合失調症その1：概念と歴史	カプランの教科書の第7章1を予習。
第4回	統合失調症その2：症候論（視聴覚資料あり）	アリエティ『統合失調症入門』を予習。
第5回	統合失調症その3：病因論と治療	ギャバード『精神力動的精神医学②』の第7章予習。
第6回	うつ病その1：概念と歴史・症候論（視聴覚資料あり）	カプランの教科書の第8章を予習。
第7回	うつ病その2：精神病理と治療	ギャバード『精神力動的精神医学②』第8章、笠原嘉『軽症うつ病』を予習。
第8回	双極性障害（視聴覚資料あり）	カプランの教科書の第8章を予習。
第9回	統合失調感情障害・妄想性障害	カプランの教科書の第7章2～4を予習。
第10回	神経症その1：不安障害	カプランの教科書の第9章、ギャバード『精神力動的精神医学②』第9章を予習。

第 11 回	神経症その 2：強迫性障害	カプランの教科書の第 10 章、ギャバード『精神力動的精神医学②』第 9 章を予習。
第 12 回	境界例その 1：概念と歴史、症候論	ギャバード『精神力動的精神医学③』第 15 章を予習。
第 13 回	境界例その 2：精神病理と治療	ギャバード『精神力動的精神医学③』第 15 章、ガンダーソンほか編『境界性パーソナリティ障害最新ガイド』第 3 章を予習。
第 14 回	解離、ヒステリー、トラウマ	岡野憲一郎『解離性障害』『外傷性障害』から抜粋部分を予習。
第 15 回	自閉症スペクトラム、ADHD	カプランの教科書の第 31 章 5~6 を予習。
第 16 回	期末試験	
	各種精神疾患の視聴覚資料を適宜使い、授業中に討議する。	最初の授業でグループ分けをし、主な精神疾患について指定した参考文献を講義外に読み、それに基づいてグループでの発表をする。

成績評価方法
成績評価は、達成目標として掲げた、1.精神疾患の基本的な概念の理解、2.主な精神疾患についての現在の精神医学の基本的な知見の習得、3.精神病理学的見方や精神力動的見方、心理療法的アプローチの理解の 3 点につき、授業中の発表や討議（40 点）と期末試験（60 点）に基づいて行う。
履修上の注意
適宜指示します。
教科書
・『カプラン臨床精神医学テキスト』メディカルサイエンスインターナショナル ・G.O.ギャバード『精神力動的精神医学②③』
参考文献
・室伏君士『認知症高齢者へのメンタルケア』ワールドプランニング ・S.アリエティ『統合失調症入門』星和書店 ・笠原嘉『軽症うつ病』講談社現代新書 ・J.F.ガンダーソンほか編『境界性パーソナリティ障害最新ガイド』星和書店 ・岡野憲一郎『外傷性精神障害』『解離性精神障害』岩崎学術出版社

授業名称		担当教員氏名	
心理療法論（心理学的支援法）		川部哲也	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	3 前	必修	講義

授業概要
この授業は、心理的課題や問題を持つ人に対して、心理学的に援助する心理療法の考え方を身につけることを目標とする。具体的には、心理療法の治療論や技法論、心理療法のプロセスを理解し、「無意識」の概念や心理療法とイメージの関連など、それらの背景になっている諸理論の学びを通じて、人間の心を臨床心理学的に理解する観点を修得する。 ※本科目は、公認心理師の受験資格を得るために必要な科目である。
到達目標
1. 心理療法についての基礎的知識を修得する。 2. 心理療法が人間の心にどのような影響を与え、どのような過程を経るのかという原理について理解する。 3. 人間の心についての臨床心理学的理解の観点を身につける。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション心理療法とは何か	授業時間外学習として、河合隼雄『コンプレックス』『カウンセリングの実際』ほか、講義中に指示した参考文献を読むこととする。詳しくは講義中に指示する。
第2回	心理療法における「無意識」概念（1）原始精神療法	
第3回	心理療法における「無意識」概念（2）無意識の働き	
第4回	心理療法における「無意識」概念（3）こころの層構造	
第5回	無意識の探究（1）フロイトの精神分析理論	
第6回	無意識の探究（2）ユングの言語連想検査	
第7回	無意識の探究（3）ユングの分析心理学理論	
第8回	無意識の探究（4）ユングの元型論	
第9回	無意識の探究（5）心理療法における転移と逆転移	
第10回	無意識の探究（6）深層心理学としての心理療法	
第11回	現象に対する臨床心理学的観点（1）デジャヴ体験の臨床心理学	

第 12 回	現象に対する臨床心理学的観点（2）村上春樹の作品から	
第 13 回	現象に対する臨床心理学的観点（3）発達障害を再考する	
第 14 回	現象に対する臨床心理学的観点（4）心理療法と環境	
第 15 回	まとめ	
第 16 回	定期試験	

成績評価方法	
小レポート等 30%、定期試験（筆記試験）70%の配点により評価する。評価基準としては、授業内容に関する知識の修得、拡大・深化のレベルを授業目標の1～3の達成度によって評価する。単位取得にあたっては、目に見えない「こころ」を臨床心理学的に捉える観点が持てること、および心理療法の過程を臨床心理学的なことばで説明できることが求められる。	
履修上の注意	
（関連科目）臨床心理学概論、心理検査法（心理的アセスメント）、心の病理学（精神疾患とその治療）（備考）	
教科書	
各回にプリントを配付する。	
参考文献	
エレンベルガー『無意識の発見』弘文堂、河合隼雄『コンプレックス』岩波新書、河合隼雄『カウンセリングの実際』岩波現代文庫ほか、講義時に適宜指示を行う。	

授業名称		担当教員氏名	
心理検査法（心理的アセスメント）		片畑真由美	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 後	選択	実験・実習、講義

授業概要
心理検査と倫理的配慮について概説した後、知能検査についての講義を行う。続いて、作業検査（内田クレペリン精神検査）、パーソナリティ検査（YG 性格検査、P-F スタディ、SCT）、投影法検査（バウムテスト・風景構成法）を実施し、それらの理論的背景や解釈について講義する。 ※本科目は、公認心理師の受験資格を得るために必要な科目である。
到達目標
この授業では、心理的アセスメントの背景理論や実施方法について学習する。一部の心理検査では実際に検査者および被検者を体験する。これを通して、心理検査を正しく理解するだけでなく、その効用と限界の認識、さらに倫理性をわきまえた態度を身につけていく。また、一定の決められた実施法や解釈の仕方などを習得する中で、新たな自分への気づきや他者理解へと繋げることを目的とする。具体的には、以下の 1～4 の能力を身に付けることを目的とする。1.心理検査の種類を理解し、各検査の効用と限界について説明できる。2.心理検査の実施に際して、実施手順や分析手順を理解し施行できる。3.心理検査を用いるときの倫理的配慮や注意事項について説明できる。4.自分自身の性格を多角的に分析し、他者に説明できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	心理的アセスメントの概要と心理検査における倫理的配慮の説明	教科書第 1 部を読んでおくこと
第 2 回	知能検査についての講義	教科書第 2 部を読んでおくこと
第 3 回	作業検査（内田クレペリン作業検査）	授業後、教科書第 4 部 5 節を読むこと
第 4 回	パーソナリティ検査（Y-G 性格検査：検査の概要と実施）	授業後、教科書第 4 部 1 節を読むこと
第 5 回	パーソナリティ検査（Y-G 性格検査：結果の整理と解釈）	自分の検査結果をまとめる
第 6 回	パーソナリティ検査（P-F スタディ：検査の概要と実施）	自分のスコアリングを行う
第 7 回	パーソナリティ検査（P-F スタディ：結果の整理と解釈）	教科書第 4 部 3 節を読んでおくこと
第 8 回	パーソナリティ検査（P-F スタディ：事例を通しての検討）	教科書第 4 部 3 節を読んでおくこと
第 9 回	パーソナリティ検査（SCT：検査の概要と実施）	授業後、教科書第 4 部 4 節を読むこと
第 10 回	パーソナリティ検査（SCT：結果の整理と解釈）	自分の結果をまとめる

第 11 回	投影法検査（バウムテスト：検査の概要と実施）	授業後、教科書第 3 部 2 節を読むこと
第 12 回	投影法検査（バウムテスト：解釈と事例を通しての検討）	自分の結果をまとめる
第 13 回	投影法検査（風景構成法：検査の概要と実施）	授業後、教科書第 3 部 3 節を読むこと
第 14 回	投影法検査（風景構成法：解釈と事例を通しての検討）	自分の結果をまとめる
第 15 回	心理的アセスメントのまとめ	これまでの授業の内容を復習しておく
		各心理検査を扱う初回には、心理検査の被検者体験を行うことが多いため、事前学習をせずに臨むこと。実際に検査を体験した回は、検査を解釈するための重要な素材となるので、自分の体験やディスカッションを行ったことに関するメモを作成・整理し、文献を踏まえて検査の解釈レポートを作成すること。また、事後学習として、講義で扱った内容による meaQs での問題作成を課題とする。

成績評価方法
授業目標の 1～4 の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、以下の 2 点が求められる。1. 心理検査の種類を理解し、各検査の効用と限界および倫理的配慮について説明できる。2. 自分自身の性格を多角的に分析し、他者に説明できる。成績を評価する方法として、レポートとテストを用いる。成績評価に占める割合は、meaQs 作問 20%、レポート 40%、テスト 40%である。
履修上の注意
（関連科目）臨床心理学概論、心理療法論（心理学的支援法）、心の病理学（精神疾患とその治療）（備考） ・臨床心理学の知識が必須であるので、「臨床心理学概論」を修得していることが望ましい。 ・心理テストの実施を含むので、出席と熱心な受講態度を期待する。 ・自分自身の性格等の自己開示が必要な場合がある。 ・心理検査の学習者・実施者の倫理（授業時に説明）を守り、検査の知識を安易に使用しないこと。
教科書
願興寺礼子・吉住隆弘(編) (2011): 「心理検査の実施の初歩」, ナカニシヤ出版.
参考文献
教科書で引用されている文献、授業で紹介する文献

授業名称		担当教員氏名	
感情・人格心理学		岩佐和典	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 後	選択	講義

授業概要
この授業では、人格心理学および感情心理学についての基礎的知識の習得を目指す。人格心理学では、人格の概念および基礎的理論を概観したのち、人格の類型論や特性論、パーソナリティの測定法について講義する。また感情心理学では、感情の生物学的基礎を踏まえたうえで、感情と行動との関係、感情が人に及ぼす影響について概説する。 ※本科目は、公認心理師の受験資格を得るために必要な科目である。
到達目標
この授業では、以下の4点を到達目標とする。①感情に関する理論および感情喚起の機序について概説できる。②感情が行動に及ぼす影響について概説できる。③人格の概念及び形成過程について概説できる。④人格の類型、特性等について概説できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション：授業内容の説明	第1回～第15回：事前学習としては、講義で扱う内容について参考文献を読んでおく。事後学習として、講義で扱った内容による meaQs での問題作成を課題とする。
第2回	人格の理論①（類型論）	
第3回	人格の理論②（特性論）	
第4回	人格の測定法①（質問紙法）	
第5回	人格の測定法②（投影法）	
第6回	人格と発達	
第7回	人格と対人関係	
第8回	人格の側面からみた適応と障害	
第9回	人格心理学についてのまとめ・小テスト①	
第10回	感情と認知	
第11回	感情と動機付け①（原因帰属・内発的動機付け）	
第12回	感情と動機付け②（達成目標理論）	
第13回	感情と対人関係	
第14回	感情の側面から見た適応	
第15回	感情心理学についてのまとめ・小テスト②	

成績評価方法
授業目標（達成目標）の1～4の達成度で評価を行う。単位を取得するためには①感情に関する理論および感情喚起の機序について半分以上説明できる。②感情が行動に及ぼす影響について半分以上説明できる。③人格の概念及び形成過程について半分以上説明できる。④人格の類型、特性等について半分以上説明できる。成績を評価する手段として小テスト2回と meaQs での問題作成およびミニッツペーパーを用いる。得点配分は小テスト70%、meaQs 問題作成15%、ミニッツペーパー15%とする。
履修上の注意
（関連科目）心理検査法（心理的アセスメント）、社会・集団・家族心理学 （備考）
教科書
レジュメを配布します。
参考文献
島義弘（2017）：パーソナリティと感情の心理学．サイエンス社． 齊藤勇（1986）：感情と人間関係の心理．川島書店．

授業名称		担当教員氏名	
神経・生理心理学		牧岡省吾	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 前	選択	講義

授業概要
心と脳神経系の関係について学ぶ科目である。ヒトの心のしくみは、脳神経系というハードウェアの仕組みと切り離して理解することができない。この授業では、脳神経系の解剖学的構造、神経系の情報伝達、大脳皮質の機能局在、脳神経系機能の研究手法、神経の可塑性と環境の影響、感覚・知覚と脳神経系、多感覚統合と脳神経系、運動と脳神経系、記憶と脳神経系、感情・動機づけと脳神経系、高次脳機能障害、精神疾患と脳神経系といったトピックについて、構造と機能の両面から学ぶ。なお、この授業では meaQs(meanings well up from the Question sharing!) による授業時間外学習を課す。 ※本科目は、公認心理師の受験資格を得るために必要な科目である。
到達目標
・脳神経系の解剖学的構造と神経系の情報伝達について基本的な概念を説明できること。 ・大脳皮質の機能局在、脳神経系機能の研究手法、神経の可塑性と環境の影響について基本的な概念を説明できること。 ・感覚・知覚、多感覚統合、運動、記憶、感情・動機づけ、高次脳機能障害、精神疾患と脳神経系の関係について基本的な概念を説明できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	脳神経系の解剖学的構造	meaQs による学習を行う。
第 2 回	神経系の情報伝達(1)イオンチャンネルと活動電位	meaQs による学習を行う。
第 3 回	神経系の情報伝達(2)シナプスと学習	meaQs による学習を行う。
第 4 回	大脳皮質の機能局在	meaQs による学習を行う。
第 5 回	脳神経系機能の研究手法(1)脳機能画像	meaQs による学習を行う。
第 6 回	脳神経系機能の研究手法(2)計算論的神経科学	meaQs による学習を行う。
第 7 回	神経の可塑性と環境の影響(1)遺伝子と神経系	meaQs による学習を行う。
第 8 回	神経の可塑性と環境の影響(2)学習と神経系	meaQs による学習を行う。
第 9 回	感覚・知覚と脳神経系	meaQs による学習を行う。
第 10 回	多感覚統合と脳神経系	meaQs による学習を行う。
第 11 回	運動と脳神経系	meaQs による学習を行う。
第 12 回	記憶と脳神経系	meaQs による学習を行う。
第 13 回	感情・動機づけと脳神経系	meaQs による学習を行う。

第 14 回	高次脳機能障害	meaQs による学習を行う。
第 15 回	精神疾患と脳神経系	meaQs による学習を行う。
第 16 回	期末試験	

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、次の 3 点を達成することが求められる。 ・授業で取り上げた脳神経系の解剖学的構造と神経系の情報伝達に関する基本的な概念を半分以上説明できること。 ・授業で取り上げた大脳皮質の機能局在、脳神経系機能の研究方法、神経の可塑性と環境の影響に関する基本的な概念を半分以上説明できること。 ・授業で取り上げた感覚・知覚、多感覚統合、運動、記憶、感情・動機づけ、高次脳機能障害、精神疾患と脳神経系の関係に関する基本的な概念を半分以上説明できること。 成績を評価する方法として、期末試験とミニツツペーパーの提出（15 回）を用いる。成績評価に占める割合は、期末試験（65%）、meaQs への参加(15%)、ミニツツペーパー(20%)である。
履修上の注意
（関連科目）心理学概論、人間システムとサステナビリティ、認知科学 1（知覚・認知心理学）、認知科学 2（学習・言語心理学）、発達心理学 1、発達心理学 2、感情・人格心理学
教科書
授業はプロジェクトによってスライドを提示しながら行う。スライドと同内容のプリントを毎回配付する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
健康・医療心理学		河野直子	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3 後	選択	講義

授業概要
ストレスと心身の疾病との関係、医療現場の心理社会的課題および必要な心理支援、保健活動現場の心理社会的な課題および必要な支援、災害時などに必要な心理支援について概説し、公認心理師等、支援者としての活動に不可欠となる領域固有の知識・技術の習得を目指す。 ※本科目は、公認心理師の受験資格を得るために必要な科目である。
到達目標
①保健活動が行われている現場について知り、保健活動における心理社会的課題と支援の方法を説明できるようになる。 ②医療現場について知り、医療現場における心理社会的課題と支援の方法を説明できるようになる。 ③災害時等に必要な心理に関する支援のあり方について説明できるようになる。 ④病院スタッフ間など医療従事職ならではの特徴的な情報伝達方法について議論することを通して、医療領域での他職種連携やコミュニケーション方法について理解を深める。 ⑤心身相関、ストレスと心身の疾病との関係について説明できるようになる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション イントロダクション：公認心理師の業務・健康とは病気（やまい）とは・健康日本21	教科書の購入と目次の確認
第2回	健康心理学と地域保健活動、健康施策	関連章の通読と授業支援システムを活用した授業時間外学習
第3回	健康心理学におけるアセスメントと支援	関連章の通読と授業支援システムを活用した授業時間外学習
第4回	健康障害の予防、健康行動と行動変容技法	関連章の通読と授業支援システムを活用した授業時間外学習
第5回	疾患・長寿とパーソナリティ	関連章の通読と授業支援システムを活用した授業時間外学習
第6回	ストレスマネジメント	関連章の通読と授業支援システムを活用した授業時間外学習
第7回	医療心理学と医療の現場	関連章の通読と授業支援システムを活用した授業時間外学習

第 8 回	他職種協働とチーム医療、医療安全、感染症予防	関連章の通読と授業支援システムを活用した授業時間外学習
第 9 回	ライフステージからみた医療心理学	関連章の通読と授業支援システムを活用した授業時間外学習
第 10 回	高齢者と健康	関連章の通読と授業支援システムを活用した授業時間外学習
第 11 回	医療現場でのコミュニケーション(1):医療技術者間の連携・チームビルディング	関連章の通読と授業支援システムを活用した授業時間外学習
第 12 回	医療現場でのコミュニケーション(2):患者—医療者関係・災害時等に必要な心理に関する支援のあり方	関連章の通読と授業支援システムを活用した授業時間外学習
第 13 回	心の病と医療:精神科・心療内科	関連章の通読と授業支援システムを活用した授業時間外学習
第 14 回	睡眠のマネジメント、自殺予防	関連章の通読と授業支援システムを活用した授業時間外学習
第 15 回	期末試験	
第 16 回	振り返り	

成績評価方法
授業目標(達成目標)に対する達成度(60%以上)で成績評価を行う。成績評価には、講義内でのディスカッション内容(10%)、授業支援システムを活用した授業時間外学習(10%)、期末試験の結果(80%)を用いる。
履修上の注意
公認心理師必修科目です。
教科書
公認心理師カリキュラム準拠 健康・医療心理学 医歯薬出版(2018/9/27) 宮脇 稔(編集),大野 太郎(編集),藤本 豊(編集),松野 俊夫(編集)
参考文献
適宜、指定ないし資料配布します。

授業名称		担当教員氏名	
教育・学校心理学		岡本真彦、高橋幸治	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	3 後	選択	講義

授業概要
この授業では、幼・保育園、小学校、中学校・高等学校の学校教育場面で児童・生徒に生じる心理的・社会的問題とその背景、及び児童・生徒の心理的問題に対する援助の方法について概説します。授業は、前半8回を岡本、後半8回を高橋が担当します。前半では、現代の学校を取り巻く諸問題、学習への動機づけ、学級集団作り、単元の構成と授業づくり、学習の評価と学力・知能のアセスメント、などについて解説します。後半では、スクールカウンセリング、保護者・教職員・地域社会との連携、不登校、いじめ、非行、及びそれらに対する支援、特別支援教育、などについて解説し、グループ討議形式の授業を取り入れ、理解を深めます。 ※本科目は、公認心理師の受験資格を得るために必要な科目である。
到達目標
この授業では、学校教育場面で生じる心理・社会的課題に対して適切な援助ができることを目標としています。 具体的には、 1. 学校教育場面で生じる心理・社会的課題とその背景となる問題について理解している 2. 学校教育場面で生じた児童・生徒の心理・社会的課題に対する援助法について理解し、他者と意見交流を行うことで視野を拡大して問題について考えることができる

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	現代の学校を取り巻く諸問題（岡本真彦）	meaQs を用いた復習問題の作成と解答
第2回	学級集団作り（岡本真彦）	meaQs を用いた復習問題の作成と解答
第3回	学習への動機づけ（岡本真彦）	meaQs を用いた復習問題の作成と解答
第4回	学習の理論（岡本真彦）	meaQs を用いた復習問題の作成と解答
第5回	単元の構成と授業づくり（岡本真彦）	meaQs を用いた復習問題の作成と解答
第6回	特別支援教育（岡本真彦）	meaQs を用いた復習問題の作成と解答
第7回	学習の評価と学力・知能のアセスメント（岡本真彦）	meaQs を用いた復習問題の作成と解答
第8回	まとめと中間テスト①（岡本真彦）	
第9回	不登校問題への援助（高橋幸治）	不登校の研究と臨床の歴史を理解する
第10回	対人関係問題への援助（高橋幸治）	対人関係問題での生徒の成長について考える
第11回	問題行動への援助（高橋幸治）	問題行動に潜在する課題に目を向ける
第12回	教員への援助（高橋幸治）	授業で扱った事例問題を考える

第 13 回	保護者への援助（高橋幸治）	授業で扱った事例問題を考える
第 14 回	スクールカウンセリング事例研究①（問題行動と教員との連携）（高橋幸治）	授業で扱った事例問題を考える
第 15 回	スクールカウンセリング事例研究②（教師へのコンサルテーション）（高橋幸治）	授業で扱った事例問題を考える
第 16 回	期末テスト（高橋幸治）	

成績評価方法
授業目標（達成目標）の 1～2 の達成度で成績評価を行う。 単位を取得するためには、 ・学校教育場面で生じる心理・社会的課題とその背景となる問題について理解している ・学校教育場面で生じた児童・生徒の心理・社会的課題に対する援助法について理解し、他者と意見交流を行うことで視野を拡大して問題について考えることができるの 2 点を達成することが求められる。 成績を評価する方法として、2 回の中間テストと meaQs を用いる。成績評価に占める割合は期末試験（80%）、meaQs（20%）である。
履修上の注意
（関連科目）人間システムとサステナビリティ、心理学概論、発達心理学 1・2、臨床心理学概論（備考）
教科書
毎回、資料を配付する。
参考文献
適宜紹介します

授業名称		担当教員氏名	
心理学統計法 1		岡本真彦	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 前	必修	講義

授業概要
本授業では、心理統計の基本的考え方を習得した上で、記述統計と推測統計の基本的な考え方を理解し、統計的仮説検定の理論と t 検定を理解し、実際に使用できるようになることを目標としている。 具体的なには、データの特徴を記述する方法、2 つの変数・データの間を記述する方法、母集団と標本の関係、統計的仮説検定の基本的考え方、t 検定について概説する。 ※本科目は、公認心理師の受験資格を得るために必要な科目である。
到達目標
・記述統計の基本的技能を理解し、実際に使用できるようになる。 ・統計的仮説検定の基本的な考え方を理解している。 ・実際のデータに t 検定を適用し、分析することができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	心理統計とは何か-心理学になぜ統計がひつようなのか?-	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 2 回	1 つの変数の特徴の記述(1) データとは、尺度水準、尺度水準と変数変換、データの図表化	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 3 回	1 つの変数の特徴の記述(2) 代表値、散布度、標準化	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 4 回	2 つの変数の関係を記述する(1) 散布図、共分散、相関係数	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 5 回	2 つの変数の関係を記述する(2) 相関係数の性質、クロス集計表と連関係数	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 6 回	確認テスト① R 演習①-記述統計-	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 7 回	標本から母集団を推測しよう(1) 母集団と標本、正規分布、標準正規分布	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 8 回	標本から母集団を推測しよう(2) 標本分布、標準誤差、推定、不偏分散	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 9 回	統計的仮説検定って何だろう(1) 統計的仮説検定の考え方、帰無仮説と対立仮説、有意水準、両側検定と片側検定、	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習

第 10 回	統計的仮説検定って何だろう(2) 統計的検定における 2 種類の誤り, 統計的仮説 検定の手順, 標準正規分布を用いた検定,	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 11 回	統計的仮説検定って何だろう Part3 t 分布を用いた検定 (t 検定), 相関係数の検定	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 12 回	確認テスト② R 演習②-t 検定-	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 13 回	2 つの平均を比べよう(1) t 検定による平均値の比較, 独立な 2 群の平均 値の差に関する t 検定	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 14 回	2 つの平均を比べよう(2) 対応のある t 検定, ウェルチの検定	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 15 回	確認テスト③ R 演習③-t 検定-	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 16 回	期末試験	

成績評価方法
授業目標（達成目標）の達成度で成績評価を行う。 単位を取得するためには、 ・記述統計の基本的技能を用いて、実際のデータの特徴を 60%以上記述することができる ・統計的仮説検定の基本的な考え方を 50%以上説明することができる ・実際のデータに t 検定を適用し、60%以上分析することができる。 の 3 点を達成することが求められる。 成績を評価する方法として、宿題、確認テスト、期末試験を用いる。成績評価に占める割合は、宿題(20%)、確認テスト（30%）、期末試験（50%）である。
履修上の注意
適宜指示します。
教科書
適宜指示します。
参考文献
適宜指示します。

授業名称		担当教員氏名	
心理学統計法 2		牧岡省吾、武藤裕之	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 後	必修	講義

授業概要
統計的仮説検定のうちノンパラメトリック検定、因子分析、多変量解析を理解し、実際に使用できるようになることを目標としている。具体的には、 χ^2 検定、分散分析、多重比較、主成分分析、因子分析、偏相関と重回帰分析、判別分析、クラスター分析について概説する。
到達目標
・ノンパラメトリック検定の計算技法を理解し、実際のデータに対してノンパラメトリック検定を用いて分析、解釈できる。 ・分散分析の計算技法を理解し、実際のデータに対して分散分析を用いて分析、解釈できる。 ・因子分析の計算技法を理解し、実際のデータに対して因子分析を用いて分析、解釈できる。 ・重回帰分析の計算技法を理解し、実際のデータに対して重回帰分析を用いて分析、解釈できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	度数データの検定(1) (牧岡省吾) 適合度の検定と独立性の検定	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 2 回	度数データの検定(2) (牧岡省吾) Fisher の直接確率法、マクニマー検定、比率の検定	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 3 回	順位データの検定 (牧岡省吾) マン・ホイットニー検定、ウィルコクソンの符号検定、クラリス・ウォリスの検定	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 4 回	確認テスト④ (牧岡省吾) R 演習④	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 5 回	分散分析(1) (武藤拓之) 分散分析の基本的な考え方、1 要因の分散分析	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 6 回	分散分析(2) (武藤拓之) いろいろな多重比較、繰り返しのある 1 要因の分散分析	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 7 回	分散分析(3) (武藤拓之) 2 要因被験者間分散分析、交互作用、2 要因被験者内分散分析	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習

第 8 回	分散分析(4) (武藤拓之) 2 要因被験者内分散分析、3 要因分散分析、2 次の交互作用	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 9 回	確認テスト⑤ (武藤拓之) R 演習⑤	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 10 回	因子分析(1) (武藤拓之) 因子分析の結果の見方、因子分析の基本的考え方	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 11 回	因子分析(2) (武藤拓之) 因子数の決定と回転、因子寄与率、共通性、独自性、因子得点	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 12 回	確認テスト⑥ (武藤拓之) R 演習⑥	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 13 回	重回帰分析(1) (武藤拓之) 偏相関	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 14 回	重回帰分析(2) (武藤拓之) 重回帰分析	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 15 回	確認テスト⑦ (武藤拓之) R 演習⑦	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 16 回	期末テスト (武藤拓之)	
		授業内容の復習と理解、次回内容の予習。各回の課題を行って復習すること。次回の内容理解のために教科書などを読んでくること。

成績評価方法
授業目標（達成目標）の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 ・実際のデータにノンパラメトリック検定を適用し、60%以上分析することができる。 ・実際のデータに分散分析を適用し、60%以上分析することができる。 ・実際のデータに因子分析を適用し、60%以上分析することができる。 ・実際のデータに重回帰分析を適用し、60%以上分析することができる。 の 4 点を達成することが求められる。 成績を評価する方法として、宿題、確認テスト、期末試験を用いる。成績評価に占める割合は、宿題（20%）、確認テスト（30%）、期末試験（50%）である。
履修上の注意
適宜指示する

教科書
適宜紹介する
参考文献
適宜紹介する

授業名称		担当教員氏名	
心理学統計法 3		河村悠太	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	3 前	選択	講義

授業概要
本授業では、応用的な心理統計法を理解し、実際に使用できるようになることを目標としている。具体的には、確証的因子分析、共分散構造分析、判別分析とクラスター分析、階層的重回帰分析、ロジスティック回帰分析、混合効果モデル、ベイズ推定について概説する。
到達目標
・共分散構造分析の計算技法を理解し、実際のデータに対してノンパラメトリック検定を用いて分析、解釈できる。 ・階層的重回帰分析の計算技法を理解し、実際のデータに対して分散分析を用いて分析、解釈できる。 ・共分散構造分析の計算技法を理解し、実際のデータに対して因子分析を用いて分析、解釈できる。 ・統計解析結果の表し方を理解し、実際のデータに対して重回帰分析を用いて分析、解釈できる。 ・効果量、検定力とサンプルサイズの必要性を説明できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	主成分分析	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 2 回	判別分析	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 3 回	クラスター分析	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 4 回	確証的因子分析と共分散構造分析の考え方	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 5 回	確証的因子分析	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 6 回	共分散構造分析	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 7 回	確認テスト⑧ R 演習⑧	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 8 回	階層的重回帰分析(1) (回帰式、回帰係数)	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 9 回	階層的重回帰分析(2) (重回帰モデル、変数選択)	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 10 回	モデルの適合度	教科書の該当範囲の予習

		meaQs を用いた復習
第 11 回	確認テスト⑨ R 演習⑨	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 12 回	統計解析結果の表し方(1) (統計値、表)	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 13 回	統計解析結果の表し方(2) (デンドログラム、 パス図、回帰曲線)	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 14 回	効果量	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 15 回	検定力とサンプルサイズ	教科書の該当範囲の予習 meaQs を用いた復習
第 16 回	期末テスト	

成績評価方法
授業目標（達成目標）の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 ・実際のデータに共分散構造分析を適用し、60%以上分析することができる。 ・実際のデータに階層的重回帰分析を適用し、60%以上分析することができる。 ・実際の統計解析結果を 60%以上適切に表現できる。 の 4 点を達成することが求められる。 成績を評価する方法として、宿題、確認テスト、期末試験を用いる。成績評価に占める割合は、宿題 (20%)、確認テスト (30%)、期末試験 (50%) である。
履修上の注意
適宜指示する。
教科書
適宜指示する。
参考文献
適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
心理学研究法		岡本真彦、河村悠太、牧岡省吾、武藤拓之	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2 前	必修	実験・実習

授業概要
心理学における研究の方法論を学ぶ科目である。科学と実証、実験的方法と観察的方法、実証の手続き、実験的方法（実験法、準実験法、調査法、検査法、観察法、面接法）、相関関係と因果関係、定性的研究と定量的研究、データの統計的記述、複雑な心理事象のモデリング、人権尊重とインフォームドコンセント、研究の不正の禁止などのトピックについて、具体的な研究例に基づいて実践的に学ぶ。 ※本科目は、公認心理師の受験資格を得るために必要な科目である。
到達目標
・研究テーマに適したデータ取得の方法を選択することができること。また、その理由について説明することができること。 ・研究テーマに適したデータ分析の方法を選択することができること。また、その理由について説明することができること。 ・研究倫理と研究公正について、基本的な概念を説明できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	科学と実証（牧岡省吾）	meaQs による学習を行う。
第2回	実験的方法と観察的方法（牧岡省吾）	meaQs による学習を行う。
第3回	実証の手続き（牧岡省吾）	meaQs による学習を行う。
第4回	実験的方法(1)実験法（武藤拓之）	meaQs による学習を行う。
第5回	実験的方法(2)実験法と準実験法（武藤拓之）	meaQs による学習を行う。
第6回	観察的方法(1)調査法（武藤拓之）	meaQs による学習を行う。
第7回	観察的方法(2)検査法（岡本真彦）	meaQs による学習を行う。
第8回	観察的方法(3)観察法（岡本真彦）	meaQs による学習を行う。
第9回	実験的方法(4)面接法（岡本真彦）	meaQs による学習を行う。
第10回	相関関係から因果関係へ（河村悠太）	meaQs による学習を行う。
第11回	定性的研究から定量的研究へ（河村悠太）	meaQs による学習を行う。
第12回	データの統計的記述（河村悠太）	meaQs による学習を行う。
第13回	複雑な心理事象のモデリング（牧岡省吾）	meaQs による学習を行う。
第14回	人権尊重とインフォームドコンセント（牧岡省吾）	meaQs による学習を行う。

第 15 回	研究の不正の禁止 (牧岡省吾)	meaQs による学習を行う。

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、次の3点を達成することが求められる。 ・研究テーマに適したデータ取得の方法を選択することができること。また、その理由について説明することができること。 ・研究テーマに適したデータ分析の方法を選択することができること。また、その理由について説明することができること。 ・研究倫理と研究公正について、基本的な概念を説明できること。 成績を評価する方法として、meaQs への参加とレポートを用いる。成績評価に占める割合は、meaQs への参加(30%)、レポート(70%)である。
履修上の注意
関連科目：心理統計法 1、心理統計法 2、心理統計法 3、心理学実験
教科書
毎回の授業で資料を配付する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
心理学実験		岩佐和典、岡本真彦、河村悠太、飛田国人、野津亮、牧岡省吾、武藤拓之	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	2 後	必修	実験・実習

授業概要
心理学における実験と調査の基本的な方法論を学ぶための科目である。受講者自らが実験者と実験参加者の両方の役割を体験することにより、仮説検証の考え方、実験や調査の具体的な手続きと注意点、データ分析の方法、レポートの作成方法などについて実践的に学ぶ。 ※本科目は、公認心理師の受験資格を得るために必要な科目である。
到達目標
基本的な心理実験をグループで遂行し、結果をレポートにまとめることができることを目標とする。具体的には、以下の2点を目標とする。 1. 心理実験・調査の基本的手法を実施できる。 2. 実験および調査の結果を整理・分析して、レポートにまとめることができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	実験と仮説検証（牧岡省吾）	プリント予習
第2回	ミュラー・リヤーの錯視（武藤拓之）	レポート作成とプリント予習
第3回	大きさの恒常性（飛田国人）	レポート作成とプリント予習
第4回	奥行知覚の手がかり（武藤拓之）	レポート作成とプリント予習
第5回	マグニチュード推定法（野津亮）	レポート作成とプリント予習
第6回	鏡像描写（実験の実施）（岡本真彦）	実験データの整理
第7回	鏡像描写（実験データの分析）（岡本真彦）	レポート作成とプリント予習
第8回	語の記銘（牧岡省吾）	レポート作成とプリント予習
第9回	再生と再認（牧岡省吾）	レポート作成とプリント予習
第10回	性格の認知（実験の実施）（岩佐和典）	実験データの整理
第11回	性格の認知（実験データの分析）（岩佐和典）	レポート作成とプリント予習
第12回	プロトコル分析（実験の実施）（岡本真彦）	実験データの整理
第13回	プロトコル分析（実験データの分析）（岡本真彦）	レポート作成とプリント予習
第14回	調査法の基礎（実験の実施）（河村悠太）	実験データの整理

第 15 回	調査法の基礎(実験データの分析)(河村悠太)	レポート作成
成績評価方法		
授業目標（達成目標）の1～2の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 ・心理実験・調査の基本的手法を60%以上実施できる。 ・実験および調査の結果を整理・分析して、レポートにまとめることが60%以上できる。 上記の2点を達成することが求められる。成績を評価する方法として、毎回のレポートを用いる。成績評価に占める割合はレポート（100%）である。すべての実験に参加してレポートを期限内に提出すること。何度かレポートを期限内に提出しなかった場合、単位の修得は困難になる。		
履修上の注意		
関連科目：心理統計法1、心理統計法2、心理統計法3、心理学研究法 備考：実験後、翌週の実習開始時に実験のレポートを提出すること。授業を欠席した場合は、その週のレポートを提出できない。提出されたレポートは基本的に翌週に返却されるが、内容によっては再提出を求めることがあるので、毎回のレポートのコメントを参考に内容を高めていくこと。		
教科書		
毎回プリントを配布する		
参考文献		
授業中に適宜紹介する。		

授業名称		担当教員氏名	
心理学特殊実験 1		岩佐和典、岡本真彦、河村悠太、飛田国人、野津亮、牧岡省吾、武藤拓之	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	3 前	選択	実験・実習

授業概要
心理学における研究法について文献の検討と実習によって学ぶことにより、人間の意識や行動について自ら研究するために必要な方法を身につける。授業では実証的アプローチ志向の実験系グループと臨床的アプローチ志向の臨床系グループに分かれる。実験系グループでは、前半に心理学実験プログラミングと発達研究法（ピアジェの保存課題）を全体で行った後、後半は各教員の用意したテーマ毎に少人数の班に分かれ、それぞれ外国語文献を読んで実験計画を立てて実験を行い、発表する。臨床系グループでは、1) 臨床心理学の基本的文献の講読、2) 臨床心理学研究の方法論、3) グループワークを行う。
到達目標
心理学の文献の検討、実験・調査、及び事例検討会を通して、心理学の研究を遂行するために必要な文献を理解して考察するスキル、実験・調査スキル、症例検討スキルを身につける。具体的には以下を達成目標とする。1. 心理学の研究に関する文献を理解し、研究テーマに関して基礎的な問いを立てることができる。2. 心理学の研究方法（実験・調査・質的研究等）に従った基礎的な研究を遂行することができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション	
第2回～第4回：	実験系グループ：心理学実験プログラミング（メンタルローテーション課題） 臨床系グループ：基本的文献の講読	文献や資料については事前に検討して発表資料を作成してくる。実験・調査結果については分析と考察を行って発表資料を作成してくる。
第5回～第15回	発達研究法（保育園でピアジェの保存課題を行う）、グループ実験、成果発表。 臨床系グループ：基本的文献の講読とグループワーク	文献や資料については事前に検討して発表資料を作成してくる。実験・調査結果については分析と考察を行って発表資料を作成してくる。

成績評価方法
授業目標（達成目標）1～2の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、1. 心理学の研究に関する文献を理解し、研究テーマに関して基礎的な問いを立てることができる。2. 心理学の研究手法（実験・調査・質的研究等）に従った基礎的な研究を遂行することができる。上記2点の達成が求められる。評価方法には演習への参加・発表状況およびレポートを用いる。成績評価に占める割合は発表とレポート（100%）である。
履修上の注意
（関連科目）心理学類専門科目の全て （備考）
教科書
実験系グループ：適宜資料を配付する。臨床系グループ：フロイト『精神分析入門』新潮文庫、ユング『心理療法の実践』みすず書房、アドラー『個人心理学講義:生きることの科学』アルテ、河合隼雄『ユング心理学入門』培風館、河合隼雄『心理療法序説』岩波現代文庫
参考文献
授業中に、適宜紹介する

授業名称		担当教員氏名	
心理学特殊実験 2		岩佐和典、岡本真彦、河村悠太、飛田国人、野津亮、牧岡省吾、武藤拓之、河野直子	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	3 後	選択	実験・実習

授業概要
卒業研究につながるテーマを各自が選び、心理学の特定のテーマに関する文献の検討と研究課題の設定、実験の計画と実施、および事例検討会を行うことで、特定のテーマの研究を行う技能を身につける。授業では実証的アプローチ志望の実験系グループと臨床的アプローチ志望の臨床系グループに分かれる。実験系グループでは、各自が卒業研究につながるテーマを選び、外国語文献を読んだ後、実験計画を立てて実験を行い、発表する。臨床グループでは、各自が卒業研究につながるテーマを選び、研究計画を立てて文献研究・実験・調査を実施し、発表する。
到達目標
心理学の特定のテーマに関する文献の検討と研究課題の設定、実験・調査、および事例検討会を通して、心理学の研究を遂行するために必要な文献を理解して考察するスキル、実験・調査スキル、症例検討スキルを身につける。具体的には以下を達成目標とする。1. 心理学の研究に関する文献を理解し問題を発見して、研究テーマを立てることができる。2. 研究テーマにふさわしい研究方法で計画を立て研究を実施し発表することができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	オリエンテーション	
第 2 回～ 第 7 回	実験系グループ：実験計画の立案 臨床系グループ：研究計画の立案	文献や資料については事前に検討して発表資料を作成してくる。実験・調査結果については分析と考察を行って発表資料を作成してくる。
第 8 回～ 第 15 回	実験系グループ：実験・調査の実施 臨床系グループ：文献研究・実験・調査の実施	文献や資料については事前に検討して発表資料を作成してくる。実験・調査結果については分析と考察を行って発表資料を作成してくる。

成績評価方法
授業目標（達成目標）1～2の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、1. 心理学の研究に関する文献を理解し問題を発見して、研究テーマを立てることができる。2. 研究テーマにふさわしい研究方法で計画を立て研究を実施し発表することができる。上記2点の達成が求められる。評価方法には演習への参加・発表状況およびレポートを用いる。成績評価に占める割合は発表とレポート（100%）である。

履修上の注意
(関連科目) 心理学類専門科目の全て (備考)
教科書
実験グループ：適宜資料を配付する。 臨床グループ：適宜資料を配付する。
参考文献
授業中に、適宜紹介する

授業名称		担当教員氏名	
心理演習 1		岩佐和典、岡本真彦、片畑真由美、河野直子、川部哲也、河村悠太、総田純次、飛田国人、野津亮、高橋幸治、牧岡省吾、武藤拓之	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	3 前	選択	演習

授業概要
心理学の基礎的な考え方を示す代表的な研究テーマについて、理論的な背景や研究史について論文や書籍をもとに研究発表と討論を行なうことを通じて、心理学の議論の展開方法や研究の進め方についての理解をすすめる。授業では以下の4つの班に分かれて基礎的な外国語文献の講読を中心に発表と討論を行う。・心理学への実証的アプローチⅠ・心理学への実証的アプローチⅡ・心理学への臨床的アプローチⅠ・心理学への臨床的アプローチⅡ
到達目標
心理学における代表的な研究テーマを複数取り上げ、理論的な背景や研究史について論文や書籍をもとに研究発表と討論を行なうことを通じて、心理学の議論の展開方法や研究の進め方について理解する能力をつける。具体的には以下を達成目標とする。1. 研究テーマに関する基礎的な外国語文献を読解し発表することができる。2. 研究テーマに関する理論背景・研究史・研究方法について議論できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回～第3回	4 グループに分かれて外国語文献講読を中心とした演習を行うが、実証的および臨床的アプローチの双方に取り組む。 実証的アプローチ中心のグループ1および2は、臨床的アプローチの入門的文献を読む。 臨床的アプローチ中心のグループ3および4は、実証的アプローチの入門的文献を読む。	事前学習として、文献の読解と研究発表準備に努める。
第4回～第6回	実証的アプローチ中心のグループ1および2は、実証的アプローチの入門的文献を読む。 臨床的アプローチ中心のグループ3および4は、臨床的アプローチの入門的文献を読む。	事前学習として、文献の読解と研究発表準備に努める。
第7回～第15回	実証的アプローチ中心のグループ1および2は、実証的アプローチの基礎的文献を読む。 臨床的アプローチ中心のグループ3および4は、臨床的アプローチの基礎的文献を読む。	事前学習として、文献の読解と研究発表準備に努める。

成績評価方法
授業目標（達成目標）の1～2の達成度で成績評価を行う。単位取得のためには、1. 研究テーマに関する基礎的な外国語文献を読解し発表することができる。2. 研究テーマに関する理論背景・研究史・研究方法について議論できる。上記2点の達成が求められる。成績評価には、取り組み状況・発表に関する評価を用いる。成績評価に占める割合は課題への取組状況（50%）発表（50%）とする。
履修上の注意
（関連科目）心理演習2 （備考）発表と討論が重要である。
教科書
演習中に適宜基礎文献を提示する。
参考文献
演習中に適宜紹介・指示する。

授業名称		担当教員氏名	
心理演習 2		岩佐和典、岡本真彦、片畑真由美、河野直子、川部哲也、河村悠太、総田純次、飛田国人、野津亮、高橋幸治、牧岡省吾、武藤拓之	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	3 後	必修	演習

授業概要
心理学の特定の研究テーマについて、理論的な背景や研究史について論文や書籍をもとに研究発表と討論を行なうことを通じて、心理学の議論の展開方法や研究の進め方についての理解をすすめる。授業では以下の4つの班に分かれて外国語文献の講読を中心に発表と討論を行う。・心理学への実証的アプローチⅠ・心理学への実証的アプローチⅡ・心理学への臨床的アプローチⅠ・心理学への臨床的アプローチⅡ
到達目標
心理学における特定の研究テーマについて、理論的な背景や研究史について論文や書籍をもとに研究発表と討論を行なうことを通じて、心理学の議論の展開方法や研究の進め方について理解する能力をつける。 具体的には以下を達成目標とする。 1. 研究テーマに関する外国語文献を読解し発表することができる。 2. 研究テーマに関する理論背景・研究史・研究方法について議論できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回～第5回	実証的アプローチ中心のグループ1および2は、実証的アプローチの標準的文献を読む。 臨床的アプローチ中心のグループ3および4は、臨床的アプローチの標準的文献を読む。	事前学習として、文献の読解と研究発表準備に努める。
第6回～第10回	実証的アプローチ中心のグループ1および2は、実証的アプローチの発展的文献を読む。 臨床的アプローチ中心のグループ3および4は、臨床的アプローチの発展的文献を読む。	事前学習として、文献の読解と研究発表準備に努める。
第11回～第15回	実証的アプローチ中心のグループ1および2は、実証的アプローチの応用的文献を読む。 臨床的アプローチ中心のグループ3および4は、臨床的アプローチの応用的文献を読む。	事前学習として、文献の読解と研究発表準備に努める。

成績評価方法
授業目標（達成目標）の1～2の達成度で成績評価を行う。単位取得のためには、1．研究テーマに関する外国語文献を読解し発表することができる。2．研究テーマに関する理論背景・研究史・研究方法について議論できる。上記2点の達成が求められる。成績評価には、取り組み状況・発表に関する評価を用いる。成績評価に占める割合は課題への取組状況（50％）発表（50％）とする。
履修上の注意
（関連科目）心理演習1 （備考）発表と討論が重要である。
教科書
演習中に適宜基礎文献を提示する。
参考文献
演習中に適宜紹介・指示する。

授業名称		担当教員氏名	
心理演習 3		岩佐和典、総田純次	
単位数	配当年次	単位数	配当年次
2	3 前	選択	演習

授業概要
心理学に関する研究トピックスと研究法について、事例検討およびロールプレイを通じて、心理支援に関する知識および技能の基本的な水準を習得する。 ※本科目は、公認心理師の受験資格を得るために必要な科目である。
到達目標
心理支援を要するものに関して、事例検討とロールプレイを通して、以下の（ア）から（オ）を理解できる。 （ア）コミュニケーション、心理検査、心理面接、地域支援等の知識および技能 （イ）心理支援を要するもの等の理解とニーズの把握および支援計画の作成 （ウ）心理支援を要するものの現実生活を視野に入れたチームアプローチ （エ）多職種連携および地域連携 （オ）公認心理師としての職業倫理および法的義務への理解

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	オリエンテーション	事前配付資料を読む。
第 2 回	事例（コミュニケーション技術）に関する視聴覚資料の検討を行う。	事例に関する資料を事前に読む。
第 3 回	事例（コミュニケーション技術）に関する文献資料の検討を行う。	事例に関する資料を事前に読む。
第 4 回	事例（心理検査）に関する視聴覚資料の検討を行う。	事例に関する資料を事前に読む。
第 5 回	事例（心理検査）に関する文献資料の検討を行う。	事例に関する資料を事前に読む。
第 6 回	事例（心理面接）に関する視聴覚資料の検討を行う。	事例に関する資料を事前に読む。
第 7 回	事例（心理面接）に関する文献資料の検討を行う。	事例に関する資料を事前に読む。
第 8 回	事例（地域支援）に関する視聴覚資料の検討を行う。	事例に関する資料を事前に読む。
第 9 回	コミュニケーション技術に関するロールプレイを行う。	ロールプレイの準備。
第 10 回	心理検査に関する基礎的ロールプレイを行う。	ロールプレイの準備。

第 11 回	心理検査に関する発展的ロールプレイを行う。	ロールプレイの準備。
第 12 回	心理面接に関する基礎的ロールプレイを行う。	ロールプレイの準備。
第 13 回	心理面接に関する発展的ロールプレイを行う。	ロールプレイの準備。
第 14 回	地域支援に関する基礎的ロールプレイを行う。	ロールプレイの準備。
第 15 回	地域支援に関する発展的ロールプレイを行う。	ロールプレイの準備。レポートの作成。

成績評価方法
到達目標 1 または 2 の達成度によって成績を評価する。成績評価は、演習への取り組み（出席と発表）とレポートの評価を用いる。成績評価に占める割合は、演習への取り組み（50%）レポート（50%）とする。
履修上の注意
（関連科目）心理学研究法、心理学基礎実験、臨床心理学概論、心理検査法（心理的アセスメント）、心の病理学（精神疾患とその治療）
教科書
演習のなかで適宜指示する。
参考文献
演習のなかで適宜指示する。

授業名称		担当教員氏名	
公認心理師の職責		岩佐和典、河野直子、総田純次	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	3 後	選択	講義

授業概要
公認心理師の役割、法的義務および倫理、心理支援を要する者の安全確保、情報の適切な取り扱い、保健医療・福祉・教育などにおける業務、自己課題発見・解決能力、生涯学習、多職種連携および地域連携について講義する。 ※本科目は、公認心理師の受験資格を得るために必要な科目である。
到達目標
公認心理師に求められる役割、業務、連携と、それに伴う倫理および義務、安全確保、情報管理、生涯学習について理解する。 1. 公認心理師の役割を理解する。2. 公認心理師の法的義務を理解し、必要な倫理を身につける。3. 心理支援を要する者の安全を確保できる。4. 守秘義務および情報共有の重要性を理解し、情報を適切に扱うことができる。5. 保健医療、福祉、教育その他の分野における公認心理師の具体的な業務内容を説明できる。6. 自己課題を発見し、自己学習によって課題を解決する能力を身につける。7. 生涯にわたり自己研鑽を続ける意欲と態度を身につける。8. 連携による支援の意義を理解し、チームにおける公認心理師の役割を説明できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション (河野直子)	テキストの概要とWEB上の作問・回答の授業支援システムを理解すること
第2回	公認心理師の役割 (河野直子、岩佐和典)	テキスト第1章の予習とWEB上での作問・解答
第3回	公認心理師の法的義務と倫理 (岩佐和典)	テキスト第2章の予習とWEB上での作問・解答
第4回	要支援者の安全の確保 (岩佐和典)	テキスト第3章の予習とWEB上での作問・解答
第5回	情報の適切な取り扱い (岩佐和典)	テキスト第4章の予習とWEB上での作問・解答
第6回	保健医療分野における業務 (総田純次)	テキスト第5章の予習とWEB上での作問・解答
第7回	福祉分野における業務 (総田純次)	テキスト第6章の予習とWEB上での作問・解答

第 8 回	教育分野における業務 (総田純次)	テキスト第 7 章の予習と WEB 上での作問・解答
第 9 回	司法・犯罪分野における業務 (総田純次)	テキスト第 8 章の予習と WEB 上での作問・解答
第 10 回	産業・労働分野における業務 (総田純次)	テキスト第 9 章の予習と WEB 上での作問・解答
第 11 回	支援者としての自己課題 (河野直子)	テキスト第 10 章の予習と WEB 上での作問・解答
第 12 回	生涯学習への準備 (河野直子)	テキスト第 11 章の予習と WEB 上での作問・解答
第 13 回	多職種連携と地域連携 (河野直子)	テキスト第 12 章の予習と WEB 上での作問・解答
第 14 回	公認心理師の展開 (河野直子)	テキスト第 13 章の予習と WEB 上での作問・解答
第 15 回	まとめ (河野直子)	
第 16 回	期末試験 (河野直子)	

成績評価方法
到達目標に掲げる 8 項目について試験（100％）で評価する。
履修上の注意
（関連科目） （備考）WEB 上で問題作成と回答を行う授業支援システムを利用して、学生は毎回の講義内容に関する問題を作成・回答してください。
教科書
野島一彦編（2018）公認心理師の職責 遠見書房
参考文献
講義の中で適宜示します。

授業名称		担当教員氏名	
関係行政論		山本健太郎・東奈央・山本純弥・佐々木章・川部哲也	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	3 前	選択	講義

授業概要
この授業は、保健医療分野、福祉分野、教育分野、司法・犯罪分野、産業・労働分野の各分野における関連制度および関係法規について、公認心理師に必要な基礎知識を理解することを目標とする。授業では、得た知識を用いて法律的なトラブルを抱える相談者のカウンセリングのロールプレイを取り入れる予定である。支援者・患者・クライアントを支える多くの法律や制度についての理解と、関係機関への連携について理解することが目指される。 ※本科目は、公認心理師の受験資格を得るために必要な科目である。
到達目標
1. 保健医療分野の関連制度、関係法規を概説できる 2. 福祉分野の関連制度、関係法規を概説できる。 3. 教育分野の関連制度、関係法規を概説できる。 4. 司法・犯罪分野の関連制度、関係法規を概説できる。 5. 産業・労働分野の関連制度、関係法規を概説できる。 6. 支援者・患者・クライアントを支える法律や制度と、関係機関への連携について説明できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	保健医療分野に関係する制度(1)精神科医療制度・医療観察法等の概説（東）	復習として、授業で扱った内容について、書籍や雑誌、マスメディア等で情報に触れ、自分なりに知識を深め定着させること。
第2回	保健医療分野に関係する制度(2)精神科医療・医療観察の実際（東）	
第3回	福祉分野に関係する制度(1)児童相談所の役割・里親制度等の概説（山本純弥）	
第4回	福祉分野に関係する制度(2)児童相談所・里親制度の実際（山本純弥）	
第5回	福祉分野に関係する制度(3)地域包括支援・後見制度等の概説（山本純弥）	
第6回	教育分野に関係する制度いじめ問題・スクールカウンセラーの役割等の概説(山本健太郎)	
第7回	司法・犯罪分野に関係する制度(1)少年事件（山本健太郎）	

第 8 回	司法・犯罪分野に関する制度(2)DV・ストーカー規制法等（山本健太郎）	
第 9 回	産業・労働に関する制度(1)労働基準法・パワハラ・セクハラ・ストレスチェック制度等の労働問題全般についての概説（佐々木）	
第 10 回	産業・労働に関する制度(2)労働現場における法的問題の実際（佐々木）	
第 11 回	家族に関する法律(1)離婚編（山本健太郎）	
第 12 回	家族に関する法律(2)相続編（山本健太郎）	
第 13 回	借金問題にまつわる支援について（山本健太郎）	
第 14 回	ロールプレイ(1)離婚の事例（山本健太郎・川部）	
第 15 回	ロールプレイ(2)借金問題の事例（山本健太郎・川部）	

成績評価方法
到達目標の達成度により成績評価を行う。単位を取得するためには、保健医療分野、福祉分野、教育分野、司法・犯罪分野、産業・労働分野の各分野における関連制度および関係法規について概説できること、支援者・患者・クライアントを支える法律や制度と、関係機関への連携について説明できることの2点を達成することが求められる。成績を評価する手段として、授業中の発言および小レポート 50%、レポート試験 50%とする。
履修上の注意
（関連科目）司法・犯罪心理学、福祉心理学、教育・学校心理学、産業・組織心理学
教科書
元永拓郎（編著）『関係行政論(公認心理師の基礎と実践第 23 巻)』遠見書房
参考文献
授業中に適宜指示する。

授業名称		担当教員氏名	
心理実習		岩佐和典、河野直子、川部哲也	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
2	3 通	選択	実験・実習

授業概要
この授業は、公認心理師の資格科目である。保健医療領域・福祉領域・教育領域など主要な関連領域の指定された施設において、見学などの実習を行い、心理支援におけるチームアプローチ、多職種連携、地域連携、公認心理師としての職業倫理・法的義務について理解する。実習に関する指導として、実習指導担当教員による事前指導と事後指導を行うとともに、実習中は実習先の実習指導担当者から指導を受ける。実習時間は 80 時間以上とする。 ※本科目は、公認心理師の受験資格を得るために必要な科目である。
到達目標
1. 実習を通して、心理に関する支援を要する者へのチームアプローチについて理解する。 2. 実習を通して、公認心理師に必要な多職種連携や地域連携について体験的に理解する。 3. 実習を通して、心理職の専門性と心理職に必要な職業倫理と法的義務について理解する。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第 1 回	事前指導：実習先の関連領域における心理的支援のあり方、施設の概要、実習中の留意点	実習先の関連領域における心理的支援のあり方と、施設の概要を予習する
第 2 回～ 第 13 回	学外実習先における心理実習を行い、実習記録をもとにした指導を受ける。	毎回の実習内容を振り返り、実習記録を記載する。その実習記録を実習指導担当教員と実習指導者に提出する。
第 14 回	事後指導：実習内容の振り返り	全ての期間の実習を振り返り、実習指導担当教員と実習の総括を行う。
第 15 回	実習発表会	事後指導を踏まえて実習発表会での実習報告書を作成する。

成績評価方法
到達目標の達成度により成績評価を行う。単位を取得するためには、見学等の実習経験を踏まえて、心理支援におけるチームアプローチ、多職種連携、地域連携、公認心理師としての職業倫理・法的義務について理解していること、事前指導、事後指導、実習発表会を含め必要な指導をすべて受けていること、実習時間が 80 時間以上であることの 3 点を達成することが求められる。成績を評価する手段として、実習記録 50%、実習発表会での発表 50%とする。

履修上の注意
(関連科目) 心理演習 3
教科書
授業中に適宜指示する。
参考文献
授業中に適宜指示する。

授業名称		担当教員氏名	
心理学卒業研究		岩佐和典、岡本真彦、片畑真由美、河野直子、川部哲也、河村悠太、総田純次、飛田国人、野津亮、高橋幸治、牧岡省吾、武藤拓之	
単位数	配当年次	必修・選択の別	授業形態
6	4 通	必修	実験・実習

授業概要
自分の興味や関心に基づいて、心理学的問題を発見し、検討すべき課題を設定した後、適切な手法を用いて、その課題について検討し、卒業論文としてまとめる。
到達目標
心理学的問題について、心理学のアプローチを用いて、研究の計画、実験・調査、資料収集、解析・シミュレーションなどを遂行し、論文としてまとめることができる。具体的には、1. 心理学のアプローチを用いて、実験もしくは調査が遂行できる。2. 実験や調査、シミュレーション結果をまとめて論文文化できる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回 ～ 第15回	授業の前半部分では、各自の問題意識に基づいて、関連する先行研究を概観し、検討すべき課題とそれを探求するための方法論を決定する。その後、後半部分では、実際に、実験や調査、シミュレーション、文献研究を行って検討する。最後に、1年間にを行った学習活動をまとめて卒業論文を作成する。	各回の授業は、受講生からの報告と全員での討論を中心に進めていくため、事前に報告するための準備を行ってこること。

成績評価方法
授業目標（達成目標）の1・2の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、1. 心理学のアプローチを用いて、実験もしくは調査が遂行できる。2. 実験や調査、シミュレーション結果をまとめて論文化できる。上記の2点を達成することが求められる。成績を評価する方法として、成績評価に占める割合は卒業論文（100%）である。
履修上の注意
（関連科目）心理学研究法、心理学基礎実験、心理学特殊実験1・2、心理演習 （備考）学生は、研究の遂行および中間発表、論文作成について、教員の指導を継続して受けながら、その進捗管理をすること。
教科書
指導の教員より適宜示す。
参考文献
指導の中で適宜示す。

授業名称		担当教員氏名	
PBL演習（生活環境と情報）		野津亮	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3後	選択	演習

授業概要
PBLプログラム（生活環境と情報）の最終科目として位置づけられている。授業ではまず、生活環境における情報に着目し、認知の特性を考慮したよりよい情報提示のあり方について自身が担当する問題を設定する。次に、これまでに学んだ授業内容（ヒューリスティクス、認知バイアス、プロスペクト理論、多属性意思決定、情報圧縮、クラスタリングなど）を踏まえ、問題解決のために学ぶべき内容をグループで相談し決定、次回学習するということを繰り返す。自分が担当する問題の本質を見極め、その改善方法を検討し、具体的な案として報告書をまとめる。最後に成果発表を行う。
到達目標
PBLプログラム（生活環境と情報）は、日常生活におけるあらゆる情報に対して認知的な観点から批判的思考ができる能力とそれを論理的に説明できる能力を身につけることを目標としている。 具体的には、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 現代社会の一員としての高い倫理観を持ち、他者と協働して課題に取り組むことができる。 2. PBLプログラムで学んだことを持続可能な社会の実現と関連付けて説明することができる。 3. PBL演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 4. 情報提示方法の重要性について、持続可能性の観点から論理的に説明することができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション:この演習とPBLプログラムの講義科目で学んだ内容との関わり、持続可能な社会の実現への取り組みとの関連、この演習の到達目標と評価方法（ルーブリック）について解説する。	事前：これまでのPBLプログラム（生活環境と情報）で学んだ内容を復習する。
第2回	各自で身の回りの情報の問題点を持ち寄り、自分が担当する解決すべき問題を設定する。	事前：身の回りの情報の問題点をピックアップしてまとめておく。
第3回	自身が設定した問題を解決するために手がかりとなりそうな文献や論文を要約したものを発表する。教員の解説を聞き、自分たちが発見した問題との関係について再検討する。次回の学習テーマを設定する。	事前：次回の学習テーマに関連する文献や論文をピックアップし、要約しておく。
第4回		
第5回		
第6回		
第7回		
第8回	自分が設定した問題について、その解決方法の大まかな方針を決定し、要約して説明する。	事前：これまでの学習を復習しておく
第9回	自分が設定した問題についてその詳細・具体例を調べてまとめる。	事前：自分が設定した問題について具体例をピックアップしておく。

第10回	自分が設定した問題についてその具体的解決方法を複数検討する。	事後：検討に基づいて発表資料の作成を進めておく。
第11回		
第12回	具体的解決方法について他の学生と情報を共有し、自身の方法を批判的に検討し直す。	事後：検討に基づいて発表資料の作成を進めておく。
第13回	解決方法について発表の準備を進める。	事後：発表資料の作成を進めておく。
第14回	発表練習をする。	事後：各自で発表練習をしておく。
第15回	発表とふり返しを行う。	事後：レポートを作成する。

成績評価方法
授業目標の1～4の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 現代社会の一員としての高い倫理観を持ち、他者と協働して課題に取り組むことができる。 2. PBLプログラムで学んだことを持続可能な社会の実現と関連付けて説明することができる。 3. PBL演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 4. 情報提示方法の重要性について、持続可能性の観点から論理的に説明することができる。 の4点を達成することが求められる。成績は、各回の授業で課す課題（60%）、演習に取り組む姿勢（20%）、発表会でのプレゼンテーションと質疑応答（20%）をもとに、到達目標の達成度について、1回目の授業で学生に明示したルーブリックを基準として評価する。
履修上の注意
この授業は、PBLプログラムの最終科目と位置付けられる科目であるため、履修にあたっては、「現代システム科学域 PBLプログラム履修課程」において履修を指定している科目を履修済み、あるいは並行して履修している必要がある。 関連科目：プログラミング入門B、認知情報処理
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
PBL演習（生きることと遊び）		高橋幸治、川部哲也、川原稔久、総田純次、片畑真由美	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3前	選択	演習

授業概要
PBLプログラム（生きることと遊び）の最終科目として位置づけられている。現代社会においては、身体と心のつながりを考えることが重要課題となっている。また臨床心理学・心理療法では、“遊び”は重要な概念として扱われる。それは、人の心の成長、内外の環境による心の硬化状態を弛めたり、壊すこと、人の全体性を回復すること、生きることの創造へと結びつく。また他者との関係を豊かにもする。授業では、個人の遊びの経験を振り返り、それを再体験したり、新たな遊びを創造する実習を行う。後半では、合宿形式で自然の中での遊び体験を行う。最終回には、遊びの体験から獲得したことや自身の変化について言語化し、発表、共有する発表会を行う。なお、コンピューターやインターネットを使う遊びは本授業での内容に含まない。
到達目標
PBLプログラム（生きることと遊び）は、様々な遊びを体験し、そのことと自身の心や生きることの関係、意義、可能性について体験に基づいて考えることができる能力を身につけることを目標としている。 具体的には、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 現代社会の一員としての高い倫理観を持ち、他者と協働して課題に取り組むことができる。 2. PBLプログラムで学んだことを持続可能な社会の実現と関連付けて説明することができる。 3. PBL演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 4. 自身の遊び経験の中から、自分の人生に影響を与えた遊びの意義について考えることができる。 5. 遊び心を促進させる要因、阻害する要因を吟味し、「自由を守る空間」を感じることができる。 6. 自然の中での遊び体験によって、自然や野生との「対称的」な関係を学び、自身の内的な自然、野生の可能性についても体験的に学ぶ。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション:この演習とPBLプログラムの講義科目で学んだ内容との関わり、持続可能な社会の実現への取り組みとの関連、この演習の到達目標と評価方法（ルーブリック）について解説する。	事前：これまでのPBLプログラム（生きることと遊び）で学んだ内容を復習する。
第2回	心の風景をながめるー描画法の実施	
第3回	臨床心理学からみた“遊び”、“対称性”の重要性	事後：遊戯療法、“対称性”の概念を復習する。

第4回	思い出の“遊び”をKJ法分析	事後：KJ法分析の結果を振り返る
第5回	遊び経験の発表と参加体験実習	事前：遊び経験の発表の準備。実習の準備 事後：実習を振り返り、レポートを作成する。
第6回		
第7回		
第8回		
第9回		
第10回	合宿形式実習の企画、準備	事後：合宿形式実習の準備をする。
第11回		
第12回	合宿形式実習－自然の中での遊び体験	事後：合宿形式実習の体験について時間をかけて振り返り、言語化する。
第13回		
第14回		
第15回	心の風景を再びながめる－描画法の実施	事後：描画法の結果を考察する。
第16回	成果発表	事前：発表の準備をする。

成績評価方法
授業目標の1～6の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 現代社会の一員としての高い倫理観を持ち、他者と協働して課題に取り組むことができる。 2. PBLプログラムで学んだことを持続可能な社会の実現と関連付けて説明することができる。 3. PBL演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 4. 自身の遊び経験の中から、自分の人生に影響を与えた遊びの意義について考えることができる。 5. 遊び心を促進させる要因、阻害する要因を吟味し、「自由を守る空間」を感じることができる。 6. 自然の中での遊び体験によって、自然や野生との「対称的」な関係を学び、自身の内的な自然、野生の可能性についても体験的に学ぶ。 の6点を達成することが求められる。成績は、授業での活動（30％）授業内小レポート（20％）、最終レポート（30％）、発表会でのプレゼンテーションと質疑応答（20％）をもとに、到達目標の達成度について、1回目の授業で学生に明示したルーブリックを基準として評価する。
履修上の注意
この授業は、PBLプログラムの最終科目と位置付けられる科目であるため、履修にあたっては、「現代システム科学域 PBLプログラム履修課程」において履修を指定している科目を履修済み、あるいは並行して履修している必要がある。合宿形式実習では、体調管理が重要になる。日頃から意識をすることが求められる。また、合宿形式実習では、交通費、宿泊費が必要となる。 関連科目：発達心理学2、環境心理学、ヘルスケアサービス、精神保健学、臨床心理学概論、心理療法論
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
PBL演習（教育保障）		岡本真彦、河野直子	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3通	選択	演習

授業概要
PBLプログラム（教育保障）の最終科目として位置づけられている。本授業では、「地域実践演習」での経験とPBLプログラム（教育保障）履修科目等の知識や技能を活かし、地域学校現場における課題について整理するとともに、大学の近隣地域の小中学校に対しての学習支援活動を行うことを通して、地域コミュニティの1員としての大学が地域の教育・学力保障にどのように貢献すべきかについての自分のプランを持ち、実際の学習支援活動を運営していくスキルを身につける。 なお、PBLプログラム(教育保障)はSDG4「質の高い教育をみんなに」、SDG5「ジェンダー平等を実現しよう」と対応している。
到達目標
PBLプログラム（教育保障）は、将来リーダーとして学習支援活動を実践することのできる能力を身につけることを目標としている。 具体的には、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 現代社会の一員としての高い倫理観を持ち、他者と協働して課題に取り組むことができる。 2. PBLプログラムで学んだことを持続可能な社会の実現と関連付けて説明することができる。 3. PBL演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 4. 他者と協働して学習支援活動を立ち上げて、実行することができる

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション:この演習と地域実践演習で発見した地域課題及びPBLプログラムの講義科目で学んだ内容との関わり、持続可能社会の実現への取り組みとの関連、この演習の到達目標と評価方法（ルーブリック）について解説する。更に受講者のチーム分けを行う。	学習支援活動の状況を調べる
第3回	ワークショップ1：問題の発見	学習支援活動の状況を調べる
第4回	ワークショップ2：課題の設定	学習支援活動の状況を調べる
第5回	学習支援活動の学内広報プランの検討	前年度報告書を読む
第6回	学習支援活動の学内広報プランの作成	前年度報告書を読む
第7回	学習支援活動チラシ及びHP作成	HP作成技法の習得
第8回	堺市教育委員会への挨拶	ビジネスマナーの復習
第9回	学習支援活動の学内説明会	説明会資料準備
第10回	学習支援活動の受付	受付教室の確保
第11回	学習支援活動の派遣先検討	堺市内の学校配置の確認
第12回	学習支援活動の派遣校への連絡	メールマナーの確認
第13回	第1回学内カンファレンスの準備	カンファレンス資料の収集
第14回	第1回学内カンファレンスの実施	カンファレンス資料の作成

第15回	小中学校での聞き取りと学習支援活動の支援 法の見直し	文献購読
第16回	小中学校での聞き取りと学習支援活動の支援 法の改善策検討	文献購読
第17回	学習支援活動のためのスキルアップ講座準備 (1)：文献収集	文献購読
第18回	学習支援活動のためのスキルアップ講座準備 (2)：講座用PPTの作成	文献購読
第19回	第2回学内カンファレンスの準備	文献購読
第20回	第2回学内カンファレンスの実施	文献購読
第21回	学習支援活動における個別ケース検討(1)：勉 強に意欲的に取り組めない児童・生徒への支 援	文献購読
第22回	学習支援活動における個別ケース検討(2)：答 えを知りたがる児童・生徒への支援	文献購読
第23回	第3回学内カンファレンスの準備	カンファレンス資料の収集
第24回	第3回学内カンファレンスの実施	カンファレンス資料の作成
第25回	小中学校での聞き取りと学習支援活動のメリ ット	文献購読
第26回	小中学校での聞き取りと学習支援活動のデメ リット	文献購読
第27回	成果発表の準備1：発表内容の構成	文献購読
第28回	成果発表の準備2：仕上げと発表練習	文献購読
第29回	成果発表とふり返り	前年度報告書の確認
第30回	次年度への引継ぎ事項作成	前年度報告書の確認

成績評価方法
成績は、演習への取り組みと成果発表をもとに、到達目標の達成度について、1回目の授業で学生に明示したルーブリックを基準として評価する。
履修上の注意
この授業は、PBLプログラムの最終科目と位置付けられる科目であるため、履修にあたっては、「現代システム科学域 PBLプログラム履修課程」において履修を指定している科目を履修済み、あるいは並行して履修している必要がある。 関連科目：地域実践演習、特別支援教育、教育社会学、教育・学校心理学、スクール・ソーシャルワーク概論、大阪の都市づくり、心理学と心理的支援
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
(1) 『学力の社会学』 荻谷剛彦・志水宏吉編 東京大学出版会 (2) 『「学力」の経済学』 中室牧子 ディスカヴァー・トゥエンティワン

授業名称		担当教員氏名	
未来デザインインターンシップ		大塚耕司、伊井直比呂、遠藤崇浩、岡本真彦、菅野正嗣、西尾純二、野津亮、牧岡省吾、工藤宏司、森岡次郎、柳本豪一	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	1後	必修	演習

授業概要
未来デザインコースは、目指すべき未来の社会を創造すべく自分でその道筋をデザインし、領域横断的応用力とシステムの思考力を用いて、現代社会の課題解決に取り組むことによって、持続可能な社会の実現を実行できる人材を養成することを目的としている。本授業では、学生がインターンシップ指導教員の助言を受けながら自治体、NPO、企業などのインターンシップ先を探し、事前学習を行った上でインターンシップに参加することで、学生自身に取り組むべき課題を発見させる。
到達目標
本授業では、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 自らが未来デザインコースにおいて取り組むべき課題について、持続可能な社会の実現との関係を含めて説明できること。 2. インターンシップで赴いたフィールドにおける取り組みから、取り組むべき課題に関する新たな知見を得て、その内容を説明することができること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション、未来デザインコースのカリキュラム説明、インターンシップ指導教員の割り当て	授業内で指示する。
第2回 ～ 第3回	未来デザインコースで取り組むべき課題に関するグループディスカッションを行う。	各自で資料収集をしながら取り組むべき課題について考える。
第4回 ～ 第5回	インターンシップ指導教員の指導を受けながらインターンシップ先の選定を行う。	インターンシップ先の資料収集を行う。
第6回 ～ 第12回	インターンシップに参加し、各自の課題に取り組む（延べ10日間程度）。	インターンシップ中の取り組みについてインターンシップノートに記録を取り、考察を行う。
第13回 ～ 第14回	インターンシップでの取り組みについてインターンシップ指導教員に報告し、考察を深める。報告会での発表内容を検討する。	報告会の発表準備
第15回	報告会での発表	授業内で指示する。

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 自らが未来デザインコースにおいて取り組むべき課題について、持続可能な社会の実現との関係を含めて説明できること。 2. インターンシップで赴いたフィールドにおける取り組みから、取り組むべき課題に関する新たな知見を得て、その内容を説明することができること。 の2点を達成することが求められる。 成績を評価する方法として、インターンシップノートおよびインターンシップ報告会での発表を用いる。成績評価に占める割合は、インターンシップノート（70%）、インターンシップ報告会での発表（30%）である。
履修上の注意
関連科目：未来デザイン計画演習、未来デザインPBL演習、未来デザイン卒業研究
教科書
なし
参考文献
適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
未来デザイン計画演習		大塚耕司、伊井直比呂、遠藤崇浩、岡本真彦、菅野正嗣、西尾純二、野津亮、牧岡省吾、工藤宏司、森岡次郎、柳本豪一	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	2前	必修	演習

授業概要
未来デザインコースは、目指すべき未来の社会を創造すべく自分でその道筋をデザインし、領域横断的応用力とシステムの思考力を用いて、現代社会の課題解決に取り組むことによって、持続可能な社会の実現を実行できる人材を養成することを目的としている。本授業では、1年次末に未来デザイン計画書を提出し、未来デザインコースの履修を認められた学生が、メンター教員の助言を受けながら卒業までの履修計画を精緻化するとともに、卒業研究と卒業後の計画を立案する。
到達目標
本授業では、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 自らが未来デザインコースにおいて取り組む課題が持続可能な社会の実現にどのように貢献するのかを説明できること。 2. 未来デザイン計画書に基づいて卒業までの履修計画を立てることができること。 3. 卒業研究と卒業後の計画を立案すること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション	授業内で指示する。
第2回 ～ 第3回	各自の未来デザイン計画書に関する発表とグループディスカッションを行う。	未来デザイン計画書に関する発表準備
第4回 ～ 第7回	メンター教員の指導を受けながら卒業までの履修と卒業研究について計画を立てる。	自らが取り組む課題の解決に何が必要科について考え、資料収集を行う。
第8回 ～ 第9回	各自の卒業研究の計画に関する中間発表とグループディスカッションを行う。	各自の卒業研究の計画に関する発表準備。
第10回 ～ 第13回	グループディスカッションを踏まえて、卒業までの履修と卒業研究について計画を精緻化する。	最終報告会の発表準備
第14回 ～ 第15回	最終報告会での発表	授業内で指示する。

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 自らが未来デザインコースにおいて取り組む課題が持続可能な社会の実現にどのように貢献するのかを説明できること。 2. 未来デザイン計画書に基づいて卒業までの履修計画を立てることができること。 3. 卒業研究と卒業後の計画を立案すること。 の3点を達成することが求められる。 成績は、中間発表会における発表と質疑応答(50%)、最終発表会における発表と質疑応答(50%)をもとに、到達目標の達成度について、1回目の授業で学生に明示したルーブリックを基準として評価する。
履修上の注意
本科目は未来デザインコースの学生を対象とする。 関連科目：未来デザインインターンシップ、未来デザインPBL演習、未来デザイン卒業研究
教科書
なし
参考文献
適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
未来デザインPBL演習		大塚耕司、伊井直比呂、遠藤崇浩、岡本真彦、菅野正嗣、西尾純二、野津亮、牧岡省吾、工藤宏司、森岡次郎、柳本豪一	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	3通	必修	演習

授業概要
未来デザインコースは、目指すべき未来の社会を創造すべく自分でその道筋をデザインし、領域横断的応用力とシステムの思考力を用いて、現代社会の課題解決に取り組むことによって、持続可能な社会の実現を実行できる人材を養成することを目的としている。本授業では、学生のセルフプロデュースにより、社会における課題解決を実践する。学生はメンター教員の指導の下、必要に応じて他の専任教員の助言も受けながら、持続可能な社会の実現のために自らが貢献できる課題を見出し、解決方法を構想する。地域の方々や起業家、NPO、自治体、各種企業、学生が開発したアプリケーションのユーザなど、学内外の関係者と協働する学びによって、未来社会の実現を実行できる人材の育成を目指す。
到達目標
未来デザインコースは、目指すべき未来の社会を創造すべく自分でその道筋をデザインし、領域横断的応用力とシステムの思考力を用いて、現代社会の課題解決に取り組むことによって、持続可能な社会の実現を実行できる人材を養成することを目的としている。本授業には、以下の能力を身につけることを目標とする。
1. 持続可能な社会の実現のために必要な課題を発見し、その解決方法を構想することができる。 2. 学内外の関係者と協働で課題解決に取り組むことができる。 3. 課題解決の成果を分かりやすくプレゼンテーションすることができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション：この演習の進め方、到達目標と評価方法（ルーブリック）について解説する。	授業内で指示する。
第2回 ～ 第4回	メンター教員の指導を受けながら、課題の選定と解決への取り組みの計画を立てる。	課題とその解決方法に関する情報収集を主体的に行い、検討する。
第5回 ～ 第8回	課題解決に取り組む（延べ10日間程度）。	課題解決の取り組みを記録に残し、中間発表の準備を進める。
第9回	中間発表会。必要に応じてオンラインで参加する。	中間発表で得た意見について考察を深める。
第10回 ～ 第13回	中間発表を踏まえ、課題解決に取り組む（延べ10日間程度）。	課題解決の取り組みを記録に残す。

第14回 ～ 第28回	メンター教員に課題解決の成果を報告し、最終発表会の準備を行う。	最終発表会の準備。
第29回	最終発表会	最終発表会で得た意見について考察を深める。
第30回	ふり回り	課題解決の成果についてレポートにまとめる。

成績評価方法
授業目標の1～3の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 持続可能な社会の実現のために必要な課題を発見し、その解決方法を構想することができる。 2. 学内外の関係者と協働で課題解決に取り組むことができる。 3. 課題解決の成果を分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 の3点を達成することが求められる。成績は、中間発表会における発表と質疑応答(30%)、最終発表会における発表と質疑応答(30%)、課題解決の成果に関するレポート(40%)をもとに、到達目標の達成度について、1回目の授業で学生に明示したルーブリックを基準として評価する。
履修上の注意
本科目は未来デザインコースの学生を対象とする。 関連科目：未来デザイン計画演習、未来デザインインターンシップ、未来デザイン卒業研究
教科書
なし。
参考文献
適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
未来デザイン卒業研究		安倍広多、石橋勇人、岩村幸治、太田正哉、菅野正嗣、瀬田和久、中島智晴、真嶋由貴恵、宮本貴朗、村上晴美、森田裕之、渡邊真治、青木茂樹、上杉徳照、大西克実、小島篤博、佐賀亮介、永田好克、林佑樹、平林直樹、榊田聖子、森永英二、柳本豪一、吉田大介、楠木祥文、青木賜鶴子、秋庭裕、生田英輔、伊藤康人、遠藤崇浩、大塚耕司、大山克己、興津健二、酒井隆史、下村泰彦、住友陽文、相田洋明、高木佐知子、竹中規訓、中山祐一郎、西尾純二、福田珠己、水野真彦、宮脇幸生、上柿崇英、工藤宏司、黒田桂菜、住田守道、千葉知世、西川弘展、花村周寛、天島華織、藤田渡、古川朋雄、星英之、宮畑一範、吉川丈、山本由美子、阿久井康平、山東功、伊井直比呂、伊藤嘉余子、児島亜紀子、隅田好美、田垣正晋、西田芳正、東優子、山野則子、吉田敦彦、吉武信二、乾順子、木曾陽子、嵯峨嘉子、内藤葉子、濱島（宮川）淑恵、松田博幸、三田優子、森岡次郎、吉田直哉、吉原雅昭、東根ちよ、岡本真彦、総田純次、野津亮、牧岡省吾、岩佐和典、片畑真由美、河野直子、川部哲也、河村悠太、高橋幸治、飛田国人、武藤拓之	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
6	4通	必修	実験・実習

授業概要
未来デザインコースは、目指すべき未来の社会を創造すべく自分でその道筋をデザインし、領域横断的応用力とシステムの思考力を用いて、現代社会の課題解決に取り組むことによって、持続可能な社会の実現を実行できる人材を養成することを目的としている。本授業では、未来デザインPBL演習の成果を踏まえ、未来デザインコースの集大成としての卒業研究に取り組む。卒業研究の指導教員は、学生がメンター教員と相談の上で提出した希望指導教員名を踏まえて、学域教育運営委員会の中に設置された未来デザイン支援WGが、現代システム科学域 専任教員の中から選出する。

到達目標
未来デザインコースは、目指すべき未来の社会を創造すべく自分でその道筋をデザインし、領域横断的応用力とシステムの思考力を用いて、現代社会の課題解決に取り組むことによって、持続可能な社会の実現を実行できる人材を養成することを目的としている。本授業には、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 自らが未来デザインコースにおいて取り組んだ課題について、先行研究や過去の類似の取り組みの中での位置づけと、持続可能な社会の実現における意義を明確に説明することができる。 2. 自らが未来デザインコースにおいて取り組んだ課題と得られた成果について、客観的な資料を根拠に明確に説明することができる。 3. 自らが未来デザインコースにおいて取り組んだ課題と得られた成果に基づいて、今後の展望を示すことができる。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション：卒業研究の進め方。	授業内で指示する。
第2回 ～ 第30回	メンター教員の指導を受けながら、未来デザインPBL演習の成果を踏まえて卒業研究に取り組む。必要に応じて追加のデータの収集を行う。	研究に必要な文献の収集、データの分析などを行う。
第31回	未来デザイン卒業研究発表会（学域全体で行う）	授業内で指示する。

成績評価方法
授業目標の1～3の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 自らが未来デザインコースにおいて取り組んだ課題について、先行研究や過去の類似の取り組みの中での位置づけと、持続可能な社会の実現における意義を明確に説明することができる。 2. 自らが未来デザインコースにおいて取り組んだ課題と得られた成果について、客観的な資料を根拠に明確に説明することができる。 3. 自らが未来デザインコースにおいて取り組んだ課題と得られた成果に基づいて、今後の展望を示すことができる。 の3点を達成することが求められる。成績は、卒業論文の研究に取り組む姿勢(20%)、卒業論文および要旨(60%)、発表(20%)で評価する。
履修上の注意
本科目は未来デザインコースの学生を対象とする。 関連科目：未来デザインインターンシップ、未来デザイン計画演習、未来デザインPBL演習
教科書
なし。
参考文献
適宜紹介する。

授業名称		担当教員氏名	
地域実践演習		千葉知世、大塚耕司、伊藤康人、岡本真彦	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	1 後	選択	演習

授業概要
本科目は、PBL プログラム（地域再生）の必修科目として位置づけられている。授業の第1回では、地域での実践活動に関する基礎知識に関する講義を行うとともに、担当教員が研究対象として活動している実際のフィールドを体験することを通して、地域課題を発見するという本授業及びPBL プログラム（地域再生）、PBL プログラム（教育保障）の目的を説明する。次に、1 グループ 4～5 名で構成されるグループ分けを行い、各グループでフィールドワークの企画を行うとともに、担当教員が指示した現地活動を行う際の注意事項を遵守しつつフィールドワークを体験する。さらに、活動の成果を報告書にまとめるとともに、最終回に成果発表（プレゼンテーション）を行う。
到達目標
本科目は、コミュニティーレベルでの活動の重要性を理解するとともに、フィールドワークの体験を通して地域の課題を発見し地域再生に積極的に取り組むことのできるマインドを身につけることを目標とする。具体的には、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 演習テーマに関する現状と課題について説明できること。 2. 企画段階での検討、様々な機関との連携協力、無理のない運営等の重要性を説明できること。 3. 協調性をもって、グループ活動を円滑に行えること。 4. 活動の成果をわかりやすくかつ正確に他人に伝えられること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	イントロダクション（地域活動の基礎知識、本授業及びPBL プログラム（地域再生）のねらい）、PBL プログラム（教育保障）のねらい、グループ分け（千葉）	
第2回	第1回フィールドワークの企画・計画・体験	各フィールドの特色について事前に調べる。
第3回		
第4回		
第5回		
第6回		
第7回		
第8回	グループ間の情報共有	
第9回	第2回フィールドワークの企画・計画・調整・体験	各フィールドの特色について事前に調べる。
第10回		
第11回		
第12回		
第13回		
第14回		
第15回	成果発表と質疑応答（千葉）	

成績評価方法
授業目標の1～4の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 演習テーマに関する現状と課題について説明できること。 2. 企画段階での検討、様々な機関との連携協力、無理のない運営等の重要性を説明できること。 3. 協調性をもって、グループ活動を円滑に行えること。 4. 活動の成果をわかりやすくかつ正確に他人に伝えられること。 の4点を達成することが求められる。 成績は、講義に関するレポート（20%）、グループ活動に取り組む姿勢（20%）、フィールドワーク報告書（40%）、発表会でのプレゼンテーションと質疑応答（20%）で評価する。
履修上の注意
関連科目：大阪の都市づくり、環境・生命・倫理、自然環境学概論、公共政策学基礎、PBL 演習（地域再生）、特別支援教育、教育社会学、教育・学校心理学、スクール・ソーシャルワーク概論、心理学と心理的支援、PBL 演習（教育保障）
教科書
授業の中で適宜資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。